

ツマジロウラジャノメ本州亜種

Lasiommata deidamia interrupta

チョウ目
タテハチョウ科

準絶滅危惧 (NT)

| | |
|------|-----|
| 2016 | 環境省 |
| - | - |

- **選定理由** 定量判定の結果、絶滅率は40%、現存数は6であり、準絶滅危惧(NT)に相当する。(キ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州に分布する。県内では、旧市町村単位で、生息が確認されているのは、鳴子町、小野田町、仙台市(泉区・青葉区・太白区)、川崎町である。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 天然の崖が主な生息地であり、生息できる環境が限られる。
- **文献等番号** 94、230、260

(執筆：阿部 剛)



(撮影：阿部 剛)

ウラジャノメ本州亜種

Lopinga achine achinoides

チョウ目
タテハチョウ科

情報不足 (DD)

| | |
|------|-----|
| 2016 | 環境省 |
| DD | - |

- **選定理由** 仙台市太白区で記録があるが、判定するに足る情報が得られていない。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州に分布する。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 現在記録が確認されているのは、仙台市太白区の一部のみであり、環境の変化などによる生息地の縮小が懸念される。
- **文献等番号** 8、109、138

(執筆：阿部 剛)



(撮影：阿部 剛)

キマダラモドキ

Kirinia fentoni

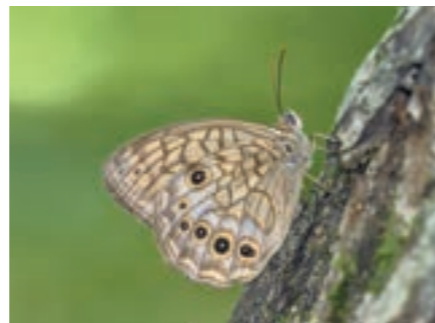
チョウ目
タテハチョウ科

絶滅危惧II類 (VU)

| | |
|------|-----|
| 2016 | 環境省 |
| NT | NT |

- **選定理由** 定量判定の結果、絶滅率は29%、現存数は5であり、絶滅危惧II類(VU)に相当する。(カ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道、本州、四国、九州に分布するが、生息地は局地的で全国的に減少傾向がみられる。県内で現在、生息が確認されているのは、仙台市(泉区・青葉区)、蔵王町、白石市、七ヶ宿町である。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 生息に適した疎林環境の減少。
- **文献等番号** 8、74、138、143

(執筆：阿部 剛)



(撮影：阿部 剛)

フトスジエダシャク

Cleora repulsaria

チョウ目
シャクガ科

情報不足 (DD)

| | |
|------|-----|
| 2016 | 環境省 |
| DD | - |

- **選定理由** 宮城県が北限とされるが確認された産地は少なく、県南部の数か所で記録されているのみで情報は少ない。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州(宮城県以南)、四国、九州、伊豆諸島、南西諸島などに分布。県内では2000年以前に蔵王町、柴田町、角田市で記録されていた。その後2010年に山元町で発見された。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 温暖な地域の、海岸近くや森林辺縁に多く自生するセンダンに固有の種。県内の生息適地は少ない。
- **特記事項** 山元町の産地は2011年の大津波の際、壊滅的な被害を受けた。
- **文献等番号** 138

(執筆：青木 俊彦)



(撮影：柳田 則明)

ナカシロオビエダシャク

Hypomecis defnita

チョウ目
シャクガ科

情報不足 (DD)

| | |
|------|-----|
| 2016 | 環境省 |
| DD | - |

- **選定理由** 生息地は平地から山地まで達するが、県内でこれまでに確認された産地は少ない。県内では20年以上記録が途絶えている。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国、九州に分布。県内では2000年以前に旧牡鹿町、蔵王町、丸森町、旧三本木町で記録されている。1996年に旧三本木町で記録されたのが最後である。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** モミを食樹としているが、モミは伐採が進み、本種の生息環境が失われてきている。
- **文献等番号** 138

(執筆：青木 俊彦)



(撮影：青木 俊彦)

フトスジギンエダシャク

Megaspilates mundataria

チョウ目
シャクガ科

準絶滅危惧 (NT)

| | |
|------|-----|
| 2016 | 環境省 |
| NT | - |

- **選定理由** 県内の産地は少なく、局所的である。草原などに生息するため存在基盤が脆弱である。(サ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国、九州に局所的に分布。県内では2000年以前に川崎町、蔵王町、白石市で記録されていた。その後途絶えていたが2020年に南三陸町で再発見された。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 生息環境は草原であり面積減少や荒廃、さらには気候変動等が及びやすいことが減少の要因と思われる。
- **文献等番号** 138、222、282

(執筆：青木 俊彦)



(撮影：青木 俊彦)

フタマタシロナミシヤク

Asthena ochrifasciaria

チョウ目
シヤクガ科

準絶滅危惧 (NT)

| | |
|------------|----------|
| 2016 NT | 環境省 - |
|------------|----------|

- **選定理由** 県内では低山地、平地で得られているが、非常に少なく、30年近く記録が途絶えている。(サ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国、九州、対馬に分布。県内では1990年代までに丸森町、角田市、山元町の記録があるがその後発見されていない。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** かつては関東以西に生息するとされていた種で、宮城は北限付近に位置すると思われ、生息状況が不安定と考えられる。
- **文献等番号** 138

(執筆：青木 俊彦)



(撮影：青木 俊彦)

ヒロバカレハ

Gastropacha quercifolia

チョウ目
カレハガ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

| | |
|-----------|-----------|
| 2016 - | 環境省 VU |
|-----------|-----------|

- **選定理由** 生態には不明な点が多いが草原で得られていることから生息基盤は脆弱であると推定される。国内でも少数の記録しかない。県内最後の記録から60年以上得られていない。(ケ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州に分布し宮城県、長野県、静岡県などの草原で得られている。本県では旧秋保町の記録が文献に掲載されているほか、熊ヶ根産の標本も現存する。いずれも1960年代のもの。
- **形態ならびに近似種との区別点** カレハガに似るが翅が太く丸みを帯びる。後翅前縁橙黄色はカレハガのように目立たない。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** これまでに知られる生息地は草原であり、開発により失われやすい環境であることが減少の要因と思われる。
- **特記事項** 本種が日本に産することが判明したのは「宮城県の鱗翅類」発刊後のことである。以前はカレハガと混同されていた。県内では少なくとも4頭が得られている。
- **文献等番号** 83

(執筆：青木 俊彦)



(撮影：青木 俊彦)

ミヤケカレハ

Takanea miyakei

チョウ目
カレハガ科

情報不足 (DD)

| | |
|-----------|----------|
| 2016 - | 環境省 - |
|-----------|----------|

- **選定理由** 東北地方では宮城県の2地点から得られているが情報が少なくランクを判定できる状況ではない。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道と本州中部地方に分布。東北地方では宮城県で少数得られているのみで1966年に金華山島、1967年に船形山で記録されている。その後50年以上記録が出ていない。
- **形態ならびに近似種との区別点** 近縁種のオオミヤケカレハは紀伊半島以南に分布する。ミヤケカレハに比べやや大型で翅の地色が赤みが強い。また後翅外縁Sc+R1での突起が強い。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 北方系の種と考えられ、食樹のコメツガは奥羽山脈などに生育する。
- **文献等番号** 230、234

(執筆：青木 俊彦)



(撮影：青木 俊彦)

マツクロスズメ本州亜種

Sphinx morio morio

チョウ目
スズメガ科

情報不足 (DD)

| | |
|------------|----------|
| 2016 DD | 環境省 - |
|------------|----------|

- **選定理由** 1989年及び1990年に旧鳴子町(鬼首)で記録されたが、その後30年以上記録が途絶えている。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州、九州、対馬に分布し中部地方の山地に記録が多い。東北地方では宮城県、福島県から記録がある。県内では2000年以前に鬼首で記録されているのみ。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** アカマツやカラマツの自生する自然林に生息する。
- **特記事項** 明け方に灯火に飛来するため採集されにくいことも考えられる。
- **文献等番号** 138

(執筆：青木 俊彦)

ギンボシスズメ

Parum colligata

チョウ目
スズメガ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

| | |
|---------------|----------|
| 2016 CR+EN | 環境省 - |
|---------------|----------|

- **選定理由** 開発されやすい低地の落葉広葉樹林に生息し、本県では50年以上生息が確認されておらず、絶滅の危機に瀕していると考えられる。(ケ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** ほぼ全国で記録されているが近年では中部地方南部以西からの記録しかないようである。県内では1960年代に旧志津川町、仙台市(熊ヶ根、愛子)、蔵王町(遠刈田)で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** カジノキやコウゾが生息する低地の落葉広葉樹林などに生息。このような環境は開発の影響を受けやすい。
- **文献等番号** 138

(執筆：青木 俊彦)



(撮影：青木 俊彦)

イブキスズメ

Hyles gallii

チョウ目
スズメガ科

情報不足 (DD)

| | |
|------------|----------|
| 2016 DD | 環境省 - |
|------------|----------|

- **選定理由** 県内で確認された産地も記録も少なく、ランクを判定するに足る情報が得られていない。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州(伊吹山以東)、九州、対馬。県内の記録は散発的で蔵王町、旧志津川町、旧栗駒町で記録されている。2000年の旧栗駒町の記録が最後となっている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** カワラマツバ(アカネ科)、ヤナギラン(アカバナ科)が生息する高地草原などに生息する。このような環境は少なく失われやすい。
- **文献等番号** 138

(執筆：青木 俊彦)



(撮影：青木 俊彦)

ヒメスズメ

Deilephila askoldensis

チョウ目
スズメガ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016
VU 環境省
NT

- **選定理由** 草原や河川敷などに生息する種で、本県では1976年を最後に50年近く記録が途絶えており絶滅が危惧される。(ケ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 全国に生息するが局地的。県内では1970年代までに仙台市、石巻市、旧志津川町、旧牡鹿町で記録された。1976年の旧牡鹿町(網地島)の記録が最後である。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 寄主植物のカワラマツバ、キバナカワラマツバは火山性草原や河川敷など改変されやすい環境に生育することが減少要因と思われる。
- **文献等番号** 138

(執筆：青木 俊彦)



(撮影：青木 俊彦)

クワヤマエグリシャチホコ

Ptilodon kuwayamae

チョウ目
シャチホコガ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
NT 環境省
NT

- **選定理由** 県内でこれまでに確認された産地は少なく、最近の記録はごく少ない。(サ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 全国に局地的に分布。県内では仙台市、川崎町、蔵王町、白石市で散発的に記録されており、2009年に仙台市で記録されたのが最後となっている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** ヤマハギを食し、山地の草原に産するが、このような環境は改変等の影響が及びやすく、安定した生息環境は失われやすい。
- **特記事項** 過去の記録にはいくつか誤同定があるようで実際の記録はもっと少ない可能性がある。
- **文献等番号** 138

(執筆：青木 俊彦)



(撮影：青木 俊彦)

ウスジロドクガ

Calliteara virginea

チョウ目
ドクガ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016
CR+EN 環境省
NT

- **選定理由** 県内でこれまでに確認された産地は2か所のみである。破壊されやすい草原に生息するため絶滅が危惧される。(ケ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州東北地方や中部地方の草原に分布するがまれ。県内では50年以上前に蔵王町(遠刈田)で記録されたが2021年になって鬼首での生息が判明した。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 生息環境は草原で、面積減少や荒廃、改変等の影響が及びやすい。
- **特記事項** 鬼首の生息地は杉の植林が進んでおり個体数が激減しているようで今後の生息が不安な状況である。
- **文献等番号** 113、138、282

(執筆：青木 俊彦)



(撮影：青木 俊彦)

フタホシドクガ

Nygmia staudingeri

チョウ目
ドクガ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
NT 環境省
-

- **選定理由** 県内では山地で得られているが記録は少なく、散発的である。存在基盤が脆弱な状況にあるものと考えられる。(サ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国、九州に分布。県内では1960年代に旧花山村、仙台市で記録されていた。その後1998年、2008年に七ヶ宿町で、2016年に登米市で、さらに2023年に仙台市で記録されている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 県内でこれまでに確認された産地は少ない。近年食樹がヤドリギであることが判明した。
- **文献等番号** 116、138

(執筆：青木 俊彦)



(撮影：青木 俊彦)

キバラヒトリ

Epatolmis luctifera japonica

チョウ目
ヒトリガ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
NT 環境省
-

- **選定理由** 県内でこれまでに確認された産地は少ない。2001年の記録を最後に20年以上生息が確認されていない。(サ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、九州に分布。県内では2000年以前に仙台市、蔵王町、柴田町での記録があった。その後2001年に旧栗駒町で発見されたのが最後となっている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 生息環境は草原で、このような環境は失われやすいことが要因と思われる。
- **文献等番号** 138

(執筆：青木 俊彦)



(撮影：青木 俊彦)

トガリアツバ

Rhynchina cramboides

チョウ目
ヤガ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
NT 環境省
-

- **選定理由** 県内でこれまでに確認された産地も記録も少なく、生息基盤が脆弱と思われる。(サ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国、九州に分布。県内では2000年以前に蔵王町、岩沼市、角田市で記録され、その後途絶えていたが2021年に名取市、岩沼市、山元町で再発見された。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** ススキ草原などに生育するマルバハギが寄主植物で、環境変化の影響を受けやすいことが減少要因と思われる。
- **文献等番号** 138、262

(執筆：青木 俊彦)



(撮影：青木 俊彦)

コシロシタバ

Catocala actaea

チョウ目
ヤガ科

準絶滅危惧 (NT)

| | |
|------------|-----------|
| 2016 VU | 環境省 NT |
|------------|-----------|



(撮影：青木 俊彦)

- **選定理由** 里山のクヌギの混じる雑木林に生息する。全国的に減少しており、本県でも記録地は減少している。(サ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州。四国、九州。県内では2000年以前に石巻市、仙台市、村田町、大河原町、川崎町、蔵王町、旧小野田町で記録されていた。その後途絶えたが2021年に大衡村で再発見された。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 低地、里山の雑木林は宅地開発などにより多くが失われ、生息に適した環境は少なくなっている。
- **文献等番号** 17、138

(執筆：青木 俊彦)

ギンモンセダカモクメ

Cucullia jankowskii

チョウ目
ヤガ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

| | |
|------------|-----------|
| 2016 DD | 環境省 NT |
|------------|-----------|



(撮影：青木 俊彦)

- **選定理由** 草原などに生息し県内で記録された産地は少なく、50年以上記録が途絶えている。(ケ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州、九州に局所的に分布。県内では仙台市(愛子)、鬼首で少数の記録がある。1966年の鬼首が最後となっている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** ヨモギを交える河川敷や火山性草原などに生息する。植生の変化や開発、整地等の改変が及びやすい環境である。
- **特記事項** 渡辺コレクションには「宮城県の鱗翅類」発刊後の標本1頭を確認している。
- **文献等番号** 138

(執筆：青木 俊彦)

ヒマラヤハガタヨトウ

Nyctycia strigidisca owadai

チョウ目
ヤガ科

準絶滅危惧 (NT)

| | |
|------------|----------|
| 2016 NT | 環境省 - |
|------------|----------|



(撮影：青木 俊彦)

- **選定理由** 照葉樹林に生息し、太平洋側では宮城県が北限とされる。本県では角田市斗蔵山でのみ生息が確認されている。(サ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州以南に分布。県内では1990年代に角田市斗蔵山で記録された。その後2021年にも同地で再発見されている。他の産地は見つかっていない。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 自然環境豊かな照葉樹林に生息する種類で、県内でそのような環境が残されている所は少ない。
- **特記事項** 斗蔵山のモミ・ウラジロガシ群落は斗蔵山神社の神域として保護されており当面絶滅等の心配は少ないと思われる。
- **文献等番号** 17、138

(執筆：青木 俊彦)

オガサワラヒゲヨトウ

Dasyptolia fani

チョウ目
ヤガ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

| | |
|---------------|-----------|
| 2016 CR+EN | 環境省 EN |
|---------------|-----------|



(撮影：青木 俊彦)

- **選定理由** 本州のごく一部に生息する。宮城県では1964年に2頭記録されて以後、約60年間記録が途絶えている。(ケ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では1970年代以前の記録がほとんどで、宮城のほか岩手、栃木、群馬、長野などの内陸盆地等で記録された。宮城県内では1964年の仙台市熊ヶ根の記録しかない。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 国内での寄主植物は未知。ヨーロッパの近似種はセリ科の一種の根茎に潜入するという。同植物は荒れた土地を好み、河川敷や扇状地など改変されやすい環境に生育するため安定的な生息は難しいものと考えられる。
- **特記事項** 2頭採集されているはずだが渡辺コレクションには現在1頭の標本しかなく、もう1頭の所在は把握できない。またこの標本には日付の異なる2枚のラベルがついておりどちらが正しいのか不明である。
- **文献等番号** 138

(執筆：青木 俊彦)

タカオキリガ

Pseudopanolis takao

チョウ目
ヤガ科

情報不足 (DD)

| | |
|------------|----------|
| 2016 DD | 環境省 - |
|------------|----------|



(撮影：梅津 一史)

- **選定理由** 県内でこれまでに確認された産地、記録とも少なく、ランクを判定するに足る情報が得られていない。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州、四国、九州に分布する。県内では1994年の旧牡鹿町の記録しかなく、度重なる再調査にもかかわらず再発見にいたっていない。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 主要な食樹であるモミは伐採が進み、本種が生息できるほど残されている地域は少なくなってきたものと考えられる。
- **文献等番号** 138

(執筆：青木 俊彦)

クロヤガ

Euxoa nigrata

チョウ目
ヤガ科

情報不足 (DD)

| | |
|------------|----------|
| 2016 DD | 環境省 - |
|------------|----------|



(撮影：青木 俊彦)

- **選定理由** 県内でこれまでに確認された産地は1か所のみである。40年以上記録が途絶えており、ランクを判定する情報が得られていない。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州(中部地方以北)。1978年に蔵王町(賽の碓)で記録されたのが唯一のものとなっている。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 内陸草原に適応した種とされ高原に生息するがこのような環境は少なく失われやすい。
- **文献等番号** 138

(執筆：青木 俊彦)

シロオビハイイロヤガ

Spaelotis lucens

チョウ目
ヤガ科

情報不足 (DD)

| | |
|------|-----|
| 2016 | 環境省 |
| - | - |

- **選定理由** 生息環境は山岳部などの高標高地で、県内でこれまでに確認された産地は少ない。記録も少なく、ランクを判定するに足る情報が得られていない。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 寒冷地の蛾で、北海道、本州(中部以北)の内陸部に分布する。県内では1968年に川崎町で得られただけだった。その後途絶えていたが2022年に栗駒山で発見された。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 寒冷地の蛾で少ない種である。灯火に対する趨光性が弱いことも記録が少ない要因のひとつと思われる。
- **特記事項** 渡辺コレクションには未発表の標本が複数含まれていることを確認している。
- **文献等番号** 18、138

(執筆：青木 俊彦)



(撮影：青木 俊彦)

ヤマトウスチャヤガ

Diarsia nipponica

チョウ目
ヤガ科

情報不足 (DD)

| | |
|------|-----|
| 2016 | 環境省 |
| DD | - |

- **選定理由** 生息環境は山岳部などの高標高地で、県内でこれまでに確認された産地も記録も少なく、ランクを判定するに足る情報が得られていない。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道、本州、九州に分布。山岳部の高標高地に生息する。県内では1969年に蔵王町(賽の磯)で、1981年に栗駒山中腹で記録されているのみである。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 高標高地に生息する種であり、生息数が少なく、環境の変化にも弱いものと考えられる。
- **文献等番号** 138

(執筆：青木 俊彦)



(撮影：青木 俊彦)

キミミヤガ

Xestia baja

チョウ目
ヤガ科

情報不足 (DD)

| | |
|------|-----|
| 2016 | 環境省 |
| - | - |

- **選定理由** 生息環境は山岳部などの高標高地で、県内でこれまでに確認された産地は少ない。記録も少なく、ランクを判定するに足る情報が得られていない。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 冷温帯の蛾で北海道、本州(中部以北)の高地草原に分布する。県内では1967年に川崎町(かもしか温泉)で、1999年に同じ川崎町(峨々)で記録されているのみである。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 高標高地に生息する種であり、生息数が少なく、環境の変化にも弱いものと考えられる。
- **特記事項** 渡辺コレクションには「宮城県の鱗翅類」発刊後の未発表標本が含まれている。
- **文献等番号** 138

(執筆：青木 俊彦)



(撮影：青木 俊彦)

イタクラキノメイガ

Uresiphita fusei

チョウ目
ツトガ科

情報不足 (DD)

| | |
|------|-----|
| 2016 | 環境省 |
| DD | - |

- **選定理由** 県内でこれまでに確認された産地も記録も少なく、ランクを判定するに足る情報が得られていない。(ナ)
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州の一部(群馬県、千葉県、宮城県、岩手県)に分布。県内では1990年代に涌谷町、旧田尻町の沼沢地で記録されていた。その後途絶えていたが2021年に旧田尻町蕪栗沼で再発見された。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 生息環境は低湿地、沼沢地などであり、このような環境は全国的に失われつつある。
- **文献等番号** 17、138

(執筆：青木 俊彦)



(撮影：青木 俊彦)

動物編

海岸地域の
無脊椎動物類



海岸地域の無脊椎動物類

レッドリスト種選定の経緯

海岸動物（海岸地域に生息する昆虫を除く無脊椎動物が対象）におけるレッドリスト種の評価の手順については宮城県RDB2016（宮城県の絶滅のおそれのある野生動植物 RED DATA BOOK MIYAGI 2016）を参照していただきたい。レッドリストのカテゴリーとしては、希少性の高い順に絶滅危惧I類（CR+EN）、絶滅危惧II類（VU）、準絶滅危惧（NT）であるが、この他に情報不足（DD）がある。情報不足としたのはレッドリストのカテゴリー付けが必要と思われるが、評価するだけの情報が揃っていない種である（例えば、近年生息が確認され、希少であることが推察できたが現在の生息状況等が不明の場合などで、次回の改訂の時に改めて評価付けをすることが妥当な種）。また宮城県RDB2016では宮城県独自のカテゴリーとして要注目種を設定した。

宮城県RDB2016ではレッドリスト種として70種が選定された。これをカテゴリー別に見ると、絶滅危惧I類が4種、絶滅危惧II類が16種、準絶滅危惧が21種、情報不足が23種、要注目種が6種であった。また、分類群別の内訳を見ると、刺胞動物が1種、紐形動物が1種、軟体動物の巻貝類が32種、二枚貝類が16種、環形動物が6種、節足動物が12種、棘皮動物が2種であった。

その後、2017年には宮城県野生動植物調査会が再発足し、その中に海岸動物分科会が設置された。2017年以降、海岸動物分科会構成員らによって沿岸域での底生動物の調査が継続的に行われた。2020年度にはレッドリスト種の大幅な見直しが行われ、11種を削除し、新たに21種を新たに加えた。また、カテゴリーの変更を行なったのは29種であった。また、要注目種というカテゴリーに該当する種は0になった。このため2021年版のレッドリスト種には80種が指定された。さらに2024年版のレッドリストにおいては新規に5種を追加（カテゴリーの変更は1種のみ）したので、レッドリスト種は85種になった。そして、今回のレッドデータブックの改訂（宮城県RDB2026）においては、新規に5種を追加した（カテゴリーの変更は1種のみ）ことから、レッドリスト種は90種になり、宮城県RDB2016における70種と比べると20種が増加した。そのカテゴリー別内訳について宮城県RDB2016と比べてみると、絶滅危惧I類が4種から11種に、絶滅危惧II類が16種から24種に、準絶滅危惧が21種から33種に、情報不足が23種から22種に、要注目種が6種から0種になった。

この10年間でレッドリスト種が1.3倍に増加し、特に絶滅危惧I類が2.8倍、絶滅危惧II類が1.5倍にもなったのは、それだけ沿岸域の生物生息環境が悪化してきている証左とも言えるが、東日本大震災後には底生動物群集の調査がより頻繁に実施されるようになったためでもある。つまり、県内全域にわたる詳細な調査によって、各種の生息状況の把握が進んだことにより、新たな希少種の存在が判明したり、絶滅危惧カテゴリーの判定がより確からしさを持って行えるようになったのである。そのため、宮城県RDB2016では情報不足＋要注目種が全体の41％であったのが、宮城県RDB2026では24％になっている。また、宮城県RDB2016が公表された以降にレッドリストに新たに追加された種は31種になるが、これも現地調査が継続して広域で多く行われた成果といえる。しかし、近年の気候変動に伴う海水温の上昇や黒潮大蛇行の続流が宮城県沖に流入してきているような状況のもとで、底生動物種にも分布の北進が見られるようになったことが根底にあるのかもしれない。海域の連続性が失われず、幼生分散を通じた底生動物のネットワークが健全であったことから、東日本大震災での大津波の攪乱影響は、震災直後を除けば、底生動物群集にとっては一過的なものであり、その後は急速に回復した。ただし、震災後に見られなくなった種もあり、震災後の群集組成は変動し続けており、いまだに不安定である。このような状況のもとで今後レッドリスト種がどのように推移していくかは、生物多様性保全の観点からも注視していく必要がある。

選定種の概要

「絶滅危惧I類」には11種が選定された。そのうち、9種が巻貝類である。イボキサゴは2019年までは波津々浦で継続して記録されていたが、最近は見られなくなった。桂島でも死殻は見られるが、生貝が見つからない状況が続いており、絶滅が危惧される。イボウミナナ、フトヘナタリ、カワアイの3種は、生息場所は限

られているが、生息地では継続的に確認されている。しかしイボウミナナとフトヘナタリの個体数は極めて少なく、しかも減少傾向にあることから監視が必要である。その点、カワアイ個体群は生息地では比較的安定している。カワグチツボは東名運河などで記録されていたが、生息場所が極めて限定的であり、稀にしか見つからない。サザナミツボは2004年以降の生息記録が無かった種であるが、アナジャコ類の巣穴に棲み込んでいることから、アナジャコ類の生息する干潟で丹念に巣穴の中を観察することで近年見出されることが増加した。しかし、生息場所が特殊な上、個体数は極めて少ない。クビキレガイモドキとナギサノシタタリは潮間帯上部の転石や打ち上げ物の下などに生息している。これまで出現記録は極めて少なかったが、2022年と2023年に潮間帯上部の生息環境を広範囲に調べることでいくつかの地点で見出された。しかし確認地点は護岸の近くだったり、崖の下だったりと、生息基盤としては脆弱である。ウネムシロは震災前に万石浦で確認されていたが、震災後はほとんど見られず、2020年以降の記録がない。

「絶滅危惧I類」の残りの2種は甲殻類である。そのうち、ヨコエビ類のサンリクドロソコエビは、2017年に新種記載された種であり、これまで宮城県以外での出現記録がない宮城県固有種である。潮間帯中部から上部にかけての転石下や小礫間に棲孔を掘って暮らすという極めて特異な生息環境に依存している。2024年になって新たな生息場所が見つかったものの、極めて局所的であり、個体群としては不安定な存在である。ハマガニは、2018年まで記録のあった津谷川河口ではその後生息が確認されず絶滅したのと考えられていたが、2025年に久しぶりに見出された。仙台湾沿岸域では、数カ所で稀に見つかる程度であったが、近年になって生息確認地点が少し追加された。しかし、いずれも1～2個体のみ確認であり、今後の動向が気になるところである。

これら絶滅危惧I類の11種については、上記のように、生息場所が限定され、もしくは生存個体数が極めて少ないという状況は依然として続いている。今後の環境変動や人為的な改変によって絶滅に至る可能性は高いことから、注意深く監視していくことが必要である。

「絶滅危惧II類」に選定された24種のうち、15種（63％）が貝類であり、スジホシムシモドキヤドリガイとハマグリを除けば巻貝類であった。ツボミはウミナナ類の殻上に付着して暮らしているが、ウミナナ類が多くてもツボミがいない場所も多く、生息地は限られる。ヤマトクビキレガイは絶滅危惧I類のクビキレガイモドキと同様の環境に生息する。生息地ではまとまった数が見られることもあるが確認された生息地は少ない。カワザンショウ類のヨシダカワザンショウはヨシ原やその陸側、ヒナタムシヤドリカワザンショウはヨシ原内やその周辺、マツシマカワザンショウは干潟の砂泥底、ツブカワザンショウは潮間帯上部で転石などに付着して生息している。いずれも生息地が限られ、個体数も比較的少ない上に、護岸工事や道路工事で埋め立てられやすいところに生息することから注意が必要である。ヒナユキスズメ、カミスジカイコガイダマシ、シゲヤスイトカケギリは稀に出現するのみであり、個体数も極めて少ない。この中で2020年以降に生存が確認されているのはカミスジカイコガイダマシのみである。シラギクは宮城県では2024年になって初めて数カ所で生息が確認された種である。内湾の転石地から内湾奥の泥底の埋もれた石の下面（転石下の還元的環境）に生息するが、全国的に生きた個体を見ることは多くないという希少な貝である。エドガワミズゴマツボは宮城県が分布の北限であり、淡水の影響の強い干潟に生息する。震災で新たに形成された汽水域で見つかったこともあったが、その場所は埋め戻されてしまった。その後は限られた場所で見つかっていない。ムシロガイは砂泥底に生息するが、干潟で生貝が見られるところは全国的に少なく、宮城県でもこれまでに生息が確認されたところは極めて少ない。ウスコミミガイは、潮間帯上部の転石の下や打ち上げ物の中など、あまり調査がなされなかったようなところを生息場所としており、2008年以降にはじめて生息が確認された種である。近年の調査努力で生息確認場所は増加したが、個体数は極めて限られている。

ハマグリは宮城県ではほぼ絶滅に近い状況であったが、近年、仙台湾沿岸域の干潟の複数箇所です少数が確認されるようになった。しかし、生息環境が良好に保たれなければ、現在以上の回復は難しいと思われる。スジホシムシモドキヤドリガイは同じく絶滅危惧II類のスジホシムシモドキの体表に付着して生息している。宮城県では2022年に初めて見付きり、2024年にも確認されたが、1カ所のみであり、珍しい存在である。

ゴカイ類のツバサゴカイは数カ所で棲管が見られたことから生息が確認されたが、生息場所は限定的であり、個体数も少ない。スジホシムシとスジホシムシモドキは潮間帯の砂泥中に埋もれて生息する種であるが、宮城県内では稀に見られる程度である。

カニムシ類はサソリに似た外形をした微小な動物であるが、ウミカニムシはこの仲間では珍しく潮のかかるような沿岸域に生息する種である。これまで情報不足であったが、近年になって生息情報が複数得られたことから、その生息状況にかんがみて新たに絶滅危惧II類に指定された。宮城県が分布の南限であり、全国的にも出現例は極めて少ない種である。

ヒメアカイソガニは、潮間帯上部の転石帯で転石中に深く潜って暮らしている。宮城県では2020年に南三陸沿岸域で発見された。局所的な分布をしており、見つかることは極めて少ない。トリウミアカイソモドキはアナジャコ類の巣穴を利用して暮らしている小型のカニであるが、県内での記録は極めて限られていた。近年の調査努力で確認例が増加してきたが、個体数が少ない状況に変わりはない。スナガニは主に外洋に面した砂浜を生息場所とする種であるが、近年各所の砂浜が減耗し、幅が狭くなってきていることなどが影響して、どこでも見られるということはなくなってしまった。しかし、近年広域にわたる調査で生息地が少し回復してきている兆しがある。オサガニは、宮城県RDB 2016ではレッドリストの情報不足に指定されていたが、2021年の改定で削除された。これは、2010年に採集された後、記録が途絶えており、宮城県は生息域外と見なされたためであった。しかし、2023年以降に複数地点で生息が確認されたことから、再度指定したものである。ムツハリアケガニは震災後になって記録されるようになった種であるが、稀にしか出現せず、希少な存在である。

これら絶滅危惧II類の24種を、宮城県RED2016と比較してみると、8種は準絶滅危惧あるいは情報不足からカテゴリーを絶滅危惧II類に引き上げられた種、別の8種は新たに指定された種であった。また絶滅危惧II類から格下げになった種が2種、格上げされて絶滅危惧I類になった種が6種あり、絶滅危惧II類のままとなったのは8種であった。

このように、この10年の間に、絶滅危惧I類、II類に相当する種が大幅に増加したことが明らかである。これらの種の存続には、基本的に、幼生分散のネットワークが健全であることと、生息場所の保全が欠かせない。

「準絶滅危惧」に選定された33種は、いずれも「絶滅危惧II類」と同様な状況に置かれており、これ以上環境の悪化や生息場所の劣化が進めば、すぐにでも上位のカテゴリーに移行することが考えられる。アカテガニは、以前は数多く見られたが、近年見かける回数が少なくなってきた種の代表である。繁殖期には海辺に移動して産卵(放仔)することから、生息場所である干潟後背地の土手や松林と海辺の間に堤防などが建設されると、個体群の存続が阻害されるので要注意である。

「情報不足」の22種については、希少ではあるが現状での情報が不足していることが主な選定理由となっており、今後引き続きモニタリング調査を継続していくことで、カテゴリーの改訂が必要になる可能性が高い。

選定種の生息環境

レッドリスト種に多く選定された巻貝類、二枚貝類、甲殻類のほとんどが、内湾や潟湖あるいは河口部の干潟やその周辺を主な生息場所とする種であった。このことは、干潟やその後背地にある塩性湿地、あるいは潮下帯に立地するアマモ場が、人間活動の様々な影響(堤防の建設、埋立て、河川の水質汚染など)を受けることで、面積が減少し、生息環境が悪化している現状(有機物負荷の増大による底質の還元化や貧酸素化など)を反映しているものと考えられる。内湾の最奥部など潮通しの悪いところには泥分がたまりやすく、泥干潟が形成されるが、このような環境は少なくなっている。また、潮通しの良いところで、礫混じりの砂泥底に生息するような種もその生息環境が少なくなっているようなので注意が必要である。特殊な生息場所ということであれば、ヨシ原の地高が高いところを生息場所とするカワザンショウ類や泥岩に穿孔して生息するニオガイなども生息環境が失われることがその種の絶滅につながるようになる。干潟の上部に

みられる転石や打上げ物の下に生息する微小な底生動物は、これまであまり注目されてこなかったが、近年の調査で少数が生息していることが判明したばかりである。また、汽水環境に適応した種では、河川水が適当に混じり合い汽水域が維持されることが必要であり、河川改修や堤防の建設などのために汽水域が失われると、個体群の維持ができなくなるおそれがある。

今回選定された90種という数は決して多いものではない。沿岸域に生息するこれらの生きものたちは、自然生態系の一部を構成しており、バランスのとれた健全な環境でこそ、その生を全うできる存在である。レッドリスト掲載種が絶滅への道をたどることなく、多様性が保持される沿岸環境こそが、私たちの生活の維持にとっても大切である。私たちは、これらの生きものたちを自然に存在する財産のひとつとして、後世に残していかなければならない。

レッドリスト種の選定に関しては、海岸動物分科会による調査の他にも、以下で実施された干潟における底生動物調査の結果も適宜参考にさせていただいた。

- 東北大学のグリーン復興プロジェクトのもとで実施された干潟底生動物の市民調査　2012～2019年（特定非営利活動法人アースウォッチジャパンが協力）
- 環境省生物多様性センターが行なった東北地方太平洋沿岸地域生態系監視調査　2012～2021年（東日本大震災で被災した沿岸域での底生動物調査）
- 宮城県河川課が設置した環境アドバイザー制度のもとで行われた底生動物調査　2013～2021年（東日本大震災宮城県河川海岸復旧・復興　環境配慮記録誌　2021年3月）

種類ごとの個票のカテゴリーにおいて、環境省の項でNT*のように＊印が付されているのは、環境省海洋生物レッドリスト2017におけるカテゴリーである。

また、個別の種の写真は基本的に宮城県内で撮影されたものであるが、県外で撮影された写真については、撮影地名を記した。

【海岸動物分科会名簿（海岸地域の無脊椎動物類を担当）】

| 氏名 | 所属等 |
|--------|---------------------------------------|
| 阿部 拓三 | 南三陸町自然環境活用センター・研究員 |
| 阿部 博和 | 石巻専修大学工学部生物科学科・准教授 |
| 大越 和加 | 東北大学大学院農学研究科・教授 |
| 金谷 弦 | 国立環境研究所地域環境保全領域海域環境研究室・上級主幹研究員 |
| 木下 今日子 | みちのくベントス研究所、東邦大学理学部東京湾生態系研究センター・訪問研究員 |
| 鈴木 孝男 | みちのくベントス研究所・所長 |
| 太齋 彰浩 | サスティナビリティセンター・代表理事 |
| 多留 聖典 | 東邦大学理学部東京湾生態系研究センター・訪問研究員 |
| 永木 利幸 | 宮城県仙台地方振興事務所水産漁港部　技術副参事兼総括技術次長 |
| 真部 和代 | (株)エコリス　業務管理部業務管理課・課長 |
| 柚原 剛 | 国立環境研究所地域環境保全領域　海域環境研究室・特別研究員 |

| | | |
|----------------|----------------------|---|
| 参考文献 | | |
| オロチヒモムシ | Kajihara 2020 | Kajihara, H. 2020. Redescription of <i>Cerebratulus marginatus</i> auct. (Nemertea: Pilidiophora) from Hokkaido, Japan, as a new species. Zootaxa 4819 (2): 295–315. |
| イボウミナ | Kojima et. al. 2005 | Kojima, S., Kamimura, S., Iijima, S., Kimura, T., Mori, K., Hayashi, I., Furota, T. 2005. Phylogeography of the endangered tideland snail <i>Batillaria zonalis</i> in the Japanese and Ryukyu Islands. Ecol. Res., 20: 686-694. |
| フトヘナタリ | 金谷ら 2012 | 金谷 弦・鈴木孝男・牧 秀明・中村泰男・宮島祐一・菊地永祐. 2012. 2011年巨大津波が宮城県蒲生潟の地形、植生および底生動物相に及ぼした影響. 日本ベントス学会誌, 67: 20–32. |
| カワアイ | Kojima et. al. 2008 | Kojima, S., Ozeki, S., Iijima, S., Okoshi, K., Suzuki, T., Hayashi, I., Furota, T. 2008. Genetic characteristics of three recently discovered populations of the tideland snail <i>Cerithidea djadjariensis</i> (Martin) (Mollusca, Gastropoda) from the Pacific coast of the eastern Japan. Plankton Benthos Res.,3 (2): 96-100. |
| クビキレガイモドキ | 鈴木ら 2009 | 鈴木孝男・山下博由・宮城豊彦・多々良有紀. 2009. 宮城県から発見されたクビキレガイモドキ (新生腹足上目：イツマデガイ科). Molluscan Diversity, 1 (1): 5–11. |
| カミスジカイコガイダマシ | 多留 2024 | 多留聖典. 2024. 千葉県行徳鳥獣保護区でのカミスジカイコガイダマシの大量発生. みちのくベントス, 8 :27-31. |
| ヤミヨキセフタ | Cooke et. al. 2014 | Cooke, Samantha, Dieta Hanson, Yayoi Hirano, Elysse Ornelas-Gatdula, Terrence M. Gosliner, Alexey V. Chernyshev & Ángel Valdés 2014. Cryptic diversity of <i>Melanochlamys</i> sea slugs (Gastropoda, Aglajidae) in the North Pacific. Zoologica Scripta, 43(4): 351-369. |
| ガタツキ | Suzuki & Kosuge 2010 | Suzuki, T. and S. Kosuge 2010. Description of a new species of <i>Lasaea reikoeae</i> Suzuki & Kosuge n. sp. from estuary area of Edogawa River, Tokyo Bay(Bivalvia, Erycinidae). Bulletin of the Institute of Malacology Tokyo, 3: 147–148. |
| スジホシムシモドキヤドリガイ | 阿部ら 2023 | 阿部博和・小林元樹・小田中健流・太田尚志・後藤龍太郎・美濃川拓哉・鷲尾正彦・阿部広和・福森啓晶. 2023. スジホシムシモドキ共生性二枚貝スジホシムシモドキヤドリガイの宮城県と青森県における記録 |
| マゴコロガイ | 千葉ら 2024 | 千葉倫佳・木下今日子・真部和代・鈴木孝男・鈴木将太・阿部拓三. 2024. 宮城県志津川湾におけるマゴコロガイ (二枚貝綱：ウロコガイ上科) の初記録. 日本ベントス学会誌, 79 :14-17. |
| マゴコロガイ | 菅 2025 | 菅 孔太郎. 2025. 岩手県小友浦から得られた北限記録となるマゴコロガイ <i>Peregrinamor ohshimai</i> (二枚貝綱ウロコガイ科). みちのくベントス, 9 : 67-72. |
| ネムグリガイ | Haga 2006 | Takuma Haga 2006. The Rhizome-Boring Shipworm <i>Zachsia zenkewitschi</i> (Bivalvia: Teredinidae) in Drifted Eelgrass. Venus 65: 263-266. |
| ニホンウミイサゴムシ | Nishi et. al. 2014 | Nishi, E., Matsuoi, K., Kazama-Wakabayashi, M., Mori, A., Tomioka, S., Kajihara, H., Hamaguchi, M., Kajihara, N., Hutchungs, P. 2014. Partial revision of Japanese Pectinariidae (Annelida: Polychaeta), including redescrptions of poorly known species. Zootaxa 3895 (3): 433–445. |
| サンリクドロソコエビ | Ariyama & Taru 2017 | Ariyama, H. and Taru, M. 2017. Three Species of <i>Grandidierella</i> (Crustacea: Amphipoda: Aoridae) from Coastal Areas of the Tohoku and Kanto-Tokai Districts, East Japan, with the Description of Two New Species. Species Diversity 22: 187–200. |
| モリノカマカ | Ariyama 2007 | Ariyama, H. 2007. Species of the Genus <i>Kamaka</i> (Crustacea: Amphipoda: Kamakidae) from Japan: <i>Kamaka biwae</i> and <i>K. morinoi</i> sp. nov., Species Diversity, 12: 141–160. |
| バルスアナジャコ | Sakai 1968 | Sakai, K.1968. Three species of the genus <i>Upogebia</i> (Decapoda, Crustacea), Journal of Seika Women's Junior College, 1: 45-50. |
| ハマガニ | 柚原・鈴木 2018 | 柚原 剛・鈴木孝男. 2018. 仙台湾名取川河口で確認された絶滅危惧種ハマガニ. みちのくベントス, 2: 49-53. |
| ベンケイガニ | 柚原ら 2021 | 柚原 剛・内野 敬・鈴木孝男. 2021. 北上川河口で確認された絶滅危惧種ベンケイガニ. みちのくベントス, 5: 7-9. |
| スナガニ | 若林 2019 | 若林郁夫. 2019. 東北および北関東の太平洋岸におけるスナガニ類の生息記録. Cancer 28: 37–41. |
| スナガニ | 内藤 2024 | 内藤華子 2024. 石狩海岸で発見したスナガニに関する報告. いしかり砂丘の風資料館紀要, 14: 61-63. |
| スナガニ | 阿部・鈴木 2025 | 阿部拓三・鈴木将太. 2025. 宮城県沿岸域の砂浜海岸におけるスナガニ類の分布について. みちのくベントス, 9 :81-85. |
| オサガニ | 阿部ら 2025 | 阿部拓三・金谷 弦・木下今日子・内野 敬・柚原 剛・鈴木孝男. 福島県および宮城県沿岸域におけるオサガニの生息記録. みちのくベントス, 9: 77-80. |

ホウザワイソギンチャク

Synandwakia hozawai

イソギンチャク目

準絶滅危惧（NT）

2016 NT 環境省



（撮影：鈴木 孝男）

■**選定理由** 震災後は宮城県内の干潟でも幾つかの確認例がある。しかし、年によっては見られないこともあり、個体数は少なく、希少である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 日本では、1968年以来生息記録が無かったが、2006年に青森県大湊湾で再発見された。その後各地で生息が確認されたが、少数である。関東以北の内湾砂泥底に分布する。宮城県では、震災前、松島湾での記録があったのみであるが、震災後は志津川湾、松島湾などで確認されている。最近では志津川湾の細浦や水戸辺川河口、松島湾の波津々浦、鳥の海などで確認されている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 体の幅は直径5-10mmで、白色～薄茶色。砂泥底に埋もれて生活しており、主に夜間の冠水時に底土上に触手を広げて餌をとる。干潮時は底土中に潜っている。体壁に目立つ突起はなく、クチクラの膜もない。体の後端部を球形に膨らませて流されないようにしている。触手基部に黒色斑がある。

■**生息に対する脅威（減少の要因）** 堤防建設や護岸工事などに伴う生息場所（砂泥質の干潟）の喪失や生息環境の改変、有機物負荷の増大による底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

（執筆：海岸動物分科会）

オロチヒモムシ

Cerebratulus orochi

異紐虫目

リネウス科

準絶滅危惧（NT）

2016 NT 環境省



（撮影：鈴木 孝男）

■**選定理由** 宮城県内数カ所でもまれに記録される程度であり、個体数は少なく、希少である。全国的にもあまり出現していない。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 日本に広く分布するとされているが、環境省の第7回自然環境保全基礎調査における全国干潟調査（2007年）では仙台湾からしか記録されなかった。震災前後において、万石浦や仙台湾岸の潟湖干潟で生息が確認されているが発見例は少ない。最近では折立海岸で2021年に確認されたのみである。

■**形態ならびに近似種との区別点** 体長15-30cm、幅1cmほどの大型で長いリボン状の平たいヒモムシ。頭部は太くなり先端が尖る三角形で胴部と区別できる。口から細長い口吻を突出させ、生きた動物をからめて捕らえる肉食性。

■**生息に対する脅威（減少の要因）** 堤防建設や護岸工事などに伴う生息場所（砂泥質の干潟）の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

■**特記事項** 2020年に、学名が確定した。

■**参考文献** Kajihara 2020

（執筆：海岸動物分科会）

ツボミ

Patelloida conulus

ヨメガカサ目

コガモガイ科

絶滅危惧II類（VU）

2016 VU 環境省



（撮影：鈴木 孝男）

■**選定理由** 舞根湾、志津川湾、万石浦、松島湾などで、ウミナナ類の殻上に付着しているのが観察されるが、近年生息場所、個体数ともに減少傾向が著しい。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 潮間帯の砂泥底上でウミナナやホソウミナナの殻上に付着して生息する。東京湾や瀬戸内海では減少傾向が著しい。宮城県では、万石浦、松島湾など、ウミナナ個体群の健全なところで記録されることが多いが、ウミナナがいても本種が生息していないところもある。2021年以降では万石浦のほか、舞根湾、志津川湾や松島湾の野々島で生息が確認されている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 直径1cmの円錐型の巻貝。ウミナナやホソウミナナの殻に付着している。似ている形で、殻高が低く、カキ殻などに付着しているのは別種のシポリガイである。

■**生息に対する脅威（減少の要因）** 宿主（付着基質）となるウミナナ類（レッドリスト種であるウミナナ・イボウミナナを含む）の減少が生息にとっての脅威となる。

■**保護保全上の留意点** 宿主個体群の保全。

（執筆：海岸動物分科会）

| カテゴリー | 絶滅（EX） | 野生絶滅（EW） | 絶滅危惧I類（CR+EN） | 絶滅危惧II類（CR） | 絶滅危惧III類（EN） | 絶滅危惧II類（VU） | 準絶滅危惧（NT） | 情報不足（DD） | 絶滅のおそれのある地域個体群（LP） | 要注目種 |
|-------|--------|----------|---------------|-------------|--------------|-------------|-----------|----------|--------------------|------|
|-------|--------|----------|---------------|-------------|--------------|-------------|-----------|----------|--------------------|------|

イボキサゴ

Umbonium moniliferum

- 選定理由** 震災前は、万石浦と松島湾での記録があった。しかし震災後は県内ではまれにしか見られず、生息場所が極めて限られている。近年減少傾向が著しい。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 内湾の干潟に生息する。全国的に生息するが、近年見られなくなったところも多い。宮城県では松島湾や万石浦でまれに生貝が見られる程度であるが、場所によっては狭いエリアで多産するところがある。しかし、同じ場所でも、翌年には生貝がわずしか見られなかったりと、消長が激しい種である。松島湾の波津々浦では2019年まで出現していたが、その後は確認されていない。
- 形態ならびに近似種との区別点** 殻幅1.5cmの巻貝。貝殻はそろばん玉のような形。殻の表面につやがあり、斑点状の模様が並んでいる個体が多いが、色彩や模様には変異が多い。キサゴに似ているが、殻底部の中心部の赤みがかった部分が殻の半径よりも大きいことで区別できる。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 生息地が限定されており、工事や埋め立てに伴う生息場所(解放的な砂質前浜干潟)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。また、ろ過食も行なう貝なので、水域の汚染の影響を受けやすい。
- 特記事項** 死殻はよくヤドカリが利用する。

(執筆：海岸動物分科会)

ニシキウズ目
ニシキウズ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016
VU

環境省
NT



(撮影：鈴木 孝男)

ヒナユキスズメ

Phenacolepas sp.

- 選定理由** 特殊な環境に生息しており、環境改変等によって絶滅してしまう可能性が高い。また、県内での生息地は極めて限られており、希少である。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 全国的にも分布が限られている。内湾奥部の砂泥底に埋もれた石の下面に付着する。宮城県では、万石浦浦宿で2015年と2017年に生息が確認されたのみで、その後の記録はない。
- 形態ならびに近似種との区別点** 殻長3-5mmの笠型をした巻貝。同じくユキスズメ科のミヤコドリとよく似ているが、より小型で殻高が低く、殻頂部が左にずれるなどの点で区別できる。長い触角を持つ。軟体部は鮮やかな赤色を呈す。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 生息環境が特殊なことから、工事や埋め立てに伴う生息場所(内湾の汽水干潟に埋もれた石)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。
- 特記事項** 2015年に万石浦で確認されたのが宮城県内での初記録であり、分布域の北限となる。

(執筆：海岸動物分科会)

アマオブネ目
ユキスズメ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016
-

環境省
NT



(撮影：金谷 弦)

アマガイ

Nerita japonica

- 選定理由** 万石浦の個体群は分布の北限であり、県内では他で見つかっていない希少な存在である。しかし、人為的な移入の可能性もあり、情報不足である。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 房総半島以南に分布するとされる。内湾の河口周辺の潮間帯上部において、岩礁や干潟周辺の転石に付着して生息する。直達発生をする。宮城県では、万石浦内の1地点にまとまった個体群が震災前から生息しており、繁殖もしている。東北地方では他には確認されておらず、隔離分布である。
- 形態ならびに近似種との区別点** 殻長1.5cmで低い球形をした巻貝。殻の表面はほぼ平滑で暗褐色、白色の斑模様がある。殻口は明るい黄白色、蓋は石灰質で外側は暗色。イシマキガイは蓋の外縁が黄褐色を帯び、殻表の模様は底辺が黒い小さな三角形が並ぶ。アマオブネガイは殻口軸唇に弱い5個前後の歯がある。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 堤生息地が万石浦の1地点に限定されており、堤防建設や護岸工事などに伴う生息場所(潮間帯の岩礁)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。

(執筆：海岸動物分科会)

アマオブネ目
アマオブネ科

情報不足 (DD)

2016
要注目種

環境省
-



(撮影：鈴木 孝男)

イシマキ

Clithon retropictum

- 選定理由** 宮城県での生息地は4カ所のみと限られることから希少な存在であるが、情報不足である。護岸工事や洪水等による攪乱があると個体群を維持できなくなる可能性がある。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 房総半島以南に分布するとされ、河川の中流や下流域に生息する。宮城県では、2015年に津谷川下流で初めて記録された。ここではそれ以降も生息は確認されている。また、2020年になって伊里前川下流で発見されたが、2022年まで継続的に記録されている。また、最近になって志津川湾の桜川下流(清水漁港)、折立海岸でも確認されている。
- 形態ならびに近似種との区別点** 殻長2cmほどの巻貝。殻は円形に近い。殻表は黄褐色で底辺が黒い小さな三角形の模様が多数並ぶ。蓋は石灰質で半円形、汚白色で外縁が褐色に着色する。淡水の影響が強い干潟周辺や河口域で、護岸壁や転石上に付着する。アマガイは蓋が濃色で殻表の模様は暗褐色地に白色の斑。アマオブネガイは殻口軸唇に弱い5個前後の歯がある。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 堤防建設や護岸工事などに伴う生息場所(低塩分の河口汽水域転石底)の改変や、大雨時の出水が生存にとっての脅威となる。
- 保護保全上の留意点** 汽水域の環境維持。
- 特記事項** 津谷川下流での発見は宮城県内での初記録で分布の北限となる。

(執筆：海岸動物分科会)

アマオブネ目
アマオブネ科

情報不足 (DD)

2016
-

環境省
-



(撮影：鈴木 孝男)

ウミニナ

Batillaria multiformis

- 選定理由** 仙台湾では比較的産地が多く、場所によっては普通に見られた。しかし震災後は生息地が少なくなり、個体数も減少したことから、全体として希少な存在である。蒲生干潟、広浦、井土浦、鳥の海ではほぼ絶滅した。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 東京湾では一時激減したが近年加入がみられる。干潟の陸側に近いところからヨシ原の下や転石帯までに分布。牡鹿半島以南に分布し、震災後も万石浦や松島湾奥部に比較的健全な個体群が残されている。震災前には県南部の蒲生干潟、広浦、鳥の海にも少数が生息していたが、震災後は、ほとんど見られなくなった。2021年以降では万石浦や松島湾の数カ所でも比較的健全な個体群が確認された。
- 形態ならびに近似種との区別点** 殻長3cmで円錐型の巻貝。螺旋はやや殻口側に傾く。殻頂は尖る。ホソウミニナに似るが殻口が張り出さずぐんぐんしており、成熟個体では殻口に滑層瘤(エナメル様の白い層)が発達する。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 堤防建設や護岸工事などに伴う生息場所(潮間帯の干潟周辺海域)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。

(執筆：海岸動物分科会)

オニノツノガイ目
ウミニナ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
NT

環境省
NT



(撮影：鈴木 孝男)

イボウミニナ

Batillaria zonalis

- 選定理由** 琉球列島や一部地域を除いて日本全土で絶滅寸前である本種は、関東以北では宮城県内の数カ所のみで生息が確認されている。隔離個体群であり、遺伝的な多様性が低いことが分かっており、絶滅寸前である。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 潮間帯の砂泥底に生息するが、干潟の陸側に近い部分には分布しない。宮戸島の波津々浦はじめ松島湾の数カ所のみで少数個体が生息していたが、現状での確実な生息地は松島湾の櫃ヶ浦のみである。櫃ヶ浦では2015年に初めて出現して以来、少数ではあるが継続して確認されている。
- 形態ならびに近似種との区別点** 殻長4.5cmの巻貝で細長い円錐型。殻頂は尖っている。ホソウミニナによく似ているが、殻口の外側が深く湾入することで区別できる。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 県内における生息地は少なく、生息範囲も極めて狭いため、堤防建設や護岸工事などに伴う生息場所(潮間帯下部の干潟周辺海域)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。
- 参考文献** Kojima et. al. 2005

(執筆：海岸動物分科会)

オニノツノガイ目
ウミニナ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016
CR+EN

環境省
VU



(撮影：鈴木 孝男)

フトヘナタリ

Cerithidea moerchii

オニノツノガイ目
キバウミニナ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016
VU

環境省
NT

■**選定理由** 震災で激減した後、現在は松島湾の限られたヨシ原に少数が生息するのみであり、他では極めて稀である。東京湾では絶滅寸前、相模湾では絶滅した。仙台湾が分布域の北限である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 潮間帯上部のヨシ原やその付近の底質上に見られ、よくヨシや岩に這い上る。宮城県では震災に伴う大津波で本種の生息環境はほぼ全てが大きく攪乱され、各地でほとんどが絶滅した。震災後、蒲生干潟や井土東谷地に出現したことはあるが、現在ではほとんど見られなくなった。現在でも比較的健全な個体群が残されているのは唯一松島湾の櫃ヶ浦だけである。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長4cmの巻貝。殻は円筒状で太い。ほとんどの成員では殻頂部が欠落する。年を経た個体では殻表面がすり減り、白っぽく、細くなる。螺層の膨らみは弱く、殻表は螺肋が目立つ。ヘナタリは殻口下部が強く伸びるが、本種は伸びない。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 堤防建設や護岸工事などに伴う生息場所(潮間帯上部のヨシ原や塩性湿地)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。

■**保護保全上の留意点** ヨシ原と周辺エコトーンの保全。

■**参考文献** 金谷ら 2012



(撮影：鈴木 孝男)

(執筆：海岸動物分科会)

カワアイ

Pirenella pupiformis

オニノツノガイ目
キバウミニナ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016
VU

環境省
VU

■**選定理由** 生息場所が極めて限られており、隔離分布といえる。宮城県が分布の北限である。東京湾では絶滅寸前、相模湾では絶滅した。三河湾でも絶滅寸前である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 内湾奥部の潮間帯において、泥質～軟泥質の干潟上に生息する。宮城県では震災後、松島湾と万石浦の一部にのみ生息していることが確認されている。特に万石浦の個体群は安定しており、幼生供給源として重要である。また、松島湾の櫃ヶ浦でも震災前から比較的泥っぽい干潟で少数が見られていたが、年を経るごとに生息数が多くなっているようである。2021年には松島湾の陸前富山の泥質干潟に生息しているのが確認された。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長4cmの細長い円錐形をした巻貝。殻の色は褐色で石畳状の彫刻がある。年を経た個体では殻の表面が摩耗する。螺層の膨らみは弱い。ヘナタリは殻口下部が強く伸びるが、本種は伸びない。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 堤防建設や護岸工事などに伴う生息場所(潮間帯中部～下部の泥干潟)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。

■**参考文献** Kojima et. al. 2008

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男)

クロタマキビ

Littorina sitkana

エゾタマキビ目
タマキビ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
要注目種

環境省
-

■**選定理由** 寒帯性種であり、宮城県が分布の南限と思われる。県内での記録はあるが、それほど多くは見られない。温暖化の影響が危惧される。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 東北地方以北の潮間帯中部の岩礁に付着して生息する。寒帯性生物で親潮・リマン海流などの寒流域に分布している。宮城県沿岸域の岩礁帯で時折確認される(分布南限)。志津川湾では震災前に神割崎や折立海岸で確認されていた。震災後は気仙沼の大谷海岸や志津川湾からの記録がある。また、近年の記録としては、神割崎、大谷海岸、大室漁港(石巻市)、金華山、松島湾の朴島などで確認されている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長1.5cmの球形をした巻貝。殻の表面には凸凹があまりない。色は黒褐色が多いが、白帯を持つものもいる。タマキビは3～5本の強い螺肋があるが、本種は螺肋が弱いとされる。ただし殻色や形に変異が多く、殻での識別が困難な個体もある。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 堤防建設や護岸工事などに伴う生息場所(岩礁帯の潮間帯)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。また、北方性種であることから気候変動の影響を受ける可能性がある。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男)

ヤマトクビキレガイ

Truncatella pfeifferi

エゾタマキビ目
クビキレガイ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016
NT

環境省
-

■**選定理由** 震災前後を通じて、生息場所は限られていた。最近では舞根湾、志津川湾、万石浦、松島湾で確認されているが、いずれも少数であり、個体数が激減したといえる。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 外洋に面した内湾の転石帯の潮間帯上部から潮上帯で、打上げ物が堆積する辺りの、漂流物の下や転石の下に生息する。宮城県では、これまで、志津川湾、万石浦、松島湾で少数が記録されていた。最近では舞根湾や万石浦の他、志津川湾、大室漁港、松島湾の転石帯で生息が確認されたが生息場所は限られている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長7mmの細長い円錐形をした巻貝。成長した個体では殻頂が欠けて円筒形になる。殻は薄い橙色で半透明である。殻上の縦肋がある個体からほとんど無い個体まで変異がある。クビキレガイモドキに似るが、殻は厚質で、殻表に縦肋がある個体が多い。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 生息できる潮位の幅が極めて狭い。堤防建設や護岸工事などに伴う生息場所(比較的地高の高い潮上帯の転石や打ち上げ物の下)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。

■**保護保全上の留意点** 転石帯エコトーンの保全。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：阿部 博和)

クリイロカワザンショウ

Angustassiminea castanea

エゾタマキビ目
カワザンショウ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
-

環境省
NT

■**選定理由** 宮城県内での産地は比較的多いものの、生息場所がヨシ原など潮間帯上部であり、工事等によって生息場所が改変を受けると、生存が困難になる。個体数は少なく、希少である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 内湾奥部河口汽水域のヨシ原内や周辺の泥底・砂泥底の転石の下などに生息。宮城県では主に仙台湾岸の干潟や河口域に見られ、産地は比較的多いが、個体数は多くはない。また、津谷川河口、貞山運河でも少数が確認された。近年では松島湾の櫃ヶ浦や福浦島、蒲生干潟、井土東谷地、広浦、鳥の海、牛橋河口などで確認されている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長5mmの巻貝でカワザンショウ類では中型。螺塔は高く、少し細長い感じがする。殻の色は栗色から赤褐色。軟体部背面は黒灰色。礫浜やヨシ原内に見られる未記載種群(キントンイロカワザンショウ)は、軟体部が白色である。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** カワザンショウ類は種間で微細生息場所の選好性が異なる。そのため堤防建設や護岸工事などに伴う生息場所(潮間帯上部のヨシ原や塩性湿地)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。

■**保護保全上の留意点** ヨシ原と周辺エコトーンの保全。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男)

ヨシダカワザンショウ

"*Angustassiminea*" *yoshidayukioi*

エゾタマキビ目
カワザンショウ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016
VU

環境省
NT

■**選定理由** 生息場所が、ヨシ原の上部で地高の高いところに限られており、護岸工事等の影響を受けやすい。産地ではまとまった個体数が見られることもあるが、不安定であり、希少な存在である。日本固有種。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 潮間帯上部よりも上側のヨシ原内に生息する。カワザンショウ類では最も生息場所が限られている種類である。県内では、仙台湾沿岸と津谷川河口、折立海岸、万石浦で記録がある。震災後、ヨシ原の攪乱に伴って生息場所が失われたところが多い。近年、南三陸沿岸や仙台湾沿岸では比較的多くの場所で生息が確認されている。例えば2021年には蒲生干潟のヨシ原で健全な個体群が確認されるなどした。しかし依然希少なままである。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長3mmの巻貝。カワザンショウ類の中では小型である。クリイロカワザンショウの幼貝とよく似ているが、軟体部背面は灰白色で、殻の巻きがよく膨らみ光沢が強く、臍孔が開くことで区別できる。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** カワザンショウ類は種間で微細生息場所の選好性が異なる。そのため堤防建設や護岸工事などに伴う生息場所(潮間帯上部より上側のヨシ原や塩性湿地)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。

■**保護保全上の留意点** ヨシ原と周辺エコトーンの保全。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男)

ヒナタムシヤドリカワザンショウ

Assiminea aff. *parasitologica*

エゾタマキビ目
カワザンショウ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016
NT

環境省
NT

■**選定理由** 震災後、主に仙台湾岸の干潟上部のヨシ原や転石帯で生息が確認されている。生息場所が特殊であり、確認された個体数が少ないことから、希少な存在である。

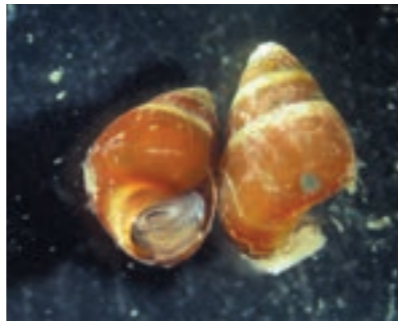
■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 内湾奥部のヨシ原内やその周辺の潮間帯上部近辺に、クリイロカワザンショウと同所的に生息する。宮城県では、仙台湾岸の蒲生干潟、井土東谷地、広浦、鳥の海などにおいて、少数個体が確認されている。また、震災後は貞山運河の敷力所に加え松島湾の朴島、牛橋河口でも見つかったが多くはない。2023年以降では蒲生干潟、鳥の海に加え、県南の坂元川河口や南三陸の伊里前川河口でも確認された。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長4mmの巻貝。カワザンショウ類の中では中型。殻の色は赤褐色で光沢がある。従来東北地方でムシヤドリカワザンショウとされてきたものは本種のことである。殻の巻きの上部和殻底に黄褐色の明るい色帯があることで他種と区別ができる。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** カワザンショウ類は種間で微細生息場所の選好性が異なる。そのため堤防建設や護岸工事などに伴う生息場所(潮間帯上部のヨシ原や塩性湿地、転石帯)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。

■**保護保全上の留意点** ヨシ原と周辺エコトーンの保全。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男)

ツブカワザンショウ

"Assiminea" estuarina

エゾタマキビ目
カワザンショウ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016
NT

環境省
NT

■**選定理由** 宮城県では震災前から生息記録は少なかった。震災後は確認地点が増加したものの、生息数は少なく、稀にしか見つからず、希少である。分布北限、日本固有種。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 内湾奥の潮間帯上部で転石などに付着して生息する。ヨシ原の中には見られない。宮城県では、震災前は、南三陸沿岸、万石浦、松島湾などで少数が確認されていたが、津波で生息地が大きく攪乱されてしまった。震災後は上記の他、雄勝湾、津谷川河口、貞山運河、七北田川河口、牛橋河口など数地点で少数が確認されている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長3mmの巻貝。丸みを帯びた小型のカワザンショウ類。カワザンショウガイの幼貝に似るが、殻質が厚く、殻の巻きは膨らみ、臍孔があることで区別できる。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** カワザンショウ類は種間で微細生息場所の選好性が異なる。そのため堤防建設や護岸工事などに伴う生息場所(潮間帯上部の転石帯)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。

■**保護保全上の留意点** 転石帯エコトーンの保全。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男)

マツカワウラカワザンショウ

"Assiminea" sp. H

エゾタマキビ目
カワザンショウ科

情報不足 (DD)

2016
-

環境省
VU

■**選定理由** 福島県松川浦の固有種であったが、2013年以降に宮城県内の干潟でも見つかるようになり、分布を北に広げている。しかしまだ少数であり、情報不足である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 福島県松川浦でしか見られない種とされていたが、東京湾奥部では本種と思われる古い死殻が多数見られる。内湾奥部の平坦な砂泥質干潟上に生息。宮城県では、2013年に鳥の海で初めて確認されて以降、鳥の海、広浦、井土浦、蒲生干潟で少数が見つかるようになった。最近では松島湾の櫃ヶ浦や牛橋河口、井土東谷地、坂元川河口などでも確認されている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長3mmの巻貝。殻は小型でほぼ球形である。殻の色は淡黄褐色で臍孔は開くが狭い。近似種群が多いが、その中で最も殻長が大きい。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** カワザンショウ類には珍しく砂泥干潟を生息場所とする。そのため堤防建設や護岸工事などに伴う干潟の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

■**特記事項** 鳥の海での発見は宮城県内での初記録となる。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男)

マツシマカワザンショウ

"Assiminea" sp. G

エゾタマキビ目
カワザンショウ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016
-

環境省
VU

■**選定理由** 松島湾以外では見られない。近年になって生息する個体数が減少傾向にあり、希少な存在である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 奥松島宮戸島波津々浦の固有種と考えられていた。内湾奥部の平坦な砂泥底上に生息する。波津々浦のほか、近年になって櫃ヶ浦などでみられるようになった。しかし、2022年以降は波津々浦以外では確認されていない。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長2mmの巻貝。殻は小型で円錐形に近い。殻の色は淡茶褐色。臍孔は開くが狭い。マツカワウラカワザンショウやマンゴクウラカワザンショウに似ているが、螺塔がより高く、高円錐形である。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** カワザンショウ類には珍しく砂泥干潟を生息場所とする。そのため堤防建設や護岸工事などに伴う干潟の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

■**特記事項** 県内では松島湾にしか生息しない。他では見られず、固有種と考えられる(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男)

マンゴクウラカワザンショウ

"Assiminea" sp. F

エゾタマキビ目
カワザンショウ科

情報不足 (DD)

2016
-

環境省
VU

■**選定理由** 万石浦のみが生息地であったが、以前生息が見られていた大浜地区では近年発見されていない。しかし最近になって沢田地区で本種と思われる個体群が見つまっているが情報不足である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 万石浦に固有の種と考えられている。内湾奥部の平坦な砂泥底上に生息する。万石浦でしか見つかっていなかったが、震災後は2013年に記録されているだけで、その後は確認されないうまでであった。ところが、2023~2025年に万石浦沢田のアマモ場でまとまったカワザンショウ類の個体群が見つかったが、これが本種の可能性がある。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長1.5mmの巻貝。殻は小型でほぼ球形であり、膨らみが強い。臍孔は狭く開く。殻表は平滑で淡茶褐色。マツカワウラカワザンショウやマツシマカワザンショウに似ているが、より小型で球形に近い。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** カワザンショウ類には珍しく砂泥干潟を生息場所とする。そのため堤防建設や護岸工事などに伴う干潟の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男)

オオウスイロヘソカドガイ

Paludinellassiminea tanegashimae

エゾタマキビ目
カワザンショウ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
要注目種

環境省
-

■**選定理由** 岩礁性の種であり、絶滅のおそれは少ないと考えられるものの、確認できた地点や個体数は少なく、希少である。宮城県が分布の北限である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 外洋に面した岩礁帯で、飛沫のかかる岩壁や転石上に付着して生息する。分布域は茨城以南から九州までとされていた。宮城県では、震災前後を通じて、志津川湾、万石浦、松島湾で記録されていた。最近では、神割崎で継続して観察されている他、舞根湾、万石浦、大室漁港、松島湾の扇浜や福浦島で、また、志津川湾の岩礁・転石帯の敷力所で確認されている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長7mmほどの巻貝。カワザンショウ科の中では大きい方であり、殻高が高い。殻は堅く、色は茶褐色から赤褐色。軟体部は薄灰色で、触角が長い。ヘソカドガイは殻がより薄く濃色で、軟体部の色も黒灰色。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 堤防建設や護岸工事などに伴う生息場所(岩礁域の潮間帯上部にある岩壁や転石)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。

■**保護保全上の留意点** 転石帯・岩礁帯エコトーンの保全。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：阿部 博和)

シラギク

Pseudoliotia pulchella

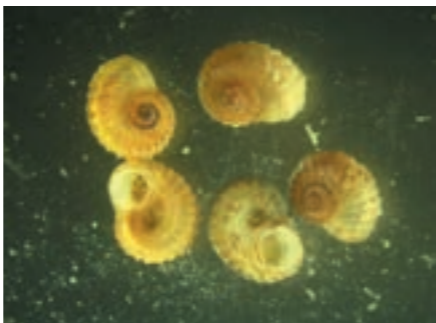
エゾタマキビ目
イソコハクガイ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016
-
環境省
NT

- 選定理由** ある程度広い分布域を持つが、生息数が極めて少なく、生きた個体が見られることは少ない。宮城県では2024年に初めて採集された。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 生きた個体は潮通しの良い内湾の転石地から内湾奥の泥底の埋もれた石の下面(転石下の還元的環境)で見つかる。生きた個体を見ることは多くない。三陸沿岸・男鹿半島以南、九州までに分布する。宮城県では、2024年になって初めて舞根湾や志津川湾の細浦、松原海岸で記録された。これまであまり注意が払われてこなかった可能性があり、丁寧に探索すれば他の干潟でも見つかる可能性がある。
- 形態ならびに近似種との区別点** 殻幅3mmの円盤状で、殻表は荒い格子状になる。臍孔は深く、明らか。生きているときは硫化物に覆われて殻表が黒褐色だが、死殻は白色。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 生息環境が特殊なことから、工事や埋め立てに伴う生息場所(転石下の微細な還元的環境)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：阿部 拓三)

カワグチツボ

Fluviocingula elegantula

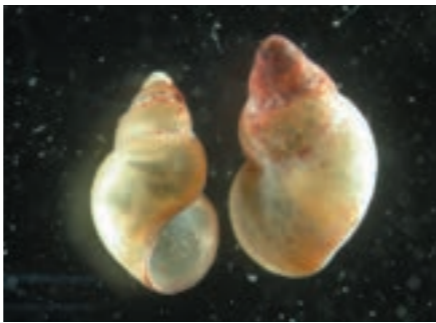
エゾタマキビ目
ワカウラツボ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016
CR+EN
環境省
NT

- 選定理由** 震災後数カ所で確認されているが、極めて少数であり、絶滅寸前といえる。生息場所が護岸工事等で改変されると絶滅してしまう恐れが多い。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 淡水の影響の強い内湾奥の泥干潟や藻類の上に見られ、産地では群生する場合もある。転石下に見られることもあるが、深いところには生息しない。宮城県では、震災後、東名運河、南北上運河、朴島(浦戸諸島)等で少数が確認された。他にも同様の環境に生息している可能性がある。最近では2023年に東名運河で生息が確認されている。
- 形態ならびに近似種との区別点** 殻長5mm程度の巻貝。小型種なので、見落とされやすい。殻の縫合は強く、螺溝がある。殻形態にばらつきが大きく、時にマツカワウラカワザンショウなどと混生するが、本種は触角が長く、触角先端と吻部が黒色になる。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 河口堰建設や護岸工事などに伴う生息場所(低塩分の汽水域にある泥底)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。
- 保護保全上の留意点** 汽水域の環境維持。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男)

サザナミツボ

Nozeba ziczac

エゾタマキビ目
ワカウラツボ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016
CR+EN
環境省
NT

- 選定理由** 震災後は津谷川河口、志津川湾や仙台湾の干潟など数カ所で確認されている。生息地が極めて限定されており、土木工事等で生息場所が失われてしまう危険性が高い。全国的にも記録の少ない種であり、産地は限定されている。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 潮間帯汽水域の泥底に、半ば埋もれた転石の下などに付着する。また、アナジャコ類の棲管内に寄居することもある。宮城県では、震災後、舞根湾、津谷川河口、蒲生干潟、広浦、鳥の海等で確認されていた。また、近年は北貞山運河、東名運河、朴島(浦戸諸島)でも少数が出現したが、希少なままであることに違いはない。最近では、志津川湾の干潟でも記録された。
- 形態ならびに近似種との区別点** 殻長2mmの巻貝。殻は長卵形で淡黄色～黄褐色。微小な貝なので、目視での発見は難しい。カワグチツボの幼貝に似ているが、殻の表面に波打つようなジグザグ模様の細い溝があることで区別できる。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 堤防建設や護岸工事などに伴う生息場所(低塩分の汽水域にある泥底)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。
- 保護保全上の留意点** 汽水域の環境維持。アナジャコ類の生息環境の保全。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男)

クビキレガイモドキ

Cecina manchurica

エゾタマキビ目
イツマデガイ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016
VU
環境省
NT

- 選定理由** 震災後は、2011～13年の桂島、2017、21年の万石浦、2022以降の南三陸沿岸での確認のみであり、生息地が極めて限られている。また、生息数も少なく、減少傾向が著しい。太平洋側では仙台湾が分布の南限である。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 内湾奥の海岸に打上げられた漂着物や転石の下に生息する。宮城県では、2008年以降の調査で志津川湾、万石浦、松島湾での記録がある。震災後は松島湾のみで確認されたが、近年の出現記録はなかった。しかし、2021年に万石浦大浜で、また、2022年以降には志津川湾の転石帯などで確認された。
- 形態ならびに近似種との区別点** 殻長7mmの細長い円錐形をした巻貝で、成長した個体では殻頂が欠ける。殻は薄く、半透明に近い。ヤマトクビキレガイに似るが、殻は薄質、殻表は平滑で光沢があり、縦肋は無い。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 生息できる潮位の幅が極めて狭い。堤防建設や護岸工事などに伴う生息場所(比較的地高の高い潮上帯の転石や打ち上げ物の下)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。
- 保護保全上の留意点** 転石帯エコトーンの保全。
- 特記事項** 日本での生息地は北海道、青森県、岩手県、宮城県、新潟県、石川県とされている。
- 参考文献** 鈴木ら 2009

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男)

エドガワミズゴマツボ

Stenothyra edogawensis

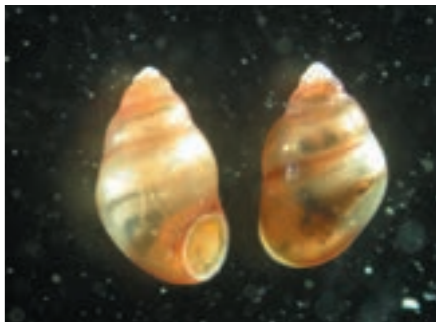
エゾタマキビ目
ミズゴマツボ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016
DD
環境省
NT

- 選定理由** 宮城県では生息が確認されている地点は極めて少なく、限定的である。日本固有種で、宮城県が分布の北限である。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 淡水の影響の強い内湾奥や河口域の干潟泥底上に生息する。東北から九州までに分布するが、宮城県が分布の北限である。宮城県では、震災前は、北上川河口、井土浦、阿武隈川河口で記録されていた。岩沼市寺島地区では、震災に伴う津波で海水が入り湿地帯になったところに出現したが、復旧工事後にはいなくなった。震災後は南北上運河、東名運河、松島湾の朴島、櫃ヶ浦、長浜海岸などでの少数の記録しかない。
- 形態ならびに近似種との区別点** 殻長3mmの小型の巻貝。殻は厚く卵形をしている。殻口は急に狭まり、ほぼ円形である。ミズゴマツボと比較して小型で、殻の縫合のくびれは非常に弱い。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 河口堰建設や護岸工事などに伴う生息場所(低塩分の汽水域にある砂泥底)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。
- 保護保全上の留意点** 汽水域の環境維持。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男)

マルテンスマツムシ

Mitrella martensi

新腹足目
タトガイ科

情報不足 (DD)

2016
-
環境省
CR+EN

- 選定理由** 生きた貝が見られるのは極めて限られた海域であり、近年は国外から移入された個体も確認されている。宮城県の個体が在来種なのか移入種なのかははっきりしないことから情報不足である。
- 分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道から九州の内湾奥のアマモの多い干潟の潮間帯中部から潮下帯に分布する。現在瀬戸内海、有明海以外での生貝の記録はごく少ない。現在見られる大型の個体は中国や朝鮮半島からの移入個体である可能性もある。東北地方での産出は移入個体でないと珍しい。宮城県では2024年になって、長浜(東松島市)と浦戸桂島で発見された。
- 形態ならびに近似種との区別点** 殻長15-20mmの紡錘形。殻の色彩は黄褐色の地に不明瞭な褐色の縦縞を持つが、模様には変異が多い。
- 生息に対する脅威(減少の要因)** 護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(内湾の礫混じりの砂泥底、転石帯やアマモ場)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。
- 保護保全上の留意点** アマモ場の保全。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男)

ムシロガイ

Nassarius livescens

新腹足目
オリレヨフバイ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016 NT 環境省 NT

■**選定理由** 震災後、舞根湾、志津川湾、万石浦などで生息が確認されたが、少数である。最近では確認例が極めて少ない。

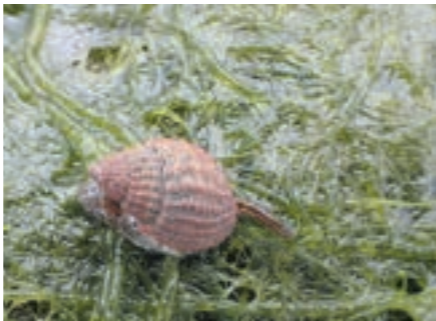
■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 内湾のアマモが生育する干潟から水深10mくらいの砂泥底に生息するが、干潟で生貝が見られるところは少ない。潮下帯が主な生息域と考えられる。日本では、三陸沿岸以南に分布する。宮城県では、震災前に万石浦で記録されていた。しかし、その生息場所は震災影響で沈下し、干潟は無くなってしまった。震災後は、新たに潮間帯となった所で確認されたが数は少ない。他では、舞根湾でも見つかっている。近年では志津川湾や雄勝湾で少数が記録されている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長2cmの巻貝。殻質は厚く、表面には石畳状の彫刻が並ぶ。殻の色は褐色で、殻表は薄い殻皮でおおわれる。殻表にヒドロ虫が着生する。腐肉食である。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(内湾の砂泥底やアマモ場)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

■**保護保全上の留意点** アマモ場の保全。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男)

ウネムシロ

Reticunassa hiradoensis

新腹足目
オリレヨフバイ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016 VU 環境省 CR+EN

■**選定理由** 近年、全国的に、生息場所、個体数共に減少が著しい。宮城県では震災前後を通じて、万石浦で少数が見られたのみであった。近年舞根湾でも確認されたが極めて希少である。日本固有種。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 内湾奥の海水がしみ出すような干潟に分布が限られている。東北地方から九州までに分布する。宮城県では、震災前に万石浦での記録があるが、震災後は、2015年に同じく万石浦で1個体が確認されたのみであった。その後2019年に万石浦と舞根湾で見出された。しかし、2020年以降の記録はない。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長1.5cmの巻貝。殻は厚く、表面にはうね状の不明瞭な縦肋がある。殻の色には橙褐色、黄色、灰色地に白い横しまがあるもの、黒褐色の4タイプがある。他のムシロガイ類と同様、腐肉食性である。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(内湾の砂泥底～泥底)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男)

アカニシ

Rapana venosa

新腹足目
アッキガイ科

情報不足 (DD)

2016 VU 環境省 -

■**選定理由** 主な生息場所は潮下帯なので、干潟で見るとは少ない。潮下帯においても減少傾向が続いているようであるが、宮城県においては最近の情報が少ない。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 内湾の干潟から、外洋に面した内湾の砂泥底に生息するが数は少ない。主な生息域は潮下帯と思われる。宮城県では、松島湾や万石浦で以前は普通に見られ、食卓にも多くのぼっていたが、近年はまれにしか出現せず、減少傾向が著しい。近年では2020、2021、2024年に長浜海岸で見つかっているのみである。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長10cmを越える巻貝。干潟に生息する巻貝では最も大きな種。殻口は大きく開き、殻の内側が赤～橙色になる食用種。肉食性で、アサリなどの二枚貝を好んで食べる。なぎなたのような形の卵嚢を石や棒杭などに産み付ける。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** アッキガイ科の貝類は有機スズ化合物(内分泌かく乱化学物質)の影響を受けることがある。また、生息場所(内湾の砂泥底)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男)

イリエゴウナ

Ebala sp.

異形目
ガクバンゴウナ科

情報不足 (DD)

2016 DD 環境省 VU

■**選定理由** 万石浦では複数個所に生息するようであるが、2010年以降は見いだされていない。福島県松川浦で記録されていることから宮城県に生息している可能性があるものの、情報不足である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 内湾や河口域の砂泥底に生息し、干潟から潮下帯の表層をはい回って生活する。局所的に少数の個体群が生息しているのみと考えられている。日本において、生貝の報告は長らく宮崎市の一ツ葉入江のみであったが、2009年に万石浦で確認された。本県での震災後の生息情報は無い。福島県の松川浦では2018年に記録されている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長約4mmの巻貝。殻は薄く半透明で、細長い円錐形。軟体部は透けて見え、殻頂付近は白い。軟体部はほぼ黒色、触角は細長い三角形で左右に翼状に張り出す。殻はもろくて壊れやすい。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(内湾や汽水域の砂泥底)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：多留 聖典、撮影地：東京都お台場)

コメツブガイ

Decorifer insignis

頭楯目
クダタマガイ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 NT 環境省 -

■**選定理由** 震災前後を通じて、幾つかの場所で確認され、鳥の海では継続的に出現しているが、個体数は少ない。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 干潟周辺から水深30mの砂泥底に生息する。日本では三陸海岸以南に分布するとされていたが、2014年にむつ市の大湊湾で確認された。宮城県では、震災前は万石浦や鳥の海に生息していたが、それほど多くはなかった。震災後は、万石浦、松島湾、蒲生干潟、鳥の海などで少数が確認されている。最近、志津川湾や坂元川河口でも見つかっている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長5mmの長い円筒形をした巻貝。殻は白色半透明で光沢がある。生きている時は薄い殻皮でおおわれている。殻上部の巻きは三角錐状になる。近似種のマツシマコメツブは全体がもっと太くて短く、殻上部の巻きが低く目立たない。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(内湾の砂泥底)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男)

マツシマコメツブ

Decorifer matusimanus

頭楯目
クダタマガイ科

準絶滅危惧 (NT)

2016 DD 環境省 -

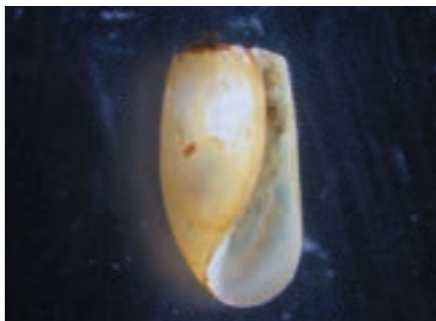
■**選定理由** 宮城県では、コメツブガイよりも記録が少なかったが、震災後には複数箇所で記録されている。しかし、生息場所が限られており、個体数も少なく、希少である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 干潟周辺から水深30mの砂泥底に生息する。三陸以南に分布。宮城県では、震災前は松島湾の古い記録と鳥の海で確認されただけであった。震災後は志津川湾の水戸辺川河口、万石浦、松島湾の数力所、広浦などで確認された。また、最近では長浜海岸と蒲生干潟や鳥の海で確認されている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長3mmほどの巻貝。殻は円筒形、色は白色であるが、生きている時は薄い黄褐色の殻皮でおおわれている。近似種のコメツブガイは、殻上部の巻きが三角錐状に高くなる。しかし、コメツブガイの殻上部の巻きが欠けたものを間違えることがあるので注意が必要。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(内湾の砂泥底)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男)

無脊椎動物の

無脊椎動物の

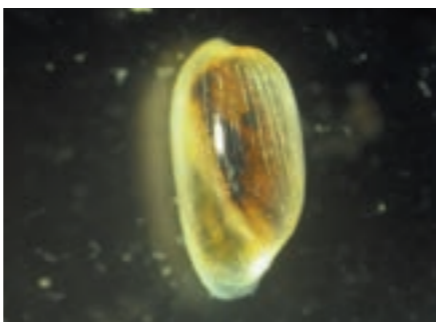
カミスジカイコガイダマシ

Cylichnatys yamakawai

頭楯目
ブドウガイ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016
-
環境省
VU



(撮影：鈴木 孝男)

■**選定理由** 震災後になって初めて生息が確認されたものの、分布は限定的であり、個体数も極めて少ない。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道南部から九州にかけて、また、朝鮮半島や中国大陸に生息するが希少であり、記録が少ない。内湾奥部の干潟から潮下帯の砂泥底表層を匍匐する。震災後、宮城県では、2012年に万石浦で少数が確認された。また、近年東名運河や松島湾の朴島でも見つかっているが稀である。2021年以降では2023年に長浜海岸で確認されたのみである。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長8mmほどの巻貝。殻は薄く、光沢があり、半透明白色。そのため、黄褐色に暗色斑のある軟体部が透けて見える。殻頂はわずかに窪む。殻表には弱い螺溝がある。軟体部は黄褐色。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(内湾の泥底～砂泥底)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

■**参考文献** 多留 2024

(執筆：海岸動物分科会)

ヤミヨキセワタ

Melanochlamys fukudai

頭楯目
カノコキセワタガイ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
-
環境省
VU



(撮影：鈴木 孝男)

■**選定理由** 鳥の海には安定して出現していたが、近年減少傾向にある。他には数地点で少数が見つかる程度であり、希少である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 全国的に分布するが産地は多くない。内湾奥部の砂泥質干潟の潮間帯上部から中部にかけて、表層近くを潜行あるいは匍匐する。宮城県では、鳥の海で比較的多く見つかっているが、他では松島湾、蒲生干潟など数力所で散見されるのみであった。最近では雄勝湾、松島湾の波津々浦、鳥の海、蒲生干潟で確認されている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 体長1cmほどの巻貝。殻は小さく、軟体部の中に埋もれているため、黒紫色のナメクジのように見える。貝類や多毛類を捕食する。エソキセワタやタソガレキセワタと異なり、体全体が一様に黒紫色で、体前方の正中線に濃色の縦帯がある。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 堤防建設や護岸工事などに伴う生息場所(砂泥質の干潟)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

■**特記事項** 2014年に新種として記載された。

■**参考文献** Cooke et. al. 2014

(執筆：海岸動物分科会)

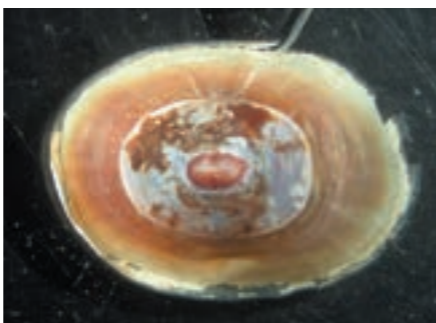
キタノカラマツガイ

Siphonacmea oblongata

コウダカカラマツ目
コウダカカラマツ科

情報不足 (DD)

2016
要注目種
環境省
NT



(撮影：鈴木 孝男)

■**選定理由** 全国的に生息情報が限られている種であり、宮城県内での観察例も少ない。宮城県が分布の南限であるが、情報が不足している。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 日本では、志津川湾からオホーツク海にかけて分布し、水深20mまでのアマモに付着して生息する、寒流系では唯一のカラマツガイ類。松島湾寒風沢島での記録は珍しい。志津川湾では潮下帯のスゲアマモの葉上に付着していたものが採集されている。震災後は未記録のままである。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長5mmほどの長だ円形をした笠型の貝。殻の表面は平滑で弱い成長線が見られるのみである。殻の色は薄い褐色。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(潮下帯のアマモ場)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

■**保護保全上の留意点** アマモ場の保全。

(執筆：海岸動物分科会)

ヨコイトカケギリ

Cingulina cingulata

トウガタガイ目
トウガタガイ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
DD
環境省
-



(撮影：多留 聖典)

■**選定理由** 震災後に志津川湾や松島湾の数力所において少数の生息が確認されたのみであり、生息地が限られており、希少である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道南部から、九州までに分布し、潮間帯岩礁間のタイドプールの砂泥底に生息するとされる。宮城県では、震災前に志津川湾での記録がある。震災後は、志津川湾や松島湾の数力所において確認されている。最近では志津川湾の細浦、折立海岸、松原海岸、また東松島の長浜海岸で少数が確認されている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長1cm弱の巻貝。殻は細長い円筒形で螺塔(貝殻の巻の一番下は体層というが、それよりも上の部分のこと)が著しく高い。色は白色で光沢があり、やや厚質。環形動物のミズヒキゴカイ類の体液を吸うとされている。良く似たヒガタヨコイトカケギリとは、生息場所が異なり、触角が細く、殻の螺溝が狭く浅いことから区別される。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(汽水域の干潟)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

(執筆：海岸動物分科会)

ヒガタヨコイトカケギリ

Cingulina cf. cingulata

トウガタガイ目
トウガタガイ科

情報不足 (DD)

2016
DD
環境省
DD



(撮影：多留 聖典、撮影地：市川市)

■**選定理由** 宮城県では震災前後において、数例の生息記録しか無く、情報不足である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 陸奥湾から九州までに分布し、河口汽水域下流部から内湾にかけての干潟で、砂泥底～泥底の表層に生息する。宮城県では、震災前は折立海岸での記録のみ。震災後は松島湾の扇浜で2017年に、櫃ヶ浦で2025年に確認されたのみ。福島県の松川浦では2022、2023、2025年に確認されている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長1cm弱の巻貝。殻は細長い円筒形で、色は白色。環形動物や貝類に寄生して体液を吸うと考えられている。砂底域や岩礁の間隙に生息するヨコイトカケギリと殻の形態が良く似ているが、本種は内湾や河口の干潟の砂泥底に生息し、螺溝が深く、触角が太い。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(汽水域の干潟)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

(執筆：海岸動物分科会)

シゲヤスイトカケギリ

Pyrgulina shigeyasui

トウガタガイ目
トウガタガイ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016
VU
環境省
NT



(撮影：鈴木 孝男)

■**選定理由** 震災前後を通じて限られた場所で少数個体が見つかるだけであり、希少である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 淡水の影響が強い、内湾や河口部の干潟の泥底中に埋もれて生息する。生貝が見つかることは少ない。ゴカイ類に寄生しているようであるが、詳しい生態は分かっていない。宮城県では、震災前、万石浦(2003年)と鳥の海(2000年)での記録があった。震災後は万石浦、松島湾の櫃ヶ浦、東名運河で見つかったものが希少である。2020年以降の記録がない。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長7mmの巻貝。細長い円錐形で、殻は白色。軟体部の地色は灰白色。よく似ているカゴメイトカケギリは軟体部の色が赤色(本種の色彩変異とする見解もある)を呈する。トウガタガイ科には他にも似ている種があるので、同定には注意を要する。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(汽水域の干潟)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

(執筆：海岸動物分科会)

ヌカルミクチキレ

"*Sayella*" sp.

トウガタガイ目
トウガタガイ科

情報不足 (DD)

2016
DD

環境省
NT

■**選定理由** 未記載種であり、国内でも数力所で記録されているだけである。宮城県では南三陸沿岸での記録があり、青森県でも出現していることから、宮城県で生息している可能性があるものの、情報不足である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 河口部汽水域の干潟の泥底中に生息する。近年発見され、東京都、千葉県、愛知県、三重県、山口県、宮崎県で生息が確認されている希少種。宮城県では、2009年に南三陸の折立海岸で確認されたのみ。青森県の陸奥湾芦崎干潟や鷹架沼で記録されていることから、宮城県内にも生息している可能性がある。震災後の記録はない。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長3mmの巻貝。殻は紡錘形、色は茶色で半透明である。ゴカイ類に寄生していると考えられている。紡錘型をしており、同じような場所に生息するカワグチツボに似るが、殻が小さく細いことと、殻の表面が平滑で光沢が強いことから区別できる。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(汽水域の干潟)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：多留 聖典)

ウスコミミガイ

Laemodonta exaratoides

オカミミガイ目
オカミミガイ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016
VU

環境省
NT

■**選定理由** 生息場所は潮上帯の転石地であるが、こうした環境は限られている。宮城県では生息場所が限られており、個体数も極めて少ない。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 内湾や外洋に面した潮上帯の転石地で、波しぶきがかかるころの転石下に生息する。これまで三陸海岸以南に生息するとされていたが、県内での記録はなかった。2009年以降に松島湾や万石浦に生息していることが確認された。これらの場所では震災後も生息が確認されているが、数は少なく、希少である。2021年以降は松島湾内の数力所などや塩釜北浜海岸の転石帯で確認されているが極めて局所的である。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長5mmの卵形をした巻貝。殻の色は薄い茶色であり、転石のすき間の土の上では、目立たない。殻横断面が楕円形となるクリイロコミミガイと異なり、殻は横断面がほぼ円形をなし縦肋がなく、殻表に毛状突起がある。殻頂も浸食されないものが多い。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 生息できる潮位の幅が極めて狭い。堤防建設や護岸工事などに伴う生息場所(比較的地高の高い潮上帯の転石や打ち上げ物の下)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。

■**保護保全上の留意点** 転石帯エコトーンの保全。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男)

ナギサノシタタリ

Microtralia acteocinoides

オカミミガイ目
オカミミガイ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016
VU

環境省
-

■**選定理由** 宮城県では震災前後を通じて極めて限られた場所に少数個体が見つかるだけであり、極めて希少である。個体数は極めて少ない。日本固有種。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 内湾から外洋にかけての波しぶきがかかるような転石帯で、転石の下や打ち上げ物の中に生息する。内湾奥のヨシ原の周辺で見つかることもある。北海道南部以南に分布するとされている。宮城県ではほとんど記録がなかったが、震災前には、2008年以降に志津川湾、松島湾、万石浦で生息していることが確認された。震災後は舞根湾や万石浦で極めて少数が確認されたのみであった。その後2022年以降には、気仙沼市の舞根湾やその他の数力所、志津川湾、大室漁港などにおいて、転石帯で確認された。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長5mmの米粒形をした白色の巻貝。殻質は薄く半透明。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 生息できる潮位の幅が極めて狭い。堤防建設や護岸工事などに伴う生息場所(比較的地高の高い潮上帯の転石や打ち上げ物の下)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。

■**保護保全上の留意点** 転石帯エコトーンの保全。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男)

シコロエガイ

Porterius dalli

フネガイ目
シコロエガイ科

情報不足 (DD)

2016
DD

環境省
-

■**選定理由** 宮城県での生息情報は極めて限られている。最近になって志津川湾の松原海岸で記録されたが、情報不足である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道南部～瀬戸内海の潮間帯の岩礁に足糸で付着するというが、最近の記録は極めて少ないようだ。外洋海水がよく入り、かつ淡水影響のあるところに生息する。宮城県では、志津川湾の折立川河口で震災前の記録があるほか、震災後は志津川湾の松原海岸で2017、2019、2023、2024年に記録されているのみである。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長3.5cmほどの、前後に長い楕円形をした二枚貝で、前・後端は丸くなる。殻の膨らみは弱く、厚い殻皮を持つ。放射状の筋がある。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 堤防建設や護岸工事などに伴う生息場所(岩礁域の潮間帯)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：阿部 拓三)

ガタツキ

Arthritica cf. reikoae

ウロコガイ目
チリハギ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
-

環境省
DD

■**選定理由** 宮城県では数力所で確認されているが、個体数は少なく、希少である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 陸奥湾以南、西表島までの河口の汽水域に生息する。干潟の砂泥底表層近くで見られる。宮城県では、震災前に蒲生干潟や鳥の海で生息が確認されていた。震災後は舞根湾、蒲生干潟、井土東谷地、鳥の海での記録がある。2021年以降では東松島の長浜海岸、蒲生干潟、広浦、鳥の海のほか、坂元川河口でも確認された。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長1.5mmほどの円形に近い二枚貝。卵胎生で体内に稚貝を保持することがある。タイプ産地は東京湾だが、地域ごとに殻形態に差があるとされ、直達発生であることから地域ごとに別種である可能性がある。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 堤防建設や護岸工事などに伴う生息場所(汽水域の泥底)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。

■**特記事項** 2010年に新種として記載された微小な二枚貝。

■**参考文献** Suzuki & Kosuge 2010

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男)

スジホシムシモドキヤドリガイ

Nipponomysella subtruncata

ウロコガイ目
チリハギ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016
-

環境省
NT

■**選定理由** 本種の分布は西日本が中心であり、東日本での記録は非常に限られている。日本固有種。また宿主であるスジホシムシモドキも希少な存在であることから希少性は高い。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 浜名湖が北限とされ、九州までに分布するとされていた。しかし、近年東北地方では青森県、佐渡島、宮城県で記録された。宮城県では2022年、2024年に万石浦渡波の水路部の干潟で確認された。宮城県では他の場所での記録はない。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長5mmほどの二枚貝。内湾の干潟～潮下帯の砂泥中に深く潜って生息するスジホシムシモドキの体表に付着する。スジホシムシには着生しない。殻は長卵形で白色半透明、膨らみは弱い。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 宿主(付着基質)となるレッドリスト種のスジホシムシモドキの減少が生存にとっての脅威となる。

■**保護保全上の留意点** 宿主個体群の保全。

■**参考文献** 阿部ら 2023

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：阿部 博和)

マゴコロガイ

Peregrinamor ohshimai

ウロコガイ目
チリハギ科

情報不足 (DD)

2016
- 環境省
NT



(撮影：阿部 拓三)

■**選定理由** 全国的に生息が確認されている地点は極めて少ない。これまでは主に西日本で記録されていた。宮城県や岩手県で2024年に初めて記録された希少な存在であるが、情報が不足している。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 分布は東京湾以西、九州までとされていたが、東京湾では最近の記録がない。これまでの最北の採集記録は茨城県鹿島灘の潮下帯であった(ナルトアナジャコに寄生)。宮城県では、2024年5月に、志津川湾の八幡川河口干潟でヨコヤアナジャコに着生している個体が見つかったのが初記録であり、北限の更新となった。しかし、2024年8月には岩手県広田湾の小友浦でも確認された。また、2025年には志津川湾の他の干潟でも見出された。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長10mm。内湾の砂泥底に生息するアナジャコ類の胸部腹面に足糸で着生する。殻は薄質で半透明、腹側から見るとハート型。殻頂は前端に位置する。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 宿主(付着基質)となるアナジャコ類の減少が生存にとっての脅威となる。

■**保護保全上の留意点** 宿主個体群の保全。

■**参考文献** 千葉ら 2024、菅 2025

(執筆：海岸動物分科会)

マテガイ

Solen strictus

マテガイ目
マテガイ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
NT 環境省
-



(撮影：鈴木 孝男)

■**選定理由** 震災後は各地で比較的良好に出現するが、南三陸沿岸では稀である。仙台湾沿岸の干潟でも毎年出現するわけではなく、幼生加入はいつもあるわけではないようである。全体として減少傾向にある。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 全国的に分布し、干潟の沖側の砂底に潜って生息する。外海に面した広い前浜干潟に多い。宮城県では、震災前は、万石浦や松島湾の他、蒲生干潟や鳥の海での記録もあった。震災後には、数は多くはないものの南三陸から仙台湾にかけての各地で確認されているが不安定である。最近では舞根湾、志津川湾、雄勝湾、万石浦、松島湾のほか、蒲生干潟などで確認されている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長10cm以上になる二枚貝で食用となる。殻は非常に細長い筒形で曲がらない。足を砂中に入れ、素早く潜ることができる。水管は輪が重なったようになっていて、刺激を受けると簡単に切れてしまう。近似種のエゾマテガイは殻が緩く曲がる。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(内湾の泥底～砂泥底)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

(執筆：海岸動物分科会)

ユウシオガイ

Jitlada culter

ドブシジミ目
ニッコウガイ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
NT 環境省
NT



(撮影：鈴木 孝男)

■**選定理由** 近年の泥質干潟の減少により、全国的に個体数が少なくなっている。震災後は、松島湾の幾つかの干潟や、蒲生干潟、広浦、鳥の海などで確認されているが、生息地は限られており、個体数は少ない。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 内湾奥のやや泥質の干潟に生息し、陸奥湾以南に分布する。宮城県では、近年、松島湾、蒲生干潟、広浦、鳥の海など各地で確認されているが、生息場所は限られており、少ない。最近では舞根湾、志津川湾の細浦、雄勝湾、東松島の長浜海岸、松島湾、蒲生干潟、鳥の海、長面浦、坂元川河口などで少数が確認されている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長1-2cmの卵形の二枚貝。殻は薄く透明感があり、殻の色は白色、橙色から薄桃色まで変異がある。よく似ているサビシラトリやヒメシラトリよりも殻の後端が直線的であり、やや突出する。より南方系のトガリユウシオガイはすべて薄桃色で、後端が強く尖り、殻長部の輪肋が強い。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(内湾の泥底～砂泥底)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

(執筆：海岸動物分科会)

サクラガイ

Nitidotellina hokkaidoensis

ドブシジミ目
ニッコウガイ科

情報不足 (DD)

2016
NT 環境省
NT



(撮影：鈴木 孝男)

■**選定理由** 全国的に生貝が見られるところは少なくなっており、海岸に貝殻が打上げられるようなところも激減している。宮城県でもまれに、殻が見られることもあるため生息しているようではあるが情報が限られている。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 内湾の干潟の沖側から水深30mの砂泥底～泥底に生息する。主な生息場所は潮下帯であり、干潟周辺ではアマモ場の泥底に多い。宮城県では、南三陸沿岸や女川湾からの記録があったが、多くはない。万石浦のアサリ漁場でも時折見られることがあった。震災後は蒲生干潟(2020、2021年)と雄勝湾(2023、2024年)での報告があるのみである。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長20mmの二枚貝。殻は長い卵形で、膨らみは弱く扁平である。殻の色は桃色であるが、まれに白色の個体も見られる。長い水管を持ち、底土中にやや深く潜っている。複数の近似の未詳種があり、同定には注意が必要。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(内湾の泥底～砂泥底)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

(執筆：海岸動物分科会)

サビシラトリ

Macoma contabulata

ドブシジミ目
ニッコウガイ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
- 環境省
NT



(撮影：鈴木 孝男)

■**選定理由** 宮城県では、震災後も各地で見られるが、震災前に比べてかなりの程度減少しており、希少である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 内湾奥のやや泥質の干潟に深く埋もれて生息する。日本では北海道から九州までに分布する。宮城県では、近年、松島湾、蒲生干潟、広浦、鳥の海など各地で確認されているが、生息場所は限られており、少ない。最近では舞根湾、志津川湾の細浦、雄勝湾、東松島の長浜海岸、松島湾、蒲生干潟、鳥の海、坂元川河口などで確認されている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 最大で殻長5cmほどになる二枚貝。殻はやや薄く、膨らみは弱い。形はほぼ円形で後端が強く突出し、裁断状になる。殻の色は白色で緑褐色の殻皮で覆われるが、はがれている部分が多い。殻表は白い粉が吹いたようであり光沢がない。干潟面に橙色の水管を伸ばし吸引採餌する。ヒメシラトリと比較して殻高が高く、後端の突出が大きい。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(内湾の汽水域泥底)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

(執筆：海岸動物分科会)

オオノガイ

Mya japonica

オオノガイ目
オオノガイ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
NT 環境省
NT



(撮影：鈴木 孝男)

■**選定理由** 宮城県では生息する干潟が比較的多い方であるが、普通に見られるほどではなく、幾つかの場所では減少傾向にある。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 日本では北海道から九州にかけて分布する。内湾奥部の砂泥底から泥底に深く潜って生息する。宮城県では、万石浦、松島湾、仙台湾岸の干潟に生息する。県内のアサリ漁場には比較的に普通に見られる。震災後に分布を広げたようだが多くはない。最近では舞根湾、志津川湾の数力所、雄勝湾、万石浦、蒲生干潟などで確認されている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長10cmに達する、大型で長卵形をした二枚貝で、後端は細くなり、太く長い水管を出す。殻は基本的には白色であるが、茶褐色の不規則な斑紋がある個体も多い。殻表は緑灰色の薄い殻皮でおおわれる。水管を食用にする地域もある。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(内湾の泥底～砂泥底)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

■**特記事項** 宮城県では、オオネと呼ばれ、食材として利用されることもある。

(執筆：海岸動物分科会)

ニオガイ

Barnea fragilis

オオノガイ目
ニオガイ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
NT

環境省
-

■**選定理由** 穿孔して生息するための生息基盤である泥岩が、沿岸域の整備に関する工事等で失われてきていることから、個体数は減少傾向にあり、希少である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 日本では北海道から九州にかけての潮間帯から水深20mあたりで、泥岩に穿孔して生息する。宮城県では、震災前は松島湾で記録されていた。震災後は松島湾の浦戸諸島や宮戸島、あるいは南三陸沿岸でも生息が確認されているが、多くはない。最近では松島湾の西の浜でも確認された。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長3cmほど。殻は薄く、全体的にふくらんでいる。殻は完全にしまらず、前後が開いている。泥岩に丸い穴を開け、その中に潜んでいる。しかし、干潟に散在する泥岩では、底土中に埋もれている部分でのみ、生貝が観察される。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 護岸工事や埋め立てなどに伴う穿孔基質(内湾の泥岩)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男)

ネムグリガイ

Zachsia zenkewitschi

オオノガイ目
フナクイムシ科

情報不足 (DD)

2016
DD

環境省
-

■**選定理由** アマモ類の地下茎に穿孔して暮らしている。宮城県では志津川湾での記録があるが、限られた情報しかなく、情報不足である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 宮城県から瀬戸内海、沖縄、日本海の内湾等に生息する。海底から露出したアマモ類の地下茎に穿孔して生息する。県内では震災前、志津川湾のタチアマモ場で比較的高密度で生息していた。また、石巻湾での報告もあった。震災後はしばらく見つかっていなかったが2018年に志津川湾の数カ所のアマモ場で確認された。また、最近では志津川湾の折立海岸と泊漁港外側で確認されている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 二枚貝であるが、殻に対して軟体部が大きく細長いため、ゴカイ類のように見える。軟体部は細長く、半透明なミルク色。後端に分岐した水管を持つ。極端な性的二形を示し、オスは矮小でメスに寄生する。アマモやタチアマモの地下茎に穿孔し、石灰質で裏打ちされた棲管をつくって生息する。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 気候変動や植食圧の増大によって穿孔基質となるアマモ類が枯死したり減少することが生存にとっての脅威となる。

■**保護保全上の留意点** アマモ場の保全。

■**特記事項** 生息基質の特異性や矮雄の存在など、分類学的・生態学的な価値が高い。

■**参考文献** Haga 2006

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：阿部 拓三)

オニアサリ

Leukoma jedoensis

マルスダレガイ目
マルスダレガイ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
DD

環境省
-

■**選定理由** 震災後は幾つかの地点で確認されている。しかし個体数は少なく、希少である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 内湾の干潟から水深5mの小石混じりの砂泥底に生息する。北海道南西部以南に分布する。宮城県では、震災後には志津川湾の細浦、折立海岸、松原海岸で確認された。また、鳥の海や気仙沼大島での記録もある。最近では上記の他、志津川湾の水戸辺川河口でも確認されている。仙台湾沿岸域ではほとんど見られない。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長4cmほどの卵形をした二枚貝。殻は厚く、良く膨らむ。殻の表面にははっきりした放射状の筋と、少し細かい横方向の成長線がある。光沢は無い。殻の地色は汚れた黄褐色で、褐色の斑紋のある個体も多い。潮干狩りではアサリと混獲されるが、殻表面の形状が異なることから区別できる。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(内湾の泥底～砂泥底)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男)

ハマグリ

Meretrix lusoria

マルスダレガイ目
マルスダレガイ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016
VU

環境省
VU

■**選定理由** 近年、全国的に減少が著しい。宮城県では震災後に仙台湾以南の各地で見られるようになってきている。しかし、個体群としては安定しておらず、少数がたまに見つかる程度なので希少である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 陸奥湾以南の内湾の潮間帯下部から水深20mの砂泥底に生息する。1960年代まではアサリと同様に潮干狩の対象種になるほど、多く生息していた。宮城県では、震災後、万石浦、蒲生干潟、広浦、鳥の海、牛橋河口あるいは松島湾の干潟でも少数が確認されているが、不安定である。

■**形態ならびに近似種との区別点** 殻長8cmを越える大型の二枚貝。殻は丸みを帯びた三角形で、表面に光沢があり、美しい貝で個体による色彩変異が多い。チョウセンハマグリは腹縁がより直線的。シナハマグリは背縁が曲線的だが本種は直線的。ただし形態で区別困難な外来種が東京湾から知られている。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(内湾の砂泥底)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。また、本種を漁獲しているところでは、適切な資源管理が必要である。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男)

オイワケゴカイ

Namanereis littoralis species group

(サシバゴカイ類)
ゴカイ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
-

環境省
-

■**選定理由** 生息場所が、ゴカイ類には珍しく、潮間帯上部であることなど特殊な上、個体数が少なく、希少であることが判明したため。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 潮間帯上部の転石の下や漂着物の下に生息する。日本では、北海道から本州沿岸に分布する。宮城県では南三陸沿岸域から仙台湾沿岸まで各地で見られるが多くはない。近年では志津川湾の細浦、伊里前川河口、折立海岸、また、万石浦や松島湾の波津々浦、櫃ヶ浦、仙台湾の広浦などで確認されている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 体長1-5cm、幅1-2mmと細い。いぼ足が短く、尾部がより細い。体前部に3対の短い感触糸(触角)があり、前方の眼は横長でソラメ型である。口吻に顎はあるが、顎片(ヒゲ状のもの)は無い。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 生息できる潮位の幅が極めて狭い。堤防建設や護岸工事などに伴う生息場所(潮間帯上部の転石や打ち上げ物の下)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。

■**保護保全上の留意点** 転石帯エコトーンの保全。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：阿部 博和)

ジャムシ

Alitta dyamusii

(サシバゴカイ類)
ゴカイ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
要注目種

環境省
-

■**選定理由** 宮城県が分布の南限であり、これまで南三陸沿岸域の数カ所で出現しているが、個体数は少なく、希少である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 北方系の種であり、日本では北海道から三陸沿岸域に生息する。主な生息域は潮下帯の砂泥底。宮城県では、震災前に鳴瀬川河口や志津川湾の細浦で記録されていた。震災後は舞根湾や志津川湾など南三陸沿岸の数カ所で生息が確認されている。最近では舞根湾や志津川湾の細浦、折立海岸、水戸辺川河口、松原海岸、水尻川河口などで確認されている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 体長50cmに達する大型のゴカイ科環形動物で、5~6月の夜間、水面に浮上して生殖群泳を行なう。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(潮下帯の砂泥底)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。本種のような大型の捕食性ベントスが個体群を維持するためには、一定以上の広さを持つ生息場所が健全に維持される必要がある。北方性種であることから気候変動の影響も受けやすい。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：阿部 拓三)

イトメ

Tylorrhynchus osawai

(サシバゴカイ類)
ゴカイ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
NT

環境省
NT*

■**選定理由** 河川河口域や潟湖干潟の汽水域泥底を探せば比較的普通に見られた種であるが、そのような生息環境が少なくなってきたり、分布は極めて限られる。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 淡水の影響が強い汽水域に生息する。ヨシ原脇の泥底でよく見られることから、ヨシ原に依存した生活史を持っている可能性がある。宮城県では、震災後においても、北上川(追波川)のヨシ原、蒲生干潟、井土浦、鳥の海、津谷川河口、貞山運河などの汽水域での生息が記録されている。最近では志津川湾の細浦や折立海岸、松島湾の櫃ヶ浦、福浦島、仙台湾の蒲生干潟、井土東谷地などで確認されている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 体長10cmに達するゴカイ科の環形動物で、年に一回11~12月の夜間に生殖群泳する。干潟に多産するカワゴカイ属とよく似ているが、口吻上に黒い顎片ではなくイボ状突起があることで区別ができる。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 河口堰建設や護岸工事などに伴う生息場所(低塩分の汽水域にある泥底、ヨシ原)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。

■**保護保全上の留意点** 汽水域の環境維持。

(執筆: 海岸動物分科会)



(撮影: 阿部 博和)

ツバサゴカイ

Chaetopterus cautus

(ツバサゴカイ類)
ツバサゴカイ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016
NT

環境省
EN*

■**選定理由** 宮城県では、震災前後を通じ、万石浦と松島湾など、少数の干潟での生息が確認されているだけである。生息好適地が限られており、個体数も少なく、希少である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 海産種である本種は、潮間帯の干潟から水深5mの砂泥底に埋もれて生息する。青森県の大湊湾が北限と考えられる。宮城県では、震災前は万石浦と松島湾で記録されていた。震災後は上記に加えて、舞根湾、長浜海岸、雄勝湾などの数カ所で生息が確認されているのみである。

■**形態ならびに近似種との区別点** 体長約30cm。砂泥底中に埋れし、羊皮紙のような丈夫な膜でできたU字型の棲管中に棲んでいる。地中の棲管は太く、直径2cmになる。本体には鳥の翼のような足があり、体色は白っぽく柔らかい。棲管の先端はストロー状になり両端が底土に出ている。棲管内に共生性のカニ類が棲みついていることがある。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 規模の大きな干潟で、海水交換の良いところが生息域であることから、護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(高塩分の砂泥底)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

■**特記事項** 棲管内に棲みこむ生物がいるので注意が必要。

(執筆: 海岸動物分科会)



(撮影: 阿部 拓三、棲管写真は鈴木 孝男)

ノトマス属の一種

Notomastus sp.

(イトゴカイ類)
イトゴカイ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
-

環境省
-

■**選定理由** 宮城県では比較的産地が多いものの、低塩分の汽水域が失われてきていることから、全体として減少傾向にあり、希少である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 淡水の影響のある汽水域の潮間帯砂泥底中に生息する。日本各地の低塩分の汽水域に分布する。宮城県では、震災後に、南三陸沿岸、北上川河口、万石浦、松島湾、貞山運河、蒲生干潟、井土浦、鳥の海といった各地の干潟で生息が確認されているのは本種*Notomastus* sp.であり、シダレイトゴカイではない。最近では舞根湾、志津川湾の数カ所、万石浦、松島湾の波津々浦、長浜海岸、七ヶ浜土浜、また、蒲生干潟、井土東谷地や牛橋河口などで確認されている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 体長数cmに達するイトゴカイ科の環形動物で、生時の体色は赤く、ミミズのようなものである。本属の種は胸部の剛毛が針状剛毛のみである。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 河口堰建設や護岸工事などに伴う生息場所(低塩分の汽水域にある泥底~砂泥底)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。

■**保護保全上の留意点** 汽水域の環境維持。

(執筆: 海岸動物分科会)



(撮影: 鈴木 孝男)

カンテンフサゴカイ

Amaeana sp.

(フサゴカイ類)
フサゴカイ科

情報不足 (DD)

2016
-

環境省
-

■**選定理由** 近年万石浦と松原海岸で確認されたが、全国的に珍しい種であり、宮城県では情報不足である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 近年いくらか生息地が知られるようになってきたが、確認数は少ない。内湾奥部潮間帯の干潟に生息する。宮城県では、これまで万石浦(2015年)と志津川湾の松原海岸(2019年)で記録があるのみで、希少である。福島県の松川浦では2015年と2017年に記録されている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 体長2cmほどの環形動物で、柔らかい体の先端に口触手が密生している。また、口触手の先端は膨らむ。尾部には黒褐色の横帯が連続し縞模様状になる。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(内湾の泥底~砂泥底)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

(執筆: 海岸動物分科会)



(撮影: 田中 正敦)

ニホンウミイサゴムシ

Amphictene japonica

(フサゴカイ類)
ウミイサゴムシ科

情報不足 (DD)

2016
-

環境省
-

■**選定理由** 全国的にも稀な種である。宮城県でも最近の1カ所のみでの記録しかなく、情報不足である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 発見例が少なく、分布などはよくわかっていない。これまでに三浦半島と東京湾での最近の記録がある。宮城県では、これまで観察例はなかったが、2018、19年に松島湾の寒風沢島で比較的多く生育するのが観察された。2020年以降、寒風沢島での調査はなされていないので、最近の状況は不明である。

■**形態ならびに近似種との区別点** 体長7-8cmほどの環形動物。細かい砂粒をつけた角笛のような棲管の中に入っており、頭部を下にして砂泥底中に潜っている。棲管は20cmほどになる。本種は時々尻側を底質表面上に突き出し、排水を行う。頭頂盤の後縁に突起が配列し鋸歯状になる。東京湾から近似の別種(*A. jianqingi*)が見つかっており、過去の記録も精査が必要。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(内湾の泥底~砂泥底)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

■**参考文献** Nishi et. al. 2014

(執筆: 海岸動物分科会)



(撮影: 鈴木 孝男)

ユムシ

Urechis unicinctus

(ユムシ類)
ユムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
VU

環境省
NT*

■**選定理由** かつては釣り餌として漁獲されるほど多かったようだが、近年は全国的に激減した。宮城県の干潟では震災前後を通じて、まれに記録される程度であり、個体数は限られる。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 潮間帯から浅海の砂泥底にU字型の巣穴を掘って暮している。主な生息場所は潮下帯である。宮城県では、2008年以降、鳥の海と松島湾での記録があるが、極めて少ない。震災後は万石浦で遊泳個体が見つかった他、浦戸諸島の寒風沢島、蒲生干潟で少数が記録された。また、2021年に長浜海岸で、2023年に坂元川河口および志津川湾の袖浜海水浴場で確認された。

■**形態ならびに近似種との区別点** 体長は約10cm。体はのっぺりとした円筒形で伸び縮みする。体色は乳白色。前端部に吻があるが小さくあまり目立たない。肛門の周囲に輪状に棘が生えている。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(内湾の泥底~砂泥底)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

■**特記事項** 以前は独立した動物門であったが、現在はイトゴカイ科に近縁の環形動物と考えられている。韓国や中国では食用にされる。

(執筆: 海岸動物分科会)



(撮影: 鈴木 孝男)

スジホシムシ

Sipunculus nudus

(ホシムシ類)
スジホシムシ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016
-
環境省
NT*



(撮影：鈴木 孝男)

■**選定理由** 震災前は記録がなく、震災後、2013、2014年に松島湾の波津々浦で確認されたのみ。全国各地で減少が著しく、希少である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 陸奥湾以南に生息する暖水性の汎存種とされているが複数種が含まれる可能性がある。潮間帯から浅海域の砂泥中に生息する。近縁のスジホシムシモドキと同様、県内では稀に見つかることがある。しかし、スジホシムシモドキよりも珍しい。これまで松島湾での記録がある(2013、2014年)のみである。

■**形態ならびに近似種との区別点** 体長は20cmに達する。細長いソーセージのような環形動物。体表は乳白色～淡褐色で光沢があり、全面に格子状の溝が走る。陥入物は短く3cmまで。近似のスジホシムシモドキは体表の光沢が弱く、細い横筋が見られるのみである。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 規模が大きく海水交換の良い干潟や浅海域が生息域であることから、護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(高塩分の砂泥底)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

■**特記事項** かつて釣り餌として大量に漁獲されていた。

(執筆：海岸動物分科会)

スジホシムシモドキ

Siphonosoma cumanense

(ホシムシ類)
スジホシムシモドキ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016
NT
環境省
NT*



(撮影：阿部 博和)

■**選定理由** 震災前後を通じて、限られた記録しかなく、個体数も非常に少ないことから、極めて希少である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 暖水性の広域分布種であり、高塩分の潮間帯から浅海域の砂泥底中に埋もれて生息する。アマモ場周辺に多く見られるほか、広い干潟の潮通しの良い砂底～砂泥底で見られるが、生息場所は限定される。宮城県では、震災前は舞根湾、万石浦、松島湾で記録されていた。震災後は志津川湾や松島湾で少数が確認された。近年は志津川湾で少し見られる程度。2022年と2024年には万石浦(水路部)で出現した。

■**形態ならびに近似種との区別点** 体長は10-15cmほどであるが、40cmに達する個体もいる。体色は灰褐色～褐色で、刺激を与えると体がくびれ、自ら切れてしまう。良く似たスジホシムシとは、体表の光沢が弱く、細い横筋のみが見られることで区別できる。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 規模が大きく海水交換の良い干潟が生息域であることから、護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(高塩分の砂泥底)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

(執筆：海岸動物分科会)

ウミカニムシ

Halobisium orientale japonicum

カニムシ目
コケカニムシ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016
DD
環境省
-



(撮影：鈴木 孝男)

■**選定理由** 全国的にも生息情報はほとんど無く、宮城県でも生息場所が限られ、個体数も少ない。近年生息情報が得られるようになり宮城県での生息は確認できているものの希少な存在である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 潮間帯上部の海藻の打上げ物の下などで見られる。これまで北海道や青森県での記録しかなかった。宮城県においては、浦戸諸島の桂島で2009年に、松島湾の櫃ヶ浦で2017年、2021年に、それぞれ1個体が採集された。また、万石浦大浜でも2024年に確認された。櫃ヶ浦では最近継続的に生息が確認できている。しかし、他の生息情報は無い。宮城県が分布の南限である。

■**形態ならびに近似種との区別点** 体長約5mm。体はほぼ円筒形で後方では幅が少し広くなり、背甲、腹部背板などに多数の剛毛がある。外形はサソリに似るが、細長い尾部はない。腹部背板は正中線で左右に2分しないことで同じく海岸性種のイソカニムシと区別できる。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 生息できる潮位の幅が極めて狭い。堤防建設や護岸工事などに伴う生息場所(比較的地高の高い潮上帯の転石や打ち上げ物の下)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。

■**保護保全上の留意点** 転石帯エコトーンの保全。

(執筆：海岸動物分科会)

サンリクドロソコエビ

Grandidierella sanrikuensis

端脚目
ユンボソコエビ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016
-
環境省
DD*



(撮影：鈴木 孝男)

■**選定理由** 宮城県の数力所のみが生息している貴重な存在で、日本ではそれ以外の確認例はない。近年新たな生息地が見つかったが、生息環境が特殊で限られていることから、絶滅が危惧される。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 海水交換のよい汽水域の潮間帯中部から上部の転石下や小礫間に棲孔を掘って生息する。極めて特異な生息環境に依存している。県内の舞根湾、志津川湾(細浦)、万石浦の3カ所で発見され、これを元に2017年に新種記載がなされた。近年、志津川湾の伊里前川河口と折立海岸でも発見された。最近では2022年に舞根湾で確認された他、2024年に万石浦、雄勝湾、塩釜北浜海岸の転石帯で新たに発見された。

■**形態ならびに近似種との区別点** 体長8-10mmほどのヨコエビ類。生時の体色が淡赤褐色から淡桃色で触角が淡紅色を呈する。動きは非常に緩慢である。近似種にオオサカドロソコエビがあり、同定には注意が必要である。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 生息環境が転石下や小礫の隙間であり、生息できる潮位の幅が極めて狭い。このため、堤防建設や護岸工事などに伴う生息場所の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。

■**保護保全上の留意点** 転石帯エコトーンの保全。

■**参考文献** Ariyama & Taru 2017

(執筆：海岸動物分科会)

モリノカマカ

Kamaka morinoi

端脚目
カマカヨコエビ科

情報不足 (DD)

2016
DD
環境省
-



(撮影：鈴木 孝男)

■**選定理由** 震災後に数力所で生息が確認されているがカマカヨコエビ属とされている場合が多く、確実に本種であるとする情報は不足している。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 主に汽水域の干潟に生息するが、淡水域にも見られることもある。宮城県では、2004年までに阿武隈川河口、名取川河口、蒲生干潟において記録されていたが、まれであった。震災後は北上川河口、井土東谷地、貞山運河で確認されている。また、淡水湖である伊豆沼からも見いだされている。近年では2018年に井土東谷地で記録された。

■**形態ならびに近似種との区別点** 体長5mmほどの小型のヨコエビ類。カマカヨコエビの仲間は目が前方に突出しているのが特徴である。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 河口堰建設や護岸工事などに伴う生息場所(低塩分の汽水域にある泥底～砂泥底)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。

■**保護保全上の留意点** 汽水域の環境維持。

■**参考文献** Ariyama 2007

(執筆：海岸動物分科会)

ヒヌマヨコエビ

Jesogammarus hinumensis

端脚目
キタヨコエビ科

情報不足 (DD)

2016
-
環境省
-



(撮影：多留 聖典)

■**選定理由** 宮城県での採集例はあるが少数で限られており、情報不足である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 汽水湖および河口域の落ち葉の下などに生息する。全国的にも産地は限られている。宮城県では、震災前は北上川河口などで記録されていた。震災後は、北上川河口と津谷川河口で2015年に記録された。津谷川河口ではそれ以降も2018年、2020～2023年に、ほぼ淡水状態の新生湿地(代替湿地として造成された水域)で確認されている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 体長は最大20mm程度。体は横に平べったく腰が曲がった形のヨコエビ類である。体色は茶色で、斑紋が見られる。複眼は大きく空豆状。他の同属種は純淡水産。汽水域にはトゲオヨコエビ類が出現するが、本種は尾肢が短く、体側の斑紋が明瞭。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 河口堰建設や護岸工事などに伴う生息場所(低塩分の汽水域や塩性湿地)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。

■**保護保全上の留意点** 汽水域の環境維持。

■**特記事項** 津谷川河口で記録された場所は塩分が少なく、淡水に近い。北上川河口も同様である。

(執筆：海岸動物分科会)

ハマダンゴムシ

Tylos granuriferus

等脚目
ハマダンゴムシ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
DD 環境省

- **選定理由** 宮城県の砂浜で観察されることはあるが、どこにでもいるわけではなく、生息数は多くないようで、希少である。
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 日本各地の砂浜や細かい礫からなる浜の石の下などに生息する。宮城県では、震災前に、蒲生干潟、名取川河口、阿武隈川河口、山元町の海岸において記録されていた。震災後は大谷海岸、気仙沼大島、九九鳴き浜、松島湾などの砂浜で確認されている。最近では九九鳴き浜、志津川湾の細浦、万石浦、浦戸諸島の桂島、蒲生干潟などで確認されている。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長は12mmほどで、白、灰、橙、緑色などの様々な色が混じる体色をしており、きれいである。色彩が砂礫と良く似ているので目につきにくい。夜行性で、浜に打ち上げられた海藻や魚の死骸などを食べている。海岸近くの林にはよく似たオカダンゴムシが生息しているが、ハマダンゴムシでは胸部の体節の両端に底節板があることなどから区別できる。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 防潮堤建設などに伴う生息場所(解放的な砂浜～細礫海岸の潮上帯)の喪失や生息環境の改変、あるいはエコトーンの分断が生存にとっての脅威となる。
- **保護保全上の留意点** 砂浜エコトーンの保全。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：阿部 拓三)

バルスアナジャコ

Upogebia issaeffi

十脚目
アナジャコ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
DD 環境省

- **選定理由** 礫浜が少なくなっているため、生息適地が減少している。宮城県では数力所で生息が確認されているのみで、個体数も少なく、希少である。
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 転石帯や礫浜の石の下などに巣穴を掘って生息する。宮城県では、震災前後において、舞根湾で記録されている他、女川での古い記録がある(1968年)。また、近年になって、三陸海岸に生息していることが確認された。最近では舞根湾、志津川湾の折立海岸や松原海岸で確認されている。
- **形態ならびに近似種との区別点** 体長6cm。ザリガニに似た形をしたアナジャコの仲間。左右相称のハサミを持つが、可動指に比べて不動指が著しく短い。宮城県で見られるアナジャコやヨコヤアナジャコとは、ハサミ部分の突起列の特徴で区別される。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(潮間帯の転石帯や礫まじりの砂泥底)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。
- **参考文献** Sakai 1968

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男、ハサミの写真は内野 敬)

ヨモギホンヤドカリ

Pagurus nigrofascia

十脚目
ホンヤドカリ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
- 環境省
NT*

- **選定理由** 磯の潮下帯が主な生息域であるが、全国的に生息が確認された地点は少ない。宮城県では生息が確認されているものの局所的であり希少である。
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道から九州までの干潟に隣接する転石地の潮間帯～潮下帯に生息する。しかし南日本では夏季に夏眠するため、国内で生息が確認された地点は少ない。宮城県では、震災前後に志津川湾の坂本海岸で記録されている他、震災後は2017、2023～2025年に松原海岸で、2020年に神割崎および水戸辺川河口でそれぞれ生息が確認された。また、舞根湾においては、2019、2021、2022年に確認されている。
- **形態ならびに近似種との区別点** 甲長1.3cm。ヤドカリの仲間でもホンヤドカリ科では第1脚のハサミは右の方が左に比べて大きい。触角がオレンジ色で、歩脚指節基部に黒帯があることで近似種との区別が可能である。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(潮間帯～潮下帯の転石帯)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男)

マメコブシガニ

Pyrhila pisum

十脚目
コブシガニ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
- 環境省

- **選定理由** 宮城県では、万石浦以南の各地の干潟でよく見られる方であるが、年によっては少数しか発見できないところもあり、希少である。
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 青森県大湊湾から東シナ海にかけて分布する。内湾の砂質から砂泥質の干潟に生息し、ミオ筋に多く見られる。宮城県では、万石浦や松島湾、また仙台湾の潟湖干潟など比較的広域で見られるが個体数は少ない。最近では、万石浦、松島湾の数力所、東名運河、蒲生干潟、広浦、鳥の海で確認されている。
- **形態ならびに近似種との区別点** 甲らの幅は2cmほど。丸くて固い甲らを持ち、その中央が盛り上がっている。甲らの表面やハサミに弱い顆粒が散在する。頭の額に相当する部分は前方に突き出さない。目はとても小さい。縦に歩く。カネコブシガニに似るが、甲らがほぼ円形で、甲、歩脚、ハサミの顆粒が弱い。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(内湾の泥底～砂泥底)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男)

カネココブシガニ

Philyra kanekoi

十脚目
コブシガニ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
- 環境省
DD

- **選定理由** 宮城県では、近年、南三陸沿岸での生息が確認されるようになった。しかし個体数は少なく、希少である。
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** マメコブシガニと同様なところに生息するが、より外洋に近いところの潮下帯砂泥底やアマモ場、潮溜りや干潟の中でも砂利のたまった環境に生息する。函館湾から九州地方までに分布するとされている。宮城県では、志津川湾の松原海岸、折立海岸、袖浜海水浴場および水戸辺川河口などの南三陸沿岸域でのみ生息が確認されている。
- **形態ならびに近似種との区別点** 形態的にはマメコブシガニによく似ているが、少し小さく、甲らの幅は1cm程度。甲らの長さは幅にほぼ等しく、ひし形に近い。また、甲らの表面は凹凸が著しく、中央部分が盛り上がる。額は中央が明瞭にくぼんでいる。ハサミ足の顆粒はマメコブシガニよりも強い。歩脚長節・前節の後縁に小さな粒が多いことでマメコブシガニとは区別できる。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(外洋に近い砂泥底やアマモ場)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：阿部 拓三)

ヒメアカイソガニ

Acmaeopleura parvula

十脚目
モクズガニ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016
- 環境省
LP* (小笠原)

- **選定理由** 転石帯の石の下に深く潜って生息しているため、生息状況が明らかではなかったが、局所的に少数が生息していることが判明した。生息場所が特殊であり、個体数も少なく、希少である。
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 潮間帯の満潮線付近の転石帯で、深く潜って生息する。アカイソガニと似たような環境を好む。男鹿半島以南の日本海沿岸、ならびに三陸沿岸域から奄美大島にまで分布する。宮城県では、2020年に志津川湾の折立海岸で確認された後、2022年に降水水戸辺川河口や舞根湾など南三陸沿岸域の複数箇所確認されている。
- **形態ならびに近似種との区別点** 甲らは赤いレンガ色をしており、前の方が広い丸みを帯びた小さなカニで、甲らの幅は1cmまで。甲らの側面前方に切れ込みはなく、前後に湾曲する。甲らの表面は滑らかだが、ツヤはない。雄のハサミの手のひら部分の外側は平滑で、雌雄共に両指間には軟毛の房を備える。
- **生息に対する脅威(減少の要因)** 生息できる潮位の幅が極めて狭い。堤防建設や護岸工事などに伴う生息場所(満潮線付近の転石帯)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。転石の隙間に土砂が流入し隙間がなくなると生存できない。
- **保護保全上の留意点** 転石帯エコトーンの保全。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男)

トリウミアカイソモドキ

Sestrostoma toriumii

十脚目
モクズガニ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016
VU

環境省
NT*



(撮影：鈴木 孝男)

■**選定理由** もともと記録の少なかった種であり、2005年以降は、しばらく確認されていなかった。震災後には複数回出現したものの少数であり、希少な存在である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 砂泥質干潟で、アナジャコ類やスナモグリ類の巣穴を利用して生息している。震災前は万石浦、松島湾、蒲生干潟、井土浦において、少数が記録されていたものの、2005年以降の記録は途絶えていた。震災後は松島湾や蒲生干潟、井土東谷地、鳥の海などでわずかに記録されたのみであったが、近年、志津川湾の八幡川河口や細浦、水戸辺川河口などでも確認された。また、2023年には坂元川河口、2024年には長面浦でも見つかっている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 丸みを帯びた小さなカニで、甲らの幅は8mmほど。甲らに赤い点々や白斑模様が見られる個体もいる。甲らの側縁に切れ込みはない。脚は細長く、しま模様が見られる。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 生息場所として他種の巣穴を利用するため、アナジャコ類やスナモグリ類の減少が生存にとっての脅威となる。

■**保護保全上の留意点** アナジャコ類、スナモグリ類個体群の保全。

(執筆：海岸動物分科会)

ハマガニ

Chasmagnathus convexus

十脚目
モクズガニ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016
CR+EN

環境省
NT*



(撮影：鈴木 孝男)

■**選定理由** 震災前は、蒲生干潟や牛橋河口のヨシ原などで少数個体が見られたが、近年、県内ではほとんど見られなくなっており、絶滅が危惧される状況にある。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** ヨシ原に穴を掘って生息し、夜間に活動することが多い。植物食である。夜行性なので発見されにくい。宮城県では、震災後、津谷川河口において2015～2018年に生息が確認され、生息北限地とみなされたが、その後は見られなくなっていった。しかし2025年に1個体を確認された。また、名取川河口付近では2017～2020年に記録された後は確認されていなかったが、2025年に再度出現した。その他の場所では、2021年から2025年までに松島湾の櫃ヶ浦、七北田川河口、鳥の海、坂元川河口で生息が確認されたが、いずれもごく少数であり、注視が必要である。

■**形態ならびに近似種との区別点** 甲らの幅が5cmにもなるカニ。甲らは丸く盛り上がり、中央の溝が深い。甲らの縁取りははっきりしており、紫色を帯びる。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 生息できる潮位の幅が極めて狭い。堤防建設や護岸工事などに伴う生息場所(汽水域満潮線付近のヨシ原、土手)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。

■**保護保全上の留意点** ヨシ原と周辺エコトーンの保全。

■**参考文献** 柚原・鈴木 2018

(執筆：海岸動物分科会)

スネナガイソガニ

Hemigrapsus longitarsis

十脚目
モクズガニ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
DD

環境省
-



(撮影：鈴木 孝男)

■**選定理由** 宮城県では、震災後には数カ所で生息が確認されているのみであり、個体数は少なく、希少である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 内湾のアマモ場や、潮間帯中部～潮下帯の砂泥底を主な生息場所としている。環境省の第7回自然環境保全基礎調査における全国干潟調査(2007年)では、主に西日本からのみ記録された。宮城県では、震災前は万石浦で、震災後は舞根湾、松島湾の朴島、鳥の海で記録された。しかし2021年以降の記録は極めて少なく、志津川湾の細浦で2024年に確認された程度である。

■**形態ならびに近似種との区別点** 甲幅1.5cmほど。背面の色は暗緑褐色から明るい赤茶色まで変化が多い。同所的に生息するケフサイソガニに比べて、甲らが横長でなく、足が細く弱々しく、かつ長いことから区別できる。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(内湾の砂泥底やアマモ場)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

(執筆：海岸動物分科会)

アカイソガニ

Cyclograpsus intermedius

十脚目
モクズガニ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
DD

環境省
-



(撮影：阿部 博和)

■**選定理由** 外洋に面したところの転石帯に生息するが、この場所は堤防工事等で埋められたり、改変されることが多く、生息場所を失う可能性が高い。個体数は少なく希少である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道から沖縄諸島までの、外洋に面した転石海岸の上部で、石の下に棲む。そのため、人目に付きにくい。宮城県では、志津川湾など、南三陸海岸の潮間帯上部転石の下に生息していることが確認されている。防潮堤工事等の現場において見つかることが多い。最近では、九九鳴き浜、志津川湾の折立海岸などで確認されたが、他にも南三陸海岸や金華山港近くの転石帯でも見つかっている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 甲幅2cmほど。甲らはすべすべした印象で赤紫と灰色のまだら模様。額域の前縁はまっすぐで、甲らの輪郭は全体に円みが強い。歩脚やハサミには毛がほとんど見られない。ヒメアカイソガニやマメアカイソガニは歩脚に毛が多い。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 生息できる潮位の幅が極めて狭い。堤防建設や護岸工事などに伴う生息場所(満潮線付近の転石帯でごろた石が沢山転がっている場所)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。

■**保護保全上の留意点** 転石帯エコトーンの保全。

(執筆：海岸動物分科会)

ベンケイガニ

Orisarma intermedium

十脚目
ベンケイガニ科

情報不足 (DD)

2016
-

環境省
NT*



(撮影：柚原 剛)

■**選定理由** 千葉県の利根川河口右岸を北限に分布するとされる本種は、2020年から北上川河口で極めて局所的に確認されるようになった。しかし、他では見られておらず、情報不足である。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 河口域近くの潮間帯上部から潮上帯のヨシ原、土手、林など、クロベンケイガニと同様の環境に生息する。分布域は男鹿半島、房総半島以南とされているが、宮城県では、最近になって北上川河口で生息が確認されており、成熟個体も見つかっている。

■**形態ならびに近似種との区別点** 甲らの幅は3cm前後で、赤みを帯び、背面にはニコニコマークがある。しかし、赤みが弱い個体も見られる。ハサミ脚が赤いので、アカテガニと見間違えられることもあるが、甲らの前側縁に1個の切れ込みがあることで、切れ込みのないアカテガニとは区別できる。また、額部の上縁には4つの盛り上がりがあり、平滑なアカテガニとは異なる。本種のハサミ脚はザラザラしており、先端は白い。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 生息できる潮位の幅が極めて狭い。堤防建設や護岸工事などに伴う生息場(汽水域満潮線付近のヨシ原、土手)の喪失や環境改変が脅威となる。

■**保護保全上の留意点** ヨシ原と周辺エコトーンの保全。

■**参考文献** 柚原ら 2021

(執筆：海岸動物分科会)

アカテガニ

Chiromantes haematocheir

十脚目
ベンケイガニ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
NT

環境省
-



(撮影：鈴木 孝男)

■**選定理由** 各地で見られる種であったが、近年、個体数が減少傾向にある。震災後、生息場所の周囲での工事による影響で個体数が減少した。また、陸側の生息地と海域の間を往来できなくなる場合があり、そのために生活史が遮断されると、絶滅に至ることが危惧される。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 干潟海岸のヨシ原とその近辺の土手や松林に生息する。夏の大潮の時に、卵を抱いたメスが海辺まで移動し、水中で幼生を孵化させる。宮城県内の各地において見られるが、減少傾向が著しい。震災後に比較的まとまった個体群が確認できた場所は、津谷川河口、北上川河口、広浦、牛橋河口などであるが個体数は多くはない。

■**形態ならびに近似種との区別点** 甲らの幅が3cmほどのカニ。ハサミは赤く表面は平らでツルツルしている。成熟した個体では、体全体が真っ赤になるものもいる。甲らの側面に明瞭な切れ込みが無く、複眼の間の額部は隆起がなく直線状。

■**生息に対する脅威(減少の要因)** 潮間帯上部から潮上帯のヨシ原や後背湿地に生息する。堤防建設や護岸工事などに伴う生息場所(汽水域満潮線付近のヨシ原、土手)の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。また、土手や松林と海との間に堤防等の構造物が設置されると、海との往来が妨げられ個体群を維持できなくなる。

■**保護保全上の留意点** ヨシ原と周辺エコトーンの保全。

(執筆：海岸動物分科会)

| <div>カクベンケイガニ</div> <div><i>Parasarma pictum</i></div> | <div>十脚目</div> <div>ベンケイガニ科</div> | <div>準絶滅危惧（NT）</div> |
|---|--|----------------------|
| <div></div> <div>2016</div> <div>-</div> | <div></div> <div>環境省</div> <div>-</div> | |

■選定理由 房総半島以南に生息するとされていたが、近年宮城県でもいくつかの場所で少数が確認されるようになった。しかし、生息場所が限られており、局所的にしか見られず、個体数は少ない。

■分布の概要ならびに県内の生息状況 干潟周辺の転石や漂着物の下、あるいは護岸壁の隙間などに潜り込んでいる。動きは素早い。分布は房総半島以南とされていたが、近年岩手県の広田湾や宮城県の南三陸沿岸ならびに仙台湾沿岸の数カ所で生息が確認されるようになった。日本海側では男鹿半島以南、南は沖縄までに分布する。

■形態ならびに近似種との区別点 甲らの幅は2.5cmほどで、真四角に近い形をしているが、わずかに横長である。甲らの前側縁に切れ込みはなく側縁はまっすぐであることが特徴である。甲らの色は全体的に褐色で、黒色のまだら模様が見られる。ハサミ脚は赤くなく、黄色から黄褐色である。ハサミの動く方の指の上の縁には13-16個の顆粒が並ぶ。

■生息に対する脅威（減少の要因） 潮間帯上部から潮上帯の転石や漂着物の下、あるいは護岸壁の隙間に生息する。このため、堤防建設や護岸工事などに伴う生息場所の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。

■保護保全上の留意点 転石帯エコトーンの保全。

（執筆：海岸動物分科会）



（撮影：鈴木 孝男）

| <div>スナガニ</div> <div><i>Ocypode stimpsoni</i></div> | <div>十脚目</div> <div>スナガニ科</div> | <div>絶滅危惧II類（VU）</div> |
|--|--|------------------------|
| <div></div> <div>2016</div> <div>VU</div> | <div></div> <div>環境省</div> <div>-</div> | |

■選定理由 宮城県では、震災前から砂浜での確認例は少なくなってきていた。震災後も数カ所の砂浜で生息が確認されたが、まだまだ希少な存在であることに変わりはない。

■分布の概要ならびに県内の生息状況 砂浜の潮間帯上部から潮上帯にかけて生息する。北海道小樽市が分布の北限である。しかし、青森県と岩手県の宮古湾より北での最近の記録はない。宮城県内のまとまった砂浜では、かつてどこにでも見られたが、近年生息地が減少した。震災後は南三陸沿岸や仙台湾沿いの砂浜で個体数が回復傾向にあるが、まだ少数である。砂浜が健全であれば個体群は維持されるようだ。

■形態ならびに近似種との区別点 甲らの幅は3cmくらいになる。眼柄は太くて短く、目が大きいのでかわいらしい印象がある。砂浜の満潮線付近に深さ数十cmの巣穴を掘る。主に夜間に出てきて砂浜を素早く動き回って餌をとる。スナガニ、ツノメガニ、ナンヨウスナガニの3種は、甲らの下部の斑紋の形状、ハサミ脚の色、ハサミ脚の内側にある顆粒列の有無や配置で区別できるが、注意が必要である。

■生息に対する脅威（減少の要因） 防潮堤建設などに伴う生息場所（解放的な砂浜～細礫海岸の潮上帯）の喪失や生息環境の改変、あるいはエコトーンの分断が生存にとっての脅威となる。

■保護保全上の留意点 砂浜エコトーンの保全。

■参考文献 若林 2019、内藤 2024、阿部・鈴木 2025

（執筆：海岸動物分科会）



（撮影：鈴木 孝男）

| <div>オサガニ</div> <div><i>Macrophthalmus abbreviates</i></div> | <div>十脚目</div> <div>オサガニ科</div> | <div>絶滅危惧II類（VU）</div> |
|---|--|------------------------|
| <div></div> <div>2016</div> <div>DD</div> | <div></div> <div>環境省</div> <div>NT*</div> | |

■選定理由 2010年に鳥の海で採集されて以来、仙台湾では記録が途絶えていた。その後2023年から宮城県の数カ所で記録されるようになった。しかし出現個体数は少なく、希少な存在である。宮城県が分布の北限である。

■分布の概要ならびに県内の生息状況 宮城県では2010年に初めて鳥の海で出現したことから、宮城県RDB2016ではRL種（DD）に指定していたが、2021年の改定でRLから削除した。これは、鳥の海で採集された個体は漂流してきたものの可能性が高く、もともと宮城県は生息域外と思われるというのが理由であった。しかし、2023年に蒲生と長浜海岸（東松島市）で、2024年には波津々浦、蒲生、鳥の海で生息が確認された。このように仙台湾にまで分布域を広げていることは確かなようであるが、個体数は少なく希少である。

■形態ならびに近似種との区別点 甲幅3.5cm。ヤマトオサガニよりも横長で甲幅は甲長の2倍くらい。甲らには一面に顆粒が存在し、赤黒い色を呈する。ハサミは紫色が混じり、手のひら部にたくさんの顆粒がある。ヤマトオサガニが泥っぽい干潟に生息するのに対し、本種は砂泥～砂質域で見られる。

■生息に対する脅威（減少の要因） 護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所（内湾の砂質干潟）の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。

■参考文献 阿部ら 2025

（執筆：海岸動物分科会）

| <div>ムツハアリアケガニ</div> <div><i>Camptandrium sexdentatum</i></div> | <div>十脚目</div> <div>ムツハアリアケガニ科</div> | <div>絶滅危惧II類（VU）</div> |
|--|--|------------------------|
| <div></div> <div>2016</div> <div>-</div> | <div></div> <div>環境省</div> <div>NT*</div> | |

■選定理由 宮城県では震災後に記録されるようになったが、稀にしか見つからず、極めて希少である。

■分布の概要ならびに県内の生息状況 宮城県以南、東南アジアにかけて分布する。軟泥質の干潟で潮間帯下部に生息する。有明海、八代海を除けば稀である。宮城県では、震災後になって初めて、万石浦と松島湾の数カ所で確認された。近年、東名運河にも出現した。2022年以降では、万石浦、松島湾の朴島、長浜海岸、櫃ヶ浦で確認されている。

■形態ならびに近似種との区別点 甲らの幅は1.5cmほど。甲らの両側に3個ずつの歯（突起）がある。アリアケモドキに比べ甲が横長ではなく、眼窩外棘以外の前縁の歯が3対ある。

■生息に対する脅威（減少の要因） 護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所（内湾の泥底～砂泥底）の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

（執筆：海岸動物分科会）



（撮影：鈴木 孝男）

| <div>アリアケモドキ</div> <div><i>Deiratonotus cristatus</i></div> | <div>十脚目</div> <div>ムツハアリアケガニ科</div> | <div>準絶滅危惧（NT）</div> |
|--|--|----------------------|
| <div></div> <div>2016</div> <div>NT</div> | <div></div> <div>環境省</div> <div>-</div> | |

■選定理由 生息環境の悪化に伴い、全国的に個体数が減少している。宮城県では各地に産するものの、数は多いわけではなく、生息場所も限定的であり、希少である。

■分布の概要ならびに県内の生息状況 河口汽水域の泥質干潟や周辺のミオ筋で、泥中や転石の下に生息する。北海道以北にまで分布する、耐寒性の強い種である。宮城県では、個体数は多くはないものの、震災前は各地で記録されていた。震災後は、津谷川河口、北上川河口、蒲生干潟、井土浦、広浦、鳥の海で記録されていた。最近では上記の他に、東松島の長浜海岸や井土東谷地、牛橋河口、坂元川河口でも確認されている。

■形態ならびに近似種との区別点 甲らの幅が2cmほどのカニ。横長の六角形をした甲ら上に峰状の盛り上りが横断する。腹部は赤くなる。ムツハアリアケガニに比べ甲らが横長で、眼窩外棘以外の前縁の棘がない。

■生息に対する脅威（減少の要因） 河口堰建設や護岸工事などに伴う生息場所（低塩分の汽水域にある泥底、ヨシ原）の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。

■保護保全上の留意点 汽水域の環境維持。

（執筆：海岸動物分科会）



（撮影：鈴木 孝男）

| <div>チビイトマキヒトデ</div> <div><i>Aquilonastra minor</i></div> | <div>ヒメヒトデ目</div> <div>イトマキヒトデ科</div> | <div>情報不足（DD）</div> |
|--|--|---------------------|
| <div></div> <div>2016</div> <div>DD</div> | <div></div> <div>環境省</div> <div>-</div> | |

■選定理由 宮城県では志津川湾での生息記録しかなかったが、最近金華山の沿岸域でも確認された。しかし、個体数が少なく、情報が不足している。

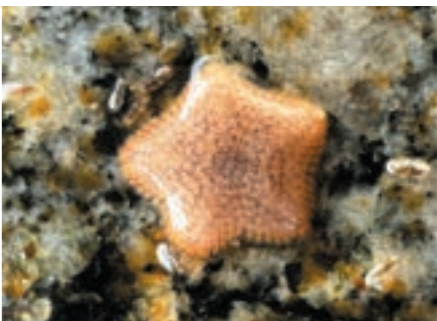
■分布の概要ならびに県内の生息状況 本州から九州までに分布し、潮間帯の水につかった転石下に生息する。宮城県では、志津川湾の岩礁潮間帯（磯）に生息するが、小型で目立たないため、分布の詳細は不明である。近年、志津川湾の松原海岸で2017、2018、2021、2024年に確認され、2021年には折立海岸でも記録された。また、2023年には金華山の港近くの潮下帯でも見つかっている。

■形態ならびに近似種との区別点 ごく小型のヒトデで、中心から腕の先までが2cm以下である。浮遊幼生期を持たず、また雌雄同体で自家受精を行うなど、特異な生態を持つ。

■生息に対する脅威（減少の要因） 堤防建設や護岸工事などに伴う生息場所（岩礁域の潮間帯）の喪失や生息環境の改変が生存にとっての脅威となる。

■特記事項 雌雄同体、直達発生など、ヒトデ類の多様性を考える上で興味深い存在である。

（執筆：海岸動物分科会）



（撮影：阿部 博和）

ヒモイカリナマコ

*Patinapta ooplax*無足目
イカリナマコ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
DD 環境省

■選定理由 震災後に各地で見つっているが、個体数は減少傾向にあり、希少である。細礫が混じる砂泥底という好適な生息場所が少なくなっていることから、生息が危ぶまれる。

■分布の概要ならびに県内の生息状況 潮間帯中部～下部の砂泥底中に生息し、中でも、礫が混じったようなところに見られる。生息場所は多くはない。宮城県では、イカリナマコ科の一種として女川湾、松島湾、舞根湾からの記録があるが、これはヒモイカリナマコである可能性が高い。震災後は舞根湾、津谷川河口、志津川湾、仙台湾沿岸などで確認されていた。最近では舞根湾、志津川湾の数カ所、坂元川河口で確認されている。

■形態ならびに近似種との区別点 体長15cm、直径5mmほどの円筒形で、非常に細長い。体色は白色半透明で、やや黄色みを帯びる。また、体壁が薄く、体腔内が透けて見える。

■生息に対する脅威(減少の要因) 規模が大きく海水交換の良い干潟が生息域であることから、護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(高塩分の砂泥底、細礫底)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男)

ウチワイカリナマコ

*Oestergrenia dubia*無足目
イカリナマコ科

情報不足 (DD)

2016
- 環境省

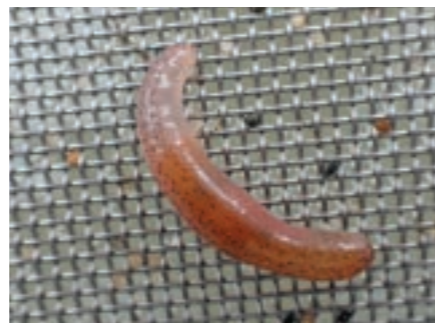
■選定理由 宮城県では松島湾の野々島や朴島での生息記録がある。しかし確認例は少なく、情報不足である。

■分布の概要ならびに県内の生息状況 青森県陸奥湾、熊本県上天草市など数カ所が分布域として知られているだけで詳細は不明である。低潮帯から潮下帯の砂泥底中に棲む。宮城県では、震災後に、松島湾の野々島(2013～15年)と馬放島(2013年)で確認されている。また、朴島では2014年から2020年まで継続して出現している。また、雄勝湾と東松島の長浜海岸で2023年に確認された。

■形態ならびに近似種との区別点 体を伸ばした時の長さが10cmほど。体の直径は0.4cmほどの円筒形。体は乳白色・半透明で褐色の斑点を持つ。体腔内が透けて見える。

■生息に対する脅威(減少の要因) 規模が大きく海水交換の良い干潟が生息域であることから、護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(高塩分の砂泥底)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男)

シロナマコ

*Paracaudina chilensis*隠足目
カウディナ科

情報不足 (DD)

2016
- 環境省

■選定理由 宮城県ではこれまで少ない記録しかなかったが、2019年に東松島市の長浜海岸でまとまった個体群が確認された。しかし、2020年以降は見つかっておらず、情報不足である。

■分布の概要ならびに県内の生息状況 潮間帯から潮下帯の砂泥底に深く潜って生息する。宮城県では、震災後に、松島湾の波津々浦(2013年)と寒風沢(2018年)で生息が確認された。また、長浜海岸(東松島市)では2019年にまとまった個体群が見られたが、その後は確認できていない。県外では、福島県の松川浦で2017年以降継続的に確認されている。

■形態ならびに近似種との区別点 体長20cmほどになる個体もいる。ラグビーボール状の体から細くて長い尾部が伸びる。体色は淡い桃色～白色。時々尾部を底土表面に出して砂を排泄する。体内の消化管にシロナマコガニが寄生することがある。

■生息に対する脅威(減少の要因) 規模が大きく海水交換の良い干潟が生息域であることから、護岸工事や埋め立てなどに伴う生息場所(高塩分の砂泥底)の喪失や生息環境の改変、底質の還元化や貧酸素化が生存にとっての脅威となる。

(執筆：海岸動物分科会)



(撮影：鈴木 孝男)

淡水産貝類

宮城県の陸水環境と淡水産貝類

宮城県は、西部の奥羽山脈と北部の北上高地に挟まれた県央部に仙台平野が広がり、県内の陸水環境は、山地から平野部へと流下する北上川・名取川・広瀬川・阿武隈川をはじめとする大小の河川、さらには伊豆沼・内沼、蕪栗沼、各地の山地湿地・池沼群など、多様な湿地で構成されている。また、平野部には農村地帯が広がり、水田や農業用水路、ため池などの人工的な湿地にも、湿地帯を生息場所とする多様な水生生物が生息している。このような陸水環境のもと、宮城県では少なくとも30種の淡水産貝類が確認されている。丘陵地帯にはカワシンジュガイやマメシジミ類といった北方系の種が分布し、平野部にはタガイなどのイシガイ類、マシジミ、マルタニシなどが生息している。

淡水産貝類の生息状況

宮城県における淡水産貝類の生息状況は、干拓による農地造成や都市化、河川改修、水質悪化などの影響を受け、近代以降大きく悪化してきた。とくに県内の低湿地帯は開発が進み、その面積は明治時代の10分の1以下にまで減少している。

さらに、戦後に進められた圃場整備事業による乾田化は、稲作の生産効率を向上させた一方で、湿田を生息地としていたタニシ類や、農業用水路に依存していたイシガイ類の生息に深刻な影響を及ぼしてきた。

このような生息地の消失や環境改変の結果、かつて仙台平野の広い範囲に分布していたと考えられる淡水貝類の生息域は大きく縮小し、多くの種で分布がきわめて局所的なパターンへと変化している。

レッドリスト選定方法

宮城県で生息が確認されている約30種の淡水貝類を、本調査のレッドリスト評価対象種とした。レッドリスト種の選定およびカテゴリーの決定は、現地調査に加え、既存文献や聞き取り調査などの情報を総合的に用いて行った。なお、マメシジミ類など、同定が難しく分類学的な議論が残されている種や、在来種の可能性が疑わしい種については、今回の評価対象から除外した。

レッドリスト選定結果

宮城県で生息が確認されている淡水産貝類のうち11種を絶滅危惧種に選定した。11種の内訳は絶滅危惧Ⅰ類 (ER-CN) が3種、絶滅危惧Ⅱ類 (VU) が2種、準絶滅危惧種 (NT) が2種、情報不足 (DD) が4種である。

①絶滅危惧Ⅰ類 (ER-CN)

宮城県において特に生息状況が厳しい種として、カワシンジュガイ、メンカラスガイ、マメタニシの3種を絶滅危惧Ⅰ類 (ER-CN) に選定した。いずれの種も令和7年の時点で、1～4箇所しか生息地が確認されていない。その上、確認されている生息地のほぼ全てで、生息状況が悪化、あるいは厳しい状態にある。実際、カワシンジュガイの生息地では河川の氾濫が生じ、生息个体数が減少した。生息地点数が限られているため、現存する生息地における開発行為や環境悪化に特に注意する必要がある。

②絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU) として、ミズゴマツボとマツカサガイを選定した。いずれも生息地が局所的である点が共通している。特にマツカサガイは、近縁種であるヨコハマシジラガイと形態が酷似しているため、誤同定によって生息地が見落とされている可能性が指摘される。また、本種は宮城県内では他のイシガイ類と比較して生息密度が低い傾向にあり、個体群の存続が懸念される。

③準絶滅危惧種 (NT)

準絶滅危惧種 (NT) として、チリメンカワニナとヌマガイを選定した。両種とも県北を中心に数か所で生息が確認されている。メンカラスガイやヌマガイのように、開発や水質悪化の影響を受けやすい下流域の水量が豊富な河川や湖沼を生息場所とする貝類の生息状況は、宮城県では厳しいと言える。

④情報不足 (DD)

情報不足としたマシジミについては、水質悪化や外来種とされているタイワンシジミによる影響が懸念されている。タイワンシジミとの分類については知見が不十分で、マシジミと同種とする意見もあり、現時点では議論が分かれている。宮城県では水質悪化等でマシジミが消失する生息地がある一方、タイワンシジミらしい個体が増加し高密度に生息している場所もある。また、シジミ類が高密度化した箇所では、同所的に生息するイシガイ類に影響を及ぼす可能性が指摘されており、シジミ類の動向は、今後の監視が重要である。

淡水産貝類の保全に向けて

今後、宮城県の淡水産貝類を保全していくには、①重要湿地等における生息状況の把握、②生息情報の精査、③開発・改修行為の影響抑制、④保全事業の実施、⑤外来種移入の監視の5つの観点が重要である。

①重要湿地における生息状況の把握

淡水貝類の生息状況は十分に把握されているとは言えず、未発見の生息地が県内に存在すると思われる。宮城県自然環境保全地域、県立自然公園、ラムサール湿地や環境省の重要湿地500といった指定地域にある湿地は、希少種が新たに発見される可能性がもっとも高い場所であり、より詳細に調査すべきである。また、丘陵地帯に位置する谷戸でも、希少種が発見される事例が多い。これらの場所を中心とした調査が淡水貝類の保全には重要である。

②生息情報の精査

イシガイ科二枚貝類は分類が変更され、種数が細分化された。モノアラガイ科、ヒラマキガイ科やマメシジミ科といった微小貝類は、各科とも複数種が県内に生息しているが、形態的な分類が困難な種が多く、分布状況を正確に判断することができていない。各分類群の専門家と連携を深め分類学の研究の進展に寄与しながら、最新の情報を分布調査に適用していくことが重要である。

③開発・改修行為の影響抑制

イシガイ科二枚貝類やシジミ類は河川や水路に生息するため、河川改修や圃場整備に伴う生息地の直接的な改変の影響を強く受けてきた。特に、カワシンジュガイのように生息地が限られ増殖も容易でない種については、生息環境を開発から保全することが重要である。例えば、河床をできるだけ残す形で施工する水路工法は、イシガイ科二枚貝類の保全に有効な手段の一つであり、県内ではヌマガイが生息する水路で影響軽減を目的として実施された例もある。状況に応じて、適切な工法を選択することが求められる。

また、現時点で該当例はないものの、洪水による河川被害が発生した場合、しばしばアセスメントを経ずに復旧工事が行われることがあり、その過程で貝類が影響を受ける可能性もある。今後は、自然災害後の復旧工事における環境配慮についても検討が必要である。

④保全事業の実施

レッドリスト作成においてしばしば問題となるのは、絶滅危惧種をリストアップしても、具体的な保全プログラムが実施されず、結果として絶滅の進行に歯止めがかかりにくい点である。メンカラスガイとマメタニシは、県北部に位置する伊豆沼・内沼が主要な生息地であるが、水質悪化などの影響を受け、その生息状況は現在も悪化傾向にある。伊豆沼・内沼では平成21年度から自然再生事業が進められており、このような事業の枠組みに希少な淡水貝類の保全を位置づけることは、県内における淡水貝類保全を効果的に推進するための重要な契機になると考えられる。

⑤外来種移入の監視

ヤハズヌマガイが県内で確認されたが(藤本ほか 2024)、その分布状況から外来種である可能性が指摘されている。イシガイ科二枚貝類はタナゴ類の産卵母貝となることから、愛好家によって本来の分布域外から持ち込まれ、放流されたとみられる事例が県外で報告されている(金澤・松本 2008)。このような無秩序な放流については、今後も十分な注意を払う必要がある。

【貝類分科会調査員】

| 氏名 | 所属等 |
|-------|-----------------|
| 藤本 泰文 | 宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団 |
| 倉谷 忠禎 | |
| 速水 裕樹 | 宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団 |

参考文献

- 宮城県生物多様性地域戦略(2015)宮城県.
- 第3回自然環境保全基礎調査 動植物調査報告書 陸産及び淡水産貝類(1988)環境庁.
- 第4回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書 陸産及び淡水産貝類(1993)環境庁自然保護局.
- 第5回動物分布調査報告書 陸産及び淡水産貝類(2002)環境省自然環境局生物多様性センター.
- 埼玉県初記録のトンガリササノハガイ. 埼玉県立自然の博物館研究報告, 2, 41-43. (2008) 金澤光, 松本充夫.
- イシガイ科貝類の新たな分類体系. ちりぼたん, 50 :294-296. (2020) 近藤高貴.
- ヤハズヌマガイ *Buldowskia shadini* (イシガイ科)の東北地方における初確認. 水生動物, 2024, AA2024-6. (2024).藤本泰文, 鈴木勝利, 相馬理央, 内野透, & 中村匡聡.

(執筆：藤本 泰文)

ヌマガイ

Anodonta lauta

イシガイ目
イシガイ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
NT

環境省
-



(撮影：藤本 泰文)

■**選定理由** 本種は平野部に生息するが、その生息地は湖沼や水量の豊富な水路等に限られ、一部の生息地では生息状況が悪化しているため選定した。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道から九州までの各地の主に止水域に生息する。宮城県内では平野部の湖沼や水量の豊富な水路に分布している。しかし、その生息状況は悪化し、伊豆沼・内沼など主要な生息地では生息数が激減している。

■**形態ならびに近似種との区別点** 卵形で、殻長約200mmまで成長するが、多くの個体は100mm程度。殻高が大きく、幼貝の殻は茶色味を帯びた黄土色で、殻が長卵形で緑色を帯びるタガイと区別できる。同じく大型に成長するメンカラスガイのような翼状突起やその基部は見られない。

■**生育に対する脅威(減少の要因)** 水質悪化や河川改修の影響を受けやすい。

■**保護保全上の留意点** 氾濫が生じた場合、その後の河川改修の影響を受けやすいため、県内個体群が消失しないよう、平時から生息地を複数保全することが重要。

■**特記事項** Sano et al. (2022)では、宮城県内にヌマガイとは異なるドブガイ属の生息が示唆されている。

(執筆：藤本 泰文)

ヒガシタブネドブガイ

Buldowskia kamiyai

イシガイ目
イシガイ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016
DD

環境省
-



(撮影：藤本 泰文)

■**選定理由** 宮城県内では1地点しか生息が確認されていない。近似種と誤同定されている可能性があるが、県内の生息地はかなり少ないと考えられるため選定した。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 岩手県・山形県・宮城県・福島県・茨城県で確認されている。宮城県内では現時点では県南の1地点でしか確認されていない。

■**形態ならびに近似種との区別点** 長卵形で、殻長約250mmまで成長する。近似種のタガイと比較して殻の頂部が蝶番よりも上側に突出する傾向がある。近縁種のヤハズヌマガイやフネドブガイとは殻の形態から識別することが現時点では難しく、正確な同定にはDNA分析が必要である。

■**生育に対する脅威(減少の要因)** 県南1地点での生息が報告されている。水質悪化や河川改修の影響を受けやすい。

■**保護保全上の留意点** 県内に広く分布しているタガイと誤認されやすく、生息地が見落とされている可能性がある。また、タブネドブガイ属の個体が他に3地点で確認されているが、外来種の可能性がある同属のヤハズヌマガイが宮城県内で確認されており、DNA分析が必要である。

■**特記事項** 近藤(2020)によって、フネドブガイからヒガシタブネドブガイに種名が変更された。

(執筆：藤本 泰文)

メンカラスガイ

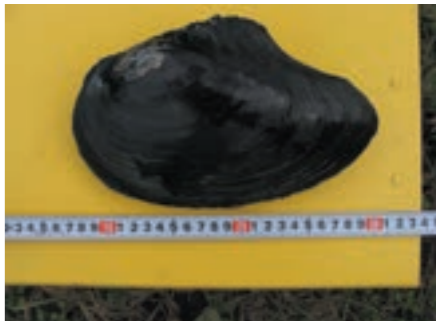
Cristaria clessini

イシガイ目
イシガイ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016
CR+EN

環境省
VU



(撮影：鈴木 勝利)

■**選定理由** 宮城県内では生息地が限られている。県内最大の生息地である伊豆沼・内沼では、水質汚濁等の影響で、個体数の減少が続いているため選定した。

■**分布の概要ならびに県内の生息状況** 本種は本州中部から東北地方にかけての太平洋岸の湖沼や大河川に生息する。宮城県では平野部に広く生息していたものと考えられる。現存する県内最大の生息地である伊豆沼・内沼では、近年急激に個体数が減少している。沼内では再生産もできておらず、かなり厳しい生息状況にある。また、宮城県内の河川でも稀に確認される。

■**形態ならびに近似種との区別点** 卵形で、殻長200mmを越える県内最大の淡水貝類である。幼貝には殻の辺縁部に翼状突起があり、成貝になっても痕跡が見られる。また、幼貝や若齢の貝はやや緑色を呈し、これらが近似種であるヌマガイとの識別点となる。

■**生育に対する脅威(減少の要因)** 本種は水質汚濁や水底の泥質化といった環境悪化の影響を受けやすい。また、幼生の宿主となるハゼ科魚類がオオクチバス等の外来魚の食害によって減少すると、本種の繁殖が困難になる。

■**特記事項** 近藤(2020)によって、カラスガイからメンカラスガイに種名が変更された。

(執筆：藤本 泰文)

| カテゴリ | 絶滅 (EX) | 野生絶滅 (EW) | 絶滅危惧I類 (CR+EN) | 絶滅危惧IIA類 (CR) | 絶滅危惧IIB類 (EN) | 絶滅危惧II類 (VU) | 準絶滅危惧 (NT) | 情報不足 (DD) | 絶滅のおそれのある地域個体群 (LP) | 要注目種 |
|------|---------|-----------|----------------|---------------|---------------|--------------|------------|-----------|---------------------|------|
|------|---------|-----------|----------------|---------------|---------------|--------------|------------|-----------|---------------------|------|

マツカサガイ北東本州固有種

Pronodularia cf. japonensis 3

- **選定理由** 本種は県内では数カ所の生息地しか確認されておらず、絶滅が危惧されるため選定した。ただし、生息情報が不足しているため、今後、生息地が確認される可能性がある。
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本種は青森県から関東までの太平洋流入河川・水路に分布する。宮城県内では、平野部の流れがあり砂質の水路に生息し、県内数カ所で確認されている。
- **形態ならびに近似種との区別点** 本種の殻は卵円形で、殻長は最大で90mmに達するが、60mm程度が一般的。殻表に逆V字型の模様が入る。ヨコハマシジラガイに酷似するが、後背縁に顕著な逆V字型の模様があり、その間隔が広い。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 河川改修などにより生息地が失われやすいと考えられる。
- **保護保全上の留意点** 近縁種のヨコハマシジラガイとの識別が難しいため、両種が同所的に生息している場合には、本種の生息を見落としている可能性がある。また、本来は宮城県に分布していないマツカサガイ広域分布種も県内で確認されている。
- **特記事項** 近藤(2020)によって、マツカサガイからマツカサガイ北東本州固有種に種名が変更された。

(執筆：藤本 泰文)

イシガイ目
イシガイ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016
VU

環境省
NT



(撮影：藤本 泰文)

カワシンジュガイ

Margaritifera laevis

- **選定理由** 本種は県内2地点しか生息していない。どちらの生息地も生息密度は低く、絶滅が危惧されるため選定した。
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 国内では北海道から中国地方までの河川や水路に生息する。県内では県北と県南の中間山地にそれぞれ1地点ずつ生息する。河川勾配が緩やかで、ヤマメが生息する河川上流域に分布している。
- **形態ならびに近似種との区別点** 長卵形で、殻長約100mmまで成長する。本種の前閉殻筋痕の形状は丸い耳形状だが、近縁種のコガタカワシンジュガイは折れ曲がった耳形状で、殻長も小さい。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 河川や水路の護岸整備の影響や、水路の水切れの影響を受けやすい。愛好家等の採集圧も懸念される。
- **保護保全上の留意点** 成熟するまでに数年かかり、個体群が影響を受けると、回復までに長期間掛る可能性がある。
- **特記事項** 本種は2022年に種の保存法による特定第二種国内希少野生動物植物種に指定され、販売・頒布を目的とした採集は禁止となった。しかし、個その他の採集は禁止されておらず、情報の取り扱いには注意が必要。

(執筆：藤本 泰文)

イシガイ目
カワシンジュガイ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016
CR+EN

環境省
EN



(撮影：鈴木 勝利)

マシジミ

Corbicula leana

- **選定理由** 本種は平野部を中心に県内各地に生息しているものの、近年、生息地が外来種のタイワンシジミとみられる個体群に置き換わった事例が複数観察されており、今後も生息地の消失が続くと予測される。ただし、タイワンシジミとの分類が不明確であり、検証が必要である。
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州以南の日本各地に分布する。県内では平野部に広く分布している。
- **形態ならびに近似種との区別点** 殻長30mmの三角型で、殻の表面には、明瞭な成長脈が入る。外来種のタイワンシジミの方が殻が黄色を呈することが多い。しかし、同種とする意見もあり、情報の精査が必要である。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 県内の平野部の湖沼・用水路で生息が確認されている。外来種のタイワンシジミが本種の生息地に侵入すると、交雑等により数年で本種が絶滅する可能性が指摘されている。
- **保護保全上の留意点** マシジミを保全するにはタイワンシジミの分布拡大を防ぐと同時に、遺伝子分析等を用いて本種のみで構成される生息地を確認する必要がある。

(執筆：藤本 泰文)

イシガイ目
シジミ科

情報不足 (DD)

2016
DD

環境省
VU



(撮影：藤本 泰文)

チリメンカワニナ

Semisulcospira reiniana

- **選定理由** 県内での生息状況は悪化している。ここ数十年で複数の生息地が消失した。
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州・九州・四国の各地に生息する。水路や湖沼に分布する。県内では県北を中心に分布していたが、その生息状況は悪化している。ここ数十年で複数の生息地が消失した。
- **形態ならびに近似種との区別点** 殻高約40mmで、殻表面に縦肋や螺肋がある。近縁種のカワニナに似るが、殻表面の縦肋や螺肋といった筋模様が、明確な区別点になる。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 2面のコンクリート水路にも生息するなど、ある程度改修された環境にも本種は適応できるが、残っている生息地が小規模なために、更なる水路工事などにより、水切れなどが生じると個体群が消失しやすい状況にある。
- **保護保全上の留意点** 県内に広く分布しているカワニナと誤認されやすく、生息地が見落とされている可能性がある。ゲンジボタル保全のために無秩序に放流される事例もあり、その分布状況には注意が必要。

(執筆：藤本 泰文)

ニナ(中腹足)目
カワニナ科

準絶滅危惧 (NT)

2016
NT

環境省
-



(撮影：藤本 泰文)

マメタニシ

Parafossarulus manchouricus japonicus

- **選定理由** 県内で確認されている本種の生息地は現時点では1カ所で、依然として厳しい生息状況だと考えられるため選定した。
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本州・四国・九州に分布する。宮城県内では県北で広く分布していたが、現在では県北の伊豆沼・内沼のみで生息が確認されている。
- **形態ならびに近似種との区別点** 本種の殻高は約6mm。螺層に太い螺肋が数本入り、殻口が円形でやや厚くなる。螺肋は本種の特徴の一つであるが、螺肋が目立たない個体も確認され、宮城県内で確認された個体にも螺肋が目立たない個体がいた。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 県北の1地点(伊豆沼・内沼)で生息が確認されている。1960年代の研究では、県北各所に分布していたとされていることから、その生息域は大きく狭まったと言える。河川の汚染や湖沼の埋め立ての影響もあった一方、肝吸虫(肝臓ジストマ)の中間宿主で、その防除のための農薬散布の影響も大きかったと考えられる。
- **特記事項** 肝吸虫(肝臓ジストマ)の中間宿主である。

(執筆：藤本 泰文)

ニナ(中腹足)目
エゾマメタニシ科

絶滅危惧I類 (CR+EN)

2016
CR+EN

環境省
CR



(撮影：藤本 泰文)

ミスゴマツボ

Stenothyra japonica

- **選定理由** 県内で確認されている本種の生息地が少なく、生息情報が不足しているため選定した。
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 本種は本州・四国・九州に分布する。沿岸河川の河口域の湿地などに分布する。県内では三陸沿岸地域でのみ生息が確認されている。
- **形態ならびに近似種との区別点** 殻高約5mmの卵形。体層は良く膨れ、縫合部が強くくびれる。体層には十数本の刻点列が入る。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 河口域の湿地に生息し、環境改変の影響を受けやすい。小型で見落とされやすい種であるため、生息地を十分に把握されていない可能性がある。

(執筆：藤本 泰文)

ニナ(中腹足)目
ミスゴマツボ科

絶滅危惧II類 (VU)

2016
VU

環境省
VU



(撮影：ブラック研究所)

ヒメヒラマキミズマイマイ

Gyraulus sp.

基眼亜目
ヒラマキガイ科

情報不足 (DD)

2016
DD

環境省
EN

- **選定理由** 本種は県内4地点のみでしか確認されておらず、さらに生息地での生息個体数も少ないため絶滅が危惧されるため選定した。
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 日本各地の山際の湿った休耕田や水路などに分布する。
- **形態ならびに近似種との区別点** 殻径約3mm以下の扁平な円盤状である。同サイズのヒラマキミズマイマイと比べるとより扁平で螺管の巻きが密である傾向にある。また螺管の殻口部はほとんど広がらない。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 県中部一東部の水田やため池の周辺で生息が確認されている。生息地の消滅、乾燥化。開発の影響を受けやすい。
- **特記事項** 殻形態から近似種と完全に区別することが難しいため、調査の際の同定ミスなどによって既存の産地が見落とされている可能性がある。

(執筆：齊藤 匠)



(撮影：齊藤 匠)

ミズコハクガイ

Gyraulus soritai

基眼亜目
ヒラマキガイ科

情報不足 (DD)

2016
DD

環境省
VU

- **選定理由** 本種は県内4地点で生息が記録されている。精査によってさらに県内での産地が増加する可能性もあるが、生息環境の特性上、開発などの影響を受けやすく絶滅が危惧されるため選定した。
- **分布の概要ならびに県内の生息状況** 北海道一九州の湿地やその周辺に分布する。
- **形態ならびに近似種との区別点** 殻径約3mm以下の扁平な円盤状で、殻頂は深く落ち込み窪む。殻頂が落ち込み、一見すると陸産貝類のコハクガイ類の様な螺塔状の形態を持つ事、また軟体部が黒く、触角がやや太短いことから近似のヒラマキガイ科貝類とは区別できる。
- **生育に対する脅威(減少の要因)** 県東部の湿地4地点で生息が確認されているがうち1地点は東北大地震による津波被害により消滅したと考えられる。生息地の消滅。開発の影響を受けやすい。

(執筆：齊藤 匠)



(撮影：齊藤 匠)

植物群落

群落・群集



植物群落

1. はじめに

様々な植物が集まる植物群落は、多くの動物が生息する場であり、生態系を支える基盤でもある。近年、『生物多様性国家戦略2023-2030』(https://www.env.go.jp/press/press_01379.html、2024年12月25日最終確認)の基本戦略の中で、2030年のネイチャーポジティブ(自然再興)の実現を目指して掲げられた「生態系の健全性の回復」や「自然を活用した社会課題の解決」は、植物群落に焦点を当てた目標と解釈することもでき、植物群落が有する価値が生物多様性と社会の持続可能性の両面から改めて認められたと言える。

一方で、植物群落は、その質の低下や消失を伴う様々な危機にさらされてきた。第二次世界大戦後のグローバル化が拡大した経済活動に伴う薪炭林や草原の管理放棄によって里山・里地・里浜植生が荒廃し、今なお加速度的に進行している。また、シカやイノシシなど大型哺乳類の密度増加に伴う食害、松枯れ病やナラ枯れ病など病虫害の蔓延、外来種の侵入・繁茂、そして地震や津波、洪水といった自然災害の多発など、植物群落の質や広がりを変化させる事態が全国規模で生じている。さらに、ここ数年の間では、太陽光発電や風力発電などの自然再生可能エネルギー関連施設の大規模な設置に伴う土地改変など、不可逆的な影響も生じている。このように、自然環境を取り巻く社会的状況が大きく変化している今、保護すべき植物群落を明確にしておくことは、大きな意義がある。

宮城県は、県内の希少な植物群落について、『宮城県の希少な野生動植物-宮城県レッドデータブック-』(宮城県環境生活部自然保護課、2001; 以下、RDB2001)の中で紹介して以降、現地調査の継続を図り、レッドデータブック(以下、RDB)およびレッドリスト(以下、RL)の中でその都度、状況を公表してきた。RDB2001から四半世紀が経過する中で、県内の植物群落は、前述したような社会的状況の変化、あるいは岩手・宮城内陸地震や東北地方太平洋沖地震・津波(東日本大震災)といった巨大災害の発生と大規模な復興事業の展開を受けて、多様な応答・遷移を示した。また一方では、現地調査の積み重ねはもとより、技術革新に伴う種々の衛星画像や電子情報アーカイブを活用した解析が進んだことにより、新たな知見が集積されてきた。そこで、10年ぶりに実施される今回のRDB出版をとらえて、東日本大震災後まもなくの状況を反映した『宮城県の絶滅のおそれのある野生動植物 RED DATA BOOK MIYAGI 2016』(宮城県環境生活部自然保護課、2016; 以下、RDB2016)の内容を下敷きとしながらも、植生学的な視点から全体の体系を整え、群落の区分、呼称、指定範囲などを全般にわたって見直すことにした。県内の希少な植物群落を合理的・包括的に捉え、効果的な保護・保全を推進するための基礎資料として、この度の改正成果が活用されることを願うものである。

2. 宮城県の植生の概要

宮城県の植生については、RDB2016中の『Ⅰ 宮城県の自然環境』(菅原、2016)および『IV-5-(1) 植物群落』(平吹、2016)で包括的に記載されていることから、本稿では記述しない。以下では、本章において新たに提示した植生体系(表5、表6)にかかわる解説に限って紹介する。

宮城県内の植物群落は、地球スケールの気候帯区分で見ると、亜寒帯から温帯(冷温帯、暖温帯)に属している。一般にこの大気候区分は緯度の高低とともに推移するが、南北140kmほどの宮城県においては、西端の標高1500m級の山々が連なる奥羽山脈から、東端の太平洋に接する海岸に向かって段階的に標高が低下する地形の様態が、気候形成に強く影響しており、それが垂直的な植生の区分として大まかに、(偽)高山帯・亜高山帯(1200m付近以高)、山地帯(300~1200m付近)、丘陵帯(10~300m付近)、平野帯(0~10m付近)、そして海に接する海岸帯とに分けることができる(表1)。なお、これらの境界付近の植生は連続的に変化しているのが普通で、その場所の地形や微気象などの諸条件によって標高の境は前後する。

亜高山帯と山地帯は、気候帯では亜寒帯~冷温帯におおむね対応する。亜高山帯の代表種は常緑針葉樹のオオシラビソで、主に奥羽山脈で見られる。群落の形状は強風や積雪などの気象条件からしばしば低木林状となり、構成種としては気温の低い気候に対応した植物が生育する。山地帯の代表種は落葉広葉樹のブナである。一般的に人間の活動が低い領域で、木材利用などの伐採を除いては大きな改変は少なく、原生的な植

物群落が多く残る。これらの領域は主に火山性の地質からなり、火山性ガスの噴気孔周辺や、地滑り等に伴い形成された湿地・池沼に成立した特異な群落が多数見られる。

一方、丘陵帯から平野帯、海岸帯にかけては人間活動が活発な領域で、燃料の薪炭利用で成立した里山の落葉広葉樹林やスギなどの人工林(植林)、放牧などの利用で成立したススキやシバが優占する草地などの二次的に成立した植物群落で占められている。丘陵帯の森林植生の代表種は、常緑針葉樹のモミやアカマツ、落葉広葉樹のイヌブナ、アカシデ、イヌシデが挙げられる。山地帯(冷温帯)のブナや後述する海岸帯(暖温帯)のタブノキのどちらも優占していない範囲であることから、冷温帯と暖温帯との推移域とする中間温帯として認識することができる。この区分の考え方は、植生帯を地理的にどのくらいのスケールで捉えるかにもよるが、宮城県内の広い範囲が該当し、少なくとも県内の植生を考える上では重要である。

平野帯は北上川や鳴瀬川、阿武隈川といった河川が流れる平坦地で、大部分が水田や畑地に利用された広大な耕作地帯になっている。河川敷や旧河道、水田周辺の溜池などの水辺では、シロヤナギなどのヤナギ類の木本群落や湿生植物が生育する草本群落が見られる。

そして、海岸帯は海岸線を縁取るように分布する。森林の代表種は常緑広葉樹のタブノキで、群落の構成種も多くが冬でも緑の葉をもつ常緑性の木本や草本となっている。

表1 県内の植生帯区分の概要

| 植生帯 垂直分布 | 気候帯 | 自然植生の 代表的な植物 | 主な地域 |
|----------------|---------------|-------------------|-------------------|
| (偽)高山帯 亜高山帯 | 亜寒帯 | オオシラビソ、ダケカンバ | 蔵王山周辺、栗駒山周辺、船形山周辺 |
| 山地帯 | 冷温帯 | ブナ、ミズナラ、トチノキ、クロベ | |
| 丘陵帯 | 中間温帯 | モミ、イヌブナ、アカシデ、イヌシデ | 仙台丘陵 |
| 平野帯 | 温帯 | ヤナギ類、ハンノキ、ヨシ | 仙台平野 |
| 海岸帯 | 中間温帯 ~ 暖温帯 | タブノキ 砂丘植物、塩生植物 | 仙台湾岸、三陸海岸 |

3. 見直しの手順

1) 群落の抽出

今回のRDB2026における希少な植物群落の抽出は、前回のRDB2016での選定基準を踏襲した。まず、宮城県の植生帯区分を踏まえつつ、森林、草原、河川、湖沼、海岸等のさまざまな植生タイプに加え、原生的な自然植生だけでなく、里地・里山の二次植生、社寺林も含めた。そして、選定基準としては、原生自然としての価値、学術的・生態学的価値、希少種の生育場所としての価値、動物のハビタットとしての価値、群落そのものの希少性に加えて、生物多様性への貢献度、環境教育の活動の場としての価値も考慮した。

抽出された植物群落は、群落の様態から、均質な一つの群落を対象とした「単一群落」と、複数の群落が一体となった「群落複合」に区分した。

2) 現地での確認調査

現地調査の対象は、RDB2016の188群落(単一群落:122群落、群落複合:66群落)と、RL2021で新規記載された6群落(単一群落:2群落、群落複合:4群落)の既往群落とした(<https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/sizenhogo/red2021.html>、2024年12月25日最終確認)。加えて、選定基準に相当する新たな群落も対象とし、文献資料の調査を踏まえ、希少群落としての評価を行った。

現地では、構成種の優占度合いや占有階層、更新状況、病虫害や獣害等の状況、群落範囲の増減等を確認するとともに、写真撮影による記録を行った。

ただし、対象とした植物群落のうち、やぶ化によってアクセスが容易ではないものや島嶼などのアプローチが困難な群落については、遠方からの観察、聞き取り、最新かつ高解像度の空中写真や衛星画像の判読などで補完した。

3) 絶滅危機の度合いの判定

確認結果をもとに、絶滅危機の度合い(カテゴリー)を判定した。判定は、前回のRDB2016と同様、RDB2001時の基準を踏襲し、群落の現況を危機の度合いの高い方から「壊滅(D)」、「壊滅状態(4)」、「壊滅危惧(3)」、「破壊危惧(2)」、「要注意(1)」の5区分とした(詳細についてはRDB2016参照)。

なお、聞き取りや資料判読による場合についても同様の評価を行った。

【希少な植物群落における絶滅危機の度合い(カテゴリー)】

壊滅(D): 群落は壊滅した

壊滅状態(4): 群落は全体的に壊滅状態にあり、緊急に対策を講じなければ壊滅する

壊滅危惧(3): 対策を講じなければ、群落は徐々に悪化して壊滅する

破壊危惧(2): 群落は当面保護されているが、将来破壊されるおそれがある

要注意(1): 現在、保護・管理状態がよく、当面破壊されるおそれが少ない。しかし、監視は必要である

4) 植生帯などの区分および群落の配列の見直し

各群落の植生帯などの区分および配列は、日本全土の植生図を作成するのに用いられた環境省の「2万5千分の1植生図の統一凡例」(<http://gis.biodic.go.jp/webgis/sc-016.html>、2024年12月25日最終確認)に準拠し、一部「日本の植生分類体系2019」(<https://phytosociology.org/>、2024年12月25日最終確認)を参考にした。

具体的には、「植生帯」は垂直分布に相当され、それぞれの植生帯の中で相観(植生の外観)、自然植生、代償植生の違いで特徴づけられる「植生タイプ」で整理した。単一群落についてはさらに「群落タイプ」として細分した。

群落の配列は、高標高域から低標高域の順、同じ群落タイプについては高緯度から低緯度の順とした。そして、その並び順に、単一群落では「単-O」、群落複合は「複-O」で示した整理番号を付与した。

5) 指定範囲の見直し

宮城県のRDBやRLにおいて選定されている群落の指定範囲は、大半が自然環境保全基礎調査(第2回・第3回・第5回)における「特定植物群落」の資料に基づいている。しかし、これまで行ってきた現地調査の成果により、群落の境界が明確でない場合や、伐採等の改変により境界が変化してきていることが明らかとなったため、すべての群落を対象に指定範囲の見直しを行った。

見直しにあたっては、極力これまでの範囲を踏まえつつも、現地調査の結果、自然公園等の指定範囲等の資料、環境省2万5千分の1植生図、森林情報図、自然公園指定範囲、空中写真、衛星画像などの資料を活用し、GISを用いて整理した。群落の面積および位置情報(所在地、範囲の緯度経度、標高)はGISにより抽出し、目視により確認、適宜修正を加えた。なお、所在地については、「統計地理情報システム 政府統計の総合窓口」(<https://www.e-stat.go.jp/gis/>、2025年4月4日最終確認)で提供されている国勢調査データ内の住所を参照したが、一部の地域については「Google マップ」(<https://www.google.co.jp/maps>、2025年7月31日最終確認)で確認し、補足した。

6) 群落の統合、単一群落・群落複合の区分変更

現地調査および指定範囲の見直しの結果を踏まえ、群落の境界が隣接している場合や重複している場合は、群落の統合の検討を行った。

また、単一群落として選定していたものの中で、周辺の複数の群落を含めた範囲での登録が適切なものについては、単一群落から群落複合に変更した。

7) 群落名の変更

群落の統合などの結果を受け、群落名の変更を行った。また、群落タイプ内での名称の統一を図るとともに、群落の所在がより明確になるように地名を追加するなどの微修正を行った。

4. 見直しの結果

1) RDB2016・RL2021からの変更内容

既往のRDB2016およびRL2021からの変更内容を、単一群落は表2に、群落複合は表3に示す。

現地調査および指定範囲の見直しによって、17群落を9群落に統合し、基準に従い単一群落と群落複合に振り分けた。また、単一群落から群落複合への区分変更は3群落であった。

表2 RDB2016・RL2021からの変更内容(単一群落)。太文字の箇所が変更点。

| 変更前(RDB2016・RL2021) | | 変更後(RDB2026) | | 変更内容 |
|---------------------|-------------------|--------------|-------------------|--------------------------------|
| 整理番号 | 群落名 | 整理番号 | 群落名 | |
| 単-1 | 浜市のハマナス群落 | 単-105 | 矢本・野蒜海岸のハマナス群落 | 単一群落「野蒜のハマナス群落」と統合、群落名・整理番号を変更 |
| 単-2 | 大谷海岸のハマナス群落 | 単-104 | 大谷海岸のハマナス群落 | 整理番号を変更 |
| RL2021 新規 | 野蒜のハマナス群落 | 単-105 | 矢本・野蒜海岸のハマナス群落 | 単一群落「浜市のハマナス群落」と統合、群落名・整理番号を変更 |
| RL2021 新規 | 塩竈桂島のハマナス群落 | 単-106 | 塩竈桂島のハマナス群落 | RL2021で新規記載、群落名を微修正 |
| 単-3 | 弁天島のタブノキ群落 | 単-89 | 弁天島のタブノキ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-4 | 松島湾のタブノキ群落 | 複-61 | 松島の植物群落 | 群落複合「松島の植物群落」に統合、群落名・整理番号を変更 |
| 単-5 | 田代島のタブノキ群落 | 単-93 | 田代島のタブノキ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-6 | 網地島のタブノキ群落 | 単-94 | 網地島のタブノキ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-7 | 岸山王島のタブノキ群落 | 単-92 | 岸山王島(泊浜)のタブノキ群落 | 群落名を微修正、整理番号を変更 |
| 単-8 | 石巻桂島のタブノキ群落 | 単-91 | 石巻桂島のタブノキ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-9 | 小出島のタブノキ群落 | 単-90 | 小出島のタブノキ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-10 | 出島のタブノキ群落 | 単-88 | 出島のタブノキ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-11 | 貢尻島のタブノキ群落 | 単-87 | 貢尻島のタブノキ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-12 | 歌津半島のタブノキ群落 | 単-85 | 歌津半島尾崎のタブノキ群落 | 群落名を微修正、整理番号を変更 |
| 単-13 | 志津川荒島のタブノキ群落 | 単-86 | 志津川荒島のタブノキ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-14 | 御崎神社のタブノキ群落 | 単-84 | 御崎神社のタブノキ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-15 | 大島のアカガシ群落 | 単-82 | 気仙沼大島のアカガシ群落 | 群落名を微修正、整理番号を変更 |
| 単-16 | 磯の水神スダジイ群落 | 単-83 | 磯のスダジイ群落 | 群落名を微修正、整理番号を変更 |
| 単-17 | 沖山王島のモチノキ群落 | 単-95 | 沖山王島(泊浜)のモチノキ群落 | 群落名を微修正、整理番号を変更 |
| 単-18 | 宮戸島のマルバシャリンバイ群落 | 単-96 | 宮戸島のシャリンバイ群落 | 群落名を微修正、整理番号を変更 |
| 単-19 | 鮫ヶ浦のモクゲンジ群落 | 単-97 | 鮫ヶ浦のモクゲンジ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-20 | 清崎のアカマツ群落 | 単-99 | 清崎のアカマツ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-21 | 大島十八鳴浜のアカマツ群落 | 単-98 | 大島十八鳴浜のアカマツ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-22 | 神割崎のクロマツ群落 | 単-103 | 神割崎のクロマツ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-23 | 歌津半島のクロマツ群落 | 単-102 | 歌津半島尾崎のクロマツ群落 | 群落名を微修正、整理番号を変更 |
| 単-24 | 巨釜半造のクロマツ群落 | 単-100 | 巨釜半造のクロマツ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-25 | 小前見島のクロマツ群落 | 単-101 | 小前見島のクロマツ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-26 | 仙台湾沿岸のクロマツ植林 | 単-111 | 仙台湾岸のクロマツ植林 | 群落名を微修正、整理番号を変更 |
| 単-27 | 塩竈桂島のクロマツ植林 | 単-110 | 塩竈桂島のクロマツ植林 | 群落名を微修正、整理番号を変更 |
| 単-28 | 矢本海岸(北上運河)のクロマツ植林 | 単-109 | 矢本海岸(北上運河)のクロマツ植林 | 整理番号を変更 |
| 単-29 | 赤崎海岸のクロマツ植林 | 単-107 | 赤崎海岸のクロマツ植林 | 整理番号を変更 |
| 単-30 | 石巻湾沿岸のクロマツ植林 | 単-108 | 石巻長浜のクロマツ植林 | 群落名を微修正、整理番号を変更 |
| 単-31 | 追波川のヨシ群落 | 単-79 | 北上川(旧追波川)のヨシ群落 | 群落名を微修正、整理番号を変更 |
| 単-32 | 樽水ダムのササバモ群落 | 単-80 | 樽水ダムのササバモ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-33 | 深川沼のエゾウキヤガラ群落 | 単-81 | 深川沼のエゾウキヤガラ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-34 | 翁倉山のアカマツ群落 | 単-42 | 翁倉山のアカマツ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-35 | 曲竹のモミ群落 | 単-53 | 曲竹のモミ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-36 | 高館山のモミ・ウラジロガシ群落 | 単-52 | 高館山のモミ・ウラジロガシ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-37 | 斗蔵山のモミ・ウラジロガシ群落 | 単-55 | 斗蔵山のモミ・ウラジロガシ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-38 | 青葉南のモミ・イヌブナ群落 | 単-58 | 青葉南のモミ・イヌブナ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-39 | 西風蕃山のモミ・イヌブナ群落 | 単-50 | 西風蕃山のモミ・イヌブナ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-40 | 弥太郎山のモミ・イヌブナ群落 | 単-57 | 弥太郎山のモミ・イヌブナ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-41 | 佐保山のモミ・イヌブナ群落 | 単-51 | 佐保山のモミ・イヌブナ群落 | 整理番号を変更 |

| 変更前(RDB2016・RL2021) | | 変更後(RDB2026) | | 変更内容 |
|---------------------|---------------------|--------------|---------------------|---|
| 整理番号 | 群落名 | 整理番号 | 群落名 | |
| 単-42 | 富山観音のモミ・イヌブナ群落 | 単-46 | 富山観音のモミ・イヌブナ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-43 | 牧山のモミ・イヌブナ群落 | 単-45 | 牧山のモミ・イヌブナ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-44 | 柳津虚空蔵のモミ・イヌブナ群落 | 単-44 | 柳津虚空蔵尊のモミ・イヌブナ群落 | 群落名を微修正 |
| 単-45 | 東成田のモミ・イヌブナ群落 | 単-47 | 東成田のモミ・イヌブナ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-46 | 牧の崎のモミ・スギ群落 | 単-49 | 牧の崎のモミ・スギ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-47 | 長泉寺のモミ・ウラジロガシ群落 | 単-54 | 長泉寺のモミ・ウラジロガシ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-48 | 熱日高神社のモミ群落 | 単-56 | 熱日高彦神社のモミ群落 | 群落名を微修正、整理番号を変更 |
| 単-49 | 瑞巖寺のモミ群落 | 単-48 | 瑞巖寺のモミ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-50 | 駒ヶ峰のモミ群落 | 複-39 | 牡鹿半島駒ヶ峰の植物群落 | 群落複合「牡鹿半島駒ヶ峰の自然林」に統合、群落名・整理番号を変更 |
| 単-51 | 横山不動尊のモミ群落 | 単-43 | 横山不動尊のモミ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-52 | 高蔵寺のカヤ群落 | 単-59 | 高蔵寺のカヤ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-53 | 黒沢山のケヤキ群落 | 複-34 | 黒沢山の植物群落 | 単一群落「黒沢山のイヌブナ群落」と統合、群落複合に変更。群落名・整理番号を変更 |
| 単-54 | 寒成山のケヤキ群落 | 単-66 | 寒成山のケヤキ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-55 | 石抱きの森のケヤキ群落 | 単-60 | 石抱きの森のケヤキ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-56 | 鎌倉山のケヤキ群落 | 単-64 | 鎌倉山のケヤキ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-57 | 棒目木のケヤキ群落 | 単-65 | 棒目木のケヤキ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-58 | 遂倉山のケヤキ群落 | 単-62 | 遂倉山のケヤキ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-59 | 室ノ沢のケヤキ群落 | 単-61 | 室ノ沢のケヤキ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-60 | 石巻湊のケヤキ・シロダモ群落 | 単-63 | 石巻湊のケヤキ・シロダモ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-61 | 平筒沼のアカシデ群落 | 複-37 | 平筒沼いこいの森の植物群落 | 群落複合に変更、群落名・整理番号を変更 |
| 単-62 | 鳴子渓谷のアカシデ群落 | 単-39 | 鳴子渓谷のアカシデ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-63 | 花淵山のアカシデ群落 | 単-38 | 花淵山のアカシデ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-64 | 浅布渓谷のアカシデ群落 | 単-37 | 浅布渓谷のアカシデ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-65 | 湯殿山神社のイヌシデ群落 | 単-40 | 湯殿山神社のイヌシデ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-66 | 尾崎神社のイヌシデ群落 | 単-41 | 尾崎神社のイヌシデ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-67 | 鎌先のイヌブナ群落 | 単-36 | 鎌先のイヌブナ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-68 | 切留のイヌブナ群落 | 単-35 | 切留のイヌブナ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-69 | 温湯のイヌブナ群落 | 単-34 | 温湯のイヌブナ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-70 | 黒沢山のイヌブナ群落 | 複-34 | 黒沢山の植物群落 | 単一群落「黒沢山のケヤキ群落」と統合、群落複合に変更。群落名・整理番号を変更 |
| 単-71 | 小原渓谷のイヌブナ群落 | 複-33 | 小原渓谷の植物群落 | 群落複合に変更、群落名・整理番号を変更 |
| 単-72 | 虎岩のヨコグラノキ群落 | 単-10 | 虎岩のヨコグラノキ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-73 | 有谷のヨコグラノキ群落 | 単-9 | 有谷のヨコグラノキ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-74 | 鳥川のサクラパハンノキ群落 | 単-67 | 鳥川のサクラパハンノキ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-75 | 青葉南のフサザクラ群落 | 単-16 | 青葉南のフサザクラ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-76 | 金津のウラジロガシ群落 | 単-71 | 金津のウラジロガシ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-77 | 黒森山のソヨゴ群落 | 単-70 | 黒森山のソヨゴ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-78 | 花山のアズマシャクナゲ群落 | 単-27 | 花山のアズマシャクナゲ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-79 | 洞雲寺のコナラ群落 | 単-69 | 洞雲寺のコナラ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-80 | 小牛田農林高等学校林のコナラ・クリ群落 | 単-68 | 小牛田農林高等学校林のコナラ・クリ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-81 | 旭山のシバ群落 | 単-72 | 旭山のシバ群落 | 整理番号を変更 |

| 変更前 (RDB2016・RL2021) | | 変更後 (RDB2026) | | 変更内容 |
|----------------------|---------------------|---------------|---------------------|--------------------------------|
| 整理番号 | 群落名 | 整理番号 | 群落名 | |
| 単-82 | 籠峰山のシバ群落 | 単-73 | 籠峰山のシバ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-83 | 太白山のスギ植林 | 単-77 | 太白山のスギ植林 | 整理番号を変更 |
| 単-84 | 霊屋のスギ植林 | 単-76 | 霊屋のスギ植林 | 整理番号を変更 |
| 単-85 | 塩竈神社のスギ植林 | 単-75 | 鹽竈神社のスギ植林 | 群落名を微修正、整理番号を変更 |
| 単-86 | 篁岳観音堂境内のスギ植林 | 単-74 | 篁岳観音堂境内のスギ植林 | 整理番号を変更 |
| 単-87 | 大綱木のクヌギ植林 | 単-78 | 大綱木のクヌギ植林 | 整理番号を変更 |
| 単-88 | 鎌内沢のクロベ・ヒノキアスナロ群落 | 単-2 | 鎌内沢のクロベ・ヒノキアスナロ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-89 | 千本松山のキタゴヨウ・クロベ群落 | 単-3 | 千本松山のキタゴヨウ・クロベ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-90 | 自生山のスギ群落 | 単-4 | 自生山のスギ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-91 | 若畑のブナ群落 | 複-32 | 若畑の植物群落 | 群落複合「難波の落葉広葉樹林」に統合、群落名・整理番号を変更 |
| 単-92 | 手倉山のブナ・イヌブナ群落 | 単-8 | 手倉山のブナ・イヌブナ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-93 | 峠田山のブナ・イヌブナ群落 | 複-7 | 峠田岳の植物群落 | 群落複合に変更、群落名・整理番号を変更 |
| 単-94 | 葉菜山のブナ群落 | 単-6 | 葉菜山のブナ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-95 | 鎌内沢のブナ群落 | 単-5 | 鎌内沢のブナ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-96 | 筆雨のブナ群落 | 単-7 | 筆雨のブナ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-97 | 加美町柳瀬のヤナギ群落 | 単-26 | 加美町柳瀬のシロヤナギ群落 | 群落名を微修正、整理番号を変更 |
| 単-98 | 横川のオオバヤナギ群落 | 単-24 | 横川のオオバヤナギ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-99 | 升沢のオオバヤナギ群落 | 単-23 | 升沢のオオバヤナギ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-100 | 鈴沼のサワグルミ・トチノキ群落 | 単-14 | 鈴沼のサワグルミ・トチノキ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-101 | 葉菜山のサワグルミ・トチノキ群落 | 単-12 | 葉菜山のサワグルミ・トチノキ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-102 | 前森のサワグルミ・トチノキ群落 | 単-13 | 前森のサワグルミ・トチノキ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-103 | 白糸の滝のサワグルミ・トチノキ群落 | 単-11 | 白糸の滝のサワグルミ・トチノキ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-104 | 大倉山氾濫原のサワグルミ・トチノキ群落 | 単-15 | 大倉山氾濫原のサワグルミ・トチノキ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-105 | 漆沢のドロノキ群落 | 単-25 | 漆沢のドロノキ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-106 | 田代のハルニレ群落 | 単-18 | 田代のハルニレ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-107 | 保呂内沢のハルニレ群落 | 単-17 | 保呂内沢のハルニレ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-108 | 玉ノ木原のハンノキ・ミズバショウ群落 | 単-22 | 玉ノ木原のハンノキ・ミズバショウ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-109 | 三住のハンノキ・ミズバショウ群落 | 単-21 | 三住のハンノキ・ミズバショウ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-110 | 芳の平のハンノキ・ミズバショウ群落 | 単-19 | 芳の平のハンノキ・ミズバショウ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-111 | 田谷地沼のハンノキ・カササゲ群落 | 複-16 | 荒沢湖沼群地域の沼沢地植物群落 | 群落複合「荒沢湖沼群地域の沼沢地植物群落」に統合 |
| 単-112 | 荒沢のハンノキ・ミズバショウ群落 | 複-16 | 荒沢湖沼群地域の沼沢地植物群落 | 群落複合「荒沢湖沼群地域の沼沢地植物群落」に統合 |
| 単-113 | 砂生田沢のミズバショウ群落 | 単-20 | 砂生田沢のミズバショウ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-114 | 六角のススキ群落 | 単-30 | 六角のススキ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-115 | 鬼首のススキ群落 | 単-29 | 鬼首のススキ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-116 | 徳仙丈山のススキ群落 | 単-28 | 徳仙丈山のススキ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-117 | 上品山のススキ群落 | 単-31 | 上品山のススキ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-118 | 不忘山東麓のススキ群落 | 単-32 | 不忘山東麓のススキ群落 | 整理番号を変更 |
| 単-119 | 干浦のヒメサユリ群落 | 単-33 | 干蒲のヒメサユリ群落 | 群落名を微修正、整理番号を変更 |
| 単-120 | 馬ノ神岳のカラマツ群落 | 単-1 | 馬ノ神岳のカラマツ群落 | 整理番号を変更 |

表3 RDB2016・RL2021からの変更内容(群落複合)。太文字の箇所が変更点。

| 変更前 (RDB2016・RL2021) | | 変更後 (RDB2026) | | 変更内容 |
|----------------------|------------------------|---------------|------------------------|--|
| 整理番号 | 群落名 | 整理番号 | 群落名 | |
| 複-1 | 栗駒山の自然植生 | 複-1 | 栗駒山の自然植生 | なし |
| 複-2 | 禿岳の自然植生 | 複-2 | 禿岳の自然植生 | なし |
| 複-3 | 船形山の自然植生 | 複-3 | 船形山の自然植生 | なし |
| 複-4 | 蔵王山の自然植生 | 複-4 | 蔵王山の自然植生 | なし |
| 複-5 | 一桧山の植物群落 | 複-5 | 一桧山の植物群落 | なし |
| 複-6 | 鬼首軍沢の自然植生 | 複-6 | 鬼首軍沢の植物群落 | 群落名を微修正 |
| 複-7 | 東北大学大学院理学研究科附属植物園の植物群落 | 複-41 | 東北大学大学院理学研究科附属植物園の植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-8 | 小黒ヶ崎の植物群落 | 複-36 | 小黒ヶ崎の植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-9 | 川台山の植物群落 | 複-31 | 川台山の植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-10 | 谷山の植物群落 | 複-42 | 谷山の植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-11 | 鱒淵観音堂の植物群落 | 複-35 | 鱒淵観音堂の植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-12 | 牡鹿半島駒ヶ峰の自然林 | 複-39 | 牡鹿半島駒ヶ峰の植物群落 | 単一群落「駒ヶ峰のモミ群落」を統合、群落名・整理番号を変更 |
| 複-13 | 難波の落葉広葉樹林 | 複-32 | 若畑の植物群落 | 単一群落「若畑のブナ群落」を統合、群落名・整理番号を変更 |
| 複-14 | 丸田沢の植物群落 | 複-40 | 丸田沢の植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-15 | 亘理愛宕山の植物群落 | 複-43 | 亘理愛宕山の植物群落 | 整理番号を変更 |
| RL2021新規 | 化女沼の落葉広葉樹林 | 複-38 | 化女沼湖岸の植物群落 | RL2021で新規記載、群落名を微修正 |
| 複-16 | 北上川河辺の植物群落 | 複-49 | 北上川の河辺植物群落 | 群落名を微修正、整理番号を変更 |
| RL2021新規 | 迫川河川敷の植物群落 | 複-48 | 迫川河川敷の河辺植物群落 | RL2021で新規記載、群落名を微修正 |
| 複-17 | 谷地平湿原の植物群落 | 複-9 | 谷地平湿原の植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-18 | 世界谷地湿原の植物群落 | 複-8 | 世界谷地湿原の植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-19 | 七ヶ宿みご谷地湿原の植物群落 | 複-11 | 七ヶ宿みご谷地湿原の植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-20 | 蕪栗沼の沼沢地植物群落 | 複-51 | 蕪栗沼の池沼植物群落 | 群落名を微修正、整理番号を変更 |
| 複-21 | 魚取沼の沼辺植物群落 | 複-14 | 魚取沼の沼辺植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-22 | 磯の水神沼の池沼植物群落 | 複-57 | 磯の溜池群の池沼植物群落 | 群落複合「磯の北堤・南堤の水生生植物群落」と統合、群落名・整理番号を変更 |
| 複-23 | 磯の北堤・南堤の水生生植物群落 | 複-57 | 磯の溜池群の池沼植物群落 | 群落複合「磯の水神沼の池沼植物群落」と統合、群落名・整理番号を変更 |
| 複-24 | 牛橋池の水生生植物群落 | 複-67 | 牛橋河口の海岸植生 | 群落名を微修正、整理番号を変更 |
| 複-25 | 明光沢の池沼植物群落 | 複-47 | 明光沢の池沼植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-26 | 三色吉七ツ堤の池沼植物群落 | 複-46 | 三色吉七ツ堤の池沼植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-27 | 南長沼の池沼植物群落 | 複-56 | 仙台市赤沼・大沼・南長沼の池沼植物群落 | 群落複合「若林区荒井大沼の池沼植物群落」と統合、群落名・整理番号を変更 |
| 複-28 | 伊豆沼・内沼の植物群落 | 複-50 | 伊豆沼・内沼の池沼植物群落 | 群落名を微修正、整理番号を変更 |
| 複-29 | 州崎浜池沼群の水生生植物群落 | 複-63 | 州崎浜池沼群の海岸植生 | 群落名を微修正、整理番号を変更 |
| 複-30 | 横山不動尊の水生生植物群落 | 複-44 | 横山不動尊の水生生植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-31 | ウトウ沼の沼辺植物群落 | 複-13 | ウトウ沼の沼辺植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-32 | 商人沼の沼辺植物群落 | 複-15 | 商人沼の沼辺植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-33 | 荒沢湖沼群地域の沼沢地植物群落 | 複-16 | 荒沢湖沼群地域の沼沢地植物群落 | 単一群落「田谷地沼のハンノキ・カササゲ群落」と「荒沢のハンノキ・ミズバショウ群落」を統合、整理番号を変更 |

| 変更前 (RDB2016・RL2021) | | 変更後 (RDB2026) | | 変更内容 |
|----------------------|------------------|---------------|---------------------|---------------------------------|
| 整理番号 | 群落名 | 整理番号 | 群落名 | |
| 複-34 | 相野沼の水生植物群落 | 複-53 | 相野沼の池沼植物群落 | 群落名を微修正、整理番号を変更 |
| 複-35 | 平筒沼の水生植物群落 | 複-52 | 平筒沼の池沼植物群落 | 群落名を微修正、整理番号を変更 |
| 複-36 | ウド沼の沼辺植物群落 | 複-12 | ウド沼の沼辺植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-37 | 富士沼の池沼植物群落 | 複-54 | 富士沼の池沼植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-38 | 加瀬沼の池沼植物群落 | 複-55 | 加瀬沼の池沼植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-39 | 猪倉堤の池沼植物群落 | 複-45 | 猪倉堤の池沼植物群落 | 整理番号を変更 |
| RL2021 新規 | 若林区荒井大沼の池沼植物群落 | 複-56 | 仙台市赤沼・大沼・南長沼の池沼植物群落 | 群落複合「南長沼の池沼植物群落」と統合、群落名・整理番号を変更 |
| 複-40 | 片山地獄地域の硫気孔荒原植物群落 | 複-29 | 片山地獄地域の硫気孔荒原植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-41 | 雌釜・雄釜の噴気孔荒原植物群落 | 複-28 | 雌釜・雄釜の噴気孔荒原植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-42 | 潟沼の噴気孔荒原植物群落 | 複-30 | 潟沼の噴気孔荒原植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-43 | 渡瀬風穴の植物群落 | 複-22 | 渡瀬風穴の植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-44 | 寒成山風穴の植物群落 | 複-23 | 寒成山風穴の植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-45 | 傾城森風穴の植物群落 | 複-21 | 傾城森風穴の植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-46 | 前森風穴の植物群落 | 複-17 | 前森風穴の植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-47 | 高倉山風穴の植物群落 | 複-19 | 高倉山風穴の植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-48 | 三方倉山風穴の植物群落 | 複-20 | 三方倉山風穴の植物群落 | 整理番号を変更 |
| RL2021 新規 | 黒森風穴の植物群落 | 複-24 | 小原黒森風穴の植物群落 | RL2021で新規記載、群落名を微修正 |
| 複-49 | 長面浜の砂浜植物群落 | 複-69 | 長面浜の砂丘植物群落 | 群落名を微修正、整理番号を変更 |
| 複-50 | 仙台湾沿岸の砂浜植物群落 | 複-70 | 仙台湾岸の砂丘植物群落 | 群落名を微修正、整理番号を変更 |
| 複-51 | 赤崎海岸の砂浜植物群落 | 複-68 | 赤崎海岸の砂丘植物群落 | 群落名を微修正、整理番号を変更 |
| 複-52 | 鳥の海の塩生植物群落 | 複-66 | 鳥の海の海岸植生 | 群落名を微修正、整理番号を変更 |
| 複-53 | 蒲生の塩生植物群落 | 複-64 | 蒲生海岸の海岸植生 | 群落名を微修正、整理番号を変更 |
| 複-54 | 井土浦の塩生植物群落 | 複-65 | 井土浦の海岸植生 | 群落名を微修正、整理番号を変更 |
| 複-55 | 金華山島の植物群落 | 複-62 | 金華山島の植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-56 | 松島の植物群落 | 複-61 | 松島の植物群落 | 単一群落「松島湾のタブノキ群落」を統合、整理番号を変更 |
| 複-57 | 二股島の植物群落 | 複-60 | 二股島の植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-58 | 八景島の植物群落 | 複-59 | 八景島の植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-59 | 椿島の植物群落 | 複-58 | 椿島の植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-60 | 夫婦岩の植物群落 | 複-27 | 夫婦岩の植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-61 | 磐司岩の植物群落 | 複-25 | 磐司岩の植物群落 | 整理番号を変更 |
| 複-62 | 鎌倉山の植物群落 | 複-26 | 鎌倉山の植物群落 | 整理番号を変更 |

2) 改訂リストの概要

見直しの結果、RDB2026で選定した「希少な植物群落」は、単一群落が111群落、群落複合が70群落の計181群落となった(表4)。新規に追加した群落は、群落複合の2件(塩地谷地湿原の植物群落、秋保コケ風穴の植物群落)である。群落の一覧を、単一群落は表5に、群落複合は表6にそれぞれ示す。なお、表中に記載した各群落の「所在地」「指定状況」は参考文献に挙げた資料をもとに整理した。また、群落の位置を図1に示す。

181群落のカテゴリー区分の内訳は、壊滅(D)が5群落、壊滅状態(4)が32群落、壊滅危惧(3)が43群落、破壊危惧(2)が54群落、要注意(1)が47群落であった。

壊滅(D)には、前回のRDB2016時点で群落の消滅が確認されていた複-28「雌釜・雄釜の噴気孔荒原植物群落」などの4群落に加え、単-33「干蒲のヒメサユリ群落」の1群落が該当した。この群落については、樹林

化の進行によりヒメサユリの生育環境である草原が消失、さらにイノシシやニホンザルによる食害が加わり、自然状態下での回復は困難と判断した。

壊滅状態(4)と判断した群落には、植生遷移の進行によって衰退した単-28「徳仙丈山のススキ群落」などの二次草原、松枯れ病によって衰退した単-101「小前見島のクロマツ群落」などの海岸林、東北地方太平洋沖地震による津波や地盤沈下で破壊的な影響を受けた複-70「仙台湾岸の砂丘植物群落」などの砂丘植生が多く該当した。人間の関わりでの低下による二次植生の荒廃や広域的な被害をもたらす病虫害、東北地方太平洋沖地震に伴うそれぞれの影響が改めて明らかとなった。一方、単-104「大谷海岸のハマナス群落」と単-105「矢本・野蒜海岸のハマナス群落」は、前回RDB2016では東北地方太平洋沖地震に伴う影響で壊滅(D)と判断していたが、対象となるハマナスの自律的な回復および保全活動の成果による群落の再生が確認できた。

壊滅危惧(3)には、主に単-42「翁倉山のアカマツ群落」や複-40「丸田沢の植物群落」などの丘陵帯の森林群落である針広混交林や、複-46「三色吉七ツ堤の池沼植物群落」や複-56「仙台市赤沼・大沼・南長沼の池沼植物群落」などの丘陵帯から平野帯の池沼植生が該当した。森林群落の存続に影響を及ぼす要因は、主に松枯れ病やナラ枯れ病などの病虫害であった。また、池沼植生の存続に関しては護岸整備などの影響が顕著であった。一方、山地帯の二次草原である単-73「籠峰山のシバ群落」は植生遷移の進行によりシバ群落が衰退し、RDB2016では壊滅状態(4)としていたが、近年、刈払い等の保全活動が実施されたことで回復し、群落の再生が確認できた。

破壊危惧(2)と要注意(1)は、亜高山帯・山地帯域に分布する単-6「葉菜山のブナ群落」や単-11「白糸の滝のサワグルミ・トチノキ群落」、複-2「禿岳の自然植生」など、急傾斜地に成立した単-34「湯湯のイヌブナ群落」や単-37「浅布溪谷のアカシデ群落」など、海岸帯の島嶼植生である複-58「椿島の植物群落」などが多く該当した。これらの群落は、従来、人間の活動域から離れた場所にあることや立地条件から、開発による影響が及びにくく、当面は大きな変化がないと判断された。しかしながら、近年の山間部で実施されてきている太陽光発電や風力発電などの再生可能エネルギー関連の発電施設の建設に伴う影響が、群落存続の今後の脅威となる可能性がある。今後も継続した監視が必要と考えられる。

表4 RDB2026の群落のカテゴリー内訳

| カテゴリー | 群落数 | 群落区分 | | 植生帯 | | | |
|---------|-----|------|------|----------|-----|-----|-----|
| | | 単一群落 | 群落複合 | 亜高山帯・山地帯 | 丘陵帯 | 平野帯 | 海岸帯 |
| 壊滅(D) | 5 | 2 | 3 | 3 | 0 | 0 | 2 |
| 壊滅状態(4) | 32 | 19 | 13 | 9 | 2 | 2 | 19 |
| 壊滅危惧(3) | 43 | 22 | 21 | 9 | 21 | 7 | 6 |
| 破壊危惧(2) | 54 | 36 | 18 | 23 | 18 | 4 | 9 |
| 要注意(1) | 47 | 32 | 15 | 19 | 21 | 0 | 7 |
| 計 | 181 | 111 | 70 | 63 | 62 | 13 | 43 |

表5 希少な植物群落の一覧(単一群落)

各項目の解説については、本文中の「3.見直しの手順」を参照。「カテゴリー」には、今回のRDB2026の判定に加え、これまでのRDB(2016年, 2001年)およびRL(2021年, 2013年)での判定を併記。「指定状況」内の「特定植物群落」の項目で表示した算用数字は『第5回自然環境保全基礎調査 特定植物群落調査報告書』(環境庁自然保護局生物多様性センター, 2000)の掲載番号, また, 「その他」の項目で表示したアルファベットは, A: ラムサール条約指定湿地, B: 重要湿地, C: 鳥獣保護区特別保護地域, D: 野鳥の森, E: 自然共生サイト, F: 市町村条例等による指定 (詳細は各群落の解説に示した「特記事項」を参照)。

| 植生帯 | 植生タイプ | 群落タイプ | 整理番号 | 希少群落名 | カテゴリー | | | | | 面積 (ha) | 所在地 | | 指定状況 | | | | 備考* (RDB2016からの変更点など) |
|------|-------------|--------------|------|---------------------|----------|---------|----------|---------|----------|---------|------------------|-------|------|--------------|----------------|--|-----------------------|
| | | | | | RDB 2026 | RL 2021 | RDB 2016 | RL 2013 | RDB 2001 | | 自然公園 | 県保全地域 | 保護林 | 特定植物群落 (No.) | その他 | | |
| 亜高山帯 | 矮性低木林 | カラマツ群落 | 単-1 | 馬ノ神岳のカラマツ群落 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 6 | 藤王町遠刈田温泉、白石市福岡八宮 | ○ | 70 | | 整理番号(単-120)を変更 | | |
| 山地帯 | 針広混交林(冷温帯) | キタゴヨウ・クロベ群落 | 単-2 | 糠内沢のクロベ・ヒノキアスナロ群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 6 | 大崎市鳴子温泉鬼首 | | 108 | | 整理番号(単-88)を変更 | | |
| | | スギ群落 | 単-3 | 千本松山のキタゴヨウ・クロベ群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 21 | 大和町吉田 | ○ | 118 | | 整理番号(単-89)を変更 | | |
| | 落葉広葉樹林(冷温帯) | ブナ群落 | 単-4 | 自生山のスギ群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 51 | 大崎市鳴子温泉鬼首 | ○ | 46 | | 整理番号(単-90)を変更 | | |
| | | ヨコグロノキ群落 | 単-5 | 糠内沢のブナ群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | 大崎市鳴子温泉鬼首 | ○ | 148 | | 整理番号(単-95)を変更 | | |
| | 深群林(冷温帯) | サワグルミ・トチノキ群落 | 単-6 | 葉山のブナ群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 4 | 加美町字味ヶ袋 | 県立 | | | 整理番号(単-94)を変更 | | |
| | | フサザクラ群落 | 単-7 | 筆甫のブナ群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | - | 2 | 丸森町筆甫 | | | | 整理番号(単-96)を変更 | | |
| | | スギ群落 | 単-8 | 手倉山のブナ・イスノブナ群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 22 | 丸森町筆甫・大内 | 県立 | 45 | | 整理番号(単-92)を変更 | | |
| | | ヨコグロノキ群落 | 単-9 | 有谷のヨコグロノキ群落 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 0.2 | 七ヶ宿町 | 県立 | 125 | | 整理番号(単-73)を変更 | | |
| | | フサザクラ群落 | 単-10 | 虎岩のヨコグロノキ群落 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 0.2 | 白石市小原 | 県立 | 67 | | 整理番号(単-72)を変更 | | |
| | | ハルニレ群落 | 単-11 | 白糸の滝のサワグルミ・トチノキ群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 5 | 栗原市花山 | 国定 | 143 | | 整理番号(単-103)を変更 | | |
| | 沼沢林(冷温帯) | ハンノキ群落 | 単-12 | 葉山のサワグルミ・トチノキ群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | 加美町字味ヶ袋 | 県立 | | | 整理番号(単-101)を変更 | | |
| | | ハンノキ群落 | 単-13 | 前森のサワグルミ・トチノキ群落 | 1 | 2 | 1 | 1 | 1 | 3 | 加美町字漆沢宿 | 県立 | 114 | | 整理番号(単-102)を変更 | | |
| | | フサザクラ群落 | 単-14 | 鈴沼のサワグルミ・トチノキ群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 色麻町小栗山 | 県立 | ○ | 116 | 整理番号(単-100)を変更 | | |
| | | フサザクラ群落 | 単-15 | 大倉山沓瀬原のサワグルミ・トチノキ群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | - | 6 | 大和町吉田 | 県立 | | | 整理番号(単-104)を変更 | | |
| | | ハルニレ群落 | 単-16 | 青葉南のフサザクラ群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | - | 0.8 | 丸森町大内 | 県立 | 43 | | 整理番号(単-75)を変更 | | |
| | | ハンノキ群落 | 単-17 | 保呂内沢のハルニレ群落 | 2 | 2 | 1 | 1 | - | 9 | 大崎市鳴子温泉鬼首 | 国定 | 126 | | 整理番号(単-107)を変更 | | |
| | | ハンノキ群落 | 単-18 | 田代のハルニレ群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 21 | 大崎市鳴子温泉鬼首 | ○ | 48 | | 整理番号(単-106)を変更 | | |
| | | ハンノキ群落 | 単-19 | 芳の平のハンノキ・ミズハシヨウ群落 | 3 | 3 | 3 | 3 | 2 | 6 | 仙台市泉区 | 県立 | 120 | | 整理番号(単-110)を変更 | | |
| | | ハンノキ群落 | 単-20 | 砂生田沢のミズハシヨウ群落 | 3 | 2 | 1 | 1 | 1 | 0.2 | 大和町宮床 | | 144 | | 整理番号(単-113)を変更 | | |
| | | ハンノキ群落 | 単-21 | 三住のハンノキ・ミズハシヨウ群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 11 | 白石市福岡八宮 | 国定 | 149 | | 整理番号(単-109)を変更 | | |
| | | ハンノキ群落 | 単-22 | 玉ノ木原のハンノキ・ミズハシヨウ群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 3 | 七ヶ宿町字千蒲 | | 73 | | 整理番号(単-108)を変更 | | |

| 植生帯 | 植生タイプ | 群落タイプ | 整理番号 | 希少群落名 | カテゴリー | | | | | 面積 (ha) | 所在地 | | 指定状況 | | | | 備考* (RDB2016からの変更点など) |
|-----|-----------------|------------|------|-------------------|----------|---------|----------|---------|----------|---------|---------------|-------|------|--------------|------------------------|---------------|-----------------------|
| | | | | | RDB 2026 | RL 2021 | RDB 2016 | RL 2013 | RDB 2001 | | 自然公園 | 県保全地域 | 保護林 | 特定植物群落 (No.) | その他 | | |
| 山地帯 | 河辺林 | オオハヤナギ群落 | 単-23 | 升沢のオオハヤナギ群落 | 4 | 4 | 4 | 4 | 3 | 5 | 大和町吉田 | 県立 | 117 | | 整理番号(単-99)を変更 | | |
| | | ドロノキ群落 | 単-24 | 横川のオオハヤナギ群落 | 4 | 4 | 3 | 3 | 3 | 3 | 七ヶ宿町字横川・大萱 | 県立 | 71 | | 整理番号(単-98)を変更 | | |
| | | シロヤナギ群落 | 単-25 | 漆沢のドロノキ群落 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 14 | 加美町字漆沢宿 | 県立 | 112 | | 整理番号(単-105)を変更 | | |
| | 常緑広葉樹低木二次林(冷温帯) | アズマシヤクナグ群落 | 単-26 | 加美町柳瀬のシロヤナギ群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | - | 4 | 加美町字漆沢宿 | | 139 | | 群落名を微修正、整理番号(単-97)を変更 | | |
| | | ススキ群落 | 単-27 | 花山のアズマシヤクナグ群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 14 | 栗原市花山 | 国指定 | ○ | 35 | | 整理番号(単-78)を変更 | |
| | 二次草原(冷温帯) | ススキ群落 | 単-28 | 徳山丈山のススキ群落 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 6 | 気仙沼市本吉町上川内 | | 84 | | 整理番号(単-116)を変更 | | |
| | | アカシデ群落 | 単-29 | 鬼首のススキ群落 | 3 | 3 | 3 | 3 | 4 | 77 | 大崎市鳴子温泉鬼首 | 国定 | 109 | | 整理番号(単-115)を変更 | | |
| | | イヌブナ群落 | 単-30 | 六角のススキ群落 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 76 | 栗原市花山、大崎市鳴子温泉 | | 36 | | 整理番号(単-114)を変更 | | |
| | | アカシデ群落 | 単-31 | 上品山のススキ群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | - | 12 | 石巻市三輪田・高木・長面 | 県立 | | | 整理番号(単-117)を変更 | | |
| 丘陵帯 | 落葉広葉樹林(中間温帯) | ヒメサユリ群落 | 単-32 | 不忘山東麓のススキ群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | - | 23 | 白石市福岡八宮 | 国定 | | | 整理番号(単-118)を変更 | | |
| | | イヌブナ群落 | 単-33 | 千蒲のヒメサユリ群落 | D | 4 | 4 | 4 | - | 4 | 七ヶ宿町字湯原 | | 72 | | 群落名を微修正、整理番号(単-119)を変更 | | |
| | | イヌブナ群落 | 単-34 | 温湯のイヌブナ群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 6 | 栗原市花山 | 国定 | 98 | | 整理番号(単-69)を変更 | | |
| | | アカシデ群落 | 単-35 | 切留のイヌブナ群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 6 | 栗原市花山 | | 34 | | 整理番号(単-68)を変更 | | |
| | | アカシデ群落 | 単-36 | 鎌先のイヌブナ群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 16 | 白石市福岡八宮 | 県立 | 62 | | 整理番号(単-67)を変更 | | |
| | | イヌブナ群落 | 単-37 | 浅布溪谷のアカシデ群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 10 | 栗原市花山 | | 99 | | 整理番号(単-64)を変更 | | |
| | | イヌブナ群落 | 単-38 | 花洲山のアカシデ群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 12 | 大崎市鳴子温泉 | 国定 | 110 | | 整理番号(単-63)を変更 | | |
| | | イヌブナ群落 | 単-39 | 鳴子溪谷のアカシデ群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | 1 | 53 | 大崎市鳴子温泉 | 国定 | 53 | C | 整理番号(単-62)を変更 | | |
| | | イヌブナ群落 | 単-40 | 湯殿山神社のイヌブナ群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 4 | 大崎市三本木音無 | | 100 | | 整理番号(単-65)を変更 | | |
| | | アカマツ群落 | 単-41 | 尾崎神社のイヌブナ群落 | 3 | 3 | 3 | 3 | 2 | 0.8 | 石巻市渡波 | 県立 | | | 整理番号(単-66)を変更 | | |
| | 針広混交林(中間温帯) | モミ群落 | 単-42 | 翁翁山のアカマツ群落 | 3 | 3 | 3 | 3 | - | 7 | 石巻市北上町、登米市津山町 | 国指定天然 | ○ | C | 整理番号(単-34)を変更 | | |
| | | モミ群落 | 単-43 | 横山不動尊のモミ群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 10 | 登米市津山町 | 国立 | 15 | | 整理番号(単-51)を変更 | | |
| | | モミ群落 | 単-44 | 柳津虚空蔵尊のモミ・イスノブナ群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 7 | 登米市津山町 | 国立 | 16 | | 群落名を微修正 | | |
| | | モミ群落 | 単-45 | 坂山のモミ・イスノブナ群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 5 | 石巻市湊 | 県立 | 21 | D | 整理番号(単-43)を変更 | | |
| | | モミ群落 | 単-46 | 富山観音のモミ・イスノブナ群落 | 2 | 2 | 3 | 3 | 1 | 2 | 松島町手樽 | 国指定名勝 | 92 | | 整理番号(単-42)を変更 | | |

| 植生帯 | 植生タイプ | 群落タイプ | 整理番号 | 希少群落名 | カテゴリー | | | | | | 面積 (ha) | 所在地 | 指定状況 | | | | 備考** (RDB2016からの変更点など) |
|------|------------------|-------|------|-----------------|----------|---------|----------|---------|---------|-----|--------------|-----|---------------|-------------|-----|-----------------------|------------------------|
| | | | | | RDB 2026 | RL 2021 | RDB 2016 | RL 2013 | RL 2001 | RDB | | | 自然公園 | 県保全地域 | 保護林 | 特定種物群落 (No.) | |
| 丘陵帯 | 針広混交林(中間温帯) | モミ群落 | 単-47 | 東成田のモミ・イヌブナ群落 | 3 | 3 | 2 | 2 | - | 9 | 大郷町東成田 | ○ | | | | 整理番号(単-45)を変更 | |
| | | | 単-48 | 瑞巖寺のモミ群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 3 | 松島町松島 | 県立 | | 93 | | 整理番号(単-49)を変更 | |
| | | | 単-49 | 牧の崎のモミ・スギ群落 | 3 | 3 | 2 | 2 | 1 | 19 | 石巻市給分浜 | 国立 | ○ | 10 | | 整理番号(単-46)を変更 | |
| | | | 単-50 | 西風葺山のモミ・イヌブナ群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 13 | 仙台市青葉区 | | ○ | 103,136,137 | F | 整理番号(単-39)を変更 | |
| | | | 単-51 | 佐保山のモミ・イヌブナ群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 35 | 仙台市太白区 | | ○ | 41 | D | 整理番号(単-41)を変更 | |
| | | | 単-52 | 高舘山のモミ・ウラジロガシ群落 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 1 | 名取市高舘吉田 | | ○ | 105 | | 整理番号(単-36)を変更 | |
| | | | 単-53 | 曲竹のモミ群落 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 6 | 蔵王町大字曲竹 | 県立 | | 61 | | 整理番号(単-35)を変更 | |
| | | | 単-54 | 長泉寺のモミ・ウラジロガシ群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | 角田市角田 | | | 147 | | 整理番号(単-47)を変更 | |
| | | | 単-55 | 斗蔵山のモミ・ウラジロガシ群落 | 3 | 3 | 3 | 3 | 2 | 18 | 角田市小田 | | ○ | 65 | D | 整理番号(単-37)を変更 | |
| | | | 単-56 | 熱日高彦神社のモミ群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 0.9 | 角田市島田 | | | 131 | | 群落名を微修正、整理番号(単-48)を変更 | |
| | | | 単-57 | 弥太郎山のモミ・イヌブナ群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 34 | 白石市小原 | | ○ | 75 | | 整理番号(単-40)を変更 | |
| | | | 単-58 | 青葉南のモミ・イヌブナ群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 6 | 丸森町大内 | 県立 | | 44 | | 整理番号(単-38)を変更 | |
| | | | 単-59 | 高蔵寺のカヤ群落 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 2 | 角田市高倉 | | | 64 | | 整理番号(単-52)を変更 | |
| | | | 単-60 | 石抱きの森のカヤキ群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 3 | 栗原市栗駒 | | | 142 | | 整理番号(単-55)を変更 | |
| | | | 単-61 | 室ノ沢のカヤキ群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | - | 0.9 | 登米市東和町 | | | | | 整理番号(単-59)を変更 | |
| | | | 単-62 | 遠倉山のケヤキ群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 5 | 大和町吉田 | 県立 | | 102 | | 整理番号(単-58)を変更 | |
| | | | 単-63 | 石巻湊のカヤキ・シロダマ群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | - | 3 | 石巻市吉野町 | | | 22 | | 整理番号(単-60)を変更 | |
| | | | 単-64 | 鎌倉山のケヤキ群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | 仙台市青葉区 | 県立 | | 121 | | 整理番号(単-56)を変更 | |
| | | | 単-65 | 棒目木のケヤキ群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 9 | 仙台市青葉区 | 県立 | | 123 | | 整理番号(単-57)を変更 | |
| | | | 単-66 | 寒成山のケヤキ群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 4 | 白石市小原、七ヶ宿町字関 | 県立 | | 68 | | 整理番号(単-54)を変更 | |
| 単-67 | 鳥川のサクラバハハンノキ群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | - | 0.6 | 七ヶ宿町字関 | | | | | 整理番号(単-74)を変更 | | | | |
| 単-68 | 小牛田農林高等学校林のコナラ群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 28 | 涌谷町下郡 | | ○ | | | 整理番号(単-80)を変更 | | | | |
| 単-69 | 洞雲寺のコナラ群落 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 8 | 仙台市泉区 | | | 129 | | 整理番号(単-79)を変更 | | | | |
| 単-70 | 黒森山のソヨゴ群落 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 0.6 | 仙台市青葉区 | | | 145 | | 整理番号(単-77)を変更 | | | | |

| 植生帯 | 植生タイプ | 群落タイプ | 整理番号 | 希少群落名 | カテゴリー | | | | | | 面積 (ha) | 所在地 | 指定状況 | | | | 備考** (RDB2016からの変更点など) |
|------|-----------------|-----------|------|----------------|----------|---------|----------|---------|---------|-----|--|-----|----------------------|-------|-----|-----------------------|------------------------|
| | | | | | RDB 2026 | RL 2021 | RDB 2016 | RL 2013 | RL 2001 | RDB | | | 自然公園 | 県保全地域 | 保護林 | 特定種物群落 (No.) | |
| 丘陵帯 | 二次草原(中間温帯) | ウラジロガシ群落 | 単-71 | 金津のウラジロガシ群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 0.5 | 角田市尾山 | | ○ | 130 | | 整理番号(単-76)を変更 | |
| | | | 単-72 | 旭山のシバ群落 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 2 | 石巻市河南町 | 県立 | | | D | 整理番号(単-81)を変更 | |
| | | | 単-73 | 龍峰山のシバ群落 | 3 | 3 | 4 | 3 | 3 | 0.7 | 石巻市河北町 | 県立 | | | | 整理番号(単-82)を変更 | |
| | | | 単-74 | 眞岳観音堂境内のスギ植林 | 2 | 2 | 2 | 2 | - | 1 | 涌谷町麓岳 | | ○ | | | 整理番号(単-86)を変更 | |
| | | | 単-75 | 龍蔵神社のスギ植林 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 16 | 塩竈市一森山 | | | 28 | | 群落名を微修正、整理番号(単-85)を変更 | |
| | | | 単-76 | 霊屋のスギ植林 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 6 | 仙台市青葉区 | | | 39 | F | 整理番号(単-84)を変更 | |
| | | | 単-77 | 木白山のスギ植林 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 3 | 仙台市太白区 | | ○ | 104 | | 整理番号(単-83)を変更 | |
| | | | 単-78 | 大綱木のクスギ植林 | 4 | 4 | 4 | 4 | 1 | 9 | 登米市東和町 | | | 85 | ○ | 整理番号(単-87)を変更 | |
| 平野帯 | 河辺植生 | ヨシ群落 | 単-79 | 北上川(旧追波川)のヨシ群落 | 3 | 3 | 3 | 1 | 1 | 767 | 石巻市小船越・大森・三輪田・相野谷・中島・中野・福地・馬鞍・橋浦・針岡・釜谷・十三浜 | | | 17 | B | 群落名を微修正、整理番号(単-31)を変更 | |
| | | | 単-80 | 樽水ダムのササハモ群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 22 | 名取市高舘川上 | | ○ | | | 整理番号(単-32)を変更 | |
| 海岸帯 | 常緑広葉樹林 | エゾウキヤガラ群落 | 単-81 | 深川沼のエゾウキヤガラ群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | - | 3 | 七ヶ浜町湊浜 | | | 94 | | 整理番号(単-33)を変更 | |
| | | | 単-82 | 気仙沼大鳥のアカガシ群落 | 4 | 4 | 2 | 2 | 2 | 3 | 気仙沼市磯草 | 国立 | | 2 | | 群落名を微修正、整理番号(単-15)を変更 | |
| | | | 単-83 | 磯のスタジイ群落 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 44 | 山元町坂元 | | | 146 | | 群落名を微修正、整理番号(単-16)を変更 | |
| | | | 単-84 | 御崎神社のタブノキ群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 3 | 気仙沼市唐桑町神の倉 | 国立 | | 1 | | 整理番号(単-14)を変更 | |
| | | | 単-85 | 歌津半島尾崎のタブノキ群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 0.1 | 南三陸町歌津 | 国立 | | 81 | | 群落名を微修正、整理番号(単-12)を変更 | |
| | | | 単-86 | 志津川荒島のタブノキ群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | 南三陸町志津川 | 国立 | | 13 | | 整理番号(単-13)を変更 | |
| | | | 単-87 | 眞尻島のタブノキ群落 | 3 | 3 | 3 | 1 | 1 | 4 | 石巻市名浜 | 国立 | | 18 | | 整理番号(単-11)を変更 | |
| | | | 単-88 | 出島のタブノキ群落 | 2 | 2 | 1 | 1 | 1 | 3 | 女川町出島 | 国立 | | 4 | | 整理番号(単-10)を変更 | |
| | | | 単-89 | 弁天島のタブノキ群落 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 2 | 石巻市小竹浜 | 県立 | | 20 | | 整理番号(単-3)を変更 | |
| | | | 単-90 | 小出島のタブノキ群落 | 4 | 4 | 1 | 1 | 1 | 22 | 石巻市月浦 | 国立 | | | | 整理番号(単-9)を変更 | |
| | | | 単-91 | 石巻桂島のタブノキ群落 | 2 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 石巻市竹浜 | 国立 | | 19 | | 整理番号(単-8)を変更 | |
| 単-92 | 岸山王島(泊浜)のタブノキ群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 1 | 石巻市泊浜 | 国立 | | 5 | | 群落名を微修正、整理番号(単-7)を変更 | | | | |
| 単-93 | 田代島のタブノキ群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 6 | 石巻市田代浜 | | | 11 | | 整理番号(単-5)を変更 | | | | |

| 植生帯 | 植生タイプ | 群落タイプ | 整理番号 | 希少群落名 | | カテゴリー | | | | 所在地 | | 指定状況 | | | 備考※ (RDB2016からの変更点など) |
|---------|--------|--------|-------------------|-----------------|---------|----------|---------|----------|---------|---------------|---------------|-------|--------------|---|--------------------------|
| | | | | RDB 2026 | RL 2021 | RDB 2016 | RL 2013 | RDB 2001 | 面積 (ha) | 自然公園 | 県保全地域 | 記念物 | 特定種物群落 (No.) | 保護林 | |
| 海岸帯 | 常緑広葉樹林 | タブノキ群落 | 単-94 | 網地島のタブノキ群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 20 | 石巻市網地浜・長渡浜 | 国立 | | 9 | 整理番号(単-6)を変更 |
| | | モチノキ群落 | 単-95 | 沖山王島(泊浜)のモチノキ群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | 石巻市泊浜 | 国立 | | 141 | 群落名を微修正、整理番号(単-17)を変更 |
| | | 海岸林 | 単-96 | シャリンバイ群落 | 4 | 4 | 4 | 3 | 3 | 2 | 東松島市宮戸 | 県立 | 国指定名勝 | 27 | 群落名を微修正、整理番号(単-18)を変更 |
| | | 単-97 | モクゲンジ群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | - | 0.1 | 東松島市宮戸 | 県立 | 国指定名勝 | | 整理番号(単-19)を変更 | |
| | | 単-98 | アカマツ群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 3 | 気仙沼市外浜・大初平 | 国立 | | 79 | 整理番号(単-21)を変更 | |
| | | 単-99 | クロマツ群落 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 63 | 石巻市鮎川浜・十八成浜 | 国立 | | 8 | 整理番号(単-20)を変更 | |
| | | 単-100 | クロマツ群落 | 4 | 4 | 2 | 1 | 1 | 9 | 気仙沼市唐桑町 | 国立 | | 78 | 整理番号(単-24)を変更 | |
| | | 単-101 | クロマツ群落 | 4 | 4 | 4 | 2 | - | 3 | 気仙沼市中山 | 国立 | | | 整理番号(単-25)を変更 | |
| | | 単-102 | クロマツ群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 3 | 南三陸町歌津 | 国立 | | 82 | 群落名を微修正、整理番号(単-23)を変更 | |
| | | 単-103 | クロマツ群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 8 | 南三陸町戸倉、石巻市十三浜 | 国立 | | 83 | 整理番号(単-22)を変更 | |
| | | 砂丘植生 | 単-104 | ハマナス群落 | 4 | 4 | D | D | 3 | 0.1 | 気仙沼市本吉町九多丸・三島 | 国立 | | 80 | 整理番号(単-2)を変更 |
| 植林(海岸帯) | クロマツ植林 | 単-105 | 矢本・野蒜海岸のハマナス群落 | 4 | 4 | D | 4 | 3 | 0.2 | 東松島市浜市・野蒜 | 県立 | | 91 | 単-1「浜市のハマナス群落」とRL2021新規記載「野蒜のハマナス群落」を統合、群落名・整理番号を変更 | |
| | | 単-106 | 塩竈桂島のハマナス群落 | 3 | 3 | - | - | - | 0.01 | 塩竈市浦戸石浜 | 県立 | 国指定名勝 | | RL2021で新規記載、群落名を微修正 | |
| | | 単-107 | 赤崎海岸のクロマツ植林 | D | D | D | 3 | 2 | - | 気仙沼市本吉町卯名沢 | 国立 | | | 整理番号(単-29)を変更 | |
| | | 単-108 | 石巻長浜のクロマツ植林 | 4 | 4 | 4 | 3 | - | 15 | 石巻市渡波 | | | 23 | 群落名を微修正、整理番号(単-30)を変更 | |
| | | 単-109 | 矢本海岸(北上運河)のクロマツ植林 | 4 | 4 | 4 | 3 | 3 | 183 | 東松島市矢本大曲～浜市 | | | 90 | 整理番号(単-28)を変更 | |
| | | 単-110 | 塩竈桂島のクロマツ植林 | 4 | 4 | 4 | 3 | 3 | 1 | 塩竈市浦戸桂島 | 県立 | 国指定名勝 | | 群落名を微修正、整理番号(単-27)を変更 | |
| | | 単-111 | 仙台湾岸のクロマツ植林 | 4 | 4 | 4 | 3 | 3 | 1018 | 仙台市宮城野区～山元町 | | | 30 | 群落名を微修正、整理番号(単-26)を変更 | |

※備考中の整理番号は「宮城県絶滅のおそれのある野生動植物-RED DATA BOOK MIYAGI 2016-」時点のもの。

表6 希少な植物群落の一覧(群落複合)

各項目の解説については、本文中の「3.見直しの手順」を参照。「カテゴリー」には、今回のRDB2026の判定に加え、これまでのRDB(2016年、2001年)およびRL(2021年、2013年)での判定を併記。「指定状況」内の「特定植物群落」の項目で表示した算用数字は『第5回自然環境保全基礎調査-特定植物群落調査報告書』(環境庁自然保護局生物多様性センター、2000)の掲載番号。また、「その他」の項目で表示したアルファベットは、A:ラムサール条約指定湿地、B:重要湿地、C:鳥獣保護区特別保護地域、D:野鳥の森、E:自然共生サイト、F:市町村条例等による指定(詳細は各群落の解説に示した「特記事項」を参照)。

| 植生帯 | 植生タイプ | 整理番号 | 希少群落名 | カテゴリー | | | | 所在地 | | 指定状況 | | | 備考※ (RDB2016からの変更点など) | | | | | | |
|----------|-----------------|-----------|----------------|----------|----------------|----------|---------|------------|------------|--------------------------------------|-------|--------|--------------------------|--------------|------|-----|---------------|---|--|
| | | | | RDB 2026 | RL 2021 | RDB 2016 | RL 2013 | RDB 2001 | 面積 (ha) | 自然公園 | 県保全地域 | 記念物 | | 特定種物群落 (No.) | 保護林 | その他 | | | |
| 亜高山帯・山地帯 | 亜寒帯・冷温帯植生 | 複-1 | 栗駒山の自然植生 | 2 | 2 | 3 | 3 | 2 | 5884 | 栗原市栗駒・花山 | 国定 | | ○ | 33 | C | | | | |
| | | 複-2 | 禿岳の自然植生 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 456 | 大崎市鳴子温泉鬼首 | 国定 | | | 51 | | | | | |
| | | 複-3 | 船形山の自然植生 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 5821 | 加美町漆沢宿・滝庭・青野、色麻町小栗山、大和町吉田、仙台市青葉区大倉 | 県立 | | ○ | 57 119 | | | | | |
| | | 複-4 | 蔵王山の自然植生 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 9865 | 川崎町大字今宿、青根温泉、蔵王町速刈田温泉、白石市福岡八宮、七ヶ宿町字園 | 国定 | | ○ | 63 | B, C | | | | |
| | | 複-5 | 一松山の植物群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | - | 140 | 栗原市花山 | | ○ | | | | C | | | |
| | | 複-6 | 鬼首軍沢の植物群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | - | 2516 | 大崎市鳴子温泉鬼首 | 国定 | | | 47 | | | | 群落名を微修正 | |
| | | 複-7 | 峠田岳の植物群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 190 | 七ヶ宿町字峠田・字園 | | | | 74 | | | | 単-93「峠田山のプナ・イヌプナ群落」を群落複合に変更、群落名を微修正、整理番号を変更 | |
| | | 複-8 | 世界谷地湿原の植物群落 | 4 | 4 | 3 | 3 | 3 | 14 | 栗原市栗駒 | 国定 | | ○ | 96, 97 | B | | | 整理番号(複-18)を変更 | |
| | | 複-9 | 谷地平湿原の植物群落 | 2 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 加美町滝庭 | 県立 | | ○ | 115 | | | | 整理番号(複-17)を変更 | |
| | | 複-10 | 塩地谷地湿原の植物群落 | 1 | - | - | - | - | 1 | 仙台市泉区 | 県立 | | | | | | | | 新規記載 |
| | | 池沼植生(山地帯) | 七ヶ宿みご谷地湿原の植物群落 | 複-11 | 七ヶ宿みご谷地湿原の植物群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | - | 0.5 | 七ヶ宿町字園 | | | | | | | |
| 複-12 | ウド沼の沼辺植物群落 | | | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | 加美町宮崎 | | | | 135 | | | | 整理番号(複-36)を変更 | |
| 複-13 | ウトウ沼の沼辺植物群落 | | | 3 | 3 | 3 | 2 | 1 | 加美町字漆沢宿・宮崎 | 町指定天然 | | | | 54 | | | | 整理番号(複-31)を変更 | |
| 複-14 | 魚取沼の沼辺植物群落 | | | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 6 | 加美町字漆沢宿 | 国指定天然 | | ○ | 55 | | | | 整理番号(複-21)を変更 | |
| 複-15 | 商人沼の沼辺植物群落 | | | 3 | 3 | 2 | 2 | 2 | 1 | 加美町字漆沢宿 | | ○ | | 134 | | | | 整理番号(複-32)を変更 | |
| 複-16 | 荒沢湖沼沿地域の沼沢地植物群落 | | | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 705 | 加美町滝庭 | 町指定天然 | | ○ | 111, 113 | B, E | | | | 単-111「田谷地沼のハンノキ・カサガシ群落」と単-112「荒沢のハンノキ・ミズバネ群落」を単-33「荒沢湖沼沿地域の沼沢地植物群落」に統合、整理番号(複-33)を変更 |
| 複-17 | 前森風穴の植物群落 | | | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 3 | 保護のため秘匿とする | | 県立 | | ○ | 56 | | | | 整理番号(複-46)を変更 |
| 複-18 | 秋保コケ風穴の植物群落 | | | 1 | - | - | - | - | 0.06 | 保護のため秘匿とする | | 県立 | | | | | | | 新規記載 |
| 複-19 | 高倉山風穴の植物群落 | | | 2 | 2 | 2 | 2 | - | 2 | 保護のため秘匿とする | | 県立 | | | | | | | 整理番号(複-47)を変更 |
| 複-20 | 三方倉山風穴の植物群落 | | | 2 | 2 | 2 | 2 | - | 0.3 | 保護のため秘匿とする | | 県立 | | | | | | | 整理番号(複-48)を変更 |
| 複-21 | 傾城森風穴の植物群落 | | | 4 | 4 | 4 | 2 | 0.3 | 保護のため秘匿とする | | 県立 | | | | | | | | 整理番号(複-45)を変更 |
| 複-22 | 渡瀬風穴の植物群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | 4 | 0.1 | 保護のため秘匿とする | | 県立 | | | 69 | | | | 整理番号(複-43)を変更 | | |

| 植生帯 | 植生タイプ | 整理番号 | 希少群落名 | カテゴリ | | | | 面積(ha) | 所在地 | 指定状況 | | | | 備考* | |
|-----|-----------|------------------------|---------------|----------|---------|----------|---------|------------|-------------|----------|-----|--------|---|---|---------------|
| | | | | RDB 2026 | RL 2021 | RDB 2016 | RL 2013 | | | RDB 2001 | 記念物 | 自然公園 | 県保全地域 | | 指定状況 |
| 山地帯 | 風穴植生 | 複-23 | 寒成山風穴の植物群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | 4 | 保護のため秘匿とする | | | | | 整理番号(複-44)を変更 | |
| | | 複-24 | 小原黒森風穴の植物群落 | 4 | - | - | - | 0.6 | 保護のため秘匿とする | | | | | RL2021で新規記載、群落名を微修正 | |
| 丘陵帯 | 岩壁植生 | 複-25 | 磐司岩の植物群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 37 | 仙台市太白区 | 国指定 | 国立 | | 59 | 整理番号(複-61)を変更 | |
| | | 複-26 | 鎌倉山の植物群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 仙台市青葉区作並 | | 県立 | | 122 | 整理番号(複-62)を変更 | |
| | 複-27 | 夫婦岩の植物群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | 42 | 丸森町葦浦 | | 県立 | | 132 | 整理番号(複-60)を変更 | | |
| | 複-28 | 雌雄・雄壺の噴気孔荒原植物群落 | D | D | D | D | 0.07 | 大崎市鳴子温泉鬼首 | 国指定天然 | 国立 | | 50 | 整理番号(複-41)を変更 | | |
| | 複-29 | 片山地帯地域の硫気孔荒原植物群落 | 4 | 4 | 4 | 3 | 118 | 大崎市鳴子温泉鬼首 | | 国立 | | 49 | 整理番号(複-40)を変更 | | |
| | 複-30 | 濁沼の噴気孔荒原植物群落 | D | D | D | 4 | 18 | 大崎市鳴子温泉 | | 国立 | | 52 | 整理番号(複-42)を変更 | | |
| | 複-31 | 落葉広葉樹林(中間温帯) | 1 | 1 | 1 | 1 | 35 | 栗原市栗駒 | | | | 32 | 整理番号(複-9)を変更 | | |
| | 複-32 | 若畑の植物群落 | 3 | 3 | 3 | 3 | 16 | 大和町吉田 | | 県立 | | 38 | 単-91「若畑のプナ群落」と複-13「難波の落葉広葉樹林」を統合、群落名・整理番号を変更 | | |
| | 複-33 | 小原渓谷の植物群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 98 | 宮城県白石市小原 | | 県立 | | 66 | 単-71「小原渓谷のイヌブナ群落」を群落複合に変更、群落名・整理番号を変更 | | |
| | 複-34 | 針広混交林(中間温帯) | 3 | 3 | 2 | 2 | 22 | 気仙沼市上西側 | | 県立 | | 76, 77 | 単-53「黒沢山のケヤキ群落」と単-70「黒沢山のイヌブナ群落」を統合、群落名・整理番号を変更 | | |
| | 池沼植生(丘陵帯) | 複-35 | 鱒淵観音堂の植物群落 | 2 | 2 | 2 | 1 | 15 | 登米市東和町 | | | ○ | ○ | 12 | 整理番号(複-11)を変更 |
| | | 複-36 | 小黒ヶ崎の植物群落 | 3 | 3 | 3 | 2 | 18 | 大崎市岩出山・鳴子温泉 | | | | ○ | ○ | 37 |
| | 複-37 | 平笹沼いこいの森の植物群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | 37 | 登米市米山町 | | | | 25 | D, F | 単-61「平笹沼のアカジテ群落」を群落複合に変更、群落名・整理番号を変更 | |
| | 複-38 | 化女沼湖畔の植物群落 | 2 | 2 | - | - | 4 | 大崎市古川 | | | | | A, C | RL2021で新規記載、群落名を微修正 | |
| | 複-39 | 牡鹿半島駒ヶ嶺の植物群落 | 3 | 3 | 3 | 1 | 172 | 石巻市鮎川浜 | | 国立 | | ○ | 7 | 単-50「駒ヶ嶺のモミ群落」を複-12「牡鹿半島駒ヶ嶺の自然林」に統合、群落名・整理番号(複-12)を変更 | |
| | 複-40 | 丸田沢の植物群落 | 3 | 3 | 3 | - | 121 | 仙台市青葉区・泉区 | | | ○ | | | 整理番号(複-14)を変更 | |
| | 複-41 | 東北大学大学院理学研究科附属植物園の植物群落 | 3 | 3 | 3 | 3 | 41 | 仙台市青葉区 | 国指定 | | | 40 | C, F | 整理番号(複-7)を変更 | |
| | 複-42 | 台山の植物群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 174 | 村田町大字足立 | | | ○ | | 60 | C | 整理番号(複-10)を変更 |
| | 複-43 | 巨理愛宕山の植物群落 | 3 | 3 | 3 | - | 25 | 巨理町字愛宕前・逢隈 | | | ○ | | | 整理番号(複-15)を変更 | |
| | 複-44 | 横山不動尊の水生生植物群落 | 3 | 3 | 3 | 3 | 0.08 | 登米市津山町 | 国指定 | 国立 | | | | 整理番号(複-30)を変更 | |
| | 池沼植生(丘陵帯) | 複-45 | 猪倉堤の池沼植物群落 | 1 | 1 | 1 | - | 1 | 柴田町大字富沢 | | | | | | 整理番号(複-39)を変更 |
| | | 複-46 | 三色吉七ツ堤の池沼植物群落 | 3 | 3 | 3 | 3 | 2 | 岩沼市三色吉 | | | | | | 整理番号(複-26)を変更 |
| | | 複-47 | 明光沢の池沼植物群落 | 3 | 3 | 4 | 3 | 2 | 丸森町大内 | | | | | | 整理番号(複-25)を変更 |

| 植生帯 | 植生タイプ | 整理番号 | 希少群落名 | カテゴリ | | | | 面積(ha) | 所在地 | 指定状況 | | | | 備考* | |
|-----|-------|---------------------|--------------|----------|---------|----------|---------|-----------------------|-------------------------|----------|-----|-----------|-----------|--|-----------------------|
| | | | | RDB 2026 | RL 2021 | RDB 2016 | RL 2013 | | | RDB 2001 | 記念物 | 自然公園 | 県保全地域 | | 指定状況 |
| 平野帯 | 河辺植生 | 複-48 | 迫川河川敷の河辺植物群落 | 3 | 3 | - | - | 9 | 登米市迫町 | | | | | | RL2021で新規記載、群落名を微修正 |
| | | 複-49 | 北上川の河辺植物群落 | 2 | 2 | 2 | - | 290 | 登米市豊里町・津山町、石巻市萩生町・成田・飯野 | | | | 86 | | 群落名を微修正、整理番号(複-16)を変更 |
| | 複-50 | 伊豆沼・内沼の池沼植物群落 | 3 | 3 | 3 | 3 | 558 | 栗原市築館・若柳、登米市迫町 | 国指定 | | ○ | | 24 | A, B, C | 群落名を微修正、整理番号(複-28)を変更 |
| | 複-51 | 蕪栗沼の池沼植物群落 | 4 | 4 | 4 | D | 140 | 大崎市田尻蕪栗、登米市南の方町 | | | | 88 | A, B, C | 群落名を微修正、整理番号(複-20)を変更 | |
| | 複-52 | 平高沼の池沼植物群落 | 3 | 3 | 3 | 2 | 28 | 登米市米山町・豊里町 | | | | | B, D | 群落名を微修正、整理番号(複-35)を変更 | |
| | 複-53 | 相野沼の池沼植物群落 | 2 | 2 | 2 | 2 | 9 | 涌谷町上郡 | | | | 89 | B | 群落名を微修正、整理番号(複-34)を変更 | |
| | 複-54 | 富士沼の池沼植物群落 | 3 | 3 | 3 | 1 | 73 | 石巻市福地・針岡 | | | | | | 整理番号(複-37)を変更 | |
| | 複-55 | 加瀬沼の池沼植物群落 | 3 | 3 | 3 | 3 | 22 | 利府町加瀬、多賀城市市川、塩竈市天日町 | | | ○ | | | 整理番号(複-38)を変更 | |
| | 複-56 | 仙台市赤沼・大沼・南長沼の池沼植物群落 | 3 | 3 | 3 | 3 | 18 | 仙台市宮城野区・若林区 | | | | | | 複-27「南長沼の池沼植物群落」とRL2021新規記載「若林区荒井大沼の池沼植物群落」を統合、群落名・整理番号を変更 | |
| | 複-57 | 磯の溜池群の池沼植物群落 | 4 | 4 | 4 | 3 | 4 | 山元町坂元 | | | | 133 | | 複-22「磯の水神沼の池沼植物群落」と複-23「磯の北堤・南堤の水生生植物群落」を統合、群落名・整理番号を変更 | |
| 海岸帯 | 島嶼植生 | 複-58 | 樺島の植物群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 5 | 南三陸町戸倉 | 国指定 | 国立 | | 14 | | 整理番号(複-59)を変更 |
| | | 複-59 | 八景島の植物群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 11 | 石巻市船越 | 国指定 | 国立 | | 3 | | 整理番号(複-58)を変更 |
| | 複-60 | 二股島の植物群落 | 1 | 1 | 1 | 1 | 5 | 女川町江島 | | 国立 | | | | 整理番号(複-57)を変更 | |
| | 複-61 | 松島の植物群落 | 3 | 3 | 2 | 2 | 9518 | 松島町、東松島市、利府町、塩竈市、七ヶ浜町 | 特別名勝 | 県立 | | 26 138 | C, D | 単-4「松島湾のタブノキ群落」を複-56「松島の植物群落」に統合、整理番号(複-56)を変更 | |
| | 複-62 | 金華山島の植物群落 | 3 | 3 | 3 | 3 | 1001 | 石巻市鮎川浜 | | 国立 | | 6 | C | 整理番号(複-55)を変更 | |
| | 複-63 | 州崎浜池沼群の海岸植生 | 4 | 4 | 4 | 3 | 36 | 東松島市野蒜 | 特別名勝 | 県立 | | | | 群落名を微修正、整理番号(複-29)を変更 | |
| | 複-64 | 蒲生海岸の海岸植生 | 4 | 4 | 4 | 3 | 28 | 仙台市宮城野区 | | | ○ | 29 | B, C | 群落名を微修正、整理番号(複-53)を変更 | |
| | 複-65 | 井土浦の海岸植生 | 4 | 4 | 4 | 3 | 56 | 仙台市若林区 | | | ○ | 42 | B, C | 群落名を微修正、整理番号(複-54)を変更 | |
| | 複-66 | 鳥の海の海岸植生 | 4 | 4 | 4 | 4 | 70 | 巨理町吉田 | | | ○ | | B | 群落名を微修正、整理番号(複-52)を変更 | |
| | 複-67 | 牛橋河口の海岸植生 | 4 | 4 | 4 | 3 | 30 | 山元町山寺 | | | ○ | | | 群落名を微修正、整理番号(複-24)を変更 | |
| | 砂丘植生 | 複-68 | 赤崎海岸の砂丘植物群落 | 4 | 4 | 4 | 3 | 10 | 気仙沼市本吉町 | | 国立 | | | | 群落名を微修正、整理番号(複-51)を変更 |
| | | 複-69 | 長面浜の砂丘植物群落 | D | D | 4 | 4 | 0.02 | 石巻市長面 | | 国立 | | 87 | | 群落名を微修正、整理番号(複-49)を変更 |
| | | 複-70 | 仙台湾岸の砂丘植物群落 | 4 | 4 | 4 | 3 | 356 | 仙台市宮城野区～山元町 | | | ○ | 31 106 | C | 群落名を微修正、整理番号(複-50)を変更 |

※備考中の整理番号は「宮城県各地域のおそれのある野生動物植物-RED DATA BOOK MIYAGI 2016-」時点のもの。

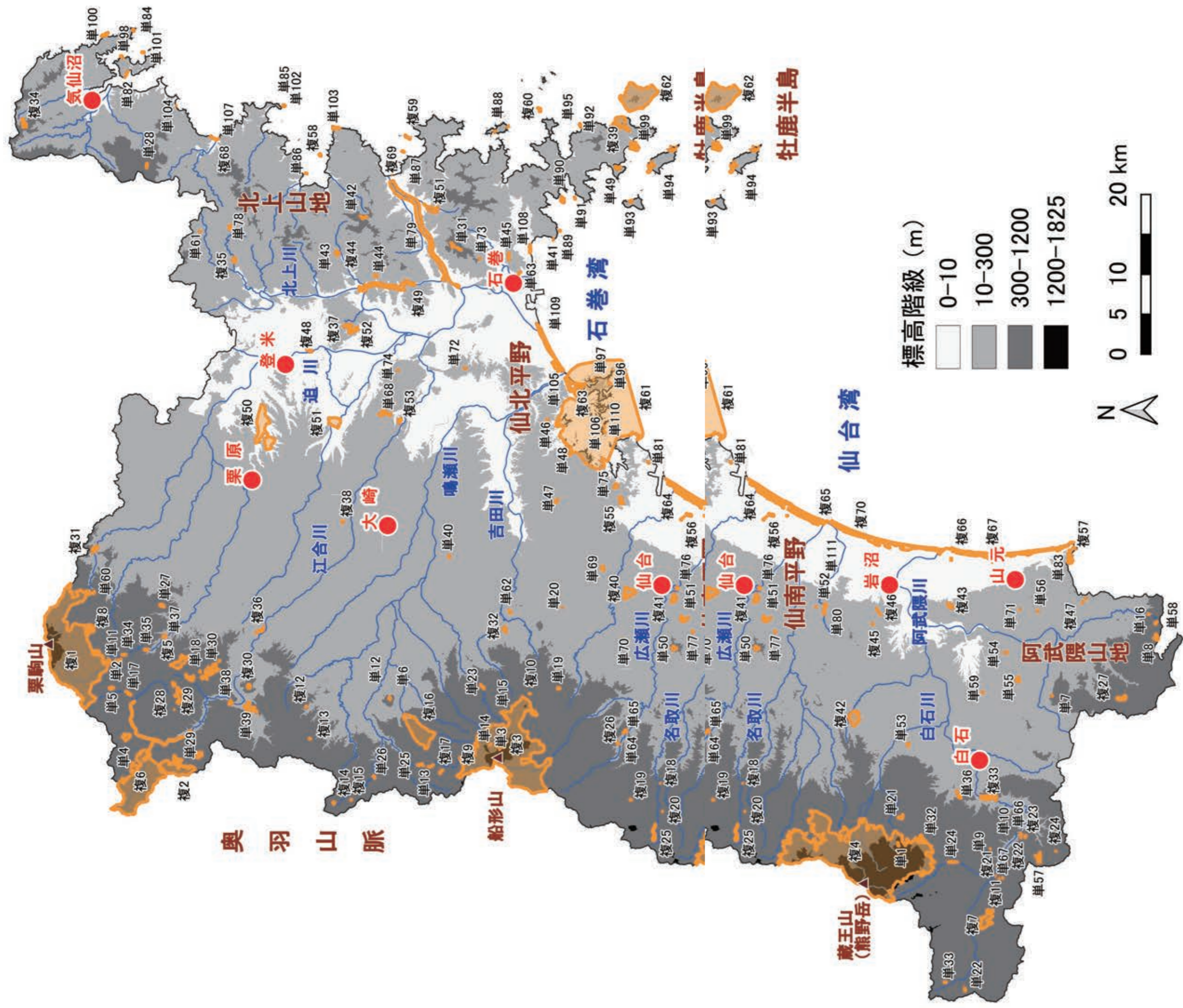


図1 宮城県の地勢概要と希少な植物群落の位置。181の希少な植物群落の地理的位置を、主要な河川、山岳、都市および標高階級とともに表示。

| | | |
|---------------|---------------|---------------|
| | | |
| | | |
| | | |
| 氏名 | 所属等 | 備考 |
| 平吹 喜彦 | 東北学院大学名誉教授 | 分科会長 |
| 西中(沖田) 董 | 東京環境工科専門学校 | |
| 菅野 洋 | 日本工営株式会社 | |
| 齊藤 賢治 | 宮城植物の会 副会長 | |
| 下山 祐樹 | 元 宮城植物の会 | 2023年度まで |
| 滝口 政彦 | 宮城植物の会 会長 | |
| 三島木 進 | 宮城植物の会 | 2023年度まで |
| 吉田 馨 | 株式会社エコリス | |

5. 参考文献

- ↑ 「はじめに」の参考文献

菅原亀悦. 2016. 宮城県の自然環境.『宮城県の絶滅のおそれのある野生動植物 RED DATA BOOK MIYAGI 2016』(宮城県環境生活部自然保護課編), 1-5. 宮城県保健環境部環境保全課.
平吹喜彦. 2016. 植物群落.『宮城県の絶滅のおそれのある野生動植物 RED DATA BOOK MIYAGI 2016』(宮城県環境生活部自然保護課編), 390-412. 宮城県保健環境部環境保全課.

- ↑ 「希少な植物群落の一覧 (表5・表6)」の参考文献

- a) 所在地

統計地理情報システム 政府統計の総合窓口. https://www.e-stat.go.jp/gis/statmap-search?page=1&type=2&aggregateUnitForBoundary=A&toukeiCode=00200521&toukeiYear=2015&surveyId=A002005212015&prefCode=04&coordsys=1&format=shape. 2025年4月4日最終確認.

※ 一部、Google マップ (https://www.google.co.jp/maps、2025年7月31日最終確認)を参考に補足.

- ↑ 「希少な植物群落の解説」の参考文献
- 1 宮城県(編). 1978. 環境庁委託 第2回自然環境保全基礎調査 特定植物群落調査報告書. 227pp.
- 2 環境庁(編). 1988. 第3回自然環境保全基礎調査 特定植物群落調査報告書 追跡調査(宮城県). 354pp.
- 3 環境庁自然保護局生物多様性センター(編). 2000. 第5回自然環境保全基礎調査 特定植物群落調査報告書. 213pp.
- 4 保護林：東北森林管理局 - 林野庁. https://www.rinya.maff.go.jp/tohoku/policy/business/management/hozen/hogorin_00.html. 2025年7月31日最終確認.
- 5 蔵王国定公園芝草平地域学術調査委員会(編). 2004. 蔵王国定公園芝草平地域学術調査報告書. 257pp. 宮城県環境生活部自然保護課.
- 6 織田春紀. 2003. 北限の馬ノ神岳カラマツ. 森林科学, 38: 52-58.
- 7 織部雄一郎. 2007. 林木遺伝資源としてのカラマツ－馬ノ神岳のカラマツ天然林－. 林木遺伝資源情報, 独立行政法人林木育種セン

- ↑ ター.
- 8 菅原亀悦. 1989. 葉菜山・田谷地沼周辺地域の植生.『葉菜山・田谷地湖沼群地域学術調査報告書』(葉菜山・田谷地湖沼群地域学術調査委員会編), 71-114. 宮城県小野田町.
- 9 菅原亀悦・内藤俊彦. 1988. 阿武隈溪谷県立自然公園(仮称)予定地植生の概要.『阿武隈溪谷県立自然公園(仮称)予定地学術調査報告書』(阿武隈溪谷県立自然公園(仮称)予定地学術調査委員会編), 91-106＋付図.宮城県保健環境部環境保全課.
- 10 菅原亀悦. 1983. 七ヶ宿町有谷「ヨコグラノキ」自生地の調査報告書. 14pp. 宮城県七ヶ宿町教育委員会.
- 11 滝口政彦・上野雄規・宮城植物の会. 2012. ヨコグラノキの北限地帯における生育地の調査報告. 宮城の植物, 37: 32-39.宮城植物の会.
- 12 吉岡邦二・菅原亀悦. 1975. 天然記念物「ヨコグラノキ北限地帯」調査報告書. 13pp. 宮城県教育委員会.
- 13 一松山・田代県自然環境保全地域学術調査委員会(編). 1992. 一松山・田代県自然環境保全地域学術調査報告書. 260pp. 宮城県保健環境部環境保全課.
- 14 泉ヶ岳・芳の平学術調査委員会(編). 1988. 泉ヶ岳・芳の平学術調査報告書. 74pp. 仙台市泉総合支所経済環境部商工観光課.
- 15 仙台市教育委員会(編). 2022. 仙台市指定天然記念物 泉ヶ岳のミズバシヨウほか湿生植物群生地モニタリング調査報告書 -平成24年度～令和2年度調査-. 仙台市文化財調査報告書495: 42pp. 仙台市教育委員会.
- 16 佐々木洋. 1997. 花山村北限のアズマシャクナゲの保護と管理.『みやぎの自然』(日本生物教育会宮城大会実行委員会記念誌編集部編), 37-46. 日本生物教育会宮城大会実行委員会記念誌編集部.
- 17 材木岩・虎岩・風穴地域植物調査会(編). 1979. 宮城県材木岩・虎岩周辺地域植物調査報告書. 218pp＋付図. 白石市教育委員会・七ヶ宿町教育委員会・建設省東北地方建設局七ヶ宿ダム工事事務所.
- 18 北上町史編さん委員会(編). 2005. 北上町史 自然・生活編. 695pp. 宮城県北上町.
- 19 翁倉山県自然環境保全地域学術調査委員会(編). 1989. 翁倉山県自然環境保全地域学術調査報告書. 144pp.＋図版. 宮城県保健環境部環境保全課.
- 20 登米市(編). 2007. 登米市自然環境基礎調査報告書. 182pp.＋付図. 宮城県登米市市民生活部環境課.
- 21 佐々木豊. 1973. 石巻市牧山の自然植生と注目すべき植物. 宮城の植物, 創刊号: 1-9. 宮城植物の会.
- 22 大柳雄彦・平吹喜彦. 1997. (仮称)東成田県自然環境保全地域候補地の植物相.『(仮称)東成田県自然環境保全地域候補地学術調査報告書』((仮称)東成田県自然環境保全地域候補地学術調査委員会編), 21-43. 宮城県環境生活部環境保全課.
- 23 平吹喜彦・大柳雄彦. 1997. (仮称)東成田県自然環境保全地域候補地の植生.『(仮称)東成田県自然環境保全地域候補地学術調査報告書』((仮称)東成田県自然環境保全地域候補地学術調査委員会編), 45-86. 宮城県環境生活部環境保全課.
- 24 大田敬之・齋藤智之・野口麻穂子. 2021. 宮城県牧の崎スギ天然林の林分構造. 東北森林科学会誌, 26(1): 20-26.
- 25 緑地環境保全地域学術調査委員会(編). 1988. 蕃山・斎勝沼緑地環境保全地域, 権現森緑地環境保全地域学術調査報告書. 138pp.＋図版＋付図. 宮城県生活環境部環境保全課.
- 26 菅原亀悦. 1973. 太白山・佐保山地城の植生.『仙台市太白山・佐保山地城の学術調査報告』仙台市開発局.
- 27 菅原亀悦. 1973. 高館山のモミ・ウラジロガシ林について. 宮城の植物, 創刊号: 20-21. 宮城植物の会.
- 28 大柳雄彦・平吹喜彦. 1998. 斗蔵山県自然環境保全地域の植物相.『斗蔵山県自然環境保全地域学術調査報告書』(斗蔵山県自然環境保全地域学術調査委員会編), 13-33. 宮城県環境生活部環境保全課.
- 29 平吹喜彦・中島久美・大柳雄彦 1998. 斗蔵山県自然環境保全地域の植生.『斗蔵山県自然環境保全地域学術調査報告書』(斗蔵山県自然環境保全地域学術調査委員会編), 35-64. 宮城県環境生活部環境保全課.
- 30 滝口政彦・望月謙吉. 2017. 斗蔵山のモミ・ウラジロガシ林の樹幹投影図による30年間の群落の変化. 宮城の植物, 42: 16-24. 宮城植物の会.
- 31 滝口政彦・望月謙吉. 2018. 斗蔵山のモミ・ウラジロガシ林の樹幹投影図による30年間の群落の変化－その②. 宮城の植物, 43: 12-21. 宮城植物の会.
- 32 滝口政彦・望月謙吉. 2019. 斗蔵山のモミ・ウラジロガシ林の樹幹投影図による30年間の群落の変化－その③. 宮城の植物, 44: 20-29. 宮城植物の会.
- 33 滝口政彦・望月謙吉. 2020. 斗蔵山のモミ・ウラジロガシ林の樹幹投影図による30年間の群落の変化－その④. 宮城の植物, 45: 14-22. 宮城植物の会.
- 34 白石市植物誌編集委員会(編). 1983. 白石市植物誌. 256pp. 白石市植物誌刊行会.
- 35 滝口政彦・上野雄規. 2012. 宮城県のサクラバハンノキの分布と生態. 宮城の植物, 37: 27-31. 宮城植物の会.
- 36 大柳雄彦・平吹喜彦. 1994. 加護坊・麓岳山環境保全地域の植生.『加護坊・麓岳山環境保全地域学術調査報告書』(加護坊・麓岳山環境保全地域学術調査委員会編), 47-124＋植生図. 宮城県環境生活部環境保全課.
- 37 平吹喜彦・菅野洋. 2014. 深山緑地環境保全地域の植物相と植生.『深山緑地環境保全地域学術調査報告書』(深山緑地環境保全地域学術調査会編), 3-59. 宮城県環境生活部自然保護課.
- 38 宮城県(編). 1986. 深山緑地環境保全地域指定理由書. 宮城県環境生活部自然保護課内部資料.
- 39 長岡久馬. 2010-2011. 深山ファンタジー-. http://pub.ne.jp/qma888japan/?cat_id=138956/
- 40 硯上山・万石浦県立自然公園学術調査委員会(編). 1994. 硯上山・万石浦県立自然公園学術調査報告書. 278pp. 宮城県環境生活部環境保全課.
- 41 菅原亀悦・内藤俊彦. 1985. 太白山県自然環境保全地域の植生.『太白山県自然環境保全地域学術調査報告書』(太白山県自然環境保全地域学術調査委員会編), 75-84＋図版. 宮城県保健環境部環境保全課.
- 42 環境省自然環境局生物多様性センター. 2015. 平成26年度 東北地方太平洋沿岸地域 植生・海域等調査 調査報告書. http://www.shiokaze.biodic.go.jp/data/26sokuhou/h26vegetation_wetlands_report1.pdf.
- 43 宮城県土木部(編). 2021. 東日本大震災宮城県河川海岸復旧・復興環境配慮記録誌. 344pp. 宮城県土木部.
- 44 環境省自然環境局生物多様性センター(編). 2025. グリーン復興プロジェクトしおかぜ自然環境ログ 調査報告情報. http://www.shiokaze.biodic.go.jp/
- 45 滝口政彦・平吹喜彦・内藤俊彦・杉山多喜子・下山祐樹・葛西英明・菅野洋. 2014. 宮城県の東日本大震災津波被災地における劇的な植生変遷. 植生情報, 18: 55-69.
- 46 大橋広好・佐々木豊・大橋一晶. 2006. アカガシの北限. 植物研究雑誌, 81: 173-187.
- 47 吉岡邦二. 1954. 東北地方森林の群落学的研究(第4報) スタジイ北限地帯の森林. 植物生態学会報, 3：219-229.
- 48 米山明則. 1992. 亶理地方のシイノキについて(2). 宮城の植物, 17: 35. 宮城植物の会.
- 49 米山明則. 1995. 亶理地方のシイノキについて(3). 宮城の植物, 20: 25-28. 宮城植物の会.
- 50 高山晴夫. 1997. 北限域の常緑広葉樹林 - 志津川湾椿島のタブノキ林を中心として-. 『みやぎの自然』(日本生物教育会宮城大会実行委員会記念誌編集部編), 21-30. 日本生物教育会宮城大会実行委員会記念誌編集部.
- 51 環境省生物多様性のための30by30アライアンス事務局(編). 2025. 30by30認定サイト. http://policies.env.go.jp/nature/biodiversity/30by30alliance/kyousei/nintei/index.html

- 菅原亀悦・内藤俊彦・竹原明秀・小関慎二. 1992. 南三陸金華山国定公園地域における島嶼の植生.『南三陸金華山国定公園学術調査報告書』(南三陸金華山国定公園学術調査委員会編), 175-300. 宮城県.
- 佐々木豊・大橋広好. 2007. モクゲンジの日本国内における分布と生態, および新品種ウスギモクゲンジ. 植物研究雑誌, 82: 160-174.
- 下山祐樹. 2018. 東日本大震災後に東松島市の砂浜海岸で記録したハマナス群落. 宮城の植物, 43: 9-11. 宮城植物の会.
- 菅原亀悦・内藤俊彦. 1982. 仙台湾海浜県自然環境保全地域の植生.『仙台湾海浜県自然環境保全地域学術調査報告書』(仙台湾海浜県自然環境保全地域学術調査委員会編), 51-61 + 図版. 宮城県.
- 宮城県・社団法人宮城県林業公社(編). 1994. 歴史かおる潮騒の森整備事業基本構想策定調査報告書. 260pp.
- 日比野紘一郎. 1999. 植物・植生の現状.『仙台湾海浜地域保全計画(学術報告編)』43-75. 宮城県.
- 大柳雄彦・平吹喜彦・庄子邦光. 2002. 仙台湾海浜県自然環境保全地域の植物相.『仙台湾海浜県自然環境保全地域学術調査報告書』(仙台湾海浜県自然環境保全地域学術調査委員会編), 3-42. 宮城県環境生活部自然保護課.
- 平吹喜彦・長島康雄・横沢秀夫・大柳雅彦. 2002. 仙台湾海浜県自然環境保全地域の植生: モニタリングのための基礎調査.『仙台湾海浜県自然環境保全地域学術調査報告書』(仙台湾海浜県自然環境保全地域学術調査委員会編), 43-66. 宮城県環境生活部自然保全課.
- 田村浩喜・金子智紀・加賀正博・村上雅美・坂本知己. 2011. 仙台市荒浜海岸林の津波被害. 平成23年度日本海岸林学会講演要旨集, 9-10.
- 亘理町史編集委員会(編). 2023. 亘理町史 自然編. 507pp.+ 付図. 宮城県亘理町.
- 岩沼市史編集室(編). 2018. 岩沼市史 第9巻 特別編Ⅰ 自然. 427pp.+ 別冊資料 + 付図. 宮城県岩沼市.
- 岩沼市史編集委員会(編). 2022. 岩沼市史 第11巻 特別編Ⅲ 震災. 555pp.+ 付録 宮城県岩沼市.
- 岡浩平・平吹喜彦. 2015. 津波で攪乱された海岸林内の根返り跡に成立した湿地植生と微環境特性. 日本緑化工学会誌, 41(1): 79-84.
- 日本生態学会東北地区会(編). 2016. 「生態学が語る東日本大震災 - 自然界に何が起きたのか -」. 191pp. 文一総合出版.
- 長島康雄・攝待尚子. 2016. 東北地方太平洋沖地震津波後に残存した老齢防潮マツ林内の常緑広葉樹. 仙台市科学館研究報告, 26: 70-80.
- 菊池慶子. 2017. 仙台湾岸における防災林の植林史 - 宮城県名取市海岸部を中心に -. 東北学院大学学術誌 歴史と文化, 55: 9-41.
- 岡浩平・平吹喜彦. 2017. 仙台湾沿岸における盛土回避による海浜植物の保全効果. 景観生態学, 22: 1-9.
- 七海絵里・大澤啓志・石川幹子. 2019. 仙台平野の海岸林における津波被災時の残存樹木の8年後の生残状況. 日本緑化工学会誌, 45(1): 62-67.
- 菅野洋・富田瑞樹・平吹喜彦・原慶太郎. 2023. 仙台湾沿岸における津波による低頻度大規模攪乱後10生育期目の植生と人為攪乱の影響. 景観生態学, 28(1&2): 13-23.
- 吉岡邦二・加藤陸奥雄・山本護太郎. 1966. 栗駒山地域の生物相.『栗駒自然公園学術調査報告』(財団法人日本自然保護協会編), 33-98. 財団法人日本自然保護協会.
- 栗駒国定公園及び県立自然公園旭山学術調査委員会(編). 1983. 栗駒国定公園及び県立自然公園旭山学術調査報告書. 150pp.+ 付図. 宮城県保健環境部環境保全課.
- 菅原亀悦. 1997. 栗駒山の植生.『みやぎの自然』(日本生物教育会宮城大会実行委員会記念誌編集部会編), 11-15. 日本生物教育会宮城大会実行委員会記念誌編集部会.
- 船形連峰学術調査委員会(編). 1976. 県立自然公園船形連峰学術調査報告. 98pp.+ 付図. 宮城県.
- 宮城県保健環境部環境保全課(編). 1984. 県立自然公園船形連峰. ふるさとの自然, 6: 21-25. 宮城県.
- 山形県総合術調査会(編). 1989. 御所山. 500pp. 山形県総合学術調査会.
- 県立自然公園船形連峰学術調査委員会(編). 1991. 県立自然公園船形連峰(船形山南西部)学術調査報告書. 83pp. 宮城県保健環境部環境保全課.
- 斎藤善雄. 1997. 船形山のブナ林 - ふるさとの自然を考える -.『みやぎの自然』(日本生物教育会宮城大会実行委員会記念誌編集部会編), 80-95. 日本生物教育会宮城大会実行委員会記念誌編集部会.
- 竹原明秀. 1997. 船形山北麓の植物的自然.『みやぎの自然』(日本生物教育会宮城大会実行委員会記念誌編集部会編), 96-112. 日本生物教育会宮城大会実行委員会記念編集部会.
- 木村有香. 1955. 蔵王山の植物.『蔵王連峰学術調査書』,7-51 + 図版. 宮城県観光課.
- 菊池多賀夫. 1972. 蔵王山の植生(予報).『蔵王山・蒲生干潟の環境破壊による生物群集の動態に関する研究』(吉岡邦二編), 1-9. 仙台.
- 菊池多賀夫. 1975. 蔵王山の植生. とくに人為的干渉をうけた群落のひろがりについて.『蔵王山の環境破壊による生物群集の動態に関する研究』(吉岡邦二編), 1-3. 仙台.
- 橘ヒサ子. 1975. 踏みつけによる蔵王山湿原植生の破域と保護.『蔵王山の環境破壊による生物群集の動態に関する研究』(吉岡邦二編), 67-79. 仙台.
- 飯泉茂・菅原亀悦・内藤俊彦・信濃豊子. 1975. 蔵王山における車道沿いおよび観光施設周辺の裸地に侵入した植物に関する生態調査.『蔵王山の環境破壊による生物群集の動態に関する研究』(吉岡邦二編), 80-86. 仙台.
- 菊池多賀夫・菅原亀悦. 1978. 自然公園蔵王連峰の植生.『蔵王国定公園・県立自然公園蔵王連峰学術調査報告』(自然公園蔵王連峰学術調査委員会編), 52-66. 宮城県.
- 内藤俊彦. 1997. 蔵王山の生物的自然.『みやぎの自然』(日本生物教育会宮城大会実行委員会記念誌編集部会編), 257-266. 日本生物教育会宮城大会実行委員会記念誌編集部会.
- 世界谷地湿原学術調査委員会(編). 1985. 世界谷地湿原学術調査報告書. 119pp. 宮城県.
- 菅原亀悦. 1997. 世界谷地の植生.『みやぎの自然』(日本生物教育会宮城大会実行委員会記念誌編集部会編), 16-20. 日本生物教育会宮城大会実行委員会記念誌編集部会.
- 魚取沼のテツギョ保全対策委員会(編). 2000.「魚取沼のテツギョ保全対策事業」学術調査報告書. 152pp. 宮城県環境生活部自然保護課.
- 宮城県保健環境部環境保全課(編). 1992. 栗駒山の原生林/蕪栗沼の沼沢地植物群落/魚取沼県自然環境保全地域. ふるさとの自然, 14: 11-17. 宮城県.
- 商人沼県自然環境保全地域候補地学術調査会(編). 2011. 商人沼県自然環境保全地域候補地学術調査報告書. 137pp. 宮城県環境生活部自然保護課.
- 高橋和吉. 1992. 上荒沢・荒沢湖沼群地域の植物相.『上荒沢・荒沢湖沼群地域学術調査報告書』(上荒沢・荒沢湖沼群地域学術調査委員会編), 21-47. 宮城県小野田町.
- 竹原明秀・菅原亀悦. 1992. 上荒沢・荒沢湖沼群地域の植生.『上荒沢・荒沢湖沼群地域学術調査報告書』(上荒沢・荒沢湖沼群地域学術調査委員会編), 67-168. 宮城県小野田町.
- 荒沢県自然環境保全地域候補地学術調査委員会(編). 1995. 荒沢県自然環境保全地域候補地学術調査報告書. 221pp. 宮城県.
- 宮城県保健環境部環境保全課(編). 1984. 風穴の自然. ふるさとの自然, 6: 10-13. 宮城県.
- 横山正弘. 2020. 宮城県の風穴地における蘚苔<コケ>植物相の概要. 風穴の自然と利用に関する研究, 33-38. 全国風穴ネットワーク・東北植物研究会.
- 上野雄規・浅井元朗. 2019. 宮城県白石市寒成山第一風穴の植物相. 宮城の植物, 44: 30-43. 宮城植物の会.

- 小原黒森風穴調査チーム(編). 2020.『小原黒森風穴並びに近隣の風穴における自然とその利用』報告書. 白石市文化財調査報告書61集, 61pp. 白石市教育委員会.
- 大柳雄彦・平吹喜彦. 1999. 鱒淵観音堂県自然環境保全地域の植物相.『鱒淵観音堂県自然環境保全地域学術調査報告書』(鱒淵観音堂県自然環境保全地域学術調査委員会編), 11-30. 宮城県環境生活部環境保全課.
- 櫛田恵子・平吹喜彦・大柳雄彦. 1999. 鱒淵観音堂県自然環境保全地域の植生.『鱒淵観音堂県自然環境保全地域学術調査報告書』(鱒淵観音堂県自然環境保全地域学術調査委員会編), 31-68. 宮城県環境生活部環境保全課.
- 化女沼植物調査会. 1981. 古川市文化財調査報告書「古川市化女沼およびその周辺地域植物調査報告書」. 古川市教育委員会.
- 平吹喜彦・高槻成紀. 1995. 牡鹿半島駒ヶ峰に残る温帯混交林の組成と構造. 宮城教育大学紀要(第2分冊 自然科学・教育科学), 29: 33-47.
- Takatsuki S. and Hirabuki Y. 1998. Effects of sika deer browsing on the structure and regeneration of the Abies firma forest on Kinkazan Island, northern Japan. Journal of Sustainable Forestry, 6: 203-221.
- 大柳雄彦・平吹喜彦. 2000. 丸田沢緑地環境保全地域の植物相.『丸田沢緑地環境保全地域学術調査報告書』(丸田沢緑地環境保全地域学術調査委員会編), 3-34. 宮城県環境生活部自然保護課.
- 平吹喜彦・大柳雄彦・庄子邦光. 2000. 丸田沢緑地環境保全地域の植生.『丸田沢緑地環境保全地域学術調査報告書』(丸田沢緑地環境保全地域学術調査委員会編), 35-61. 宮城県環境生活部自然保護課.
- 遠田宏・持田幸良・平吹喜彦. 1990. 東北大学理学部付属植物園のモミ林の動態.『仙台城址の自然』(加藤陸奥雄編), 177-188. 仙台市教育委員会.
- 平吹喜彦. 1994. 青葉山のモミ林. 市史せんだい, 4: 58-69. 仙台市博物館.
- 立石庸一・黒沢高秀・梶田忠. 1993. 東北大学理学部附属植物園 自生植物目録(シダ植物・種子植物) 第4版. 57pp. 東北大学理学部附属植物園.
- 菅野洋・平吹喜彦・大柳雄彦. 2007. 愛宕山緑地環境保全地域の植生.『愛宕山緑地環境保全地域学術調査報告書』(愛宕山緑地環境保全地域指定変更学術調査検討会編), 35-57. 宮城県環境生活部自然保護課.
- 菊池多賀夫. 1973. 伊豆沼湖沼群の沼沢地植物群落.『伊豆沼湖沼群学術調査報告書』(財団法人日本自然保護協会編), 15-25. 財団法人日本自然保護協会.
- 牧田肇. 1973. 伊豆沼湖沼群の水生植物群落.『伊豆沼湖沼群学術調査報告書』(財団法人日本自然保護協会編), 26-29. 財団法人日本自然保護協会.
- (財)宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団. 2010. 伊豆沼から新たに記録されたアカウキクサ属植物. 伊豆沼・内沼研究報告, 4: 19-24.
- (財)宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団. 2010. 伊豆沼・内沼産植物リスト. 伊豆沼・内沼研究報告, 4: 41-61.
- 藤本泰文・速水裕樹・横山潤. 2019. 1976年から2012年にかけて伊豆沼・内沼の湖岸植生で生じたマコモ群落の消失と樹林化. 湿地研究, 9: 29-37.
- 平吹喜彦・大柳雄彦・荒木祐二・富田美奈. 2001. 加瀬沼緑地環境保全地域の植生.『加瀬沼緑地環境保全地域学術調査報告書』(加瀬沼緑地環境保全地域学術調査委員会編), 27-56. 宮城県環境生活部自然保護課.
- 杉山多喜子・葛西英明・恵美泰子. 2013. 東日本大震災大津波後の仙台市大沼の植物相の変化. 東北植物研究, 17: 44-52.
- 宮城県(編). 1986. みやぎの島々. ふるさとの自然, 8: 9-12. 宮城県保健環境部環境保全課.
- 県立自然公園松島学術調査委員会(編). 1981. 県立自然公園松島学術調査報告書. 136pp.+ 図版. 宮城県生活環境部環境保全課.
- 宮城県教育庁文化財保護課(編). 2010. 特別名勝松島保存管理計画. 119pp. 宮城県教育委員会.
- 京道信次郎・加藤鉄次郎. 1932. 金華山の植物. 宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告, 7: 128-182.
- 吉井義次・吉岡邦二. 1949. 金華山島の植物群落. 生態学研究12(3-4): 84-105.
- 金華山島生態系保全調査委員会(編). 1979. 金華山島の生態系と自然保護. 48pp. 宮城県生活環境部環境保全課.
- 菅野洋・高橋綾子・阿部鴻文・早坂みどり. 2021. ニホンジカが生息する宮城県金華山における31年間(1975-2006年)の森林域の変化. 景観生態学, 26(2): 87-93.
- 蒲生干潟自然再生協議会(編). 2008. 蒲生干潟自然再生全体構想. 52pp. 宮城県環境生活部自然保護課.
- 蒲生を守る会(編). 2012. 蒲生を守る会だより 64. 30pp. 仙台.
- 仙台市科学館(編). 2025. 自然豊かな蒲生干潟 継続観察プロジェクト. https://www.kagakukan.sendai-c.ed.jp/gamoh/
- 岡浩平・平吹喜彦. 2014. 2011年大津波を受けた仙台湾南蒲生の海浜植物の再生状況. 保全生態学研究, 19: 189-199.
- 下山祐樹. 2019. 特集：東日本大震災と植物東日本大震災後に宮城県沿岸で得た砂丘植生の群落組成調査資料. 東北植物研究, 20: 43-58.
- 平吹喜彦・富田瑞樹・菅野洋・原慶太郎. 2011. 東日本大震災・大津波で被災した仙台湾砂浜海岸エコトーンとその植生状況. 薬用植物研究, 33(2): 45-57.

（執筆者：菅野 洋・西中(沖田) 董・齊藤 賢治・平吹 喜彦）

カラマツ群落

■**群落の概要** カラマツは高さ20～30mになる日本特産の落葉針葉高木で、本州の中部・関東の山地に分布する。宮城県の蔵王連峰の馬ノ神岳が北限で、静岡県明石山脈が南限である。有用造林木として各地に植えられているが、自然林は少ない。

■**県内の分布** 県内の自然分布は、馬ノ神岳だけである。

単-1 馬ノ神岳のカラマツ群落

壊滅危惧(3)

2016 壊滅危惧(3)

■**群落の位置** 蔵王町遠刈田温泉、白石市福岡八宮(標高約1340～1520m、北緯:38°5'34"～38°5'43"、東経:140°29'49"～140°30'8")

■**選定理由と現状** 亜高山帯の厳しい環境下に成立した矮性低木林で、樹高5m以下のダケカンパが優占し、カラマツ、ナナカマド、ミネカエデなどが生育する。このカラマツは宮城県唯一の自生個体群で、しかも隔離分布し、北限に位置することから、極めて貴重。

■**保護保全上の留意点** カラマツの貴重な自然分布個体群であるが、2007年頃には11個体が生育するに過ぎない。東北森林管理局や林木育種センター東北育種場などの公的機関が、生育地内外で保存対策を実施している。

■**特記事項** 蔵王国立公園第2種特別地域、蔵王生物群集保護林、特定植物群落(対照番号70)

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(単-120)を変更

■**文献番号** 1、2、4、5、6、7

(調査・執筆:三島木 進、西中 董)



(撮影:三島木 進、2023年6月17日)

キタゴヨウ・クロベ群落

■**群落の概要** キタゴヨウは高さ約30mになる常緑針葉高木で、北海道南部・本州中北部に分布する。またクロベは高さ約30mになる常緑針葉高木で、本州・四国に分布するが、中部地方以北に多い。これらの樹種は、尾根筋や岩角地における土地的極相林として、コマツガヤヒノキアスナロなどの常緑針葉高木と混交して群落を形成する場合が多い。

■**県内の分布** キタゴヨウ・クロベ群落は、主に奥羽山脈の標高400～500m以上の山地帯の尾根筋や岩角地に成立している。特に、大崎市の竹ノ子森と須金岳の南斜面、船形山の東斜面の千本松山には見事な群落が成立している。

単-2 鎌内沢のクロベ・ヒノキアスナロ群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

■**群落の位置** 大崎市鳴子温泉鬼首(標高約510～590m、北緯:38°53'9"～38°53'26"、東経:140°43'10"～140°43'23")

■**選定理由と現状** 鎌内沢の尾根や急斜面に分布する発達した林分で、樹高22m前後、胸高直径30～90cm級のクロベが優占し、ヒノキアスナロをはじめブナ、キタゴヨウ、ホオノキなどが生育する。この地域の土地的極相林の典型として貴重。

■**保護保全上の留意点** 国立公園指定地域内に位置することから、引き続き厳正に保護する必要がある。

■**特記事項** 栗駒国立公園第3種特別地域、特定植物群落(対照番号108)

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(単-88)を変更

■**文献番号** 2

(調査・執筆:菅野 洋)



(撮影:菅野 洋、2023年10月8日)

単-3 千本松山のキタゴヨウ・クロベ群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

■**群落の位置** 大和町吉田(標高約1060～1290m、北緯:38°26'45"～38°27'19"、東経:140°38'2"～140°38'47")

■**選定理由と現状** 蛇ヶ岳北東斜面の千本松山では、尾根に沿って樹高20m前後のキタゴヨウとクロベが分布し、平尾根ではブナも混交する。林床にはハクサンシャクナゲ、オオカメノキ、ヒメモチ、シノブカグマなどが生育する。キタゴヨウ・クロベ群落としては、県内で最も広い面積を有している。

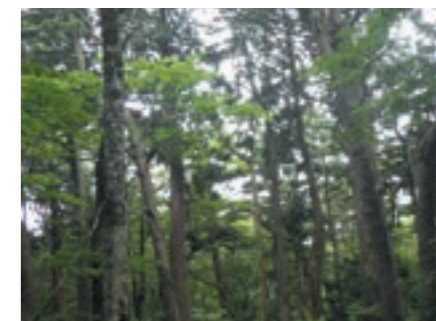
■**保護保全上の留意点** 山地帯の尾根や岩角地の土地的極相林として、植物群落保護林に指定されている。このまま存続すると推察されるが、継続した見守りが肝要。

■**特記事項** 県立自然公園船形連峰第1・2種特別地域、船形山(御所山)生物群集保護林、特定植物群落(対照番号118)

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(単-89)を変更

■**文献番号** 2、4

(調査・執筆:吉田 馨、西中 董)



(撮影:吉田 馨、2023年8月23日)

スギ群落

■**群落の概要** スギは日本特産の常緑針葉高木で、普通高さ40m内外になるが、中には高さ70mに達するものもある。本州・四国・九州・屋久島に分布する。気候的には冷温帯域に生育し、秋田県や屋久島には見事なスギ群落がある。

■**県内の分布** スギは古くからの造林木で、天然分布かどうかを判断するのは難しい場合が多いが、大崎市の鬼首地区の自生山の群落は自然林とされている。

単-4 自生山のスギ群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

■**群落の位置** 大崎市鳴子温泉鬼首(標高約460～830m、北緯:38°52'1"～38°52'36"、東経:140°38'43"～140°39'21")

■**選定理由と現状** 樹高20～26m、胸高直径40～100cmのスギが優占する群落で、キタゴヨウ、クロベ、ブナが混交している。林床にはイワウチワが多く、シノブカグマ、ヤマソテツなどが生育する。県内では数少ない、発達したスギ自然林として貴重。

■**保護保全上の留意点** 古い切り株が見られるが、近年は伐採行為はない。希少個体群保護林にも指定されており、このまま存続すると推察されるが、継続した見守りが肝要。

■**特記事項** 栗駒国立公園第1種特別地域、自生山スギ希少個体群保護林、特定植物群落(対照番号46)

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(単-90)を変更

■**文献番号** 1、2、4

(調査・執筆:菅野 洋)



(撮影:菅野 洋、2023年10月8日)

ブナ群落

- **群落の概要** ブナは高さ30mになる落葉広葉高木で、北海道西南部・本州・四国・九州に広く分布し、冷温帯域を代表する極相林を形成する。太平洋側と日本海側のブナ群落では種組成が異なっている。各地に広大な面積を有していたブナ群落であったが、昭和30年以降の拡大造林計画によって大面積に伐採が行われ、スギやカラマツの造林地に置き換えられ、著しく減少した。
- **県内の分布** ブナ群落は、県内の山地帯を広く覆う代表的な極相林である。奥羽山脈の日本海側の種組成をもつ群落と、阿武隈山地と北上山地に見られる太平洋側の種組成をもつ群落があるが、いずれも伐採などにより、面積は著しく減少した。

単-5 鎌内沢のブナ群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

- **群落の位置** 大崎市鳴子温泉鬼首(標高約570～620m、北緯:38°53'18"～38°53'28"、東経:140°43'16"～140°43'24")
- **選定理由と現状** 樹高28m前後、胸高直径1mに達するブナが優勢で、ミズナラ、ミズメ、ハリギリ、ホオノキなどが混交する。林床にはチマキザサ、オオカメノキ、ハイイヌガヤ、ツルシキミ、オクノカンスゲなど、日本海型ブナ林を指標する植物が顕著。栗駒山麓域で伐採を免れた貴重な林分。
- **保護保全上の留意点** 希少個体群保護林にも指定されており、このまま存続すると推察する。ただし、林道の拡幅や山菜・キノコの採取に対する保護対策が必要である。
- **特記事項** 栗駒国定公園第3種特別地域、鎌内ブナ遺伝資源希少個体群保護林、特定植物群落(対照番号148)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-95)を変更
- **文献番号** 3、4



(撮影:菅野 洋、2023年10月8日)

(調査・執筆:菅野 洋)

単-6 薬菜山のブナ群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

- **群落の位置** 加美町字味ヶ袋(標高約380～545m、北緯:38°34'24"～38°34'32"、東経:140°42'19"～140°42'32")
- **選定理由と現状** 薬菜山山頂(標高553m)と薬菜神社奥宮をつなぐ主稜線の東側急斜面に、小面積で残存する。樹高22m前後のブナが優占し、ハリギリ、ハウチワカエデ、ミズキなどが混交する。亜木層・低木層は未発達で、林床にはミヤマカンスゲ、ヒメアオキ、オオバクロモジ、ハイイヌガヤなどが生育。この地域の原植生を知る上で貴重。
- **保護保全上の留意点** 加美町は薬菜山の森林を不伐の森として保護している。ブナ林に目立った変化はないが、登山道に沿って土壌の浅い急峻な斜面に分布していることから、植生の踏みつけや土壌の流亡に留意する必要がある。
- **特記事項** 加美町指定天然記念物(薬菜山のブナ林、サワグルミ・トチノキ林の原生林)、県立自然公園船形連峰第2種特別地域
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-94)を変更
- **文献番号** 8



(撮影:平吹 喜彦、2023年8月11日)

(調査・執筆:齊藤 賢治、平吹 喜彦)

単-7 筆甫のブナ群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

- **群落の位置** 丸森町筆甫(標高約360～390m、北緯:37°49'46"～49'49"、東経:140°43'1"～43'3")
- **選定理由と現状** 樹高10～15m、胸高直径10～30cmのブナが優占し、ミズナラ、コナラ、ホオノキ、カスミザクラ、モミなどが混交する。林床にはヤマツツジ、ミヤコザサ、アズマネザサ、ホソバヒカゲスゲなどが生育。尾根から北斜面上部に小面積で残存する萌芽林ではあるが、阿武隈山地では希な太平洋型・中間温帯性ブナ優占林として貴重。
- **保護保全上の留意点** 周辺に落葉広葉樹二次林や植林が分布しており、将来、伐採される恐れがある。所有者に希少性を理解いただきながら、禁伐・保護することが望ましい。
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-96)を変更

(調査・執筆:三島木 進、西中 董)



(撮影:三島木 進、2023年10月10日)

単-8 手倉山のブナ・イヌブナ群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

- **群落の位置** 丸森町筆甫・大内(標高約540～660m、北緯:37°48'2"～37°48'24"、東経:140°47'26"～140°48'1")
- **選定理由と現状** 手倉山(標高672m)の北斜面に残存する林分で、樹高23m、胸高直径40cm以上のブナとイヌブナが優占し、ミズナラ、ホオノキ、モミなどが混交する。阿武隈山地では希な太平洋型・中間温帯性ブナ・イヌブナ優占林として貴重。
- **保護保全上の留意点** 国有林で、かつては伐採計画もあったが、地域住民の反対誓願で残存した経緯がある。禁伐・保護が望ましい。
- **特記事項** 阿武隈渓谷県立自然公園第1～3種特別地域、特定植物群落(対照番号45)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-92)を変更
- **文献番号** 1、2、9

(調査・執筆:三島木 進、西中 董)



(撮影:三島木 進、2022年9月6日)

ヨコグラノキ群落

- **群落の概要** ヨコグラノキは高さ10mほどになる落葉広葉小高木で、宮城県以南の本州・四国・九州の山地に希にみられ、特に渓谷や崖に孤立的に生育する。
- **県内の分布** ヨコグラノキは、宮城県が分布の北限で、白石市小原の虎岩と七ヶ宿町若林有谷の2か所で生育が知られている。

単-9 有谷のヨコグラノキ群落

壊滅危惧(3)

2016 壊滅危惧(3)

- **群落の位置** 七ヶ宿町(標高約510～580m、北緯:37°59'23"～37°59'25"、東経:140°29'36"～140°29'39")
- **選定理由と現状** ヨコグラノキは生育地が少なく、隔離分布する貴重種である。1981年、有谷岳(標高663m)南西斜面の崖で、樹高5～7mのクマシデ、アカシデなどと混交する31本のヨコグラノキが確認された。2011年には10本、2021年には8本のヨコグラノキが再確認されている。
- **保護保全上の留意点** 本県では、虎岩に次ぐ2番目の生育地として貴重。生育地は不安定な崖で、到達も困難であるため、当面は人為的影響は考えにくい。見守りを継続した上で、予防的な保護対策を講じることが望ましい。
- **特記事項** 蔵王高原県立自然公園普通地域、特定植物群落(対照番号125)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-73)を変更
- **文献番号** 2、10、11

(調査・執筆:三島木 進、西中 董)



(撮影:三島木 進、2021年10月24日)

単-10 虎岩のヨコグラノキ群落

壊滅状態(4)

2016 壊滅状態(4)

- **群落の位置** 白石市小原(標高約230～310m、北緯:37°57'23"～37°57'24"、東経:140°30'58"～140°31'1")
- **選定理由と現状** 虎岩(標高366m)のヨコグラノキは、分布北限として1942年に国の天然記念物に指定された。当時の指定木は枯死し、現存する個体は1974年に岩壁上で10本発見されたうちの数本だけである。
- **保護保全上の留意点** ヨコグラノキはほかの植物が侵入できないような岩壁や崖に生育する。より厳格な保護対策を講じた上で、生育状況を継続して見守る必要がある。
- **特記事項** 国指定天然記念物(ヨコグラノキ北限地帯)、蔵王高原県立自然公園普通地域、特定植物群落(対照番号67)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-72)を変更
- **文献番号** 1、2、12

(調査・執筆:三島木 進、西中 董)



(撮影:三島木 進、2021年10月24日)

サワグルミ・トチノキ群落

- **群落の概要** サワグルミとトチノキは高さ30mほどになる落葉広葉高木で、ともに北海道南部・本州・四国・九州に分布する。これらの樹種は単独で群落を構成する場合は少なく、カツラなどと混生する群落をつくる。この群落は冷温帯域の山地の溪流沿いの湿った砂礫地や扇状地に広く分布し、特に多雪地において優勢である。
- **県内の分布** 奥羽山脈の山地帯の溪流沿いの湿った砂礫地や扇状地などに土地的極相林として成立する。小面積の林分は各地に見られるが、比較的まとまった面積をもつものは少ない。立地で砂礫の多い所ではサワグルミ、壤土の多い所ではトチノキが優勢になる。

単-11 白糸の滝のサワグルミ・トチノキ群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

- **群落の位置** 栗原市花山(標高約420~470m、北緯:38°52'38"~38°53'2"、東経:140°45'38"~140°45'48")
- **選定理由と現状** 樹高20m以上、胸高直径40~65cmのサワグルミが優占し、カツラやトチノキが混交する林分。林床にはリョウメンシダが密生し、ミヤマラクサ、ツルネコノメソウ、ジュウモンジシダ、ウワバミソウ、ズダヤクシュなどが生育。崖錐の土地的極相の特徴を備えた林分として貴重。
- **保護保全上の留意点** 国定公園内に位置するが、明瞭な保護対策・管理は認知できなかった。近年、イノシシによる地表の掘り起こし跡が散見されるようになり、林床植生への影響が懸念されることから、見守りが必要である。
- **特記事項** 栗駒国定公園第3種特別地域、特定植物群落(対照番号143)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-103)を変更
- **文献番号** 3



(撮影:菅野 洋、2023年10月8日)

(調査・執筆:菅野 洋)

単-12 薬菜山のサワグルミ・トチノキ群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

- **群落の位置** 加美町字味ヶ袋(標高約360~470m、北緯:38°34'28"~38°34'32"、東経:140°42'24"~140°42'34")
- **選定理由と現状** 「薬菜山のブナ群落」に接続する谷頭~崖錐に分布し、樹高26m前後のサワグルミとトチノキが混交する発達した林分。低木層にはウリノキ、ハイイヌガヤ、チマキザサなどが散生し、草本層には優占するリョウメンシダのほか、ジュウモンジシダ、ウワバミソウといった湿潤性の陰生植物が生育する。この地域の原植生を知る上で貴重。
- **保護保全上の留意点** 加美町は薬菜山の森林を不伐の森として保護している。立地の急峻さ、不安定さもあって、根返りによる倒木が顕著。斜面上部に残存するブナ林とともに「ひとつながりの生態系」として保護することが肝要。
- **特記事項** 加美町指定天然記念物(薬菜山のブナ林、サワグルミ・トチノキ林の原生林)、県立自然公園船形連峰第2種特別地域
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-101)を変更
- **文献番号** 8



(撮影:平吹 喜彦、2023年8月11日)

(調査・執筆:齊藤 賢治、平吹 喜彦)

単-13 前森のサワグルミ・トチノキ群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

- **群落の位置** 加美町字漆沢宿(標高約590~640m、北緯:38°31'1"~38°31'6"、東経:140°35'56"~140°36'8")
- **選定理由と現状** 樹高25m前後のサワグルミが優占し、トチノキ、カツラ、オヒョウが混交する。林床にはリョウメンシダ、ミヤマラクサ、ハイイヌガヤなどが生育する。岩塊の多い湿潤な斜面に成立した土地的極相林で、前森周辺を代表する発達した林分である。
- **保護保全上の留意点** 人為が及びにくい場所に成立しているため、当面は特別な保護対策は不要で、見守ることが肝要。
- **特記事項** 県立自然公園船形連峰第2種特別地域、特定植物群落(対照番号114)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-102)を変更
- **文献番号** 2



(撮影:西中 董、2020年10月18日)

(調査・執筆:滝口 政彦、西中 董)

単-14 鈴沼のサワグルミ・トチノキ群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

- **群落の位置** 色麻町小栗山(標高約1030m、北緯:38°27'37"~38°27'42"、東経:140°38'24"~140°38'31")
- **選定理由と現状** 鈴沼(ルリ沼)の湖岸から上流の砂礫質扇状地に分布する樹高25m前後、胸高直径40cmほどのサワグルミが優勢な林分。カツラやオヒョウの大木が混交し、林床にはリョウメンシダ、ミヤマラクサなどが生育。船形山東麓を代表する自然度の高い山地溪畔林。
- **保護保全上の留意点** 原生状態が保たれている。ただ、来訪者の増加による劣化も懸念されることから、見守りを継続し、林道利用のあり方を含めて予防的に保護対策を講じることが望ましい。
- **特記事項** 県立自然公園船形連峰第2種特別地域、船形山(御所山)生物群集保護林、特定植物群落(対照番号116)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-100)を変更
- **文献番号** 2、4



(撮影:滝口 政彦、2024年6月21日)

(調査・執筆:滝口 政彦、菅野 洋)

単-15 大倉山氾濫原のサワグルミ・トチノキ群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

- **群落の位置** 大和町吉田(標高約710~750m、北緯:38°26'31"~38°26'46"、東経:140°40'44"~140°41'11")
- **選定理由と現状** 増水時に上流から運ばれてきた礫石が流路に沿って扇状地に広がる立地に、樹高25m前後、胸高直径50cmに達するサワグルミをはじめ、カツラ(胸高直径1m以上の個体が複数)、ハリギリ、トチノキなどの大木が林立する。林床にはニリンソウ、テンニンソウ、オニシモツケ、ヤグルマソウ、スマレサイシンなどが生育し、原生の山地溪畔林として貴重。
- **保護保全上の留意点** 近年、林道に接続する駐車スペースが直近に設けられた。安易な来訪者の増加、遊歩道などの過度の整備、踏圧・採取による植生の劣化といった懸念を払拭するためには、予防的な保護対策が必要。なお、溪流の氾濫に伴う地表変動や植生破壊は、この立地本来の自然攪乱であり、基本的には放任すべきである。
- **特記事項** 県立自然公園船形連峰第2・3種特別地域
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-104)を変更



(撮影:平吹 喜彦、2023年8月13日)

(調査・執筆:齊藤 賢治、平吹 喜彦)

フサザクラ群落

- **群落の概要** フサザクラは、谷あいや溪流沿いに生育する高さ10mほどになる落葉広葉小高木で、本州・四国・九州に分布する。宮城県南部が分布の北限である。
- **県内の分布** 県内では、丸森町や七ヶ宿町の谷あいに生育が知られている。

単-16 青葉南のフサザクラ群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

- **群落の位置** 丸森町大内(標高約250~280m、北緯:37°48'38"~37°48'48"、東経:140°49'40"~140°49'42")
- **選定理由と現状** 雉子尾川沿いに分布する、樹高10m前後のフサザクラが散生し、チドリノキ、アワブキ、ケヤキなどが混交する林分。下層にはコクサギ、カヤ、ジュウモンジシダ、ミヤマラクサなどが生育。近隣にはタマアジサイも生育し、分布北限に近いフサザクラ-タマアジサイ群集に相当する植分として貴重。
- **保護保全上の留意点** フサザクラは谷壁急斜面の下部に生育しており、落石・崩落による損傷が認められる。林道の管理者・工事施工者に対しては、貴重さ・保護対策の周知が必要。
- **特記事項** 阿武隈溪谷県立自然公園第2種特別地域、特定植物群落(対照番号43)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-75)を変更
- **文献番号** 1、2、9



(撮影:平吹 喜彦、2025年4月30日)

(調査・執筆:三島木 進、西中 董)

ハルニレ群落

- **群落の概要** ハルニレは高さ30mになる落葉広葉高木で、北海道・本州・四国・九州に分布するが、北方域に多い。ハルニレの優占する群落は、山地溪畔や沖積地などに成立し、北海道では普通に見られる反面、ほかでは少ない。
- **県内の分布** ハルニレは奥羽山脈の山地帯で沢沿いに点々と分布し、特に土壌が湿潤で深く、肥沃な立地で優占する。しかし、県内で発達した群落は希で、大崎市(旧鳴子町)鬼首の保呂内沢と田代などに知られているにすぎない。

単-17 保呂内沢のハルニレ群落

破壊危機(2)

2016 要注意(1)

- **群落の位置** 大崎市鳴子温泉鬼首(標高約400~440m、北緯:38°51'59"~38°52'22"、東経:140°42'39"~140°43'2")
- **選定理由と現状** 保呂内沢の氾濫原に成立したハルニレ優占林で、高木層ではシロヤナギが混交する。林床にはオニシモツケ、オクトリカブトのほかククザキイチゲ、オオウバユリ、サイハイラン、タニギキョウなどが生育。
- **保護保全上の留意点** 治山工事などによる直接的な改変に加えて、自然攪乱や水位の著しい低下による遷移の進行が懸念されることから、関係者への周知が必須。また近年、イノシシによる地表の掘り起こし跡が散見され、林床植生への影響が心配されることから見守りが必要。
- **特記事項** 栗駒国立公園普通地域、特定植物群落(対照番号126)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-107)を変更
- **文献番号** 2



(撮影:菅野 洋、2023年10月8日)

(調査・執筆:菅野 洋)

単-18 田代のハルニレ群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

- **群落の位置** 大崎市鳴子温泉鬼首(標高約460~490m、北緯:38°47'44"~38°48'19"、東経:140°43'53"~140°44'33")
- **選定理由と現状** 荒雄湖(鳴子ダム湖)に注ぐ田代川中流の氾濫原に、ハンノキ林とともに成立した樹高28m前後、胸高直径55cmに達するハルニレが優占する林分。高木層にはヤチダモが、林床にはオオハナウド、メタカラコウ、バイケイソウなど多数の湿潤性植物が生育し、早春植物も豊富。本県屈指の自然度と面積を有するハルニレ林として貴重。
- **保護保全上の留意点** 東北大学大学院農学研究科の川渡フィールドセンター内にあり、保護されてきた。心ない来訪者による山菜や山野草の採集、過度の踏みつけなどによる林床植生の荒廃に注意が必要。
- **特記事項** 一桧山・田代県自然環境保全地域、特定植物群落(対照番号48)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-106)を変更
- **文献番号** 1、2、13



(撮影:菅野 洋、2023年10月8日)

(調査・執筆:菅野 洋)

ハンノキ群落

- **群落の概要** ハンノキは高さ20mになる落葉広葉高木で、北海道・本州・四国・九州の低湿地に広く分布し、優占群落を形成する。
- **県内の分布** 海岸帯から山地帯に至る低湿地で、優占群落を形成する。特に、水田や畑地が開墾される以前の平野帯では、ハンノキ群落が各所に分布していたと推定されているが、今となっては河川の氾濫原や山合いの湿地などに小面積で残存するだけである。

単-19 芳の平のハンノキ-ミズバショウ群落

壊滅危機(3)

2016 壊滅危機(3)

- **群落の位置** 仙台市泉区(標高約480~490m、北緯:38°22'57"~38°23'9"、東経:140°43'14"~140°43'23")
- **選定理由と現状** 泉ヶ岳中腹の芳の平で、農地開発を免れて残存した貴重な湿地。伏流水や流入水によって涵養され、樹高7m前後のハンノキがまばらな林冠を形成し、低木層ではハイユツゲ、ミヤマメモドキ、ヨシガ、草本層ではミズバショウが優勢。
- **保護保全上の留意点** 案内板や木道が設置され、来訪者と保護の双方に対する配慮がなされている。しかし一方では、湿地の乾燥化、低木の繁茂、イノシシによる表土の掘り起こしや食害が認められ、仙台市と市民団体が保護活動を継続している。
- **特記事項** 仙台市指定天然記念物(泉ヶ岳のミズバショウほか湿生植物群生地)、県立自然公園船形連峰第3種特別地域、特定植物群落(対照番号120)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-110)を変更
- **文献番号** 2、14、15



(撮影:平吹 喜彦、2023年8月13日)

(調査・執筆:齊藤 賢治、平吹 喜彦)

単-20 砂生田沢のミズバショウ群落

壊滅危機(3)

2016 要注意(1)

- **群落の位置** 大和町宮床(標高約60~70m、北緯:38°22'46"~38°22'48"、東経:140°50'15"~140°50'18")
- **選定理由と現状** 残存するミズバショウ群生地としては、県内で最も標高の低い場所に位置する。ミズバショウのほかククザキイチゲ、ニリンソウ、ウワバミソウなどが生育。
- **保護保全上の留意点** イノシシによる表土の掘り起こしや食害、沢水の停滞や水質悪化の兆候が認められることから、見守りと保護対策が必要。また、ミズバショウが群生する谷底を囲む斜面はアカマツ植林地で、伐採に伴う濁水・土砂の流入が懸念されることから、集水域全体で予防的な周知や対策を講じることも望まれる。
- **特記事項** 特定植物群落(対照番号144)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-113)を変更
- **文献番号** 3



(撮影:菅野 洋、2023年4月4日)

(調査・執筆:菅野 洋)

単-21 三住のハンノキ-ミズバショウ群落

破壊危機(2)

2016 破壊危機(2)

- **群落の位置** 白石市福岡八宮(標高約630~660m、北緯:38°5'19"~38°5'39"、東経:140°32'8"~140°32'33")
- **選定理由と現状** 「水芭蕉の森」と「どうだんの森」からなるこの群落は、1995年頃に遊歩道などを整備後、一般に公開された。高さ8m前後の高木層にはハンノキ、ヤチダモが見られ、林床にはミズバショウ、ヤマドリゼンマイ、オオバイケイソウなどが生育。これほど面積の広いミズバショウ群生地は、県内では希。
- **保護保全上の留意点** 「水芭蕉の森」では2020年から、イノシシによるミズバショウ地下部の食害が散見されるようになった。2024年時点でその面積は指定地の10%以下であるが、拡大が懸念されることから見守りを強化し、保護対策を講じる必要がある。
- **特記事項** 蔵王国定公園第3種特別地域、特定植物群落(対照番号149)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-109)を変更
- **文献番号** 3



(撮影:三島木 進、2023年3月29日)

(調査・執筆:三島木 進、西中 董)

単-22 玉ノ木原のハンノキ－ミズバショウ群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

■**群落の位置** セケ宿町字干蒲(標高約530～540m、北緯:38°1'2"～38°1'6"、東経:140°17'24"～140°17'44")

■**選定理由と現状** 玉ノ木原は国道に接した東西約500mの湿原で、樹高10m前後のハンノキがパッチ状に分布する。低木層ではヨシが疎生し、草本層ではミズバショウが優占してヒメシロネ、カササゲなどが生育。県南地域では最大規模のミズバショウ群生地で、自然度も高い。

■**保護保全上の留意点** セケ宿町は湿原に案内板を設置し、木道を敷設するなどして保護・管理をしっかりと行っている。現状のままでよい。

■**特記事項** 特定植物群落(対照番号73)

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(単-108)を変更

■**文献番号** 1、2



(撮影:平吹 喜彦、2025年4月30日)

(調査・執筆:三島木 進、西中 董)

単一群落

山地帯／河辺林

オオバヤナギ群落

■**群落の概要** オオバヤナギは高さ30mほどになる落葉広葉高木で、北海道・国後島・本州の中部以北に分布し、速く離れて鳥取県の大山に見られる。河川源流の河畔や河床に群落を形成し、ドロノキやヤマハンノキ、シロヤナギ、オノエヤナギなどが混生する。

■**県内の分布** オオバヤナギの分布は極めて少なく、大和町升沢の荒川やセケ宿町の横川の河畔などに生育している。

単-23 升沢のオオバヤナギ群落

壊滅状態(4)

2016 壊滅状態(4)

■**群落の位置** 大和町吉田(標高約280～300m、北緯:38°28'16"～38°28'22"、東経:140°43'28"～140°43'39")

■**選定理由と現状** 高木層では、樹高15m前後のオオバヤナギとヤマハンノキが優勢で、サワグルミ、オノエヤナギなどが混交する。升沢地区の荒川にかかる升沢橋を中心に、中州や寄州に分布。オオバヤナギは日本海側に生育地が多い反面、太平洋側の本県ではごく限定され、貴重。

■**保護保全上の留意点** オオバヤナギの個体数は極めて少なく、さらにつる植物や近接木から被陰されて生育状態はよくない。大規模な出水攪乱が減って遷移が進んでいることから、先駆種であるオオバヤナギの推移を見守る必要がある。

■**特記事項** 県立自然公園船形連峰第3種特別地域、特定植物群落(対照番号117)

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(単-99)を変更

■**文献番号** 2



(撮影:菅野 洋、2023年10月14日)

(調査・執筆:菅野 洋)

単-24 横川のオオバヤナギ群落

壊滅状態(4)

2016 壊滅危惧(3)

■**群落の位置** セケ宿町字横川・大萱(標高約480～530m、北緯:38°1'35"～38°2'16"、東経:140°28'25"～140°28'32")

■**選定理由と現状** 横川の発電所取水堰付近から横川橋に至る寄州や高水敷に、オオバヤナギが優占する群落が小面積で分布する。高木層では樹高20～23mに達するオオバヤナギが優勢で、ヤマハンノキ、カツラなどが混交し、草本層にはクルマパソウ、テンニンソウなどが生育。県南地域では唯一のオオバヤナギ群落。

■**保護保全上の留意点** 近年の調査でオオバヤナギは確認されていない。河岸の改修工事や砂防ダムの建設によって、生育地である寄州や高水敷の微環境が変化したためと推察される。詳細な調査を行った上で、適切な河川管理・保護対策を検討する必要がある。

■**特記事項** 蔵王高原県立自然公園普通地域、特定植物群落(対照番号71)

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(単-98)を変更

■**文献番号** 1、2



(撮影:三島木 進、2023年6月6日)

(調査・執筆:三島木 進、西中 董)

単一群落

山地帯／河辺林

ドロノキ群落

■**群落の概要** ドロノキは高さ30mほどになる落葉広葉高木で、千島・北海道・本州の中部以北に分布する。河岸に生え、ヤマハンノキやシロヤナギ、オノエヤナギなどと混生して群落を形成する。

■**県内の分布** ドロノキは奥羽山脈の山地帯で、比較的大きい河川の上流の低水敷に生育するが、多数の個体から形成された植分は希である。

単-25 漆沢のドロノキ群落

壊滅危惧(3)

2016 壊滅危惧(3)

■**群落の位置** 加美町字漆沢宿(標高約330～400m、北緯:38°31'30"～38°32'39"、東経:140°36'29"～140°36'49")

■**選定理由と現状** 朝日沢・夕日沢合流点下流の氾濫原で、洪水時に河道となって攪乱を受けるやや地盤高の高い立地に、樹高20mに達するドロノキやオオバヤナギが散生する。これほど大規模で自然状態を保ったドロノキ林は、県内唯一。

■**保護保全上の留意点** 群落に大きな変化は認められない。近年頻発する集中豪雨に伴う攪乱に注視しながら、河岸の改修工事や砂防ダムの建設による影響を回避・低減する方策を導入することが望まれる。なお今回、従来の保全箇所の上流域に位置する生育地を追加指定した。

■**特記事項** 県立自然公園船形連峰第3種特別地域、特定植物群落(対照番号112)

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(単-105)を変更

■**文献番号** 2



(撮影:下山 祐樹、2023年6月21日)

(調査・執筆:下山 祐樹、菅野 洋)

単一群落

山地帯／河辺林

シロヤナギ群落

■**群落の概要** 河川の上・中流域の河畔や湿地などの水辺に成立する落葉広葉樹の高木林で、シロヤナギにオノエヤナギなどのヤナギ類やサワグルミなどが混生する。

■**県内の分布** 奥羽山脈や北上山地とその近隣域で、上・中流域の河畔や湿地に成立している。

単-26 加美町柳瀬のシロヤナギ群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

■**群落の位置** 加美町字漆沢宿(標高約290～320m、北緯:38°35'28"～38°35'36"、東経:140°35'30"～140°35'48")

■**選定理由と現状** 高木層ではシロヤナギが優占し、サワグルミ、オノエヤナギが混交する。林床にはムカゴイラクサ、ウバミソウ、ヤグルマソウ、テンニンソウなどの湿生植物が生育。氾濫原の植生は河岸の改修工事や砂防ダムの建設などによって多くが破壊されており、自然度の高いこの群落は貴重。

■**保護保全上の留意点** 川辺という変動の激しい環境ゆえに、時折、倒木や植生の損傷が局所的に生じているが、群落全体としては特に大きな変化はない。下流でダムの建設工事が行われており、その影響が及ばないように配慮が必要である。

■**特記事項** 特定植物群落(対照番号139)

■**RDB2016からの変更点** 群落名を微修正、整理番号(単-97)を変更

■**文献番号** 2



(撮影:下山 祐樹、2023年6月21日)

(調査・執筆:下山 祐樹、菅野 洋)

アズマシャクナゲ群落

- 群落の概要** アズマシャクナゲは高さ1～3mほどになる常緑広葉低木で、本州の中部以北に分布し、岩手県南部が北限である。山地の乾いた尾根筋の林床に生育し、優占群落をつくることは少ない。
- 県内の分布** 県内では、奥羽山脈の山地帯の尾根などの乾燥する立地に点々と生育する。特に二口峡谷を中心とした地域に比較的多く見られ、また花山村には広い面積の群生地がある。

単-27 花山のアズマシャクナゲ群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

- 群落の位置** 栗原市花山(標高約350～480m、北緯:38°49'43"～38°50'2"、東経:140°50'19"～140°50'33")
- 選定理由と現状** 分布北限に位置する希有な群生地として、国の天然記念物に指定されている。アズマシャクナゲは西～南西向きに比較的急峻な上部谷壁斜面にパッチ状に生育し、紅色の大輪が咲き誇る景観は見事である。
- 保護保全上の留意点** 旧花山村・栗原市と宮城県が手厚い保護対策を実施してきた。1988年前後には過去の取り組みと学術調査に基づいて、アズマシャクナゲを被陰する上層木や低木の択伐が順応的に行われ、樹勢や開花の回復に繋がった。近年も、萌芽再生した低木種を中心に、小域ごとに刈り払いとモニタリングが行われている。
- 特記事項** 国指定天然記念物(花山のアズマシャクナゲ自生北限地帯)、御獄山県自然環境保全地域、特定植物群落(対照番号35)
- RDB2016からの変更点** 整理番号(単-78)を変更
- 文献番号** 1、2、16



(撮影：平吹 喜彦、2023年4月21日)

(調査・執筆：平吹 喜彦)

ススキ群落

- 群落の概要** ススキは高さ1.5～2.5mになるイネ科の多年生草本で、日本各地に広く見られ、伐採跡地や造成地などの乾いた立地に生育し、優占群落を形成する。かつては採草地として広い面積を占めていたが、外来牧草による人工草地化や放置されて樹林化するなど、急速に姿を消しつつある。ススキ草原は、森林群落と異なる独特の種を内包し、その中には多くの希少種も含まれる。
- 県内の分布** 1940年代頃(昭和20年代頃)までは奥羽山脈の山麓や北上山地などに大面積のススキ草原があったが、ほとんどがアカマツやカラマツの植林地、牧草地に改変されてしまい、まとまった群落は鬼首(大崎市)や上品山(石巻市)などに残るだけである。

単-28 徳仙丈山のススキ群落

壊滅状態(4)

2016 壊滅状態(4)

- 群落の位置** 気仙沼市本吉町上川内(標高約570～680m、北緯:38°50'46"～38°50'52"、東経:141°28'18"～141°28'44")
- 選定理由と現状** かつては放牧地やまぐさ場、採草地として利用され、ススキが優占する草本植生が広がっていた。本県を代表する山地半自然草原として学術上も貴重であったが、長期にわたって放置された結果、ヤマツツジなどの低木やアカマツなどの先駆樹木が生育する疎林に遷移している。
- 保護保全上の留意点** 現在の徳仙丈山はヤマツツジ群生地として著名であることから、保護・管理のあり方もヤマツツジ個体群の重視にシフトしているように見える。尾根筋やヤマツツジの株間などに残存するススキ草原では遷移を抑え、半自然草原本来の多様で清楚な草本植物種の存続を図ることが望まれる。
- 特記事項** 特定植物群落(対照番号84)
- RDB2016からの変更点** 整理番号(単-116)を変更
- 文献番号** 2



(撮影：平吹 喜彦、2023年6月17日)

(調査・執筆：平吹 喜彦)

単-29 鬼首のススキ群落

壊滅危惧(3)

2016 壊滅危惧(3)

- 群落の位置** 大崎市鳴子温泉鬼首(標高約380～550m、北緯:38°47'9"～38°49'7"、東経:140°36'48"～140°37'46")
- 選定理由と現状** 禿岳(標高1261m)東麓の緩斜面に広がる草原で、優占するススキのほかトダシバ、ワラビ、ミツバツチグリ、オカトラノオ、オトコヨモギなどが生育する。山地の半自然草原を代表する相観・種組成を保持しており、学術・地域資源の両面で貴重。
- 保護保全上の留意点** 牧畜の衰退や生活様式の変化に伴って面積を減じてきたが、現在は大きな変化が無い状態で維持されている。このまま草原として維持するためには、樹木の侵入・成長という遷移を抑制する管理(例えば放牧、刈り取り、火入れ)を順応的・定期的に行う必要がある。
- 特記事項** 栗駒国定公園第3種特別地域および普通地域、特定植物群落(対照番号109)
- RDB2016からの変更点** 整理番号(単-115)を変更
- 文献番号** 2

(調査・執筆：菅野 洋)



(撮影：菅野 洋、2023年10月7日)

単-30 六角のススキ群落

壊滅状態(4)

2016 壊滅状態(4)

- 群落の位置** 栗原市花山、大崎市鳴子温泉(標高約460～620m、北緯:38°45'57"～38°47'20"、東経:140°44'3"～140°45'43")
- 選定理由と現状** 東北大学大学院農学研究科の川渡フィールドセンター内にあり、研究対象としても管理・保全がなされてきたススキ群落。家畜を放牧することで遷移が退行して半自然草原が維持されており、典型的な群落として貴重。
- 保護保全上の留意点** 人工草地化した区域が多く、ススキ群落として存続しているエリアは減少した。しかも、研究のために継続した管理がなされているススキ群落以外は、低木の侵入が認められ、樹林化する傾向がある。
- 特記事項** 特定植物群落(対照番号36)
- RDB2016からの変更点** 整理番号(単-114)を変更
- 文献番号** 1、2

(調査・執筆：吉田 馨、西中 重)



(撮影：吉田 馨、2022年7月5日)

単-31 上品山のススキ群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

- 群落の位置** 石巻市三輪田・高木・長面(標高約390～460m、北緯:38°29'34"～38°30'21"、東経:141°21'0"～141°21'43")
- 選定理由と現状** 上品山(標高466m)のなだらかな尾根に沿ってススキが優占する半自然草原が広がり、高茎のススキに交じってヨモギ、ミツバツチグリ、ゲンノショウコ、ツボスミレ、コバギボウシなどが生育する。県内のススキ群落が激減する中でまとまった面積を有しており、維持すべき群落である。
- 保護保全上の留意点** 群落に顕著な変化は見られないが、今後、分布を拡大しているニホンジカの採食による構成種の減少などが懸念される。一方、低木類の侵入も認められることから、保護・活用活動を行っている関係者が協働して、統合的・順応的な管理を進めることが望まれる。
- 特記事項** 硯上山万石浦県立自然公園第3種特別地域[一部]
- RDB2016からの変更点** 整理番号(単-117)を変更

(調査・執筆：下山 祐樹、菅野 洋)



(撮影：下山 祐樹、2021年10月10日)

単-32 不忘山東麓のススキ群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

■**群落の位置** 白石市福岡八宮(標高約850~1130m、北緯:38°3'49"~38°4'23"、東経:140°30'5"~140°30'51")

■**選定理由と現状** 森林伐採後に萱刈り場、放牧地として利用され、麓部斜面がその後スキー場となった。ススキが優占し、タニウツギ、キツネヤナギなどの低木、ワラビ、チマキザサ、トリアシショウマ、ナンブアザミ、センダイトウヒレンなどの草本が生育する。半自然草原を特徴づける貴重種も多く、貴重。

■**保護保全上の留意点** スキー場運営者により、毎年晩秋にゲレンデの刈払いが実施され、ススキ群落が維持されてきた。ゲレンデには貴重種も少なからず生育していることから、関係者が協議・連携しながら保護対策を講じることが望ましい。

■**特記事項** 蔵王国定公園第3種特別地域

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(単-118)を変更

(調査・執筆:三島木 進、西中 董)



(撮影:三島木 進、2022年9月29日)

単一群落

山地帯/二次草原(冷温帯)

ヒメサユリ群落

■**群落の概要** ヒメサユリは高さ0.3~0.8mになるユリ科の多年生草本で、東北地方南部・新潟県の山地に分布し、明るい草原などに群生する。

■**県内の分布** 県内の分布は、県南部に限定されている。

単-33 干蒲のヒメサユリ群落

壊滅(D)

2016 壊滅状態(4)

■**群落の位置** 七ヶ宿町字湯原(標高約600~720m、北緯:38°2'19"~38°2'30"、東経:140°18'9"~140°18'18")

■**選定理由と現状** かつては樹高2.5m前後のコナラ、タニウツギ、キツネヤナギなどの合間にヒメサユリが比較的高い密度で点在していた。ヒメサユリの分布は県内でも限定されており、貴重。

■**保護保全上の留意点** 現在は遷移が進行してヒメサユリを確認できないことから、伐採・除草など草原復元に向けた順応的な管理が必要である。また、イノシシやニホンザルに対する対策も望まれる。

■**特記事項** 特定植物群落(対照番号72)

■**RDB2016からの変更点** 群落名を微修正、整理番号(単-119)を変更

■**文献番号** 1、2

(調査・執筆:三島木 進、西中 董)



(撮影:三島木 進、2023年10月8日)

単一群落

丘陵帯/落葉広葉樹林(中間温帯)

イヌブナ群落

■**群落の概要** イヌブナは高さ25mほどになる落葉広葉高木で、本州・四国・九州の雪の少ない太平洋側に分布する。北限は岩手県一戸町、南限は熊本県南部で、気候的には冷温帯域下部から中間温帯域に生育する。宮城県や岩手県ではモミ群落やブナ群落の構成種のひとつとなる場合が多いが、傾斜の急な斜面で優占する群落がしばしば見られる。

■**県内の分布** 県内では、標高300~400m以下の丘陵地に広く分布していたと考えられているが、伐採などにより現在では小規模な群落が残存しているに過ぎず、花山村の切留や白石市の福岡八宮などに見られる。

単-34 温湯のイヌブナ群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

■**群落の位置** 栗原市花山(標高約310~400m、北緯:38°52'16"~38°52'37"、東経:140°46'7"~140°46'14")

■**選定理由と現状** 一迫川右岸の急斜面に広がり、高木層では樹高22mほどのイヌブナが優占し、ケヤキ、トチノキなどが混交。林床にはヒメアオキ、ハイイヌガヤなど多雪地を特徴づける植物が生育する。この群落の斜面上部にはブナ林が見られ、両者はすみ分けている。栗駒山麓でこれほど規模の大きな林分はない。

■**保護保全上の留意点** 相観に大きな変化は見られない。急斜面に成立していることから、今後も伐採される恐れは少ないと考えられるが、周辺に広がる自然度の高い植生とともに、さらなる保護を図ることが望まれる。

■**特記事項** 栗駒国定公園第3種特別地域、特定植物群落(対照番号98)

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(単-69)を変更

■**文献番号** 2

(調査・執筆:菅野 洋)



(撮影:平吹 喜彦、2022年5月2日)

単-35 切留のイヌブナ群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

■**群落の位置** 栗原市花山(標高約230~370m、北緯:38°50'48"~38°51'6"、東経:140°46'32"~140°46'43")

■**選定理由と現状** 一迫川の河岸段丘に残存する落葉広葉樹林で、樹高20mほど、胸高直径30cm前後のイヌブナが優勢となり、ケヤキ、アカシデ、ブナ、トチノキなどが混交する。林床にはクマイザサが多く、ミヤマカンスゲ、ヒメアオキなど多雪地を特徴づける植物が認められ、土地的極相林の面影を有する。

■**保護保全上の留意点** 河川と道路に挟まれた小面積の林分で、農業用取水路も並列しており、常に攪乱にさらされている。価値の周知と伐採・土地改変の規制など、予防的な保護の仕組みが必要。

■**特記事項** 特定植物群落(対照番号34)

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(単-68)を変更

■**文献番号** 1、2

(調査・執筆:菅野 洋、平吹 喜彦)



(撮影:菅野 洋、2019年9月19日)

単-36 鎌先のイヌブナ群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

■**群落の位置** 白石市福岡八宮(標高約180~410m、北緯:38°1'22"~38°1'43"、東経:140°33'55"~140°34'35")

■**選定理由と現状** 樹高12~16mほどのイヌブナが優勢で、その上層にコナラ、ケヤキ、ブナ、アサダ、イヌシデ、アカシデなどが樹冠を広げる。鎌先温泉の裏山にあたり、低標高域にこれほど広く、発達した自然林が残存していることは非常に珍しく、貴重。

■**保護保全上の留意点** 国有林で、幸い人の立ち入りも少ないようで、自然状態が保たれている。ただし、マツ枯れ病・ナラ枯れ病による枯損が一部で見られたことから、注視する必要がある。

■**特記事項** 蔵王高原県立自然公園普通地域、特定植物群落(対照番号62)

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(単-67)を変更

■**文献番号** 1、2、17

(調査・執筆:三島木 進、西中 董)



(撮影:三島木 進、2022年10月8日)

アカシデ群落

- **群落の概要** アカシデは高さ15mほどになる落葉広葉高木で、北海道から本州・四国・九州の屋久島までの暖温帯域から冷温帯域にかけて分布する。一般に、二次林や極相林の構成種のひとつとして広く生育するが、崖地などの急傾斜地で優占する群落を形成する。
- **県内の分布** アカシデは県内の海岸帯から丘陵帯、山地帯下部まで広く分布し、コナラ群落やモミ・イヌブナ群落の構成種となるが、鳴子渓谷や浅布渓谷などのようにV字谷の急傾斜地では土地的極相林として優占群落を形成する。

単-37 浅布渓谷のアカシデ群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

- **群落の位置** 栗原市花山(標高約190~380m、北緯:38°49'34"~38°49'51"、東経:140°47'36"~140°47'54")
- **選定理由と現状** 浅布渓谷は一迫川に沿った延長約600mのV字谷で、左岸の長大な急崖を中心にアカシデ林が分布する。樹高約15m、胸高直径25cm前後のアカシデとともに、イヌブナ、サワシバ、コナラなどが林冠を形成し、下層にはスズダケやバイカツツジが生育する。土地的極相林として貴重。
- **保護保全上の留意点** ナラ枯れ病による枯損とスズダケの開花・一斉枯死が認められた。来訪者の安全確保の点からも、遊歩道のある右岸側では急斜面や川辺に接近させない配慮が必要である。
- **特記事項** 特定植物群落(対照番号99)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-64)を変更
- **文献番号** 2

(調査・執筆:菅野 洋、平吹 喜彦)



(撮影:平吹 喜彦、2022年5月2日)

単-38 花淵山のアカシデ群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

- **群落の位置** 大崎市鳴子温泉(標高約170~470m、北緯:38°45'7"~38°45'22"、東経:140°41'52"~140°42'14")
- **選定理由と現状** 鳴子ダム堤体下流右岸の断崖を伴う急斜面に成立した、アカシデが優勢でケヤキ、コナラなどが混交する高さ15m前後の林分。地形的に特異な立地を占めるこのアカシデ林は、見事な新緑・紅葉景観を生み出す植生としても貴重。
- **保護保全上の留意点** 手厚い保全対策が検討・実施された高規格自動車道路がトンネルで山体内を通過している。渓谷の生態系を代表し、防災・景観上も重要な森林として、厳正保護を図ることが懸命。下流側の森林で伐採が行われており、注視する必要がある。
- **特記事項** 栗駒国定公園第3種特別地域、特定植物群落(対照番号110)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-63)を変更
- **文献番号** 2

(調査・執筆:下山 祐樹、平吹 喜彦)



(撮影:平吹 喜彦、2023年4月21日)

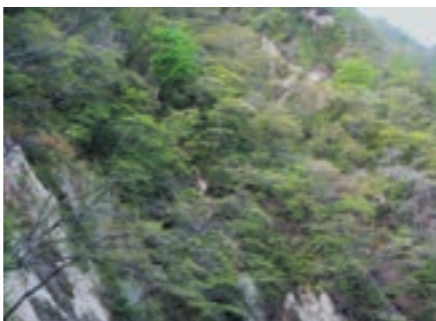
単-39 鳴子渓谷のアカシデ群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

- **群落の位置** 大崎市鳴子温泉(標高約160~350m、北緯:38°43'26"~38°44'19"、東経:140°41'9"~140°42'7")
- **選定理由と現状** 標高差80~100mの断崖が連なる大谷川の渓谷では、局所的な緩傾斜地にアカシデが優勢でミズナラ、ハウチワカエデ、ヤマモミジ、ケヤキなどが混交する高さ10m前後の落葉広葉樹林が成立している。見事な新緑・紅葉景観を生み出す植生としても貴重。
- **保護保全上の留意点** 断崖・斜面の崩落が認められることから、群落そして遊歩道に及ぶ影響を注視する必要がある。
- **特記事項** 県指定名勝(鳴子峡)、栗駒国定公園第1~3種特別地域、特定植物群落(対照番号53)、県指定鳥獣保護区特別保護地区(鳴子)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-62)を変更
- **文献番号** 1、2

(調査・執筆:下山 祐樹、菅野 洋)



(撮影:平吹 喜彦、2023年4月21日)

イヌシデ群落

- **群落の概要** イヌシデは高さ20mほどになる落葉広葉高木で、本州・四国・九州の暖温帯域から冷温帯域下部まで分布し、その北限は岩手県宮古市である。一般に、二次林や極相林の構成種のひとつとして広く生育するが、希に土地的条件によってコナラやブナなどが侵入しづらい立地で優占群落を形成する。
- **県内の分布** 県内では、標高約300m以下の丘陵帯から海岸帯に見られ、コナラ群落やモミ・イヌブナ群落の構成種として出現する。優占群落は、岩礫が多く土壌が浅い立地や海岸で季節風が吹き付ける丘頂・上部斜面などに小面積で成立している。

単-40 湯殿山神社のイヌシデ群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

- **群落の位置** 大崎市三本木音無(標高約40~70m、北緯:38°30'25"~38°30'32"、東経:140°54'32"~140°54'48")
- **選定理由と現状** 湯殿山神社に社殿はなく、丘陵地内の沢沿いに点々と祠が配置されている。緩やかな小丘群上には樹高28mに達するイヌシデが優勢で、コナラ、オニイトヤなどの大木が混交する森林があった。内陸部では希な発達したイヌシデ林として貴重。
- **保護保全上の留意点** 社寺林として古くから保護されてきたが、近隣の森林が伐採されて風当たりが強くなったためか大木の幹折れや根返りが進み、近年はナラ枯れ病による立ち枯れも生じている。林冠ギャップや林縁ではつる植物の繁茂が顕著で、林冠に登攀するフジなどの除伐が必要。社寺林を縁取る水路では護岸工事がなされ、相観は一変した。
- **特記事項** 特定植物群落(対照番号100)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-65)を変更
- **文献番号** 2

(調査・執筆:齊藤 賢治、平吹 喜彦)



(撮影:平吹 喜彦、2023年8月13日)

単-41 尾崎神社のイヌシデ群落

壊滅危惧(3)

2016 壊滅危惧(3)

- **群落の位置** 石巻市渡波(標高約10~40m、北緯:38°23'19"~38°23'22"、東経:141°21'50"~141°21'59")
- **選定理由と現状** 社殿に接する岬の北斜面に残存する樹高18m前後、胸高直径30~45cmのイヌシデとミズナラ、オオバボダイジュなどが混交する林分。林床にはカタクリ、マルバダケブキ、ユキザサ、ミヤマナルコユリなどが豊富。イヌシデが各所に見られる石巻湾岸地域でも、唯一のまとまった群落として貴重。
- **保護保全上の留意点** ニホンジカの採食による林床植物の減少が著しく、また海崖に近い斜面下部で表土の流亡が進行しつつある。いずれ群落への悪影響が顕在化してくると予測され、対策が必要である。
- **特記事項** 硯上山万石浦県立自然公園第2種特別地域
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-66)を変更

(調査・執筆:下山 祐樹、菅野 洋)



(撮影:下山 祐樹、2021年10月9日)

単一群落

丘陵帯／針広混交林(中間温帯)

アカマツ群落

- 群落の概要** アカマツは高さ25mほどになる常緑針葉高木で、本州・四国・九州の各地に広く分布する。アカマツは二次林や植林として各地に見られるが、自然林は少なく、痩せ地や露岩地、乾燥地、湿地などに成立している。
- 県内の分布** 県内でもアカマツは沿岸部から山地帯下部に広く生育するが、丘陵帯の自然林は少ない。マツ枯れ病の被害により、県内各地で立枯れが多数発生しており、群落としての存続に危機的な影響を及ぼすことが懸念される。

単-42 翁倉山のアカマツ群落

壊滅危惧(3)

2016 壊滅危惧(3)

- 群落の位置** 石巻市北上町、登米市津山町(標高約400～530m、北緯:38°35'54"～38°36'24"、東経:141°23'46"～141°24'3")
- 選定理由と現状** 翁倉山山頂(標高532m)から北に延びる尾根沿いに分布し、樹高20m前後、胸高直径40～70cmほどのアカマツ大木が優占する。林内にはヤマツツジ、ホツツジのほかリョウブ、ナツハゼなどが見られる。周辺にはブナやイヌブナも生育しており、原植生を知る上で貴重。
- 保護保全上の留意点** RDB2016で報告されたマツ枯れ病による立ち枯れは小康状態と推察されたが、引き続き注視する必要がある。
- 特記事項** 国指定天然記念物(イヌワシ繁殖地)、翁倉山県自然環境保全地域、県指定鳥獣保護区特別保護地区(翁倉山)
- RDB2016からの変更点** 整理番号(単-34)を変更
- 文献番号** 18、19



(撮影:下山 祐樹, 2021年10月10日)

(調査・執筆:下山 祐樹、菅野 洋)

単一群落

丘陵帯／針広混交林(中間温帯)

モミ群落

- 群落の概要** モミは高さ35mほどになる日本固有の常緑針葉高木で、本州・四国・九州に広く分布し、北限は太平洋側では岩手県宮古市、南限は屋久島であるとされている。気候的には暖温帯から冷温帯に移行する領域(中間温帯)に限って生育し、気候的極相林の代表的な構成種となる。
- 県内の分布** 県内の丘陵帯を広く覆っていた代表的な極相林のひとつと考えられているが、伐採や土地利用の改変に伴って現在では小面積で点々と残存しているに過ぎない。常緑・落葉広葉樹と混交して群落を形成する場合が多い。

単-43 横山不動尊のモミ群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

- 群落の位置** 登米市津山町(標高約30～220m、北緯:38°37'50"～38°38'8"、東経:141°20'40"～141°21'1")
- 選定理由と現状** 横山不動尊背後の丘陵地の一画、南向き急斜面に残存する温帯混交林。樹高約25m前後、胸高直径75cmに達するモミと、カヤ、イヌシデ、ケヤキなどが林冠を形成し、林床にはスズダケ、チゴユリが顕著。スギなどの植林地が広がるこの地域で、こうした発達した自然林は貴重。
- 保護保全上の留意点** 社寺林・風致保安林として保護されている。土砂流亡・崩落を防ぐためにも、厳正保護を基軸とした植生管理が有益であろう。
- 特記事項** 三陸復興国立公園第2種特別地域、特定植物群落(対照番号15)
- RDB2016からの変更点** 整理番号(単-51)を変更
- 文献番号** 1、2、20



(撮影:菅野 洋, 2022年10月16日)

(調査・執筆:菅野 洋)

単-44 柳津虚空蔵尊のモミ・イヌブナ群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

- 群落の位置** 登米市津山町(標高約20～150m、北緯:38°35'16"～38°35'27"、東経:141°18'45"～141°19'0")
- 選定理由と現状** 柳津虚空蔵尊背後の急峻な斜面を覆う社寺林で、樹高25m前後、胸高直径1mに達するモミをはじめ、イヌブナ、クリ、スギ、コナラなどが林冠を形成する。林内にはシロダモ、アオキ、イヌガヤなど暖地性常緑植物が顕著。残存する数少ない発達した自然林として貴重。
- 保護保全上の留意点** 下層植物にニホンジカによる食害が目立ってきており、早期の植生保護対策が望まれる。幽玄な社寺林として、また土砂流亡・崩落を防ぐ森林として、厳正保護を基軸とした植生管理が有益であろう。
- 特記事項** 三陸復興国立公園第2種特別地域、特定植物群落(対照番号16)
- RDB2016からの変更点** 群落名を微修正
- 文献番号** 1、2、20



(撮影:菅野 洋, 2022年10月16日)

(調査・執筆:菅野 洋)

単-45 牧山のモミ・イヌブナ群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

- 群落の位置** 石巻市湊(標高約180～250m、北緯:38°26'17"～38°26'26"、東経:141°20'9"～141°20'48")
- 選定理由と現状** 樹高28mに達するモミが優占し、斜面にはイヌブナが、尾根筋にはブナが混交する。林内にはヤマモミジ、ケヤキ、エノキなどが生育。人里に近いこともあり人為が加わっているが、この地域で原植生の面影を残す唯一の林分として貴重。
- 保護保全上の留意点** 以前の風雪による被害は、遷移が進んで薄らいでいる。林床に密生していたスズダケの斉枯死後、テイカカズラやヤマツツジが優占してきたが、スズダケと思われる実生も多数発生。林分全体の動向を注視していく必要がある。
- 特記事項** 硯上山万石浦県立自然公園第3種特別地域、特定植物群落(対照番号21)、みやぎの野鳥の森(牧山モデル野鳥自然保護)
- RDB2016からの変更点** 整理番号(単-43)を変更
- 文献番号** 1、2、21



(撮影:下山 祐樹, 2022年9月1日)

(調査・執筆:下山 祐樹、菅野 洋)

単-46 富山観音のモミ・イヌブナ群落

破壊危惧(2)

2016 壊滅危惧(3)

- 群落の位置** 松島町手樽(標高約40～110m、北緯:38°23'44"～38°23'51"、東経:141°6'18"～141°6'28")
- 選定理由と現状** 孤立峰の山頂(117m)に鎮座する本堂・庫裏、そして石段参道を囲むように、山体上部に残存するモミ、コナラ、ケヤキ、イヌブナなどの高木が混交する林分。モミの巨木は樹高30m、胸高直径1mに達する。原植生の面影を残す発達した林分として貴重。
- 保護保全上の留意点** 多くの来訪者がある特別名勝・県立自然公園内の社寺林として保護されており、さらなる価値啓発を期待したい。なお、モミ巨木の幹折れやマツ枯れ病・ナラ枯れ病による枯損が散見されることから、継続した見守りと対策も必要。
- 特記事項** 国指定名勝(特別名勝松島)、県立自然公園松島普通地域、特定植物群落(対照番号92)
- RDB2016からの変更点** 整理番号(単-42)を変更
- 文献番号** 2



(撮影:平吹 喜彦, 2023年9月2日)

(調査・執筆:平吹 喜彦)

単-47 東成田のモミ・イヌブナ群落

壊滅危惧(3)

2016 破壊危惧(2)

■**群落の位置** 大郷町東成田(標高約30~90m、北緯:38°23'5"~38°23'19"、東経:140°59'15"~140°59'35")

■**選定理由と現状** 胸高直径70~100cmに達する大木が林立するモミとイヌブナが優勢な針広混交林。丘陵地の微地形に対応した植生の差異が明瞭で、谷底ではニリンソウやカテンソウなどの早春植物が顕著。集水域を形成する支谷全体で自然植生が保存されており、学術的にも貴重。

■**保護保全上の留意点** 周辺では盛土用土砂の採取やその跡地への太陽光発電パネルの設置が広面積で進められてきた。指定地内では豪雨による斜面崩落後、谷奥に3基の砂防ダムが新設された。また林床に密生していたスズダケが一斉枯死した。植生の回復・変遷の見守り継続が肝要。

■**特記事項** 東成田の自然林県自然環境保全地域

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(単-45)を変更

■**文献番号** 22、23

(調査・執筆:平吹 喜彦)



(撮影:平吹 喜彦、2023年5月12日)

単-48 瑞巖寺のモミ群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

■**群落の位置** 松島町松島(標高約7~40m、北緯:38°22'13"~38°22'27"、東経:141°3'24"~141°3'42")

■**選定理由と現状** 樹高30m前後、胸高直径80cmに達する大木を含むモミが優占し、純林状あるいはスギ、タブノキ、コナラなどと混交して林冠を形成。林内にはヤブツバキ、シロダモ、テイカカズラ、オオバジャノヒゲなどの暖地性常緑植物が豊富で、カヤやシキミも生育。原植生の面影を残す林分として、また幽玄さを醸し出す景観要素として貴重。

■**保護保全上の留意点** 小面積であることから、林縁や近隣に連なる発達した森林を一体化して保護する視点・管理が必要。まずは林内に侵入した竹類、およびモミ高木の樹冠や林冠ギャップを覆うフジ、クズといったつる植物の除伐が急務となる。

■**特記事項** 国指定名勝(特別名勝松島)、県立自然公園松島普通地域、特定植物群落(対照番号93)

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(単-49)を変更

■**文献番号** 2

(調査・執筆:平吹 喜彦)



(撮影:平吹 喜彦、2022年11月26日)

単-49 牧の崎のモミ・スギ群落

壊滅危惧(3)

2016 破壊危惧(2)

■**群落の位置** 石巻市給分浜(標高約2~90m、北緯:38°18'22"~38°19'10"、東経:141°27'27"~141°28'12")

■**選定理由と現状** 樹高20m前後、胸高直径40~60cmの、自生とされるモミとスギが混交する林分。本県では唯一の群落タイプで、学術的にも貴重。

■**保護保全上の留意点** 風害による倒木などで林冠木に枯死が目立っていたが、現在はニホンジカによる食害が顕著で、林床植生は劣化し、モミやスギの更新個体も少ない。ニホンジカの侵入抑制対策や個体数管理をより強力に実行する必要がある。

■**特記事項** 三陸復興国立公園第1~3種特別地域、牧の崎スギ遺伝資源希少個体群保護林、特定植物群落(対照番号10)

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(単-46)を変更

■**文献番号** 1、2、4、24

(調査・執筆:下山 祐樹、菅野 洋)



(撮影:下山 祐樹、2021年9月12日)

単-50 西風蕃山のモミ・イヌブナ群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

■**群落の位置** 仙台市青葉区(標高約240~370m、北緯:38°15'3"~38°15'23"、東経:140°46'34"~140°46'59")

■**選定理由と現状** 山頂(標高373m)付近に分布する、樹高28m前後のモミと、イヌブナ、ブナ、イタヤカエデ(広義)などの落葉広葉樹高木が混交する発達した林分。この地域の丘陵地・里山に残存する原植生の面影を留める森林として貴重。

■**保護保全上の留意点** 県緑地環境保全地域や仙台市特別緑地保全地区に指定されているが、人のむやみな立ち入りやイノシシによる土壌の掘り起こし、林床植物の食害が見受けられたことから、保護対策の強化が望まれる。

■**特記事項** 蕃山・斎勝沿緑地環境保全地域、特定植物群落(対照番号103・136・137)、仙台市特別緑地保全地区

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(単-39)を変更

■**文献番号** 2、25

(調査・執筆:滝口 政彦、齊藤 賢治)



(撮影:滝口 政彦、2022年10月30日)

単-51 佐保山のモミ・イヌブナ群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

■**群落の位置** 仙台市太白区(標高約80~200m、北緯:38°14'15"~38°14'51"、東経:140°49'3"~140°49'32")

■**選定理由と現状** 樹高27m前後のモミが優占し、17m前後のイヌブナ、イヌシデ、アカシデ、クリなどの落葉広葉樹が混交する発達した林分。この地域の丘陵地・里山に残存する原植生の面影を留める森林として最も広い面積を有しており、貴重。

■**保護保全上の留意点** モミ希少個体群保護林に指定されているが、人のむやみな立ち入りやイノシシによる土壌の掘り起こし、林床植物の食害が散見されたことから、保護対策の強化が望まれる。

■**特記事項** 太白山県自然環境保全地域[一部]、鉤取山モミ希少個体群保護林、特定植物群落(対照番号41)、みやぎの野鳥の森(鉤取野鳥の森)

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(単-41)を変更

■**文献番号** 1、2、4、26

(調査・執筆:滝口 政彦、西中 董)



(撮影:滝口 政彦、2022年9月18日)

単-52 高館山のモミ・ウラジロガシ群落

壊滅危惧(3)

2016 壊滅危惧(3)

■**群落の位置** 名取市高館吉田(標高約140~180m、北緯:38°11'11"~38°11'16"、東経:140°50'17"~140°50'24")

■**選定理由と現状** 那智熊野神社が鎮座する山頂(標高203m)に近い東斜面に分布する。樹高28mに達するモミと、ウラジロガシ、シラカシ、スダジイなどの常緑広葉樹が混交する発達した林分で、モミ・ウラジロガシ群落の分布北限、スダジイの分布北限にもなっており、貴重。

■**保護保全上の留意点** 森林の一部が伐採され、面積が縮小した。県緑地環境保全地域に指定されているが、積極的な周知や保護・管理は十分とは言えず、ネイチャーポジティブのような近年の政策も導入した実効的な対応が求められる。

■**特記事項** 高館・千貫山緑地環境保全地域、特定植物群落(対照番号105)

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(単-36)を変更

■**文献番号** 2、27

(調査・執筆:滝口 政彦、西中 董)



(撮影:滝口 政彦、2022年9月25日)

単-53 曲竹のモミ群落

壊滅状態(4)

2016 壊滅状態(4)

■**群落の位置** 蔵王町大字曲竹(標高約110~170m、北緯:38°4'54"~38°5'4"、東経:140°38'23"~140°38'39")

■**選定理由と現状** 林冠ではモミが優占し、イヌシデ、イヌブナ、カスミザクラ、ウラジロガシなどが混交する林分。暖地性常緑樹のウラジロガシの分布西限で、小面積ではあるが、この地域の原植生の面影を残す唯一の森林として貴重。

■**保護保全上の留意点** 民有林であり、30年ほど前に森林の一面が伐採され、さらに道路工事で破壊が進んだ。所有者の理解を得ながら、これ以上の伐採・変更が及ばないように、保護対策の強化が求められる。

■**特記事項** 蔵王高原県立自然公園普通地域、特定植物群落(対照番号61)

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(単-35)を変更

■**文献番号** 1、2

(調査・執筆:三島木 進、西中 董)



(撮影:三島木 進、2023年1月11日)

単-54 長泉寺のモミ・ウラジロガシ群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

■**群落の位置** 角田市角田(標高約10~30m、北緯:37°58'15"~37°58'29"、東経:140°46'21"~140°46'28")

■**選定理由と現状** 東斜面には、樹高28m、胸高直径80cm前後のモミと樹高20m、胸高直径60cm前後のウラジロガシが優占する大木林が分布する。西斜面は、モミとコナラ、カスミザクラ、イヌシデ、ケヤキなど落葉広葉高木が混交する林分によって覆われる。この地域の原植生の面影を残す森林として貴重。

■**保護保全上の留意点** 境内を縁取る社寺林として存続してきた。見守りの継続とその支援が有益であろう。

■**特記事項** 特定植物群落(対照番号147)

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(単-47)を変更

■**文献番号** 3

(調査・執筆:滝口 政彦、西中 董)



(撮影:滝口 政彦、2022年6月5日)

単-55 斗蔵山のモミ・ウラジロガシ群落

壊滅危惧(3)

2016 壊滅危惧(3)

■**群落の位置** 角田市小田(標高約40~250m、北緯:37°57'26"~37°57'42"、東経:140°43'52"~140°44'18")

■**選定理由と現状** 山頂(標高250m)付近に鎮座する斗蔵山神社の神域として、古くから保護されてきた温帯混交林。急峻な山体に樹高30m、胸高直径1mを超えるモミやケヤキ、カヤ、ウラジロガシの大木が微地形に応じて分布する。多数の暖地性常緑植物が生育し、原植生の面影を残す森林として貴重。

■**保護保全上の留意点** イノシシによる林床の攪乱、タケ類の侵入などが顕著で、群落が荒廃している。学術調査報告書に記載されている保全措置を活かした対応が急務。

■**特記事項** 斗蔵山県立自然環境保全地域、斗蔵山ウラジロガシ遺伝資源希少個体群保護林、特定植物群落(対照番号65)、みやぎの野鳥の森(斗蔵山野鳥の森)

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(単-37)を変更

■**文献番号** 1、2、4、28、29、30、31、32、33

(調査・執筆:滝口 政彦、西中 董)



(撮影:滝口 政彦、2022年6月5日)

単-56 熱日高彦神社のモミ群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

■**群落の位置** 角田市島田(標高約40~70m、北緯:37°56'10"~37°56'17"、東経:140°49'54"~140°49'59")

■**選定理由と現状** 高さ28m前後に達する高木層では、モミと植栽由来のスギが混交する。林冠下にはヤブツバキ、ヤマモミジ、ウラジロガシ、カヤなどがみられ、林床にはアオキ、ヤブコウジ、テイカカズラなどの暖地性常緑植物が多い。小面積ではあるが、原植生の面影を残す森林として貴重。

■**保護保全上の留意点** 社寺林として存続すると推察されるが、価値を啓発し、法的処置も含めた新たな保護対策が必要である。

■**特記事項** 特定植物群落(対照番号131)

■**RDB2016からの変更点** 群落名を微修正、整理番号(単-48)を変更

■**文献番号** 2

(調査・執筆:滝口 政彦、西中 董)



(撮影:滝口 政彦、2022年6月5日)

単-57 弥太郎山のモミ・イヌブナ群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

■**群落の位置** 白石市小原(標高約350~690m、北緯:37°55'59"~37°56'24"、東経:140°28'24"~140°29'22")

■**選定理由と現状** 弥太郎山(標高816m)の南麓にあり、モミ、ヒメコマツ、イヌブナ、コナラ、アカシデ、ブナなどの大木が林冠を形成する発達した針広混交林。県南西部の丘陵地における唯一の極相残存林として貴重。

■**保護保全上の留意点** 針葉樹希少個体群保護林に指定され、人の立ち入りも少ない。ナラ枯れ病に罹患したコナラが見られたこともあり、見守りが必要がある。

■**特記事項** 弥太郎山針葉樹希少個体群保護林、特定植物群落(対照番号75)

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(単-40)を変更

■**文献番号** 1、2、4、34

(調査・執筆:三島木 進、西中 董)



(撮影:三島木 進、2023年5月11日)

単-58 青葉南のモミ・イヌブナ群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

■**群落の位置** 丸森町大内(標高約380~460m、北緯:37°48'8"~37°48'18"、東経:140°48'50"~140°49'4")

■**選定理由と現状** 樹高25~30mのモミと10~25mのオニイタヤ、コナラ、クリ、ミズメ、イヌブナなどの落葉広葉樹の混交林。原植生の面影を残す発達した森林として貴重。

■**保護保全上の留意点** かつてこの林分を二分するように林道が設置され、林内をブルドーザーが走るなど、保護・管理状況が良好とはいえない時期があった。2019年には台風第19号による倒木や幹折れが発生し、近年はナラ枯れ病やスズグケの枯死も生じていることから、見守りが必要。

■**特記事項** 阿武隈渓谷県立自然公園第1種特別地域、青葉南モミ希少個体群保護林、特定植物群落(対照番号44)

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(単-38)を変更

■**文献番号** 1、2、4、9

(調査・執筆:三島木 進、西中 董)



(撮影:三島木 進、2023年10月12日)

カヤ群落

- **群落の概要** カヤは高さ25mほどになる常緑針葉高木で、岩手県以南の本州・四国・九州の屋久島までの暖温帯域や中間温帯域に分布し、太平洋側に多い。耐陰性が強く、森林内の亜高木層に見られる場合が多く、優占群落を形成することは希である。
- **県内の分布** カヤは標高約300m以下の丘陵地に点々と広く分布し、特に古くから自然が残されている社寺林やモミ群落、ウラジロガシ群落の林内に多く見られる。カヤの優占群落は希で、県内では角田市高蔵寺だけである。

単-59 高蔵寺のカヤ群落

壊滅危惧(3)

2016 壊滅危惧(3)

- **群落の位置** 角田市高倉(標高約40~80m、北緯:37°59'53"~38°0'1"、東経:140°42'59"~140°43'4")
- **選定理由と現状** 樹高23m、胸高直径60~120cmに達するカヤが優占し、イヌシデ、ホオノキ、コナラなどの落葉樹が混交する。下層にはユズリハ、シロダモ、ヤブツバキ、シキミなどの暖地性常緑植物が多い。カヤは県内に広く分布するが、優占林は希で貴重。
- **保護保全上の留意点** 社寺林として保護されており、継続した見守りが有益。
- **特記事項** 県指定天然記念物、特定植物群落(対照番号64)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-52)を変更
- **文献番号** 1、2

(調査・執筆:三島木 進、西中 董)



(撮影:三島木 進、2023年7月30日)

ケヤキ群落

- **群落の概要** ケヤキは高さ30mほどになる落葉広葉高木で、本州・四国・九州の平野から丘陵地、山地に広く生育する。優占群落は、湿潤な砂礫土の堆積した崖斜面や溪畔、適湿な沖積低地に見られる。
- **県内の分布** 県内では、海岸帯から山地帯下部まで広く分布し、優占群落は谷沿いや山裾の岩石が露出する岩角地や斜面に残存している場合が多く、このような立地の土地的極相林と考えられる。

単-60 石抱きの森のケヤキ群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

- **群落の位置** 栗原市栗駒(標高約320~380m、北緯:38°54'27"~38°54'32"、東経:140°51'27"~140°51'41")
- **選定理由と現状** 御沢の左岸の、巨岩が堆積する崖面に成立したケヤキが優占する森林。胸高直径40~90cmのケヤキに、オニイタヤ、オヒョウ、トチノキ、サワグルミなどの大木が混交する。土地的極相林として、県北部で最も発達したケヤキ林。
- **保護保全上の留意点** 2008年の岩手・宮城内陸地震によって、群落の一部および周辺で山腹崩壊が生じたが、影響は少なかった。今後も伐採は無いと推察するが、山菜採取による植生の劣化に留意する必要がある。
- **特記事項** 特定植物群落(対照番号142)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-55)を変更
- **文献番号** 3

(調査・執筆:菅野 洋)



(撮影:菅野 洋、2021年10月10日)

単-61 室ノ沢のケヤキ群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

- **群落の位置** 登米市東和町(標高約60~150m、北緯:38°47'12"~38°47'19"、東経:141°22'43"~141°22'48")
- **選定理由と現状** 樹高20m前後、胸高直径50cm前後のケヤキが優占する、崖面に成立した森林。ミズキ、ヤマグワのほか、林床にはヤマブキ、コクスギ、ミツバウツギなどの適潤地性植物が多く、発達している。周辺に植林が広がる中、自然度の高い群落として貴重。
- **保護保全上の留意点** 民有林であり、法的な制限や保護はなされていない。所有者に希性を理解いただきながら、禁伐・保護することが望ましい。
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-59)を変更
- **文献番号** 20

(調査・執筆:菅野 洋)



(撮影:菅野 洋、2023年10月1日)

単-62 遂倉山のケヤキ群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

- **群落の位置** 大和町吉田(標高約120~220m、北緯:38°26'15"~38°26'26"、東経:140°49'46"~140°50'2")
- **選定理由と現状** 遂倉山(標高307m)の東斜面中腹の崖面に成立した、ケヤキが優占する森林。ケヤキは樹高20m前後、胸高直径30~100cmで、林内にはチドリノキが多い。丘陵地の崖面植生の典型として貴重。
- **保護保全上の留意点** 林道から離れており、人の立ち入りは少ないと推察されるが、継続した見守りが必要。
- **特記事項** 県立自然公園船形連峰第3種特別地域、特定植物群落(対照番号102)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-58)を変更
- **文献番号** 2

(調査・執筆:吉田 馨、西中 董)



(撮影:吉田 馨、2023年10月31日)

単-63 石巻湊のケヤキ・シロダモ群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

- **群落の位置** 石巻市吉野町(標高約10~90m、北緯:38°25'32"~38°25'43"、東経:141°18'56"~141°19'10")
- **選定理由と現状** 急傾斜地に成立した、樹高20m前後のケヤキ優占林。シロダモが多数混交するほか、エゾエノキ、オニグルミ、イヌガヤ、そして崖上にはモクゲンジも生育する。地形的に特異な立地を覆い、見事な新緑・紅葉景観を生み出す植生としても貴重。
- **保護保全上の留意点** 東北地方太平洋沖地震・津波後も、目立った変化は認められていない。急傾斜地の崩落が最大のリスクであることから、継続した見守りが必要。
- **特記事項** 特定植物群落(対照番号22)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-60)を変更
- **文献番号** 1、2

(調査・執筆:下山 祐樹、菅野 洋)



(撮影:下山 祐樹、2022年9月1日)

単-64 鎌倉山のケヤキ群落

要注意(1)

要注意(1)

- **群落の位置** 仙台市青葉区(標高約250~370m、北緯:38°18'57"~38°19'3"、東経:140°38'30"~140°38'39")
- **選定理由と現状** 鎌倉山(標高520m)は突出した岩峰で、崩落した岩石が山腹に堆積して急傾斜の崖面が形成され、ここにケヤキ林が成立している。高木層では樹高18m前後のケヤキが優占し、コナラ、エノキ、ヤマモミジなどが混交する。土地的極相林の面影を残し、貴重。
- **保護保全上の留意点** 登山者などによる踏み跡があるものの、特に保護・管理は行われていない。岩壁や崖面からの岩石の崩落のほか、ナラ枯れ病の罹患が見られたことから、継続した見守りが必要。
- **特記事項** 県立自然公園二口峡谷第2種特別地域、特定植物群落(対照番号121)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-56)を変更
- **文献番号** 2

(調査・執筆:滝口 政彦、西中 董)



(撮影:滝口 政彦、2023年8月31日)

単-65 棒目木のケヤキ群落

要注意 (1)

要注意 (1)

- **群落の位置** 仙台市青葉区(標高約230~400m、北緯:38°18'25"~38°18'41"、東経:140°39'28"~140°39'46")
- **選定理由と現状** 高木層では樹高13~20m、胸高直径20~100cmのケヤキが優占し、イヌブナ、アカシデ、オニタヤ、コナラ、ミズナラなどが混交する。所々に岩盤が露出する丘陵地の急傾斜地に成立した、土地的極相林を想起させるケヤキ林として貴重。
- **保護保全上の留意点** 急傾斜地で人の立ち入りは少ないと推察されるが、継続した見守りが必要。
- **特記事項** 県立自然公園二口峡谷第2種特別地域、特定植物群落(対照番号123)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-57)を変更
- **文献番号** 2

(調査・執筆:滝口 政彦、西中 董)



(撮影:滝口 政彦、2023年8月31日)

単-66 寒成山のケヤキ群落

破壊危惧 (2)

破壊危惧 (2)

- **群落の位置** 白石市小原、七ヶ宿町字関(標高約290~420m、北緯:37°57'17"~37°57'25"、東経:140°30'45"~140°30'56")
- **選定理由と現状** 寒成山(標高622m)北側稜線の北斜面に分布する、発達したケヤキ林。樹高20~25mのケヤキが優占し、オニタヤのほかクマシデ、ハリギリ、アサダなどが混交する。林床にはアブラチャン、ミヤマクマワラビなどが生育。自然度が高い上に面積も広く、崖錐の土地的極相林として貴重。
- **保護保全上の留意点** 国有林。伐採が及ばないように、保護対策が求められる。
- **特記事項** 蔵王県立普通地域[一部]、特定植物群落(対照番号68)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-54)を変更
- **文献番号** 1、2、17

(調査・執筆:吉田 馨、西中 董)



(撮影:吉田 馨、2022年8月29日)

単一群落 丘陵帯/沼沢林(中間温帯)

サクラバハノキ群落

- **群落の概要** サクラバハノキは高さ10~15mほどになる落葉広葉小高木で、本州・四国・九州に分布し、北限が岩手県湯田町である。日当たりの良い湿地に希に生育する。
- **県内の分布** 県内では、七ヶ宿町烏川流域だけに生育が知られている。

単-67 烏川のサクラバハノキ群落

破壊危惧 (2)

2016 破壊危惧 (2)

- **群落の位置** 七ヶ宿町字関(標高約340m、北緯:37°58'32"~37°58'34"、東経:140°27'6"~140°27'11")
- **選定理由と現状** 烏川沿いの道路脇に成立した、樹高10m前後のケヤマハノキとサクラバハノキが優占する小面積の林分。また、数百m離れた大貫平の休耕田では、サクラバハノキ、ケヤマハノキ、オノエヤナギなどがまばらに生育し、下層にガマ、ヨシなどを伴う植分がある。サクラバハノキを含む群落は県内ではここだけで、貴重。
- **保護保全上の留意点** ふたつの生育地はいずれも伐採される可能性が想定されることから、早急な保護対応が必要。
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-74)を変更
- **文献番号** 35

(調査・執筆:吉田 馨、西中 董)



(撮影:吉田 馨、2021年8月25日)

単一群落

丘陵帯/落葉広葉樹二次林(中間温帯)

コナラ群落

- **群落の概要** コナラは高さ15~20mほどになる落葉広葉高木で、北海道・本州・四国・九州に広く分布する。コナラが優占する群落は、古くから薪炭林などに利用されてきたものが多く、暖温帯域から冷温帯域に成立する代表的な二次林である。
- **県内の分布** コナラは、県内の平地・丘陵地・山地に最も多くみられ、クリやカスミザクラ、ウリハダカエデなどと混生し、雑木林を形成している。かつては薪炭林として15~25年の間隔で伐採されてきたため、県内には大径木の林分は非常に少ない。

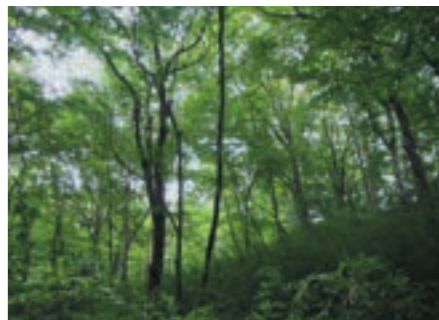
単-68 小牛田農林高等学校林のコナラ・クリ群落

破壊危惧 (2)

2016 破壊危惧 (2)

- **群落の位置** 涌谷町下郡(標高約10~190m、北緯:38°34'22"~38°35'13"、東経:141°6'46"~141°7'4")
- **選定理由と現状** 古くから里山として利用されてきた加護坊・麓岳丘陵の一画に位置し、学校の演習林となったこともあり、90年近く緩やかな管理がなされてきたという。コナラやクリのほか、イヌシデ、カスミザクラ、ケヤキ、クヌギといった多数の落葉広葉樹の大木が林立する発達した二次林として貴重。
- **保護保全上の留意点** 山麓部の県道173号線に隣接する林分では、ナラ枯れ病によるコナラ大木の枯損が多数発生。加護坊山中腹の林分も同様で、さらにササ類を主体とした林床植生が繁茂して、かつての里山二次林を象徴する見通しの効く相観や陽生植物が豊富な林床植生が失われつつある。荒廃した状態の改善が求められる。
- **特記事項** 加護坊・麓岳山緑地環境保全地域
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-80)を変更
- **文献番号** 36

(調査・執筆:平吹 喜彦)



(撮影:平吹 喜彦、2023年8月19日)

単-69 洞雲寺のコナラ群落

壊滅危惧 (3)

2016 壊滅危惧 (3)

- **群落の位置** 仙台市泉区(標高約30~80m、北緯:38°19'58"~38°20'12"、東経:140°53'24"~140°53'49")
- **選定理由と現状** 洞雲寺を囲む丘陵の斜面に分布する樹高24mに達する二次林で、大木となったコナラ、クリなどが林冠で優占し、林床にモミ稚樹が見られるなど、植生遷移を考究する上で貴重。また、大規模開発によって森林が大きく消失した仙台市近郊において、住宅団地に残る自然緑地、野生生物の生活空間として高い保全価値を有する。
- **保護保全上の留意点** 指定域北西部の急峻な立地に自然度の高い大木林や針広混交林が残存する反面、小規模な土砂崩れ、ナラ枯れ病によるコナラ高木の枯損、林縁におけるつる植物の登攀、モウソウチクの林内への侵入といった攪乱・荒廃が認められる。所有者の意向を尊重しつつ、指定域全体の精査および統合的な保護・管理対策が望まれる。
- **特記事項** 特定植物群落(対照番号129)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-79)を変更
- **文献番号** 2

(調査・執筆:平吹 喜彦)



(撮影:平吹 喜彦、2022年11月19日)

ソヨゴ群落

- 群落の概要** ソヨゴは高さ5～10mほどになるモチノキ科の常緑広葉小高木で、本州・四国・九州に分布し、乾いた林内に生育する。森林群落の亜高木層以下の構成種であるが、マツ枯れ病やナラ枯れ病などで高木が枯損した林分で優占することが希にある。
- 県内の分布** 県内では仙台市の丘陵地に希に生育している。

単-70 黒森山のソヨゴ群落

壊滅危惧(3)

2016 壊滅危惧(3)

- 群落の位置** 仙台市青葉区(標高約110～120m、北緯:38°18'42"～38°18'48"、東経:140°47'33"～140°47'35")
- 選定理由と現状** 高木層は樹高22m前後のコナラ、カスミザクラ、アカシデなどによって構成され、亜高木層で樹高12m前後のソヨゴが優占し、林床には幼樹もある。面積は狭いが、県内では唯一のソヨゴ林で、分布北限の林分、隔離分布地としても貴重。
- 保護保全上の留意点** 黒森山は国有林であるが、宅地開発など種々の利用が試みられていることから改変・消失の可能性を秘めている。継続した見守りが必要。
- 特記事項** 特定植物群落(対照番号145)
- RDB2016からの変更点** 整理番号(単-77)を変更
- 文献番号** 3

(調査・執筆:滝口 政彦、西中 董)



(撮影:平吹 喜彦、2025年5月26日)

ウラジロガシ群落

- 群落の概要** ウラジロガシは高さ20mほどになる常緑広葉高木で、宮城県・新潟県以南の暖温帯域に広く分布する。山地の斜面から谷部にかけての適潤地に優占群落を形成することが多く、常緑広葉樹林の代表的な群落となっている。
- 県内の分布** ウラジロガシは宮城県が分布の北限域で、角田市・山元町・亶理町から石巻市まで点々と分布する。ウラジロガシが単独で優占する状況は希で、混交林となる。

単-71 金津のウラジロガシ群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

- 群落の位置** 角田市尾山(標高約30～40m、北緯:37°57'25"～37°57'27"、東経:140°50'4"～140°50'10")
- 選定理由と現状** 高木層では樹高13～16m、胸高直径40～80cmのウラジロガシが優占し、カヤ、オニイタヤ、ケヤキなどが混交する。林内にはシロダモ、シラカシ、テイカカズラ、オオパノイノモトソウなどの暖地性常緑植物が顕著。原植生の面影を残す森林として貴重。
- 保護保全上の留意点** 人の立ち入りも少なく、現状のまま、見守りを継続することが肝要。
- 特記事項** 深山緑地環境保全地域、特定植物群落(対照番号130)
- RDB2016からの変更点** 整理番号(単-76)を変更
- 文献番号** 2、37、38、39

(調査・執筆:滝口 政彦、西中 董)



(撮影:滝口 政彦、2023年7月18日)

シバ群落

- 群落の概要** シバは山野や路ばたに生育する高さ10cmほどになるイネ科の多年生草本で、北海道・本州・四国・九州に分布する。シバ群落は、放牧地に生じる半自然草原のひとつで、特にススキ群落が家畜の採食によって退行して成立する場合が多い。かつて、日本各地の放牧地にごく普通に見られたが、外来牧草による人工草地化や管理放棄によって急速に消滅している。
- 県内の分布** かつて鬼首高原や泉ヶ岳芳の平などに多くの放牧地があり、県内各地にシバ群落が見られた。しかし、現在では石巻市の旭山や籠峰山などに小面積で残存しているに過ぎない。なお、金華山ではニホンジカの高い採食圧によってシバ群落が形成されている。

単-72 旭山のシバ群落

壊滅危惧(3)

2016 壊滅危惧(3)

- 群落の位置** 石巻市河南町(標高約140～173m、北緯:38°29'15"～38°29'26"、東経:141°10'49"～141°10'55")
- 選定理由と現状** 旭山(標高173m)の山頂部には、伝統的な牛馬飼育と結びつきのあるシバ草原が残存し、シバに交じってシバスゲ、ヌカボ、オオチドメ、ウマノアシガタなどが生育。仙台平野に接した里山の半自然草原は希で、貴重。
- 保護保全上の留意点** 大きな変化は無いものの、山頂部の旭山神社への参拝やレクリエーション、眺望を楽しむ来訪者が多く、踏みつけによる裸地化や帰化植物の侵入が認められる。オーバーユースに留意する必要がある。
- 特記事項** 県立自然公園旭山普通地域、みやぎの野鳥の森(旭山野鳥の森)
- RDB2016からの変更点** 整理番号(単-81)を変更

(調査・執筆:下山 祐樹、菅野 洋)



(撮影:下山 祐樹、2021年7月15日)

単-73 籠峰山のシバ群落

壊滅危惧(3)

2016 壊滅状態(4)

- 群落の位置** 石巻市河北町(標高約330～347m、北緯:38°28'18"～38°28'23"、東経:141°20'18"～141°20'21")
- 選定理由と現状** 籠峰山(標高347m)の山頂部に残存するシバが優勢な草原で、シバスゲ、ウマノアシガタなども生育する。県内にシバ群落は極めて少なく、半自然草原を特徴づける希少種も生育していることから貴重。
- 保護保全上の留意点** 鉄塔建設による攪乱や放牧の停止によるススキ群落への遷移によって、一度シバ草原が激減したが、刈払いなどの保護活動により、最近では回復し、維持されている。県立自然公園に指定されていることから、継続した保護・管理が必要。
- 特記事項** 硯上山万石浦県立自然公園第3種特別地域
- RDB2016からの変更点** 整理番号(単-82)を変更
- 文献番号** 40

(調査・執筆:菅野 洋)



(撮影:菅野 洋、2022年10月23日)

スギ植林

- **群落の概要** スギは日本特産の常緑針葉高木で、最も普通な造林木である。スギの天然分布は本州・四国・九州・屋久島であるが、スギ植林はそれより広い範囲に及び、北海道南部にも見られる。
- **県内の分布** 県内でもスギは古くから植栽され、海岸帯から山地帯下部までの広い範囲に植林地が分布する。多くは戦後に植えられた小～中径木の林であるが、社寺林や屋敷林などには大木が見られ、太白山や鹽竈神社などには見事な林分がある。

単-74 篔岳観音堂境内のスギ植林

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

- **群落の位置** 涌谷町篔岳(標高約220～240m、北緯:38°33'50"～38°33'57"、東経:141°10'41"～141°10'46")
- **選定理由と現状** 樹高25m前後、胸高直径80～100cmに達するスギ大木が、境内に林立する貴重な群落。除伐管理によって下層木は見られないが、林床にはセリバオウレン、ムラサキケマン、ドクダミ、ハエドクソウなどが生育。
- **保護保全上の留意点** 現行の保護・管理対策を継続することに加えて、枯損が目立ってきたスギ大木に対して、枯損を低減するための予防的処置や人・建造物などへの危険防止対策が必要。
- **特記事項** 涌谷町指定天然記念物(篔峯寺夫婦杉・篔峯寺次郎杉・篔峯寺三郎杉・篔峯寺四郎杉)、篔岳山県自然環境保全地域
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-86)を変更
- **文献番号** 36

(調査・執筆:菅野 洋)



(撮影:菅野 洋, 2022年10月23日)

単-75 鹽竈神社のスギ植林

要注意(1)

2016 要注意(1)

- **群落の位置** 塩竈市一森山(標高約10～60m、北緯:38°19'2"～38°19'19"、東経:141°0'33"～141°0'54")
- **選定理由と現状** 鹽竈神社本殿の西側に広がる、樹高35m前後、胸高直径1mに達するスギ大木群を含む植林。林内にはシロダモ、ベニシダ、ヤブコウジといった暖地性常緑植物が豊富。都市域にあり、県内有数の広さと自然度を有する社寺林として貴重。
- **保護保全上の留意点** 保護・管理状態が良好で、人の立ち入りも制限されている。文化庁により「ふるさと文化財の森「檜皮」」にも指定されている。
- **特記事項** 特定植物群落(対照番号28)
- **RDB2016からの変更点** 群落名を微修正、整理番号(単-85)を変更
- **文献番号** 1、2

(調査・執筆:平吹 喜彦)



(撮影:平吹 喜彦, 2022年1月8日)

単-76 霊屋のスギ植林

要注意(1)

2016 要注意(1)

- **群落の位置** 仙台市青葉区(標高約30～70m、北緯:38°14'58"～38°15'8"、東経:140°51'48"～140°52'4")
- **選定理由と現状** 仙台藩祖伊達政宗の廟所と一体となったスギ植林で、樹齢300年以上の個体もあり、都市域にありながら自然度が高い点で貴重。樹高30mに達するスギがつくる林冠の下には、シロダモ、カクレミノなどの暖地性常緑植物が生育し、草本層にはウワバミソウが多い。
- **保護保全上の留意点** 仙台市保存緑地に指定されており、厳格な保護・管理がなされてきた。継続した対応が望まれる。
- **特記事項** 特定植物群落(対照番号39)、仙台市保存緑地(霊屋)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-84)を変更
- **文献番号** 1、2

(調査・執筆:滝口 政彦、西中 董)



(撮影:滝口 政彦, 2022年9月18日)

単-77 太白山のスギ植林

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

- **群落の位置** 仙台市太白区(標高約150～220m、北緯:38°13'55"～38°14'4"、東経:140°48'6"～140°48'14")
- **選定理由と現状** 仙台市太白区のシンボル、太白山(標高321m)の東側山腹に位置するスギ植林。生出森八幡神社の周辺で、樹高30m、樹齢100年に達するスギが見事な景観を呈しており、地域住民に親しまれている点でも貴重。
- **保護保全上の留意点** 植林として下刈りなどの管理がなされた結果、見通しがよい林内環境になっている。群落全体の今後の推移を見守る必要がある。
- **特記事項** 太白山県自然環境保全地域、特定植物群落(対照番号104)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-83)を変更
- **文献番号** 2、41

(調査・執筆:滝口 政彦、西中 董)



(撮影:滝口 政彦, 2022年9月18日)

クヌギ植林

- **群落の概要** クヌギは高さ15mほどになる落葉広葉高木で、本州・四国・九州・沖縄の山地に生育し、北限は岩手県南部である。古くから薪炭林として利用され、暖温帯域の代表的な二次林として位置づけられ、シイタケ栽培の原木として優れていることから植林されることも多い。
- **県内の分布** 仙南地方や仙台地方、石巻地方にはクヌギの優占する林が小面積でところどころに見られる。これらは薪炭材生産を目的として植林されたと考えられるもので、林内にはクヌギの稚樹や若木は見られない。

単-78 大綱木のクヌギ植林

壊滅状態(4)

2016 壊滅状態(4)

- **群落の位置** 登米市東和町(標高約110～240m、北緯:38°45'9"～38°45'20"、東経:141°22'55"～141°23'20")
- **選定理由と現状** 樹高22m前後、胸高直径40cmに達するクヌギ、コナラ、カスミザクラなどが林冠を形成し、林床にはヤマツツジ、ヤブレガサ、チゴユリなどが生育する。クヌギは植栽由来と推察されるが、これほど大木となり、しかも多くの自生種と混交して自然度の高い森林を形成している点で貴重。
- **保護保全上の留意点** 立枯れによってクヌギの個体数が減少し、自生の落葉広葉樹が優勢な森林に変化しつつある。稜線上のアカマツ高木もマツ枯れ病による枯死が続いており、群落全体の今後の推移を見守る必要がある。
- **特記事項** 大峰山クヌギ遺伝資源希少個体群保護林、特定植物群落(対照番号85)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-87)を変更
- **文献番号** 2、20

(調査・執筆:菅野 洋、平吹 喜彦)



(撮影:菅野 洋, 2022年10月23日)

ヨシ群落

- **群落の概要** ヨシは高さ3mほどになる大型のイネ科の多年生草本で、日本各地に広く分布する。ヨシが優占する群落は河川や湖沼の岸辺、河口付近の塩湿地、湿原、水田放棄地など低湿な立地に成立する。
- **県内の分布** ヨシは、県内の低湿地にも広く分布する。特に、北上川・鳴瀬川・阿武隈川などの河川の川岸や潟湖、伊豆沼・内沼・長沼などの池沼の岸辺に帯状に優占群落を形成する。

単-79 北上川(旧追波川)のヨシ群落

壊滅危惧(3)

2016 壊滅危惧(3)

- **群落の位置** 石巻市小船越・大森・三輪田・相野谷・中島・中野・福地・馬鞍・橋浦・針岡・釜谷・十三浜(標高約0~10m、北緯:38°29'42"~38°34'25"、東経:141°17'47"~141°27'5")
- **選定理由と現状** 北上川の下部にはヨシが優占する群落が広がっており、水位や塩分濃度に応じて塩生植物、ヒメガマ、オギ、ヤナギ類なども生育する。伝統建築資材としてヨシが育成されていることもあり、ヨシ原の面積は県内最大で、景観資源としても重要。
- **保護保全上の留意点** 東北地方太平洋沖地震・津波による攪乱から急速に自律的回復が進んでいる。復興事業における環境配慮と同様、今後の国土強靱化対策においても河道や氾濫原の地形・植生に及ぼす影響の最小化を期待したい。イタチハギなどの外来種対策も必要。
- **特記事項** 特定植物群落(対照番号17)、重要湿地
- **RDB2016からの変更点** 群落名を微修正、整理番号(単-31)を変更
- **文献番号** 1、2、42、43、44



(撮影:平吹 喜彦、2022年11月5日)

(調査・執筆:下山 祐樹、平吹 喜彦)

ササバモ群落

- **群落の概要** ササバモは、河川や水路などに群生する沈水性~浮葉性のヒルムシロ科の多年生草本で、本州(宮城県以南)・四国・九州・沖縄に分布し、北海道でも希に見られる。流水中に生育するので、単純な優占群落を形成する場合が多い。
- **県内の分布** 県内で確認されたササバモの生育地は極めて希である。

単-80 樽水ダムのササバモ群落

破壊状態(4)

2016 破壊危惧(2)

- **群落の位置** 名取市高館川上(標高約50m、北緯:38°10'31"~38°10'43"、東経:140°49'39"~140°50'37")
- **選定理由と現状** 増田川上流の樽水ダムの上流域にササバモが生育している。ササバモは関東地方以西の暖地に多く見られる沈水性~浮葉性の水生植物で、県内で確認されている生育地は極めて少なく、貴重。
- **保護保全上の留意点** ダム湖の水位管理によって、ササバモの出現は大きく左右される。継続した見守りが必要である。
- **特記事項** 樽水・五社山県自然環境保全地域
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-32)を変更



(撮影:滝口 政彦、2022年9月25日)

(調査・執筆:滝口 政彦、西中 董)

エゾウキヤガラ群落

- **群落の概要** エゾウキヤガラは、高さ40~100cmになるカヤツリグサ科の多年生草本で、北海道~九州の海岸近くの湿地、水路、河川河口部などの浅水域に生育し、群落を形成する。
- **県内の分布** 県全域の海岸域に広く分布し、深川沼にまとまった群落が見られたが、土地開発などによって環境が変化して占有面積は激減している。エゾウキヤガラは東北地方太平洋沖地震の津波で被災した水田や湿地に群生して出現した。

単-81 深川沼のエゾウキヤガラ群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

- **群落の位置** セヶ浜町湊浜(標高約0~10m、北緯:38°16'54"~38°17'3"、東経:141°2'38"~141°2'47")
- **選定理由と現状** 深川沼の沼岸に生育し、草高0.5~1.0mのエゾウキヤガラが優占し、一部にガマが見られる。かつては県内最大の群落であったが、沼の一部が干拓され激減した。
- **保護保全上の留意点** 深川沼の岸辺や浅瀬では高茎のヨシが分布を拡大しており、より草丈の低いエゾウキヤガラは減少している。攪乱依存種であることから、継続した見守りが必要。
- **特記事項** 特定植物群落(対照番号94)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-33)を変更
- **文献番号** 2、45



(撮影:平吹 喜彦、2023年9月2日)

(調査・執筆:滝口 政彦、西中 董)

アカガシ群落

- **群落の概要** アカガシは高さ20mほどになる暖地性常緑広葉高木で、本州・四国・九州に分布し、その北限は太平洋側では宮城県、日本海側では新潟県である。暖温带域上部を代表する極相林のひとつであるアカガシ群落は、東北地方南部では海岸に沿って断片的に分布している。
- **県内の分布** アカガシは、仙台市以南では名取丘陵や阿武隈山地の山脚部に点々と分布している。県内でアカガシの優占する群落はほとんど見られず、気仙沼市大島にある群落が宮城県唯一のもので、北限となっている。

単-82 気仙沼大島のアカガシ群落

壊滅状態(4)

2016 破壊危惧(2)

- **群落の位置** 気仙沼市磯草(標高約5~50m、北緯:38°52'1"~38°52'17"、東経:141°36'9"~141°36'43")
- **選定理由と現状** 樹高22m前後、胸高直径60cmに達する大木を含むアカガシが散生し、ケヤキ、ケンボナシ、シロダモなども生育する混交林があったが、大島架橋アクセス道路の新設や島内各所の道路拡張によって、磯草・館ノ沢地区のアカガシ個体群は著しく減少した。アカガシの若木・幼樹は、近隣のスギ植林・落葉広葉樹二次林の内部や人家・道路と接する林縁に多数分布している。アカガシの分布北限として貴重。
- **保護保全上の留意点** 復興事業に伴う道路の建設を担った宮城県土木部は、環境アドバイザー制度を創設し、回避・低減に取り組んできた。幸いにも磯草地区には自然状態のアカガシが相当数残存しており、継続した保護対策が必要。
- **特記事項** 三陸復興国立公園普通地域、特定植物群落(対照番号2)
- **RDB2016からの変更点** 群落名を微修正、整理番号(単-15)を変更
- **文献番号** 1、2、45、46



(撮影:平吹 喜彦、2022年11月4日)

(調査・執筆:滝口 政彦、平吹 喜彦)

スダジイ群落

- **群落の概要** スダジイは高さ20mほどになる暖地性常緑広葉高木で、宮城県・新潟県以南の暖温帯域に分布する。優占群落は、沿岸部の温暖湿潤な地域に極相林として成立する。伐採などによって、現在では社寺林などにわずかに残存しているに過ぎない。
- **県内の分布** 宮城県が分布の北限で、温暖な亶理町・山元町に点々と分布し、名取市高館山にも見られる。スダジイが優占する群落は福島県以南となっているが、福島県境に近い山元町坂元磯に生育密度の高い群落が小規模ながら見られる。

単-83 磯のスダジイ群落

壊滅危惧(3)

2016 壊滅危惧(3)

- **群落の位置** 山元町坂元(標高約10～50m、北緯:37°53'49"～37°54'13"、東経:140°54'1"～140°55'20")
- **選定理由と現状** 低標高の丘陵斜面上の二次林や屋敷近傍に、樹高15mに達するスダジイが点在する。林冠でアカガシ、コナラ、ヤマザクラなどが混交し、林内にはヤブツバキ、ヒサカキ、ヤブコウジなどの暖地性常緑植物が顕著。県内でスダジイの自然更新が確認されている唯一の森林として貴重。
- **保護保全上の留意点** スダジイを含む里山の森林は、点在する農家の暮らしと関わりながら存続してきたと推察されることから、所有者に希少性を理解いただきながら、保護・管理対策を講じる必要がある。
- **特記事項** 特定植物群落(対照番号146)
- **RDB2016からの変更点** 群落名を微修正、整理番号(単-16)を変更
- **文献番号** 3、45、47、48、49



(撮影:平吹 喜彦、2023年3月25日)

(調査・執筆:滝口 政彦、平吹 喜彦)

タブノキ群落

- **群落の概要** タブノキは高さ30mほどになる暖地性常緑広葉高木で、本州・四国・九州・沖縄に分布し、その北限は太平洋側では岩手県山田町、日本海側では青森県岩崎村である。タブノキが優占する群落は、暖温帯域に広く分布し、沖積地や斜面凹地などの適潤地に成立するが、北限付近では海岸沿いに多く見られる。
- **県内の分布** 県内の海岸帯は一年を通じて温暖なため、タブノキの優占群落が松島や南三陸沿岸に分布する。特に伐採などの人為的影響が少ない南三陸町の荒島や石巻市の弁天島などの島嶼では、発達した優占群落がまとまって残存する。冬季の季節風の当たらない南から東斜面に多い。

単-84 御崎神社のタブノキ群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

- **群落の位置** 気仙沼市唐桑町神の倉(標高約10～50m、北緯:38°51'34"～38°51'43"、東経:141°40'8"～141°40'20")
- **選定理由と現状** 樹高24m前後、胸高直径80cmに達するタブノキが林立し、林冠ではクロマツやモミ、林内ではヤブツバキ、オオバジャノヒゲ、ヤブコウジなどが生育。これより北方にはこれほど大規模なタブノキ林は見当たらず、貴重。
- **保護保全上の留意点** 神社ではタブノキ林の価値を認めて、林内への立ち入りを禁止するなど大切に保護している。一方、海崖に近い立地では、マツ枯れ病によるクロマツ高木の枯死が深刻で、タブノキ林への遷移を見守る必要がある。
- **特記事項** 三陸復興国立公園第1・2種特別地域、特定植物群落(対照番号1)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-14)を変更
- **文献番号** 1、2



(撮影:平吹 喜彦、2023年6月17日)

(調査・執筆:平吹 喜彦)

単-85 歌津半島尾崎のタブノキ群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

- **群落の位置** 南三陸町歌津(標高約20m、北緯:38°41'34"～38°41'35"、東経:141°33'30"～141°33'33")
- **選定理由と現状** 北東向き斜面に残存する、タブノキが優占する自然林。歌津半島の所々にも、小面積ではあるが同質のタブノキ林が残存しており、これらは原植生を知る上で貴重で、防災上も有益。
- **保護保全上の留意点** 東北地方太平洋沖地震による津波が低標高域に到達し、一部の低木で枯損が確認された。クロマツ林の中に小面積で残存する状況で、伐採される可能性もあることから、周知と見守りが必要。
- **特記事項** 三陸復興国立公園第1種特別地域、特定植物群落(対照番号81)
- **RDB2016からの変更点** 群落名を微修正、整理番号(単-12)を変更
- **文献番号** 2



(撮影:吉田 馨、2023年9月5日)

(調査・執筆:吉田 馨、西中 董)

単-86 志津川荒島のタブノキ群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

- **群落の位置** 南三陸町志津川(標高約10～39m、北緯:38°39'59"～38°40'7"、東経:141°27'41"～141°27'47")
- **選定理由と現状** 東西約180m、南北約260m、標高39mの荒島では、東側を中心に急峻な海崖を縁取るように、樹高20m前後、胸高直径80cmに達する大木を含むタブノキが林冠を覆っている。林内にはヤブツバキ、ヒサカキ、ミヤマシキミ、オオバジャノヒゲなどの暖地性常緑植物が豊富で、北限に近い常緑広葉樹林として貴重。
- **保護保全上の留意点** 本土と防潮堤(歩道を兼ねる)で接続されていることもあり、島を周遊する小径のほか、釣り人が利用する急崖を下る踏み跡が各所にある。踏圧による土壌や植物の荒廃、水みち形成と土砂流亡が生じないように見守る必要がある。
- **特記事項** 三陸復興国立公園第1種特別地域、特定植物群落(対照番号13)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-13)を変更
- **文献番号** 1、2、50、51



(撮影:吉田 馨、2022年9月5日)

(調査・執筆:吉田 馨、平吹 喜彦)

単-87 貢尻島のタブノキ群落

壊滅危惧(3)

2016 壊滅危惧(3)

- **群落の位置** 石巻市名振(標高約10～63m、北緯:38°33'22"～38°33'35"、東経:141°29'30"～141°29'39")
- **選定理由と現状** タブノキ林は、島の中央部と東側の緩斜面に分布する。萌芽再生した二次林ではあるが、樹高20m前後、胸高直径40～80cmの大木が混交する林分もある。原植生を知る上で貴重。
- **保護保全上の留意点** 東北地方太平洋沖地震・津波による影響は確認できなかった。ニホンジカの採食によって、林床植物が荒廃・消失している。今後、樹皮の剥皮によるタブノキの枯損が進行するおそれがあり、ニホンジカの個体群管理を含めた対策を早急に講じる必要がある。
- **特記事項** 三陸復興国立公園第1種特別地域、特定植物群落(対照番号18)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-11)を変更
- **文献番号** 1、2、52



(撮影:齊藤 賢治、2024年4月28日)

(調査・執筆:齊藤 賢治、菅野 洋)

単-88 出島のタブノキ群落

破壊危惧(2)

2016 要注意(1)

- **群落の位置** 女川町出島(標高約10~50m、北緯:38°26'13"~38°27'55"、東経:141°30'55"~141°32'4")
- **選定理由と現状** 出島・寺間集落の社寺や海に面した急斜面の一面に、樹高13~20m、胸高直径30~80cmほどのタブノキが優占し、林内にヤブツバキ、ヒサカキ、トベラなどの暖地性常緑広葉樹が生育する小林分が存在する。また島内には、アカマツ、モミ、ケヤキなどの高木と混交するタブノキが点在。出島の原植生を知る上で貴重。
- **保護保全上の留意点** 一部で伐採による消失がある。林分の履歴や防災・魚付き機能(生態系サービス)などの評価を経て、最適な保護・管理を進めることが有益。
- **特記事項** 三陸復興国立公園第3種特別地域[一部]、特定植物群落(対照番号4)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-10)を変更
- **文献番号** 1、2



(撮影:平吹 喜彦、2023年11月23日)

(調査・執筆:平吹 喜彦)

単-89 弁天島のタブノキ群落

壊滅危惧(3)

2016 壊滅危惧(3)

- **群落の位置** 石巻市小竹浜(標高約10~37m、北緯:38°22'52"~38°22'58"、東経:141°22'35"~141°22'43")
- **選定理由と現状** 島の南~東向き斜面一帯に分布し、樹高20m前後、胸高直径40cm前後のタブノキにケヤキ、イヌシデなどが混交する。林内にはヒサカキ、シロダモ、ヤブツバキなどの暖地性常緑広葉樹が顕著。この地域の最も発達したタブノキ林のひとつで、貴重。
- **保護保全上の留意点** 東北地方太平洋沖地震・津波による影響は、確認できなかった。ニホンジカによる食害も認められない。島へのアプローチが容易ではないため、人為的影響も少なく、このまま存続すると推察されるが、継続した見守りが肝要。
- **特記事項** 硯上山万石浦県立自然公園第1種特別地域、特定植物群落(対照番号20)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-3)を変更
- **文献番号** 1、2、40



(撮影:下山 祐樹、2022年7月11日)

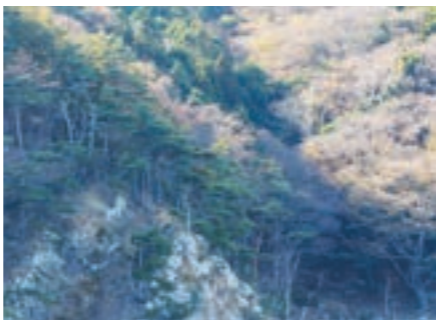
(調査・執筆:下山 祐樹、西中 薫)

単-90 小出島のタブノキ群落

壊滅状態(4)

2016 要注意(1)

- **群落の位置** 石巻市月浦(標高約10~70m、北緯:38°22'34"~38°22'50"、東経:141°25'3"~141°25'37")
- **選定理由と現状** 樹高20m前後、胸高直径20~60cmのタブノキが優占し、ケヤキなどが混交する林分。林床にはキツタ、ジャノヒゲ、オオバジャノヒゲが多い。萌芽再生した二次林ではあるが、原植生の面影を残す群落として貴重。
- **保護保全上の留意点** 東北地方太平洋沖地震・津波により、南斜面の一部で崩落が生じた。また、ニホンジカによる食害で下層の植物はほとんど見られなくなっている。食害対策とともに、継続した見守りが肝要。
- **特記事項** 三陸復興国立公園第3種特別地域
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-9)を変更
- **文献番号** 52



(撮影:齊藤 賢治、2023年11月25日)

(調査・執筆:平吹 喜彦、齊藤 賢治)

単-91 石巻桂島のタブノキ群落

破壊危惧(2)

2016 要注意(1)

- **群落の位置** 石巻市竹浜(標高約10~20m、北緯:38°21'49"~38°21'55"、東経:141°25'21"~141°25'34")
- **選定理由と現状** 島の山頂部に分布し、タブノキのほかモチノキ、シロダモ、トベラなどの暖地性常緑広葉樹が優占する林分。分布北限域の発達した群落として貴重。
- **保護保全上の留意点** 東北地方太平洋沖地震・津波による影響は確認できなかった。海上の孤島ながら、林床植物にニホンジカの食痕が散見されたことから、その個体群管理を含めた対策を早急に講じる必要がある。
- **特記事項** 三陸復興国立公園第1種特別地域、特定植物群落(対照番号19)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-8)を変更
- **文献番号** 1、2



(撮影:齊藤 賢治、2023年11月25日)

(調査・執筆:平吹 喜彦、齊藤 賢治)

単-92 岸山王島(泊浜)のタブノキ群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

- **群落の位置** 石巻市泊浜(標高約10~37m、北緯:38°21'23"~38°21'30"、東経:141°31'30"~141°31'38")
- **選定理由と現状** 断崖で縁取られた島の上部は平坦で、そこに祀られた神社を中心にタブノキが優占する森林が広がっている。特に南斜面には大径木で構成される林分があり、この地域の最も発達したタブノキ林のひとつとして貴重。
- **保護保全上の留意点** 東北地方太平洋沖地震・津波では海崖が崩れたものの、タブノキ林の変化は確認できなかった。アカマツ高木の一部で、マツ枯れ病によると思われる立枯れが認められた。島へのアプローチが容易ではないため人為的影響も少なく、タブノキ林はこのまま存続すると推察されるが、ニホンジカの生息の有無を含めて継続した見守りが肝要。
- **特記事項** 三陸復興国立公園第1種特別地域、特定植物群落(対照番号5)
- **RDB2016からの変更点** 群落名を微修正、整理番号(単-7)を変更
- **文献番号** 1、2、52



(撮影:菅野 洋、2022年7月2日)

(調査・執筆:菅野 洋)

単-93 田代島のタブノキ群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

- **群落の位置** 石巻市田代浜(標高約10~70m、北緯:38°17'58"~38°18'13"、東経:141°25'4"~141°25'16")
- **選定理由と現状** 樹高18m前後、胸高直径50~90cmのタブノキが優占し、モチノキ、シロダモなどが混交する。下層にはヤブツバキ、ヒサカキ、アオキ、テイカカズラ、ヤブコウジ、ジャノヒゲ、ベニシダなど多くの暖地性常緑植物が生育。田代島の原植生を知る上で貴重。
- **保護保全上の留意点** タブノキ林は島の東部を中心に分布しており、神社の境内ではよく保護されている。東北地方太平洋沖地震・津波による影響は確認できず、林相に大きな変化は見られない。伐採などの人為に留意し、見守る必要がある。
- **特記事項** 特定植物群落(対照番号11)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-5)を変更
- **文献番号** 1、2、52



(撮影:下山 祐樹、2022年7月1日)

(調査・執筆:下山 祐樹、菅野 洋)

単-94 網地島のタブノキ群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

- **群落の位置** 石巻市網地浜・長渡浜(標高約10~90m、北緯:38°14'59"~38°16'58"、東経:141°27'35"~141°29'51")
- **選定理由と現状** 樹高15m前後、胸高直径20~80cmのタブノキが優占し、モチノキ、ケヤキ、カスミザクラなどが混交する。下層にはヒサカキ、ヤブツバキ、アオキ、ヤブコウジ、オオバジャノヒゲなどの暖地性常緑植物が生育。網地島の原植生を知る上で貴重。
- **保護保全上の留意点** タブノキ林は島の中央部よりも南側・北側を中心に点在しており、墓地と一体となった林分も見られる。いずれもよく保護されており、人為によって損なわれることがないよう、見守りを継続することが大切。
- **特記事項** 三陸復興国立公園第2・3種特別地域、特定植物群落(対照番号9)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(単-6)を変更
- **文献番号** 1、2



(撮影:下山 祐樹、2022年7月1日)

(調査・執筆:下山 祐樹、菅野 洋)

モチノキ群落

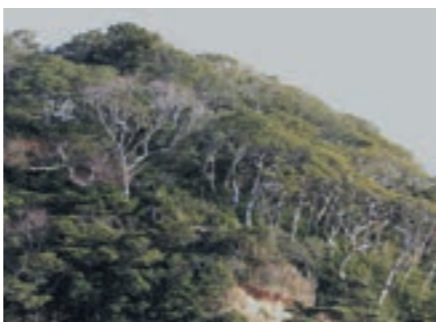
- 群落の概要** モチノキは高さ10mほどになる常緑広葉小高木で、本州(宮城・山形以南)・四国・九州・沖縄の暖温帯域、特に沿岸部に生育する。単独で優占群落を形成することは少ないが、希に塩害の影響を受ける小島や岬に優占群落が成立することが知られている。
- 県内の分布** モチノキは、沿岸部に点々と分布しており、南三陸町の樫島が分布の北限である。モチノキは優占群落を構成することはほとんどないが、沖山王島だけに優占群落が見られる。

単-95 沖山王島(泊浜)のモチノキ群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

- 群落の位置** 石巻市泊浜(標高約10~47m、北緯:38°21'26"~38°21'34"、東経:141°31'44"~141°31'53")
- 選定理由と現状** 島の最高点の西斜面に、小面積ではあるがモチノキ林が分布。樹高10~12m、胸高直径8~17cmのモチノキに、わずかにタブノキ、ヒサカキ、カスミザクラなどが混交する。分布の北限域で、モチノキがこれほど群生している林分は唯一で、貴重。
- 保護保全上の留意点** 東北地方太平洋沖地震・津波による影響を含めて、相観上は、群落に大きな変化は確認できなかった。海崖に縁取られて上陸は容易でないため、このまま存続すると推察されるが、見守りが必要。
- 特記事項** 三陸復興国立公園第1種特別地域、特定植物群落(対照番号141)
- RDB2016からの変更点** 群落名を微修正、整理番号(単-17)を変更
- 文献番号** 3、52



(撮影: 齊藤 賢治, 2023年11月25日)

(調査・執筆: 菅野 洋)

シャリンバイ群落

- 群落の概要** シャリンバイは高さ1~4mになる常緑広葉低木で、本州・四国・九州・沖縄の暖温帯域の主に沿岸部に生育する。シャリンバイが優占する群落は少なく、山形県と福島県では天然記念物に指定されている群落がある。
- 県内の分布** シャリンバイは、県内では自生地は少なく、塩竈市の桂島や東松島市の宮戸島に点々と分布しており、海岸帯のクロマツ群落などの下層に見られる。特にまとまって群生しているのは宮戸島の大浜である。

単-96 宮戸島のシャリンバイ群落

壊滅状態(4)

2016 壊滅状態(4)

- 群落の位置** 東松島市宮戸(標高約2~20m、北緯:38°19'29"~38°19'41"、東経:141°9'24"~141°9'43")
- 選定理由と現状** 大浜と月浜の間の小丘上にクロマツ海岸林があり、林床にシャリンバイ、トベラ、タブノキなどの暖地性常緑植物が生育する。シャリンバイは宮城県では希少種で、この生育地は太平洋側北限域の唯一の群生地として貴重。
- 保護保全上の留意点** 東北地方太平洋沖地震・津波後の大浜の港湾・防潮堤復興工事などにより、生育環境が変化し、群生地はやぶ状になった。また、盗掘も見られ、一部は伐採された。早急に保護対策を講じる必要がある。
- 特記事項** 国指定名勝(特別名勝松島)、県立自然公園松島普通地域、特定植物群落(対照番号27)
- RDB2016からの変更点** 群落名を微修正、整理番号(単-18)を変更
- 文献番号** 1、2



(撮影: 滝口 政彦, 2022年10月21日)

(調査・執筆: 滝口 政彦, 齊藤 賢治)

モクゲンジ群落

- 群落の概要** モクゲンジは高さ10mほどになる落葉広葉小高木で、日当りのよい浅土地に生育する。国内での分布は、日本海側が長崎県対馬、山口県から石川県、飛んで秋田県・青森県、内陸部が長野県・山梨県、太平洋側では宮城県・岩手県と隔離分布している。
- 県内の分布** 県内のモクゲンジは、主に海岸帯の崖地に生育しており、東松島市から気仙沼市の岩手県境付近にまで見られる。

単-97 鮫ヶ浦のモクゲンジ群落

破壊危機(2)

2016 破壊危機(2)

- 群落の位置** 東松島市宮戸(標高約2~20m、北緯:38°20'40"~38°20'42"、東経:141°9'50"~141°9'51")
- 選定理由と現状** 鮫ヶ浦湾奥中央に突き出た標高15mほどの小規模な尾根の先端部に、暖地性落葉広葉小高木のモクゲンジが10個体ほど、樹高10m前後で散生。下層にはその実生や稚樹のほか、暖地性常緑樹のヤブツバキ、テイカカズラなどが生育する。数少ない自然状態のモクゲンジ生育地として貴重。
- 保護保全上の留意点** 東北地方太平洋沖地震・津波による顕著な影響は認められなかった。林冠のモクゲンジの多くがフジなどのつる植物に覆われていることから、つる植物を早急に除伐し、経過を見守ることが必要。
- 特記事項** 国指定名勝(特別名勝松島)、県立自然公園松島普通地域
- RDB2016からの変更点** 整理番号(単-19)を変更
- 文献番号** 53



(撮影: 平吹 喜彦, 2023年9月3日)

(調査・執筆: 平吹 喜彦)

アカマツ群落

- 群落の概要** アカマツは高さ25mほどになる常緑針葉高木で、本州・四国・九州の各地に広く分布する。分布の北限は青森県大間町で、南限は屋久島である。アカマツが優占する群落は二次林や植林として各地に見られるが、自然林は比較的少なく、海岸帯では岩角地や砂丘などに分布する。
- 県内の分布** 県内でも、海岸帯では半島、島嶼、岬端などの土壌が浅く、乾燥して貧栄養な立地に成立しており、特に松島地域では顕著である。マツ枯れ病により、県内の各地で立枯れが多く発生しており、存続が危機的な状態となっている群落もある。

単-98 大島十八鳴浜のアカマツ群落

破壊危機(2)

2016 破壊危機(2)

- 群落の位置** 気仙沼市外浜・大初平(標高約10~30m、北緯:38°52'18"~38°52'33"、東経:141°37'49"~141°38'4")
- 選定理由と現状** 鳴り砂海岸として気仙沼市の天然記念物に指定されている十八鳴浜を中心に、アカマツ自然林が見られる。樹高18m前後、胸高直径20~35cmのアカマツが優占する森林で、林内にはリョウブ、ヤマツツジが顕著。この地域を象徴する海岸林のひとつとして貴重。
- 保護保全上の留意点** マツ枯れ病と東北地方太平洋沖地震・津波による攪乱で、アカマツの枯損が顕著。国立公園第1種特別地域であることも踏まえて、この地域の海岸林の自然再生プロセスと立地に留意した、順応的な保護・管理対策を講じる必要がある。
- 特記事項** 三陸復興国立公園第2種特別地域、特定植物群落(対照番号79)
- RDB2016からの変更点** 整理番号(単-21)を変更
- 文献番号** 2



(撮影: 滝口 政彦, 2023年1月16日)

(調査・執筆: 滝口 政彦, 西中 董)

単-99 清崎のアカマツ群落

壊滅状態 (4)

2016 壊滅状態 (4)

■**群落の位置** 石巻市鮎川浜・十八成浜 (標高約10～70m、北緯 :38°17'30"～38°18'9"、東経 :141°29'30"～141°30'16")

■**選定理由と現状** 以前は樹高20m前後のアカマツが優占する見事な群落であったが、マツ枯れ病による枯損が続き、林冠欠所が増加している。林床ではニホンジカによる被食も進行しており、森林全体として荒廃。高木層にはカスミザクラ、タブノキなどが、林床にはヤブコウジ、ヤブムラサキなどが生育。

■**保護保全上の留意点** アカマツ高木の枯死によって生じた林冠ギャップでは、アカマツ低木が自然更新する状況も見られ、ニホンジカの個体数管理を含む統合的・順応的な対策を講じれば、植生再生プロセスが自律的に進行する可能性がある。

■**特記事項** 三陸復興国立公園第1・2種特別地域、特定植物群落(対照番号8)

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(単-20)を変更

■**文献番号** 1、2



(撮影：下山 祐樹、2021年9月12日)

(調査・執筆：下山 祐樹、菅野 洋)

単一群落

海岸帯／海岸林

クロマツ群落

■**群落の概要** クロマツは高さ25mほどになる常緑針葉高木で、本州・四国・九州・伊豆諸島・対馬・種子島・屋久島・トカラ列島の海岸近くに広く分布する。自然群落としての分布北限は岩手県南部の海岸とされる。クロマツは海岸の砂丘や岩角地に生育し、潮風に対する抵抗力が強く、耐乾性もあるので、各所で植林されているが、自然林は少ない。

■**県内の分布** クロマツ群落は、松島地域から気仙沼市の岩手県境まで見られるが、自然林と判断できる林分は少なく、海岸の急峻な岩角地に限られる。マツ枯れ病の罹患により、県内各地で立枯れが多数発生しており、群落としての存続に危機的な影響を及ぼすことが懸念される。

単-100 巨釜半造のクロマツ群落

壊滅状態 (4)

2016 破壊危機 (2)

■**群落の位置** 気仙沼市唐桑町 (標高約10～60m、北緯 :38°53'21"～38°53'49"、東経 :141°39'41"～141°40'5")

■**選定理由と現状** 外洋から波浪が押し寄せる急峻な海崖の肩部やその背後地には、樹高20m前後、胸高直径60cmに達するクロマツが優勢となった疎林が広がっていた。林床にはヒサカキ、ミヤコザサ、ススキ、ヤマツツジなどが生育。クロマツの分布北限域における土地的極相林ともみなされる貴重な海岸林。

■**保護保全上の留意点** 巨釜半造の雄大な海岸景観を構成する常緑樹林としても重要であったが、マツ枯れ病による枯損が続き、相観は大きく変貌してきた。自生の海崖植物との調和やタブノキ、ヒサカキ、先駆植物による遷移を尊重しながら、再生・保全対策を統合的・順応的に講じる必要がある。

■**特記事項** 三陸復興国立公園第1種特別地域、特定植物群落(対照番号78)

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(単-24)を変更

■**文献番号** 2



(撮影：平吹 喜彦、2023年6月17日)

(調査・執筆：平吹 喜彦)

単-101 小前見島のクロマツ群落

壊滅状態 (4)

2016 壊滅状態 (4)

■**群落の位置** 気仙沼市中山 (標高約10～30m、北緯 :38°50'55"～38°51'6"、東経 :141°38'17"～141°38'22")

■**選定理由と現状** 海崖を除く島全体で、樹高15～22mのクロマツが優占。林床にはヒサカキ、ヤマツツジが多く、ゼンテイカ(ニッコウキスゲ)、チゴユリなども生育する。自然度の高いクロマツ疎林として貴重。

■**保護保全上の留意点** クロマツはマツ枯れ病と東北地方太平洋沖地震・津波によって枯損し、ごくまばらに残存するだけとなった。一方、林冠ギャップでは植生が自律的に再生しており、また海崖上部にはシナノキやタブノキなどが生残。再生・保全対策を統合的・順応的に講じる必要がある。

■**特記事項** 三陸復興国立公園第1種特別地域

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(単-25)を変更



(撮影：平吹 喜彦、2022年11月4日)

(調査・執筆：平吹 喜彦、齊藤 賢治)

単-102 歌津半島尾崎のクロマツ群落

破壊危機 (2)

2016 破壊危機 (2)

■**群落の位置** 南三陸町歌津 (標高約10～20m、北緯 :38°41'24"～38°41'36"、東経 :141°33'30"～141°33'41")

■**選定理由と現状** 樹高15m前後のクロマツが優占する海岸林で、林床にはヒサカキ、イブキなどが生育。この地域を象徴する海岸林のひとつとして貴重。

■**保護保全上の留意点** 健全な個体もあるものの、マツ枯れ病と東北地方太平洋沖地震・津波によって枯損したクロマツが顕著。マツ枯れ病対策として、一部の個体に薬剤塗布や薬剤注入が行われている。再生・保全対策を統合的・順応的に講じる必要がある。

■**特記事項** 三陸復興国立公園第1種特別地域、特定植物群落(対照番号82)

■**RDB2016からの変更点** 群落名を微修正、整理番号(単-23)を変更

■**文献番号** 2



(撮影：吉田 馨、2022年9月5日)

(調査・執筆：吉田 馨、西中 董)

単-103 神割崎のクロマツ群落

破壊危機 (2)

2016 破壊危機 (2)

■**群落の位置** 南三陸町戸倉、石巻市十三浜 (標高約10～40m、北緯 :38°37'41"～38°38'14"、東経 :141°31'28"～141°31'46")

■**選定理由と現状** 外洋から波浪が押し寄せる急峻な海崖に沿って、樹高16m前後のクロマツが散生する海岸林で、下層にはタブノキ、トベラ、イブキなどの海岸植物が生育。リアス海岸を象徴する自然林で、優れた景観美と環境保全機能を生み出している。

■**保護保全上の留意点** クロマツはマツ枯れ病と東北地方太平洋沖地震・津波によって枯損し、海崖肩部では薬剤注入や後継木植樹も一部で実施されている。一方、樹冠ギャップでは常緑広葉樹や陽生植物が自律的に再生していることから、海面からの高さや距離に応じた順応的な再生・保全対策の推進も有益。

■**特記事項** 三陸復興国立公園第1・2種特別地域、特定植物群落(対照番号83)

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(単-22)を変更

■**文献番号** 2



(撮影：吉田 馨、2022年9月5日)

(調査・執筆：吉田 馨、平吹 喜彦)

単一群落

海岸帯／砂丘植生

ハマナス群落

■**群落の概要** ハマナスは海岸の砂地に生える高さ1～1.5mになる寒地性の落葉広葉低木で、千島・北海道・本州(東北・北陸・山陰)に分布し、南限が太平洋側では茨城県、日本海側では島根県である。ハマナスの優占する群落は、海岸砂丘の頂部から内陸側の後背地に成立する。

■**県内の分布** 県内では、海岸の砂地に点々と生育するが、群生する所は少ない。東北地方太平洋沖地震による津波や地盤沈下、その後の復興・防災事業や波浪の影響で生育地自体が激変・消滅しており、危機的な状態にある。

単-104 大谷海岸のハマナス群落

壊滅状態 (4)

2016 壊滅 (D)

■**群落の位置** 気仙沼市本吉町九多丸・三島 (標高約2m、北緯 :38°48'47"～38°48'49"、東経 :141°33'38"～141°33'41")

■**選定理由と現状** かつてはハマナスが散生する希少な群落であったが、現在は公園化され、内陸性草本に埋もれるように生育。東北地方太平洋沖地震・津波後の復興・防災事業時に近隣から避難させた移植個体が主体となっている。

■**保護保全上の留意点** 護岸工事によって個体数が激減し、わずかに残存していた個体も東北地方太平洋沖地震・津波で消滅状態になった。奥行きのある砂浜・砂丘を確保して復興された防潮堤の脚部付近では、堆砂や砂丘植物の自律的再生が確認できることから、ハマナス本来の生育環境の特定を含む再生・保全対策が望まれる。

■**特記事項** 三陸復興国立公園第2種特別地域、特定植物群落(対照番号80)

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(単-2)を変更

■**文献番号** 2、43



(撮影：滝口 政彦、2024年5月27日)

(調査・執筆：平吹 喜彦)

単-105 矢本・野蒜海岸のハマナス群落

壊滅状態 (4)

2016 壊滅 (D)

■**群落の位置** 東松島市浜市・野蒜(標高約1~10m、北緯:38°21'12"~38°23'44"、東経:141°9'27"~141°12'57")

■**選定理由と現状** 鳴瀬川河口の北側では、被災前の防潮堤に沿って延びる砂丘の内陸側斜面や頂部に、砂に埋もれた状態でハマナスが点在。コウボウムギやケカモノハシなど多種の砂丘植物も広域で自立的に再生しており、自然度の高い、奥行きのある砂浜海岸植生が見られる。野蒜海岸には、復興・防災事業時に近隣から移植された個体から構成されるハマナス個体群が保全されている。

■**保護保全上の留意点** 東北地方太平洋沖地震・津波による著しい攪乱と自然環境に配慮した復興・防災事業を経て、再生途上にある。当面は、自律的再生の基盤となる砂丘地という立地の保全と、内陸性植物やつる植物の生育防止を第一としながら、順応的な再生・保全対策を講じる必要がある。

■**特記事項** 県立自然公園松島普通地域[一部]、特定植物群落(対照番号91)

■**RDB2016からの変更点** 単-1「浜市のハマナス群落」とRL2021新規記載「野蒜のハマナス群落」を統合、群落名・整理番号を変更

■**文献番号** 2、45、54

(調査・執筆:平吹 喜彦)



(撮影:平吹 喜彦、2021年7月9日)

単-106 塩竈桂島のハマナス群落

壊滅危惧 (3)

2016 -

■**群落の位置** 塩竈市浦戸石浜(標高約5m、北緯:38°19'58"~38°19'58"、東経:141°5'48"~141°5'49")

■**選定理由と現状** 群落高は30cm前後と低いが、約100㎡の砂浜に多数のハマナスが這うように群生してしている。県内では最も面積の広いハマナス群落で、貴重。

■**保護保全上の留意点** 海水浴場や人家から少し離れており、表示もないため、人の立ち入りは少ない。現状のまま保存する必要がある。

■**特記事項** 国指定名勝(特別名勝松島)、県立自然公園松島普通地域

■**RDB2016からの変更点** RL2021で新規記載、群落名を微修正

■**文献番号** 45

(調査・執筆:滝口 政彦、平吹 喜彦)



(撮影:平吹 喜彦、2025年6月5日)

単一群落

海岸帯／植林(海岸帯)

クロマツ植林

■**群落の概要** クロマツは潮風に対して強い耐性を有し、耐乾性があることから、古くから日本各地の海岸帯で防潮林、防風林、飛砂防備林として植栽されてきた。クロマツ植林は、北海道から沖縄まで広く分布している。「白砂青松」として、汀線を縁取る砂浜とともに日本の美しい海岸風景の重要な構成要素となっている。

■**県内の分布** セツ浜町から山元町まで続く仙台湾に面するクロマツ植林は、特に大規模であった。しかし、東北地方太平洋沖地震・津波によって、県内のクロマツ植林の多くが甚大な被害を被った。復興・防災事業による立地・植生・生態系の改変も著しい。

単-107 赤崎海岸のクロマツ植林

壊滅 (D)

2016 壊滅 (D)

■**群落の位置** 気仙沼市本吉町卯名沢(水面下)

■**選定理由と現状** 東北地方太平洋沖地震・津波以前、砂浜の背後地に樹高18m前後、胸高直径30~60cmのクロマツが優占し、アカマツ、カスミザクラ、ホオノキなども生育する海岸林があった。県北の砂浜海岸では屈指の、発達したクロマツ植林であった。

■**保護保全上の留意点** 東北地方太平洋沖地震・津波によって、海岸林は地盤もろとも消失した。復興事業では大規模な海岸・河川堤防や広大な海岸林基盤盛土が造成され、ピオトープの創出などさまざまな保全対策も実施された。元来の指定域の背後にあたる海辺で進行する「自然と人の協働による自然再生」に期待したい。

■**特記事項** 三陸復興国立公園第2種特別地域

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(単-29)を変更

■**文献番号** 4、45

(調査・執筆:平吹 喜彦)



(撮影:平吹 喜彦、2023年6月17日)

単-108 石巻長浜のクロマツ植林

壊滅状態 (4)

2016 壊滅状態 (4)

■**群落の位置** 石巻市渡波(標高約2m、北緯:38°24'52"~38°24'59"、東経:141°20'46"~141°21'30")

■**選定理由と現状** 砂丘上に樹高18m前後、胸高直径30cm前後のクロマツが純林状に分布し、林床にはシャリンバイ、マサキ、オオパイボタ、ハマヒルガオなどが生育。北側の後背湿地にはハンノキも散生する。近隣で市街化が進む中、自然度の高い貴重な残存緑地となっている。

■**保護保全上の留意点** 東北地方太平洋沖地震・津波による倒壊とその後の立枯れ、復興事業による除伐、林床攪乱、地盤造成で、林分の面積が減少し、疎林化した。クロマツの下種更新が認められる一方、ハリエンジュやセイタカアワダチソウといった帰化植物の繁茂が著しく、マツ枯れ病とあわせて順応的な再生・保全対策が必要。

■**特記事項** 特定植物群落(対照番号23)

■**RDB2016からの変更点** 群落名を微修正、整理番号(単-30)を変更

■**文献番号** 1、2

(調査・執筆:下山 祐樹、平吹 喜彦)



(撮影:平吹 喜彦、2024年1月6日)

単-109 矢本海岸(北上運河)のクロマツ植林

壊滅状態 (4)

2016 壊滅状態 (4)

■**群落の位置** 東松島市矢本大曲~浜市(標高約2m、北緯:38°22'40"~38°24'32"、東経:141°10'32"~141°14'44")

■**選定理由と現状** 主に指定域の北部・中部では北上運河の海側に、南部では陸側の砂丘上に造林されてきた、日本の砂浜海岸景観を象徴するクロマツ海岸林であった。林床には海側でハマヒルガオ、テリハノイバラ、ハイネズ、ヒメヤブランといった海岸植物が、陸側で暖地性常緑広葉樹が残存・再生しており貴重。

■**保護保全上の留意点** 東北地方太平洋沖地震・津波とその後の復興・防災事業によって、広域でクロマツの枯損が生じ、地表も改変された。各所で保全された小林分や砂地、後背湿地では自律的な植生再生が進行しており、これらを核とした順応的な再生・保全対策が有益。

■**特記事項** 特定植物群落(対照番号90)

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(単-28)を変更

■**文献番号** 2、45

(調査・執筆:平吹 喜彦)



(撮影:平吹 喜彦、2022年11月6日)

単-110 塩竈桂島のクロマツ植林

壊滅状態 (4)

2016 壊滅状態 (4)

■**群落の位置** 塩竈市浦戸桂島(標高約2~5m、北緯:38°19'52"~38°19'59"、東経:141°5'17"~141°5'27")

■**選定理由と現状** 砂浜海岸砂丘上の樹高24m前後、胸高直径80cmに達するクロマツ大木が並ぶ疎林。潮害・飛砂を防止するため藩政時代に植栽されたと伝えられる、県内有数の歴史を有する海岸林。東北地方太平洋沖地震・津波で破壊されて、さらにまばらな林相となった。

■**保護保全上の留意点** 東北地方太平洋沖地震・津波以前から、マツ枯れ病による枯死や人為による林床攪乱が顕著で、帰化・路傍植物が繁茂していた。海水浴場として利用されている砂浜や内陸側に残存する後背湿地との連関を考慮しながら、統合的・順応的な再生・保全対策の推進が望まれる。

■**特記事項** 国指定名勝(特別名勝松島)、県立自然公園松島普通地域

■**RDB2016からの変更点** 群落名を微修正、整理番号(単-27)を変更

■**文献番号** 45

(調査・執筆:平吹 喜彦)



(撮影:平吹 喜彦、2022年11月11日)

単-111 仙台湾岸のクロマツ植林

壊滅状態(4)

2016 壊滅状態(4)

■**群落の位置** 仙台市宮城野区～山元町(標高約2～5m、北緯:38°3'3"～38°15'42"、東経:140°55'7"～141°1'7")

■**選定理由と現状** 仙台市蒲生から山元町磯に至る約40kmの砂浜海岸において、砂丘や湿地内微高地を奥行き400～800mにわたって覆う、植樹由来のクロマツが優勢な森林。施業履歴や立地に応じて林分の種組成・構造は多様で、さまざまな生態系サービスを提供しており貴重。

■**保護保全上の留意点** 東北地方太平洋沖地震・津波で多数の樹木が枯損した。丘陵地由来の土砂で広域が盛り土され、特定の樹木種を植栽する森づくりが進んでいるが、帰化植物と内陸性植物の侵入・繁茂を招いている。残存あるいは自律的に再生する自生種や砂浜海岸エコトーンに固有の多様な立地を大切にしたい「生態系としての再生と保全対策」が必要。

■**特記事項** 仙台湾海浜県自然環境保全地域、特定植物群落(対照番号30)

■**RDB2016からの変更点** 群落名を微修正、整理番号(単-26)を変更

■**文献番号** 1、2、44、45、55、56、57、58、59、60、61、62、63、64、65、66、67、68、69、70

(調査・執筆:平吹 喜彦)



(撮影:平吹 喜彦、2023年4月24日)

複合群落

亜高山帯・山地帯／亜寒帯・冷温帯植生

複-1 栗駒山の自然植生

破壊危惧(2)

2016 壊滅危惧(3)

■**群落の位置** 栗原市栗駒・花山(標高約300～1630m、北緯:38°53'21"～38°57'52"、東経:140°41'28"～140°52'22")

■**選定理由と現状** 多雪で寒冷な気候の下、おおむね標高1100m以下ではブナ林が、標高1100～1550mでは亜高山帯性落葉低木林が、標高1550m以上では高山帯性のハイマツ群落や雪田が、それぞれ原生的な状態で広域に分布する。さらに、山地帯を中心に、湿原、溪畔林、針葉樹林といった希少な植生が地形に応じて介在する。厳正な保護が最優先されるべき貴重な山塊。

■**保護保全上の留意点** 岩手・宮城内陸地震で大規模な地滑りが各所に発生し、復旧事業を経て、自律的な再生の途上にある。登山道とその近隣地では踏圧による植生と地表の荒廃が見られ、統合的な監視と再生・保全対策の継続が必要。

■**特記事項** 栗駒国定公園特別保護地区および第1～3種特別地域、栗駒山・栃ヶ森山周辺森林生態系保護地域、特定植物群落(対照番号33)、県指定鳥獣保護区特別保護地区(栗駒)

■**文献番号** 1、2、4、71、72、73

(調査・執筆:吉田 馨、平吹 喜彦)



(撮影:吉田 馨、2021年8月11日)

複-2 禿岳の自然植生

要注意(1)

2016 要注意(1)

■**群落の位置** 大崎市鳴子温泉鬼首(標高約580～1260m、北緯:38°47'38"～38°50'0"、東経:140°35'42"～140°37'3")

■**選定理由と現状** 奥羽山脈主稜線の東側山体を覆う自然植生で、標高1100m前後でブナ林と亜高山帯性落葉低木林が入れ替わる。多雪で寒冷な気候と急峻な山体によって、雪崩や地表崩壊が顕著で、露岩地の多い独特の植生が顕著。

■**保護保全上の留意点** 紅葉シーズンを中心に登山者が多く訪れるため、登山道等に沿って生じている植生や地表の荒廃に留意しつつ、厳正保護を基本としたワイズユースが望まれる。

■**特記事項** 栗駒国定公園第1・3種特別地域、特定植物群落(対照番号51)

■**文献番号** 1、2

(調査・執筆:菅野 洋)



(撮影:菅野 洋、2023年10月7日)

複-3 船形山の自然植生

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

■**群落の位置** 加美町漆沢宿・滝庭・青野、色麻町小栗山、大和町吉田、仙台市青葉区大倉(標高約460～1500m、北緯:38°23'32"～38°29'56"、東経:140°34'16"～140°42'35")

■**選定理由と現状** 多雪で寒冷な気候の下、おおむね標高1250mを境に、下部ではブナ林が、上部では亜高山帯性落葉低木林が広く分布し、山頂付近では風衝草原やハイマツ群落が認められる。さらに、山地帯を中心に、湿原や溪畔林、針葉樹林といった希少な植生が地形に応じて介在する。山塊全体が貴重。

■**保護保全上の留意点** 1980年前後まで原生的なブナ林が次々に伐採されて、およそ75%が失われ、大規模洪水の一因になったとされる。山塊を覆う希少で、多様な植物群落を、「ひとつつながりの生態系」として厳正保護することが肝要。

■**特記事項** 県立自然公園船形連峰第1～3種特別地域および普通地域、船形山(御所山)生物群集保護林、特定植物群落(対照番号57・119)

■**文献番号** 1、2、4、74、75、76、77、78、79

(調査・執筆:吉田 馨、平吹 喜彦)



(撮影:吉田 馨、2023年8月23日)

複-4 蔵王山の自然植生

壊滅危惧(3)

2016 壊滅危惧(3)

■**群落の位置** 川崎町大字今宿・青根温泉、蔵王町遠刈田温泉、白石市福岡八宮、七ヶ宿町字関(標高約430~1825m、北緯:38°3'8"~38°13'46"、東経:140°25'2"~140°32'52")

■**選定理由と現状** 多雪で寒冷な気候の下、おおむね標高1300mを境に、下部ではブナ林が、上部では亜高山帯性落葉低木林やオオシラビソ林が広域に分布する。さらに前者では溪畔林や針葉樹林などが、後者では湿原、雪田、ハイマツ群落、風衝草原などが地形に応じて介在する。中央蔵王地域では火山荒原や硫気荒原も見られ、多様な原植生が分布する貴重な山塊。

■**保護保全上の留意点** 来訪者の増加もあり、登山道・散策路とその近隣地では、踏圧による植生と地表の荒廃、帰化植物やオオバコの侵入が顕在化して久しい。芝草平に至る登山道沿いの植生再生事業に象徴される順応的な監視・保全対策の継続が必要。自生種(高山植物)の盗掘やオオシラビソの集団枯死への対応も同様。

■**特記事項** 蔵王国立公園特別保護地区および第1~3種特別地域、蔵王生物群集保護林、特定植物群落(対照番号63)、重要湿地、県指定鳥獣保護区特別保護地区(蔵王連峰)

■**文献番号** 1、2、4、80、81、82、83、84、85、86

(調査・執筆:三島木 進、平吹 喜彦)



(撮影:三島木 進、2023年10月3日)

複合群落

山地帯/冷温帯植生

複-5 一桧山の植物群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

■**群落の位置** 栗原市花山(標高約380~700m、北緯:38°48'6"~38°49'21"、東経:140°44'59"~140°46'9")

■**選定理由と現状** 一桧山の上部域に、樹高25m以上、胸高直径80cmに達する大木を含む発達した落葉広葉樹林が残存する。ブナ林やトチノキ・サワグルミ林を中心に、部分的にはミズナラ林やイヌブナ林も見られる。林床にスズダケとチシマザサが生育するなど、太平洋型と日本海型のブナ林の推移域に位置する点でも貴重。

■**保護保全上の留意点** 県指定の自然環境保全地域で、伐採されるおそれは無いと推察する。「こもれびの森林科学館」などと連携して、自然体験活動への活用を図りながら厳正保護に努めて欲しい。

■**特記事項** 一桧山・田代県自然環境保全地域、県指定鳥獣保護区特別保護地区(一桧山)

■**文献番号** 13

(調査・執筆:菅野 洋)



(撮影:菅野 洋、2023年5月4日)

複-6 鬼首軍沢の植物群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

■**群落の位置** 大崎市鳴子温泉鬼首(標高約260~1259m、北緯:38°47'55"~38°53'21"、東経:140°32'19"~140°42'9")

■**選定理由と現状** 多雪で冷涼な気候と急峻な地形という奥羽山脈源頭部を象徴する環境の下、トチノキ・サワグルミ林、ブナ林、タニウツギ・ヒメヤシャブシ低木林、岩壁植生、クロベ林など多様な自然植生が、溪畔・緩斜面・雪崩斜面・露岩地・瘠せ尾根といった地形に対応してモザイク状に分布する貴重な集水域。

■**保護保全上の留意点** 軍沢で行われていた河川改修の工事跡地では、水辺植生が自律的に定着し始めている。河川沿いのヤナギ林を含めて、集水域を「ひとつながりの生態系」として厳正保護することが肝要。

■**特記事項** 栗駒国立公園第1~3種特別地域および普通地域、特定植物群落(対照番号47)

■**RDB2016からの変更点** 群落名を微修正

■**文献番号** 1、2

(調査・執筆:菅野 洋)



(撮影:平吹 喜彦、2024年8月10日)

複-7 峠田岳の植物群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

■**群落の位置** 七ヶ宿町字峠田・字関(標高約610~1082m、北緯:37°59'9"~38°0'7"、東経:140°22'46"~140°24'27")

■**選定理由と現状** 峠田岳(標高1082m)の山頂部を中心に、太平洋型・中間温帯性ブナ優占林が見られる。樹高18mほどの高木層ではブナにミズナラ、オニイタヤ、ホオノキなどが混交し、林床にはヤグルマソウ、オクノカンスゲ、ヒメモチなどが生育。この群落の周辺は二次林で占められており、貴重。

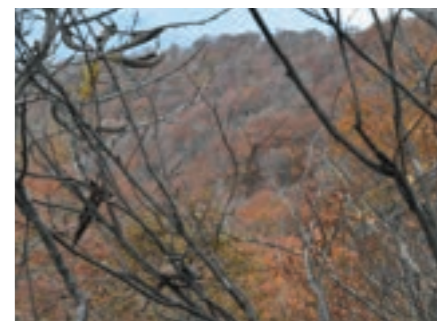
■**保護保全上の留意点** スキー場建設によって一部が伐採されており、山体全体を見渡した統合的な管理・保全対策が必要。

■**特記事項** 特定植物群落(対照番号74)

■**RDB2016からの変更点** 単-93「峠田山のブナ・イヌブナ群落」を群落複合に変更、群落名を微修正、整理番号を変更

■**文献番号** 1、2

(調査・執筆:三島木 進、西中 董)



(撮影:三島木 進、2023年10月27日)

複合群落

山地帯/湿原植生

複-8 世界谷地湿原の植物群落

壊滅状態(4)

2016 壊滅危惧(3)

■**群落の位置** 栗原市栗駒(標高約660~700m、北緯:38°54'28"~38°55'4"、東経:140°47'55"~140°48'40")

■**選定理由と現状** およそ5000~16000年前に誕生したとされる湿地で、ミズゴケ類がマット状に盛り上がった領域が混在するヌマガヤの優勢な湿原を中核として、湿性低木林、湿性高木林が不定形ながら同心円状に分布。広大かつ原生的な山地湿原として県内唯一。

■**保護保全上の留意点** 集水域内のブナ林伐採などで湿原の乾燥化が進み、流路末の堰き止めや侵入したヨシの刈り取りといった保全対策がなされてきた。さらに近年は、乱暴な木道改修、低木除伐、イノシシの掘り起こしによる重度の湿原荒廃が発生しており、適切な植生復元対策と啓発活動が不可欠。

■**特記事項** 栗駒国立公園特別保護地域、栗駒山・栃ヶ森山周辺森林生態系保護地域、特定植物群落(対照番号96・97)、重要湿地

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(複-18)を変更

■**文献番号** 1、2、87、88

(調査・執筆:吉田 馨、平吹 喜彦)



(撮影:吉田 馨、2021年10月18日)

複-9 谷地平湿原の植物群落

破壊危惧(2)

2016 壊滅状態(4)

■**群落の位置** 加美町滝庭(標高約880m、北緯:38°28'45"~38°28'54"、東経:140°36'57"~140°37'9")

■**選定理由と現状** 船形山北面の夕日沢源頭部にある山地湿原。草高0.7~1.6mのヨシが優占し、オニシモツケ、リュウキンカ、ヤマドリゼンマイ、モウセンゴケ、オオミズゴケ、ヒメミズゴケなどが生育する。船形山でこうした湿原は希で、学術的にも貴重。

■**保護保全上の留意点** 湿原の一部で低木化が進んでいる。周辺の樹林の伐採によって湿原植生が著しく変質するおそれがあり、集水域を中心にさらなる伐採を禁ずることが肝要。

■**特記事項** 県立自然公園船形連峰第2種特別地域、船形山(御所山)生物群集保護林、特定植物群落(対照番号115)

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(複-17)を変更

■**文献番号** 2、4

(調査・執筆:吉田 馨、西中 董)



(撮影:吉田 馨、2023年11月1日)

複-10 塩地谷地湿原の植物群落

要注意 (1)

2016 -

■ **群落の位置** 仙台市泉区(標高約850m、北緯:38°24'58"~38°25'4"、東経:140°42'49"~140°42'53")

■ **選定理由と現状** 周囲はミズナラの二次林であるが、湿原内部にはワタスゲ、バイケイソウ、ヤマドリゼンマイ、カキラン、ミズギク、ノハナショウブ、サワギキョウ、コバギボウシ、コオニユリ、ヒメシロネ、エゾリンドウ、チダケサシ、モウセンゴケなどの多様な湿生植物が生育している。原生的な山地湿原であり、貴重。

■ **保護保全上の留意点** 湿原に通じる遊歩道等がないことから、人の立ち入りによる過度の踏圧等の影響はほとんどないと考えられる。当面は見守りを継続して、厳正保護を図ることが肝要。

■ **特記事項** 県立自然公園船形連峰第2種特別地域

■ **RDB2016からの変更点** 新規記載

(調査・執筆: 滝口 政彦、菅野 洋)



(撮影: 滝口 政彦、2024年7月22日)

複-11 セケ宿みご谷地湿原の植物群落

破壊危機 (2)

2016 破壊危機 (2)

■ **群落の位置** セケ宿町字関(標高約400m、北緯:37°58'47"~37°58'50"、東経:140°26'59"~140°27'4")

■ **選定理由と現状** 白石川上流域で、アカマツの優占する二次林に囲まれた山腹の平坦部に成立した湿原。ハンノキがまばらに生え、下層でヌマガヤが優占してヨシ、ゼンテイカ(ニッコウキスゲ)、ノハナショウブ、サワギキョウ、ウメバチソウ、モウセンゴケなどが生育する湿性植生は希少。「みご」とは方言で単子葉植物の茎(稈)のことで、かつてすだれや敷物を編んだ。

■ **保護保全上の留意点** 湿原の一部で木本類の侵入・拡大が見られ、乾燥化が進むおそれがある。また、湿原に供給される水量が減少してきている可能性もある。木本類の侵入や水収支に関する詳細な調査を行った上で、湿地環境や湿生植物の保護対策を早急に講じる必要がある。

■ **RDB2016からの変更点** 整理番号(複-19)を変更

(調査・執筆: 滝口 政彦、西中 董)



(撮影: 滝口 政彦、2023年10月24日)

複合群落

山地帯/池沼植生(山地帯)

複-12 ウド沼の沼辺植物群落

要注意 (1)

2016 要注意 (1)

■ **群落の位置** 加美町宮崎(標高約320m、北緯:38°40'5"~38°40'12"、東経:140°41'38"~140°41'47")

■ **選定理由と現状** 多雪で冷涼な加美町北部の丘陵地奥部に位置する池沼で、アカマツを交えた落葉広葉樹二次林やスギ植林に囲まれている。開放水面が広がり、流出部といくつかの流入部に形成された低湿地に、ヨシやマコモなどの湿生植物やミズゴケ類が生育する小規模な湿原があり、浅水中にはホザキノフサモが生育。

■ **保護保全上の留意点** 当面は、林道を利用した来訪者による沼辺への無秩序な立ち入りとイノシシによる湿原の掘り起こし・泥浴に対する防止対策、および集水域内の森林施業における水源涵養・土砂流出防止への配慮が肝要。

■ **特記事項** 特定植物群落(対照番号135)

■ **RDB2016からの変更点** 整理番号(複-36)を変更

■ **文献番号** 2

(調査・執筆: 齊藤 賢治、平吹 喜彦)



(撮影: 平吹 喜彦、2023年8月12日)

複-13 ウトウ沼の沼辺植物群落

壊滅危機 (3)

2016 壊滅危機 (3)

■ **群落の位置** 加美町字漆沢宿・宮崎(標高約400m、北緯:38°39'51"~38°39'55"、東経:140°38'54"~140°38'59")

■ **選定理由と現状** ニツグダム上流域の凹地に位置する湿原・池沼。ヨシやコバギボウシが優勢な湿原の中央部に0.3haほどの開放水域があり、その沼辺にはミツガシワやミズゴケ類などが浮島状に、湖水内にはジュンサイが優勢な浮葉植物群落分布。原生的な植生で貴重。

■ **保護保全上の留意点** 湿地の北側を縁取るように舗装道路があるため、流入地下水の減少や土砂の流入に留意するとともに、踏圧・盗掘を招く来訪者の立ち入りを制限する必要がある。集水域内の森林を保全し、道路と湿地の間に立地本来の高木林帯や湿地低木帯を創出することも有効。

■ **特記事項** 加美町指定天然記念物(ウトウ沼の湿性植物群落)、特定植物群落(対照番号54)

■ **RDB2016からの変更点** 整理番号(複-31)を変更

■ **文献番号** 1、2

(調査・執筆: 齊藤 賢治、平吹 喜彦)



(撮影: 平吹 喜彦、2023年8月12日)

複-14 魚取沼の沼辺植物群落

破壊危機 (2)

2016 破壊危機 (2)

■ **群落の位置** 加美町字漆沢宿(標高約630~640m、北緯:38°38'10"~38°38'19"、東経:140°33'17"~140°33'31")

■ **選定理由と現状** 魚取沼とその集水域から構成され、奥羽山脈最奥部の急峻で多雪な源頭域に位置する。原生的な雪崩斜面植生、トチノキ・サワグルミ林、ブナ林などが広がり、沼辺には小溪流入域を中心にヤチダモ林やミツガシワ、ミズゴケ類を含む湿原が発達して、浮島状に湖心方向に大きく張り出している。

■ **保護保全上の留意点** 懸念されてきた湖内への土砂流入や湖水流出部の閉塞は顕著でない。周辺の森林は魚取沼鉄魚希少個体群保護林などに指定されており、集水域の原生的環境は保続すると推察する。魚取沼へ通じる林道も土砂崩れで閉鎖され、来訪者は減少している。継続した見守りの下、厳正保護が肝要。

■ **特記事項** 国指定天然記念物(魚取沼のテツギョ生息地)、魚取沼県自然環境保全地域、魚取沼鉄魚希少個体群保護林、特定植物群落(対照番号55)

■ **RDB2016からの変更点** 整理番号(複-21)を変更

■ **文献番号** 1、2、4、89、90

(調査・執筆: 齊藤 賢治、平吹 喜彦)



(撮影: 平吹 喜彦、2023年8月11日)

複-15 商人沼の沼辺植物群落

壊滅危機 (3)

2016 破壊危機 (2)

■ **群落の位置** 加美町字漆沢宿(標高約500m、北緯:38°37'2"~38°37'6"、東経:140°33'39"~140°33'45")

■ **選定理由と現状** 魚取沼と同様、奥羽山脈の主稜線に近い多雪で、急峻な源頭域に位置する原生的な沼池。沼辺を縁取るようにミツガシワが主体となった浮島が発達し、また多くの湿生・水生植物が同心円状に分布する。これら自然度の高い「ひとつづきの植生」は貴重。

■ **保護保全上の留意点** 沼池近傍まで林道が開設されたことで、釣り人などが容易にアクセスして沼辺の湿地を踏みつけている。原生的で希少な植生であり、ひとたび荒廃すると回復困難であることから、保護対策の実効性が確認されるまで開放・広報は慎むべきである。

■ **特記事項** 商人沼県自然環境保全地域、特定植物群落(対照番号134)

■ **RDB2016からの変更点** 整理番号(複-32)を変更

■ **文献番号** 2、91

(調査・執筆: 齊藤 賢治、平吹 喜彦)



(撮影: 平吹 喜彦、2023年8月11日)

複-16 荒沢湖沼群地域の沼沢地植物群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

- **群落の位置** 加美町滝庭(標高約250~650m、北緯:38°31'23"~38°33'37"、東経:140°38'5"~140°41'3")
- **選定理由と現状** 一帯は船形山東麓の広大な地滑り跡地で、多雪で冷涼な気候も作用して、大小の窪地に30以上の沼池や湿地が水系に沿って散在する。開放水域の周縁には、水深や地下水位、土質などに対応して、フトヒルムシロ群落、ミツガシワ群落、ミズドクサ群落、ヨシ-ミゾソバ群落、ハンノキ-ミズバショウ群落など多様な池沼植生が分布し、溪畔林やブナ林に接続している。
- **保護保全上の留意点** 学術調査を実施しながら、荒沢自然館や遊歩道、解説板などの整備がなされ、保護と利活用が推進されてきた。来訪者による踏みつけや山菜・山野草の採取に留意するなど、学術調査報告書の指針を活かした対応が肝要。
- **特記事項** 加美町指定天然記念物(荒沢の水ばしょう)、荒沢県自然環境保全地域、特定植物群落(対照番号111・113)、重要湿地、自然共生サイト(荒沢湿原地沼群)
- **RDB2016からの変更点** 単-111「田谷地沼のハンノキ-カササゲ群落」と単-112「荒沢のハンノキ-ミズバショウ群落」を複-33「荒沢湖沼群地域の沼沢地植物群落」に統合、整理番号(複-33)を変更
- **文献番号** 2、92、93、94

(調査・執筆:齊藤 賢治、平吹 喜彦)



(撮影:平吹 喜彦、2023年8月12日)

複合群落

山地帯/風穴植生

複-17 前森風穴の植物群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

- **群落の位置** 保護のため秘匿とする
- **選定理由と現状** 巨大な凹地で、堆積した岩石の隙間から冷気が噴出している。このためダケカンバ低木林が成立し、オガラバナ、ハクサンシャクナゲ、アカミイヌツゲなど亜高山帯性樹種や風穴特有の植物が生育。原生的な状態が保たれており、一層貴重。
- **保護保全上の留意点** 人里から離れており、林道も閉塞していることから、当面は見守りを継続して、厳正保護を図ることが肝要。
- **特記事項** 県立自然公園船形連峰第2種特別地域、船形山(御所山)生物群集保護林、特定植物群落(対照番号56)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(複-46)を変更
- **文献番号** 1、2、4、95、96

(調査・執筆:滝口 政彦、西中 董)



(撮影:西中 董、2020年10月18日)

複-18 秋保コケ風穴の植物群落

要注意(1)

2016 -

- **群落の位置** 保護のため秘匿とする
- **選定理由と現状** 斜面下部の崖錐で、ミズナラやサワグルミ、ケヤキが生育する高木林の辺縁部に見られる群落。堆積した岩塊の隙間から冷気が吹き出している。高標高域や高冷地に生育する植物が見られ、人の手も加わっておらず、大変貴重である。
- **保護保全上の留意点** これまで地元の人にしか知られておらず、人手がほとんど加わっていない。当面は見守りを継続して、厳正保護を図ることが肝要。
- **特記事項** 県立自然公園二口峡谷第3種特別地域
- **RDB2016からの変更点** 新規記載
- **文献番号** 96

(調査・執筆:滝口 政彦)



(撮影:滝口 政彦、2024年9月5日)

複-19 高倉山風穴の植物群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

- **群落の位置** 保護のため秘匿とする
- **選定理由と現状** コヨウラクツツジやウラジロハナヒリノキなどが疎生する低木植生で、草本層にクロクモソウ、ゴゼンタチバナ、コケ層にフジノマンネングサ、イワダレゴケ、オオフサゴケ、ホソバミズゴケ、ミヤマシギゴケ、エゾノチョウチンゴケなどが生育。県内で最大級の面積を有する風穴としても貴重。
- **保護保全上の留意点** 登山道もなく、アクセスが容易でないことから、人手がほとんど加わっていない。当面は見守りを継続して、厳正保護を図ることが肝要。
- **特記事項** 県立自然公園二口峡谷第3種特別地域
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(複-47)を変更
- **文献番号** 96

(調査・執筆:滝口 政彦、西中 董)



(撮影:滝口 政彦、2024年8月23日)

複-20 三方倉山風穴の植物群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

- **群落の位置** 保護のため秘匿とする
- **選定理由と現状** ブナ林内の林冠欠所で、安山岩の角礫がマット状のコケ類で覆われ、低木状のナナカマド、リョウブ、クロベ、ハナヒリノキ、オオバスのノキ、サラサドウダンなどが疎生する。コケ層にはフジノマンネングサ、エゾチョウチンゴケ、ミヤマチリメンゴケ、ハサナダゴケなどが見られる。原生的な風穴植生として貴重。
- **保護保全上の留意点** 登山道もなく、アクセスが容易でないことから、人手がほとんど加わっていない。当面は見守りを継続して、厳正保護を図ることが肝要。
- **特記事項** 県立自然公園二口峡谷普通地域
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(複-48)を変更
- **文献番号** 96

(調査・執筆:滝口 政彦、西中 董)



(撮影:滝口 政彦、2023年10月31日)

複-21 傾城森風穴の植物群落

壊滅状態(4)

2016 壊滅状態(4)

- **群落の位置** 保護のため秘匿とする
- **選定理由と現状** 岩峰となった山体の山脚に位置する。面積は小さいが、岩塊地に生育する植物に加え、ハシドイなどの風穴特有の植物が生育しており貴重。
- **保護保全上の留意点** 遊歩道があり、来訪者は少なくない。また、周辺森林では大規模な伐採も見られ、隣接部での伐採には注意が必要である。岩石の隙間から吹き出す冷気が弱まっており、崖錐斜面全体を見渡す視点で風穴保護のあり方を検討し、順応的に実施する必要がある。
- **特記事項** 蔵王高原県立自然公園普通地域
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(複-45)を変更

(調査・執筆:吉田 馨、西中 董)



(撮影:吉田 馨、2021年8月25日)

複-22 渡瀬風穴の植物群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

- **群落の位置** 保護のため秘匿とする
- **選定理由と現状** 寒成山(標高622m)北斜面の崖錐に位置し、草原状を呈する。優勢なベニバナイチャクソウとともにミヤマメシダ、アイズシモツケ、ミネカエデなどが生育。風穴特有の植生は貴重。
- **保護保全上の留意点** かつてはカイコの卵の貯蔵所として利用されていたが、第二次世界大戦後に放棄された。風穴特有の植物が盗掘される可能性があり、早急に保護・管理対策を講じる必要がある。
- **特記事項** 特定植物群落(対照番号69)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(複-43)を変更
- **文献番号** 1、2、17、95、96

(調査・執筆:吉田 馨、西中 董)



(撮影:吉田 馨、2021年8月26日)

複-23 寒成山風穴の植物群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

- **群落の位置** 保護のため秘匿とする
- **選定理由と現状** 寒成山(標高622m)の崖錐に分布し、5か所の小域が見られる。高木層・亜高木層にパッコヤナギが疎生し、林床にベニバナイチヤクソウ、キリンソウ、シオガマギク、ツルネコノメソウなどが生育。風穴特有の植生として貴重。
- **保護保全上の留意点** 石室の遺構がある。第二次世界大戦前まで利用され、その後放置されたという。冷風を生み出す上で重要な隣接する森林が伐採され、崖錐斜面の環境は激変した。斜面全体を見渡す視点で伐採や風穴保護のあり方を検討し、順応的に実施する必要がある。
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(複-44)を変更
- **文献番号** 17、95、96、97

(調査・執筆：吉田 馨、西中 董)



(撮影：吉田 馨、2022年8月29日)

複-24 小原黒森風穴の植物群落

壊滅状態(4)

2016 -

- **群落の位置** 保護のため秘匿とする
- **選定理由と現状** 岩盤クリーブによって変形・破壊した岩盤中に生じた空隙に由来する風穴。6基の風穴小屋遺構があり、カラマツ植林とミズナラ二次林に囲まれている。風穴特有の維管束植物は見られないが、エゾスギゴケ、ハイキンモウゴケなど県内での分布が限られている蘚苔類が生育しており貴重。
- **保護保全上の留意点** 2018年におよそ30年ぶりで風穴の所在が確認され、詳細な調査がなされた。大規模な森林伐採や自然再生エネルギー開発などによる荒廃が生じないように、早急に保護対策を講じる必要がある。
- **RDB2016からの変更点** RL2021で新規記載、群落名を微修正
- **文献番号** 96、98

(調査・執筆：滝口 政彦、西中 董)



(撮影：滝口 政彦、2024年8月28日)

複合群落

山地帯／岩壁植生

複-25 磐司岩の植物群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

- **群落の位置** 仙台市太白区(標高約370~1090m、北緯:38°16'26"~38°16'43"、東経:140°30'13"~140°31'40")
- **選定理由と現状** 磐司岩(表磐司)は高度差80~150m、延長3kmに及ぶ垂直崖で、イワキンバイやイブキジャコウソウなど、特殊かつ希少な植物から構成される岩壁植生が認められる。断崖上部端にはキタゴヨウやクロベが分布。本県の山地を代表する雄大で、自然度の高い岩壁植生として貴重。
- **保護保全上の留意点** 磐司岩と溪流の間を走る自動車道路の整備が進んだこともあり、断崖直下まで容易にアプローチできる。ゴミの投棄や山菜・山野草の採取が懸念されることから、啓発活動と監視の強化が望まれる。
- **特記事項** 国指定名勝(磐司)、蔵王国定公園第1種特別地域、特定植物群落(対照番号59)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(複-61)を変更
- **文献番号** 1、2

(調査・執筆：滝口 政彦、平吹 喜彦)



(撮影：滝口 政彦、2023年10月28日)

複-26 鎌倉山の植物群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

- **群落の位置** 仙台市青葉区作並(標高約370~500m、北緯:38°19'3"~38°19'6"、東経:140°38'32"~140°38'42")
- **選定理由と現状** 鎌倉山(標高520m)の上部南面は基盤岩が露出する垂直崖となっており、イワキンバイ、イワデンダ、キリンソウ、ミヤマアブラソウ、チチツパベンケイソウなど貴重な岩上植物が生育する。また、断崖上部端の浅土地にはアカマツ、マルバハギなどが見られる。
- **保護保全上の留意点** 岩登りに利用されているが、当面は見守りを継続して、厳正保護を図ることが肝要。
- **特記事項** 二口峽谷県立自然公園第2種特別地域、特定植物群落(対照番号122)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(複-62)を変更
- **文献番号** 2

(調査・執筆：滝口 政彦、西中 董)



(撮影：平吹 喜彦、2025年5月1日)

複-27 夫婦岩の植物群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

- **群落の位置** 丸森町筆甫(標高約350~572m、北緯:37°50'14"~37°50'52"、東経:140°42'21"~140°42'48")
- **選定理由と現状** 夫婦岩(標高572m)は、稜線に沿って切り立った岩壁が馬蹄形に連なる岩場である。岩上にはキリンソウ、マルバマンネングサなど貴重な岩上植物が生育する。また、浅土地には低木状のアカマツ、マルバハギ、ヒロハヘビノボラスなどが見られる。
- **保護保全上の留意点** 登山道が整備されたこともあり、来訪者が増加し、貴重な植物が盗掘されている。早急に実効性のある保護対策を講じる必要がある。
- **特記事項** 阿武隈渓谷県立自然公園第1・3種特別地域、特定植物群落(対照番号132)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(複-60)を変更
- **文献番号** 2、9

(調査・執筆：滝口 政彦、西中 董)



(撮影：滝口 政彦、2023年10月10日)

複合群落

山地帯／硫気孔・噴気孔荒原植生

複-28 雌釜・雄釜の噴気孔荒原植物群落

壊滅(D)

2016 壊滅(D)

- **群落の位置** 大崎市鳴子温泉鬼首(標高約500m、北緯:38°49'10"~38°49'12"、東経:140°41'34"~140°41'39")
- **選定理由と現状** かつては高温の水蒸気が噴出し、土壌が20℃以上に保たれていたため、亜熱帯・熱帯域に見られるミズスギ(シダ植物)が隔離的に分布していた。ミズスギが疎生し、クチキゴケが地表に密生する状況は東北地方では極めて希で、貴重であった。
- **保護保全上の留意点** 1985年頃から水蒸気の噴出が弱まり、1998年に噴出が止まって、ミズスギは姿を消した。その後は経過観察が続けられてきたが、現在はやぶ状の低木植生に遷移している。ミズスギが復元することは難しいと推察する。
- **特記事項** 国指定天然記念物(特別天然記念物 鬼首の雌釜、雄釜間歇温泉)、栗駒国定公園第1種特別地域、特定植物群落(対照番号50)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(複-41)を変更
- **文献番号** 1、2

(調査・執筆：菅野 洋)



(撮影：菅野 洋、2025年6月14日)

複-29 片山地獄地域の硫気孔荒原植物群落

壊滅状態(4)

2016 壊滅状態(4)

- **群落の位置** 大崎市鳴子温泉鬼首(標高約460~640m、北緯:38°48'7"~38°49'11"、東経:140°41'55"~140°43'49")
- **選定理由と現状** 荒雄岳東南斜面の標高550m付近に、「地獄」と呼ばれる硫気孔荒原が2か所並んでいる。片山地獄は規模が大きく、硫気孔や硫黄泉が各所あり、噴出口から外側に向かって裸地→イオウゴケ群落→ススキ群落→低木林→キタゴヨウ林→ブナ林が同心円状に配列する。こうした硫気孔荒原は本県唯一で、貴重。
- **保護保全上の留意点** 地熱発電所建設に伴う立地と植生の改変はあったが、多くが保全されて存続している。人為的影響が生じないように、見守りを継続することが肝要。
- **特記事項** 栗駒国定公園第1種特別地域、特定植物群落(対照番号49)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(複-40)を変更
- **文献番号** 1、2



(撮影:菅野 洋、2023年10月8日)

(調査・執筆:菅野 洋)

複-30 潟沼の噴気孔荒原植物群落

壊滅(D)

2016 壊滅(D)

- **群落の位置** 大崎市鳴子温泉(標高約300~350m、北緯:38°43'54"~38°44'8"、東経:140°43'15"~140°43'39")
- **選定理由と現状** 潟沼の北西側に高温の水蒸気を発する噴気孔があり、近隣は小面積ながら地温の高い立地となっていた。ミズスギ(シダ植物)とクチキゴケから構成される群落は、その中でも地温が45℃を上回らず、なおかつ冬季でも10℃を下回らない領域に分布していたという。亜熱帯・熱帯域に見られるミズスギが隔離的に分布することは極めて希で、貴重であった。
- **保護保全上の留意点** 1999年頃に水蒸気の噴出が弱まり、2009年には噴出が止まって、ミズスギは姿を消した。その後は経過観察が続けられてきたが、現在はリョウブが優占する低木植生に遷移している。ミズスギが復元することは難しいと推察する。
- **特記事項** 栗駒国定公園第1種特別地域、特定植物群落(対照番号52)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(複-42)を変更
- **文献番号** 1、2



(撮影:齊藤 賢治、2024年6月9日)

(調査・執筆:菅野 洋)

複合群落

丘陵帯/落葉広葉樹林(中間温帯)

複-31 川台山の植物群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

- **群落の位置** 栗原市栗駒(標高約160~450m、北緯:38°54'13"~38°54'37"、東経:140°54'59"~140°55'39")
- **選定理由と現状** 高度差約300mの断崖状急斜面に、樹高10m前後でやや矮生化したアカマツ、アカシデ、ケヤキ、イヌブナなど多様な樹木が微地形に応じて生育し、渓谷特有の自然林を形成している。土砂災害防止、水源涵養、景観創出にも貢献しており貴重。
- **保護保全上の留意点** マツ枯れ病によると推察されるアカマツの枯損が見られるが、当面は見守りを継続して、厳正保護を図ることが肝要。
- **特記事項** 特定植物群落(対照番号32)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(複-9)を変更
- **文献番号** 1、2



(撮影:平吹 喜彦、2021年10月27日)

(調査・執筆:平吹 喜彦)

カテゴリー

壊滅(D)

壊滅状態(4)

壊滅危機(3)

破壊危機(2)

要注意(1)

複-32 若畑の植物群落

壊滅危機(3)

2016 壊滅危機(3)

- **群落の位置** 大和町吉田(標高約90~180m、北緯:38°26'35"~38°26'50"、東経:140°48'7"~140°48'37")
- **選定理由と現状** 樹高20m前後、胸高直径50~70cmに達するコナラやクヌギのほか、イヌシデ、カスミザクラなどが混交する落葉広葉樹林で、かつては薪炭林として利用されていたと推察される。尾根にはブナの大木が残存する一方、沢沿いではサワグルミ、カツラ、トチノキが林冠を形成。この地域の丘陵地・里山に残存する原植生の面影を留める森林として貴重。
- **保護保全上の留意点** ナラ枯れ病が発生したが、枯損に至るまでではなかった。国有林であることから、伐採などが及ばないように厳正に保護する必要がある
- **特記事項** 県立自然公園船形連峰普通地域、特定植物群落(対照番号38)
- **RDB2016からの変更点** 単-91「若畑のブナ群落」と複-13「難波の落葉広葉樹林」を統合、群落名・整理番号を変更
- **文献番号** 1、2



(撮影:菅野 洋、2023年10月14日)

(調査・執筆:吉田 馨、菅野 洋)

複-33 小原溪谷の植物群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

- **群落の位置** 宮城県白石市小原(標高約90~450m、北緯:37°58'57"~38°0'5"、東経:140°33'45"~140°34'26")
- **選定理由と現状** 小原溪谷は高度差約400m、延長約2kmに及び、急峻で浅土の立地にアカシデ群落、相対的に緩傾斜で深土の立地にはイヌブナ群落が分布している。イヌブナ群落は樹高15m前後で、優占するイヌブナのほかコナラ、ケヤキ、カヤ、モミなどが混交し、林床にはスズグケが多い。本県南西部の溪谷において、土地的極相林の特徴を備えた林分として貴重。
- **保護保全上の留意点** 溪谷に沿って国道や遊歩道がある。景観・植生保護の重要性が認知されていると推察され、当面は見守りを継続して、厳正保護を図ることが肝要。
- **特記事項** 蔵王高原県立自然公園普通地域、特定植物群落(対照番号66)
- **RDB2016からの変更点** 単-71「小原溪谷のイヌブナ群落」を群落複合に変更、群落名・整理番号を変更
- **文献番号** 1、2、17



(撮影:三島木 進、2023年10月6日)

(調査・執筆:三島木 進、西中 重)

複合群落

丘陵帯/針広混交林(中間温帯)

複-34 黒沢山の植物群落

壊滅危機(3)

2016 破壊危機(2)

- **群落の位置** 気仙沼市上西側(標高約290~534m、北緯:38°58'54"~38°59'16"、東経:141°31'55"~141°32'40")
- **選定理由と現状** 黒沢山(標高535m)の北斜面に残存する落葉広葉樹林で、イヌブナが優占し、ブナ、ケヤキ、オニヒトコ、アカシデ、ミズメなどが混交する。多少人為が加わっているようではあるが、北上山地中間温帯域の原植生の面影を残す発達した林分として貴重。
- **保護保全上の留意点** ニホンジカの採食によって、不嗜好性のマルバダケブキ以外は林床植物が極めて少なく、高木種の後継樹もわずか。ニホンジカの個体数管理といった実効性のある対策を早急に講じる必要がある。
- **特記事項** 県立自然公園気仙沼普通地域、特定植物群落(対照番号76・77)
- **RDB2016からの変更点** 単-53「黒沢山のケヤキ群落」と単-70「黒沢山のイヌブナ群落」を統合、群落名・整理番号を変更
- **文献番号** 2



(撮影:菅野 洋、2024年9月11日)

(調査・執筆:菅野 洋)

複-35 鱒淵観音堂の植物群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

- **群落の位置** 登米市東和町(標高約20~90m、北緯:38°44'50"~38°45'4"、東経:141°20'1"~141°20'33")
- **選定理由と現状** 鱒淵観音堂・華足寺が鎮座する小丘には、植栽由来のスギ大木とともに、発達した針広混交林が残存する。社寺林として保護されてきた北向き急斜面には、樹高25m前後、胸高直径60cmに達するケヤキが優勢で、カヤ、オニイトヤ、ケンボナシなどの大木が混交する林分が広がる。北上山地中間温帯域の原植生の面影を残す林分として貴重。
- **保護保全上の留意点** マツ枯れ病による大木の枯損に続いて、ナラ枯れ病が発生した。学術調査報告書の指針を活かした対応が肝要。
- **特記事項** 鱒淵観音堂県自然環境保全地域、鱒淵観音堂カヤ遺伝資源希少個体群保護林、特定植物群落(対照番号12)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(複-11)を変更
- **文献番号** 1、2、4、20、99、100

(調査・執筆:菅野 洋)



(撮影:菅野 洋、2022年10月23日)

複-36 小黒ヶ崎の植物群落

壊滅危惧(3)

2016 壊滅危惧(3)

- **群落の位置** 大崎市岩出山・鳴子温泉(標高約110~244m、北緯:38°42'59"~38°43'33"、東経:140°48'3"~140°48'38")
- **選定理由と現状** 露岩地や断崖が介在する急斜面にアカシデの優勢な発達した森林が残存し、崖際にはケヤキ、イヌブナの大木が生育。かつては尾根や露岩地にアカマツ大木が見られたが、マツ枯れ病によって多くが枯損した。人里に近い丘陵地にもかかわらず土地的極相林の様相を留める森林として、また松尾芭蕉の俳句に代表される歴史的景観としても貴重。
- **保護保全上の留意点** 尾根や露岩地に特有の景観を創出してきたアカマツ大木が枯損した反面、中間温帯林を構成する多様な樹木と草本が丘陵地の微地形・地表模様に対応して生育し、発達した混交林を形成している。価値認識の転換と新たな保護・管理対策の策定が求められる。
- **特記事項** 小黒崎アカシデ遺伝資源希少個体群保護林、特定植物群落(対照番号37)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(複-8)を変更
- **文献番号** 1、2、4

(調査・執筆:平吹 喜彦)



(撮影:平吹 喜彦、2023年4月21日)

複-37 平筒沼いこいの森の植物群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

- **群落の位置** 登米市米山町(標高約20~60m、北緯:38°36'58"~38°37'33"、東経:141°14'10"~141°14'42")
- **選定理由と現状** 平筒沼東側の丘陵地に、樹高18mを超えるモミ、アカシデ、イヌブナがそれぞれ優占する林分が小規模ながら残存する。沢筋にはニリンソウなどが生育する湿性草本群落も見られる。人為的改変が進んだ低標高域で、自然度の高い諸群落がこれほど広い面積で残存している事例はほかに認められず、貴重。
- **保護保全上の留意点** 近年、アカシデの枯損が目立ち、明るくなった林床ではアズマネザサが密生して、草本の生育や樹木の更新を妨げている。登米市の自然環境保全地域に指定されて保護されているが、ササ類の刈払いなどの植生管理を順応的に実施する必要がある。
- **特記事項** 特定植物群落(対照番号25)、みやぎの野鳥の森(平筒沼ふれあい公園)、平筒沼いこいの森登米市自然環境保全地域
- **RDB2016からの変更点** 単-61「平筒沼のアカシデ群落」を群落複合に変更、群落名・整理番号を変更
- **文献番号** 1、2、20

(調査・執筆:菅野 洋)



(撮影:菅野 洋、2022年10月16日)

複合群落

丘陵帯/落葉広葉樹二次林

複-38 化女沼湖岸の植物群落

破壊危惧(2)

2016 -

- **群落の位置** 大崎市古川(標高約30~50m、北緯:38°37'35"~38°37'43"、東経:140°57'34"~140°57'44")
- **選定理由と現状** 化女沼に隣接する落葉広葉樹二次林で、樹高18m前後の林冠ではクリ、コナラに加えてエドヒガン、カスミザクラ、ホオノキ、ウワミズザクラ、ミズキなどが混交する。里地・里山の景観を特徴づけ、この地域を象徴する種組成を有する薪炭林として貴重。
- **保護保全上の留意点** 地元の保護団体が主体となった観覧会などの催しが活発であるが、これまでの管理経過をみると伐採される可能性もあり注意が必要である。利活用を含めた保護・管理対策を早急に策定し、実行することが肝要。
- **特記事項** ラムサール条約湿地、国指定鳥獣保護区特別保護地区(化女沼)
- **RDB2016からの変更点** RL2021で新規記載、群落名を微修正
- **文献番号** 101

(調査・執筆:菅野 洋)



(撮影:菅野 洋、2023年10月14日)

複-39 牡鹿半島駒ヶ峰の植物群落

壊滅危惧(3)

2016 壊滅危惧(3)

- **群落の位置** 石巻市鮎川浜(標高約20~320m、北緯:38°18'7"~38°18'45"、東経:141°31'12"~141°31'39")
- **選定理由と現状** 駒ヶ峰の山体は岩塊が露出する急斜面から構成され、緩やかな山麓を挟んで絶壁状の断崖となって外洋に接している。樹高25mに達するモミ、アカマツ、ケヤキ、イヌシデの大木やタブノキなどが混交する発達した森林は、微地形や人為の履歴に応じて林相が変化している。南三陸沿岸域における最大規模の中間温帯林として貴重。
- **保護保全上の留意点** マツ枯れ病によるアカマツの枯死やニホンジカによる林床植物・樹皮の採食によって、発達した森林は著しく荒廃し、土砂災害が懸念されるほど裸地化が進んでいる。地域全体を見渡す統合的な保護・管理対策をさらに強力に実行する必要がある。
- **特記事項** 三陸復興国立公園第2・3種特別地域、駒ヶ峰モミ遺伝資源希少個体群保護林、特定植物群落(対照番号7)
- **RDB2016からの変更点** 単-50「駒ヶ峰のモミ群落」を複-12「牡鹿半島駒ヶ峰の自然林」に統合、群落名・整理番号(複-12)を変更
- **文献番号** 1、2、4、102、103

(調査・執筆:齊藤 賢治、平吹 喜彦)



(撮影:齊藤 賢治、2023年11月25日)

複-40 丸田沢の植物群落

壊滅危惧(3)

2016 壊滅危惧(3)

- **群落の位置** 仙台市青葉区・泉区(標高約30~80m、北緯:38°17'50"~38°18'40"、東経:140°50'59"~140°52'1")
- **選定理由と現状** 丸田沢溜池と三共堤の集水域を構成する丘陵地で、古くは仙台藩の御林として伐採が禁じられていたという。周囲が住宅団地として開発される中、モミ大木を含むアカマツ林、コナラ林、スギ植林などが広がり、さらに二次草原や湿性植生も残存する。里山の様相を残す緑地として貴重。
- **保護保全上の留意点** マツ枯れ病・ナラ枯れ病による枯損、帰化植物やつる植物の繁茂に対して、継続した順応的な管理が肝要。林床では、鳥散布種子に由来する暖地性常緑広葉樹や果樹の生育が顕著で、広くスズダケが立枯れた林冠下でも草本植物や樹木実生が増加しており、見守りも大切。
- **特記事項** 丸田沢緑地環境保全地域
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(複-14)を変更
- **文献番号** 104、105

(調査・執筆:平吹 喜彦)



(撮影:平吹 喜彦、2024年10月29日)

複-41 東北大学大学院理学研究科附属植物園の植物群落

壊滅危惧 (3)

2016 壊滅危惧 (3)

■ **群落の位置** 仙台市青葉区(標高約70~150m、北緯:38°15'4"~38°15'27"、東経:140°50'41"~140°51'27")

■ **選定理由と現状** 青葉城の背後を護る御裏林として管理されてきた自然度の高い温帯混交林で、樹高35mに達するモミが優占する。丘陵地の微地形や竜の口溪谷の絶壁に対応して、アカマツやアカシデの優勢な林分も分布。カシ類、シロダモ、カラスザンショウ、イイギリといった暖地性植物が多数混交する。

■ **保護保全上の留意点** 国指定天然記念物など複数の法的指定を受け、東北大学によって基礎調査と保護・管理がなされてきた。隣接地で大学キャンパスや地下鉄などの建設が進み、原生的な森林域への都市的環境の影響が懸念される。また近年は、イノシシによる攪乱も見受けられる。

■ **特記事項** 国指定天然記念物(青葉山)、特定植物群落(対照番号40)、県指定鳥獣保護区特別保護地区(仙台)、広瀬川の清流を守る条例特別環境保全区域

■ **RDB2016からの変更点** 整理番号(複-7)を変更

■ **文献番号** 1、2、106、107、108

(調査・執筆:滝口 政彦、齊藤 賢治)



(撮影:滝口 政彦、2023年3月1日)

複-42 谷山の植物群落

要注意 (1)

2016 要注意 (1)

■ **群落の位置** 村田町大字足立(標高約80~220m、北緯:38°8'14"~38°9'1"、東経:140°40'6"~140°41'27")

■ **選定理由と現状** 荒川上流域に位置し、樹枝状に深く開析された斜面には、樹高15m前後のイヌブナが優勢で、アカシデ、コナラ、カヤなどが混交する林分が残存。尾根沿いにはアカマツやコナラの大径木が見られるが、マツ枯れ病・ナラ枯れ病により枯損が進行。主要な極相種であるモミが欠落する原因として、山火事が考えられる。県中央部の低標高域に残存するイヌブナ優占林としては最大の面積を持ち、貴重。

■ **保護保全上の留意点** ハイキングコースとしても利用されている。特にマツ枯れ病・ナラ枯れ病と地表攪乱に留意しながら、見守りを継続することが肝要。

■ **特記事項** 谷山県自然環境保全地域、特定植物群落(対照番号60)、県指定鳥獣保護区特別保護地区(谷山)

■ **RDB2016からの変更点** 整理番号(複-10)を変更

■ **文献番号** 1、2

(調査・執筆:三島木 進、西中 董)



(撮影:三島木 進、2023年6月1日)

複-43 亘理愛宕山の植物群落

壊滅危惧 (3)

2016 壊滅危惧 (3)

■ **群落の位置** 亘理町字愛宕前・逢隈(標高約30~148m、北緯:38°1'57"~38°2'20"、東経:140°50'11"~140°50'38")

■ **選定理由と現状** 山麓はスギ植林で囲まれ、山腹にコナラ林、ケヤキ林、そして県南沿岸域では希なイヌブナ林などが分布し、尾根や山頂にはアカマツが生育。また、愛宕神社の表参道広場の大木をはじめ、ウラジロガシが若木・幼木として各所に散生し、暖地性植物も豊富。亘理丘陵の原植生を推定する上でも貴重な里山。

■ **保護保全上の留意点** マツ枯れ病・ナラ枯れ病による枯損(表参道広場のウラジロガシ大木を含む)に加えて、イノシシによる地表攪乱が顕著。また中腹・北斜面を中心に、スズダケが広い面積で枯死した。「市街地に近く、歴史・自然が豊かな反面、二次林や植林の放置・荒廃が進み、土砂災害の危険性を秘めた里山」という特長を踏まえて、ステークホルダーが寄り合って統合的なマスタープランをつくり、順応的な保護・管理対策を推進していくことが肝要。

■ **特記事項** 愛宕山緑地環境保全地域

■ **RDB2016からの変更点** 整理番号(複-15)を変更

■ **文献番号** 109

(調査・執筆:平吹 喜彦)



(撮影:平吹 喜彦、2022年11月27日)

複合群落

丘陵帯/池沼植生(丘陵帯)

複-44 横山不動尊の水生植物群落

壊滅危惧 (3)

2016 壊滅危惧 (3)

■ **群落の位置** 登米市津山町(標高約10m、北緯:38°37'49"~38°37'53"、東経:141°20'52"~141°20'55")

■ **選定理由と現状** 横山不動尊境内の豊富な湧水に涵養される前庭の池と北沢川は、ウグイ生息地として国の天然記念物に指定されている。水温の季節変化が少ない清水中には、ミクリ、ミズハコベ、センニンモなど貴重な植物が生育する。

■ **保護保全上の留意点** 水源である社寺御裏林(背戸山)は風致保安林として保護され、池や水路の水質・水量は良好。一方、除草作業のためか水路内の水生植物は減少してきており、特定外来生物のオオカワヂシャが分布を広げている。水生植物にも配慮した順応的な保護・管理対策を期待したい。

■ **特記事項** 国指定天然記念物(横山のウグイ生息地)、三陸復興国立公園第2種特別地域

■ **RDB2016からの変更点** 整理番号(複-30)を変更

■ **文献番号** 20

(調査・執筆:菅野 洋)



(撮影:菅野 洋、2022年10月16日)

複-45 猪倉堤の池沼植物群落

要注意 (1)

2016 要注意 (1)

■ **群落の位置** 柴田町大字富沢(標高約80m、北緯:38°7'22"~38°7'25"、東経:140°48'46"~140°48'55")

■ **選定理由と現状** 猪倉山南麓の農業用溜池。灌漑に使われるため年間を通して水位の変動が著しく、多くの沈水植物や浮葉植物が生育し、貴重。

■ **保護保全上の留意点** 灌漑用水の利用に変化が生じたため水位が安定化し、水位変動に依存して生育する水生植物は確認が難しい状況となった。まずは見守りを継続しながら、保護・管理対策を確実なものとしてほしい。

■ **RDB2016からの変更点** 整理番号(複-39)を変更

(調査・執筆:滝口 政彦、西中 董)



(撮影:滝口 政彦、2023年8月3日)

複-46 三色吉七ッ堤の池沼植物群落

壊滅危惧 (3)

2016 壊滅危惧 (3)

■ **群落の位置** 岩沼市三色吉(標高約40~120m、北緯:38°6'49"~38°7'8"、東経:140°49'36"~140°50'14")

■ **選定理由と現状** 金蛇水神社西側の丘陵地の谷底部に連なる、7つの農業用溜池。最も谷奥の2つの溜池は水位も安定しており、イトモ、ヒルムシロなどに加えてキクモ、ミズニラ、ミズハコベなどの水生植物が生育し、貴重。

■ **保護保全上の留意点** 水質悪化が目立ち、水生植物は減少している。まずは見守りを継続しながら、保護・管理対策を確実なものとしてほしい。

■ **RDB2016からの変更点** 整理番号(複-26)を変更

(調査・執筆:滝口 政彦、西中 董)



(撮影:滝口 政彦、2022年10月19日)

複-47 明光沢の池沼植物群落

壊滅危惧(3)

2016 壊滅状態(4)

- **群落の位置** 丸森町大内(標高約70~110m、北緯:37°52'55"~37°53'13"、東経:140°50'38"~140°51'7")
- **選定理由と現状** 丘陵地谷底部の明光沢に連なる3つの農業用溜池。上部の溜池ではキクモ、中部の溜池ではミズニラとホッスモ、下部の溜池ではオニビシとオオトリゲモが認められ、イトモ、ホソバミズヒキモなど多様で貴重な水生植物も生育していた。
- **保護保全上の留意点** 護岸などの改修工事の影響で、中部・下部の溜池には水生植物は認められず、上部の溜池にのみキクモが生育していた。まずは見守りを継続しながら、保護・管理対策を確実なものとしてほしい。
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(複-25)を変更

(調査・執筆:滝口 政彦、西中 董)



(撮影:滝口 政彦、2021年9月25日)

複合群落

平野帯/河辺植生

複-48 迫川河川敷の河辺植物群落

壊滅危惧(3)

2016 -

- **群落の位置** 登米市迫町(標高約5m、北緯:38°39'38"~38°39'53"、東経:141°12'16"~141°12'23")
- **選定理由と現状** 迫川の河川敷で、かつての氾濫原にあたる。一部が畑として利用されているが、春先に火入れがなされており、植生遷移の進行が抑えられ、草地の状態が残されている。所々に見られる湿性地や畑地周辺の草地には、それらの環境特有の植物種が数多く生育しており、貴重である。
- **保護保全上の留意点** 火入れが実施されない年は、セイタカアワダチソウなどの高茎草本類が目立つようになる。火入れによる人の関与により、湿地性・草地性の植物種の生育環境が維持されていることの理解のもと、関係者による積極的で、かつ順応的な保護・管理対策を実施していくことが肝要。
- **RDB2016からの変更点** RL2021で新規記載、群落名を微修正

(調査・執筆:菅野 洋、滝口 政彦)



(撮影:菅野 洋、2023年10月1日)

複-49 北上川の河辺植物群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

- **群落の位置** 登米市豊里町・津山町、石巻市桃生町・成田・飯野(標高約6~10m、北緯:38°32'44"~38°36'31"、東経:141°17'31"~141°18'28")
- **選定理由と現状** 登米市柳津で旧北上川と分岐する新北上川は、下流域の洪水被害を防ぐために山間を開削して造られた人工河川である。広面積の河川敷を中心に、マコモ、ヨシ、ガマなどが優勢な抽水植物群落、ヤナギ低木林、オギ群落などが立地に応じて分布し、自然度の高い河辺景観が残存しており貴重。
- **保護保全上の留意点** 国土強靱化政策に伴う河川改修などによって改変されるおそれもあるが、河川水辺の国勢調査に基づく保護・管理対策が流域治水の視点で実施されており、成果に期待したい。
- **特記事項** 特定植物群落(対照番号86)
- **RDB2016からの変更点** 群落名を微修正、整理番号(複-16)を変更
- **文献番号** 2

(調査・執筆:下山 祐樹、菅野 洋)



(撮影:下山 祐樹、2022年6月20日)

複合群落

平野帯/池沼植生(平野帯)

複-50 伊豆沼・内沼の池沼植物群落

壊滅危惧(3)

2016 壊滅危惧(3)

- **群落の位置** 栗原市築館・若柳、登米市迫町(標高約5m、北緯:38°42'13"~38°43'35"、東経:141°3'53"~141°7'50")
- **選定理由と現状** 560haにも及ぶ広大な浅水湖沼で、湖岸から湖心に向かってタチヤナギ高木・低木群落、ヨシ、マコモ、ハス(植栽由来)などの抽水植物群落、ヒシなどの浮葉植物群落、クロモなどの沈水植物群落が地下水位や水深に対応して配列する。多様な水生動物や鳥類の生息・繁殖環境、観光資源としても貴重。
- **保護保全上の留意点** 用水の流入や冬鳥の滞在による植生・水質への負荷、外来アカウキクサ属植物(2009年に初確認)の大増殖など、湖沼生態系の変質が深刻。一方、市民や行政などが連携してさまざまな環境保全活動を展開しており、先進的な環境教育の場としても著名。2022年の増水によるハスの激減、その後のヒシの大増殖、帰化植物の増加、来訪者の増加に伴う植生の踏みつけなどにも留意が必要。
- **特記事項** 国指定天然記念物(伊豆沼、内沼の鳥類およびその生息地)、伊豆沼・内沼県環境保全地域、特定植物群落(対照番号24)、ラムサール条約湿地、重要湿地、国指定鳥獣保護区特別保護地区(伊豆沼)
- **RDB2016からの変更点** 群落名を微修正、整理番号(複-28)を変更
- **文献番号** 1、2、110、111、112、113、114

(調査・執筆:吉田 馨、平吹 喜彦)



(撮影:平吹 喜彦、2023年8月19日)

複-51 蕪栗沼の池沼植物群落

壊滅状態(4)

2016 壊滅状態(4)

- **群落の位置** 大崎市田尻蕪栗、登米市南方町(標高約5m、北緯:38°37'47"~38°38'37"、東経:141°5'43"~141°6'39")
- **選定理由と現状** 干拓を免れて現存する池沼には、ヨシ群落、スゲ類の群落、ヤナギ類の低木~高木林などが見られるほか、希少な水生・湿生植物が豊富に生育する。多様な水生動物や鳥類の生息・繁殖環境、迫川流域の遊水池としても機能しつつ、平野の原植生の面影を残す数少ない湿地として貴重。
- **保護保全上の留意点** 多数の水生・湿生植物が生育する植生に大きな変化はない。主にガンカモ類、ハクチョウ類など冬鳥・野鳥の生息環境として、先進的な保護・管理対策が実行されている。
- **特記事項** 特定植物群落(対照番号88)、ラムサール条約湿地、重要湿地、国指定鳥獣保護区特別保護地区(蕪栗沼・周辺水田)
- **RDB2016からの変更点** 群落名を微修正、整理番号(複-20)を変更
- **文献番号** 2

(調査・執筆:菅野 洋)



(撮影:菅野 洋、2023年10月1日)

複-52 平筒沼の池沼植物群落

壊滅危惧(3)

2016 壊滅危惧(3)

- **群落の位置** 登米市米山町・豊里町(標高約3m、北緯:38°36'34"~38°37'14"、東経:141°13'56"~141°14'26")
- **選定理由と現状** 米山町と豊里町にまたがる丘陵地の西端に接する周囲約1.5kmの比較的大きな沼池で、季節的な水位変動が小さく、水生・湿生植物が多数生育。沼辺にはヨシ、マコモ、ハス(植栽由来)が、沼内にはヒシなどの浮葉植物やクロモなどの沈水植物、アオウキクサなどの浮遊植物が見られ、貴重。
- **保護保全上の留意点** ふれあい公園として整備・利用がなされてきたが、地域本来の水生・湿生植物とそれら個々のデリケートな生育環境に対する配慮が乏しい。集水域を見渡す統合的な保護・利活用計画の下で、順応的な管理を推進することが肝要。
- **特記事項** 重要湿地、みやぎの野鳥の森(平筒沼ふれあい公園)
- **RDB2016からの変更点** 群落名を微修正、整理番号(複-35)を変更
- **文献番号** 20

(調査・執筆:菅野 洋、平吹 喜彦)



(撮影:菅野 洋、2022年10月15日)

複-53 相野沼の池沼植物群落

破壊危惧(2)

2016 破壊危惧(2)

- **群落の位置** 涌谷町上郡(標高約10m、北緯:38°33'40"~38°33'55"、東経:141°6'6"~141°6'34")
- **選定理由と現状** 涌谷町西部の丘陵地南端に接する約9haの池沼で、植栽されたハスのほか、コウホネ、ヒシ、エビモ、クロモなど多様な水生・湿生植物が豊富に生育する。小域にこれほど多くの水生・湿生植物が見られる池沼は希で、貴重。
- **保護保全上の留意点** 富栄養化による水質悪化が懸念される。海洋少年団のボート練習施設もあることから、集水域を見渡す統合的な保護・利活用計画の下で、順応的な管理を推進することが肝要。
- **特記事項** 特定植物群落(対照番号89)、重要湿地
- **RDB2016からの変更点** 群落名を微修正、整理番号(複-34)を変更
- **文献番号** 2



(撮影:菅野 洋、2022年10月15日)

(調査・執筆:菅野 洋)

複-54 富士沼の池沼植物群落

壊滅危惧(3)

2016 壊滅危惧(3)

- **群落の位置** 石巻市福地・針岡(標高約0m、北緯:38°31'7"~38°32'8"、東経:141°24'18"~141°25'5")
- **選定理由と現状** 北上川(旧追波川)沿いの低地に位置する周囲約4kmの大きな沼池で、季節的な水位変動は小さい。東北地方太平洋沖地震・津波で被災した沼内には、浮葉植物のヒシ、沈水植物のリュウノヒゲモなどが生育。リュウノヒゲモは汽水性の水生植物で、県内では海岸近くの池沼数か所で確認されているだけで、貴重。
- **保護保全上の留意点** 護岸・堰堤などの復興工事によって、沼辺を縁取っていた植物群落の多くが変質・消失した。確認できなかった希少植物もある。デリケートな水環境やわずかな地形変化の重要性に配慮しながら、順応的な保護・管理対策を講じることが肝要。
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(複-37)を変更
- **文献番号** 45



(撮影:下山 祐樹、2022年7月31日)

(調査・執筆:下山 祐樹、菅野 洋)

複-55 加瀬沼の池沼植物群落

壊滅危惧(3)

2016 壊滅危惧(3)

- **群落の位置** 利府町加瀬、多賀城市市川、塩竈市大日向町(標高約10m、北緯:38°18'40"~38°18'59"、東経:140°59'10"~140°59'46")
- **選定理由と現状** 仙台平野に開いた谷底の奥部を占める県内最大の農業用溜池。湖水域には抽水植物のヨシ、浮葉植物のヒシやガガブタ、沈水植物のイトモやクロモなどの生育が記録されている。また、ハクチョウなど冬鳥が飛来し、堤体より南側は都市公園として管理されていることから、多くの市民が来訪する。
- **保護保全上の留意点** 周囲の高台で宅地・商業地の開発が進んだこともあり、湖水の汚れや濁り、沼辺でのアレチウリやオオブタクサ、セイタカアワダチソウといった強害外来種の繁茂が目立つ。集水域を見渡す統合的な保護・利活用計画の下で、順応的な管理を推進することが肝要。
- **特記事項** 加瀬沼緑地環境保全地域
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(複-38)を変更
- **文献番号** 115



(撮影:平吹 喜彦、2023年9月2日)

(調査・執筆:平吹 喜彦)

複-56 仙台市赤沼・大沼・南長沼の池沼植物群落

壊滅危惧(3)

2016 壊滅危惧(3)

- **群落の位置** 仙台市宮城野区・若林区(標高約0m、北緯:38°13'7"~38°14'48"、東経:140°57'45"~140°58'21")
- **選定理由と現状** 土地改変が進んだ仙台地域の沖積平野にわずかに残存する池沼で、ヨシ、ヒルムシロなどの水生・湿生植物が生育し、東北地方太平洋沖地震・津波被災後は、絶滅のおそれのあるツツイトモ、イトモ、トリゲモも確認された。鳥類や淡水魚介類の生息地としても貴重。
- **保護保全上の留意点** 富栄養化や砂泥流入による水環境の悪化が懸念される。東北地方太平洋沖地震・津波被災後は、護岸・水路などの復興工事がなされ、沼辺は一層人工化した。水系でつながる周辺農地を含めた統合的な保護・管理対策を進めることが肝要。
- **RDB2016からの変更点** 複-27「南長沼の池沼植物群落」とRL2021新規記載「若林区荒井大沼の池沼植物群落」を統合、群落名・整理番号を変更
- **文献番号** 45、116



(撮影:滝口 政彦、2021年7月26日)

(調査・執筆:滝口 政彦、西中 董)

複-57 磯の溜池群の池沼植物群落

壊滅状態(4)

2016 壊滅状態(4)

- **群落の位置** 山元町坂元(標高約2m、北緯:37°53'40"~37°54'7"、東経:140°55'2"~140°55'25")
- **選定理由と現状** 浮葉植物のヒシ、抽水植物のマコモやヨシなどが分布し、ヨシ群落の中にヌマゼリ、ヌマトラノオ、ヤナギトラノオなどの貴重な植物が混生していた。東北地方太平洋沖地震・津波被災後には、マコモやヨシが残存し、イヌタヌキモ、イトモとそれまで確認しなかったツツイトモ、ミズオオバコが出現した。
- **保護保全上の留意点** 水神社に隣接する低地の池沼は、東北地方太平洋沖地震・津波後に実施された護岸・水路などの復興工事で一層人工化した。水系でつながる周辺農地を含めて、集水域を見渡す視座から統合的な保護・管理対策を進めることが肝要。
- **特記事項** 特定植物群落(対照番号133)
- **RDB2016からの変更点** 複-22「磯の水神沼の池沼植物群落」と複-23「磯の北堤・南堤の水生植物群落」を統合、群落名・整理番号を変更
- **文献番号** 2、45



(撮影:滝口 政彦、2022年6月5日)

(調査・執筆:滝口 政彦、平吹 喜彦)

複合群落

海岸帯/島嶼植生

複-58 椿島の植物群落

要注意(1)

2016 要注意(1)

- **群落の位置** 南三陸町戸倉(標高約2~30m、北緯:38°39'0"~38°39'10"、東経:141°29'12"~141°29'26")
- **選定理由と現状** 島のほとんどが発達したタブノキ林に覆われ、海崖にはハマギク・ラセイタソウ群落など海崖植生が見られる。大木から構成されるタブノキ林は高さ20~30mで、ケヤキやエノキが散生し、林内にはヤブツバキ、モチノキ、ベニシダなどの暖地性植物が豊富。自然度が高く、面積も広く貴重。
- **保護保全上の留意点** 椿島への訪問は小型漁船に限られ、また地域住民によって見守りと保護が継続されてきた。国指定天然記念物として、このまま厳正保護が図られるべきである。
- **特記事項** 国指定天然記念物(椿島暖地性植物群落)、三陸復興国立公園特別保護地域、特定植物群落(対照番号14)
- **RDB2016からの変更点** 整理番号(複-59)を変更
- **文献番号** 1、2、45、50、117



(撮影:平吹 喜彦、2022年11月5日)

(調査・執筆:平吹 喜彦)

複-59 八景島の植物群落

要注意 (1)

2016 要注意 (1)

■**群落の位置** 石巻市船越(標高約2~75m、北緯:38°32'58"~38°33'21"、東経:141°30'37"~141°31'0")

■**選定理由と現状** 島を縁取る海崖の上部は、ユズリハ、タブノキ、モチノキ、トベラ、ヒサカキなどの暖地性常緑樹が優勢な森林によって覆われ、ケヤキ、カスミザクラなどの落葉樹も混交。尾根上にはアカマツ、クロマツ、ハマハイビヤクシンといった常緑針葉樹も見られる。分布北限域の暖地性植物群落として、学術上の価値も高い。

■**保護保全上の留意点** 東北地方太平洋沖地震・津波によって一部の海崖が崩落したが、森林への影響は確認できなかった。島内へのニホンジカの侵入は見られない反面、マツ枯れ病による枯損が生じていることから、国指定天然記念物としての見守りと保護・管理対策をさらに確実なものとしたい。

■**特記事項** 国指定天然記念物(八景島暖地性植物群落)、三陸復興国立公園特別保護地域、特定植物群落(対照番号3)

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(複-58)を変更

■**文献番号** 1、2、45、52、117

(調査・執筆:菅野 洋、齊藤 賢治)



(撮影:齊藤 賢治、2024年4月28日)

複-60 二股島の植物群落

要注意 (1)

2016 要注意 (1)

■**群落の位置** 女川町江島(標高約2~43m、北緯:38°24'7"~38°24'22"、東経:141°32'54"~141°33'15")

■**選定理由と現状** 二股島は東島と西島から構成される無人の小島で、海食崖には海水飛沫がかりやすい高さにハマギク・ラセイトソウ群落が、その上部にトベラ・マサキ群落、ススキ群落、タブノキ群落が順に分布している。

■**保護保全上の留意点** 東北地方太平洋沖地震・津波によって一部の海崖が崩落したが、森林への影響は確認できなかった。ススキ群落はニホンジカの採食の影響で成立した可能性もあり、継続した見守りが必要。

■**特記事項** 三陸復興国立公園特別保護地区

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(複-57)を変更

■**文献番号** 45、52

(調査・執筆:平吹 喜彦、西中 董)



(撮影:齊藤 賢治、2023年11月25日)

複-61 松島の植物群落

壊滅危惧 (3)

2016 壊滅危惧 (3)

■**群落の位置** 松島町、東松島市、利府町、塩竈市、七ヶ浜町(標高約0~105m、北緯:38°17'21"~38°23'13"、東経:141°2'10"~141°11'32")

■**選定理由と現状** 浅海域のアマモ群落を含めて、自然度の高い砂丘植生、塩性植生、海崖植生、アカマツ、クロマツ、タブノキ、モミなどがそれぞれ優占ないしはさまざまに混交する森林など、多様な植生が松島湾内とその周縁に分布する。特別名勝松島として、景観・観光資源としても貴重。東北地方太平洋沖地震・津波による攪乱は内湾域で相対的に軽微で、また復興・防災事業ではさまざまな保全対策がなされた。

■**保護保全上の留意点** 文化財としての景観保全、マツ類の植栽・マツ枯れ病防除、復興・防災事業にかかわる宮城県環境アドバイザー制度といった施策で培われた経験やしくみを踏まえて、「松島」を構成する多様な立地と地域特性に見合った先進的・統合的な自然環境の保護・利活用対策の推進が期待される。

■**特記事項** 国指定名勝(特別名勝松島)、県立自然公園松島普通地域、特定植物群落(対照番号26・138)、県指定鳥獣保護区特別保護地区(松島)、みやぎの野鳥の森(双観山野鳥の森)

■**RDB2016からの変更点** 単-4「松島湾のタブノキ群落」を複-56「松島の植物群落」に統合、整理番号(複-56)を変更

■**文献番号** 1、2、44、45、118、119

(調査・執筆:平吹 喜彦)



(撮影:平吹 喜彦、2022年11月25日)

複-62 金華山島の植物群落

壊滅危惧 (3)

2016 壊滅危惧 (3)

■**群落の位置** 石巻市鮎川浜(標高約2~444m、北緯:38°16'9"~38°18'48"、東経:141°32'53"~141°35'22")

■**選定理由と現状** 自然度の高い海崖植生、大木を有するモミ群落やブナ群落などの森林に加えて、神鹿として保護されてきたニホンジカの採食下で成立したススキ群落、シバ群落など多様な植生が立地・標高に応じて分布。島全体が厳格に保護されながらも、生息密度の高いニホンジカが植生・生態系に特異的な組成・構造をもたらしている。

■**保護保全上の留意点** ニホンジカの過度の採食圧によって、森林の退行・荒廃と自律的更新の阻害、生態系の変質が生じており、土砂流出も懸念されている。長年にわたって、さまざまな保護・管理対策が続けられてきた。

■**特記事項** 三陸復興国立公園特別保護区および第1~3種特別地域、特定植物群落(対照番号6)、県指定鳥獣保護区特別保護地区(金華山)

■**RDB2016からの変更点** 整理番号(複-55)を変更

■**文献番号** 1、2、45、120、121、122、123

(調査・執筆:下山 祐樹、菅野 洋)



(撮影:菅野 洋、2022年12月25日)

複合群落

海岸帯／潟湖・塩沼地植生

複-63 州崎浜池沼群の海岸植生

壊滅状態 (4)

2016 壊滅状態 (4)

■**群落の位置** 東松島市野蒜(標高約0~1m、北緯:38°21'13"~38°21'55"、東経:141°8'41"~141°9'35")

■**選定理由と現状** 古来、干拓や埋立がなされてきた砂浜海岸エコトーンでは希少となった湿原・池沼が残存し、ヨシが広域に分布するほか、希少種を含む汽水性の抽水・沈水植物が生育していた。東北地方太平洋沖地震・津波と復興・防災事業で地形や植生は著しく攪乱されたが、見守りと多様な保全対策が功を奏して、自律的再生が進んでいる。

■**保護保全上の留意点** 内陸側の海岸低湿地域を中心に、造成を伴う復興・防災事業が続いており、立地・植生はさまざまに変動している。行政、市民団体、学校、専門家らが基礎調査や保護・環境保全活動を行っており、その成果が期待される。

■**特記事項** 国指定名勝(特別名勝松島)、県立自然公園松島普通地域

■**RDB2016からの変更点** 群落名を微修正、整理番号(複-29)を変更

■**文献番号** 43、45

(調査・執筆:平吹 喜彦)



(撮影:平吹 喜彦、2021年3月1日)

複-64 蒲生海岸の海岸植生

壊滅状態 (4)

2016 壊滅状態 (4)

■**群落の位置** 仙台市宮城野区(標高約1~2m、北緯:38°15'5"~38°15'40"、東経:141°0'27"~141°1'4")

■**選定理由と現状** 七北田川河口部の砂州と潟湖には、汽水域を特徴づけるハママツナ、シオクグ、ヨシなどの塩生植物が、潟湖と海を隔てる砂丘にはコウボウムギ、ハマヒルガオなどの砂丘植物が、わずかな立地の違いに対応して生育する。東北地方太平洋沖地震・津波と復興・防災事業で地形や植生は著しく攪乱されたが、見守りと多様な保全対策が功を奏して、自律的再生が進んでいる。

■**保護保全上の留意点** 行政、市民団体、学校、専門家らが、基礎調査や保護・環境保全活動を行っており、その成果が期待される。潟湖内の水環境の悪化、防潮堤のセットバックと覆砂・覆土を実施した潟湖背後地での帰化植物や内陸植物の侵入・繁茂、河口閉塞などの課題もあり、蒲生干潟自然再生協議会も再開された。

■**特記事項** 仙台湾海浜県自然環境保全地域、特定植物群落(対照番号29)、重要湿地、国指定鳥獣保護区特別保護地区(仙台海浜)

■**RDB2016からの変更点** 群落名を微修正、整理番号(複-53)を変更

■**文献番号** 1、2、44、45、65、124、125、126、127

(調査・執筆:平吹 喜彦)



(撮影:平吹 喜彦、2024年5月16日)

複-65 井土浦の海岸植生

壊滅状態 (4)

2016 壊滅状態 (4)

■**群落の位置** 仙台市若林区(標高約0～2m、北緯:38°10'38"～38°11'57"、東経:140°57'23"～140°58'9")

■**選定理由と現状** 名取川河口部左岸の汀線、砂浜・砂丘、潟湖・干潟、運河、浜堤などから構成される砂浜海岸エコトーンでは、再生途上の砂丘植生、塩性植生、海岸草原、海岸林などが立地の違いに対応して帯状に分布する。東北地方太平洋沖地震・津波と復興・防災事業で地形や植生は著しく攪乱されたが、見守りと多様な保全対策が功を奏して、自律的再生が進んでいる。

■**保護保全上の留意点** 行政、市民団体、専門家らが、基礎調査や保護・環境保全活動を行っており、その成果が期待される。モトクロスバイクによる破壊、潟湖内の水環境の悪化、東谷地南部や海岸林再生地に侵入する帰化植物・内陸植物への対応などの課題があり、海側に拡大している砂丘やCSG防潮堤の覆砂斜面における植生動態も興味深い。砂浜海岸エコトーンという視点で、一体化・統合化した保護・管理対策をお願いしたい。

■**特記事項** 仙台湾海浜県自然環境保全地域、特定植物群落(対照番号42)、重要湿地、国指定鳥獣保護区特別保護地区(仙台海浜)

■**RDB2016からの変更点** 群落名を微修正、整理番号(複-54)を変更

■**文献番号** 1、2、43、44、45、65

(調査・執筆:平吹 喜彦)



(撮影:平吹 喜彦、2023年7月4日)

複-66 鳥の海の海岸植生

壊滅状態 (4)

2016 壊滅状態 (4)

■**群落の位置** 巨鹿町吉田(標高約0～2m、北緯:38°1'38"～38°2'7"、東経:140°54'17"～140°55'12")

■**選定理由と現状** 鳥の海は面積約70haにおよぶ潟湖で、干潮時には広大な干潟が出現する。湖岸の多くはコンクリート壁によって仕切られているが、東岸には奥行きのある塩性湿地と砂丘があり、湿原にはヨシ、シオクグ、ハマツナ、ウミミドリ、アイアシなどが、砂丘にはハマエンドウ、コウボウシバなどが、わずかな立地の違いに対応して生育する。東北地方太平洋沖地震・津波被災後、見守りと多様な保全対策が功を奏して、自律的再生が進んでいる。

■**保護保全上の留意点** 湖内にある蛭塚と呼ばれる小島を含めて、行政、市民団体、専門家らが基礎調査や保護・環境保全活動を行っており、その成果が期待される。外来種や内陸植物の過度な繁茂に対しては除去や立地改善といった施策も順応的に加えつつ、継続した取り組みが肝要。

■**特記事項** 仙台湾海浜県自然環境保全地域、重要湿地

■**RDB2016からの変更点** 群落名を微修正、整理番号(複-52)を変更

■**文献番号** 43、45

(調査・執筆:滝口 政彦、平吹 喜彦)



(撮影:平吹 喜彦、2021年8月22日)

複-67 牛橋河口の海岸植生

壊滅状態 (4)

2016 壊滅状態 (4)

■**群落の位置** 山元町山寺(標高約0～2m、北緯:37°59'2"～37°59'32"、東経:140°54'5"～140°54'48")

■**選定理由と現状** もともと潟湖、干潟、塩性湿地が広がっていた牛橋河口には、周縁に干拓・埋立が及んだ後も、ヨシ、リュウノヒゲモ、カワツルモなどの群落が残存し、貴重な海岸低湿地となっていた。東北地方太平洋沖地震・津波と復興・防災事業で地形や植生は著しく攪乱され、強固な護岸や水門が再建されたが、希少種の保護や近隣の水域・湿原の残置などの保全対策がなされ、自律的再生が進んでいる。

■**保護保全上の留意点** 牛橋河口全体がコンクリート壁に囲まれ、エコトーンとしての岸辺環境が失われてしまったことから、塩生・湿生植物の自律的再生は容易でないとい推察される。当面は見守りを継続しながら、保護・管理対策を確実なものとしていきたい。釣り場になっており人の出入りが多いが、現状のまま保存する必要がある。

■**特記事項** 仙台湾海浜県自然環境保全地域

■**RDB2016からの変更点** 群落名を微修正、整理番号(複-24)を変更

■**文献番号** 45

(調査・執筆:滝口 政彦、平吹 喜彦)



(撮影:滝口 政彦、2021年8月22日)

複合群落

海岸帯／砂丘植生

複-68 赤崎海岸の砂丘植物群落

壊滅状態 (4)

2016 壊滅状態 (4)

■**群落の位置** 気仙沼市本吉町(標高約1～3m、北緯:38°45'54"～38°46'32"、東経:141°30'39"～141°31'3")

■**選定理由と現状** 赤崎海岸は津谷川の河口左岸に接続する弧状の砂浜で、南北が約1km、最大幅が約100mであった。汀線から内陸に向かってハマニンニク群落、コウボウムギ群落、ケカモノハシ群落などが帯状に配列する発達した砂丘植生が認められた。東北地方太平洋沖地震・津波と復興・防災事業によって、立地と植生はほぼ消失したが、新たに形成された砂地では内陸側の微高地から砂丘植生の自律的再生が進んでいる。

■**保護保全上の留意点** 巨大な防潮堤・離岸堤・河川堤防・導流堤の一体的建造とともに、浅海・河口域に砂浜・砂丘が自律的に形成されて、2024年には最大幅は120mほどに達した。北側は平坦化されてビーチスポーツに供されているが、再生途上の砂丘植物との共存を図る方策が必要。なお、防潮堤の陸側壁面では、土質や地表の凹凸に工夫を凝らした覆土がなされ、海岸植物や自生樹種の苗を用いた緑化がなされたことから、順応的管理が肝要。

■**特記事項** 三陸復興国立公園第2・3種特別地域

■**RDB2016からの変更点** 群落名を微修正、整理番号(複-51)を変更

■**文献番号** 43、44、45、128

(調査・執筆:平吹 喜彦)



(撮影:平吹 喜彦、2023年6月17日)

複-69 長面浜の砂丘植物群落

壊滅 (D)

2016 壊滅 (D)

■**群落の位置** 石巻市長面(水面下)

■**選定理由と現状** 北上川河口の右岸を形成していた長面浜は、南北約1.8km、最大幅約110mに及び、牡鹿半島以北では最大の砂浜海岸であった。汀線から内陸に向かってハマニンニク群落、コウボウムギ群落、ケカモノハシ群落などが帯状に配列する発達した砂丘植生が認められたが、東北地方太平洋沖地震・津波によって地盤もろとも消失した。

■**保護保全上の留意点** 立地と植生の消失後、新たに海岸・河口となった背後地に砂が堆積し、砂丘植生の自律的再生が認められることから、注意深い見守りを継続しながら、保護・管理対策を確実なものすることが肝要。

■**特記事項** 三陸復興国立公園第3種特別地域、特定植物群落(対照番号87)

■**RDB2016からの変更点** 群落名を微修正、整理番号(複-49)を変更

■**文献番号** 2、45、128

(調査・執筆:下山 祐樹、平吹 喜彦)



(撮影:下山 祐樹、2021年7月15日)

複-70 仙台湾岸の砂丘植物群落

壊滅状態 (4)

2016 壊滅状態 (4)

■**群落の位置** 仙台市宮城野区～山元町(標高約0～2m、北緯:38°3'0"～38°15'51"、東経:140°55'16"～141°1'22")

■**選定理由と現状** 強風、飛砂、塩分、強い直射光といった厳しい環境が卓越する砂浜海岸には、元来、砂丘植物が成帯的に生育する。東北地方太平洋沖地震・津波と復興・防災事業によって大きく攪乱された仙台湾南部海岸では、コウボウムギ、ハマニガナ、ハマヒルガオ、ケカモノハシなどの自生種が自律的に再生を続けている。国内有数の長大な自然海岸における本質的な構成要素として貴重。

■**保護保全上の留意点** 復興・防災事業や海岸管理の主導機関は、種々の工事が終了した後も、植生・生態系のモニタリングと自律的再生の支援対策を継続し、統合的な沿岸管理を実現することが望まれる。現時点では特に、人為改変に伴って侵入・繁茂し続けている帰化植物とクズの分布拡大を抑制することが急務。また、大震災以降に実施した自然環境配慮対策を分析・評価する必要がある。

■**特記事項** 仙台湾海浜県環境保全地域普通地区、特定植物群落(対照番号31・106)、国指定鳥獣保護区特別保護地区(仙台海浜)

■**RDB2016からの変更点** 群落名を微修正、整理番号(複-50)を変更

■**文献番号** 1、2、44、45、61、62、63、65、68、128、129

(調査・執筆:平吹 喜彦)



(撮影:平吹 喜彦、2024年8月27日)

群落・群集

干潟の 底生動物群集

(沿岸域における
底生動物群集の保全)



干潟の底生動物群集

(沿岸域における底生動物群集の保全)

1 生物や生物群集の成り立ちについての基本的知識

(1) 生物にとって、餌とともに、生息場所が不可欠の資源である。

全ての生物にとって、自らの体を作り上げるとともに、生命を維持するためには物質とエネルギーとが必要である。また、子孫を残すためには、更に物質とエネルギーを使う。独立栄養を営む植物は、基本的には光合成によって有機物を合成するが、従属栄養を営む動物は植物や他の従属栄養生物やそれらの遺骸を食物として摂取し、バクテリアや菌類などは生物や生物遺骸あるいは栄養塩類を直接利用するなどして、必要な物質とエネルギーを得る。このような栄養関係、あるいは食物を巡って、生物は互いに関わりあっており、これがよく知られている食物関係からみた生物群集の成り立ちである。

また、全ての生物の生存にとって、生息場所は不可欠な資源である。このことは余りに当然過ぎて、議論の余地もないように受け止められるかもしれない。しかし、野生生物の保護に当たっては、この最も基本的な生物生存の要求を保証することが重要である。

(2) 種の存続は、その種の生活史(発育段階)の滞りない進行によって保証されている。

全ての生物は、寿命を持っている。絶えず変動する自然環境の下では、生理的な寿命を全うするまで生存できる個体は少ない。大部分は、親から離れてごく初期の段階で死亡し、成熟年齢に達する個体はごくわずかに過ぎない。わずかながらでも生き残る個体があって、それらが性成熟に達して繁殖し、その子孫を残すことが続いて初めてその種は絶滅することなく続いていく。種の存続は、その営みの繰り返しに他ならない。

例えば、貝は、成熟した個体が卵や精子を放出して水中で受精し、それが発生して幼生となり、浮遊しつつ餌を取りながら分散する。時期が来ると適当な条件の下で海底に着底し、変態して貝に成る。貝と成り、餌を取りつつ成長を続け、やがて性的に成熟して繁殖活動を行う。生活史の全ての発育段階を生き抜いて初めて、その個体は子孫を残すことができる。それぞれの発育段階で生活要求が異なり、生息場所も異なることが多い。しかも、それらが全て満たされなければ、その個体は子孫を残せない。種の存続は、世代を越えた個体の連続に他ならないため、多くの個体について、これらの全てを満たすような条件を備えた生息場所の存在が不可欠である。

(3) 種は、他種と重複部分を持ちながらも、それぞれに独自の食性や生息場所を持っている。

種は、それぞれに他の種と区別できるような様々な形質を持っている。体の形や大きさ、生活史の具体的様相などは種によって異なり、様々な生活要求も、大きくあるいは微妙に異なっている。餌や生息場所に対する要求も同様で、同一場所に共存し、また同様な物を食べていても、重なり的大小こそあれ、生物群集の中ではそれぞれに違う地位を占めていることが多く、それぞれにその種ならではの役割を果たしていると考えられる。

(4) 体の大きさや行動圏の広さなどによって、種が必要とする生息場所の広がり異なる。

動物の体の大きさは、種によって様々である。また、同じ種でも、発育段階によって体のサイズは大きく違う。固着性の動物は移動して位置を変えることはないが、移動性の動物の行動範囲は様々であり、生活場所として必要な空間の広がりも様々である。水域環境は、岸边と沖、水表面近くと深み、水草の茂みと開けた場所あるいは底質の表面と中というように、様々な生息場所を備えており、水生生物はそれらを巧みに使い分けている。概して大型の動物は行動圏も広く、それだけに小型の動物に比較して、より大きな空間を必要としている。

(5) 地域個体群は、メタ個体群構造を持っている。

ある地域における種個体群は、その地域にまんべんなく分布しているとは限らない。多くの場合、比較的小きな個体群が不連続的に分布している場合が多い。それらの個体群は近接していたり、離れてはいても何らかの回廊(コリドー)によって連結されている場合には、種の分散能力によって互いに遺伝子の交流がある場合が多い。このような遺伝子の交流が及ぶ範囲の個体群全体をメタ個体群と呼ぶ。例えば、仙台湾でいえば、蒲生干潟や井土浦、あるいは松島湾内の干潟の個体群は、メタ個体群として機能していると考えられる。そのため、底生動物の保護や環境保全に際しては、それらを全体として扱うことが望ましい。これらのいずれかの場所で個体群の崩壊が起こっても、他の同様な場所の個体群から水路や河川、海を通して幼生や成体が移入することによって、新たに個体群が成立することが期待できるからである。

(6) 生息場所は、地形的基盤とそれを取り巻く水と空気、そこに生育する生物によって作り上げられている。

生息場所は、基盤とそれを取り巻く媒質、及びそこに生息する生物が創り出す構造から成り立っている。陸域では媒質は空気であり、水域では水である。沿岸域の潮間帯では、潮の干満によって空気と水が規則的に交替する。干潟では、泥中及び底質表面は水分によって満たされたりおおわれたりしているため、岩礁潮間帯で見られるような潮の干満に伴う媒質の急激な変

化による影響は緩和されている。

生息場所の基本的な構成要素の一つである生物によって、生息場所の微細な構造が決められている場合が多い。それは、裸地とそこに隣接する草原や森林を比較すれば明瞭である。水域においても、岩盤や底質表面と大型藻類やサンゴなどの生物が生育する場所を比べれば、そのことは明瞭である。このような生物は、固着性で概して大型であり、生息場所の構造を作り上げているという意味で構造的生物あるいは骨格生物と呼ばれることがある。それに対して、このような生物の上やその間に棲む生物には移動性の動物が多い。

(7) 生物群集の理解には、食物関係だけでなく、棲み込み関係の理解が必要である。

生物が創り出す微細で多様な生息場所に生物が棲み込み、それらが新たな生息場所を作り上げ、そこを利用する生物が新たに棲み込むという棲み込み関係が、全ての生物群集に普遍的に見られる。これは、食物連鎖に対して棲み込み連鎖と呼ぶにふさわしい構造であり、その両方があらゆる生物群集において見られる。これらはそれぞれ別々に存在するのではなく、群集そのものが同時に併せ持つ異なった側面に他ならない。したがって、群集の理解には、これら二つの側面の理解が不可欠である。

(8) 生物による生息場所の形成過程には、提供、創出及び条件付けという3つの過程がある。

生物による生息場所形成作用には、互いに異なる3つの過程が認められる。第一の過程は、「提供」と呼ばれる過程で、生物が自らの体を他の生物の生息場所として提供することである。1本の樹木を考えれば、幹や枝、葉は言うに及ばず、幹でも樹皮の下など様々な微細生息場所が提供されている。樹木が大きくなるほど、また複雑な形状の樹木であるほど、それが提供する微細生息場所の多様性は増加する。このような木を棲み家としている昆虫たちは、それぞれにそれらの生息場所を棲み分けている場合が多い。それらの微細生息場所が複雑で多様であれば、そこに棲み込む生物がそれだけ多様になり、生息場所の容量が大きいほど棲み込む生物の量も増加する。このような棲み込み関係では、提供者が特に分解しにくい遺骸を残す場合には、その遺骸が生時とは異なる生息場所を提供する。生きた個体同士の棲み込み関係が極度に特殊化すると、相利共生関係に至る場合もある。

第二の過程は、「創出」である。これは、生物が基盤や他の生物の体に何らかの加工を加えて構造を変化させ、新たな生息場所を創出することである。新たに創り出された生息場所は、創出者がその場から消失又は死亡した後も残される。岩の割れ目に根を張った樹木が生長して岩を割り、キツツキが樹幹に穴を開け、カニが土手に巣穴を掘るなど、創出は普通に見られることである。

第三の過程は、「条件付け」と呼ばれる過程で、生物の存在又は活動がその影響の及ぶ範囲内を特定の条件に保ち、そこを他の場所とは異なる性質を備えた生息場所にする場合である。樹木の下が陰になり、温度が低く、湿度が高いことは、樹木の存在がその下をそのように条件付けているのである。条件付けを行っている生物がその場からいなくなるか活動を停止すれば、条件付けはなくなってしまふ。これら3つの過程はそれぞれ異なるとはいえ、別々に起こるわけではなく、同時並行的に起こっている場合がほとんどである。

このように生物の存在そのものが生息場所を多様にし、またそこに新たな生物が棲み込んでさらに生息場所を形成していき、ある空間の中に次々と多様な生物が生息できる状況を作り上げていると考えることができる。

(9) 種の保護は、問題の種を生物群集の中の一員として扱い、群集あるいは生息場所を保全することによって達成することが望ましい。

以上のように考えれば、野生生物の保護に当たっては、生息場所の保全が不可欠で最も重要であることが理解できる。個々の種は、他と関係なく存在しているのではなく、動植物の枠を越えて互いに関わり合いながら自然環境の中で暮らしている。その関わりの中では食物関係のみならず、生息場所をめぐる関係も重要である。したがって、長期的な種の保護は、その種が必要とする全ての要件を満たした生息場所が存在して初めて可能となる。

2 生息環境の保全と野生生物の保護(干潟を例にして)

(1) 生息環境としての干潟の成り立ち

生物の生息環境としての干潟は、砂泥や礫(れき)・石などの基質と水及び生物などから成り立っている。干潟の形や広がりを含む生息環境の大枠は、潮間帯に広がる比較的平坦な砂泥底とそれを取り巻く地高の高い場所、潮汐に応じて干潟に出入りする汽水及びそれら全体をおおう大気で決められている。干潟の本体である砂泥底に限っても、潮間帯の位置、底質の粒度組成、間隙水の性質、含有栄養塩類、混在有機物破片や底質の動き(安定性)などの状況によって、それぞれ異なった性質の生息場所となり、それぞれに異なる底生動物が生息している。また、干潟を取り巻く砂浜あるいは転石や岩礁は、砂泥底とは異なる生息基盤となり、砂泥底とは異なる動物が生息している。潮汐に伴って出入りする汽水は海と川とに連なっており、双方の溶存・懸濁物質を干潟に運び込み、干潟から運び去る。その汽水自体も生物の生息場所であると同時に、多くのプランクトンや魚類、あるいは魚類や底生動物の幼生や卵・稚仔などの移入・流出を担っている。護岸や養殖器材などの人工構造物も、本来であれば砂泥底干潟が持ち合わせないような安定した生息基盤となっている。

砂泥底の表面と内部は、底生動物にとって全く異なる生息場所である。ウミナナ類やカワザンショウ類などの典型的な表在動物は、底質の表面を生活場所として利用している。内部には様々な内在性の動物が見られ、ゴカイ類などの環形動物、イソシジミなどの二枚貝類、アナジャコ類などの甲殻類に加えて、様々な微小間隙動物が生息している。また、コメツキガニやチゴガニ、アシハラガニやヤマトオサガニなど多くのカニ類は、冠水時には底質内に潜り、干出時には底質表面で活動する。一

見単純にみえる砂泥底でも、多くの種がそれぞれの方法で使い分け、共存して暮らしている。人工構築物や礫(れき)や石などには、マガキやシロスジフジツボ、アオノリ類やイトグサ類などの海藻類が着生する。

生物以外の構成要素が干潟の生息環境の大枠を決めているとはいえ、そこに生息する生物が生息場所を創り出していることにも注目しなければならない。干潟を取り巻くように生育しているヨシは、ヨシ原を構成することによって底質を安定化させ、底土への直射日光を遮断し、風や水の動きを和らげ、沈殿物の堆積を促進させ、落葉を供給して微細な隠れ家や足場を動物に与えている。このような場所には、多くのアシハラガニが棲み、カワザンショウ類やフトヘナタリが生息している。ヨシの幹にはフジツボなどの固着性動物も見られる。ヨシが提供し条件付ける生息場所の存在が、これらの動物の生存を保証しているといえる。砂泥底の礫(れき)や石に固着した大小様々なマガキのパッチ(集合体)やムラサキイガイのパッチ、あるいはアオノリ類やオゴノリなどの海藻も、それぞれ性質の異なる棲み場所を提供し、そこには多くの小動物が棲み込んでいる。

また、干潟では、カニ類やアナジャコ類が創り出した巣穴に棲み込む動物も知られており、内在性の動物も生息場所の形成に関与している。また、初夏に大量に流れ込むアカモクなどの打ち上げ藻類も、一時的ではあるが棲み場所(一部は餌として)として多くの動物に利用されている。

干潟周辺に広がる海浜植物群落は、干潟の底生動物にとって直接の生息場所ではないが、干潟に関係する多くの動物の棲み場所となっており、生息環境の保全に際しては干潟を構成する部分として位置づけておくことが必要である。

(2) 干潟は開放的な環境である。

干潟はそれ自体あるまとまりを持っているが、他から遮断された存在ではなく、開放的である。潮汐に伴う海水の出入りや、干出時に飛来して採餌する鳥を見れば明らかである。このことは、干潟が干潟現場で起こる事柄のみならず、干潟外で起こる事柄の影響も受け、干潟に連なる海や川、あるいは干潟周辺から直接に流れ込む環境汚染物質の影響下にあることを意味している。生物の移入・移出によっても、干潟内外を物質が移動する。

干潟には、終生を干潟で暮らす動物と、生活史の発育段階によって干潟を生活場所の一部として利用する動物、あるいは干潟などの環境変化に応じて一時的に干潟を訪問する動物が見られる。渡り鳥などのように、季節的に干潟を訪問して利用する動物も存在する。底生動物の多くの種は、浮遊性の幼生や卵を放出するものが多く、これらは水中を浮遊して広く分散する可能性を持っている。また、幼・稚仔期を干潟で過ごしたり、外洋から入ってきて干潟生物を餌とする魚類も見られる。幼生や成体の移動による分散は、隣接する干潟間に交流があることを示している。このため、ある干潟の個体群が何らかの原因で消滅した場合でも、他の干潟の個体群に由来する幼生の移入によって個体群が再び成立する可能性がある。このことが、地域の干潟群をセットとして保全することが必要な理由の一つである。

(3) 生息場所保全の重要性

単純な景観を有する干潟にも、多様な生息環境があり、多くの動物が生息している。これらの動物の多くは、干潟環境によく適応しているため、生息環境の消失や劣化が死滅に結びつく可能性が高い。そのため、干潟の生物の保護に当たっては、何にも増して生息場所の保全が重要である。この場合、干潟が底質と水から成り立っていることを考えれば、底質環境のみならず、水の動きを妨げないことや水質の保全も不可欠である。また、構造としての棲み場所には、生物によって創られているものも多く、棲み場所を形成する生物の存在や生育・生息が保証されることが重要である。干潟では潮汐による環境の急激な変化が周期的に起こっているが、そのこと自体は正常なことで、干潟に生息する多くの動物にとっては不可欠なことである。それゆえ、水の入りの変更をもたらす地形の改変や構造物の設置には慎重でなければならない。生物の採りすぎ(乱獲)、底質の掘り起こしなどの物理的攪乱、汚染物質の流入による化学的汚染やゴミや有機物の流入など、小規模で顕在化しにくい攪乱が長期間続いて、生息環境の劣化を招くことも少なくない。これらは、ある種の生物を減少又は絶滅させ、あるいは逆に増加させるなど、生物群集の構成を変化させる。この変化が、本来の干潟生物群集のバランスを変化させるほどに進むことは望ましくなく、多くの一時訪問者の餌の種類や量を減少させるなどの影響が現れないようにすることが望ましい。多様な生息場所がセットとして保持され、それらがそれぞれの干潟において、自然の営力との関連でバランスよく配置される状況を保つことが重要であろう。

「干潟の絶滅危惧動物図鑑」(日本ベントス学会編2012年)によれば、日本の干潟では651種の無脊椎動物に絶滅のおそれがあるという。干潟は、様々な人間活動の影響を受けており、それらの影響が深刻になりつつあることの証左であろう。埋め立ては、生息場所とともに、干潟生物を絶滅させる。また、豊かな生物の活動によって支えられている環境浄化という生態系機能も失われる。コンクリート製の護岸や堤防は、干潟環境に固着生物の生息する状況を作り出すとはいえ、海から干潟を経て陸へと続く環境の推移を不連続にし、これらの生息環境を分断するため、陸と海を行き来する生物の生活史の円滑な進行を阻害する可能性が高い。ヨシ群落が失われれば、ヨシ群落内に棲むカワザンショウ類やフトヘナタリなどの底生動物は生息場所を失うことになる。また、突堤などの建設は、水の流れを変え、底質の改変を招くことが起こり得る。干潟は限られた場所にあり、その面積も狭いため、個々の種の保護策を講じるより干潟環境を周辺の環境と共に保全することが干潟の動物の保護に関しては最も有効である。干潟の環境と底生動物群集が健全であることが、干潟に飛来する鳥類や上げ潮に乗って訪れる魚類にとっても必要である。

(4) 野生生物生息環境としての干潟保全の目標

野生生物の保護には、生息環境の保全が最も重要であることを述べた。その場合、保護・保全の具体的な目標を持つことが望ましい。干潟のように人間活動の場と重複している環境では、手付かずの状態に保つことは著しく困難であるため、実施可能性の高い現実的な目標の設定が必要である。宮城県は2000年に「仙台湾海浜地域保全の進め方」を策定しており、基本的に重

要な保全策についての提言がなされている。

この場合、干潟の持つ様々な性質を整理し、認識し、容認できるかどうかを検討することが必要であろう。干潟の機能としては、次のようなことが挙げられる。干潟は、沿岸域の特殊な地形にのみ形成される特徴的な環境で、よく知られているように特色ある多様な種の生息場所であり、有用な沿岸水産資源を支える場であり、生物の活動によって過剰な溶存有機物や栄養塩類を消費して水質浄化の役割を担う場であり、優れた景観を有して人々に安らぎを与える場所である。ヨシ原も砂やゴミの干潟への侵入を防ぐばかりでなく、水中懸濁物の沈殿・堆積を促進し、底質を安定化させる。さらに、高潮の波浪を緩和したり、岸辺の浸食防止にも役立っている。干潟は、潮干狩りなどのレクリエーションばかりではなく、研究や環境学習の場としても大きな価値を持っている。このような干潟の持つ機能のうち、我々が多かれ少なかれ恩恵を受けている事柄を「生態系サービス」と呼ぶ。しかし、現在では、多くの場所で埋め立てや護岸工事などのため、干潟は消失の危機にさらされている。

イ 「美しい」干潟を目標に

自然の力によって創られ、また生物の関わり合いの過程や結果としてバランス良く作り上げられている生態系は、それぞれの環境にあってそれ自体美しいものである。これは心情的な表現ではあるが、美しい景観は、それ自体が生態系の健全さを総合的に表現していると考えられる。バランスの良い干潟では、それぞれの場所に最も適合した植物が生育し、動物が生息している。それらは季節によって周期的に変化しながら、長い遷移の筋道をたどりつつ緩やかに変化していく。このような状況に少しでも近い形で、干潟を保全することを目標としたい。

いずれの干潟も程度の差こそあれ、人為的に改変され、また常に人為的環境汚染の危険にさらされている。そのような状況の下では、これ以上の変革を自粛し、環境への悪影響をもたらすような物質の流入を控え、生物を採り過ぎず、又は餌付けなどによって不必要に動物を呼び寄せないようにしたい。干潟環境が消失したり、それが危惧される場合には、環境復元や更に踏み込んだ棲み場所の人為的創出にまで立ち入ることが必要になる場合もあるかもしれない。いずれにせよ、一口で言えば、あらゆる意味で干潟を「美しく心地よい」状態に保つことを目標としたい。

ロ 干潟に親しみ、干潟を知る

どうすれば美しい干潟に保ち、美しい干潟を取り戻すことができるのであろうか。それは、私達が干潟を生活の中にどう位置付け、干潟とどのように関わるかということと密接に関連している。干潟を単に潮干狩りや釣りの場所として利用だけでなく、自然景観や生物の観察を楽しみ、自然の成り立ちのからくりを知る場として、節度ある方法で利用することが良いと思われる。そのためには、これまで以上に広報・啓発を行い、観察会や環境教育の場とするなど、教育の早い段階から活用することが考えられる。これまでに多くなされている様々な調査や研究成果を、分かりやすく整理し公開・活用すれば、教育素材に事欠かない。膨大な調査・研究成果は、印刷物として保存するのみならず、DVDやパンフレットなど様々な媒体を用いて教材化し、県下の学校などへ配布し、ホームページを開設するなど、様々な取り組みを実施することが望まれる。また、そのような資料に基づく仮想現実としての干潟に接するだけで良しとせず、実際に現場を訪れることで、干潟の成り立ち、野生生物の生活、干潟の機能、干潟への自然及び人間活動の影響、漂着ゴミの起源など、自然と人間の関わりを学習する格好の場所として活用できるであろう。保護しようとする対象の現状をよく知ることは、親しみを持つ基盤となり、保護することの意義を実感し、その意識を高めていくために有効であると思われる。例えば、ヨシ原にうち寄せられたゴミは、一目で認識できる。多くの海岸でゴミの清掃が必要になっている現実が、どのような経過を経て起こったかを考え、ゴミ除去の活動をより充実した内容にするためにも、現場に足を運ぶことは重要である。

干潟は、生態学・環境科学も関連した実習・教育、あるいは研究や学習の場として活用されているが、様々なレベルに対応できる内容を有している。比較的狭い範囲にあって、様々な要素からなり、あるまとまりを持ちつつも極めて開放的であり、様々な攪乱要因にさらされており、遠隔地における人間活動や環境変化の影響を受ける場所である一方、外洋からの波の影響を直接に受けることはなく、平坦で歩きやすいことから、総合的環境学習・教育の場として、干潟は優れた性格を備えていると言える。それを活かさない手はない。

ハ 干潟を見つめ続ける

一定の状態にとどまり、変化のない自然はあり得ない。人為的影響を受けやすい場所にある干潟は、常に変化することが予想される。干潟における環境変化の察知と対処が必要である。地形の変更や飛来する鳥類の減少などは、目視観察によっても察知し得るが、水質汚染や底生動物などの変化を把握するためには、目視観察では限界がある。そのため、それぞれの特性に応じた方法と頻度と精度を備えた監視調査が望まれる。干潟で起こる変化が、望ましくない方向や規模や場所で起これば、その実態を把握して原因を突き止め、その影響を軽減したり、原因を取り除いたり、また必要に応じて復元まで検討しなければならないであろう。

ニ 話し合い、協力しあって

干潟に限らず、ある場所の自然環境を良好な状態で保全しようと考えれば、何らかの主体が意識的に対象地域を監視し、必要に応じて適切な手立てを講じることが必須である。その場合、中心になるのは行政であろうが、多くの関心を持つ組織や個人が連携し、共通の目的あるいは共通の認識の下で、総合的に対応することが望まれる。行政・NGO・研究者・市民などの連携が必要である。干潟はアクセスの容易な場所に位置し、地形的に平坦で監視が比較的容易である。そのため、必要性は認識されているものの現実的には困難を伴うような組織・個人の連携の有効なあり方を模索・検討し、それを実施して保全の目的達成に資する実験的取り組みの対象としても干潟環境は好適であると思われる。これまで概観したことからも明らかなよう

に、干潟は、砂泥底やそこに生息する底生動物のみから成り立っているのではなく、自然・人工地形、水文(水の流れとその存在状態)、地域の社会・歴史・風習・習慣や価値観、野生生物、行楽及び産業などが複雑に作用し合う場所であり、それだけに多くの分野の協力が必要であろう。干潟は、そのような総合的環境保全の対象としてまたとない性格を備えており、連携作業のノウハウを探るモデルとなる環境である。

ホ 将来に備えての知識の蓄積と活用

標本、地図、映像、調査報告書や研究論文など、対象とする干潟に関する様々な資料を収集・保存し、閲覧・活用できるように状態で整理しておくことが望まれる。様々な調査・研究の成果を、保護や保全あるいは学習に役立てることは、自然環境の保全や野生生物の保護意識を育む上で重要である。元より、一つの干潟といえどもその全体像を余すことなく把握することは望めないが、このような努力を継続的に行うことが有効であり、このような面にまで、行政の役割を拡張することが望まれる。一般に生物の保護と生息環境の保全に関して、干潟生態系は多くの好事例を示してくれている。干潟を保全し、干潟生物の保護に成功するような施設を実現できれば、これから多くの示唆が得られ、県下の他の全ての生息環境の保全と野生生物の保護に良い参考となるに違いない。

へ 身近な環境から地球環境へ

身近な環境の保全と利用、野生生物の保護を問題としつつも、様々な要因の相互関連の中に干潟が成立していることを体感できれば、より大きな空間と長い時間的スケールでの環境問題を考える素地が培われる可能性がある。そのような経験をする場所として干潟環境は優れている。従来のような消費生活や化石燃料の消費が続けば、早晩地球温暖化の影響が深刻になることが懸念されているが、そのような事態が生ずれば現在の場所にある干潟環境は消失の方向へ向かうことになるだろう。足下の具体的な自然環境に親しみ、現状を認識し、それを評価し、対処や関わりを省みるという具体的な一連の行動を積み重ねれば、地球環境への思いをより実感をもって育むことができるに違いない。これは、長期的に見た、あらゆる自然環境の保全と野生生物の保護につながる道である。これまで干潟を例にして考えてきたことは、他の自然環境へも適用できるであろうか。干潟と異なる環境は、干潟では見られないそれぞれに特有な要素を持っているが、基本的な視点は全ての自然環境に適用できると考えられる。それぞれの特性を考慮して、具体的な対応に変更を加えるだけで、十分に適用できるといえよう。

3 宮城県における重要な干潟(干潟環境とそこに生息する底生動物群集)

2016年に発行された宮城県のレッドデータブック「宮城県の絶滅のおそれのある野生動植物」(宮城県RDB2016)には、県内における底生動物群集の生息場所として重要と考えられる干潟17カ所について紹介されている。これは、希少な底生動物の個々の種を保護するには、それらの生息する場所を丸ごと保全することが大切だからである。干潟は2011年3月に発生した東北地方太平洋沖地震による地盤沈下や大津波で大きく攪乱された。また、その後に行われた復旧工事で二次的な被害を被ったところも存在する。こうした干潟の周辺で実施された復旧工事は2020年度でほとんどが完了した。底生動物群集の回復過程を見ると、震災影響は一過的な出来事であり、もともと沿岸域という環境変動が大きなところに生息していた種の多くは比較的短期間のうちに回復したようであるが、まだ完全に旧に復したとは言えない。震災から15年を過ぎて、これからは、自然の営みに合わせて徐々に多様性を増す方向に進んでいくものと思われる。「宮城県RDB2016」では、2015年までにおける震災影響の程度についても触れているが、その後11年を経過した。ここでは、これらの干潟の現状を紹介したい。

宮城県に存在する、ある程度の規模を持った干潟ならびにこれまでレッドリスト種の生息が確認されている河口、砂浜、海岸、漁港は右図に示すようである。この中から重要な干潟として、宮城県RDB2016で取り上げた17カ所の干潟に加えて、その後に生物多様性に富み、生物生息場所として貴重であることが判明した3カ所の干潟(石巻市の雄勝湾、東松島市の長浜海岸、山元町の坂元川河口)を重要な干潟として選定したことから、合計で20カ所の干潟について以下に紹介する。

種名の後に付した「CR+EN、VU、NT、DD」は、「宮城県RDB2026」で公表されたレッドリスト種のカテゴリーである。その他、必要に応じて環境省(環境省レッドリスト2020)や日本ベントス学会(日本ベントス学会編「干潟の絶滅危惧動物図鑑－海岸ベントスのレッドデータブック」2012年)のカテゴリーを附記した。

なお、掲載写真の撮影者は、A：阿部拓三、K：木下今日子、S：鈴木孝男、M：真部和代である。

重要な干潟の現状

(1) 舞根川河口(舞根湾)

〈位置〉

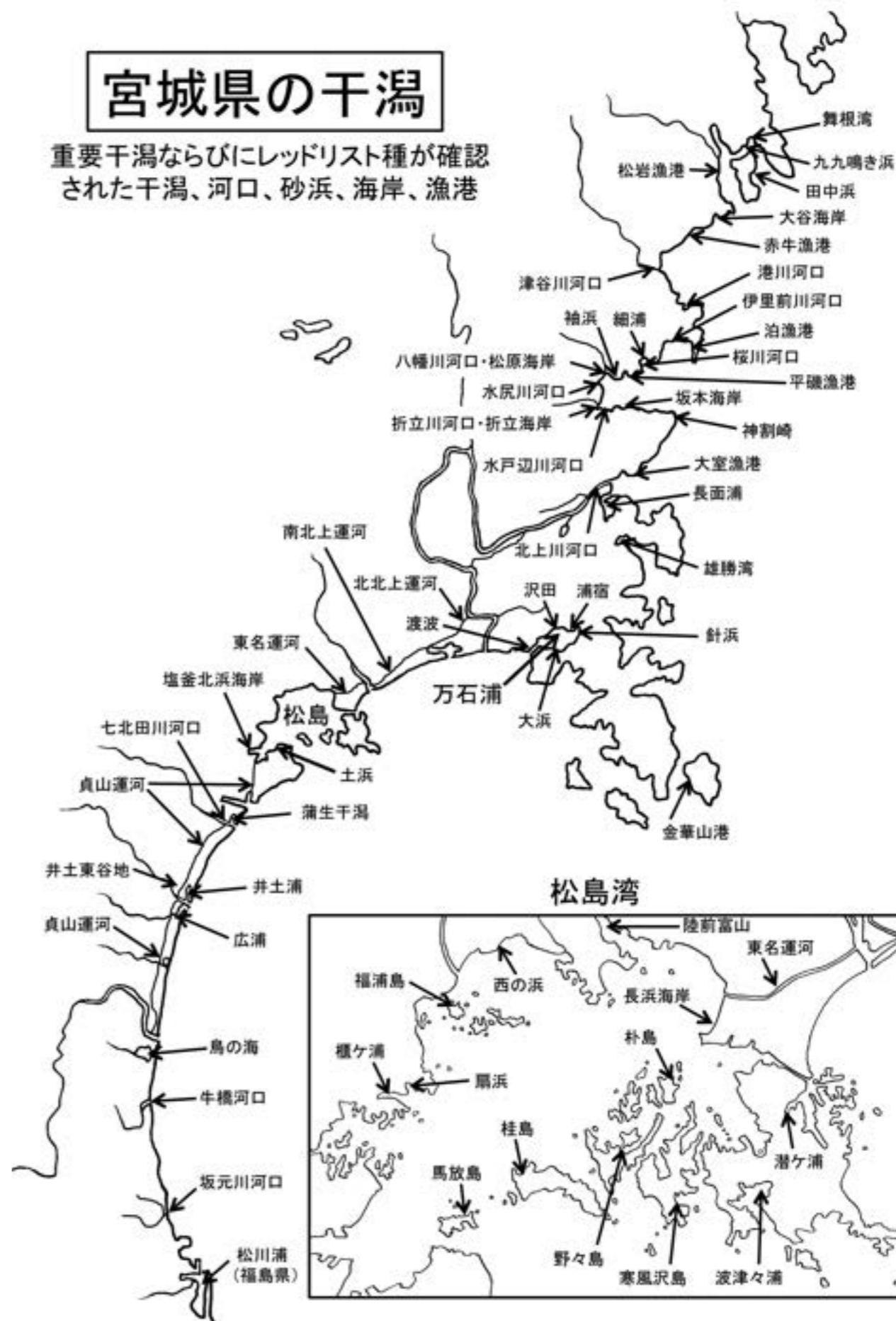
気仙沼市唐桑町西舞根

〈干潟の特徴〉

舞根湾の湾奥に位置し、西舞根川と東舞根川の河口に広がる1haほどの干潟で、近くにカキなどの養殖場があり、周囲は護岸でおおわれている。また、湾の入口近くにも小規模の干潟が見られる。この干潟から背後の尾根を越えると、九九鳴き浜に至ることができる。九九鳴き浜は石英砂からなる砂浜で、鳴砂の浜として国の天然記念物に指定されている。宮城県の南三陸沿岸域はリアス式海岸であることから、湾奥に河川の流入が無い限り、干潟はほとんど形成されない。そのため舞根湾にある干潟は貴重な存在であった。

宮城県の干潟

重要干潟ならびにレッドリスト種が確認された干潟、河口、砂浜、海岸、漁港



〈震災影響ならびにその後の復旧と現状〉

東日本大震災で湾奥にあった干潟は津波で攪乱され、地盤沈下の影響もあってほとんどが消失した。しかし、九九鳴き浜は残された。その後舞根湾では防潮堤は建設されず、現状のままで保全されている。一部、湾奥部の西舞根川河口周辺では護岸工事がなされた。最近、沈下した地盤が少しずつ上昇し始めており、奥部での最干潮時の干潟干出面積は増加傾向にある。今後、砂泥が徐々に堆積していくことで将来的には干潟が復元されていくものと思われる。

〈選定理由〉

震災前(2010年)に行った任意調査で80種ほどの底生動物が確認されているが、もっと多種類の底生動物が生息していたと考えられる。震災前の調査では、希少種のツボミ(VU)、サビシラトリ(NT)、オオノガイ(NT)、バルスアナジャコ(NT)、スジホシムシモドキ(VU)、ヒモイカリナマコ(NT)などが確認されていた。バルスアナジャコは宮城県では生息地が限られている種類である。これらのうち、サビシラトリ、スジホシムシモドキは震災後にはまだ確認できていないが、新たにムシロガイ(VU)、ナギサノシタタリ(CR+EN)、ユウシオガイ(NT)、ウネナシトマヤガイ(環境省NT)、ジャムシ(NT)、アカテガニ(NT)などが出現し、2019年にはサザナミツボ(CR+EN)、ウネムシロ(CR+EN)、マテガイ(NT)、ヨモギホンヤドカリ(NT)、スネナガイソガニ(NT)、2021年にはツブカワザンショウ(VU)、オオスイロヘソカドガイ(NT)、ツバサゴカイ(VU)、2022年にはヤマトクビキレガイ(VU)、カクベンケイガニ(NT)、2023年にはヨシダカワザンショウ(VU)、アカイソガニ(NT)、ヒメアカイソガニ(VU)、トリウミアカイソモドキ(VU)なども出現した。また、2017年に新種記載されたサンリクドロソコエビ(CR+EN)の数少ない生息地の一つでもある。震災後に確認された種数はこれまでに250種を超えており、豊かな多様性を育んでいる場として貴重である。また、九九鳴き浜はスナガニ(VU)の生息場所として貴重であり、ハマダンゴムシ(NT)の生息も確認されている。



舞根湾奥2024年5月A



九九鳴き浜2024年5月A

(2) 津谷川河口

〈位置〉

気仙沼市本吉町川原

〈干潟の特徴〉

津谷川河口の両岸には震災前は護岸がなされていたが、左岸側にはワンドを伴った2haほどの河口干潟があり、ワンドの周囲にはヨシが密生していた。また、右岸側の外尾川河口に設けられた水門の内側にもヨシ原が広がっていた。河口部は南側に大きく湾曲し、狭くなって太平洋に開口していたが、左岸添いには白砂が堆積しており、太平洋に面して赤崎海岸という砂浜が広がっていた。

〈震災影響ならびにその後の復旧と現状〉

津谷川の河口域は津波で大きく破壊され、河口干潟はワンドも含めて姿を消し、ヨシ原は松の木とともに全て失われた。左岸の堤防は先端部が無くなっており、その先の海岸部にあった砂浜(赤崎海岸)も消えてなくなった。また、右岸にあった堤防や水門も破壊された。その結果、河口の位置は後退し、河口干潟だった所には直接波が打ち寄せるようになった。また、左岸・右岸側とも、農地だったところに海水が入り、浸水域となった。特に右岸の旧堤防の内側には津波で持ち込まれた砂が堆積して干潟が形成され、その後多種類の底生動物が生息するようになった。

震災後、河口の両岸に防潮堤や河川堤防(高さ14.6m)が構築された。右岸側においては、堤防が建設されると、震災後に干潟になったところのほとんどが堤体の下になるため、外尾川河口部の干潟の生態系の保全を図るために、代替措置として1.7haほどの干潟を含む湿地(新生湿地)が新たに造成された。この湿地につながる部分には新たに水門が建設された。また、津谷川河口部の高水敷部分は残されることになるので、ヨシ原が回復してくれば底生動物の生息場所になることが期待される。一方、左岸側においては、農地に復旧するなどのために浸水域は埋め立てられ、防潮堤の海側には海水浴場が整備された。

右岸側は生物多様性に富む河口干潟であったが、新たに建設された堤防の水門を通しての海水交換は、水門に砂が堆積するなどして限られており、新生湿地はほぼ淡水状態となって維持されており、底生動物相は貧弱になってしまった。

〈選定理由〉

震災前には、河口のワンドで、イソシジミ、ソトオリガイ、ヤマトカワゴカイ、ヨコヤアナジャコ、アシハラガニなどの他、ツブカワザンショウ(VU)の生息も確認されていた。震災直後はほとんどの底生動物が見られなくなったが、徐々に姿を現すようになり、これまでにスナガニ(VU)やアカテガニ(NT)も確認された。また、津谷川河口右岸の被災した堤防敷や外尾川



津谷川河口右岸2023年5月A



津谷川河口右岸堤防南側の新生湿地2022年6月5

河口部分には震災後に新たに干潟が形成され、これまでに250種を越す底生動物が記録されるなど、多様性が高い状態を2020年頃までは維持していた。この中には、ヨシダカワザンショウ(VU)、クリイロカワザンショウ(NT)、サザナミツボ(CR+EN)、オオノガイ(NT)、オイワケゴカイ(NT)、イトメ(NT)、ハマガニ(CR+EN)、トリウミアカイソモドキ(VU)、アリアケモドキ(NT)、ヒモイカリナマコ(NT)などの希少種も含まれていた。しかし堤防が完成した後は右岸側の新生湿地には海水がほとんど入らないため、ほぼ淡水に近い水域となっている。そのため、上記の希少な種をはじめ、底生動物のうち多くは近年確認できていない。レッドリスト種としては淡水影響の強いところに生息するヒヌマヨコエビ(DD)が見られるぐらいである。このため今後の状況については監視が必要である。

一方、津谷川本流の河口付近の河川敷には面積は狭いものの干潟が形成されており、ヨシダカワザンショウ(VU)、ツブカワザンショウ(VU)、イソシジミ、スナイソゴカイ、ヨコヤアナジャコ、アシハラガニ、アカテガニ(NT)などのほか、宮城県では初記録となる巻貝のイシマキ(DD)の生息も確認されている。また2025年になって、カクベンケイガニ(NT)やハマガニ(CR+EN)の生息が確認された。

(3) 細浦

〈位置〉

南三陸町志津川細浦

〈干潟の特徴〉

志津川湾の北側に位置する細浦漁港は、内湾の奥に存在し、蛇王川が注いでいる。湾奥は護岸となっていたが、その前面に2haほどの前浜干潟が形成されていた。潮間帯の上部には転石を交えた砂質干潟があり、中部から下部にかけては砂泥質～泥質の干潟が広がっていた。潮下帯にはアマモが生育し、干潟部分には南三陸沿岸ではこの場所だけと思われるコアマモの生育も見られた。このように志津川湾内で、まとまった干潟があり、最も種多様性が高いのが細浦の干潟であった。

〈震災影響ならびにその後の復旧と現状〉

津波の襲来で岸辺に巡らされていた堤防が壊れ、干潟を形成していた砂泥底は運び去られてしまった。潮間帯下部から潮下帯にかけて生育していたアマモは消失し、コアマモも失われた。地盤沈下もあったようで、最干潮でも干出する所はほとんど見られず、岸辺は礫浜となってしまった。その後、地盤高が少し上昇してきたこともあって、2017年までに岸辺には小面積ではあるが砂が付き、干潟が形成されていた。ところが、2018年に防潮堤工事が開始され、岸辺に放置されていたガレキを片付ける工事で重機が入ったため、岸辺は埋めたてられてしまった。2020年には防潮堤工事はほぼ終了し、干潮時には堤防の下に砂利主体の干潟が出現するようになった。また、蛇王川の河口にはフラップゲートが設置されたことで、干潟域に淡水供給もなされるため、汽水環境も維持されると思われる。今後、濁水の流入や、富栄養化が進まなければ、再び良好な底生動物生息場所が形成されていくことが期待できる。

〈選定理由〉

震災前には50種ほどの底生動物が記録されていたが、1回だけの調査であったので、実際にはもっと多数の底生動物が生息していたと思われる。津波と地盤沈下で干潟やアマモ場が失われたものの、岸辺には徐々に底生動物が見られるようになってきており、震災後には200種に近い底生動物が記録されている。希少種としてはハウザワイソギンチャク(NT)、ムシロガイ(VU)、ヨコイトカケギリ(NT)、サビシラトリ(NT)、オオノガイ(NT)、ニオガイ(NT)、オニアサリ(NT)、ジャムシ(NT)、イトメ(NT)、スジホシムシモドキ(VU)、ヒモイカリナマコ(NT)などが確認されている。また、震災後ずっと見られなかったユウシオガイ(NT)が2023年に確認された。しかし、震災前に見られたサクラガイ(DD)はまだ見つからない。防潮堤建設完了後の調査では、砂利干潟でサンリクドロソコエビ(CR+EN)の生息が確認され、砂泥底ではアナジャコ類の巣穴が多く見られ、この巣穴を利用しているトリウミアカイソモドキ(VU)が出現した。このように津波で大きく攪乱された干潟ではあるが、底生動物の多様性は回復しつつあり、南三陸沿岸域においては貴重な干潟である。

(4) 折立海岸(旧戸倉海岸)

〈位置〉

南三陸町戸倉折立

〈干潟の特徴〉

志津川湾の最奥部に位置するのが折立海岸であり、折立川の河口から南側一帯にかけて、護岸の海側に1.5haほどの前浜干潟が干出していた。転石や礫がまじった砂質干潟が主体であり、春にはアサリの潮干狩場として町民に開放されていた。

〈震災影響ならびにその後の復旧と現状〉

東日本大震災で一帯は壊滅的な被害を被った。折立川河口の南側(戸倉地区)の前浜では、堤防が破壊され瓦礫となって海側に転がった。地盤沈下の影響もあり、アサリの潮干狩場も含めて、干潟はほとんど干出しなくなった。また、礫浜に混じって存在していた砂泥底も失われた。2014年には、岸辺に小面積ではあるが砂干潟が見られるようになってきたが、ほとんどは



細浦2025年5月A



細浦2024年5月5

転石が主体であった。ところが、2015年になって戸倉地区の岸側に碎石が敷き詰められた。アサリ漁場再生のために砂と碎石を混ぜて投入しようだが、砂分はほとんど残らず、碎石の隙間に泥分が堆積し、嫌氣的になっていた。そのため、生物生息場所としては劣化した。その後、湾奥には、防潮堤が復旧された。このため、以前の岸辺であったところの干潟は堤防の下敷になってしまった。

ところで、碎石が敷かれたエリアでは、2021年には試験的に小区画を掘って砂を入れたり、2022年には一部の碎石を取り除いて海水の循環を良くしてみるなど、折立干潟のアサリ漁場再生に関わる取り組みが開始された。今後の推移を見守りたい。

〈選定理由〉

震災前の詳しい調査は無いが、転石の下にイシダタミやタマキビが多く、イソシジミやアサリなども生息していた。震災直後には、底生動物はほとんど見られなかったが、徐々にいろいろな種類が確認できるようになり、これまでに190種ほどが記録されている。砂が戻ったところにはアサリの稚貝が多く定着していた。また、希少種としては、ツブカワザンショウ(VU)、ヨコイトカケギリ(NT)、オニアサリ(NT)、ジャムシ(NT)、イトメ(NT)、サンリクドロソコエビ(CR+EN)、バルスアナジャコ(NT)、カネココブシガニ(NT)、ヒメアカイソガニ(VU)、スナガニ(VU)、チビイトマキヒトデ(DD)が確認された他、ヤマトクビキレガイ(VU)やアカイソガニ(NT)がコンクリート護岸の凹部につまっている碎石の下から見いだされた。2022年にはツボミ(VU)、サビシラトリ(NT)、オオノガイ(NT)、クビキレガイモドキ(CR+EN)、オイワケゴカイ(NT)、アカテガニ(NT)なども確認された。また、2023年にはヨシダカワザンショウ(VU)やトリウミアカイソモドキ(VU)が出現し、2024年にはイシマキ(DD)の生息も確認された。このまま、砂泥の堆積が進み、干潟が形成されるようになってくれば、さらに多くの種が棲み込んでくるものと考えられる。

ところで、近隣に位置する水戸辺川河口の砂泥底には、震災後にサザナミツボ(CR+EN)、アサリ、マテガイ(NT)、ユウシオガイ(NT)、オオノガイ(NT)、バルスアナジャコ(NT)、ニホンスナモグリなどが生息し始めていたが、護岸工事での場所は失われた。しかし、その後2021年頃からは、左岸側の岸辺に砂泥が堆積し、小面積ではあるが干潟が形成されるようになった。そこにはアナジャコが多く生息しており、その巣穴の中から、サザナミツボ(CR+EN)やトリウミアカイソモドキ(VU)が出現した。また、ジャムシ(NT)やアサリも確認された。さらに2022年にはツボミ(VU)、ツブカワザンショウ(VU)、オニアサリ(NT)、アカテガニ(NT)、ヒモイカリナマコ(NT)などの他、宮城県では出現記録の少ないヒメアカイソガニ(VU)も出現した。また2025年には、クビキレガイモドキ(CT+EN)、ウスコミミガイ(VU)、マゴコロガイ(DD)、オイワケゴカイ(NT)なども確認され、注目すべき干潟となってきている。

水戸辺川河口は折立海岸の近くに立地していることから、干潟間で底生動物浮遊幼生の往来が行われていることが考えられる。このため、一帯を、連続する生物生息場所として保全していく取り組みが望まれる。

(5) 雄勝湾

〈位置〉

石巻市雄勝町雄勝

〈干潟の特徴〉

雄勝湾は南三陸の南部に位置し、女川湾の北側に広がる湾である。雄勝湾は北西方向に入り江状に細く入り込んでいる。この雄勝湾の最奥部には、震災復旧の過程で新たに形成された1.5haほどの干潟が広がる。湾奥から流れる大原川の河道は狭いが、河口部で急に広がったようになる。河口右岸側の奥には樋門が設置されており、その上流に小水路が見られる。この樋門周辺は泥質または砂泥質の干潟でその中に礫やカキ殻が混じる。干潟の主体をなす中央部は砂礫質の干潟で、一部に転石が見られる。左岸側にも砂質～砂泥質の幅の狭い干潟が出現する。また潮間帯下部にはわずかではあるがアマモ類が生育している。

〈震災影響ならびにその後の復旧と現状〉

雄勝湾の最奥部に当たる雄勝町雄勝周辺は東日本大震災で壊滅的な被害を受けたところである。震災復旧で両岸には防潮堤が建設され、湾奥部に流れこむ大原川の両岸も河川堤防が建設された。大原川河口部の右岸側には「雄勝多目的広場」という名称の公園が整備されたが、そこから東側に堤防に備えられた階段を下ると一帯に干潟が干出する。

〈選定理由〉

雄勝湾でのベントスの調査は2023年に初めて行われ、2024年にも実施した。2023年には3回の調査で89種のベントスが記録された。2024年は1回だけの調



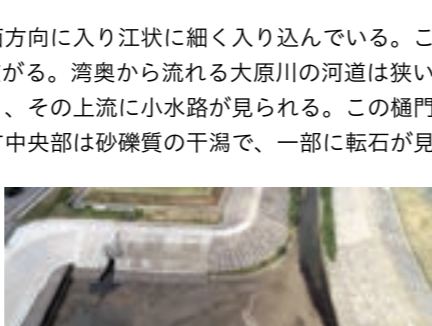
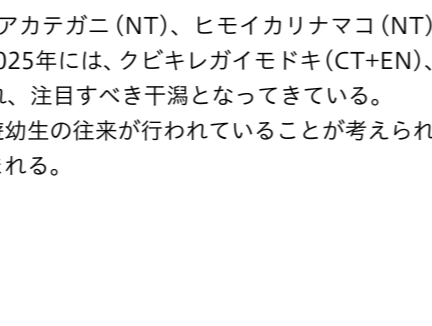
折立海岸2024年5月A



折立川河口2025年5月S



水戸辺川河口2023年5月A



雄勝湾2024年8月A

査であったが61種が記録された。両年を合算すると101種となり、種数も多く、多様性に富む干潟である。

レッドリスト種は17種(全体の17%)で、ホウザワイソギンチャク(NT)、ウミニナ(NT)、ツブカワザンショウ(VU)、ムシロガイ(VU)、コメツブガイ(NT)、ヤミヨキセワタ(NT)、ウスコミミガイ(VU)、マテガイ(NT)、ユウシオガイ(NT)、サビシラトリ(NT)、サクラガイ(DD)、オオノガイ(NT)、ツバサゴカイ(VU)、サンリクドロソコエビ(CR+EN)、トリウミアカイソモドキ(VU)、アカテガニ(NT)、ウチワイカリナマコ(DD)が出現した。また、宮城県の指定種以外にも、アサヒキヌタレガイ(環境省VU)、ミナミエラコ(日本ベントス学会VU)も見ついている。この2種は宮城県ではこの場所以外では記録がない。また、サンリクドロソコエビは宮城県内でしか記録がなく、産地が非常に限られている種であることから、雄勝湾の干潟は生息場所として貴重である。また、ムシロガイ、サクラガイ、ウチワイカリナマコなども宮城県内では記録が少ない種である。このように希少な種が生息場所として利用していることから、生物多様性の保全を考えると重要な干潟である。

(6) 万石浦大浜

〈位置〉

石巻市渡波大浜

〈干潟の特徴〉

万石浦内の南岸に発達した前浜干潟で、岸辺には転石や礫が多く転がっていた。北側には砂泥底からなる広大な干潟が広がり(35haほど)、沖側はアサリの漁場になっていた。また、岸辺に近いところは春には潮干狩りでにぎわっていた。しかし、アサリを食害する外来種のサキグロタマツメタが大発生したことにより、2007年からは潮干狩りを中止していた。大浜の東側に位置する猪落(いのどし)地区(女川町針浜)にも干潟が見られた。

〈震災影響ならびにその後の復旧と現状〉

万石浦は広大な潟湖であるが、入口が狭いために、津波の破壊力は潟湖の中では軽減されたようだ。そのため、干潟の底土が大きく攪乱されることはなかったが、地盤沈下が約80cmもあり、干潟域が全て水没し、最干潮でも干出することはほとんどなくなった。アサリ漁場も水没した。猪落地区では潮間帯上部～潮上帯であったところが潮間帯になり、底生動物の新たな生息場所として利用されている。

大浜では堤防建設は行われていないが、近辺では道路の拡張・整備が実施された。2021年に調査を行ったところ、底生動物への影響は限定的であったようである。また、最近になって沈下した地盤が上昇してきているようであり、干潮時に干出する干潟が広がってきているようである。また、干潟に続く浅海域にはアマモが多く見られるようになってきた。

〈選定理由〉

震災前の調査では、オロチヒモムシ(NT)、ツボミ(VU)、イボキサゴ(CR+EN)、ウミニナ(NT)、カワアイ(CR+EN)、クビキレガイモドキ(CR+EN)、ヨシダカワザンショウ(VU)、ツブカワザンショウ(VU)、ヤマトクビキレガイ(VU)、ムシロガイ(VU)、ウネムシロ(CR+EN)、ウスコミミガイ(VU)、ユウシオガイ(NT)、サビシラトリ(NT)、オオノガイ(NT)、ツバサゴカイ(VU)、スジホシムシモドキ(VU)、マメコブシガニ(NT)など、多くの希少種を含む130種ほどの底生動物の生息が記録されていた。震災で地盤が沈下し、干潟は水没した。しかし、大浜の一部や猪落地区には、礫混じりの砂泥底の干潟が岸辺近くに形成されたことから、底生動物の多くがこうした場所に移動して生息している。震災後は200種ほどの底生動物が確認されており、希少種もかなり残されている。しかし、イボキサゴ、ユウシオガイ、スジホシムシモドキは震災後に姿を消したままである。このうちスジホシムシモドキはスジホシムシモドキヤドリガイ(VU)とともに2023年に湾口近くの渡波地区で記録された。震災後に新たに確認された希少種として、ホウザワイソギンチャク(NT)、クワイロカワザンショウ(NT)、ナギサノシタリ(CR+EN)、ユムシ(NT)、アカテガニ(NT)、ムツハアリアケガニ(VU)などがいる。大浜は、震災後、県内ではまとまった個体群としては3カ所でしか生息が確認できていないカワアイが比較的多く生息する場所があり、貴重である。また、マンゴクウラカワザンショウ(DD、環境省レッドリストではVUに指定されている)は、万石浦の固有種である可能性があるが、近年生息が確認されていない。

万石浦のような多様な底生動物が生息する場所は、近隣のみならず仙台湾岸一帯の干潟や岸辺に幼生を供給する健全な親個体群を確保することにつながることから、保全することを第一に考えるべきである。

(7) 万石浦沢田

〈位置〉

石巻市渡波(ニュータウン)

〈干潟の特徴〉

万石浦の湾口に近いところの北側に発達した干潟で、一帯はアサリ漁場になっていた。岸辺には礫混じりの砂質干潟が広がり(1ha強)、海水交換も良いところであった。この干潟の沖側には水路をはさんで、アサリ漁場があり、その周囲にはアマモ場が見られた。



万石浦大浜2024年5月S



万石浦猪落2024年5月S

〈震災影響ならびにその後の復旧と現状〉

東日本大震災における津波の攪乱的な影響は限られており、石積み の堤防が破壊されたものの干潟の底土や潮下帯のアマモ場は残された。また、岸辺の堤防の復旧工事はいち早く実施された。しかし、地先に広がっていた砂質干潟は地盤沈下で水没し、干出しなくなってしまった。

その後、2018年頃から地盤が上昇してきたようで、堤防の近くに干潟やアマモ場が干出すようになってきた。

〈選定理由〉

震災前には50種ほどの底生動物が確認されており、ツボミ (VU)、イボキサゴ (CR+EN)、マングウラカワザンショウ (DD)、ツバサゴカイ (VU)、スジホシムシモドキ (VU) が比較的多産し、なかでも多毛類の多様性が高い干潟であった。

震災後の2021年に、干出すようになった干潟での調査を実施したところ、震災前よりも多い110種の底生動物が出現した。また、2024年の調査では35種、2025年には68種が出現した。合計して130種以上が確認されたことになる。しかし、イボキサゴ、スジホシムシモドキは見つからなかった。震災後に出現した希少種としては、ツボミ (VU)、ウミニナ (NT)、マングウラカワザンショウ (DD)、ムシロガイ (VU)、コメツブガイ (NT)、マテガイ (NT)、ユウシオガイ (NT)、オオノガイ (NT)、ハマグリ (VU)、ツバサゴカイ (VU)、サンリクドロソコエビ (CR+EN)、マメコブシガニ (NT) などあげられる。今後干出面積が増加してくるようであれば、近隣に広がっているアマモ場とともに、多様性の高いエリアが再生してくるものと思われる。



万石浦沢田2024年5月S

(8) 宮戸波津々浦

〈位置〉

東松島市宮戸

〈干潟の特徴〉

松島湾の外海に開いた内湾である波津々浦 (宮戸島) の入江に存在する前浜干潟で、6haほどの面積を有する。全体的に砂質であるが、ところどころに岩が転がっており、礫も多い。堤防直下付近には、泥底がある。また、潮下帯の浅場にはアマモ場が広がっていた。春にはアサリの潮干狩りが行なわれていた。

〈震災影響ならびにその後の復旧と現状〉

東日本大震災の津波で堤防が破壊された。湾口側の方が大きく攪乱され、砂底は流され、地盤沈下の影響もあって干出しなくなった。中央から奥の方には干潟は残されたが、一番奥まったところを除いて砂泥底はほとんど無くなり、粗砂や小砂利が主体となった。また、潮下帯にあったアマモ場はほとんどが消失した。

2013年から、津波で破壊された堤防の復旧工事が開始され、堤体の位置が従前の場所よりも干潟側に張り出す形で工事は完了した。干潟側に重機は立ち入らなかったため、底生動物の生息環境はほぼ維持された。このため、震災前に比べて種数が激減することなく、震災前と同じかそれ以上の種多様性が維持された。しかし、アマモ場の回復はそれほど進んではないようだ。また、干潟部分の地形は年々変化しているようなので、注視が必要である。

〈選定理由〉

震災前は、巻貝類のイボウミニナ (CR+EN) の東日本における唯一の生息地であった。他にも、ツボミ (VU)、イボキサゴ (CR+EN)、ウミニナ (NT)、マツシマカワザンショウ (VU)、ユウシオガイ (NT)、ハマグリ (VU)、スジホシムシモドキ (VU)、マメコブシガニ (NT)、トリウミアカイソモドキ (VU) などが生息していた。震災後はイボウミニナとマツシマカワザンショウを始め、多くの希少種の生息が確認され、新たにハウザワイソギンチャク (NT)、ヤミヨキセワタ (NT)、ウスコミミガイ (VU)、サビシラトリ (NT)、オオノガイ (NT)、ツバサゴカイ (VU)、スジホシムシ (VU) などの希少種も出現した。しかし、スジホシムシモドキとトリウミアカイソモドキは、震災後は確認されていない。

震災後に記録された底生動物は200種を超える。このため、仙台湾における希少種の生息場所として、また、幼生供給源として重要な干潟である。しかし、震災前は外来種のサキグロタマツメタが多く生息しており、アサリの潮干狩りに影響が出ていたことから、今後も外来種の動向には監視が必要である。



波津々浦2024年8月S

(9) 長浜海岸

〈位置〉

東松島市大塚

〈干潟の特徴〉

東松島市の宮戸島に渡る手前の松島湾と石巻湾に挟まれた一帯のうち、東側が野蒜で西側が東名である。東名地区の南北に伸びる海岸線のうち、東名運河の松島湾への出口から南端の丸山崎に至るところが長浜海岸 (東名浜) であり、岸辺には干潟が見られた。

〈震災影響ならびにその後の復旧と現状〉

松島湾は湾口部に浦戸諸島が存在し、津波の際の防護壁となったことから、松島湾内では津波の威力は減じられ、長浜海岸も松島湾側からの影響は大きくなかったものと思われる。しかし、東名地区は低地であったため、東側の野蒜海岸を襲った津

波が背後から押し寄せて、一帯は大きく破壊された。このため長浜海岸の護岸はことごとく破壊され、松島湾側にたおされて干潟上に散らばった。干潟は地盤沈下もあって、ほとんどが干出しなくなってしまった。その後、砂が少しずつ堆積するようになり、地盤の回復も見られるようになって干潟が徐々に広がってきた。

2018年には防潮堤の復旧工事は終了した。2019年に訪れてみたところ、防潮堤から沖側に100mほどは干潟が干出し、その先にはアマモ場が広がっていた。また、南側では宮城県によって養浜のために盛土がなされた。長浜海岸は南北におよそ1kmの広がりがあるので、干潟面積は10ha以上になると思われる。

〈選定理由〉

長浜海岸では肉食性巻貝のサキグロタマツメタが増えたことにより、アサリが減少し、2004年には潮干狩りが中止された。アサリが激減することで、サキグロタマツメタも少なくなり、その後一時的にアサリが増えたと、また、サキグロタマツメタが出てくるなどの現象がみられていた。2011年の津波直後は、優占種であったアサリ、ヒメシラトリ、ウメノハナガイがほとんど見られなくなり、変わってホトトギスガイ、オオノガイ (NT) やイシガニが多く見られたが、翌2012年には再びアサリやヒメシラトリが多くなるなど変化が続いていた。2019年に現地を見たところ、中央から北側一帯の干潟は砂質から砂泥質で、アオサ類の打ち上げが多く見られた。また、沖合の浅い潮下帯にはアマモ場が広がっていた。このアマモ場の手前の砂地にはシロナマコ (DD) が多く生息していたが、干潟でこれほどの密度でシロナマコが生息している場所は他にはなく、貴重である (その後2020年以降は確認できていない)。2024年までの調査で、ヤマトクビキレガイ (VU)、ツブカワザンショウ (VU)、サザナミツボ (CR+EN)、クビキレガイモドキ (CR+EN)、エドガワミズゴマツボ (VU)、アカニシ (DD)、コメツブガイ (NT)、カミスジカイコガイダマシ (VU)、ヨコイトカケギリ (NT)、ナギサノシタタリ (CR+EN)、マテガイ (NT)、ユウシオガイ (NT)、ツバサゴカイ (VU)、ユムシ (NT)、マメコブシガニ (NT)、ムツハアリアケガニ (VU)、アリアケモドキ (NT) など見られた。サキグロタマツメタの生息も確認された。また、南側の丸山崎の周辺には転石が多く、マガキが多く付着していた。この場所は礫混じりの砂質干潟で地高が少し高くなっていた。大きなアサリやオオノガイ (NT) が見られ、中央干潟では見られなかったウミニナ (NT) やホソウミニナが多く生息していた。岩場にはタマキビ、イシダタミ、オオウスイロヘソカドガイ (NT) が見られた。また、2021年にはウスコミミガイ (VU) が出現した。2019年から2024年までの調査で140種ほどが記録されている。このように転石帯から砂底、砂泥底までが分布し、アマモ場も広がるなど生息場所の多様性が見られ、それに依存してレッドリスト種を含む多種の底生動物が生息している本干潟は、松島湾における重要な干潟のひとつである。



長浜海岸2021年5月A



長浜海岸2024年6月K

(10) 松島西ノ浜

〈位置〉

松島町磯崎西ノ浜

〈干潟の特徴〉

松島湾の奥部 (松島町磯崎西ノ浜) に存在する4haほどの広がりを持った前浜干潟。砂泥質～泥質で、一帯にはカキ礁が見られた。

〈震災影響ならびにその後の復旧と現状〉

松島湾の奥部では津波の攪乱影響はあまり大きくなかったことから、砂泥底の干潟は残された。しかし、震災後の2013年に現地を訪れたところ、干潟の様子は震災以前とほぼ同様であったが、カキ礁が少なくなり、希少な貝類はほとんど見られず、底生動物群集の回復は遅れているようであった。

〈選定理由〉

震災前の干潟では、礫や貝殻が混じった泥底にウミニナ (NT)、タマキビ、アサリ、オキシジミが多産し、希少な種類としてはツボミ (VU)、ツブカワザンショウ (VU)、ウネナシトマヤガイ (環境省NT) が見られた。震災後の2019年の調査ではウミニナやホソウミニナは見られず、アサリやオキシジミも多くはなかった。特に多毛類がほとんど見られなかった。希少種としては、マテガイ (NT)、ウネナシトマヤガイ、マメコブシガニ (NT) が見られたのみであった。2021年の調査では、ウミニナがまとまって生息しているところが見つかったが多くはなかった。他にもマテガイ (NT)、ニオガイ (NT)、マメコブシガニ (NT) など36種が出現したが、全体として多様性は低いようであった。未だ回復途上にあるということかもしれないことから、継続的に観察してみることが必要である。なお、2025年にはオイワケゴカイ (NT)、ハマダンゴムシ (NT)、スナガニ (VU) などが出現した。



松島西の浜東側2025年5月S



松島西の浜西側2025年5月S

(11) 扇浜(双観山下)

〈位置〉

松島町松島大沢平

〈干潟の特徴〉

松島湾の湾奥で、「双観山」と呼ばれる名勝のちょうど真下に位置する前浜干潟で、2haほどの広がりを持つ。全体的に砂質であるが、一部左右の岸辺には泥質のところも見られた。潮間帯上部はそのまま砂浜になっており、砂浜植物が少し見られるものの、ヨシ原は無い。潮下帯にはアマモ場が存在する。

〈震災影響ならびにその後の復旧と現状〉

松島湾の外海に面した干潟は津波の攪乱影響が大きかったが、内湾の奥に位置するこの干潟では影響は軽微であり、海水に浸かって潮上帯の陸生植物が枯れたことを除けば、干潟環境は震災前と同様のままであった。底生動物の種多様性も高いままであり、震災直後の調査でも出現種数の大きな減少は見られなかった。干潟の後背地を走っている国道45号は高台にあり、震災の影響は無かった。このため、海岸線に防潮堤を建設する必要は無いと思われる。もし、この場所に防潮堤が建設されることになった場合には、干潟環境の保全はもちろんのこと、小河川が流入している経路を塞がないようにする配慮が必要である。

〈選定理由〉

震災前には、底生動物は40種前後が確認されており、希少種であるウミニナ (NT) の健全な個体群があるところとしても貴重であった。希少種としては、他にもユウシオガイ (NT)、マメコブシガニ (NT)、スナガニ (VU) などが生息していた。震災後にも、これらの種の生息は確認されている。また、宮城県では初記録となるムツハアリアケガニ (VU) が2011年に出現した。他にも、新たにツボミ (VU)、イボウミニナ (CR+EN)、ヨコイトカケギリ (NT)、マテガイ (NT)、サビシラトリ (NT)、オオノガイ (NT)、ツバサゴカイ (VU) などの希少種が発見されている。また、近年の調査では、ホウザワイソギンチャク (NT)、オオウスイロヘソカドガイ (NT)、ウスコミミガイ (VU)、トリウミアカイソモドキ (VU) などが出現したが、出現種組成の変動は大きいようである。潮下帯にはアマモ場も存在するが、前浜干潟であり、波あたりは近傍にある櫃ヶ浦と比べると強く、その分、底質の砂の移動が大きいように思われる。震災後に記録された底生動物は150種ほどとなることから、種多様性の高い貴重な干潟として、保全が必要である。しかし、最近では、ウミニナが少なくなり、イボウミニナが見られなくなるなど、その多様性が失われてきている傾向があることから、注視が必要である。

(12) 櫃ヶ浦

〈位置〉

利府町赤沼

〈干潟の特徴〉

双観山下の干潟(扇浜)に隣接した入江内の前浜干潟で、4haほどの広がりを持つ。潮間帯上部は砂質であるが、下部にいくに従って泥分が多くなり、泥質のところも見られた。干潟の陸側に小面積ではあるがヨシ原があり、そこを通過して沢水が干潟に流下していた。

〈震災影響ならびにその後の復旧と現状〉

松島湾の奥部に位置するため、津波の影響は軽微であり、干潟環境は震災後も以前と同様の姿をとどめている。しかし、ヨシ原の一部は影響を受け、また、潮間帯下部はあまり干出しなくなった。震災直後の調査でも出現種数は震災前よりも多くなっており、底生動物の多様性は維持されていたと思われる。干潟のすぐ脇を国道45号が通っているが、道路は高台にあり、震災の影響はほとんど無かった。このため、海岸線に防潮堤を建設する必要は無いと思われる。もし、この場所で国道のかさ上げ、あるいは護岸の補強などが計画された場合は、道路下の転石部分に生息している希少種がその生息場所を奪われることになるので、注意が必要である。入江の上部からの流れは、淡水供給源として重要である。

〈選定理由〉

震災前には40種ほどの底生動物が記録されていた。また、希少種としてはウミニナ (NT)、フトヘナタリ (CR+EN)、カワアイ (CR+EN)、ツブカワザンショウ (VU)、ウスコミミガイ (VU)、アカテガニ (NT) が生息しており、なかでもウミニナやカワアイはまとまった数が生息していることから、生息場所として貴重であった。また、ウスコミミガイについては、松島湾内では数少ない生息場所のひとつであった。震災後もこれらの希少種の生息は確認されている。震災後は全体としてウミニナ、カワアイ、オキシジミが多く、希少種としては新たにクリイロカワザンショウ (NT)、ヨシダカワザンショウ (VU)、ユウシオガイ (NT)、サビシラトリ (NT)、オオノガイ (NT)、オイワケゴカイ (NT)、イトメ (NT)、ウミカニムシ (VU)、マメコブシガニ (NT)、ハマガニ (CR+EN)、ムツハアリアケガニ (VU) などが確認された。外来種のサキグロタマツメタも生息していた。多毛類ではコケゴカイ、ミズヒキゴカイ種群、ヘテロマス属などが比較的多く見られた。また、近年になって、イボウミニナ (CR+EN) が継続して見られるようになったことから、希少な巻貝のウミニナ、イボウミニナ、カワアイ、フトヘナタリが揃って生息している唯一の干潟として貴重である。また、道路を隔てて上流側にある植生帯ではフトヘナタリの健全な個体群が残されていたが、2025年には確認できなかったことから、今後の注視が必要である。また、この場所にはアカテガニやクロベンケイガニの巣穴も多く見られる。このように櫃ヶ浦の干潟は、震災後の確認種が120種を超えており、希少種



扇浜(双観山下) 2024年5月5



櫃ヶ浦2024年5月5

も多く生息していることから、底生動物群集の多様性が高い干潟である。

(13) 浦戸桂島

〈位置〉

塩竈市浦戸桂島

〈干潟の特徴〉

松島湾の入口付近には浦戸諸島と呼ばれるいくつかの島があるが、桂島はそのひとつで、島の北側にある桂島漁港のすぐ西側に良好な前浜干潟が見られた。おおよそ1haくらいの砂質干潟で、潮間帯にはコアマモの生育も見られた。また、沖側にはアマモ場が広がっていた。干潟の後背はすぐに崖に突き当たることから、潮上帯にヨシ原は存在せず、海からの打上げ物が堆積していた。

〈震災影響ならびにその後の復旧と現状〉

東北地方太平洋沖地震で崖の一部が崩れたが、干潟の底土は津波で大きく攪乱されることは無く、震災後にも同様の干潟が出現する。また、アマモとコアマモが健全な状態で残されていることは特筆に値する。

〈選定理由〉

震災前の調査では、干潟にツボミ (VU)、イボキサゴ (CR+EN)、ウミニナ (NT)、ニオガイ (NT)、ハマグリ (VU)、コムシ (NT)、ウミカニムシ (VU)、マメコブシガニ (NT) などの希少種が生息しており、潮間帯上部の打上げ物のある辺りからは、ヨシダカワザンショウ (VU)、ヤマトクビキレガイ (VU)、クビキレガイモドキ (CR+EN)、ウスコミミガイ (VU) などの希少種が見いだされていた。震災前の調査は1回しか行なわれていなかったが、それでも56種の底生動物が記録されており、種多様性が高い干潟であることは明らかである。震災直後の調査では、干潟環境が維持されたことから底生動物の多様性も維持されており、津波によって潮下帯から運ばれてきたと思われるツメタガイやガザミ、イシガニなどのカニ類も加わって、震災前よりも多くの底生動物種が確認された。震災後には新たにコメツブガイ (NT)、ヤミヨキセウタ (NT)、マテガイ (NT)、ユウシオガイ (NT)、オオノガイ (NT)、ツバサゴカイ (VU)、スジホシムシモドキ (VU)、ハマダンゴムシ (NT)、スナガニ (VU) などの希少種が見いだされたが、ヨシダカワザンショウ、ウスコミミガイ、コムシ、ウミカニムシなどは震災後には確認されていない。また、イボキサゴも近年は見つかっていない。それでも、震災後には170種を超える底生動物が記録されており、極めて種多様性が高い干潟である。このような幼生供給源としても重要な干潟が津波後にも残されたのは奇跡に近い。一方、外来種のサキグロタマツメタが多く見られることもあり、注意深いモニタリングが必要である。また、潮間帯にコアマモが、潮下帯にはアマモの生育が見られ、近隣で破壊されたアマモ場の再生には、この場所からの種子供給が欠かせないことから、厳重に保全すべきエリアである。しかし、最近ではアマモが衰退してきているようだ。



浦戸桂島2024年9月5

(14) 浦戸野々島

〈位置〉

塩竈市浦戸野々島

〈干潟の特徴〉

浦戸諸島のひとつである野々島の北側には小規模の干潟(砂質から泥質まで、様々である)が散在していた。また野々島のすぐ北には漆島があり、この周囲にも干潟が存在した。また、漆島の北側一帯にはアマモ場が広がっていた。浦戸諸島の桂島、野々島、寒風沢、大森島、朴島の他、七ヶ浜町の馬放島の主に北側に面した小湾の奥には干潟が存在することから、これらを一体の存在として把握する必要がある。

〈震災影響ならびにその後の復旧と現状〉

航空写真で見ると、野々島の小湾の海側に設けられた堤防が津波で壊れ、その内側に海水が入ったところも見られた。また、岸辺の様子から見ると、北側に面した前浜干潟では津波の影響は軽微なようであった。2013年と2014年に野々島の北側(漆島周辺)を確認したところ、泥底もそのまま残されており、干潟環境は津波の後でも残されていたようであった。これは、島の北側に面したところでは津波の攪乱影響がほとんど無かったためである。この一帯にはアマモ場も残されていた。

浦戸諸島の有人島では防潮堤の建設が行われた。しかし、野々島において良好な干潟が見られるのは民家のない所であり、漆島は無人数島である。このため、上記の干潟は現状のままで維持されている。

〈選定理由〉

震災前に野々島周辺で実施した調査では、オロチヒモムシ (NT)、ツボミ (VU)、イボキサゴ (CR+EN)、ウミニナ (NT)、カワアイ (CR+EN)、クリイロカワザンショウ (NT)、ヨシダカワザンショウ (VU)、ツブカワザンショウ (VU)、オオウスイロヘソカドガイ (NT)、ヤマトクビキレガイ (VU)、クビキレガイモドキ (CR+EN)、ウスコミミガイ (VU)、ナギサノシタタリ (CR+EN)、オオノガイ (NT)、ニオガイ (NT)、マメコブシガニ (NT)、ヒモイカリナマコ (NT) などの希少種が確認されており、出現種数は90種を越え、種多様性の高い干潟群として存在していた。震災後の調査においては、上記のうちツボミ、ウミニナ、カワアイ、クリイロカワザンショウ、ツブカワザンショウ、オオウスイロヘソカドガイ、ウスコミミガイ、オオノガイ、ニオガイ、ヒモイカリナマコについては生息しているのを確認した。また、マテガイ (NT)、ムツハアリアケガニ (VU)、



浦戸野々島2021年7月5

ウチワイカリナマコ (DD) が新たに見つかった。震災後の確認種は220種を超える。

このように、現在でも震災前と同様の種多様性を保持していることは確かめられた。ひとつひとつの干潟は小規模ではあるが、近隣にこうした干潟が散在していることから、相互に関連していることは明らかであり、全体としての生物多様性を評価する必要がある。

(15) 土浜

〈位置〉

七ヶ浜町代ヶ崎浜土浜

〈干潟の特徴〉

土浜は七ヶ浜の北側で塩竈湾に面したところにあり、東宮浜の東隣に位置する0.5haほどの小規模な前浜干潟であった。中央が砂泥底の干潟で、左右に崖があり、その下が礫浜となっていた。また、中央部分には淡水の流入があった。砂泥底の浜の上部は礫混じりの砂底となり、その上部に転石帯があった。岸辺にアマモの打上げ物が見られた。

〈震災影響ならびにその後の復旧と現状〉

津波による底質の攪乱はほとんどなかったようであるが、地盤沈下があったようで、干潟面積は減少し、岸辺側に狭い幅でしか干出しなくなった。震災後の2013年にはアナアオサが岸辺に大量に打寄せられていた。淡水流入源はそのまま残されていた。

その後、防潮堤が復旧された。震災前は高さ1m程度の堤防であったが、復旧後はその2倍以上の高さで、より頑丈なものになった。防潮堤には階段が設置されており、前浜に降りられるようになっていた。2020年に確認したところ、地盤高が上昇してきたようで、干潟は震災前に近い状況まで干出するようになっていた。底生動物の多様性は減じたようであったが、面積は狭いながらも砂泥底、泥底、転石帯が連続して存在しており、多様な底生動物が徐々に棲み着いてくるものと思われる。

〈選定理由〉

七ヶ浜に存在する干潟の中では最も種多様性に富む干潟であった。砂泥底の干潟と礫浜が存在し、アサリも多く生息しているようであった。震災前はアナジャコとスナモグリ類の巣穴がとても多く、転石帯にはイワムシが多産していた。希少種としては、ウスコミミガイ (VU)、オオノガイ (NT)、ウネナシトマヤガイ (環境省 NT) の生息がみられた。震災後の2013年に予備的な調査を行ったところ、アサリ、ミズヒキゴカイ種群、イシガニ、ケフサイソガニなどが生息していたが、上記の希少種は確認できなかった。2021年の調査ではウネナシトマヤガイとともにマテガイ (NT)、オイワケゴカイ (NT)、ツバサゴカイ (VU) などの希少種や、アサリ、イワムシ、ニホンスナモグリの生息を確認した。震災後の出現種合計は66種である。

(16) 蒲生干潟

〈位置〉

仙台市宮城野区蒲生高松

〈干潟の特徴〉

仙台市の北部を流れる七北田川の河口左岸には蒲生潟という潟湖が見られるが、この一帯を蒲生干潟と呼んでいる。潟湖の面積は13ha程度であるが、そのうち干潟として干出するのは3haほどであった。潟湖への水の出入りは導流堤に設置された3基の水門を通じて行なわれており、導流堤に近いところは砂質であったが、奥の方には軟泥が堆積し泥干潟となっているところもあった。潟の周囲にはヨシ原があり、特に西側の養魚場と隣接する辺りは一帯がヨシ原となっていた。渡り鳥が多く飛来するところとしても知られており、市民の憩いの場として親しまれていた。

蒲生干潟は、国指定仙台海浜鳥獣保護区蒲生特別保護地区、仙台湾海浜県自然環境保全地域に指定されている。

〈震災影響ならびにその後の復旧と現状〉

津波で海と潟湖の間にあった砂嘴が破壊され、潟湖内に海水が直接流入するようになった。また、ヨシ原もほとんどが砂におおわれるなどして消滅した。しかしその後、砂嘴の流失部分は波が運んできた砂で塞がり始め、3ヵ月後には以前と同じような砂嘴が形成された。北側の干潟部分は砂が堆積し砂浜となったので、潟湖の面積は以前に比べて減少した。一方、潟湖内に堆積していた軟泥は無くなり、ヨシ原だったところが新たに干潟になったことで砂質干潟はかえって広がった。潟内の海水の出入りは、震災直後は、七北田川河口と潟湖の間に設置された



土浜北側2025年5月5



土浜南側2025年5月5



蒲生干潟2022年7月A



蒲生干潟2025年5月5

導流堤の破壊部分からなされていた。その後導流堤は応急復旧がなされ、切り欠き部分も作られた。しかし、2011年8月には七北田川河口が閉塞し、その後2011年9月に襲来した台風15号による豪雨で河川水量が増加し、下流部が氾濫するとともに、干潟内に新河口が形成された。2012年2月には閉塞した河口部が開削され、その後新河口は自然に塞がれた。また導流堤の周囲では砂が堆積したり、それが削られたりを繰り返しており、水環境的に不安定な要素が多い。

防潮堤の建設は2017年頃から本格化し、旧堤防よりも陸側に移動する形で計画された。防潮堤建設に伴い、導流堤の改修も2018年から着手され、いずれも2020年3月までには完成した。導流堤の改修工事に伴い蒲生潟内の水の引きが良くなり、干潟が良く干出するようになった。しかし、潟奥部の水域へつながる水路が機能しなくなったため、水路の掘削を行った。このように、工事は終了したものの、蒲生潟の生態系の回復についてはこれからの変遷に注目していく必要がある。現状としては、全体的に砂が堆積し、水域が狭くなったようだ。砂干潟にはハマツナが繁茂し、水際にはコメツキガニが多く見られる。またヨシ原は少しずつ回復傾向にあるが、潟内の塩分は比較的高いままである。

〈選定理由〉

震災前の干潟には、汽水域を代表するカワゴカイ類、イトゴカイ類とイソシジミが多産し、また、ウミニナ (NT)、フトヘナタリ (CR+EN)、クリイロカワザンショウ (NT)、ヨシダカワザンショウ (VU)、ヒナタムシヤドリカワザンショウ (VU)、サザナミツボ (CR+EN)、ヤミヨキセワタ (NT)、マテガイ (NT)、ユウシオガイ (NT)、サビシラトリ (NT)、オオノガイ (NT)、イトメ (NT)、モリノカマカ (DD)、マメコブシガニ (NT)、トリウミアカイソモドキ (VU)、ハマガニ (CR+EN)、アカテガニ (NT)、スナガニ (VU)、アリアケモドキ (NT) など多くの希少種が生息していた。これらを含めて、震災前には100種ほどの底生動物種が記録されていた。震災後は2023年までに220種ほどが記録された。アシハラガニ、コメツキガニ、イソシジミが多く見られる他、上記希少種のうち、モリノカマカ以外は生息が確認された。また、新たに、ツブカワザンショウ (VU)、コメツブガイ (NT)、ハマグリ (VU)、ユムシ (NT) などが出現した。さらに、最近になって、七北田川河口の砂地でスナガニが多数活動しているのが観察され、ヨシ原でハマガニの生息が確認された。しかし、ウミニナとフトヘナタリは、現在では稀に数個体が見られるのみで絶滅寸前である。全体的に見て、蒲生干潟の底生動物の多様性は保持されているように思われる。しかし、ヨシ原が壊滅的な被害を受けたことと相まって、ヨシ原や土手を主な生息場所として利用している種の回復は遅れている。今後、残された干潟に底生動物が回復できるかどうかは、渡り鳥の利用にも大きく影響するものと思われる。大都市の近郊にありながら、多くの生きものを育む自然豊かな海辺の景観を、市民が節度を持って利活用するようになることが望まれる。

(17) 井土浦

〈位置〉

仙台市若林区井土

〈干潟の特徴〉

仙台市内を流れる名取川の河口左岸には井土浦が、右岸には広浦が立地している。井土浦は、太平洋に並行して造営された貞山運河と砂浜である井土浜との間に広がった潟湖干潟で、おおよそ17haの広さであった。周囲にはヨシ原があり、海水交換は名取川の河口部に開いたところと、潟の北側で、ちょうど井土浦川が貞山運河に出るところ付近の開口部の2カ所で行なわれていた。貞山運河を渡る橋が近隣に無いことから、めったに人が入り込むことが無く、原生自然の面影を色濃く残している貴重な干潟であった。また井土浦の西側、貞山運河をはさんだところは井土東谷地と呼ばれており、一面にヨシ原が広がっていた。

井土浦は、国指定仙台海浜鳥獣保護区井土浦特別保護地区、仙台湾海浜県自然環境保全地域に指定されている。

〈震災影響ならびにその後の復旧と現状〉

津波で海と潟湖の間の砂浜(砂嘴)が大きく破壊された。また、貞山運河の堤も各所で破壊された。その後砂浜部分には砂が堆積し、全てつながったことから、井土浦は潟湖状態に戻った。しかし、海側岸辺にあったヨシ原と松林は全て消滅した。このため、汀線が後退したこともあって、砂浜の回復過程で砂の堆積が進み、井土浦の潟湖面積は半分以下に縮小した。また、泥分が多かった干潟はほとんどが砂質干潟へと変わってしまった。その後、名取川への開口部は砂が堆積して閉塞した。このため、潟湖の水は貞山運河の破壊箇所を通じて出入りしていた。このように井土浦の海水交換は不十分なままであったが、2019年の大雨の時に、砂が堆積して閉塞したままになっていた名取川河口への開口部が、砂がけずられることによって水路としてつながった。

一方、一面ヨシ原であった井土東谷地には津波で海水が入り、大きく攪乱されてヨシ原のほとんどが無くなり、一帯が砂質干潟になった。このエリアにあった立ち木もほとんどが枯死した。その後、貞山運河の破壊箇所から海水が出入りする干潟や塩性湿地になっており、一部にヨシやシオクグの生育が見られるようになってきていた。2017年には、津波で破壊されたままになっていた貞山運河の堤防(堤)の復旧工事が開始され、それに伴って、東谷地への海水交換が確保されるように通水管が3本設置された。そのため、コメツキガニやヤマトカワゴカイなどの底生動物が次第に多く生息するようになってきており、シギ・チドリ類も採餌場所として利用している。

〈選定理由〉

震災前、井土浦には、汽水域を代表するカワゴカイ類、イトゴカイ類、イソシジミなどが多産し、希少種のフトヘナタリ



井土浦2023年4月5



井土東谷地2023年7月5

(CR+EN)、クリイロカワザンショウ (NT)、ヒナタムシヤドリカワザンショウ (VU)、サザナミツボ (CR+EN)、エドガワミズゴマツボ (VU)、サビシラトリ (NT)、イトメ (NT)、トリウミアカイツモドキ (VU)、アカテガニ (NT)、アリアケモドキ (NT) などを含む60種ほどの底生動物が確認されるなど、多様性に富む干潟であった。震災後、2012年には生息種数は減少していたが、その後増加傾向にある。震災後に確認できた種数は、井土東谷地で見られたものも合わせると100種近くに達しており、順調に回復していると思われる。希少種についてみると、上記のうちサザナミツボやエドガワミズゴマツボは姿を消したままであるが、新たにヨシダカワザンショウ (VU)、マツカワウラカワザンショウ (DD)、オオノガイ (NT)、ハマグリ (VU)、モリノカマカ (DD)、マメコブシガニ (NT)、スナガニ (VU) などが見つかっており、希少種の生息場所としても重要である。

井土東谷地には多くの底生動物が生息するようになってきていることから、海水の出入りを確保して干潟として維持し、井土浦の面積が減少した分の代替地として扱い、全体として干潟生態系が保全できるようにするのが望ましい。しかし、井土東谷地で震災後に少数が発見された、ウミニナ (NT)、カワアイ (CR+EN)、フトヘナタリ (CR+EN) は絶滅寸前である。また、貞山運河の出入口に近いところでは近年ハマガニ (CR+EN) の生息が確認されていたが、2021年以降には確認されておらず、絶滅が危惧されていた。しかし、2025年になって1個体の生息が確認された。また、同時にカクベンケイガニ (NT) も出現した。

(18) 広浦

〈位置〉

名取市閨上／下増田

〈干潟の特徴〉

名取川河口の右岸には閨上漁港があり、その南側に広浦と呼ばれる潟湖が広がっている。広浦の南西部分では貞山運河を横切る形で増田川が流れ込んでいるため、塩分は全体的に低い。潟湖の中央には中洲状に干潟が干出し、岸辺に現われる干潟を含めると合計で20haほどであった。東側岸辺(海側)の干潟は砂質であったが、中洲と西側岸辺は砂泥質～軟泥質であった。両岸の岸辺には幅は広くはないもののヨシ原が広がっていた。広浦の東側の浜辺には名取市サイクルスポーツセンターがあり、サイクリングコースが設けられていた。

広浦は、仙台湾海浜県自然環境保全地域に指定されている。

〈震災影響ならびにその後の復旧と現状〉

広浦は東日本大震災で大きく攪乱されたが、西側に広がっていた砂泥質の干潟はかなりの程度残されていた。東側の岸辺では砂質干潟がヨシ原とともにほとんど消滅してしまい、海からもたらされた砂が岸辺に堆積している。中洲の干潟の泥底は流されてしまい、震災後には砂質となり面積が半分以下になっていたが、最近では干出面積が増大傾向にある。

広浦の東側のサイクルスポーツセンターがあったところは震災のガレキ処理場として使用されていたが、処理が終わってから、順次整備が進められ、名取市サイクルスポーツセンターとして2020年に利用が始まった。これに伴って土手の部分も改修されたが、潮上帯のヨシ原は残され、干潟環境は保全された。広浦の西側は、護岸工事が実施され、ヨシ原の半分ほどが失われた。しかし、残されたヨシ原にはそこを生息場所としている希少種(ヨシダカワザンショウ、ヒナタムシヤドリカワザンショウ、アカテガニなど)の生息は確認された。広浦には増田川が流入していることから、塩分の低下や水質の汚濁等については監視が必要である。

〈選定理由〉

広浦での震災前の調査では、汽水性の種類を中心に50種ほどの底生動物が確認されており、ウミニナ (NT)、フトヘナタリ (CR+EN)、クリイロカワザンショウ (NT)、ヒナタムシヤドリカワザンショウ (VU)、サザナミツボ (CR+EN)、サビシラトリ (NT)、アカテガニ (NT)、アリアケモドキ (NT) などの希少種も生息していた。震災後は、上記のうちウミニナ、フトヘナタリなど東側の岸辺に生息していた種は姿を消した。しかし、新たに、ヨシダカワザンショウ (VU)、ツブカワザンショウ (VU)、マツカワウラカワザンショウ (DD)、ユウシオガイ (NT)、オオノガイ (NT)、ハマグリ (VU)、マメコブシガニ (NT) などの希少種が見られるようになり、2021年までの調査の合計では震災前よりも多い100種ほどが確認されている。蒲生干潟や井土浦に比べて生息種数は少ないものの、汽水性の種類が主体であり、彼らの生息場所として機能している。

(19) 鳥の海

〈位置〉

亶理郡亶理町荒浜／吉田

〈干潟の特徴〉

阿武隈川の河口の南側1.5kmほどのところに位置する鳥の海は、東西2.2km、南北1km弱の広さを持ち、東部で太平洋に直接開口しており、北東岸には荒浜漁港が存在する。また、潟湖の中央には蛭塚と呼ばれる小島があり、「鳥の海海浜の森」として、町民の散策場所となっていた。鳥の海は周囲がコンクリート護岸でおおわれていたが、南東部にはヨシ原が広がり、この一帯のみ干潟からヨシ原へと至る自然な景観が保たれていた。また、このヨシ原の後背には松林があった。周囲の干潟を合計するとおおそ60haほどとなり、まとまった干潟面積としては、宮城県では最大規模であった。周囲には8カ所の水門があり、農業排水が多く流入していたことから、比較的塩分が低い汽水域となっていた。干潟の底土はほとんどが砂質であるが、

砂泥質のところも存在した。また、南東側の奥まっているところのヨシ原前面と、最干潮時に残された水路の水際一帯は泥質であった。

鳥の海は、仙台湾海浜県自然環境保全地域に指定されている。

〈震災影響ならびにその後の復旧と現状〉

津波で海側の砂浜(砂嘴)は一部が崩壊したが、数ヶ月後には自然の力で砂がついて回復した。潟湖の東～南東側にあった砂泥底の干潟はヨシ原とともに大きく攪乱され、そのあとには持ち込まれた砂が主体の干潟が形成された。この後背にあった松林は失われたままであるが、ヨシ原は徐々に回復してきている。一方、潟湖の中央から西側にかけての干潟はかなりの程度残されており、底生動物は震災前と同様に生息していた。しかし、震災直後の干潟の一部にはサビシラトリとマガキの死骸が多く打上げられるなど、攪乱の様子を物語っていた。中央の蛭塚は堤防が壊れて海水が浸入し、多くのエリアが新たな湿地や干潟となり、カニ類が避難場所として利用していた。その後の復旧工事において、もともと湿地であったところを少し広めに保全することになったが、それ以外の場所は全て盛土され、クロマツが植林された。2019年までに周囲の堤防と海岸の防潮堤の建設が終了した。

震災後は水路の整備などが行われた。また、蛭塚の湿地エリアではヨシが繁茂し地高が高く乾燥化が進んだことから、宮城県は2018年に干潟生物の生息場所を確保する目的で、ヨシの刈り払いと濡筋の掘削を実施した。鳥の海全体として底生動物の種多様性は漸増傾向にあることから、水質汚濁や塩分低下に関する注意が必要である。

〈選定理由〉

鳥の海の干潟には、砂質から泥質、また塩分の低いところから高いところまでといった環境勾配が存在し、ホソウミニナ、サビシラトリ (NT)、イソジミ、ソトオリガイ、ヤマトカワゴカイ、ヘテロマス属、ニホンスナモグリなど汽水性の底生動物が多く生息していた。水路沿いの泥分が多い干潟ではマガキが重なり合うように成長し、カキ礁を形成しているところもみられた。震災前の調査では、希少種のウミニナ (NT)、フトヘナタリ (CR+EN)、クリイロカワザンショウ (NT)、ヒナタムシヤドリカワザンショウ (VU)、カワグチツボ (CR+EN)、サザナミツボ (CR+EN)、コメツブガイ (NT)、ヤミヨキセワタ (NT)、シゲヤスイトカケギリ (VU)、マテガイ (NT)、ユウシオガイ (NT)、サビシラトリ (NT)、ハマグリ (VU)、イトメ (NT)、ユムシ (NT)、マメコブシガニ (NT)、アカテガニ (NT)、アリアケモドキ (NT) などを含む120種ほどの底生動物が記録されていた。このように鳥の海は底生動物の種多様性が高い状態で維持されている県内有数の干潟であった。また、外来種のサキグロタマツメタが鳥の海全体に分布を広げていた。津波で、東側半分は大きく攪乱されたものの、西側の干潟は震災前と同様の規模で残されたこともあって、震災直後においても、比較的多くの底生動物が残されており、種数は回復傾向にあった。震災後2021年までに確認された種数は150種ほどであり、震災前に記録されていた種数よりも多くなった。ヨシダカワザンショウ (VU)、オオノガイ (NT)、トリウミアカイツモドキ (VU)、スナガイソガニ (NT)、スナガニ (VU) などは新たに確認された希少種である。また、震災後に福島県の松川浦からもたらされたと思われるマツカワウラカワザンショウ (DD) は、最近になって多く見られるようになった。さらに2024年の調査では、ハマガニ (CR+EN) が初めて出現し、南方系のオサガニ (VU) も確認された。このように、震災前に生息していた希少種のうち、フトヘナタリ、カワグチツボ、シゲヤスイトカケギリ、ユムシなどは姿を消したままであるとはいえ、豊かな多様性を保持しているといえる。なお、サビシラトリやニホンスナモグリは各地の干潟で激減した種であるが、鳥の海では比較的普通に見られることから、これらの幼生供給源としても貴重な干潟である。

(20) 坂元川河口

〈位置〉

亶理郡山元町坂元

〈干潟の特徴〉

坂元川は宮城県と福島県との県境付近に位置し、仙台湾に注ぐ2級河川である。河口の上流側300mくらいのところに左岸側から戸花川が合流する。坂元川と戸花川の下流から河口にかけては、震災復旧工事で頑健な河川堤防が建設された。もともと坂元川の下流部には幅は狭いが河川敷が形成されていたが、復旧工事終了後にも河川敷は残されており、河口干潟やヨシ原が成立する。坂元川河口付近には両岸に消波ブロックが設置され、河川中央に小規模な岩礁がある。河口と戸花川の合流点までの間には砂浜あるいは砂質干潟が広がっている。河川は砂浜の北側を流れて太平洋に注いでいる。戸花川との合流点よりも上流側では両岸にヨシやツルヨシが生育し、干潮時にはその前面に砂泥質～泥質の干潟が干出する。

〈震災影響ならびにその後の復旧と現状〉

東日本大震災以前は河口部分に防潮水門が設置されていたが、震災時の地震や津波の影響で水門そのものは残ったが、河口部分や旧堤防はことごとく破壊されてしまった。水門のすぐ内側には海水が入り、一帯は広々とした水域となり砂質干潟も



鳥の海2024年7月A



鳥の海2024年7月M



広浦西側2025年4月S



広浦東側2025年4月S



坂元川河口2024年8月S

形成された。しかしその後の震災復旧工事で、坂元川と戸花川の下流域は旧堤防を新たに頑健な堤防に作り変えるとともに、防潮水門は撤去された。このため水門内側に形成された水域や干潟は失われた。復旧工事は2021年9月に完成した。

〈選定理由〉

坂元川河口でのベントス調査としては2013–2016年に、宮城県が環境アドバイザー制度のもとで実施したのが初めてであった。この調査ではイトミミズ類などを含めて62種が記録されており、レッドリスト種としてはクイロカワザンショウ (NT)、ヨシダカワザンショウ (VU)、ヒナタムシヤドリカワザンショウ (VU)、ツブカワザンショウ (VU)、オオノガイ (NT)、ヤマトシジミ (環境省NT)、イトメ (NT)、ノトマスタス属 (NT)、モリノカマカ (DD)、アリアケモドキ (NT) の10種が出現した。また復旧工事が終了した後の2023年と2024年の調査では合計で110種が記録され、そのうち20種がレッドリスト種であった。新たに出現したレッドリスト種はマツカワウラカワザンショウ (DD)、サザナミツボ (CR+EN)、コメツブガイ (NT)、ガタヅキ (NT)、ユウシオガイ (NT)、サビシラトリ (NT)、ウネナシトマヤガイ (環境省NT)、ユムシ (NT)、トゲノコギリガザミ (日本ベントス学会NT)、トリウミアカイソモドキ (VU)、ハマガニ (CR+EN)、アカテガニ (NT)、スナガニ (VU)、ヒモイカリナマコ (NT) の14種であった。このように両岸を河川堤防に挟まれた河川敷に広がる1haほどの砂が主体の河口干潟ではあるが、全体で145種のベントスが確認され、そのうちの17%がレッドリスト種であることから、中規模河川としては生物多様性に富む河口と考えられる。狭いながらもヨシ原や砂泥底が存在していることや、砂干潟が比較的安定しているという環境がこの多様性の保持に関わっていると思われる。工事が終了したことから、これ以上人為が加わることはないと思われるが、気候変動に伴う豪雨による氾濫や台風などによる波浪など自然災害による影響は甚大になるとと思われる。今後も注視していく必要があらう。

参考文献

- 阿部博和 2025. 干潟とベントスの生息環境を保全する. *GreenAge* 599: 39-44.
- 阿部博和・近藤智彦・小林元樹・大越和加. 2012. 河口域, 干潟, 湾内の海洋環境とマクロベントス群集の変化－蒲生干潟と女川湾を例として－. *月刊海洋*, 46(12): 48-55.
- Abe, H., Sato-Okoshi, W., Tanaka, M., Okoshi, K., Teramoto, W., Kondoh, T. 2014. Swimming behavior of the spoon worm *Urechis unicinctus* (Annelida, Echiura). *Zoology* 117 (3): 216-223.
- Abe, H., Kobayashi, G., Sato-Okoshi, W. 2015. Impacts of the 2011 tsunami on the subtidal polychaete assemblage and the following recolonization in Onagawa Bay, northeastern Japan. *Marine Environmental Research* 112: 86-95.
- Abe, H., Kondoh, T., Sato-Okoshi, W. 2016. First report of the morphology and rDNA sequences of two *Pseudopolydora* Species (Annelida: Spionidae) from Japan. *Zoological Science* 33(6): 650-658.
- Abe, H., Kobayashi, G., Sato-Okoshi, W. 2016. Ecological impacts of earthquake and tsunami and the following succession on the subtidal macrobenthic community in Onagawa Bay, northeastern Japan, with special reference to the dominant taxon, polychaetes. *Ecological impacts of tsunamis on coastal ecosystems: Lessons from the Great East Japan Earthquake*. pp. 59-84.
- Abe, H., Hamaguchi, M., Kajihara, N., Taniai, Y., Oshino, A., Moriyama, A, Kamiyama, T. 2019. Population dynamics of the Manila clam *Ruditapes philippinarum* and implications of the 2011 tsunami impact in two shallow, semi-enclosed bays in northeastern Japan. *Oceanography Challenges to Future Earth: Human and Natural Impacts on our Seas*. pp. 365-386.
- Abe, H., Tanaka, M., Taru, M., Abe, S., Nishigaki, A. 2019. Molecular evidence for the existence of five cryptic species within the Japanese species of *Marphysa* (Anneloda: Eunicidae) known as “Iwa-mushi”. *Plankton Benthos Res.*, 14(4): 303-314.
- 阿部博和・谷合祐一・押野明夫・浜口昌巳・梶原直人・神山孝史. 2021. 宮城県万石浦に造成された人工干潟におけるアサリ *Ruditapes philippinarum* の窒素・炭素安定同位体比. *南紀生物* 63 (1): 94-100.
- 阿部博和・小林元樹・小田中健流・太田尚志・後藤龍太郎・美濃川拓哉・鷲尾正彦・阿部広和・福森啓晶. 2023. スジホシムシモドキ共生性二枚貝スジホシムシモドキヤドリガイの宮城県と青森県における記録. *石巻専修大学研究紀要*, 34: 109-114.
- 阿部博和・小田晴翔・大見川遥・小林真緒・遠藤佑人・高橋陽大・海上智央. 2025. 福島県宇多川および宮城県西舞根川の河口域におけるトゲノコギリガザミの記録. *みちのくベントス*, 9: 65-72.
- 阿部拓三. 2021. 南三陸町志津川湾で確認されたヒメエソボラの左旋個体. *みちのくベントス*, 5: 52-54.
- 阿部拓三・鈴木将太. 2024. 宮城県南三陸町志津川湾における東日本大震災からの復興と干潟再生へ向けた地域での取り組み. *日本ベントス学会誌*, 79: 48-56.
- 阿部拓三・金谷 弦・木下今日子・内野 敬・柚原 剛・鈴木孝男. 2025. 福島県および宮城県沿岸域におけるオサガニの生息記録. *みちのくベントス*, 9: 77-80.
- 阿部拓三・鈴木将太. 2025. 宮城県沿岸域の砂浜海岸におけるスナガニ類の分布. *みちのくベントス*, 9: 81-85.
- Ariyama, H. and Taru, M. 2017. Three species of *Grandidierella* (Crustacea: Amphipoda: Aoridae) from coastal areas of the Tohoku and Kanto-Tokai districts, east Japan, with the description of two new species. *Species Diversity* 22: 187-200.
- Urabe, J., Suzuki, T., Nishita, T., Makino, W. 2013. Immediate ecological impacts of the 2011 Tohoku earthquake tsunami on intertidal flat communities. *PLOS ONE* 8(5): e62779. doi:10.1371/journal.pone.0062779.
- Urabe, J., Nakashizuka, T. Eds. 2016. *Ecological Impacts of Tsunamis on Coastal Ecosystems. Lessons from the Great East Japan Earthquake*, Springer, 410p.
- 大越健嗣. 2011. 津波ストレス アサリ貝殻の模様に変化. *自然保護*, No.532: 19.
- 大越健嗣. 2012. 地震・津波が沿岸に生息する生物に与える影響. *災害と生物多様性 災害から学ぶ, 私たちの社会と未来* (岩槻邦男・堂本暁子監修), *生物多様性JAPAN (JRC)*, pp. 20-25.
- 大越健嗣. 2012. 東北地方太平洋沖地震が沿岸に生息する生物に与えた影響. 特集 震災緊急シンポジウム「津波と地震とベントス－大攪乱のインパクト」. *日本ベントス学会誌*, 66(2): 117-119.
- 大越健嗣. 2013. 東北地方太平洋沖地震の二枚貝への影響－震災から1年半後の現状と今後の展望－. *水環境学会誌*, 36: 44-48.
- OKOSHI, K. 2015. Impact of repeating massive earthquakes on intertidal mollusk community in Japan. In: *Marine Productivity: Perturbations and Resilience of Socio-ecosystems*, H. J. Ceccaldi et. al. (eds.), DOI 10.1007/978-3-319-13878-7_6, Springer International Publishing Switzerland.
- 大越健嗣・大越和加. 2011. 海のブラックバス サキグロタマツメタ 外来生物の生物学と水産学. *恒星社厚生閣*, 225p.

- 大越健嗣・鈴木聖宏・丸山雄也・篠原航. 2014. 貝殻に刻まれた地震・津波の痕跡. *月刊地球*, 36(1): 42-46.
- 大越健嗣・鈴木聖宏. 2014. アサリと食害外来巻貝の地震後の生息状況－外来生物は絶滅したのか? *月刊海洋*, 46(12): 56-61.
- 大越和加・阿部博和・寺本 航・大野博正・内海修平・鈴木陽大・綾小路法孝・近藤知彦・西谷 豪・遠藤宜成. 2012. 東日本大震災による攪乱後の女川湾, 左須浜, 蒲生干潟のプランクトンとベントス. 特集 震災緊急シンポジウム「津波と地震とベントス－大攪乱のインパクト」. *日本ベントス学会誌*, 66(2): 124-126.
- 大谷明範・阿部博和. 2025. 宮城県におけるゴシキエビの初記録. *みちのくベントス*, 9: 58-64.
- 小田晴翔・畠山紘一・阿部拓三・鈴木将太・赤池貴大・阿部博和. 2024. 宮城県と岩手県から得られた標本および写真に基づく北限記録のウシエビとクマエビ. *みちのくベントス*, 8: 61-69.
- 金谷 弦. 2011. 東日本大震災による沿岸・干潟生態系, 生物多様性への影響. *資源環境対策*, 47: 13-19.
- 金谷 弦. 2012. 津波による蒲生干潟の底生動物と植生への影響. *GREEN AGE* 2012/09, 11-15.
- 金谷 弦. 2016. 干潟の恵みとその経済価値評価. *水環境学会誌*, 39(4): 135-140.
- 金谷 弦. 2022. 東日本大震災後の干潟生態系: 巨大かく乱がもたらした変化と回復. *水環境学会誌*, 45: 169-169.
- 金谷 弦・鈴木孝男・牧 秀明・中村泰男・宮島祐一・菊地永祐. 2012. 2011年巨大津波が宮城県蒲生潟の地形, 植生, 及び底生動物相に及ぼした影響. *日本ベントス学会誌*, 67(1): 20-32.
- KANAYA, G., MAKI, H., SUZUKI, T., SATO-OKOSHI, W., KIKUCHI, E. 2014. Tsunami-induced changes in a shallow brackish lagoon ecosystem (Gamo Lagoon) in Sendai Bay, Japan. *Global Environmental Research*, 18/2014: 35-46.
- KANAYA, G., SUZUKI, T., KIKUCHI, E. 2015. Impacts of the 2011 tsunami on sediment characteristics and macrozoobenthic assemblages in a shallow eutrophic lagoon, Sendai Bay, Japan. *PLOS ONE*, Aug 4, 2015, DOI: 10.1371/journal.pone.0135125.
- Kanaya, G., Suzuki, T., Kinoshita, K., Matsumasa, M., Yamada, K., Seike, K., Okoshi, K., Miura, O., Nakai, S., Sato-Okoshi, W., Kikuchi, E. 2017. Disaster-induced changes in coastal wetlands and soft-bottom habitats in eastern Japan – an overview on 2011 Great East Japan Earthquake. *Biology International, Special Issue*, 36: 62-80.
- 金谷 弦・柚原 剛・青木美鈴・森 敬介・鈴木孝男. 2018. 松島湾櫃ヶ浦干潟 (宮城県利府町) の大型底生動物相—2017年10月の定性調査. *みちのくベントス*, 2: 43-48.
- 金谷 弦・伊藤 萌. 2022. 松島湾櫃ヶ浦で発見されたウミナ *Batillaria multiformis* の卵塊. *みちのくベントス*, 6: 47-51.
- 金谷 弦・柚原 剛. 2024. 気候変動がもたらす沿岸域の生物・生態系への影響. *地球環境*, 29: 91-98.
- 金谷 弦・鈴木孝男. 2024. 宮城県蒲生潟の海岸エコトーンにおける地形, 植生, 底質および底生動物への東日本大震災の影響と2023年までの移り変わり. *日本ベントス学会誌*, 79: 26-38.
- 環境省自然環境局生物多様性センター. 2007. 第7回自然環境保全基礎調査浅海域生態系調査 (干潟調査) 報告書.
- 環境省自然環境局生物多様性センター. 2013. 平成24年度東北地方太平洋沿岸地域自然環境調査等業務報告書.
- 環境省自然環境局生物多様性センター. 2013. モニタリングサイト1000沿岸域調査 (磯・干潟・アマモ場・藻場) 2008-2012年度とりまとめ報告書. 92p.
- 環境省自然環境局生物多様性センター. 2014. 平成25年度東北地方太平洋沿岸地域生態系監視調査 調査報告書.
- 環境省自然環境局生物多様性センター. 2015. 平成26年度東北地方太平洋沿岸地域生態系監視調査 調査報告書.
- 環境省自然環境局生物多様性センター. 2016. 平成27年度東北地方太平洋沿岸地域生態系監視調査 調査報告書.
- 環境省自然環境局自然環境計画課. 2016. 生物多様性の観点から重要度の高い湿地 [重要湿地]. 平成28年4月, 環境省自然環境局自然環境計画課, 133p.
- 環境省自然環境局生物多様性センター. 2017. 平成28年度東北地方太平洋沿岸地域生態系監視調査 調査報告書.
- 環境省. 海洋生物レッドリスト2017. <http://www.env.go.jp/press/files/jp/106405.pdf>, 106407.pdf
- 環境省自然環境局生物多様性センター. 2019. モニタリングサイト1000沿岸域調査 (磯・干潟・アマモ場・藻場) 2008-2016年度とりまとめ報告書. 257p.
- 環境省自然環境局生物多様性センター. 2025. モニタリングサイト1000沿岸域調査 (磯・干潟・アマモ場・藻場) 2008-2022年度とりまとめ報告書. 328p.
- 環境省レッドリスト2020. <http://www.env.go.jp/press/files/jp/114457.pdf>
- 木下今日子・鈴木孝男・多留聖典・柚原 剛. 2020. 宮城県牛橋河口干潟の底生動物. *みちのくベントス*, 4: 36-39.
- 熊谷佳二. 2019. 蒲生干潟におけるヤマトカワゴカイの生殖群泳とアカテガニの産卵放仔の観察—生殖行動は未来へつなげる希望の架け橋—. *みちのくベントス*, 3: 45-51.
- 熊谷佳二. 2025. 蒲生のスナガニ—5年間の調査と日中活動の観察から分かったこと—. *みちのくベントス*, 9: 17-25.
- 小林元樹・古畑啓介・阿部博和. 2025. 石巻専修大学構内で見つかった外来性二枚貝タイワンシジミ. *みちのくベントス*, 9: 26-33.
- 小林元樹・柚原 剛. 2025. 宮城県気仙沼市舞根湾におけるヤマトオサガニの初記録. *みちのくベントス*, 9: 34-36.
- 小林真緒・佐藤宏樹・阿部博和. 2024. 宮城県における後鰓類4種 (軟体動物門: 腹足綱) の初記録. *みちのくベントス*, 8: 52-60.
- 佐々木潤. 2016. スナガニ *Ocypride stimpsoni* Ortmann, 1897 (十脚目: 短尾目: スナガニ上科: スナガニ科) の北限分布記録. *Cancer*, 25: 47-49.
- 佐藤慎一. 2012. 宮城県東名浜における震災前後の貝類相の変化－過去10年間のデータと比較して－. 特集 震災緊急シンポジウム「津波と地震とベントス－大攪乱のインパクト」. *日本ベントス学会誌*, 66(2): 122-123.
- Sato S, Chiba T. 2016. Structural changes in molluscan community over a 15-year period before and after the 2011 Great East Japan Earthquake and subsequent tsunami around Matsushima Bay, Miyagi Prefecture, northeastern Japan. *PLOS ONE* 11: e0168206.
- 佐藤慎一・千葉友樹・加藤誠也. 2024. 松島湾東名浜における東日本大震災前10年間と震災後13年間に見られた貝類群集の経年変化. *日本ベントス学会誌*, 79: 39-47.
- 鈴木孝男. 2011. 東日本大震災による干潟環境の変化と底生動物への影響. *水環境学会誌*, 34: 395-399.
- 鈴木孝男. 2012. 東日本大震災が南三陸と仙台湾沿岸の干潟と底生動物に与えた影響. 仙台の水鳥を守る会, pp. 3-18.
- 鈴木孝男. 2012. 干潟や藻場は回復するのか「干潟」. *自然保護*, No.526: 8-9.
- 鈴木孝男. 2013. 渚の生態系サービスを取り戻す－津波で被災した干潟生態系の現状とその回復・再生. *森林環境2013*, トレンドレビュー, 森林環境研究会編, 朝日新聞出版, pp. 144-152.
- 鈴木孝男. 2014. 震災後の仙台湾沿岸での生態系の再生状況. 仙台湾の水鳥を守る会シンポジウム2013「仙台湾沿岸での災害復旧工事を考える!」. 仙台湾の水鳥を守る会, pp. 12-21.
- 鈴木孝男. 2015. 松川浦の底生動物. 相馬市史第8巻特別編I 自然, 福島県相馬市, pp. 728-779.
- 鈴木孝男. 2016. 津波が干潟生物に与えた影響と課題. *エポブ*, The Oceanic Wildlife Society, Vol. 62: 2-5.
- 鈴木孝男. 2017. 舞根湾の干潟並びに九九鳴き浜の底生動物群集. *みちのくベントス*, 1: 2-21.

72. 鈴木孝男. 2017. 蒲生干潟の特徴と重要性. *みちのくベントス*, 1: 22-29.
73. 鈴木孝男. 2018. 志津川湾における重要な干潟と底生動物群集－震災の影響とその後の回復－. *みちのくベントス*, 2: 9-25.
74. 鈴木孝男. 2019. 津谷川河口での復旧工事と底生動物の多様性. *みちのくベントス*, 3: 2-13.
75. 鈴木孝男. 2019. 仙台湾海浜県自然環境保全地域における干潟の底生動物群集—3.11大津波の影響とその後の回復—. 仙台湾海浜県自然環境保全地域学術調査報告書, 宮城県. pp. 254-275.
76. 鈴木孝男. 2020. 大震災で被災した干潟における底生動物群集の保全に関する課題. *みちのくベントス*, 4: 2-8.
77. 鈴木孝男. 2021. 津波後の南三陸・仙台湾沿岸域における干潟ベントス・レッドリスト種の動向. *みちのくベントス*, 5: 2-6.
78. 鈴木孝男. 2021. 東北地方の津波対策工事で干潟の生きものたちはどうなったのか. *科学*, 岩波書店, Vol.91, No.3: 234-236.
79. 鈴木孝男. 2022. 宮城県における海岸動物レッドリスト種の選定の経緯. *みちのくベントス*, 6: 52-57.
80. 鈴木孝男. 2023. 宮城県における重要な干潟の現状. *みちのくベントス*, 7: 2-17.
81. 鈴木孝男. 2024. 宮城県レッドリストで, 絶滅危惧I類に指定されている海岸動物の動向. *みちのくベントス*, 8: 2-7.
82. 鈴木孝男. 2025. 宮城県レッドリストで, 絶滅危惧II類に指定されている海岸動物の動向. *みちのくベントス*, 9: 2-10.
83. 鈴木孝男・金谷 弦. 2012. 大津波で攪乱された蒲生干潟は回復するのか. 特集 震災緊急シンポジウム「津波と地震とベントス－大攪乱のインパクト」. *日本ベントス学会誌*, 66(2): 120-122.
84. 鈴木孝男・平吹喜彦. 2014. 東北の海辺の今－巨大防潮堤・海岸防災林問題を考える. *科学*2014年3月号, 岩波書店, pp. 314-318.
85. 鈴木孝男・柚原 剛. 2021. 井土藤塚の旧船溜まり干潟の底生動物(藤塚自転車橋の下の干潟). *みちのくベントス*, 5: 10-12.
86. 鈴木孝男・金谷 弦・柚原 剛・木下今日子・多留聖典・阿部拓三・太齋彰浩. 2022. 宮城県野生動物植物調査会・海岸動物分科会による2021年度ベントス調査の結果. *みちのくベントス*, 6: 2-20.
87. 鈴木孝男. 木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典. 2023. 干潟ベントスフィールド図鑑(改訂3版). *日本国際湿地保全連合*, 259p.
88. 仙台湾海浜県自然環境保全地域学術調査委員会編. 2002. 仙台湾海浜県自然環境保全地域学術調査報告書. 宮城県, 226p.
89. 田中正敦・柚原 剛. 2024. ハマガニの北限記録の再検討. *みちのくベントス*, 8: 70-79.
90. 玉置仁・村岡大祐. 2011. 地震とそれとともない発生した津波が藻場・干潟生態系に及ぼした影響. *水環境学会誌*, 34: 400-404.
91. 多留聖典. 2018. サンリクドロソコエビ(端脚目ユンボソコエビ科)との邂逅と棲息状況. *みちのくベントス*, 2: 32-42.0
92. 多留聖典. 2019. 「別離の予感」は現実となった：南三陸町細浦のサンリクドロソコエビ. *みちのくベントス*, 3: 26-31.
93. 千葉倫佳・木下今日子・真部和代・鈴木孝男・鈴木将太・阿部拓三. 2024. 宮城県志津川湾におけるマゴコロガイ(二枚貝綱：ウロコガイ上科)の初記録. *日本ベントス学会誌*, 79: 14-17.
94. 日本生態学会東北地区会編. 2016. 生態学が語る東日本大震災－自然界に何がおきたのか－. 文一総合出版, 191p.
95. 日本ベントス学会編. 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑－海岸ベントスのレッドデータブック－. 東海大学出版会, 285p.
96. 藤田喜久・下村通誉・多留聖典・有山啓之・逸見泰久. 2017. 近年国内から発見された希少甲殻類(端脚目, 等脚目, 十脚目)についての話題. *Cancer*, 26: 65-70.
97. 真部和代. 2023. 宮城県沿岸の潮間帯上部から潮上帯に生息する貝類の分布－主にイツマデガイ科, カワザンショウ科, クビキレガイ科について－. *みちのくベントス*, 7: 26-33.
98. 真部和代. 2024. 坂元川河口および雄勝湾の底生動物相. *みちのくベントス*, 8: 24-26.
99. 真部和代. 2024. 宮城県でのキンセンガニ *Matuta victor* の確認. *みちのくベントス*, 8: 8-17.
100. Miura, O., Kanaya, G., Nakai, S., Itoh, H., Chiba, S., Makino, W., Nishimura, T., Kojima, S., Urabe, J. 2017. Ecological and genetic impact of the 2011 Tohoku Earthquake Tsunami on intertidal mud snails. *Scientific Reports* 7: 44375.
101. 宮城県. 2000. 仙台湾海浜地域保全の進め方. 宮城県, 103p.
102. 宮城県. 2016. 宮城県の絶滅のおそれのある野生動物植物. RED DATA BOOK MIYAGI 2016. 宮城県環境生活部自然保護課, 2016年3月, 503p.
103. 宮城県土木部河川課. 2021. 東日本大震災 宮城県河川海岸復旧・復興環境配慮記録誌. 334p.
104. 宮城県南三陸高等学校自然科学部. 2024. 志津川湾松原海岸における干潟環境の改善と生物相変化. *みちのくベントス*, 8: 18-23.
105. 村上湧起・太田尚志・阿部博和. 市販アサリにおけるマイクロプラスチック検出の試み. *みちのくベントス*, 7: 70-76.
106. 柚原 剛. 2023. 仙台湾砂浜海岸でのハマスナホリガニ *Hippa truncatifrons* の確認. *みちのくベントス*, 7: 34-37.
107. 柚原 剛・鈴木孝男. 2018. 仙台湾名取川河口で確認された絶滅危惧種ハマガニ. *みちのくベントス*, 2: 49-53.
108. Yuhara, T., Ozaki, H., Suzuki, T., Urabe, J. 2019. Factors shaping the macrobenthic animal assemblages in a tidal flat newly-formed by the Great East Japan Earthquake. *Estuarine, Coastal and Shelf Science*, 229: 1-12.
109. 柚原 剛・内野 敬・鈴木孝男. 2021. 北上川河口で確認された絶滅危惧種ベンケイガニ. *みちのくベントス*, 5: 7-9.
110. 若林郁夫. 2019. 東北および北関東の太平洋岸におけるスナガニ類の生息記録. *Cancer*, 28: 37-41.

【海岸動物分科会名簿(干潟の底生動物群集を担当)】

| 氏名 | 所属等 |
|--------|---------------------------------------|
| 阿部 拓三 | 南三陸町自然環境活用センター・研究員 |
| 阿部 博和 | 石巻専修大学理工学部生物科学科・准教授 |
| 大越 和加 | 東北大学大学院農学研究科・教授 |
| 金谷 弦 | 国立環境研究所地域環境保全領域 海域環境研究室・上級主幹研 |
| 木下 今日子 | みちのくベントス研究所、東邦大学理学部東京湾生態系研究センター・訪問研究員 |
| 鈴木 孝男 | みちのくベントス研究所・所長 |
| 太齋 彰浩 | サステイナビリティセンター・代表理事 |
| 多留 聖典 | 東邦大学理学部東京湾生態系研究センター・訪問研究員 |
| 永木 利幸 | 宮城県仙台地方振興事務所水産漁港部 技術副参事兼総括技術次長 |
| 真部 和代 | (株)エコリス 業務管理部業務管理課・課長 |
| 柚原 剛 | 国立環境研究所地域環境保全領域 海域環境研究室・特別研究員 |

V 宮城県レッドリスト(カテゴリー順)

| 1 植物【藓苔類】 | |
|----------------------------------|---------|
| 和名(科名) | 環境省2025 |
| 絶滅危惧I類 (CR+EN) | |
| イボイボツノゴケ(ツノゴケモドキ科) | - |
| コマチゴケ(コマチゴケ科) | - |
| ウキウキゴケ(ウキゴケ科) | - |
| イチョウウキゴケ(ウキゴケ科) | NT |
| エゾヤハズゴケ(チヂレヤハズゴケ科) | - |
| シフネルゴケ(ヤバネゴケ科) | - |
| エゾヒメヤバネゴケ(カサナリゴケ科) | - |
| ヨコグラハネゴケ(ハネゴケ科) | - |
| シゲリゴケ(クサリゴケ科) | - |
| ヨウジョウゴケ(クサリゴケ科) | NT |
| クラマゴケモドキ(クラマゴケモドキ科) | - |
| フナガタミズゴケ(ミズゴケ科) | - |
| コアナミズゴケ(ミズゴケ科) | - |
| オオミズゴケ(ミズゴケ科) | NT |
| シタミズゴケ(ミズゴケ科) | - |
| クマノゴケ(イクビゴケ科) | DD |
| ヤマトハクチョウゴケ(チヂレゴケ科) | NT |
| チャボナガダイゴケ(ブルッフゴケ科) | - |
| オオカサゴケ(ハリガネゴケ科) | - |
| カサゴケモドキ(ハリガネゴケ科) | NT |
| テヅカチョウチンゴケ(アズミチョウチンゴケ)(チョウチンゴケ科) | DD |
| コシノヤバネゴケ(カワゴケ科) | NT |
| クロカワゴケ(カワゴケ科) | NT |
| カワゴケ(カワゴケ科) | NT |
| ササオカゴケ(アオモリカギハイゴケ)(ヤナギゴケ科) | NT |
| コハイヒモゴケ(ハイヒモゴケ科) | - |
| キヨスミイトゴケ(ハイヒモゴケ科) | - |
| ヒムロゴケ(ヒムロゴケ科) | - |
| 絶滅危惧II類 (VU) | |
| ナカジマヒメクサリゴケ(クサリゴケ科) | - |
| ヤマナカヨウジゴケ(クサリゴケ科) | - |
| ナンヨウサンカクゴケ(クサリゴケ科) | - |
| マルバヒメクサリゴケ(クサリゴケ科) | - |
| オキナスギゴケ(スギゴケ科) | DD |
| クマノチョウジゴケ(キセルゴケ科) | - |
| キヌシッポゴケモドキ(チヂレゴケ科) | DD |
| ヤリノホゴケ(キヌゴケ科) | - |
| 準絶滅危惧種 (NT) | |
| コウライイチゴケ(キャラハゴケ科) | - |
| 情報不足 (DD) | |
| ユキミイチョウゴケ(ツボミゴケ科) | CR |
| ヒメキンシゴケ(キンシゴケ科) | - |
| カサゴケ(ハリガネゴケ科) | - |
| オオカギイトゴケ(ハイゴケ科) | EN |
| ヒヨクゴケ(イワダレゴケ科) | - |
| フクラゴケ(ナワゴケ)(ナワゴケ科) | - |
| 2 植物【維管束植物】 | |
| 和名(科名) | 環境省2025 |
| 絶滅 (EX) | |
| ミズスギ(ヒカゲノカズラ科) | - |
| カタヒバ(イワヒバ科) | - |
| サイゴクベニシダ(オシダ科) | - |
| ナガオノキノノブ(ウラボシ科) | - |
| オニバス(スイレン科) | VU |

| | |
|-----------------------|----|
| コキンバイザサ(キンバイザサ科) | - |
| ウスイロスゲ(カヤツリグサ科) | - |
| タチスミレ(スミレ科) | VU |
| ハナハタザオ(アブラナ科) | CR |
| マツグミ(オオバヤドリギ科) | - |
| アッケシソウ(ヒユ科) | VU |
| マメダオシ(ヒルガオ科) | EN |
| ヒシモドキ(オオバコ科) | EN |
| ムシャリンドウ(シソ科) | VU |
| ミズトラノオ(シソ科) | VU |
| フサタヌキモ(タヌキモ科) | VU |
| 絶滅危惧I類 (CR+EN) | |
| チシマヒカゲノカズラ(ヒカゲノカズラ科) | EN |
| スギラン(ヒカゲノカズラ科) | VU |
| ミズニラモドキ(ミズニラ科) | VU |
| ヒメハナワラビ(ハナヤスリ科) | VU |
| トネハナヤスリ(ハナヤスリ科) | NT |
| マツパラン(マツパラン科) | NT |
| アオホラゴケ(コケシノブ科) | - |
| ウラジロ(ウラジロ科) | - |
| デンジソウ(デンジソウ科) | NT |
| オオキジノオ(キジノオシダ科) | - |
| ホラシノブ(ホングウシダ科) | - |
| コバノイシカグマ(コバノイシカグマ科) | - |
| ヒメミズワラビ(イノモトソウ科) | - |
| リシリシノブ(イノモトソウ科) | NT |
| タチシノブ(イノモトソウ科) | - |
| マツザカシダ(イノモトソウ科) | - |
| オオバノハチジョウシダ(イノモトソウ科) | - |
| ウスヒメワラビ(ナヨシダ科) | - |
| コハシゴシダ(ヒメシダ科) | - |
| オクヤマワラビ(メシダ科) | - |
| トガリバイヌワラビ(メシダ科) | - |
| イワイヌワラビ(メシダ科) | - |
| ヒロハイヌワラビ(メシダ科) | - |
| コウライヌワラビ(メシダ科) | VU |
| オニカナワラビ(オシダ科) | - |
| ハカタシダ(オシダ科) | - |
| ミヤコヤブソテツ(オシダ科) | - |
| サクライカグマ(オシダ科) | - |
| ギフベニシダ(オシダ科) | - |
| イワカゲワラビ(オシダ科) | VU |
| イワオオイタチシダ(オシダ科) | - |
| カラマツ(マツ科) | - |
| チョウセンゴミシ(マツブサ科) | - |
| フタバアオイ(ウマノスズクサ科) | - |
| ヤブニッケイ(クスノキ科) | - |
| ヒメカイウ(サトイモ科) | NT |
| ナベクラザゼンソウ(サトイモ科) | VU |
| ザゼンソウ(サトイモ科) | - |
| チャボゼキシヨウ(チシマゼキシヨウ科) | - |
| マルバオモダカ(オモダカ科) | VU |
| スプタ(トチカガミ科) | VU |
| ムサシモ(トチカガミ科) | EN |
| イバラモ(トチカガミ科) | - |
| トリゲモ(トチカガミ科) | VU |
| イトイバラモ(トチカガミ科) | VU |
| セキシヨウモ(トチカガミ科) | - |
| シバナ(シバナ科) | NT |
| オオシバナ(シバナ科) | NT |

| | |
|------------------------|----|
| スゲアマモ (アマモ科) | NT |
| ホソパヒルムシロ (ヒルムシロ科) | VU |
| エゾヤナギモ (ヒルムシロ科) | - |
| ヒロハノエビモ (ヒルムシロ科) | - |
| ツツイトモ (ヒルムシロ科) | VU |
| ササバモ (ヒルムシロ科) | - |
| イトクズモ (ヒルムシロ科) | VU |
| ホンゴウソウ (ホンゴウソウ科) | NT |
| ヒメサユリ (ユリ科) | NT |
| コアニチドリ (ラン科) | VU |
| ムギラン (ラン科) | NT |
| キンセイラン (ラン科) | VU |
| ナツエビネ (ラン科) | VU |
| サルメンエビネ (ラン科) | VU |
| クゲヌマラン (ラン科) | VU |
| トケンラン (ラン科) | VU |
| クマガイソウ (ラン科) | VU |
| アツモリソウ (ラン科) | VU |
| イチヨウラン (ラン科) | - |
| セッコク (ラン科) | - |
| アオキラン (ラン科) | EN |
| カモメラン (ラン科) | NT |
| マツラン (ペニカヤラン) (ラン科) | VU |
| モミラン (ラン科) | VU |
| シロテンマ (ラン科) | EN |
| クロヤツシロラン (ラン科) | - |
| ペニシュスラン (ラン科) | - |
| ヒロハツリシュスラン (ラン科) | EN |
| ヒメミヤマウズラ (ラン科) | - |
| テガタチドリ (ラン科) | - |
| オオミズトンボ (ラン科) | EN |
| ミズトンボ (ラン科) | NT |
| ヒナチドリ (ラン科) | VU |
| ミヤマモジズリ (ラン科) | - |
| ウチヨウラン (ラン科) | NT |
| エンシュウムヨウラン (ラン科) | - |
| ギボウシラン (ラン科) | VU |
| フガクスズムシソウ (ラン科) | VU |
| アキタスズムシソウ (ラン科) | - |
| セイトカスズムシソウ (ラン科) | - |
| スズムシソウ (ラン科) | - |
| コフタバラン (ラン科) | - |
| タンザワサカネラン (ラン科) | EN |
| サカネラン (ラン科) | VU |
| ムカゴサイシン (ラン科) | NT |
| ヨウラクラン (ラン科) | - |
| サギソウ (ラン科) | NT |
| タカネトンボ (ラン科) | VU |
| イイヌمامカゴ (ラン科) | EN |
| マイサギソウ (ラン科) | - |
| ガッサンチドリ (ラン科) | EN |
| ヤマトキソウ (ラン科) | - |
| ショウキラン (ラン科) | - |
| ヒオウギ (アヤメ科) | - |
| ステゴビル (ヒガンバナ科) | VU |
| ギョウジャニンニク (ヒガンバナ科) | - |
| ヒメマイヅルソウ (クサスギカズラ科) | - |
| ヤブミョウガ (ツククサ科) | - |
| オオミクリ (ガマ科) | VU |
| エゾミクリ (ガマ科) | - |
| ヤマトミクリ (ガマ科) | NT |
| タマミクリ (ホソバタマミクリ) (ガマ科) | NT |
| ハマイ (イグサ科) | - |

| | |
|---------------------------|----|
| サナギスゲ (カヤツリグサ科) | - |
| ハコネイトスゲ (カヤツリグサ科) | - |
| ハタベスゲ (カヤツリグサ科) | EN |
| ヒエスゲ (カヤツリグサ科) | - |
| タチスゲ (カヤツリグサ科) | - |
| カンスゲ (カヤツリグサ科) | - |
| マメスゲ (カヤツリグサ科) | - |
| ユキグニハリスゲ (カヤツリグサ科) | - |
| チシママツバイ (カヤツリグサ科) | VU |
| チャボイ (カヤツリグサ科) | VU |
| トネテンツキ (カヤツリグサ科) | VU |
| ヒロハヌマガヤ (イネ科) | - |
| ウシクサ (イネ科) | - |
| アキウネマ加里 (イネ科タケ亜科) | - |
| ツルケマン (ケシ科) | EN |
| オサバグサ (ケシ科) | - |
| トガクシソウ (メギ科) | NT |
| イチリンソウ (キンポウゲ科) | - |
| ミヤマオダマキ (キンポウゲ科) | - |
| ハンショウヅル (キンポウゲ科) | - |
| ミツバノバイカオウレン (キンポウゲ科) | - |
| アズマシロカネソウ (キンポウゲ科) | - |
| ヒメキンポウゲ (キンポウゲ科) | VU |
| オキナグサ (キンポウゲ科) | NT |
| ヒキノカサ (キンポウゲ科) | VU |
| ヒメバйкаモ (キンポウゲ科) | EN |
| ヒメウズ (キンポウゲ科) | - |
| ノカラマツ (キンポウゲ科) | VU |
| ザリコミ (スグリ科) | - |
| シコタンソウ (ユキノシタ科) | - |
| エゾノチャルメルソウ (ユキノシタ科) | - |
| ベンケイソウ (ベンケイソウ科) | - |
| ジャケツイバラ (マメ科) | - |
| タヌキマメ (マメ科) | - |
| ノアズキ (マメ科) | - |
| センダイハギ (マメ科) | - |
| シャジクソウ (マメ科) | - |
| ヨコグラノキ (クロウメモドキ科) | - |
| タチゲヒカゲミズ (イラクサ科) | VU |
| エゾツルキンバイ (バラ科) | - |
| ミヤマザクラ (バラ科) | - |
| クサボケ (バラ科) | - |
| キンロバイ (バラ科) | VU |
| カラフトダイコンソウ (バラ科) | - |
| オオタカネバラ (バラ科) | - |
| エゾキイチゴ (ミヤマウラジロイチゴ) (バラ科) | - |
| エゾノシロバナシモツケ (バラ科) | - |
| センダイタイゲキ (トウダイグサ科) | NT |
| ヒゴスミレ (スミレ科) | - |
| シロスミレ (スミレ科) | - |
| マツバニンジン (アマ科) | CR |
| タカネグンナイフウロ (フウロソウ科) | - |
| ヒメミソハギ (ミソハギ科) | - |
| ヒメビシ (ミソハギ科) | VU |
| ウスゲヤナギラン (アカバナ科) | - |
| ウスギモクゲンジ (ムクロジ科) | - |
| ナニワズ (ジンチョウゲ科) | - |
| コイヌガラシ (アブラナ科) | NT |
| ハマサジ (イソマツ科) | NT |
| クリンユキフデ (タデ科) | - |
| エゾノミズタデ (タデ科) | - |
| シラカワタデ (タデ科) | - |
| マダイオウ (タデ科) | - |

| | |
|-------------------------|----|
| コモウセンゴケ (モウセンゴケ科) | - |
| ハマハコベ (ナデシコ科) | - |
| ヒゲネワチガイソウ (ナデシコ科) | - |
| シラオイハコベ (エゾフスマ) (ナデシコ科) | - |
| イトハコベ (ナデシコ科) | CR |
| ウミミドリ (サクラソウ科) | - |
| サクラソウ (サクラソウ科) | NT |
| イワヒゲ (ツツジ科) | - |
| ヒメウスノキ (ツツジ科) | - |
| ハナムグラ (アカネ科) | VU |
| アカネムグラ (アカネ科) | - |
| ホソバノツルリンドウ (リンドウ科) | VU |
| ヒメナエ (マチン科) | VU |
| アイナエ (マチン科) | - |
| チョウジソウ (キョウチクトウ科) | NT |
| サウルリソウ (ムラサキ科) | - |
| ムラサキ (ムラサキ科) | EN |
| ハマベンケイソウ (ムラサキ科) | - |
| ツルカメバソウ (ムラサキ科) | EN |
| イワタバコ (イワタバコ科) | - |
| アブノメ (オオバコ科) | - |
| エゾリトランノオ (オオバコ科) | - |
| カイジンドウ (シソ科) | VU |
| ツルカコソウ (シソ科) | VU |
| ゴマノハグサ (ゴマノハグサ科) | NT |
| タクマヒキオコシ (シソ科) | - |
| キセワタ (シソ科) | VU |
| ヒメハッカ (シソ科) | NT |
| ミソガワソウ (シソ科) | - |
| ミゾコウジュ (シソ科) | NT |
| オカタツナミソウ (シソ科) | - |
| イヌニガクサ (シソ科) | CR |
| エゾニガクサ (シソ科) | EN |
| カリガネソウ (シソ科) | - |
| ハマゴウ (シソ科) | - |
| ハマウツボ (ハマウツボ科) | VU |
| ミミカキグサ (タヌキモ科) | - |
| ホザキノミミカキグサ (タヌキモ科) | - |
| ヒメタヌキモ (タヌキモ科) | NT |
| パアソブ (キキョウ科) | VU |
| ムラサキセンブリ (キキョウ科) | NT |
| ガガブタ (ミツガシワ科) | NT |
| ウゴアザミ (キク科) | - |
| コウヤボウキ (キク科) | - |
| アキノハハコグサ (キク科) | EN |
| ミヤコアザミ (キク科) | - |
| ヒメヒゴタイ (キク科) | VU |
| キクアザミ (キク科) | - |
| アオヤギバナ (キク科) | - |
| オカオグルマ (キク科) | - |
| エキサイゼリ (セリ科) | NT |
| シマサイコ (セリ科) | VU |
| エゾヒョウタンボク (スイカズラ科) | VU |
| クロブシヒョウタンボク (スイカズラ科) | EN |
| 絶滅危惧II類 (VU) | |
| ヤマハナワラビ (ハナヤスリ科) | - |
| オニゼンマイ (ゼンマイ科) | - |
| フモトシダ (コバノイシカグマ科) | - |
| ウサギシダ (ナヨシダ科) | - |
| コバノヒノキシダ (チャセンシダ科) | - |
| ハシゴシダ (ヒメシダ科) | - |
| コモチシダ (シシガシラ科) | - |
| ハコネシケチシダ (メシダ科) | - |

| | |
|-----------------------------|----|
| セイタカシケシダ (メシダ科) | - |
| ヒカゲワラビ (メシダ科) | - |
| オニヒカゲワラビ (メシダ科) | - |
| オクヤマシダ (オシダ科) | - |
| ニオイシダ (オシダ科) | - |
| キヨスミヒメワラビ (オシダ科) | - |
| イノデモドキ (オシダ科) | - |
| ヒメサジラン (ウラボシ科) | - |
| エゾデンダ (ウラボシ科) | - |
| イワオモダカ (ウラボシ科) | - |
| ハンゲショウ (ドクダミ科) | - |
| オクエゾサイシン (ウマノスズクサ科) | - |
| マイヅルテンナンショウ (サトイモ科) | NT |
| チシマゼキショウ (チシマゼキショウ科) | - |
| アギナシ (オモダカ科) | NT |
| ヤナギスプタ (トチカガミ科) | - |
| トチカガミ (トチカガミ科) | NT |
| サガミトリゲモ (ヒロハトリゲモ) (トチカガミ科) | NT |
| ホッサモ (トチカガミ科) | - |
| オオトリゲモ (トチカガミ科) | - |
| ミズオオバコ (トチカガミ科) | NT |
| コウガイモ (トチカガミ科) | - |
| コバノヒルムシロ (ヒルムシロ科) | VU |
| エゾノヒルムシロ (ヒルムシロ科) | - |
| センニンモ (ヒルムシロ科) | - |
| ホソバミズヒキモ (ヒルムシロ科) | - |
| ミズヒキモ (ヒルムシロ科) | - |
| リュウノヒゲモ (ヒルムシロ科) | NT |
| カワツルモ (カワツルモ科) | NT |
| クルマバツクバネソウ (シュロソウ科) | - |
| マルバサンキライ (サルトリイバラ科) | - |
| アマナ (ユリ科) | - |
| ミヤマスカシユリ (ユリ科) | VU |
| エビネ (ラン科) | NT |
| キンラン (ラン科) | NT |
| ヒメノヤガラ (ラン科) | VU |
| コアツモリソウ (ラン科) | NT |
| エゾスズラン (アオスズラン) (ラン科) | - |
| ハマカキラン (ラン科) | VU |
| ムカゴソウ (ラン科) | VU |
| ハクウンラン (ラン科) | - |
| ノビネチドリ (ラン科) | - |
| アオフタバラン (ラン科) | - |
| ミズチドリ (ラン科) | - |
| ツレサギソウ (ラン科) | - |
| ヤマサギソウ (ラン科) | VU |
| タカネサギソウ (ラン科) | - |
| ノヤマトンボ (オオバノトンボソウ) (ラン科) | - |
| トキソウ (ラン科) | NT |
| カヤラン (ラン科) | - |
| カキツバタ (アヤメ科) | NT |
| ヒオウギアヤメ (アヤメ科) | - |
| ヤマラッキョウ (ヒガンバナ科) | - |
| スズラン (クサスギカズラ科) | - |
| ヒメミクリ (ガマ科) | VU |
| アズマホシクサ (ミヤマヒナホシクサ) (ホシクサ科) | VU |
| ヒメコウガイゼキショウ (イグサ科) | - |
| イセウキヤガラ (カヤツリグサ科) | - |
| タテヤマスゲ (カヤツリグサ科) | - |
| ジョウロウスゲ (カヤツリグサ科) | VU |
| ヌマアゼスゲ (カヤツリグサ科) | VU |
| イトキンスゲ (カヤツリグサ科) | - |

| | |
|-----------------------------|----|
| ヤマクボスゲ(カヤツリグサ科) | NT |
| クジュウツリスゲ(カヤツリグサ科) | NT |
| ムジナスゲ(カヤツリグサ科) | - |
| ヌマクロボスゲ(シラカワスゲ)(カヤツリグサ科) | VU |
| ナガエスゲ(カヤツリグサ科) | - |
| カミカワスゲ(カヤツリグサ科) | - |
| カンエンガヤツリ(カヤツリグサ科) | VU |
| タチヒメクグ(マメクグ)(カヤツリグサ科) | - |
| スジヌマハリイ(カヤツリグサ科) | VU |
| コツブヌマハリイ(カヤツリグサ科) | VU |
| ナガボテンツキ(カヤツリグサ科) | - |
| ミチノクホタルイ(カヤツリグサ科) | - |
| ノグサ(カヤツリグサ科) | - |
| コシンジュガヤ(カヤツリグサ科) | - |
| ヒナガリヤス(イネ科) | - |
| フサガヤ(イネ科) | - |
| ヒナザサ(イネ科) | NT |
| ミズタカモジグサ(イネ科) | VU |
| ミヤマドジョウツナギ(イネ科) | - |
| ミチシバ(イネ科) | - |
| タチイチゴツナギ(イネ科) | EN |
| ハマヒエガエリ(イネ科) | - |
| イヌアワ(イネ科) | - |
| ハイドジョウツナギ(イネ科) | - |
| オモエザサ(イネ科タケ亜科) | - |
| ケケマン(ケシ科) | - |
| ワガトリカブト(キンポウゲ科) | VU |
| フクジュソウ(キンポウゲ科) | - |
| カザグルマ(キンポウゲ科) | NT |
| コキツネノボタン(キンポウゲ科) | VU |
| ツルキツネノボタン(キンポウゲ科) | - |
| マンセンカラマツ(キンポウゲ科) | EN |
| ヤマシャクヤク(ボタン科) | NT |
| ベニバナヤマシャクヤク(ボタン科) | VU |
| ヤシャビシャク(スグリ科) | NT |
| トガスグリ(スグリ科) | - |
| アズマツメクサ(ベンケイソウ科) | NT |
| ミヤママンネングサ(ベンケイソウ科) | - |
| オグラノフサモ(アリノトウグサ科) | VU |
| タチモ(アリノトウグサ科) | NT |
| モメンヅル(マメ科) | - |
| レンリソウ(マメ科) | - |
| オオバグミ(マルバグミ)(オオバグミ)(グミ科) | - |
| ホナガクマヤナギ(クロウメモドキ科) | - |
| マルバヤブマオ(イラクサ科) | - |
| トキホコリ(イラクサ科) | NT |
| カワラサイコ(バラ科) | - |
| エチゴツルキジムシロ(バラ科) | - |
| シモキタイチゴ(バラ科) | - |
| ヒメゴヨウイチゴ(バラ科) | - |
| キビノナワシロイチゴ(キビナワシロイチゴ)(バラ科) | - |
| ナガボノワレモコウ(ナガボノシロワレモコウ)(バラ科) | - |
| サクラバハノキ(カバノキ科) | NT |
| マルミノウルシ(トウダイグサ科) | NT |
| ユビソヤナギ(ヤナギ科) | NT |
| シライヤナギ(ヤナギ科) | - |
| キバナノコマノツメ(スミレ科) | - |
| フモトスミレ(スミレ科) | - |
| シハイスミレ(スミレ科) | - |
| アゼオトギリ(オトギリソウ科) | EN |
| オシマオトギリ(オトギリソウ科) | - |

| | |
|---------------------|----|
| ミズマツバ(ミソハギ科) | NT |
| アシボソアカバナ(アカバナ科) | - |
| ホソバアカバナ(アカバナ科) | - |
| ナンブコハモミジ(ムクロジ科) | - |
| ミズタガラシ(アブラナ科) | - |
| ハクセンナズナ(アブラナ科) | - |
| ハタザオ(アブラナ科) | - |
| ミヤマツチトリモチ(ツチトリモチ科) | VU |
| ホザキヤドリギ(オオバヤドリギ科) | - |
| ヒメタデ(タデ科) | DD |
| ナガバノウナギツカミ(タデ科) | NT |
| タカネナデシコ(ナデシコ科) | - |
| ワダソウ(ナデシコ科) | - |
| イワアカザ(ヒユ科) | CR |
| クサアジサイ(アジサイ科) | - |
| ヤナギトラノオ(サクラソウ科) | - |
| クリンソウ(サクラソウ科) | - |
| ハイハマボス(サクラソウ科) | NT |
| ナツツバキ(ツバキ科) | - |
| オオイワカガミ(イワウメ科) | - |
| ヒメハナヒリノキ(ツツジ科) | - |
| カラフトイチヤクソウ(ツツジ科) | VU |
| ツルコケモモ(ツツジ科) | - |
| クロマメノキ(ツツジ科) | - |
| コケリンドウ(リンドウ科) | - |
| フナバラソウ(キョウチクトウ科) | NT |
| コカモメヅル(キョウチクトウ科) | - |
| スズサイコ(キョウチクトウ科) | NT |
| ヤマホロシ(ナス科) | - |
| スナビキソウ(ムラサキ科) | - |
| マルバノサワトウガラシ(オオバコ科) | NT |
| ヒヨクソウ(オオバコ科) | - |
| イヌノフグリ(オオバコ科) | NT |
| ミチノククワガタ(オオバコ科) | - |
| ヤマジソ(シソ科) | NT |
| ティネニガクサ(シソ科) | NT |
| ナンバンギセル(ハマウツボ科) | - |
| ミチノクコゴメグサ(ハマウツボ科) | - |
| シコクマコナ(ハマウツボ科) | - |
| ミヤマシオガマ(ハマウツボ科) | - |
| ヨツバシオガマ(ハマウツボ科) | - |
| キヨシミウツボ(ハマウツボ科) | - |
| オオタヌキモ(タヌキモ科) | NT |
| ハグロソウ(キツネノマゴ科) | - |
| クマツヅラ(クマツヅラ科) | - |
| オクノフウリンウメモドキ(モチノキ科) | - |
| ミヨウギシャジン(キキョウ科) | - |
| チシマギキョウ(キキョウ科) | - |
| ヒメシロアサザ(ミツガシワ科) | VU |
| アサザ(ミツガシワ科) | NT |
| エゾノコギリソウ(キク科) | - |
| シロヨモギ(キク科) | - |
| エゾノタウコギ(キク科) | - |
| ヒメガンクビソウ(キク科) | - |
| リュウノウギク(キク科) | - |
| ナトリアザミ(キク科) | - |
| アズマギク(キク科) | - |
| ホソバオグルマ(キク科) | VU |
| タカサゴソウ(キク科) | VU |
| カワラニガナ(キク科) | NT |
| コオニタビラコ(キク科) | - |
| ミチノクヤマタバコ(キク科) | - |
| カシワバハグマ(キク科) | - |

| | |
|-------------------------|----|
| オナモミ(キク科) | VU |
| イワセントウソウ(セリ科) | - |
| タニミツバ(セリ科) | - |
| ヌマゼリ(セリ科) | NT |
| ニッコウヒョウタンボク(スイカズラ科) | - |
| マツムシソウ(スイカズラ科) | - |
| 準絶滅危惧種(NT) | |
| ミズニラ(ミズニラ科) | NT |
| ヤシャゼンマイ(ゼンマイ科) | - |
| ホソバコケシノブ(コケシノブ科) | - |
| サンショウモ(サンショウモ科) | NT |
| イノモトソウ(イノモトソウ科) | - |
| ホソバイヌワラビ(メシダ科) | - |
| ヤリホノシケシダ(ヤブシダ)(メシダ科) | - |
| オオイタチシダ(オシダ科) | - |
| リュウトウイタチシダ(オシダ科) | - |
| マメツタ(ウラボシ科) | - |
| ウマノスズクサ(ウマノスズクサ科) | - |
| ミチノクサイシン(ウマノスズクサ科) | VU |
| サジオモダカ(オモダカ科) | - |
| ウリカワ(オモダカ科) | - |
| イトトリゲモ(トチカガミ科) | NT |
| コアマモ(アマモ科) | - |
| イトモ(ヒルムシロ科) | NT |
| エゾノミヤマエンレイソウ(シュロソウ科) | - |
| ユウシュンラン(ラン科) | NT |
| サワラン(ラン科) | - |
| ジガバチソウ(ラン科) | - |
| ミヤマトキソウ(ラン科) | - |
| ヒトツボク(ラン科) | - |
| ヒメシャガ(アヤメ科) | NT |
| アヤメ(アヤメ科) | - |
| ヤマトユキザサ(クサスギカズラ科) | - |
| ヒメイズイ(クサスギカズラ科) | - |
| ミズアオイ(ミズアオイ科) | NT |
| ナガエミクリ(ガマ科) | NT |
| ミクリ(ガマ科) | NT |
| ホシクサ(ホシクサ科) | - |
| エゾホシクサ(ホシクサ科) | - |
| スナジスゲ(カヤツリグサ科) | - |
| キンチャクスゲ(カヤツリグサ科) | - |
| ツルスゲ(カヤツリグサ科) | - |
| オオクグ(カヤツリグサ科) | NT |
| ツルカミカワスゲ(カヤツリグサ科) | - |
| オオシロガヤツリ(カヤツリグサ科) | - |
| ウキミガヤツリ(カヤツリグサ科) | - |
| サギスゲ(カヤツリグサ科) | - |
| タカネクロスゲ(カヤツリグサ科) | VU |
| ヒメコヌカグサ(イネ科) | NT |
| ウキガヤ(イネ科) | - |
| カラフトドジョウツナギ(イネ科) | - |
| キダチノネズミガヤ(イネ科) | - |
| アイアシ(イネ科) | - |
| ヒゲシバ(イネ科) | - |
| ヤマキタダケ(ヒメスズダケ)(イネ科タケ亜科) | - |
| ナガミノツルケマン(ケシ科) | NT |
| コマクサ(ケシ科) | - |
| ヤマブキソウ(ケシ科) | - |
| センズモドキ(キンポウゲ科) | VU |
| レンゲショウマ(キンポウゲ科) | - |
| トウゴクサバノオ(キンポウゲ科) | - |
| シラネアオイ(キンポウゲ科) | - |
| スハマソウ(キンポウゲ科) | - |

| | |
|------------------------------|----|
| バイカモ(キンポウゲ科) | - |
| イワカラマツ(キンポウゲ科) | VU |
| タコノアシ(タコノアシ科) | NT |
| イワオウギ(マメ科) | - |
| マルバヌスビトハギ(マメ科) | - |
| ケヤブハギ(マメ科) | - |
| エゾノレンリソウ(マメ科) | - |
| イヌハギ(マメ科) | NT |
| マキエハギ(マメ科) | - |
| トクリマメ(オオバタンキリマメ)(マメ科) | - |
| コケミズ(イラクサ科) | - |
| チョウセンキンミズヒキ(バラ科) | VU |
| シモツケソウ(変種アカバナシモツケソウを含む)(バラ科) | - |
| ノウゴウイチゴ(バラ科) | - |
| ヒロハノカワラサイコ(バラ科) | VU |
| ミチノクナシ(イワテヤマナシ)(バラ科) | EN |
| タカネバラ(バラ科) | - |
| ハマナス(バラ科) | - |
| サナギイチゴ(バラ科) | NT |
| ネコシデ(カバノキ科) | - |
| イワウメヅル(ニシキギ科) | - |
| ノウルシ(トウダイグサ科) | NT |
| トカチャナギ(オオバヤナギ)(ヤナギ科) | - |
| エゾノタチツボスミレ(スミレ科) | - |
| コフウロ(フウロソウ科) | - |
| カラフトアカバナ(アカバナ科) | - |
| フユザンショウ(ミカン科) | - |
| カラスノゴマ(アオイ科) | - |
| ハマハタザオ(アブラナ科) | - |
| エゾハタザオ(アブラナ科) | - |
| オニシバリ(ジンチョウゲ科) | - |
| オオユリワサビ(アブラナ科) | - |
| オヤマソバ(タデ科) | - |
| アブクマトラノオ(タデ科) | - |
| エゾイブキトラノオ(タデ科) | - |
| ムカゴトラノオ(タデ科) | - |
| ヤナギヌカボ(タデ科) | NT |
| サデクサ(タデ科) | - |
| ヌカボタデ(タデ科) | VU |
| ホソバイヌタデ(タデ科) | NT |
| ノダイオウ(タデ科) | VU |
| タチハコベ(ナデシコ科) | VU |
| ナンブワチガイソウ(ナデシコ科) | VU |
| ハマアカザ(ヒユ科) | - |
| マツナ(ヒユ科) | - |
| ハママツナ(ヒユ科) | - |
| ヤマアジサイ(アジサイ科) | - |
| タマアジサイ(アジサイ科) | - |
| ユキワリコザクラ(サクラソウ科) | - |
| イワウメ(イワウメ科) | - |
| ヒメシャクナゲ(ツツジ科) | - |
| ウスユキハナヒリノキ(ツツジ科) | - |
| イソツツジ(ツツジ科) | - |
| ツガザクラ(ツツジ科) | - |
| コバノイチヤクソウ(ツツジ科) | - |
| マルバウスゴ(ツツジ科) | - |
| オオキヌタソウ(アカネ科) | - |
| ハナイカリ(リンドウ科) | - |
| イヌセンブリ(リンドウ科) | NT |
| テンゲノコヅチ(リンドウ科) | NT |
| ハダカホオズキ(ナス科) | - |
| ルリソウ(ムラサキ科) | - |

| | |
|------------------------------|----|
| オオアブノメ (オオバコ科) | VU |
| クワガタソウ (オオバコ科) | - |
| カワヂシャ (オオバコ科) | NT |
| ハマヒナノウスツボ (ゴマノハグサ科) | NT |
| スズメノトウガラシ (アゼナ科) | - |
| シラゲヒメジソ (シソ科) | - |
| アキノタムラソウ (シソ科) | - |
| シソバツツナミ (イガタツツナミ) (シソ科) | - |
| ナミキソウ (シソ科) | - |
| トモエシオガマ (ハマウツボ科) | - |
| ムシトリスミレ (タヌキモ科) | - |
| イヌタヌキモ (タヌキモ科) | NT |
| ムラサキミカキグサ (タヌキモ科) | NT |
| ソヨゴ (モチノキ科) | - |
| キキョウ (キキョウ科) | NT |
| カワラハハコ (キク科) | - |
| シュウブンソウ (キク科) | - |
| イワインチン (キク科) | - |
| ククタニギク (キク科) | NT |
| モリアザミ (キク科) | - |
| リクゼンアザミ (キク科) | - |
| ナンブタカネアザミ (キク科) | - |
| キタカミアザミ (キク科) | - |
| マルモリアザミ (キク科) | - |
| タカサブロウ (キク科) | - |
| フジバカマ (キク科) | NT |
| タカネニガナ (キク科) | - |
| ノニガナ (キク科) | - |
| オオニガナ (キク科) | - |
| ムラサキニガナ (キク科) | - |
| フボウトウヒレン (キク科) | - |
| アブクマトウヒレン (キク科) | - |
| ハナビゼリ (セリ科) | - |
| ホタルサイコ (セリ科) | - |
| セリモドキ (セリ科) | - |
| ハナウド (セリ科) | - |
| オオカサモチ (セリ科) | - |
| レンブクソウ (ガマズミ科) | - |
| クロミノウグイスカグラ (スイカズラ科) | - |
| 情報不足 (DD) | |
| スガモ (アマモ科) | - |
| オオアマモ (アマモ科) | VU |
| タチアマモ (アマモ科) | VU |
| オオヤマオダマキ (キンボウゲ科) | - |
| ツツラフジ (ツツラフジ科) | - |
| ツメレンゲ (ベンケイソウ科) | NT |
| ヒナノウスツボ (ゴマノハグサ科) | - |
| 要注目種 | |
| シケチシダ (メシダ科) | - |
| ナンゴクナライシダ (オシダ科) | - |
| ナンタイシダ (オシダ科) | - |
| ヒメフタバラン (ラン科) | - |
| ノゲヌカスゲ (カヤツリグサ科) | - |
| カリヤス (イネ科) | - |
| タチドジョウツナギ (イネ科) | - |
| フサザクラ (フサザクラ科) | - |
| ムカゴネコノメソウ (ユキノシタ科) | NT |
| エチゴキジムシロ (バラ科) | - |
| シャリンバイ (バラ科) | - |
| アラカシ (ブナ科) | - |
| イヨカズラ (キョウチクトウ科) | - |
| ヤマウツボ (変種ケヤマウツボを含む) (ハマウツボ科) | - |

| | |
|--------------------------------|----------------|
| モチノキ (モチノキ科) | - |
| カラフトニンジン (セリ科) | - |
| 3 哺乳類 | |
| 和名(科名) | 環境省2020 |
| 絶滅 (EX) | |
| オオカミ (亜種ニホンオオカミ) (イヌ科) | EX |
| ニホンカワウソ (イタチ科) | EX |
| 絶滅危惧I類 (CR+EN) | |
| ノレンコウモリ (ヒナコウモリ科) | VU |
| モリアブラコウモリ (ヒナコウモリ科) | VU |
| 絶滅危惧II類 (VU) | |
| カグヤコウモリ (ヒナコウモリ科) | - |
| ヒメホオヒゲコウモリ (ヒナコウモリ科) | - |
| クロホオヒゲコウモリ (ヒナコウモリ科) | VU |
| ヤマコウモリ (ヒナコウモリ科) | VU |
| 準絶滅危惧種 (NT) | |
| ヤマネ (ヤマネ科) | - |
| カワネズミ (トガリネズミ科) | - |
| ミズラモグラ (モグラ科) | NT |
| テングコウモリ (ヒナコウモリ科) | - |
| ニホンウサギコウモリ (ヒナコウモリ科) | - |
| オコジョ (イタチ科) | NT |
| 情報不足 (DD) | |
| シントウトガリネズミ (トガリネズミ科) | - |
| チチブコウモリ (ヒナコウモリ科) | LP |
| トド (アシカ科) | NT |
| ラッコ (イタチ科) | CR |
| コククジラ (コククジラ科) | 評価対象外 |
| ネズミイルカ (ネズミイルカ科) | 評価対象外 |
| 絶滅のおそれのある地域個体群 (LP) | |
| ニホンザル (金華山島のニホンザル) (オナガザル科) | LP |
| ヒナコウモリ (東松島市のヒナコウモリ) (ヒナコウモリ科) | - |
| コビレゴンドウ (タッパナガ) (マイルカ科) | 評価対象外 |
| スナメリ (仙台湾-東京湾系群) (ネズミイルカ科) | 評価対象外 |
| 要注目種 | |
| カヤネズミ (ネズミ科) | - |
| ニホンカモシカ (ウシ科) | - |
| 4 鳥類 | |
| 和名(科名) | 環境省2020 |
| 絶滅危惧I類 (CR+EN) | |
| ウズラ (キジ科) | VU |
| ヒクイナ (クイナ科) | NT |
| ヘラシギ (シギ科) | CR |
| ウトウ (ウミスズメ科) | - |
| クロコシジロウミツバメ (ウミツバメ科) | CR |
| オオヨシゴイ (サギ科) | CR |
| イヌワシ (タカ科) | EN |
| チゴモズ (モズ科) | CR |
| アカモズ (モズ科) | EN |
| コシアカツバメ (ツバメ科) | - |
| イワヒバリ (イワヒバリ科) | - |
| 絶滅危惧II類 (VU) | |
| コクガン (カモ科) | VU |
| 亜種ヒシクイ (カモ科) | VU |
| カリガネ (カモ科) | EN |
| ヨタカ (ヨタカ科) | NT |
| イカルチドリ (チドリ科) | - |
| オオジシギ (シギ科) | NT |
| コアジサシ (カモ科) | VU |

| | |
|----------------------------|----------------|
| ケイマフリ (ウミスズメ科) | VU |
| ヒメクロウミツバメ (ウミツバメ科) | VU |
| ミゾゴイ (サギ科) | VU |
| ハチクマ (タカ科) | NT |
| クマタカ (タカ科) | EN |
| オオワシ (タカ科) | VU |
| オジロワシ (タカ科) | VU |
| サシバ (タカ科) | VU |
| アオバズク (フクロウ科) | - |
| オオセッカ (センニュウ科) | EN |
| コジュリン (ホオジロ科) | VU |
| 準絶滅危惧種 (NT) | |
| シジュウカラガン (カモ科) | CR |
| 亜種オオヒシクイ (カモ科) | NT |
| ハリオアマツバメ (アマツバメ科) | - |
| クイナ (クイナ科) | - |
| ケリ (チドリ科) | DD |
| シロチドリ (チドリ科) | VU |
| ホウロクシギ (シギ科) | VU |
| オオソリハシシギ (シギ科) | VU |
| オグロシギ (シギ科) | - |
| ハマシギ (シギ科) | NT |
| ツルシギ (シギ科) | VU |
| カンムリウミスズメ (ウミスズメ科) | VU |
| アホウドリ (アホウドリ科) | VU |
| サンカノゴイ (サギ科) | EN |
| ヨシゴイ (サギ科) | NT |
| ゴイサギ (サギ科) | - |
| コサギ (サギ科) | - |
| カラシラサギ (サギ科) | NT |
| ハイタカ (タカ科) | NT |
| オオタカ (タカ科) | NT |
| チュウヒ (タカ科) | EN |
| オオコノハズク (フクロウ科) | - |
| トラフズク (フクロウ科) | - |
| コミミズク (フクロウ科) | - |
| アカショウビン (カワセミ科) | - |
| ヤマセミ (カワセミ科) | - |
| チゴハヤブサ (ハヤブサ科) | - |
| コヨシキリ (ヨシキリ科) | - |
| カワガラス (カワガラス科) | - |
| ノジコ (ホオジロ科) | NT |
| 情報不足 (DD) | |
| シマクイナ (クイナ科) | EN |
| ヒメクイナ (クイナ科) | - |
| ツミ (タカ科) | - |
| コノハズク (フクロウ科) | - |
| 絶滅のおそれのある地域個体群 (LP) | |
| シノリガモ (カモ科) | - |
| 要注目種 | |
| ハクガン (カモ科) | CR |
| コシジロウミツバメ (ウミツバメ科) | - |
| 5 両生類・爬虫類 | |
| 和名(科名) | 環境省2020 |
| 絶滅危惧I類 (EN) | |
| アカウミガメ (ウミガメ科) | EN |
| 絶滅危惧II類 (VU) | |
| トノサマガエル (アカガエル科) | NT |
| 準絶滅危惧種 (NT) | |
| トウホクサンショウウオ (サンショウウオ科) | NT |
| キタオウシュウサンショウウオ (サンショウウオ科) | - |

| | |
|----------------------------|----------------|
| バンダイハコネサンショウウオ (サンショウウオ科) | NT |
| タゴガエル (アカガエル科) | - |
| ヤマアカガエル (アカガエル科) | - |
| ムカシツチガエル (アカガエル科) | - |
| トウキョウダルマガエル (アカガエル科) | NT |
| 情報不足 (DD) | |
| ニホンイシガメ (イシガメ科) | NT |
| ニホンスッポン (スッポン科) | DD |
| ヒガシニホントカゲ (トカゲ科) | - |
| タカチホヘビ (タカチホヘビ科) | - |
| シロマダラ (ナミヘビ科) | - |
| 絶滅のおそれのある地域個体群 (LP) | |
| クロサンショウウオ (サンショウウオ科) | NT |
| アカハライモリ (イモリ科) | NT |
| 6 汽水・淡水魚類 | |
| 和名(科名) | 環境省2020 |
| 絶滅危惧IA類 (CR) | |
| カワヤツメ (ヤツメウナギ科) | VU |
| アカヒレタビラ (コイ科) | EN |
| ゼニタナゴ (コイ科) | CR |
| シナイモツゴ (コイ科) | CR |
| ニホンイトヨ (トゲウオ科) | LP(本州) |
| カンキョウカジカ (カジカ科) | LP(東北・北陸地方) |
| 絶滅危惧IB類 (EN) | |
| キンブナ (コイ科) | VU |
| タナゴ (コイ科) | EN |
| エゾウグイ (コイ科) | LP(東北地方) |
| ハナカジカ (カジカ科) | LP(東北地方) |
| チクゼンハゼ (ハゼ科) | VU |
| エドハゼ (ハゼ科) | VU |
| 絶滅危惧II類 (VU) | |
| スナゴカマツカ (コイ科) | - |
| ワカサギ(通し回遊型) (キュウリウオ科) | - |
| クルマサヨリ (サヨリ科) | NT |
| ウツセミカジカ (カジカ科) | EN |
| マサゴハゼ (ハゼ科) | VU |
| ルリヨシノボリ (ハゼ科) | - |
| 準絶滅危惧種 (NT) | |
| キタスナヤツメ (ヤツメウナギ科) | VU |
| ミナミスナヤツメ (ヤツメウナギ科) | VU |
| ニホンウナギ (ウナギ科) | EN |
| キタドジョウ (ドジョウ科) | DD |
| ホトケドジョウ (フクドジョウ科) | EN |
| ギバチ (ギギ科) | VU |
| シラウオ (シラウオ科) | - |
| サクラマス (通し回遊型) (サケ科) | NT |
| ミナミメダカ (メダカ科) | VU |
| ヒモハゼ (ハゼ科) | NT |
| シロウオ (ハゼ科) | VU |
| アベハゼ (ハゼ科) | - |
| ジュズカケハゼ (ハゼ科) | NT |
| 情報不足 (DD) | |
| クダリボウズギス (テンジクダイ科) | - |
| ボウズハゼ (ハゼ科) | - |
| ヘビハゼ (ハゼ科) | DD |
| 要注目種 | |
| テツギヨ (コイ科) | - |
| テングヨウジ (ヨウジウオ科) | - |
| オオクチュゴイ (ユゴイ科) | - |
| クロホシマンジュウダイ (クロホシマンジュウダイ科) | - |

| 7 昆虫類 | | |
|------------------------|---------|--|
| 和名(科名) | 環境省2020 | |
| 絶滅(EX) | | |
| メガネサナエ(サナエトンボ科) | VU | |
| オオキトンボ(トンボ科) | EN | |
| ベッコウトンボ(トンボ科) | CR | |
| クロシジミ(シジミチョウ科) | EN | |
| ミヤマシジミ(シジミチョウ科) | EN | |
| オオウラギンヒョウモン(タテハチョウ科) | CR | |
| 絶滅危惧I類(CR+EN) | | |
| コバネアオイトトンボ(アオイトトンボ科) | EN | |
| ゲンバイトンボ(モノサシトンボ科) | NT | |
| オオモノサシトンボ(モノサシトンボ科) | EN | |
| カラカネイトンボ(イトトンボ科) | NT | |
| オオセシイトンボ(イトトンボ科) | EN | |
| ヒヌマイトトンボ(イトトンボ科) | EN | |
| ルリイトトンボ(イトトンボ科) | - | |
| ナゴヤサナエ(サナエトンボ科) | VU | |
| ハネビロエゾトンボ(エゾトンボ科) | VU | |
| ハマスズ(ヒバリモドキ科) | - | |
| カワラバツ(バツ科) | - | |
| スナヨコバイ(ヨコバイ科) | NT | |
| タガメ(コオイムシ科) | VU | |
| オオウスバカゲロウ(ウスバカゲロウ科) | - | |
| ツノトンボ(ツノトンボ科) | - | |
| カワラハシヨウ(オサムシ科) | EN | |
| マークオサムシ(オサムシ科) | VU | |
| オオキバナギズギワゴミムシ(オサムシ科) | VU | |
| ヨツボシカミキリ(カミキリムシ科) | EN | |
| クロガネネクイハムシ(ハムシ科) | - | |
| クスジクモバチ(クモバチ科) | - | |
| ニッポンハナダカバチ(ギングチバチ科) | VU | |
| コウノスジガバチモドキ(ギングチバチ科) | - | |
| クスジツチスガリ(ギングチバチ科) | - | |
| ホソメンハナバチ(ムカシハナバチ科) | - | |
| ノウメンハナバチ(ムカシハナバチ科) | - | |
| アオスジハナバチ(コハナバチ科) | - | |
| トモンハナバチ(ハキリバチ科) | - | |
| チャマダラセセリ(セセリチョウ科) | EN | |
| ヒメシロチョウ(シロチョウ科) | EN | |
| ウラジロミドリシジミ(シジミチョウ科) | - | |
| ギンボシヒョウモン本州亜種(タテハチョウ科) | - | |
| ヒロバカレハ(カレハガ科) | VU | |
| ギンボシスズメ(スズメガ科) | - | |
| ヒメスズメ(スズメガ科) | NT | |
| ウスジロドクガ(ドクガ科) | NT | |
| ギンモンセダカモクメ(ヤガ科) | NT | |
| オガサワラヒゲヨトウ(ヤガ科) | EN | |
| 絶滅危惧II類(VU) | | |
| カトリヤンマ(ヤンマ科) | - | |
| ヒメサナエ(サナエトンボ科) | - | |
| ヒメアカネ(トンボ科) | - | |
| ハッチョウトンボ(トンボ科) | - | |
| オオゴキブリ(オオゴキブリ科) | - | |
| ヤマトマダラバツ(バツ科) | - | |
| コバンムシ(コバンムシ科) | EN | |
| キバネツノトンボ(ツノトンボ科) | - | |
| エゾゲンゴロウモドキ(ゲンゴロウ科) | VU | |
| オオイチモンジシマゲンゴロウ(ゲンゴロウ科) | EN | |
| シマケシゲンゴロウ(ゲンゴロウ科) | - | |
| ハマベミズギワゴミムシ(オサムシ科) | - | |
| キバナガミズギワゴミムシ(オサムシ科) | - | |
| ツヤキベリアオゴミムシ(オサムシ科) | VU | |

| | | |
|---------------------------|----|--|
| アオホソゴミムシ(オサムシ科) | - | |
| カツオマルドロンシ(マルドロンシ科) | - | |
| ダイコクコガネ(コガネムシ科) | VU | |
| クロヒラタシデムシ(ハネカクシ科) | - | |
| ホネゴミムシダマシ(ゴミムシダマシ科) | - | |
| コホネゴミムシダマシ(ゴミムシダマシ科) | - | |
| シラフヒョウタンゾウムシ(ゾウムシ科) | - | |
| クロツヤハマベゾウムシ(ゾウムシ科) | - | |
| ヤマトキモンハナカミキリ(カミキリムシ科) | - | |
| フタスジカタビロハナカミキリ(カミキリムシ科) | - | |
| サドチビアメイロカミキリ(カミキリムシ科) | - | |
| ヒメビロウドカミキリ(カミキリムシ科) | NT | |
| シラハタミズクサハムシ(ハムシ科) | - | |
| クロスジカメノコハムシ(ハムシ科) | - | |
| タグチホソヒラタハムシ(ハムシ科) | - | |
| オオセイボウ(セイボウ科) | DD | |
| ニトベギングチ(ギングチバチ科) | DD | |
| ミヤギノヨコバイバチ(ギングチバチ科) | - | |
| マイマイツツハナバチ(ハキリバチ科) | DD | |
| キヌゲハキリバチ(ハキリバチ科) | - | |
| クズハキリバチ(ハキリバチ科) | DD | |
| ホシチャバナセセリ(セセリチョウ科) | EN | |
| ヘリグロチャバナセセリ(セセリチョウ科) | - | |
| ハヤシミドリシジミ(シジミチョウ科) | - | |
| クロミドリシジミ(シジミチョウ科) | - | |
| キマダラモドキ(タテハチョウ科) | NT | |
| 準絶滅危惧種(NT) | | |
| ネアカヨシヤンマ(ヤンマ科) | NT | |
| マダラヤンマ(ヤンマ科) | NT | |
| エゾトンボ(エゾトンボ科) | - | |
| キイロヤマトンボ(ヤマトンボ科) | NT | |
| キトンボ(トンボ科) | - | |
| カスミササキ(キリギリス科) | - | |
| コオイムシ(コオイムシ科) | NT | |
| ホッケミズムシ(ミズムシ科) | NT | |
| キイロマツモムシ(マツモムシ科) | - | |
| クロマダラナガカメムシ(クロマダラナガカメムシ科) | - | |
| シロヘリツチカメムシ(ツチカメムシ科) | NT | |
| ヒウラカメムシ(カメムシ科) | - | |
| ゲンゴロウ(ゲンゴロウ科) | VU | |
| メススジゲンゴロウ(ゲンゴロウ科) | - | |
| ルイスツブゲンゴロウ(ゲンゴロウ科) | VU | |
| ホソハンミョウ(オサムシ科) | VU | |
| ナミハンミョウ(オサムシ科) | - | |
| ヒメクロオサムシ(オサムシ科) | - | |
| アカガネオサムシ(オサムシ科) | VU | |
| セアカオサムシ(オサムシ科) | NT | |
| オオハンミョウモドキ(オサムシ科) | - | |
| ヒョウタンゴミムシ(オサムシ科) | - | |
| アオバナホソクビゴミムシ(ゴミムシ科) | - | |
| チビアオゴミムシ(オサムシ科) | EN | |
| エチゴトクリゴミムシ(オサムシ科) | NT | |
| クロサワツブミズムシ(ツブミズムシ科) | - | |
| ヤマトタマムシ(タマムシ科) | - | |
| ケスジドロンシ(ヒメドロンシ科) | VU | |
| スナサビキコリ(コメツキムシ科) | - | |
| ハヤチネベニコメツキ(コメツキムシ科) | - | |
| ミヤマヒサゴコメツキ(コメツキムシ科) | - | |
| スジグロボタル(ホタル科) | - | |
| ヒメボタル(ホタル科) | - | |
| ゲンジボタル(ホタル科) | - | |
| コブナシコブスジコガネ(コブスジコガネ科) | - | |

| | | |
|---------------------------|----|--|
| アイヌコブスジコガネ(コブスジコガネ科) | - | |
| オオクワガタ(クワガタムシ科) | VU | |
| ヤマトケシマグソコガネ(コガネムシ科) | - | |
| アカマダラハナムグリ(コガネムシ科) | DD | |
| アカマダラセンチコガネ(アカマダラセンチコガネ科) | - | |
| ムラサキオオツチハンミョウ(ツチハンミョウ科) | - | |
| ミスジナガクチキ(ナガクチキムシ科) | - | |
| ルリナガクチキ(ナガクチキムシ科) | - | |
| ムネアカナガクチキ(ナガクチキムシ科) | - | |
| アイヌテントウ(テントウムシ科) | - | |
| ハマベゾウムシ(ゾウムシ科) | - | |
| トビイロヒョウタンゾウムシ(ゾウムシ科) | - | |
| シラクモゴボウゾウムシ(ゾウムシ科) | - | |
| ジャコウホソハナカミキリ(カミキリムシ科) | - | |
| アメイロカミキリ(カミキリムシ科) | - | |
| トラフホソバナカミキリ(カミキリムシ科) | - | |
| コウホネネクイハムシ(ハムシ科) | - | |
| アカガネネクイハムシ(ハムシ科) | NT | |
| キンイロネクイハムシ(ハムシ科) | NT | |
| ベニカメノコハムシ(ハムシ科) | - | |
| オオルリハムシ(ハムシ科) | NT | |
| ホソシロフクモバチ(クモバチ科) | - | |
| ハイロクモバチ(クモバチ科) | - | |
| アカゴシクモバチ(クモバチ科) | - | |
| オオモンツチバチ(ツチバチ科) | - | |
| ヤマトスナハキバチ(ギングチバチ科) | DD | |
| アシジロヨコバイバチ(ギングチバチ科) | - | |
| エチゼンヒメハナバチ(ヒメハナバチ科) | - | |
| ヒメギフチヨウ本州亜種(アゲハチョウ科) | NT | |
| ムモンアカシジミ(シジミチョウ科) | - | |
| ミヤマカラスシジミ(シジミチョウ科) | - | |
| ツマジロウラジャノメ本州亜種(タテハチョウ科) | - | |
| フタスジゲンエダシヤク(シヤクガ科) | - | |
| フタマタシロナミシヤク(シヤクガ科) | - | |
| クワヤマエグリシヤチホコ(シヤチホコガ科) | NT | |
| フタホシドクガ(ドクガ科) | - | |
| キバラヒトリ(ヒトリガ科) | - | |
| トガリアツバ(ヤガ科) | - | |
| コシロシタバ(ヤガ科) | NT | |
| ヒマヤハガタヨトウ(ヤガ科) | - | |
| 情報不足(DD) | | |
| ニンポーイナゴ(バツ科) | - | |
| カスリウスバカゲロウ(ウスバカゲロウ科) | - | |
| マダラコガシラミズムシ(コガシラミズムシ科) | VU | |
| エゾヒメゲンゴロウ(ゲンゴロウ科) | - | |
| マルコガタノゲンゴロウ(ゲンゴロウ科) | CR | |
| マダラケシミズギワゴミムシ(オサムシ科) | - | |
| ギョウトクコムズギワゴミムシ(オサムシ科) | VU | |
| アリスアトキリゴミムシ(オサムシ科) | DD | |
| アブクマナガゴミムシ(オサムシ科) | - | |
| シラハタキバナガゴミムシ(オサムシ科) | - | |
| アオナガタマムシ(タマムシ科) | - | |
| スギウラナガタマムシ(タマムシ科) | - | |
| タテスジヒメヒゲナガハナノミ(ナガハナノミ科) | - | |
| シラホシダエンマルトゲムシ(ダエンマルトゲムシ科) | - | |
| アヤスジミゾドロンシ(ヒメドロンシ科) | EN | |
| チビヒサゴコメツキ(コメツキムシ科) | - | |
| ミヤマコガネヒラタコメツキ(コメツキムシ科) | - | |
| ツヤカタモンチビコメツキ(コメツキムシ科) | - | |
| カワイヒラアシコメツキ(コメツキムシ科) | - | |
| オオマドボタル(ホタル科) | - | |

| | |
|---------------------------|----|
| エンマハバビロガムシ(ガムシ科) | - |
| ネプトクワガタ(クワガタムシ科) | - |
| コリクワガタ(クワガタムシ科) | - |
| クチキマグソコガネ(コガネムシ科) | - |
| ナガスネエンマコガネ(コガネムシ科) | - |
| シナノエンマコガネ(コガネムシ科) | - |
| アラメエンマコガネ(コガネムシ科) | NT |
| ツガルホソシデムシ(オサシデムシ科) | - |
| Catops houyai(タマキノコムシ科) | - |
| アミメナガシンクイ(アミメナガシンクイ科) | - |
| オオメツツシンクイ(ツツシンクイ科) | - |
| ミヤマツチハンミョウ(ツチハンミョウ科) | - |
| ムネモンコナガクチキ(キノコムシダマシ科) | - |
| ヒメカツオガタナガクチキ(キノコムシダマシ科) | - |
| クロズハマベゴミムシダマシ(ゴミムシダマシ科) | - |
| ヒガシツヤヒサゴゴミムシダマシ(ゴミムシダマシ科) | - |
| クロスジチャイロテントウ(テントウムシ科) | - |
| クロホシチビオオキノコ(オオキノコムシ科) | - |
| オオメナガヒゲナガゾウムシ(ヒゲナガゾウムシ科) | - |
| エゴヒゲナガゾウムシ(ヒゲナガゾウムシ科) | - |
| ヒゲトハナカミキリ(カミキリムシ科) | - |
| クロマダラカメノコハムシ(ハムシ科) | - |
| クチビロハムシドロバチ(スズメバチ科) | - |
| クロケラトリバチ(ギングチバチ科) | - |
| キアシマエダテバチ(ギングチバチ科) | - |
| オオゴマシジミ(シジミチョウ科) | NT |
| ウラジャノメ本州亜種(タテハチョウ科) | - |
| フトスジエダシヤク(シヤクガ科) | - |
| ナカシロオビエダシヤク(シヤクガ科) | - |
| ミヤケカレハ(カレハガ科) | - |
| マツクロスズメ本州亜種(スズメガ科) | - |
| イブキスズメ(スズメガ科) | - |
| タカオキリガ(ヤガ科) | - |
| クロヤガ(ヤガ科) | - |
| シロオビハイイロヤガ(ヤガ科) | - |
| ヤマトウスチャヤガ(ヤガ科) | - |
| キミミヤガ(ヤガ科) | - |
| イタクラキノメイガ(ツトガ科) | - |

| 8 海岸地域の無脊椎動物類 | | |
|---------------------------|---------|--|
| 和名(科名) | 環境省2020 | |
| 絶滅危惧I類(CR+EN) | | |
| イボキサゴ(ニシキウズ科) | NT | |
| イボウミナ(ウミナナ科) | VU | |
| フトヘナタリ(キバウミナナ科) | NT | |
| カワアイ(キバウミナナ科) | VU | |
| カワグチツボ(ワカウラツボ科) | NT | |
| サザナミツボ(ワカウラツボ科) | NT | |
| クビレガイモドキ(イツマデガイ科) | NT | |
| ウネムシロ(オリイレヨフバイ科) | CR+EN | |
| ナギサノシタタリ(オカミミガイ科) | - | |
| サンリクドロソコエビ(ユンボソコエビ科) | DD* | |
| ハマガニ(モクズガニ科) | NT* | |
| 絶滅危惧II類(VU) | | |
| ツボミ(コガモガイ科) | NT | |
| ヒナユキスズメ(ユキスズメ科) | NT | |
| ヤマトクビレガイ(クビレガイ科) | - | |
| ヨシダカワザンシヨウ(カワザンシヨウ科) | NT | |
| ヒナタムシヤドリカワザンシヨウ(カワザンシヨウ科) | NT | |
| ツバカワザンシヨウ(カワザンシヨウ科) | NT | |

| マツシマカワザンショウ (カワザンショウ科) | VU |
|--------------------------|-----------|
| シラギク (イソコハクガイ科) | NT |
| エドガワミズゴマツボ (ミズゴマツボ科) | NT |
| ムシロガイ (オリイレヨフバイ科) | NT |
| カミスジカイコガイダマシ (ブドウガイ科) | VU |
| シゲヤスイトカケギリ (トウガタガイ科) | NT |
| ウスコミミガイ (オカミミガイ科) | NT |
| スジホシムシモドキヤドリガイ (チリハギ科) | NT |
| ハマグリ (マルスダレガイ科) | VU |
| ツバサゴカイ (ツバサゴカイ科) | EN* |
| スジホシムシ (スジホシムシ科) | NT* |
| スジホシムシモドキ (スジホシムシモドキ科) | NT* |
| ウミカニムシ (コケカニムシ科) | - |
| ヒメアカイソガニ (モクズガニ科) | LP* (小笠原) |
| トリウミアカイソモドキ (モクズガニ科) | NT* |
| スナガニ (スナガニ科) | - |
| オサガニ (オサガニ科) | NT* |
| ムツハアリアケガニ (ムツハアリアケガニ科) | NT* |
| 準絶滅危惧種 (NT) | |
| ホウザワイソギンチャク (-) | - |
| オロチヒモムシ (リネウス科) | - |
| ウミニナ (ウミニナ科) | NT |
| クロタマキビ (タマキビ科) | - |
| クリイロカワザンショウ (カワザンショウ科) | NT |
| オオウスイロヘソカドガイ (カワザンショウ科) | - |
| コメツブガイ (クダタマガイ科) | - |
| マツシマコメツブ (クダタマガイ科) | - |
| ヤミヨキセワタ (カノコキセワタガイ科) | VU |
| ヨコイトカケギリ (トウガタガイ科) | - |
| ガタツキ (チリハギ科) | DD |
| マテガイ (マテガイ科) | - |
| ユウシオガイ (ニッコウガイ科) | NT |
| サビシラトリ (ニッコウガイ科) | NT |
| オオノガイ (オオノガイ科) | NT |
| ニオガイ (ニオガイ科) | - |
| オニアサリ (マルスダレガイ科) | - |
| オイワケゴカイ (ゴカイ科) | - |
| ジャムシ (ゴカイ科) | - |
| イトメ (ゴカイ科) | NT* |
| ノトマスタス属の一種 (イトゴカイ科) | - |
| ユムシ (ユムシ科) | NT* |
| ハマダンゴムシ (ハマダンゴムシ科) | - |
| バルスアナジャコ (アナジャコ科) | - |
| ヨモギホンヤドカリ (ホンヤドカリ科) | NT* |
| マメコブシガニ (コブシガニ科) | - |
| カネココブシガニ (コブシガニ科) | DD |
| スネナガイソガニ (モクズガニ科) | - |
| アカイソガニ (モクズガニ科) | - |
| アカテガニ (ベンケイガニ科) | - |
| カクベンケイガニ (ベンケイガニ科) | - |
| アリアケモドキ (ムツハアリアケガニ科) | - |
| ヒモイカリナマコ (イカリナマコ科) | - |
| 情報不足 (DD) | |
| アマガイ (アマオブネ科) | - |
| イシマキ (アマオブネ科) | - |
| マツカワウラカワザンショウ (カワザンショウ科) | VU |
| マンゴクウラカワザンショウ (カワザンショウ科) | VU |
| マルテンスマツムシ (タモトガイ科) | CR+EN |
| アカニシ (アッキガイ科) | - |
| イリエゴウナ (ガクパンゴウナ科) | VU |
| キタノカラマツガイ (コウダカカラマツ科) | NT |
| ヒガタヨコイトカケギリ (トウガタガイ科) | DD |
| ヌカルミクチキレ (トウガタガイ科) | NT |

| | |
|-----------------------|-----|
| シコロエガイ (シコロエガイ科) | - |
| マゴコロガイ (チリハギ科) | NT |
| サクラガイ (ニッコウガイ科) | NT |
| ネムグリガイ (フナクイムシ科) | - |
| カンテンフサゴカイ (フサゴカイ科) | - |
| ニホンウミイサゴムシ (ウミイサゴムシ科) | - |
| モリノカマカ (カマカヨコエビ科) | - |
| ヒヌマヨコエビ (キタヨコエビ科) | - |
| ベンケイガニ (ベンケイガニ科) | NT* |
| チビイトマキヒトデ (イトマキヒトデ科) | - |
| ウチワイカリナマコ (イカリナマコ科) | - |
| シロナマコ (カウディナ科) | - |

〈注〉環境省2020で*印のあるものは、環境省海洋生物レッドリスト2017におけるカテゴリー

| <div><div></div>9 淡水産貝類</div> | |
|---|---------|
| 和名(科名) | 環境省2020 |
| 絶滅危惧I類 (CR+EN) | |
| メンカラスガイ (イシガイ科) | VU |
| カワシンジュガイ (カワシンジュガイ科) | EN |
| マメタニシ (エゾマメタニシ科) | CR |
| 絶滅危惧II類 (VU) | |
| ヒガシタブネドブガイ (イシガイ科) | - |
| マツカサガイ北東本州固有種 (イシガイ科) | NT |
| ミズゴマツボ (ミズゴマツボ科) | VU |
| 準絶滅危惧種 (NT) | |
| ヌマガイ (イシガイ科) | - |
| チリメンカワニナ (カワニナ科) | - |
| 情報不足 (DD) | |
| マジジミ (シジミ科) | VU |
| ヒメヒラマキミズマイマイ (ヒラマキガイ科) | EN |
| ミズコハクガイ (ヒラマキガイ科) | VU |

VI 索引

和名索引

分類：(1)植物、(2)哺乳類、(3)鳥類、(4)両生類・爬虫類(両生爬虫)、(5)汽水・淡水魚類(魚類)、(6)昆虫類、(7)海岸地域の無脊椎動物類(海岸動物)、(8)淡水産貝類(淡水貝類)

| 和名 | 頁 | 分類 |
|---------------|-----|-----|
| Catops houyai | 382 | 昆虫類 |

ア

| | | |
|---------------------|-----|------|
| アイアシ | 140 | 植物 |
| アイナエ | 212 | 植物 |
| アイヌコブスジコガネ | 378 | 昆虫類 |
| アイヌテントウ | 387 | 昆虫類 |
| アオキラン | 98 | 植物 |
| アオスジハナバチ | 403 | 昆虫類 |
| アオナガタマムシ | 371 | 昆虫類 |
| アオバズク | 296 | 鳥類 |
| アオバネホソクビゴミムシ | 368 | 昆虫類 |
| アオフタバラン | 107 | 植物 |
| アオホソゴミムシ | 369 | 昆虫類 |
| アオホラゴケ | 53 | 植物 |
| アオヤギバナ | 250 | 植物 |
| アカイソガニ | 453 | 海岸動物 |
| アカウミガメ | 310 | 両生爬虫 |
| アカガネオサムシ | 364 | 昆虫類 |
| アカガネネクイハムシ | 394 | 昆虫類 |
| アカゴシクモバチ | 398 | 昆虫類 |
| アカショウビン | 298 | 鳥類 |
| アカテガニ | 453 | 海岸動物 |
| アカニシ | 436 | 海岸動物 |
| アカネムグラ | 209 | 植物 |
| アカハライモリ | 308 | 両生爬虫 |
| アカヒレタビラ | 321 | 魚類 |
| アカマダラセンチコガネ | 381 | 昆虫類 |
| アカマダラハナムグリ | 381 | 昆虫類 |
| アカモズ | 299 | 鳥類 |
| アキウネマガリ | 143 | 植物 |
| アキタスズムシソウ | 105 | 植物 |
| アギナシ | 77 | 植物 |
| アキノタムラソウ | 225 | 植物 |
| アキノハハコグサ | 248 | 植物 |
| アサザ | 238 | 植物 |
| アシジロヨコバイバチ | 401 | 昆虫類 |
| アシボソアカバナ | 184 | 植物 |
| アズマギク | 244 | 植物 |
| アズマシロカネソウ | 150 | 植物 |
| アズマツメクサ | 158 | 植物 |
| アズマホシクサ (ミヤマヒナホシクサ) | 122 | 植物 |
| アゼオトギリ | 181 | 植物 |
| アッケシソウ | 200 | 植物 |
| アツモリソウ | 96 | 植物 |
| アブクマトウヒレン | 250 | 植物 |
| アブクマトラノオ | 191 | 植物 |
| アブクマナガゴミムシ | 370 | 昆虫類 |
| アブノメ | 217 | 植物 |
| アベハゼ | 329 | 魚類 |
| アホウドリ | 289 | 鳥類 |

| 和名 | 頁 | 分類 |
|-------------|-----|------|
| アマガイ | 428 | 海岸動物 |
| アマナ | 90 | 植物 |
| アミメナガシンクイ | 383 | 昆虫類 |
| アメイロカミキリ | 392 | 昆虫類 |
| アヤスジミゾドロムシ | 372 | 昆虫類 |
| アヤメ | 115 | 植物 |
| アラカシ | 175 | 植物 |
| アラメエンマコガネ | 380 | 昆虫類 |
| アリアケモドキ | 455 | 海岸動物 |
| アリスアトキリゴミムシ | 369 | 昆虫類 |

イ

| | | |
|-----------|-----|------|
| イイヌマムカゴ | 109 | 植物 |
| イカルチドリ | 285 | 鳥類 |
| イシマキ | 429 | 海岸動物 |
| イセウキヤガラ | 123 | 植物 |
| イソツツジ | 206 | 植物 |
| イタクラキノメイガ | 419 | 昆虫類 |
| イチョウウキゴケ | 36 | 植物 |
| イチヨウラン | 96 | 植物 |
| イチリンソウ | 148 | 植物 |
| イトイバラモ | 81 | 植物 |
| イトキンスゲ | 125 | 植物 |
| イトクズモ | 88 | 植物 |
| イトトリゲモ | 79 | 植物 |
| イトハコベ | 199 | 植物 |
| イトメ | 446 | 海岸動物 |
| イトモ | 85 | 植物 |
| イヌアワ | 142 | 植物 |
| イヌセンブリ | 211 | 植物 |
| イヌタヌキモ | 232 | 植物 |
| イヌニガクサ | 227 | 植物 |
| イヌノフグリ | 219 | 植物 |
| イヌハギ | 163 | 植物 |
| イヌワシ | 293 | 鳥類 |
| イノデモドキ | 69 | 植物 |
| イノモトソウ | 57 | 植物 |
| イバラモ | 80 | 植物 |
| イブキスズメ | 413 | 昆虫類 |
| イボイボツノゴケ | 35 | 植物 |
| イボウミニナ | 429 | 海岸動物 |
| イボキサゴ | 428 | 海岸動物 |
| イヨカズラ | 213 | 植物 |
| イリエゴウナ | 437 | 海岸動物 |
| イワアカザ | 199 | 植物 |
| イワイヌワラビ | 62 | 植物 |
| イワインチン | 241 | 植物 |
| イワウメ | 204 | 植物 |
| イワウメヅル | 176 | 植物 |
| イワオウギ | 162 | 植物 |
| イワオオイタチシダ | 69 | 植物 |

| 和名 | 頁 | 分類 |
|----------|-----|----|
| イワオモダカ | 71 | 植物 |
| イワカゲワラビ | 68 | 植物 |
| イワカラマツ | 155 | 植物 |
| イワセントウソウ | 254 | 植物 |
| イワタバコ | 217 | 植物 |
| イワヒゲ | 205 | 植物 |
| イワヒバリ | 301 | 鳥類 |

ウ

| | | |
|------------|-----|------|
| ウキウキゴケ | 35 | 植物 |
| ウキガヤ | 138 | 植物 |
| ウキミガヤツリ | 132 | 植物 |
| ウゴアザミ | 243 | 植物 |
| ウサギシダ | 58 | 植物 |
| ウシクサ | 142 | 植物 |
| ウスイロスゲ | 129 | 植物 |
| ウスギモクゲンジ | 185 | 植物 |
| ウスゲヤナギラン | 184 | 植物 |
| ウスコミミガイ | 440 | 海岸動物 |
| ウスジロドクガ | 414 | 昆虫類 |
| ウスヒメワラビ | 58 | 植物 |
| ウスユキハナヒリノキ | 206 | 植物 |
| ウズラ | 282 | 鳥類 |
| ウチョウラン | 102 | 植物 |
| ウチワイカリナマコ | 456 | 海岸動物 |
| ウツセミカジカ | 327 | 魚類 |
| ウトウ | 289 | 鳥類 |
| ウネムシロ | 436 | 海岸動物 |
| ウマノスズクサ | 72 | 植物 |
| ウミカニムシ | 448 | 海岸動物 |
| ウミニナ | 429 | 海岸動物 |
| ウミミドリ | 202 | 植物 |
| ウラジャノメ本州亜種 | 410 | 昆虫類 |
| ウラジロ | 54 | 植物 |
| ウラジロミドリシジミ | 407 | 昆虫類 |
| ウリカワ | 77 | 植物 |

エ

| | | |
|--------------------|-----|-----|
| エキサイゼリ | 252 | 植物 |
| エゴヒゲナガゾウムシ | 388 | 昆虫類 |
| エゾイブキトラノオ | 192 | 植物 |
| エゾウダイ | 322 | 魚類 |
| エゾキイチゴ(ミヤマウラジロイチゴ) | 173 | 植物 |
| エゾゲンゴロウモドキ | 362 | 昆虫類 |
| エゾスズラン(アオスズラン) | 97 | 植物 |
| エゾツルキンバイ | 168 | 植物 |
| エゾデンダ | 70 | 植物 |
| エゾトンボ | 351 | 昆虫類 |
| エゾニガクサ | 227 | 植物 |
| エゾノコギリソウ | 238 | 植物 |
| エゾノシロバナシモツケ | 175 | 植物 |
| エゾノタウコギ | 240 | 植物 |
| エゾノタチツボスミレ | 179 | 植物 |
| エゾノチャルメルソウ | 158 | 植物 |
| エゾノヒルムシロ | 86 | 植物 |
| エゾノミズタデ | 193 | 植物 |
| エゾノミヤマエンレイソウ | 90 | 植物 |

| 和名 | 頁 | 分類 |
|-------------|-----|------|
| エゾノレンリソウ | 163 | 植物 |
| エゾハタザオ | 187 | 植物 |
| エゾヒメゲンゴロウ | 360 | 昆虫類 |
| エゾヒメヤバネゴケ | 37 | 植物 |
| エゾヒョウタンボク | 255 | 植物 |
| エゾホシクサ | 121 | 植物 |
| エゾミクリ | 119 | 植物 |
| エゾヤナギモ | 85 | 植物 |
| エゾヤハズゴケ | 36 | 植物 |
| エゾルリトラノオ | 219 | 植物 |
| エチゴキジムシロ | 171 | 植物 |
| エチゴツルキジムシロ | 171 | 植物 |
| エチゴトックリゴミムシ | 369 | 昆虫類 |
| エチゼンヒメハナバチ | 403 | 昆虫類 |
| エドガワミズゴマツボ | 435 | 海岸動物 |
| エドハゼ | 331 | 魚類 |
| エビネ | 92 | 植物 |
| エンシュウムヨウラン | 103 | 植物 |
| エンマハバビロガムシ | 377 | 昆虫類 |

オ

| | | |
|-----------------|-----|------|
| オイワケゴカイ | 445 | 海岸動物 |
| オオアブノメ | 218 | 植物 |
| オオアマモ | 83 | 植物 |
| オオイタチシダ | 67 | 植物 |
| オオイチモンジシマゲンゴロウ | 362 | 昆虫類 |
| オオイワカガミ | 204 | 植物 |
| オオウスイロヘソカドガイ | 433 | 海岸動物 |
| オオウスバカゲロウ | 359 | 昆虫類 |
| オオウラギンヒョウモン | 409 | 昆虫類 |
| オオカギイトゴケ | 47 | 植物 |
| オオカサゴケ | 44 | 植物 |
| オオカサモチ | 254 | 植物 |
| オオカミ(亜種ニホンオオカミ) | 270 | 哺乳類 |
| オオキジノオ | 55 | 植物 |
| オオキトンボ | 353 | 昆虫類 |
| オオキヌタソウ | 209 | 植物 |
| オオキバナガミズギワゴミムシ | 366 | 昆虫類 |
| オオクグ | 130 | 植物 |
| オオクチュゴイ | 326 | 魚類 |
| オオクワガタ | 378 | 昆虫類 |
| オオゴキブリ | 354 | 昆虫類 |
| オオコノハズク | 297 | 鳥類 |
| オオゴマシジミ | 408 | 昆虫類 |
| オオジシギ | 287 | 鳥類 |
| オオシバナ | 82 | 植物 |
| オオシロガヤツリ | 132 | 植物 |
| オオセイボウ | 397 | 昆虫類 |
| オオセスジイトトンボ | 348 | 昆虫類 |
| オオセッカ | 300 | 鳥類 |
| オオソリハシシギ | 286 | 鳥類 |
| オオタカ | 294 | 鳥類 |
| オオタカネバラ | 172 | 植物 |
| オオタヌキモ | 233 | 植物 |
| オオトリゲモ | 80 | 植物 |
| オオニガナ | 247 | 植物 |
| オオノガイ | 443 | 海岸動物 |

| 和名 | 頁 | 分類 |
|-----------------|-----|------|
| オオバグミ(マルバグミ) | 165 | 植物 |
| オオバノハチジョウシダ | 58 | 植物 |
| オオハンミョウモドキ | 365 | 昆虫類 |
| オオマドボタル | 376 | 昆虫類 |
| オオミクリ | 119 | 植物 |
| オオミズゴケ | 41 | 植物 |
| オオミズトンボ | 101 | 植物 |
| オオメツツシンクイ | 383 | 昆虫類 |
| オオメナガヒゲナガゾウムシ | 388 | 昆虫類 |
| オオモノサシトンボ | 347 | 昆虫類 |
| オオモンツチバチ | 398 | 昆虫類 |
| オオヤマオダマキ | 148 | 植物 |
| オオユリワサビ | 188 | 植物 |
| オオヨシゴイ | 291 | 鳥類 |
| オオルリハムシ | 396 | 昆虫類 |
| オオワシ | 295 | 鳥類 |
| オカオグルマ | 251 | 植物 |
| オガサワラヒゲヨトウ | 417 | 昆虫類 |
| オカタツナミソウ | 226 | 植物 |
| オキナグサ | 152 | 植物 |
| オキナスギゴケ | 41 | 植物 |
| オクエゾサイシン | 73 | 植物 |
| オクノフウリンウメモドキ | 235 | 植物 |
| オクヤマシダ | 65 | 植物 |
| オクヤマワラビ | 61 | 植物 |
| オグラノフサモ | 159 | 植物 |
| オグロシギ | 286 | 鳥類 |
| オコジョ(亜種ホンドオコジョ) | 271 | 哺乳類 |
| オサガニ | 454 | 海岸動物 |
| オサバグサ | 146 | 植物 |
| オシマオトギリ | 182 | 植物 |
| オジロワシ | 295 | 鳥類 |
| オナモミ | 251 | 植物 |
| オニアサリ | 444 | 海岸動物 |
| オニカナワラビ | 64 | 植物 |
| オニシバリ | 188 | 植物 |
| オニゼンマイ | 52 | 植物 |
| オニバス | 71 | 植物 |
| オニヒカゲワラビ | 64 | 植物 |
| オモエザサ | 143 | 植物 |
| オヤマソバ | 191 | 植物 |
| オロチヒモムシ | 427 | 海岸動物 |

カ

| | | |
|------------|-----|------|
| カイジンドウ | 220 | 植物 |
| ガガブタ | 238 | 植物 |
| カキツバタ | 115 | 植物 |
| カクベンケイガニ | 454 | 海岸動物 |
| カグヤコウモリ | 267 | 哺乳類 |
| カザグルマ | 149 | 植物 |
| カサゴケ | 44 | 植物 |
| カサゴケモドキ | 44 | 植物 |
| カシワバハグマ | 248 | 植物 |
| カスミササキリ | 354 | 昆虫類 |
| カスリウスバカゲロウ | 359 | 昆虫類 |
| ガタヅキ | 441 | 海岸動物 |
| カタヒバ | 50 | 植物 |

| 和名 | 頁 | 分類 |
|--------------|-----|------|
| カツオマルドロムシ | 377 | 昆虫類 |
| ガッサンチドリ | 111 | 植物 |
| カトリヤンマ | 349 | 昆虫類 |
| カネコブシガニ | 451 | 海岸動物 |
| カミカワスゲ | 130 | 植物 |
| カミスジカイコガイダマシ | 438 | 海岸動物 |
| カモメラン | 98 | 植物 |
| カヤネズミ | 265 | 哺乳類 |
| カヤラン | 113 | 植物 |
| カラカネイトトンボ | 348 | 昆虫類 |
| カラシラサギ | 292 | 鳥類 |
| カラスノゴマ | 186 | 植物 |
| カラフトアカバナ | 184 | 植物 |
| カラフトイチヤクソウ | 207 | 植物 |
| カラフトダイコンソウ | 170 | 植物 |
| カラフトドジョウツナギ | 139 | 植物 |
| カラフトニンジン | 253 | 植物 |
| カラマツ | 71 | 植物 |
| カリガネ | 281 | 鳥類 |
| カリガネソウ | 228 | 植物 |
| カリヤス | 139 | 植物 |
| カワアイ | 430 | 海岸動物 |
| カワイヒラアシコメツキ | 375 | 昆虫類 |
| カワガラス | 300 | 鳥類 |
| カワグチツボ | 434 | 海岸動物 |
| カワゴケ | 46 | 植物 |
| カワシンジュガイ | 462 | 淡水貝類 |
| カワヂシャ | 220 | 植物 |
| カワツルモ | 89 | 植物 |
| カワネズミ | 266 | 哺乳類 |
| カワヤツメ | 319 | 魚類 |
| カワラサイコ | 170 | 植物 |
| カワラニガナ | 246 | 植物 |
| カワラバッタ | 355 | 昆虫類 |
| カワラハハコ | 239 | 植物 |
| カワラハンミョウ | 363 | 昆虫類 |
| カンエンガヤツリ | 131 | 植物 |
| カンキョウカジカ | 327 | 魚類 |
| カンスゲ | 128 | 植物 |
| カンテンフサゴカイ | 447 | 海岸動物 |
| カンムリウミスズメ | 288 | 鳥類 |

キ

| | | |
|----------------|-----|------|
| キアシマエダテバチ | 401 | 昆虫類 |
| キイロマツモムシ | 357 | 昆虫類 |
| キイロヤマトンボ | 352 | 昆虫類 |
| キキョウ | 237 | 植物 |
| ククアザミ | 250 | 植物 |
| ククタニギク | 241 | 植物 |
| キケマン | 144 | 植物 |
| キスジクモバチ | 398 | 昆虫類 |
| キスジツチスガリ | 402 | 昆虫類 |
| キセワタ | 223 | 植物 |
| キタオウシュウサンショウウオ | 307 | 両生爬虫 |
| キタカミアザミ | 243 | 植物 |
| キタスナヤツメ | 319 | 魚類 |
| キダチノネズミガヤ | 140 | 植物 |

| 和名 | 頁 | 分類 |
|-----------------------|-----|------|
| キタドジョウ | 323 | 魚類 |
| キタノカラマツガイ | 438 | 海岸動物 |
| キトンボ | 352 | 昆虫類 |
| キヌゲハキリバチ | 404 | 昆虫類 |
| キヌシッポゴケモドキ | 42 | 植物 |
| ギバチ | 323 | 魚類 |
| キバナガミズギワゴミムシ | 367 | 昆虫類 |
| キバナノコマノツメ | 179 | 植物 |
| キバネツノトンボ | 360 | 昆虫類 |
| キバラヒトリ | 415 | 昆虫類 |
| キビノナワシロイチゴ(キビナワシロイチゴ) | 174 | 植物 |
| ギフベニシダ | 67 | 植物 |
| ギボウシラン | 104 | 植物 |
| キマダラモドキ | 410 | 昆虫類 |
| キミミヤガ | 418 | 昆虫類 |
| ギョウジャニンニク | 116 | 植物 |
| ギョウトクコミズギワゴミムシ | 367 | 昆虫類 |
| キヨスミイトゴケ | 47 | 植物 |
| キヨスミウツボ | 231 | 植物 |
| キヨスミヒメワラビ | 68 | 植物 |
| キンイロネクイハムシ | 394 | 昆虫類 |
| キンセイラン | 92 | 植物 |
| キンチャクスゲ | 127 | 植物 |
| キンブナ | 320 | 魚類 |
| ギンボシスズメ | 413 | 昆虫類 |
| ギンボシヒョウモン本州亜種 | 409 | 昆虫類 |
| ギンモンセダカモクメ | 416 | 昆虫類 |
| キンラン | 93 | 植物 |
| キンロパイ | 169 | 植物 |

ク

| | | |
|-------------|-----|------|
| クイナ | 283 | 鳥類 |
| クゲヌマラン | 94 | 植物 |
| クサアジサイ | 201 | 植物 |
| クサボケ | 168 | 植物 |
| クジュウツリスゲ | 126 | 植物 |
| クズハキリバチ | 404 | 昆虫類 |
| クダリボウズギス | 326 | 魚類 |
| クチキマゴソコガネ | 379 | 昆虫類 |
| クチビロハムシドロバチ | 399 | 昆虫類 |
| クビキレガイモドキ | 435 | 海岸動物 |
| クマガイソウ | 95 | 植物 |
| クマタカ | 293 | 鳥類 |
| クマツヅラ | 234 | 植物 |
| クマノゴケ | 42 | 植物 |
| クマノチョウジゴケ | 42 | 植物 |
| ク라마ゴケモドキ | 40 | 植物 |
| クワイロカワザンショウ | 431 | 海岸動物 |
| クリンソウ | 203 | 植物 |
| クリンユキフデ | 192 | 植物 |
| クルマバツクバネソウ | 89 | 植物 |
| クルメサヨリ | 326 | 魚類 |
| クログネネクイハムシ | 394 | 昆虫類 |
| クロカワゴケ | 45 | 植物 |
| クロケラトリバチ | 400 | 昆虫類 |
| クロコシジロウミツバメ | 290 | 鳥類 |
| クロサワツブミズムシ | 370 | 昆虫類 |

| 和名 | 頁 | 分類 |
|---------------|-----|------|
| クロサンショウウオ | 307 | 両生爬虫 |
| クロシジミ | 408 | 昆虫類 |
| クロスジカメノコハムシ | 395 | 昆虫類 |
| クロスジチャイロテントウ | 387 | 昆虫類 |
| クロズハマベゴミムシダマシ | 386 | 昆虫類 |
| クロタマキビ | 430 | 海岸動物 |
| クロツヤハマベゾウムシ | 390 | 昆虫類 |
| クロヒラタシデムシ | 382 | 昆虫類 |
| クロブシヒョウタンボク | 256 | 植物 |
| クロホオヒゲコウモリ | 268 | 哺乳類 |
| クロホシチビオオキノコ | 388 | 昆虫類 |
| クロホシマンジュウダイ | 331 | 魚類 |
| クロマダラカメノコハムシ | 396 | 昆虫類 |
| クロマダラナガカメムシ | 358 | 昆虫類 |
| クロマメノキ | 208 | 植物 |
| クロミドリシジミ | 407 | 昆虫類 |
| クロミノウグイスカグラ | 256 | 植物 |
| クロヤガ | 417 | 昆虫類 |
| クロヤツシロラン | 99 | 植物 |
| クワガタソウ | 219 | 植物 |
| クワヤマエグリシャチホコ | 414 | 昆虫類 |
| ダンバイトンボ | 347 | 昆虫類 |

ケ

| | | |
|---------|-----|-----|
| ケイマフリ | 288 | 鳥類 |
| ケスジドロムシ | 373 | 昆虫類 |
| ケヤブハギ | 162 | 植物 |
| ケリ | 284 | 鳥類 |
| ゲンゴロウ | 361 | 昆虫類 |
| ゲンジボタル | 376 | 昆虫類 |

コ

| | | |
|-------------|-----|-----|
| コアジサシ | 288 | 鳥類 |
| コアツモリソウ | 95 | 植物 |
| コアナミズゴケ | 40 | 植物 |
| コアニチドリ | 91 | 植物 |
| コアマモ | 84 | 植物 |
| ゴイサギ | 292 | 鳥類 |
| コイヌガラシ | 189 | 植物 |
| コウガイモ | 81 | 植物 |
| コウノスジガバチモドキ | 400 | 昆虫類 |
| コウホネネクイハムシ | 393 | 昆虫類 |
| コウヤボウキ | 248 | 植物 |
| コウライイチイゴケ | 48 | 植物 |
| コウライイヌワラビ | 63 | 植物 |
| コオイムシ | 356 | 昆虫類 |
| コオニタビラコ | 246 | 植物 |
| コカモメヅル | 213 | 植物 |
| コキツネノボタン | 152 | 植物 |
| コキンバイザサ | 114 | 植物 |
| コクガン | 280 | 鳥類 |
| コククジラ | 272 | 哺乳類 |
| コケミズ | 167 | 植物 |
| コケリンドウ | 210 | 植物 |
| コサギ | 292 | 鳥類 |
| コシアカツバメ | 299 | 鳥類 |
| コシジロウミツバメ | 290 | 鳥類 |

| 和名 | 頁 | 分類 |
|----------------|-----|------|
| コシノヤバネゴケ | 45 | 植物 |
| コジュリン | 301 | 鳥類 |
| コシロシタバ | 416 | 昆虫類 |
| コシンジュガヤ | 136 | 植物 |
| コツブヌマハリイ | 133 | 植物 |
| コノハズク | 296 | 鳥類 |
| コハイヒモゴケ | 46 | 植物 |
| コハシゴシダ | 59 | 植物 |
| コバネアオイトトンボ | 347 | 昆虫類 |
| コバノイシカグマ | 55 | 植物 |
| コバノイチヤクソウ | 207 | 植物 |
| コバノヒノキシダ | 59 | 植物 |
| コバノヒルムシロ | 85 | 植物 |
| コバンムシ | 357 | 昆虫類 |
| コビレゴンドウ(タツパナガ) | 272 | 哺乳類 |
| コフウロ | 182 | 植物 |
| コフタバラン | 106 | 植物 |
| コブナシコブスジコガネ | 377 | 昆虫類 |
| コホネゴミムシダマシ | 386 | 昆虫類 |
| コマクサ | 145 | 植物 |
| コマチゴケ | 35 | 植物 |
| ゴマノハグサ | 221 | 植物 |
| コミミズク | 297 | 鳥類 |
| コメツブガイ | 437 | 海岸動物 |
| コモウセンゴケ | 196 | 植物 |
| コモチシダ | 60 | 植物 |
| コヨシキリ | 300 | 鳥類 |
| コルリクワガタ | 379 | 昆虫類 |

サ

| | | |
|--------------------|-----|------|
| サイゴクベニシダ | 66 | 植物 |
| サカネラン | 107 | 植物 |
| サガミトリゲモ(ヒロハトリゲモ) | 79 | 植物 |
| サギスゲ | 134 | 植物 |
| サギソウ | 108 | 植物 |
| サクライカグマ | 66 | 植物 |
| サクラガイ | 443 | 海岸動物 |
| サクラソウ | 203 | 植物 |
| サクラバハノキ | 176 | 植物 |
| サクラマス(通し回遊型) | 324 | 魚類 |
| ササオカゴケ(アオモリカギハイゴケ) | 46 | 植物 |
| サザナミツボ | 434 | 海岸動物 |
| ササバモ | 88 | 植物 |
| サジオモダカ | 76 | 植物 |
| サシバ | 296 | 鳥類 |
| ザゼンソウ | 75 | 植物 |
| サデクサ | 194 | 植物 |
| サドチビアメイロカミキリ | 392 | 昆虫類 |
| サナギイチゴ | 174 | 植物 |
| サナギスゲ | 124 | 植物 |
| サビシラトリ | 443 | 海岸動物 |
| ザリコミ | 156 | 植物 |
| サルメンエビネ | 93 | 植物 |
| サワラン | 97 | 植物 |
| サワルリソウ | 215 | 植物 |
| サンカノゴイ | 290 | 鳥類 |
| サンショウモ | 54 | 植物 |

| 和名 | 頁 | 分類 |
|------------|-----|------|
| サンリクドロソコエビ | 449 | 海岸動物 |

シ

| | | |
|-------------------------|-----|------|
| ジガバチソウ | 104 | 植物 |
| シケチシダ | 60 | 植物 |
| シゲヤサイトカケギリ | 439 | 海岸動物 |
| シゲリゴケ | 38 | 植物 |
| シコクママコナ | 229 | 植物 |
| シコタンソウ | 157 | 植物 |
| シコロエガイ | 441 | 海岸動物 |
| シジュウカラガン | 280 | 鳥類 |
| シソバタツナミ(イガタツナミ) | 226 | 植物 |
| シタミズゴケ | 41 | 植物 |
| シナイモツゴ | 322 | 魚類 |
| シナノエンマコガネ | 380 | 昆虫類 |
| シノリガモ | 282 | 鳥類 |
| シハイスミレ | 181 | 植物 |
| シバナ | 82 | 植物 |
| シフネルゴケ | 36 | 植物 |
| シマクイナ | 283 | 鳥類 |
| シマケシゲンゴロウ | 362 | 昆虫類 |
| シモキタイチゴ | 173 | 植物 |
| シモツケソウ(変種アカバナシモツケソウを含む) | 169 | 植物 |
| ジャケツイバラ | 161 | 植物 |
| ジャコウホソハナカミキリ | 391 | 昆虫類 |
| シャジクソウ | 165 | 植物 |
| ジャムシ | 445 | 海岸動物 |
| シャリンバイ | 172 | 植物 |
| シュウブンソウ | 239 | 植物 |
| ジュズカケハゼ | 330 | 魚類 |
| ショウキラン | 113 | 植物 |
| ジョウロウスゲ | 123 | 植物 |
| シライヤナギ | 178 | 植物 |
| シラウオ | 324 | 魚類 |
| シラオイハコベ(エゾフスマ) | 198 | 植物 |
| シラカワタデ | 194 | 植物 |
| シラギク | 434 | 海岸動物 |
| シラクモゴボウゾウムシ | 390 | 昆虫類 |
| シラゲヒメジソ(ヒカゲヒメジソ) | 224 | 植物 |
| シラネアオイ | 151 | 植物 |
| シラハタキバナガゴミムシ | 370 | 昆虫類 |
| シラハタミズクサハムシ | 395 | 昆虫類 |
| シラフヒョウタンゾウムシ | 389 | 昆虫類 |
| シラホシダエンマルトゲムシ | 372 | 昆虫類 |
| シロウオ | 328 | 魚類 |
| シロオビハイイロヤガ | 418 | 昆虫類 |
| シロスミレ | 180 | 植物 |
| シロチドリ | 285 | 鳥類 |
| シロテンマ | 99 | 植物 |
| シロナマコ | 456 | 海岸動物 |
| シロヘリツチカメムシ | 358 | 昆虫類 |
| シロマダラ | 312 | 両生爬虫 |
| シロヨモギ | 239 | 植物 |
| シントウトガリネズミ | 266 | 哺乳類 |

| 和名 | 頁 | 分類 |
|------------------|-----|------|
| ス | | |
| スガモ | 83 | 植物 |
| スギウラナガタマムシ | 371 | 昆虫類 |
| スギラン | 50 | 植物 |
| スゲアマモ | 83 | 植物 |
| スジグロボタル | 375 | 昆虫類 |
| スジヌマハリイ | 133 | 植物 |
| スジホシムシ | 448 | 海岸動物 |
| スジホシムシモドキ | 448 | 海岸動物 |
| スジホシムシモドキヤドリガイ | 441 | 海岸動物 |
| スズサイコ | 213 | 植物 |
| スズムシソウ | 105 | 植物 |
| スズメノトウガラシ | 222 | 植物 |
| スズラン | 117 | 植物 |
| ステゴビル | 116 | 植物 |
| スナガニ | 454 | 海岸動物 |
| スナゴカマツカ | 322 | 魚類 |
| スナサビキコリ | 373 | 昆虫類 |
| スナジスゲ | 124 | 植物 |
| スナビキソウ | 215 | 植物 |
| スナメリ (仙台湾－東京湾系群) | 273 | 哺乳類 |
| スナヨコバイ | 356 | 昆虫類 |
| スネナガイソガニ | 452 | 海岸動物 |
| スハマソウ | 151 | 植物 |
| スブタ | 77 | 植物 |

セ

| | | |
|------------|-----|-----|
| セアカオサムシ | 365 | 昆虫類 |
| セイトカシケシダ | 63 | 植物 |
| セイトカスズムシソウ | 105 | 植物 |
| セキショウモ | 82 | 植物 |
| セッコク | 96 | 植物 |
| ゼニタナゴ | 321 | 魚類 |
| セリモドキ | 253 | 植物 |
| センウズモドキ | 147 | 植物 |
| センダイタイゲキ | 177 | 植物 |
| センダイハギ | 164 | 植物 |
| センニンモ | 86 | 植物 |

ソ

| | | |
|-----|-----|----|
| ソヨゴ | 235 | 植物 |
|-----|-----|----|

タ

| | | |
|------------|-----|------|
| ダイコクコガネ | 381 | 昆虫類 |
| タカオキリガ | 417 | 昆虫類 |
| タカクマヒキオコシ | 223 | 植物 |
| タカサゴソウ | 245 | 植物 |
| タカサブロウ | 244 | 植物 |
| タカチホヘビ | 311 | 両生爬虫 |
| タカネクロスゲ | 136 | 植物 |
| タカネグンナイフウロ | 182 | 植物 |
| タカネサギソウ | 111 | 植物 |
| タカネトンボ | 109 | 植物 |
| タカネナデシコ | 197 | 植物 |
| タカネニガナ | 245 | 植物 |
| タカネバラ | 172 | 植物 |

| 和名 | 頁 | 分類 |
|------------------|-----|------|
| タガメ | 356 | 昆虫類 |
| タグチホソヒラタハムシ | 396 | 昆虫類 |
| タゴガエル | 308 | 両生爬虫 |
| タコノアシ | 160 | 植物 |
| タチアマモ | 84 | 植物 |
| タチイチゴツナギ | 141 | 植物 |
| タチゲヒカゲミズ | 167 | 植物 |
| タチシノブ | 57 | 植物 |
| タチスゲ | 127 | 植物 |
| タチスミレ | 180 | 植物 |
| タチドジョウツナギ | 141 | 植物 |
| タチハコベ | 196 | 植物 |
| タチヒメクグ (マメクグ) | 132 | 植物 |
| タチモ | 160 | 植物 |
| タテスジヒメヒゲナガハナノミ | 372 | 昆虫類 |
| タテヤマスゲ | 123 | 植物 |
| タナゴ | 321 | 魚類 |
| タニミツバ | 254 | 植物 |
| タヌキマメ | 161 | 植物 |
| タマアジサイ | 201 | 植物 |
| タマミクリ (ホソパタマミクリ) | 120 | 植物 |
| タンザワサカネラン | 106 | 植物 |

チ

| | | |
|-------------|-----|------|
| チクゼンハゼ | 330 | 魚類 |
| チゴハヤブサ | 298 | 鳥類 |
| チゴモズ | 299 | 鳥類 |
| チシマギキョウ | 236 | 植物 |
| チシマゼキショウ | 75 | 植物 |
| チシマヒカゲノカズラ | 49 | 植物 |
| チシママツバイ | 133 | 植物 |
| チチブコウモリ | 269 | 哺乳類 |
| チビアオゴミムシ | 368 | 昆虫類 |
| チビイトマキヒトデ | 455 | 海岸動物 |
| チビヒサゴコメツキ | 374 | 昆虫類 |
| チャボイ | 134 | 植物 |
| チャボゼキショウ | 76 | 植物 |
| チャボナガダイゴケ | 43 | 植物 |
| チャマダラセセリ | 405 | 昆虫類 |
| チュウヒ | 295 | 鳥類 |
| チョウジソウ | 212 | 植物 |
| チョウセンキンミズヒキ | 167 | 植物 |
| チョウセンゴミシ | 72 | 植物 |
| チリメンカワニナ | 463 | 淡水貝類 |

ツ

| | | |
|----------------|-----|------|
| ツガザクラ | 206 | 植物 |
| ツガルホソシデムシ | 382 | 昆虫類 |
| ツツイトモ | 87 | 植物 |
| ツヅラフジ | 154 | 植物 |
| ツノトンボ | 359 | 昆虫類 |
| ツバサゴカイ | 446 | 海岸動物 |
| ツブカワザンショウ | 432 | 海岸動物 |
| ツボミ | 427 | 海岸動物 |
| ツマジロウラジャノメ本州亜種 | 410 | 昆虫類 |
| ツミ | 294 | 鳥類 |
| ツメレンゲ | 159 | 植物 |

| 和名 | 頁 | 分類 |
|--------------|-----|-----|
| ツヤカタモンチビコメツキ | 375 | 昆虫類 |
| ツヤキベリアオゴミムシ | 368 | 昆虫類 |
| ツルカコソウ | 221 | 植物 |
| ツルカミカフスゲ | 131 | 植物 |
| ツルカメバソウ | 216 | 植物 |
| ツルキツネノボタン | 153 | 植物 |
| ツルケマン | 145 | 植物 |
| ツルコケモモ | 207 | 植物 |
| ツルシギ | 287 | 鳥類 |
| ツルスゲ | 129 | 植物 |
| ツレサギソウ | 110 | 植物 |

テ

| | | |
|-------------------------|-----|-----|
| テイネニガクサ | 227 | 植物 |
| テガタチドリ | 101 | 植物 |
| テヅカチョウチンゴケ (アズミチョウチンゴケ) | 45 | 植物 |
| テツギョ | 320 | 魚類 |
| テングコウモリ | 267 | 哺乳類 |
| テングノコヅチ | 211 | 植物 |
| テングヨウジ | 325 | 魚類 |
| デンジソウ | 54 | 植物 |

ト

| | | |
|-------------------|-----|------|
| トウキョウダルマガエル | 309 | 両生爬虫 |
| トウゴクサバノオ | 150 | 植物 |
| トウホクサンショウウオ | 307 | 両生爬虫 |
| トガクシソウ | 146 | 植物 |
| トガスグリ | 157 | 植物 |
| トカチヤナギ (オオバヤナギ) | 178 | 植物 |
| トガリアツバ | 415 | 昆虫類 |
| トガリバイヌワラビ | 61 | 植物 |
| トキソウ | 112 | 植物 |
| トキホコリ | 166 | 植物 |
| トキリマメ (オオバタンキリマメ) | 164 | 植物 |
| トケンラン | 95 | 植物 |
| トチカガミ | 78 | 植物 |
| トド | 270 | 哺乳類 |
| トネテンツキ | 135 | 植物 |
| トネハナヤスリ | 52 | 植物 |
| トノサマガエル | 310 | 両生爬虫 |
| トビイロヒョウタンゾウムシ | 389 | 昆虫類 |
| トモエシオガマ | 231 | 植物 |
| トモンハナバチ | 404 | 昆虫類 |
| トラフズク | 297 | 鳥類 |
| トラフホソバネカミキリ | 393 | 昆虫類 |
| トリウミアカイソモドキ | 452 | 海岸動物 |
| トリゲモ | 80 | 植物 |

ナ

| | | |
|-------------|-----|-----|
| ナガエスゲ | 129 | 植物 |
| ナガエミクリ | 120 | 植物 |
| ナガオノキシノブ | 70 | 植物 |
| ナカジマヒメクサリゴケ | 38 | 植物 |
| ナカシロオビエダシヤク | 411 | 昆虫類 |
| ナガスネエンマコガネ | 380 | 昆虫類 |
| ナガバノウナギツカミ | 194 | 植物 |

| 和名 | 頁 | 分類 |
|-------------------------|-----|------|
| ナガボテンツキ | 134 | 植物 |
| ナガボノワレモコウ (ナガボノシロワレモコウ) | 175 | 植物 |
| ナガミノツルケマン | 145 | 植物 |
| ナギサノシタタリ | 440 | 海岸動物 |
| ナゴヤサナエ | 350 | 昆虫類 |
| ナツエビネ | 93 | 植物 |
| ナツツバキ | 204 | 植物 |
| ナトリアザミ | 242 | 植物 |
| ナニワズ | 187 | 植物 |
| ナベクラザゼンソウ | 75 | 植物 |
| ナミキソウ | 226 | 植物 |
| ナミハンミョウ | 364 | 昆虫類 |
| ナンゴクナライシダ | 64 | 植物 |
| ナンタイシダ | 68 | 植物 |
| ナンバンギセル | 228 | 植物 |
| ナンブコハモミジ | 185 | 植物 |
| ナンブタカネアザミ | 242 | 植物 |
| ナンブワチガイソウ | 198 | 植物 |
| ナンヨウサンカクゴケ | 39 | 植物 |

ニ

| | | |
|--------------------|-----|------|
| ニオイシダ | 66 | 植物 |
| ニオガイ | 444 | 海岸動物 |
| ニッコウヒョウタンボク | 256 | 植物 |
| ニッポンハナダカバチ | 399 | 昆虫類 |
| ニトベギングチ | 400 | 昆虫類 |
| ニホンイシガメ | 310 | 両生爬虫 |
| ニホンイトヨ | 325 | 魚類 |
| ニホンウサギコウモリ | 269 | 哺乳類 |
| ニホンウナギ | 320 | 魚類 |
| ニホンウミイサゴムシ | 447 | 海岸動物 |
| ニホンカモシカ | 272 | 哺乳類 |
| ニホンカワウソ | 271 | 哺乳類 |
| ニホンザル (金華山島のニホンザル) | 265 | 哺乳類 |
| ニホンスッポン | 311 | 両生爬虫 |
| ニンボーイナゴ | 355 | 昆虫類 |

ヌ

| | | |
|------------------|-----|------|
| ヌカボタデ | 195 | 植物 |
| ヌカルミクチキレ | 440 | 海岸動物 |
| ヌマアゼスゲ | 124 | 植物 |
| ヌマガイ | 461 | 淡水貝類 |
| ヌマクロボスゲ (シラカフスゲ) | 128 | 植物 |
| ヌマゼリ | 255 | 植物 |

ネ

| | | |
|----------|-----|------|
| ネアカヨシヤンマ | 349 | 昆虫類 |
| ネコシデ | 176 | 植物 |
| ネズミイルカ | 273 | 哺乳類 |
| ネプトクワガタ | 378 | 昆虫類 |
| ネムグリガイ | 444 | 海岸動物 |

ノ

| | | |
|----------|-----|-----|
| ノアズキ | 161 | 植物 |
| ノウゴウイチゴ | 169 | 植物 |
| ノウメンハナバチ | 402 | 昆虫類 |

| 和名 | 頁 | 分類 |
|-------------------|-----|------|
| ノウルシ | 177 | 植物 |
| ノカラマツ | 155 | 植物 |
| ノグサ | 135 | 植物 |
| ノゲヌカスゲ | 128 | 植物 |
| ノジコ | 301 | 鳥類 |
| ノダイオウ | 195 | 植物 |
| ノトマスタス属の一種 | 446 | 海岸動物 |
| ノニガナ | 246 | 植物 |
| ノビネチドリ | 106 | 植物 |
| ノヤマトンボ(オオバノトンボソウ) | 111 | 植物 |
| ノレンコウモリ | 267 | 哺乳類 |

ハ

| | | |
|-------------|-----|------|
| バアソブ | 236 | 植物 |
| ハイイロクモバチ | 397 | 昆虫類 |
| バイカモ | 153 | 植物 |
| ハイタカ | 294 | 鳥類 |
| ハイドジョウツナギ | 143 | 植物 |
| ハイハマボッサ | 203 | 植物 |
| ハカタシダ | 65 | 植物 |
| ハクウンラン | 103 | 植物 |
| ハクガン | 280 | 鳥類 |
| ハクセンナズナ | 189 | 植物 |
| ハグロソウ | 234 | 植物 |
| ハコネイトスゲ | 125 | 植物 |
| ハコネシケチシダ | 60 | 植物 |
| ハシゴシダ | 59 | 植物 |
| ハダカホオズキ | 214 | 植物 |
| ハタザオ | 189 | 植物 |
| ハタベスゲ | 126 | 植物 |
| ハチクマ | 293 | 鳥類 |
| ハッチョウトンボ | 353 | 昆虫類 |
| ハナイカリ | 210 | 植物 |
| ハナウド | 253 | 植物 |
| ハナカジカ | 327 | 魚類 |
| ハナハタザオ | 188 | 植物 |
| ハナビゼリ | 251 | 植物 |
| ハナムグラ | 209 | 植物 |
| ハネビロエゾトンボ | 351 | 昆虫類 |
| ハマアカザ | 199 | 植物 |
| ハマイ | 122 | 植物 |
| ハマウツボ | 230 | 植物 |
| ハマカキラン | 97 | 植物 |
| ハマガニ | 452 | 海岸動物 |
| ハマグリ | 445 | 海岸動物 |
| ハマゴウ | 228 | 植物 |
| ハマサジ | 191 | 植物 |
| ハマシギ | 287 | 鳥類 |
| ハマスズ | 354 | 昆虫類 |
| ハマダンゴムシ | 450 | 海岸動物 |
| ハマナス | 173 | 植物 |
| ハマハコベ | 197 | 植物 |
| ハマハタザオ | 186 | 植物 |
| ハマヒエガエリ | 141 | 植物 |
| ハマヒナノウスツボ | 222 | 植物 |
| ハマベゾウムシ | 389 | 昆虫類 |
| ハマベミズギワゴミムシ | 366 | 昆虫類 |

| 和名 | 頁 | 分類 |
|----------------|-----|------|
| ハマベンケイソウ | 216 | 植物 |
| ハママツナ | 200 | 植物 |
| ハヤシミドリシジミ | 407 | 昆虫類 |
| ハヤチネベニコメツキ | 373 | 昆虫類 |
| ハリオアマツバメ | 283 | 鳥類 |
| バルスアナジャコ | 450 | 海岸動物 |
| ハンゲショウ | 72 | 植物 |
| ハンショウツル | 149 | 植物 |
| バンダイハコネサンショウウオ | 308 | 両生爬虫 |

ヒ

| | | |
|---------------------|-----|------|
| ヒウラカメムシ | 358 | 昆虫類 |
| ヒエスゲ | 127 | 植物 |
| ヒオウギ | 114 | 植物 |
| ヒオウギアヤメ | 115 | 植物 |
| ヒカゲワラビ | 63 | 植物 |
| ヒガシタブネドブガイ | 461 | 淡水貝類 |
| ヒガシツヤヒサゴゴミムシダマシ | 387 | 昆虫類 |
| ヒガシニホントカゲ | 311 | 両生爬虫 |
| ヒガタヨコイトカケギリ | 439 | 海岸動物 |
| ヒキノカサ | 152 | 植物 |
| ヒクイナ | 284 | 鳥類 |
| ヒゲシバ | 142 | 植物 |
| ヒゲネワチガイソウ | 198 | 植物 |
| ヒゲブトハナカミキリ | 391 | 昆虫類 |
| ヒゴスミレ | 179 | 植物 |
| ヒシモドキ | 218 | 植物 |
| ヒトツボクロ | 113 | 植物 |
| ヒナガリヤス | 137 | 植物 |
| ヒナコウモリ(東松島市のヒナコウモリ) | 270 | 哺乳類 |
| ヒナザサ | 137 | 植物 |
| ヒナタムシヤドリカワザンショウ | 432 | 海岸動物 |
| ヒナチドリ | 102 | 植物 |
| ヒナノウスツボ | 221 | 植物 |
| ヒナユキスズメ | 428 | 海岸動物 |
| ヒヌマイトトンボ | 348 | 昆虫類 |
| ヒヌマヨコエビ | 449 | 海岸動物 |
| ヒマラヤハガタヨトウ | 416 | 昆虫類 |
| ヒムロゴケ | 48 | 植物 |
| ヒメアカイソガニ | 451 | 海岸動物 |
| ヒメアカネ | 352 | 昆虫類 |
| ヒメイズイ | 118 | 植物 |
| ヒメウズ | 154 | 植物 |
| ヒメウスノキ | 208 | 植物 |
| ヒメカイウ | 74 | 植物 |
| ヒメカツオガタナガクチキ | 384 | 昆虫類 |
| ヒメガンクビソウ | 240 | 植物 |
| ヒメギフチョウ本州亜種 | 406 | 昆虫類 |
| ヒメキンシゴケ | 43 | 植物 |
| ヒメキンポウゲ | 151 | 植物 |
| ヒメクイナ | 284 | 鳥類 |
| ヒメクロウミツバメ | 289 | 鳥類 |
| ヒメクロオサムシ | 364 | 昆虫類 |
| ヒメコウガイゼキショウ | 122 | 植物 |
| ヒメコヌカグサ | 136 | 植物 |
| ヒメゴヨウイチゴ | 174 | 植物 |
| ヒメサジラン | 70 | 植物 |

| 和名 | 頁 | 分類 |
|--------------|-----|------|
| ヒメサナエ | 350 | 昆虫類 |
| ヒメサユリ | 91 | 植物 |
| ヒメシャガ | 114 | 植物 |
| ヒメシャクナゲ | 205 | 植物 |
| ヒメシロアサザ | 237 | 植物 |
| ヒメシロチョウ | 406 | 昆虫類 |
| ヒメスズメ | 414 | 昆虫類 |
| ヒメタデ | 193 | 植物 |
| ヒメタヌキモ | 233 | 植物 |
| ヒメナエ | 211 | 植物 |
| ヒメノヤガラ | 94 | 植物 |
| ヒメバイカモ | 153 | 植物 |
| ヒメハッカ | 223 | 植物 |
| ヒメハナヒリノキ | 205 | 植物 |
| ヒメハナワラビ | 51 | 植物 |
| ヒメヒゴタイ | 249 | 植物 |
| ヒメビシ | 183 | 植物 |
| ヒメヒラマキミズマイマイ | 464 | 淡水貝類 |
| ヒメビロウドカミキリ | 393 | 昆虫類 |
| ヒメフタバラン | 107 | 植物 |
| ヒメホオヒゲコウモリ | 268 | 哺乳類 |
| ヒメボタル | 376 | 昆虫類 |
| ヒメマイヅルソウ | 117 | 植物 |
| ヒメミクリ | 121 | 植物 |
| ヒメミズワラビ | 56 | 植物 |
| ヒメミソハギ | 183 | 植物 |
| ヒメミヤマウズラ | 100 | 植物 |
| ヒモイカリナマコ | 456 | 海岸動物 |
| ヒモハゼ | 328 | 魚類 |
| ヒョウタンゴミムシ | 366 | 昆虫類 |
| ヒヨクゴケ | 48 | 植物 |
| ヒヨクソウ | 218 | 植物 |
| ヒロハイヌワラビ | 62 | 植物 |
| ヒロバカレハ | 412 | 昆虫類 |
| ヒロハツリシュスラン | 100 | 植物 |
| ヒロハヌマガヤ | 140 | 植物 |
| ヒロハノエビモ | 87 | 植物 |
| ヒロハノカワラサイコ | 170 | 植物 |

フ

| | | |
|----------------|-----|------|
| フガクスズムシソウ | 104 | 植物 |
| フクジュソウ | 147 | 植物 |
| フクラゴケ(ナワゴケ) | 49 | 植物 |
| フサガヤ | 137 | 植物 |
| フサザクラ | 144 | 植物 |
| フサタヌキモ | 233 | 植物 |
| フジバカマ | 244 | 植物 |
| フタスジカタビロハナカミキリ | 391 | 昆虫類 |
| フタスジギンエダシャク | 411 | 昆虫類 |
| フタバアオイ | 73 | 植物 |
| フタホシドクガ | 415 | 昆虫類 |
| フタマタシロナミシャク | 412 | 昆虫類 |
| フトスジエダシャク | 411 | 昆虫類 |
| フトヘナタリ | 430 | 海岸動物 |
| フナガタミズゴケ | 40 | 植物 |
| フナバラソウ | 212 | 植物 |
| フボウトウヒレン | 249 | 植物 |

| 和名 | 頁 | 分類 |
|-------------|-----|------|
| フモトシダ | 56 | 植物 |
| フモトスミレ | 180 | 植物 |
| フユザンショウ | 186 | 植物 |
| ベッコウトンボ | 353 | 昆虫類 |
| ベニカメノコハムシ | 395 | 昆虫類 |
| ベニシュスラン | 100 | 植物 |
| ベニバナヤマシャクヤク | 156 | 植物 |
| ヘビハゼ | 330 | 魚類 |
| ヘラシギ | 286 | 鳥類 |
| ヘリグロチャバネセセリ | 405 | 昆虫類 |
| ベンケイガニ | 453 | 海岸動物 |
| ベンケイソウ | 158 | 植物 |

ホ

| | | |
|-------------|-----|------|
| ホウザワイソギンチャク | 427 | 海岸動物 |
| ボウズハゼ | 328 | 魚類 |
| ホウロクシギ | 285 | 鳥類 |
| ホザキノミミカキグサ | 232 | 植物 |
| ホザキヤドリギ | 190 | 植物 |
| ホシクサ | 121 | 植物 |
| ホシチャバネセセリ | 405 | 昆虫類 |
| ホソシロフクモバチ | 397 | 昆虫類 |
| ホソバアカバナ | 185 | 植物 |
| ホソバイヌタデ | 195 | 植物 |
| ホソバイヌワラビ | 61 | 植物 |
| ホソバオグルマ | 245 | 植物 |
| ホソバコケシノブ | 53 | 植物 |
| ホソバノツルリンドウ | 210 | 植物 |
| ホソバヒルムシロ | 84 | 植物 |
| ホソバミズヒキモ | 86 | 植物 |
| ホソハンミョウ | 363 | 昆虫類 |
| ホソメンハナバチ | 402 | 昆虫類 |
| ホタルサイコ | 252 | 植物 |
| ホッケミズムシ | 357 | 昆虫類 |
| ホッスモ | 79 | 植物 |
| ホトケドジョウ | 323 | 魚類 |
| ホナガクマヤナギ | 165 | 植物 |
| ホネゴミムシダマシ | 386 | 昆虫類 |
| ホラシノブ | 55 | 植物 |
| ホンゴウソウ | 89 | 植物 |

マ

| | | |
|---------------|-----|------|
| マークオサムシ | 365 | 昆虫類 |
| マイサギソウ | 110 | 植物 |
| マイヅルテンナンショウ | 74 | 植物 |
| マイマイツツハナバチ | 403 | 昆虫類 |
| マキエハギ | 164 | 植物 |
| マゴコロガイ | 442 | 海岸動物 |
| マサゴハゼ | 329 | 魚類 |
| マシジミ | 462 | 淡水貝類 |
| マダイオウ | 196 | 植物 |
| マダラケシミズギワゴミムシ | 367 | 昆虫類 |
| マダラコガシラミズムシ | 360 | 昆虫類 |
| マダラヤンマ | 350 | 昆虫類 |
| マツカサガイ北東本州固有種 | 462 | 淡水貝類 |
| マツカワウラカワザンショウ | 432 | 海岸動物 |
| マツグミ | 190 | 植物 |

| 和名 | 頁 | 分類 |
|-----------------|-----|------|
| マツクロスズメ本州亜種 | 413 | 昆虫類 |
| マツザカシダ (マツサカシダ) | 57 | 植物 |
| マツシマカワザンショウ | 433 | 海岸動物 |
| マツシマコメツブ | 437 | 海岸動物 |
| マツナ | 200 | 植物 |
| マツバニンジン | 181 | 植物 |
| マツバラン | 52 | 植物 |
| マツムシソウ | 257 | 植物 |
| マツラン (ベニカヤラン) | 98 | 植物 |
| マテガイ | 442 | 海岸動物 |
| マメコブシガニ | 451 | 海岸動物 |
| マメスゲ | 130 | 植物 |
| マメダオシ | 214 | 植物 |
| マメタニシ | 463 | 淡水貝類 |
| マメツタ | 69 | 植物 |
| マルコガタノゲンゴロウ | 361 | 昆虫類 |
| マルテンスマツムシ | 435 | 海岸動物 |
| マルバウスゴ | 208 | 植物 |
| マルバオモダカ | 76 | 植物 |
| マルバサンキライ | 90 | 植物 |
| マルバヌスビトハギ | 162 | 植物 |
| マルバノサウトウガラシ | 217 | 植物 |
| マルバヒメクサリゴケ | 39 | 植物 |
| マルバヤブマオ | 166 | 植物 |
| マルミノウルシ | 177 | 植物 |
| マルモリアザミ | 243 | 植物 |
| マンゴクウラカワザンショウ | 433 | 海岸動物 |
| マンセンカラマツ | 154 | 植物 |

ニ

| | | |
|------------------|-----|------|
| ミクリ | 120 | 植物 |
| ミシマサイコ | 252 | 植物 |
| ミズアオイ | 118 | 植物 |
| ミズオオバコ | 81 | 植物 |
| ミズコハクガイ | 464 | 淡水貝類 |
| ミズゴマツボ | 463 | 淡水貝類 |
| ミスジナガクチキ | 385 | 昆虫類 |
| ミズスギ | 49 | 植物 |
| ミズタカモジグサ | 138 | 植物 |
| ミズタガラシ | 187 | 植物 |
| ミズチドリ | 109 | 植物 |
| ミズトラノオ | 225 | 植物 |
| ミズトンボ | 101 | 植物 |
| ミズニラ | 50 | 植物 |
| ミズニラモドキ | 51 | 植物 |
| ミズヒキモ | 87 | 植物 |
| ミズマツバ | 183 | 植物 |
| ミズラモグラ | 266 | 哺乳類 |
| ミソガワソウ | 224 | 植物 |
| ミゾゴイ | 291 | 鳥類 |
| ミゾコウジュ | 225 | 植物 |
| ミチシバ | 139 | 植物 |
| ミチノククワガタ | 220 | 植物 |
| ミチノクコゴメグサ | 229 | 植物 |
| ミチノクサイシン | 73 | 植物 |
| ミチノクナシ (イワテヤマナシ) | 171 | 植物 |
| ミチノクホタルイ | 135 | 植物 |

| 和名 | 頁 | 分類 |
|---------------|-----|-----|
| ミチノクヤマタバコ | 247 | 植物 |
| ミツバノバイカオウレン | 150 | 植物 |
| ミナミスナヤツメ | 319 | 魚類 |
| ミナミメダカ | 325 | 魚類 |
| ミミカキグサ | 232 | 植物 |
| ミヤギノヨコバイバチ | 401 | 昆虫類 |
| ミヤケカレハ | 412 | 昆虫類 |
| ミヤコアザミ | 249 | 植物 |
| ミヤコヤブソテツ | 65 | 植物 |
| ミヤマオダマキ | 149 | 植物 |
| ミヤマカラスジミ | 408 | 昆虫類 |
| ミヤマコガネヒラタコメツキ | 374 | 昆虫類 |
| ミヤマザクラ | 168 | 植物 |
| ミヤマシオガマ | 230 | 植物 |
| ミヤマシジミ | 409 | 昆虫類 |
| ミヤマスカシユリ | 91 | 植物 |
| ミヤマツチトリモチ | 190 | 植物 |
| ミヤマツチハンミョウ | 383 | 昆虫類 |
| ミヤマトキソウ | 112 | 植物 |
| ミヤマドジョウツナギ | 138 | 植物 |
| ミヤマヒサゴコメツキ | 374 | 昆虫類 |
| ミヤママンネングサ | 159 | 植物 |
| ミヤマモジズリ | 102 | 植物 |
| ミョウギシャジン | 236 | 植物 |

ム

| | | |
|---------------|-----|------|
| ムカゴサイシン | 108 | 植物 |
| ムカゴソウ | 103 | 植物 |
| ムカゴトラノオ | 192 | 植物 |
| ムカゴネコノメソウ | 157 | 植物 |
| ムカシツチガエル | 309 | 両生爬虫 |
| ムギラン | 92 | 植物 |
| ムサシモ | 78 | 植物 |
| ムシトリスミレ | 231 | 植物 |
| ムジナスゲ | 126 | 植物 |
| ムシャリンドウ | 222 | 植物 |
| ムシロガイ | 436 | 海岸動物 |
| ムツハアリアケガニ | 455 | 海岸動物 |
| ムネアカナガクチキ | 385 | 昆虫類 |
| ムネモンコナガクチキ | 384 | 昆虫類 |
| ムモンアカシジミ | 406 | 昆虫類 |
| ムラサキ | 215 | 植物 |
| ムラサキオオツチハンミョウ | 384 | 昆虫類 |
| ムラサキセンブリ | 237 | 植物 |
| ムラサキニガナ | 247 | 植物 |
| ムラサキミミカキグサ | 234 | 植物 |

メ

| | | |
|-----------|-----|------|
| メガネサナエ | 351 | 昆虫類 |
| メススジゲンゴロウ | 361 | 昆虫類 |
| メンカラスガイ | 461 | 淡水貝類 |

モ

| | | |
|-------|-----|----|
| モチノキ | 235 | 植物 |
| モミラン | 99 | 植物 |
| モメンヅル | 160 | 植物 |
| モリアザミ | 241 | 植物 |

| 和名 | 頁 | 分類 |
|-----------|-----|------|
| モリアブラコウモリ | 269 | 哺乳類 |
| モリノカマカ | 449 | 海岸動物 |

ヤ

| | | |
|---------------------|-----|------|
| ヤシャゼンマイ | 53 | 植物 |
| ヤシャビシャク | 156 | 植物 |
| ヤナギスブタ | 78 | 植物 |
| ヤナギトラノオ | 202 | 植物 |
| ヤナギヌカボ | 193 | 植物 |
| ヤブニッケイ | 74 | 植物 |
| ヤブミョウガ | 118 | 植物 |
| ヤマアカガエル | 309 | 両生爬虫 |
| ヤマアジサイ | 201 | 植物 |
| ヤマウツボ (変種ケヤマウツボを含む) | 229 | 植物 |
| ヤマキタダケ (ヒメスズダケ) | 144 | 植物 |
| ヤマクボスゲ | 125 | 植物 |
| ヤマコウモリ | 268 | 哺乳類 |
| ヤマサギソウ | 110 | 植物 |
| ヤマジソ | 224 | 植物 |
| ヤマシャクヤク | 155 | 植物 |
| ヤマセミ | 298 | 鳥類 |
| ヤマトウスチャヤガ | 418 | 昆虫類 |
| ヤマトキソウ | 112 | 植物 |
| ヤマトキモンハナカミキリ | 390 | 昆虫類 |
| ヤマトクビキレガイ | 431 | 海岸動物 |
| ヤマトケシマグソコガネ | 379 | 昆虫類 |
| ヤマトスナハキバチ | 399 | 昆虫類 |
| ヤマトタムシ | 371 | 昆虫類 |
| ヤマトハクチョウゴケ | 43 | 植物 |
| ヤマトマダラバツタ | 355 | 昆虫類 |
| ヤマトミクリ | 119 | 植物 |
| ヤマトユキザサ | 117 | 植物 |
| ヤマナカヨウジョウゴケ | 38 | 植物 |
| ヤマネ | 265 | 哺乳類 |
| ヤマハナワラビ | 51 | 植物 |
| ヤマブキソウ | 146 | 植物 |
| ヤマホロシ | 214 | 植物 |
| ヤマラッキョウ | 116 | 植物 |
| ヤミヨキセフタ | 438 | 海岸動物 |
| ヤリノホゴケ | 47 | 植物 |
| ヤリホノシケシダ (ヤブシダ) | 62 | 植物 |

ユ

| | | |
|-----------|-----|------|
| ユウシオガイ | 442 | 海岸動物 |
| ユウシュンラン | 94 | 植物 |
| ユキグニハリスゲ | 131 | 植物 |
| ユキミイチョウゴケ | 37 | 植物 |
| ユキワリコザクラ | 202 | 植物 |
| ユビソヤナギ | 178 | 植物 |
| ユムシ | 447 | 海岸動物 |

ヨ

| | | |
|----------|-----|------|
| ヨウジョウゴケ | 39 | 植物 |
| ヨウラクラン | 108 | 植物 |
| ヨコイトカケギリ | 439 | 海岸動物 |
| ヨコグラノキ | 166 | 植物 |
| ヨコグラハネゴケ | 37 | 植物 |

| 和名 | 頁 | 分類 |
|------------|-----|------|
| ヨシゴイ | 291 | 鳥類 |
| ヨシダカワザンショウ | 431 | 海岸動物 |
| ヨタカ | 282 | 鳥類 |
| ヨツバシオガマ | 230 | 植物 |
| ヨツボシカミキリ | 392 | 昆虫類 |
| ヨモギホンヤドカリ | 450 | 海岸動物 |

ラ

| | | |
|-----|-----|-----|
| ラッコ | 271 | 哺乳類 |
|-----|-----|-----|

リ

| | | |
|------------|-----|----|
| リクゼンアザミ | 242 | 植物 |
| リシリシノブ | 56 | 植物 |
| リュウノウギク | 240 | 植物 |
| リュウノヒゲモ | 88 | 植物 |
| リュウトウイタチシダ | 67 | 植物 |

ル

| | | |
|------------|-----|-----|
| ルイスツブゲンゴロウ | 363 | 昆虫類 |
| ルリイトトンボ | 349 | 昆虫類 |
| ルリソウ | 216 | 植物 |
| ルリナガクチキ | 385 | 昆虫類 |
| ルリヨシノボリ | 329 | 魚類 |

レ

| | | |
|---------|-----|----|
| レンゲショウマ | 148 | 植物 |
| レンブクソウ | 255 | 植物 |
| レンリソウ | 163 | 植物 |

ワ

| | | |
|--------------|-----|----|
| ワカサギ (通し回遊型) | 324 | 魚類 |
| ワガトリカブト | 147 | 植物 |
| ワダソウ | 197 | 植物 |

亜

| | | |
|----------|-----|----|
| 亜種オオヒシクイ | 281 | 鳥類 |
| 亜種ヒシクイ | 281 | 鳥類 |

学名索引

分類：(1)植物、(2)哺乳類、(3)鳥類、(4)両生類・爬虫類(両生爬虫)、(5)汽水・淡水魚類(魚類)、(6)昆虫類、(7)海岸地域の無脊椎動物類(海岸動物)、(8)淡水産貝類(淡水貝類)

| 学名 | 頁 | 分類 |
|--|-----|------|
| A | | |
| <i>Acalolepta degener degener</i> | 393 | 昆虫類 |
| <i>Accipiter gentilis</i> | 294 | 鳥類 |
| <i>Accipiter gularis</i> | 294 | 鳥類 |
| <i>Accipiter nisus</i> | 294 | 鳥類 |
| <i>Acer amoenum</i> var. <i>nambuanum</i> | 185 | 植物 |
| <i>Achalinus spinalis</i> | 311 | 両生爬虫 |
| <i>Acheilognathus melanogaster</i> | 321 | 魚類 |
| <i>Acheilognathus tabira erythropterus</i> | 321 | 魚類 |
| <i>Acheilognathus typus</i> | 321 | 魚類 |
| <i>Achillea ptarmica</i> subsp. <i>macrocephala</i> var. <i>speciosa</i> | 238 | 植物 |
| <i>Acilius japonicus</i> | 361 | 昆虫類 |
| <i>Acmaeopleura parvula</i> | 451 | 海岸動物 |
| <i>Aconitum jaluense</i> subsp. <i>iwatekense</i> | 147 | 植物 |
| <i>Aconitum okuyamae</i> var. <i>wagaense</i> | 147 | 植物 |
| <i>Aconogonon nakaii</i> | 191 | 植物 |
| <i>Acrocephalus bistrigiceps</i> | 300 | 鳥類 |
| <i>Acystopteris japonica</i> | 58 | 植物 |
| <i>Adenophora nikoensis</i> var. <i>petrophila</i> | 236 | 植物 |
| <i>Adonis ramosa</i> | 147 | 植物 |
| <i>Adoxa moschatellina</i> | 255 | 植物 |
| <i>Aeginetia indica</i> | 228 | 植物 |
| <i>Aegus laevicollis subnitidus</i> | 378 | 昆虫類 |
| <i>Aeromachus inachus inachus</i> | 405 | 昆虫類 |
| <i>Aeschnophlebia anisoptera</i> | 349 | 昆虫類 |
| <i>Aeshna mixta soneharai</i> | 350 | 昆虫類 |
| <i>Agrilus planipennis</i> | 371 | 昆虫類 |
| <i>Agrilus sugiurai</i> | 371 | 昆虫類 |
| <i>Agrimonia coreana</i> | 167 | 植物 |
| <i>Agrostis valvata</i> | 136 | 植物 |
| <i>Ajuga ciliata</i> var. <i>villosior</i> | 220 | 植物 |
| <i>Ajuga shikotanensis</i> | 221 | 植物 |
| <i>Alisma plantago-aquatica</i> var. <i>orientale</i> | 76 | 植物 |
| <i>Alitta dyamusi</i> | 445 | 海岸動物 |
| <i>Allium inutile</i> | 116 | 植物 |
| <i>Allium thunbergii</i> | 116 | 植物 |
| <i>Allium victorialis</i> subsp. <i>platyphyllum</i> | 116 | 植物 |
| <i>Alnus trabeculosa</i> | 176 | 植物 |
| <i>Amaeana</i> sp. | 447 | 海岸動物 |
| <i>Amana edulis</i> | 90 | 植物 |
| <i>Amitostigma kinoshitae</i> | 91 | 植物 |
| <i>Ammannia multiflora</i> | 183 | 植物 |
| <i>Amphictene japonica</i> | 447 | 海岸動物 |
| <i>Amsonia elliptica</i> | 212 | 植物 |
| <i>Anaphalis margaritacea</i> var. <i>yedoensis</i> | 239 | 植物 |
| <i>Ancistrocarya japonica</i> | 215 | 植物 |
| <i>Andrena echizenia</i> | 403 | 昆虫類 |
| <i>Andromeda polifolia</i> | 205 | 植物 |
| <i>Anemone nikoensis</i> | 148 | 植物 |
| <i>Anemonopsis macrophylla</i> | 148 | 植物 |
| <i>Angelica inaequalis</i> | 251 | 植物 |
| <i>Anguilla japonica</i> | 320 | 魚類 |
| <i>Angustassiminea castanea</i> | 431 | 海岸動物 |

| 学名 | 頁 | 分類 |
|--|-----|------|
| <i>Anodonta lauta</i> | 461 | 淡水貝類 |
| <i>Anopilus reflexus</i> | 398 | 昆虫類 |
| <i>Anser caerulescens</i> | 280 | 鳥類 |
| <i>Anser erythropus</i> | 281 | 鳥類 |
| <i>Anser fabalis middendorffii</i> | 281 | 鳥類 |
| <i>Anser fabalis serrirostris</i> | 281 | 鳥類 |
| <i>Anthidium septemspinosum</i> | 404 | 昆虫類 |
| <i>Anthracophora rusticola</i> | 381 | 昆虫類 |
| <i>Aphodius hibernalis hibernalis</i> | 379 | 昆虫類 |
| <i>Apodicarpum ikenoi</i> | 252 | 植物 |
| <i>Appasus japonicus</i> | 356 | 昆虫類 |
| <i>Aquila chrysaetos</i> | 293 | 鳥類 |
| <i>Aquilegia buergeriana</i> var. <i>oxysepala</i> | 148 | 植物 |
| <i>Aquilegia flabellata</i> var. <i>pumila</i> | 149 | 植物 |
| <i>Aquilonastra minor</i> | 455 | 海岸動物 |
| <i>Arabis stelleri</i> var. <i>japonica</i> | 186 | 植物 |
| <i>Arachniodes chinensis</i> | 64 | 植物 |
| <i>Arachniodes fargesii</i> | 64 | 植物 |
| <i>Arachniodes simplicior</i> | 65 | 植物 |
| <i>Arenaria trinervia</i> | 196 | 植物 |
| <i>Argentina anserina</i> | 168 | 植物 |
| <i>Arisaema heterophyllum</i> | 74 | 植物 |
| <i>Aristolochia debilis</i> | 72 | 植物 |
| <i>Artemisia stelleriana</i> | 239 | 植物 |
| <i>Arthritica</i> cf. <i>reikoeae</i> | 441 | 海岸動物 |
| <i>Asarum caulescens</i> | 73 | 植物 |
| <i>Asarum fauriei</i> var. <i>fauriei</i> | 73 | 植物 |
| <i>Asarum heterotropoides</i> | 73 | 植物 |
| <i>Ascalaphus ramburi</i> | 360 | 昆虫類 |
| <i>Asio flammeus</i> | 297 | 鳥類 |
| <i>Asio otus</i> | 297 | 鳥類 |
| <i>Asplenium anogrammoides</i> | 59 | 植物 |
| <i>Assiminea</i> aff. <i>parasitologica</i> | 432 | 海岸動物 |
| " <i>Assiminea</i> " <i>estuarina</i> | 432 | 海岸動物 |
| " <i>Assiminea</i> " sp. F | 433 | 海岸動物 |
| " <i>Assiminea</i> " sp. G | 433 | 海岸動物 |
| " <i>Assiminea</i> " sp. H | 432 | 海岸動物 |
| <i>Aster verticillatus</i> | 239 | 植物 |
| <i>Asthena ochrifasciaria</i> | 412 | 昆虫類 |
| <i>Astragalus reflexistipulus</i> | 160 | 植物 |
| <i>Athyrium christensenianum</i> | 60 | 植物 |
| <i>Athyrium decurrentialatum</i> | 60 | 植物 |
| <i>Athyrium distentifolium</i> | 61 | 植物 |
| <i>Athyrium iseanum</i> var. <i>angustisectum</i> | 61 | 植物 |
| <i>Athyrium iseanum</i> var. <i>iseanum</i> | 61 | 植物 |
| <i>Athyrium nikkoense</i> | 62 | 植物 |
| <i>Athyrium wardii</i> | 62 | 植物 |
| <i>Atriplex subcordata</i> | 199 | 植物 |
| " <i>Augustassiminea</i> " <i>yoshidayukioi</i> | 431 | 海岸動物 |

B

| | | |
|-------------------------------|-----|------|
| <i>Balanophora nipponica</i> | 190 | 植物 |
| <i>Barbastella pacifica</i> | 269 | 哺乳類 |
| <i>Barnea fragilis</i> | 444 | 海岸動物 |
| <i>Batillaria multiformis</i> | 429 | 海岸動物 |

| 学名 | 頁 | 分類 |
|---|-----|------|
| <i>Batillaria zonalis</i> | 429 | 海岸動物 |
| <i>Batozonellus lacerticida</i> | 398 | 昆虫類 |
| <i>Bembecinus hungaricus japonicus</i> | 399 | 昆虫類 |
| <i>Bembidion articulatum</i> | 367 | 昆虫類 |
| <i>Bembidion collutum semiluitum</i> | 366 | 昆虫類 |
| <i>Bembidion sumaoi</i> | 366 | 昆虫類 |
| <i>Bembidion yokohamae</i> | 367 | 昆虫類 |
| <i>Bembix niponica</i> | 399 | 昆虫類 |
| <i>Berchemia longiracemosa</i> | 165 | 植物 |
| <i>Berchemiella berchemiifolia</i> | 166 | 植物 |
| <i>Betula corylifolia</i> | 176 | 植物 |
| <i>Bidens maximowicziana</i> | 240 | 植物 |
| <i>Bistorta abukumensis</i> | 191 | 植物 |
| <i>Bistorta officinalis</i> subsp. <i>pacifica</i> | 192 | 植物 |
| <i>Bistorta suffulta</i> | 192 | 植物 |
| <i>Bistorta vivipara</i> | 192 | 植物 |
| <i>Blyxa echinosperma</i> | 77 | 植物 |
| <i>Blyxa japonica</i> | 78 | 植物 |
| <i>Boehmeria robusta</i> | 166 | 植物 |
| <i>Bolboschoenus planiculmis</i> | 123 | 植物 |
| <i>Bonnaya antipoda</i> | 222 | 植物 |
| <i>Botaurus stellaris</i> | 290 | 鳥類 |
| <i>Botrychium lunaria</i> | 51 | 植物 |
| <i>Botrychium multifidum</i> var. <i>multifidum</i> | 51 | 植物 |
| <i>Brachinus aeneicostis</i> | 368 | 昆虫類 |
| <i>Brachydontium trichodes</i> | 42 | 植物 |
| <i>Brachyta bifasciata japonica</i> | 391 | 昆虫類 |
| <i>Branta bernicla</i> | 280 | 鳥類 |
| <i>Branta hutchinsii</i> | 280 | 鳥類 |
| <i>Bulbophyllum inconspicuum</i> | 92 | 植物 |
| <i>Buldotskia kamiyai</i> | 461 | 淡水貝類 |
| <i>Bupleurum longiradiatum</i> var. <i>elatus</i> | 252 | 植物 |
| <i>Bupleurum stenophyllum</i> | 252 | 植物 |
| <i>Bustaur indicus</i> | 296 | 鳥類 |
| <i>Buxbaumia minakatae</i> | 42 | 植物 |

C

| | | |
|--|-----|------|
| <i>Caesalpinia decapetala</i> | 161 | 植物 |
| <i>Calamagrostis nana</i> | 137 | 植物 |
| <i>Calanthe discolor</i> | 92 | 植物 |
| <i>Calanthe nipponica</i> | 92 | 植物 |
| <i>Calanthe puberula</i> | 93 | 植物 |
| <i>Calanthe tricarinata</i> | 93 | 植物 |
| <i>Caldesia parnassiiifolia</i> | 76 | 植物 |
| <i>Calidris alpina</i> | 287 | 鳥類 |
| <i>Calidris pygmaea</i> | 286 | 鳥類 |
| <i>Calla palustris</i> | 74 | 植物 |
| <i>Calliergonella cuspidata</i> | 47 | 植物 |
| <i>Calliteara virginea</i> | 414 | 昆虫類 |
| <i>Campanula chamissonis</i> | 236 | 植物 |
| <i>Campandrium sexdentatum</i> | 455 | 海岸動物 |
| <i>Campylostelium brachycarpum</i> | 43 | 植物 |
| <i>Canis lupus</i> (<i>C. l. hodophilax</i>) | 270 | 哺乳類 |
| <i>Canthophorus nivemarginatus</i> | 358 | 昆虫類 |
| <i>Capricornis crispus</i> | 272 | 哺乳類 |
| <i>Caprimulgus jotaka</i> | 282 | 鳥類 |
| <i>Carabus granulatus telluris</i> | 364 | 昆虫類 |

| 学名 | 頁 | 分類 |
|---|-----|------|
| <i>Carabus maacki aquatilis</i> | 365 | 昆虫類 |
| <i>Carabus opaculus shirahatai</i> | 364 | 昆虫類 |
| <i>Carabus tuberculosus</i> | 365 | 昆虫類 |
| <i>Carassius buergeri</i> subsp.2 | 320 | 魚類 |
| <i>Carassius buergeri</i> × <i>C. auratus</i> | 320 | 魚類 |
| <i>Cardamine lyrata</i> | 187 | 植物 |
| <i>Cardiandra alternifolia</i> | 201 | 植物 |
| <i>Caretta caretta</i> | 310 | 両生爬虫 |
| <i>Carex aphyllopus</i> | 123 | 植物 |
| <i>Carex capricornis</i> | 123 | 植物 |
| <i>Carex cinerascens</i> | 124 | 植物 |
| <i>Carex glabrescens</i> | 124 | 植物 |
| <i>Carex grallatoria</i> var. <i>heteroclita</i> | 124 | 植物 |
| <i>Carex hakkodensis</i> | 125 | 植物 |
| <i>Carex hakonemotana</i> | 125 | 植物 |
| <i>Carex hymenodon</i> | 125 | 植物 |
| <i>Carex kujuzana</i> | 126 | 植物 |
| <i>Carex lasiocarpa</i> var. <i>occultans</i> | 126 | 植物 |
| <i>Carex latisquamea</i> | 126 | 植物 |
| <i>Carex longirostrata</i> var. <i>longirostrata</i> | 127 | 植物 |
| <i>Carex maculata</i> | 127 | 植物 |
| <i>Carex mertensii</i> var. <i>urostachys</i> | 127 | 植物 |
| <i>Carex meyeriana</i> | 128 | 植物 |
| <i>Carex mitrata</i> var. <i>aristata</i> | 128 | 植物 |
| <i>Carex morrowii</i> | 128 | 植物 |
| <i>Carex otayae</i> | 129 | 植物 |
| <i>Carex pallida</i> | 129 | 植物 |
| <i>Carex pseudocuraica</i> | 129 | 植物 |
| <i>Carex pudica</i> | 130 | 植物 |
| <i>Carex rugulosa</i> | 130 | 植物 |
| <i>Carex sabynensis</i> var. <i>rostrata</i> | 131 | 植物 |
| <i>Carex sabynensis</i> var. <i>sabynensis</i> | 130 | 植物 |
| <i>Carex semihyalofructa</i> | 131 | 植物 |
| <i>Carpesium rosulatum</i> | 240 | 植物 |
| <i>Cassida lineola</i> | 395 | 昆虫類 |
| <i>Cassida murraea</i> | 395 | 昆虫類 |
| <i>Cassiope lycopodioides</i> | 205 | 植物 |
| <i>Catocala actaea</i> | 416 | 昆虫類 |
| <i>Catolobus pendulus</i> | 187 | 植物 |
| <i>Catops houyai</i> | 382 | 昆虫類 |
| <i>Cecina manchurica</i> | 435 | 海岸動物 |
| <i>Cecropis daurica</i> | 299 | 鳥類 |
| <i>Celastrus flagellaris</i> | 176 | 植物 |
| <i>Cephalanthera falcata</i> | 93 | 植物 |
| <i>Cephalanthera longifolia</i> | 94 | 植物 |
| <i>Cephalanthera subaphylla</i> | 94 | 植物 |
| <i>Cephus carbo</i> | 288 | 鳥類 |
| <i>Cerasus maximowiczii</i> | 168 | 植物 |
| <i>Ceratopteris gaudichaudii</i> var. <i>vulgaris</i> | 56 | 植物 |
| <i>Cerceris arenaria yanoi</i> | 402 | 昆虫類 |
| <i>Cercion plagiosum</i> | 348 | 昆虫類 |
| <i>Cerebratulus orochi</i> | 427 | 海岸動物 |
| <i>Cerithidea moerchii</i> | 430 | 海岸動物 |
| <i>Cerorhinca monocerata</i> | 289 | 鳥類 |
| <i>Chaenomeles japonica</i> | 168 | 植物 |
| <i>Chaetodera laetescripta laetescripta</i> | 363 | 昆虫類 |
| <i>Chaetopterus cautus</i> | 446 | 海岸動物 |

| 学名 | 頁 | 分類 |
|---|-----|------|
| <i>Chamaegastrodia shikokiana</i> | 94 | 植物 |
| <i>Chamaenerion angustifolium</i> subsp. <i>circumvagum</i> | 184 | 植物 |
| <i>Charadrius alexandrinus</i> | 285 | 鳥類 |
| <i>Charadrius placidus</i> | 285 | 鳥類 |
| <i>Chasmagnathus convexus</i> | 452 | 海岸動物 |
| <i>Cheilolejeunea trapezia</i> | 38 | 植物 |
| <i>Chenopodium gracilispicum</i> | 199 | 植物 |
| <i>Chimarogale platycephalus</i> | 266 | 哺乳類 |
| <i>Chiromantes haematocheir</i> | 453 | 海岸動物 |
| <i>Chlaenius spoliatus motschulskyi</i> | 368 | 昆虫類 |
| <i>Chlaenius suvorovi</i> | 368 | 昆虫類 |
| <i>Chrysanthemum makinoi</i> | 240 | 植物 |
| <i>Chrysanthemum rupestre</i> | 241 | 植物 |
| <i>Chrysanthemum seticuspe</i> f. <i>boreale</i> | 241 | 植物 |
| <i>Chrysochroa fulgidissima fulgidissima</i> | 371 | 昆虫類 |
| <i>Chrysolina virgata</i> | 396 | 昆虫類 |
| <i>Chrysosplenium maximowiczii</i> | 157 | 植物 |
| <i>Cicindela gracilis</i> | 363 | 昆虫類 |
| <i>Cinclus pallasi</i> | 300 | 鳥類 |
| <i>Cingulina</i> cf. <i>cingulata</i> | 439 | 海岸動物 |
| <i>Cingulina cingulata</i> | 439 | 海岸動物 |
| <i>Cinna latifolia</i> | 137 | 植物 |
| <i>Cinnamomum yabunikkei</i> | 74 | 植物 |
| <i>Circus spilonotus</i> | 295 | 鳥類 |
| <i>Cirsium dipsacolepis</i> | 241 | 植物 |
| <i>Cirsium funagataense</i> | 242 | 植物 |
| <i>Cirsium kasaianum</i> | 242 | 植物 |
| <i>Cirsium nambuense</i> | 242 | 植物 |
| <i>Cirsium nipponicum</i> | 243 | 植物 |
| <i>Cirsium ugoense</i> | 243 | 植物 |
| <i>Cirsium yuki-uenoanum</i> | 243 | 植物 |
| <i>Clematis japonica</i> | 149 | 植物 |
| <i>Clematis patens</i> | 149 | 植物 |
| <i>Cleora repulsaria</i> | 411 | 昆虫類 |
| <i>Clithon retropectum</i> | 429 | 海岸動物 |
| <i>Coccinella ainu</i> | 387 | 昆虫類 |
| <i>Codonopsis ussuriensis</i> | 236 | 植物 |
| <i>Coelachne japonica</i> | 137 | 植物 |
| <i>Cololejeunea nakajimae</i> | 38 | 植物 |
| <i>Cololejeunea ornata</i> | 38 | 植物 |
| <i>Cololejeunea trichomamis</i> | 39 | 植物 |
| <i>Conandron ramondioides</i> | 217 | 植物 |
| <i>Conioselinum pacificum</i> | 253 | 植物 |
| <i>Convallaria majalis</i> var. <i>manshurica</i> | 117 | 植物 |
| <i>Copris ochus</i> | 381 | 昆虫類 |
| <i>Coptis trifoliolata</i> | 150 | 植物 |
| <i>Corbicula leana</i> | 462 | 淡水貝類 |
| <i>Corchoropsis crenata</i> | 186 | 植物 |
| <i>Corydalis heterocarpa</i> var. <i>japonica</i> | 144 | 植物 |
| <i>Corydalis ochotensis</i> | 145 | 植物 |
| <i>Corydalis raddeana</i> | 145 | 植物 |
| <i>Cottus hangioensis</i> | 327 | 魚類 |
| <i>Cottus nozawae</i> | 327 | 魚類 |
| <i>Cottus reinii</i> | 327 | 魚類 |
| <i>Coturnicops exquisitus</i> | 283 | 鳥類 |
| <i>Coturnix japonica</i> | 282 | 鳥類 |

| 学名 | 頁 | 分類 |
|--|-----|------|
| <i>Crassula aquatica</i> | 158 | 植物 |
| <i>Cremastra unguiculata</i> | 95 | 植物 |
| <i>Crepidomanes latealatum</i> | 53 | 植物 |
| <i>Cristaria clessini</i> | 461 | 淡水貝類 |
| <i>Crotalaria sessiliflora</i> | 161 | 植物 |
| <i>Cryptogramma crispa</i> | 56 | 植物 |
| <i>Cucullia jankowskii</i> | 416 | 昆虫類 |
| <i>Cuscuta australis</i> | 214 | 植物 |
| <i>Cybister chinensis</i> | 361 | 昆虫類 |
| <i>Cybister lewisianus</i> | 361 | 昆虫類 |
| <i>Cyclograpsus intermedius</i> | 453 | 海岸動物 |
| <i>Cylichnatys yamakawai</i> | 438 | 海岸動物 |
| <i>Cynops pyrrhogaster</i> | 308 | 両生爬虫 |
| <i>Cyperus exaltatus</i> var. <i>iwasakii</i> | 131 | 植物 |
| <i>Cyperus kamtschaticus</i> | 132 | 植物 |
| <i>Cyperus nipponicus</i> var. <i>spiralis</i> | 132 | 植物 |
| <i>Cyperus pacificus</i> var. <i>margoinflatus</i> | 132 | 植物 |
| <i>Cypripedium debile</i> | 95 | 植物 |
| <i>Cypripedium japonicum</i> | 95 | 植物 |
| <i>Cypripedium macranthos</i> | 96 | 植物 |
| <i>Cyrtomium yamamotoi</i> | 65 | 植物 |

D

| | | |
|--|-----|------|
| <i>Dactylostalix ringens</i> | 96 | 植物 |
| <i>Daphne jezoensis</i> | 187 | 植物 |
| <i>Daphne pseudomezereum</i> | 188 | 植物 |
| <i>Dasiphora fruticosa</i> | 169 | 植物 |
| <i>Dasypolia fani</i> | 417 | 昆虫類 |
| <i>Decorifer insignis</i> | 437 | 海岸動物 |
| <i>Decorifer matusimanus</i> | 437 | 海岸動物 |
| <i>Deilephila askoldensis</i> | 414 | 昆虫類 |
| <i>Deinostema adenocaulum</i> | 217 | 植物 |
| <i>Deiratonotus cristatus</i> | 455 | 海岸動物 |
| <i>Dendrobium moniliforme</i> | 96 | 植物 |
| <i>Dennstaedtia scabra</i> | 55 | 植物 |
| <i>Denticollis yasumii</i> | 373 | 昆虫類 |
| <i>Deparia conilii</i> var. <i>angustata</i> | 62 | 植物 |
| <i>Deparia coreana</i> | 63 | 植物 |
| <i>Deparia dimorphophylla</i> | 63 | 植物 |
| <i>Dianemobius csikii</i> | 354 | 昆虫類 |
| <i>Dianthus superbus</i> var. <i>speciosus</i> | 197 | 植物 |
| <i>Diapensia lapponica</i> subsp. <i>obovata</i> | 204 | 植物 |
| <i>Diarsia nipponica</i> | 418 | 昆虫類 |
| <i>Dicentra peregrina</i> | 145 | 植物 |
| <i>Dichelyma japonicum</i> | 45 | 植物 |
| <i>Dichocarpum nipponicum</i> | 150 | 植物 |
| <i>Dichocarpum trachyspermum</i> | 150 | 植物 |
| <i>Diphyscium lorifolium</i> | 42 | 植物 |
| <i>Diplazium chinense</i> | 63 | 植物 |
| <i>Diplazium nipponicum</i> | 64 | 植物 |
| <i>Diplopterygium glaucum</i> | 54 | 植物 |
| <i>Distoleon nigricans</i> | 359 | 昆虫類 |
| <i>Ditrichum macrorhynchum</i> | 43 | 植物 |
| <i>Donacia flemora</i> | 394 | 昆虫類 |
| <i>Donacia hirtihumeralis</i> | 394 | 昆虫類 |
| <i>Donacia japana</i> | 394 | 昆虫類 |
| <i>Donacia ozensis</i> | 393 | 昆虫類 |

| 学名 | 頁 | 分類 |
|--|-----|-----|
| <i>Dontostemon dentatus</i> | 188 | 植物 |
| <i>Dopatrium junceum</i> | 217 | 植物 |
| <i>Dorcus hopei binodulosus</i> | 378 | 昆虫類 |
| <i>Dracocephalum argunense</i> var. <i>japonicum</i> | 222 | 植物 |
| <i>Drepanolejeunea ternatensis</i> | 39 | 植物 |
| <i>Drosera spatulata</i> | 196 | 植物 |
| <i>Drupeus vittipennis</i> | 372 | 昆虫類 |
| <i>Dryopteris amurensis</i> | 65 | 植物 |
| <i>Dryopteris championii</i> | 66 | 植物 |
| <i>Dryopteris fragrans</i> | 66 | 植物 |
| <i>Dryopteris gymnophylla</i> | 66 | 植物 |
| <i>Dryopteris hikonensis</i> | 67 | 植物 |
| <i>Dryopteris kinkiensis</i> | 67 | 植物 |
| <i>Dryopteris kobayashii</i> | 67 | 植物 |
| <i>Dryopteris laeta</i> | 68 | 植物 |
| <i>Dryopteris maximowicziana</i> | 68 | 植物 |
| <i>Dryopteris maximowiczii</i> | 68 | 植物 |
| <i>Dryopteris subhikonensis</i> | 69 | 植物 |
| <i>Drypta ussuriensis</i> | 369 | 昆虫類 |
| <i>Dunbaria villosa</i> | 161 | 植物 |
| <i>Dystaenia ibukiensis</i> | 253 | 植物 |
| <i>Dytiscus marginalis czerskii</i> | 362 | 昆虫類 |

E

| | | |
|---|-----|------|
| <i>Ebala</i> sp. | 437 | 海岸動物 |
| <i>Eclipta thermalis</i> | 244 | 植物 |
| <i>Ectemnius nitobei</i> | 400 | 昆虫類 |
| <i>Egretta eulophotes</i> | 292 | 鳥類 |
| <i>Egretta garzetta</i> | 292 | 鳥類 |
| <i>Elaeagnus macrophylla</i> | 165 | 植物 |
| <i>Elaphrus japonicus</i> | 365 | 昆虫類 |
| <i>Elatostema densiflorum</i> | 166 | 植物 |
| <i>Eleocharis acicularis</i> var. <i>acicularis</i> | 133 | 植物 |
| <i>Eleocharis equisetiformis</i> | 133 | 植物 |
| <i>Eleocharis parvinox</i> | 133 | 植物 |
| <i>Eleocharis parvula</i> | 134 | 植物 |
| <i>Eleorchis japonica</i> | 97 | 植物 |
| <i>Elymus humidus</i> | 138 | 植物 |
| <i>Emberiza sulphurata</i> | 301 | 鳥類 |
| <i>Emberiza yessoensis</i> | 301 | 鳥類 |
| <i>Emysara riederii</i> | 386 | 昆虫類 |
| <i>Enallagma boreale circulatum</i> | 349 | 昆虫類 |
| <i>Endecatomus lanatus</i> | 383 | 昆虫類 |
| <i>Enhydra lutris</i> | 271 | 哺乳類 |
| <i>Epacromis japonicus</i> | 355 | 昆虫類 |
| <i>Epatolmis luctifera japonica</i> | 415 | 昆虫類 |
| <i>Epilobium anagallidifolium</i> | 184 | 植物 |
| <i>Epilobium ciliatum</i> | 184 | 植物 |
| <i>Epilobium palustre</i> | 185 | 植物 |
| <i>Epipactis papillosa</i> var. <i>papillosa</i> | 97 | 植物 |
| <i>Epipactis papillosa</i> var. <i>sayekiana</i> | 97 | 植物 |
| <i>Epipogium japonicum</i> | 98 | 植物 |
| <i>Episyron kurilense</i> | 397 | 昆虫類 |
| <i>Erigeron thunbergii</i> | 244 | 植物 |
| <i>Eriocaulon cinereum</i> | 121 | 植物 |

| 学名 | 頁 | 分類 |
|--|-----|-----|
| <i>Eriocaulon miquelianum</i> var. <i>monococcon</i> | 121 | 植物 |
| <i>Eriocaulon takae</i> | 122 | 植物 |
| <i>Eriophorum gracile</i> | 134 | 植物 |
| <i>Eschrichtius robustus</i> | 272 | 哺乳類 |
| <i>Eubotryoides grayana</i> var. <i>parvifolia</i> | 205 | 植物 |
| <i>Eubotryoides grayana</i> var. <i>pruinosa</i> | 206 | 植物 |
| <i>Eumetopias jubatus</i> | 270 | 哺乳類 |
| <i>Eumyrium sinicum</i> | 49 | 植物 |
| <i>Eupatorium japonicum</i> | 244 | 植物 |
| <i>Euphorbia adenochlora</i> | 177 | 植物 |
| <i>Euphorbia ebracteolata</i> | 177 | 植物 |
| <i>Euphorbia sendaica</i> | 177 | 植物 |
| <i>Euphrasia maximowiczii</i> var. <i>arcuata</i> | 229 | 植物 |
| <i>Euptelea polyandra</i> | 144 | 植物 |
| <i>Euryale ferox</i> | 71 | 植物 |
| <i>Eusphingonotus japonicus</i> | 355 | 昆虫類 |
| <i>Eustrophus niponicus</i> | 384 | 昆虫類 |
| <i>Eutaeniichthys gilli</i> | 328 | 魚類 |
| <i>Euxoa okinosimense</i> | 188 | 植物 |
| <i>Euxoa nigrata</i> | 417 | 昆虫類 |
| <i>Exechesops leucopis</i> | 388 | 昆虫類 |

F

| | | |
|---|-----|------|
| <i>Fabriciana nerippe</i> | 409 | 昆虫類 |
| <i>Falco subbuteo</i> | 298 | 鳥類 |
| <i>Favonius saphirinus</i> | 407 | 昆虫類 |
| <i>Favonius ultramarinus</i> | 407 | 昆虫類 |
| <i>Favonius yuasai</i> | 407 | 昆虫類 |
| <i>Filipendula multijuga</i> | 169 | 植物 |
| <i>Fimbristylis longispica</i> | 134 | 植物 |
| <i>Fimbristylis stauntonii</i> var. <i>tonensis</i> | 135 | 植物 |
| <i>Fixsenia mera</i> | 408 | 昆虫類 |
| <i>Fluviocingula elegantula</i> | 434 | 海岸動物 |
| <i>Fontinalis antipyretica</i> | 45 | 植物 |
| <i>Fontinalis hypnoides</i> | 46 | 植物 |
| <i>Fragaria iinumae</i> | 169 | 植物 |

G

| | | |
|---|-----|------|
| <i>Galearis cyclochila</i> | 98 | 植物 |
| <i>Galium tokyoense</i> | 209 | 植物 |
| <i>Gallinago hardwickii</i> | 287 | 鳥類 |
| <i>Gasterosteus nipponicus</i> | 325 | 魚類 |
| <i>Gastrochilus matsuran</i> | 98 | 植物 |
| <i>Gastrochilus toramanus</i> | 99 | 植物 |
| <i>Gastrodia elata</i> var. <i>pallens</i> | 99 | 植物 |
| <i>Gastrodia pubilabiata</i> | 99 | 植物 |
| <i>Gastropacha quercifolia</i> | 412 | 昆虫類 |
| <i>Gentiana squarrosa</i> | 210 | 植物 |
| <i>Georissus katsuoi</i> | 377 | 昆虫類 |
| <i>Geranium onoei</i> f. <i>alpinum</i> | 182 | 植物 |
| <i>Geranium tripartitum</i> | 182 | 植物 |
| <i>Geum macrophyllum</i> var. <i>sachalinense</i> | 170 | 植物 |
| <i>Glandirana reliquia</i> | 309 | 両生爬虫 |
| <i>Glaucidium palmatum</i> | 151 | 植物 |
| <i>Glirulus japonicus</i> | 265 | 哺乳類 |
| <i>Globicephala macrorhynchus</i> | 272 | 哺乳類 |

| 学名 | 頁 | 分類 |
|--|-----|------|
| <i>Glyceria alnasteretum</i> | 138 | 植物 |
| <i>Glyceria depauperata</i> var. <i>infirm</i> a | 138 | 植物 |
| <i>Glyceria lithuanica</i> | 139 | 植物 |
| <i>Glyphocassis spilota</i> | 396 | 昆虫類 |
| <i>Goodyera biflora</i> | 100 | 植物 |
| <i>Goodyera pendula</i> f. <i>brachyphylla</i> | 100 | 植物 |
| <i>Goodyera repens</i> | 100 | 植物 |
| <i>Gorsachius goisagi</i> | 291 | 鳥類 |
| <i>Grandidierella sanrikuensis</i> | 449 | 海岸動物 |
| <i>Graphelmis shirahatai</i> | 372 | 昆虫類 |
| <i>Gratiola japonica</i> | 218 | 植物 |
| <i>Gymnadenia conopsea</i> | 101 | 植物 |
| <i>Gymnapogon japonicus</i> | 326 | 魚類 |
| <i>Gymnocarpium dryopteris</i> | 58 | 植物 |
| <i>Gymnogobius castaneus</i> | 330 | 魚類 |
| <i>Gymnogobius macrognathos</i> | 331 | 魚類 |
| <i>Gymnogobius mororanus</i> | 330 | 魚類 |
| <i>Gymnogobius uchidai</i> | 330 | 魚類 |
| <i>Gynacantha japonica</i> | 349 | 昆虫類 |
| <i>Gyraulus soritai</i> | 464 | 淡水貝類 |
| <i>Gyraulus</i> sp. | 464 | 淡水貝類 |

H

| | | |
|--|-----|------|
| <i>Habenaria linearifolia</i> | 101 | 植物 |
| <i>Habenaria sagittifera</i> | 101 | 植物 |
| <i>Halcyon coromanda</i> | 298 | 鳥類 |
| <i>Halenia corniculata</i> | 210 | 植物 |
| <i>Halerpestes kawakamii</i> | 151 | 植物 |
| <i>Haliaeetus albicilla</i> | 295 | 鳥類 |
| <i>Haliaeetus pelagicus</i> | 295 | 鳥類 |
| <i>Haliplus sharpi</i> | 360 | 昆虫類 |
| <i>Halobisium orientale japonicum</i> | 448 | 海岸動物 |
| <i>Haplomitrium mnioides</i> | 35 | 植物 |
| <i>Hattorianthus erimonus</i> | 36 | 植物 |
| <i>Hedysarum vicioides</i> subsp. <i>japonicum</i> var. <i>japonicum</i> | 162 | 植物 |
| <i>Heliotropium japonicum</i> | 215 | 植物 |
| <i>Hemigrapsus longitarsis</i> | 452 | 海岸動物 |
| <i>Hemipilia chidori</i> | 102 | 植物 |
| <i>Hemipilia cucullata</i> | 102 | 植物 |
| <i>Hemipilia graminifolia</i> | 102 | 植物 |
| <i>Heoclisia japonica</i> | 359 | 昆虫類 |
| <i>Hepatica nobilis</i> var. <i>japonica</i> f. <i>variegata</i> | 151 | 植物 |
| <i>Heracleum sphondylium</i> var. <i>nipponicum</i> | 253 | 植物 |
| <i>Herminium angustifolium</i> | 103 | 植物 |
| <i>Hesperocorixa distanti hokkensis</i> | 357 | 昆虫類 |
| <i>Heterogaster urticae</i> | 358 | 昆虫類 |
| <i>Hirundapus caudacutus</i> | 283 | 鳥類 |
| <i>Hisatsugia splendens</i> | 47 | 植物 |
| <i>Histrionicus histrionicus</i> | 282 | 鳥類 |
| <i>Homotechnes motschulskyi</i> | 374 | 昆虫類 |
| <i>Honckenya peploides</i> var. <i>major</i> | 197 | 植物 |
| <i>Hortensia serrata</i> | 201 | 植物 |
| <i>Hybris subjacens</i> | 359 | 昆虫類 |
| <i>Hydaticus pacificus conspersus</i> | 362 | 昆虫類 |

| 学名 | 頁 | 分類 |
|--|-----|------|
| <i>Hydrobates castro</i> | 290 | 鳥類 |
| <i>Hydrobates leucorhous</i> | 290 | 鳥類 |
| <i>Hydrobates monorhis</i> | 289 | 鳥類 |
| <i>Hydrocharis dubia</i> | 78 | 植物 |
| <i>Hygrobiella laxifolia</i> | 37 | 植物 |
| <i>Hygrotus chinensis</i> | 362 | 昆虫類 |
| <i>Hylaeus macilentus</i> | 402 | 昆虫類 |
| <i>Hylaeus noomen</i> | 402 | 昆虫類 |
| <i>Hyles gallii</i> | 413 | 昆虫類 |
| <i>Hylocomiastrum umbratum</i> | 48 | 植物 |
| <i>Hyloidesmum podocarpum</i> subsp. <i>fallax</i> | 162 | 植物 |
| <i>Hyloidesmum podocarpum</i> subsp. <i>podocarpum</i> | 162 | 植物 |
| <i>Hylomecon japonica</i> | 146 | 植物 |
| <i>Hylotelephium erythrostictum</i> | 158 | 植物 |
| <i>Hymenophyllum polyanthos</i> | 53 | 植物 |
| <i>Hynobius lichenatus</i> | 307 | 両生爬虫 |
| <i>Hynobius nigrescens</i> | 307 | 両生爬虫 |
| <i>Hypericum oliganthum</i> | 181 | 植物 |
| <i>Hypericum vulcanicum</i> | 182 | 植物 |
| <i>Hypnoidus rivularius rivalis</i> | 374 | 昆虫類 |
| <i>Hypomecis definita</i> | 411 | 昆虫類 |
| <i>Hypomesus nipponensis</i> | 324 | 魚類 |
| <i>Hyporhamphus intermedius</i> | 326 | 魚類 |
| <i>Hypoxis aurea</i> | 114 | 植物 |

I

| | | |
|---|-----|-----|
| <i>Ilex geniculata</i> var. <i>glabra</i> | 235 | 植物 |
| <i>Ilex integra</i> | 235 | 植物 |
| <i>Ilex pedunculosa</i> | 235 | 植物 |
| <i>Ilycoris cimicoides exclamationis</i> | 357 | 昆虫類 |
| <i>Inula linariifolia</i> | 245 | 植物 |
| <i>Iris domestica</i> | 114 | 植物 |
| <i>Iris gracilipes</i> | 114 | 植物 |
| <i>Iris laevigata</i> | 115 | 植物 |
| <i>Iris sanguinea</i> | 115 | 植物 |
| <i>Iris setosa</i> | 115 | 植物 |
| <i>Ischiodontus kawaii</i> | 375 | 昆虫類 |
| <i>Isodon shikokianus</i> var. <i>intermedius</i> | 223 | 植物 |
| <i>Isoetes japonica</i> | 50 | 植物 |
| <i>Isoetes pseudojaponica</i> | 51 | 植物 |
| <i>Isonycholips gotoi</i> | 389 | 昆虫類 |
| <i>Ixeridium alpicola</i> | 245 | 植物 |
| <i>Ixeris chinensis</i> subsp. <i>strigosa</i> | 245 | 植物 |
| <i>Ixeris polycephala</i> | 246 | 植物 |
| <i>Ixeris tamagawaensis</i> | 246 | 植物 |
| <i>Ixobrychus eurhythmus</i> | 291 | 鳥類 |
| <i>Ixobrychus sinensis</i> | 291 | 鳥類 |

J

| | | |
|--------------------------------|-----|------|
| <i>Jesogammarus hinumensis</i> | 449 | 海岸動物 |
| <i>Jitlada culter</i> | 442 | 海岸動物 |
| <i>Judolia japonica</i> | 390 | 昆虫類 |
| <i>Juncus bufonius</i> | 122 | 植物 |
| <i>Juncus haenkei</i> | 122 | 植物 |

| 学名 | 頁 | 分類 |
|--|-----|------|
| <i>Kamaka morinoi</i> | 449 | 海岸動物 |
| <i>Kirinia fentoni</i> | 410 | 昆虫類 |
| <i>Koelreuteria paniculata</i> f. <i>miyagiensis</i> | 185 | 植物 |
| <i>Kuhlhasseltia nakaiana</i> | 103 | 植物 |
| <i>Kuhlia rupestris</i> | 326 | 魚類 |

L

| | | |
|---|-----|------|
| <i>Laccophilus lewisius</i> | 363 | 昆虫類 |
| <i>Lachnoderma asperum</i> | 369 | 昆虫類 |
| <i>Laemodonta exaratoides</i> | 440 | 海岸動物 |
| <i>Lanius cristatus</i> | 299 | 鳥類 |
| <i>Lanius tigrinus</i> | 299 | 鳥類 |
| <i>Lapsanastrum apogonoides</i> | 246 | 植物 |
| <i>Lara carbonaria</i> | 400 | 昆虫類 |
| <i>Larinus griseopilosus</i> | 390 | 昆虫類 |
| <i>Larix kaempferi</i> | 71 | 植物 |
| <i>Lasiommata deidamia interrupta</i> | 410 | 昆虫類 |
| <i>Lathraea japonica</i> | 229 | 植物 |
| <i>Lathyrus palustris</i> | 163 | 植物 |
| <i>Lathyrus quinquenervius</i> | 163 | 植物 |
| <i>Lecanorchis suginoana</i> | 103 | 植物 |
| <i>Ledum palustre</i> subsp. <i>diversipilosum</i> var. <i>nipponicum</i> | 206 | 植物 |
| <i>Lefua echigonia</i> | 323 | 魚類 |
| <i>Leiopsammodius japonicus</i> | 379 | 昆虫類 |
| <i>Lemmaphyllum microphyllum</i> | 69 | 植物 |
| <i>Leonurus macranthus</i> | 223 | 植物 |
| <i>Lepisorus angustus</i> | 70 | 植物 |
| <i>Leptidea amurensis</i> | 406 | 昆虫類 |
| <i>Leptispa taguchii</i> | 396 | 昆虫類 |
| <i>Lespedeza tomentosa</i> | 163 | 植物 |
| <i>Lespedeza virgata</i> | 164 | 植物 |
| <i>Lestes japonicus</i> | 347 | 昆虫類 |
| <i>Lethenteron hattai</i> | 319 | 魚類 |
| <i>Lethenteron japonicum</i> | 319 | 魚類 |
| <i>Lethenteron mitsukurii</i> | 319 | 魚類 |
| <i>Lethocerus deyrollei</i> | 356 | 昆虫類 |
| <i>Leucopsarion petersii</i> | 328 | 魚類 |
| <i>Leukoma jedoensis</i> | 444 | 海岸動物 |
| <i>Libellula angelina</i> | 353 | 昆虫類 |
| <i>Ligularia fauriei</i> | 247 | 植物 |
| <i>Lilium maculatum</i> var. <i>bukosanense</i> | 91 | 植物 |
| <i>Lilium rubellum</i> | 91 | 植物 |
| <i>Limonium tetragonum</i> | 191 | 植物 |
| <i>Limosa lapponica</i> | 286 | 鳥類 |
| <i>Limosa limosa</i> | 286 | 鳥類 |
| <i>Linum stelleroides</i> | 181 | 植物 |
| <i>Liparis auriculata</i> | 104 | 植物 |
| <i>Liparis fujiisanensis</i> | 104 | 植物 |
| <i>Liparis krameri</i> | 104 | 植物 |
| <i>Liparis longiracemosa</i> | 105 | 植物 |
| <i>Liparis makinoana</i> | 105 | 植物 |
| <i>Liparis suzumushi</i> | 105 | 植物 |
| <i>Lithospermum murasaki</i> | 215 | 植物 |
| <i>Littorina sitkana</i> | 430 | 海岸動物 |

| 学名 | 頁 | 分類 |
|---|-----|------|
| <i>Locustella pryeri</i> | 300 | 鳥類 |
| <i>Lonicer</i> a <i>alpigena</i> subsp. <i>glehnii</i> | 255 | 植物 |
| <i>Lonicer</i> a <i>caerulea</i> subsp. <i>edulis</i> var. <i>emphyllocalyx</i> | 256 | 植物 |
| <i>Lonicer</i> a <i>kurobushiensis</i> | 256 | 植物 |
| <i>Lonicer</i> a <i>mochidzukiana</i> | 256 | 植物 |
| <i>Lopinga achine achinoides</i> | 410 | 昆虫類 |
| <i>Loranthus tanakae</i> | 190 | 植物 |
| <i>Loxogramme grammitoides</i> | 70 | 植物 |
| <i>Luciola parvula</i> | 376 | 昆虫類 |
| <i>Luehdorfia puziloi inexpecta</i> | 406 | 昆虫類 |
| <i>Lutra nippon</i> | 271 | 哺乳類 |
| <i>Lycodon orientalis</i> | 312 | 両生爬虫 |
| <i>Lycopodiella cernua</i> | 49 | 植物 |
| <i>Lycopodium alpinum</i> | 49 | 植物 |
| <i>Lyrosoma pallidum</i> | 382 | 昆虫類 |
| <i>Lysimachia maritima</i> var. <i>obtusifolia</i> | 202 | 植物 |
| <i>Lysimachia thyrsoiflora</i> | 202 | 植物 |

M

| | | |
|---|-----|------|
| <i>Macaca fuscata</i> | 265 | 哺乳類 |
| <i>Macoma contabulata</i> | 443 | 海岸動物 |
| <i>Macromia daimoji</i> | 352 | 昆虫類 |
| <i>Macrophthalmus abbreviatus</i> | 454 | 海岸動物 |
| <i>Macropodium pterospermum</i> | 189 | 植物 |
| <i>Maianthemum bifolium</i> | 117 | 植物 |
| <i>Maianthemum viridiflorum</i> | 117 | 植物 |
| <i>Margaritifera laevis</i> | 462 | 淡水貝類 |
| <i>Marsilea quadrifolia</i> | 54 | 植物 |
| <i>Mauremys japonica</i> | 310 | 両生爬虫 |
| <i>Megaceryle lugubris</i> | 298 | 鳥類 |
| <i>Megachile kobensis</i> | 404 | 昆虫類 |
| <i>Megachile pseudomonticola</i> | 404 | 昆虫類 |
| <i>Megaspilates mundataria</i> | 411 | 昆虫類 |
| <i>Melampyrum laxum</i> var. <i>laxum</i> | 229 | 植物 |
| <i>Melandrya shimoyamai</i> | 385 | 昆虫類 |
| <i>Melanochlamys fukudai</i> | 438 | 海岸動物 |
| <i>Melica onoei</i> | 139 | 植物 |
| <i>Melittomma oculare</i> | 383 | 昆虫類 |
| <i>Meloe brevicollis</i> | 383 | 昆虫類 |
| <i>Meloe violaceus semenowi</i> | 384 | 昆虫類 |
| <i>Mentha japonica</i> | 223 | 植物 |
| <i>Meotiorhynchus querendus</i> | 389 | 昆虫類 |
| <i>Meretrix lusoria</i> | 445 | 海岸動物 |
| <i>Meristhus nipponensis</i> | 373 | 昆虫類 |
| <i>Mertensia maritima</i> subsp. <i>asiatica</i> | 216 | 植物 |
| <i>Mesoptychia heterocolpos</i> | 37 | 植物 |
| <i>Meteorium buchananii</i> subsp. <i>helminthocladulum</i> | 46 | 植物 |
| <i>Micraspis kiotoensis</i> | 387 | 昆虫類 |
| <i>Microlepidia marginata</i> | 56 | 植物 |
| <i>Micromys minutus</i> | 265 | 哺乳類 |
| <i>Microphis (Oostethus) brachyurus brachyurus</i> | 325 | 魚類 |
| <i>Microtralia acteocinoides</i> | 440 | 海岸動物 |
| <i>Mimumesa littoralis</i> | 401 | 昆虫類 |
| <i>Miscanthus tinctorius</i> | 139 | 植物 |

| 学名 | 頁 | 分類 |
|--|-----|------|
| <i>Misgurnus</i> sp.(Clade A) | 323 | 魚類 |
| <i>Misolampidius imasakai</i> | 387 | 昆虫類 |
| <i>Mitrasacme indica</i> | 211 | 植物 |
| <i>Mitrasacme pygmaea</i> | 212 | 植物 |
| <i>Mitrella martensi</i> | 435 | 海岸動物 |
| <i>Monochoria korsakowii</i> | 118 | 植物 |
| <i>Mortonagrion Hirosei</i> | 348 | 昆虫類 |
| <i>Mosla hirta</i> | 224 | 植物 |
| <i>Mosla japonica</i> | 224 | 植物 |
| <i>Mosotalesus impressus sachalinensis</i> | 374 | 昆虫類 |
| <i>Mugilogobius abei</i> | 329 | 魚類 |
| <i>Muhlenbergia ramosa</i> | 140 | 植物 |
| <i>Murina hilgendorfi</i> | 267 | 哺乳類 |
| <i>Mustela erminea (M. e. nippon)</i> | 271 | 哺乳類 |
| <i>Mya japonica</i> | 443 | 海岸動物 |
| <i>Mycetoma affine</i> | 384 | 昆虫類 |
| <i>Myotis bombinus</i> | 267 | 哺乳類 |
| <i>Myotis ikonnikovi</i> | 268 | 哺乳類 |
| <i>Myotis longicaudatus</i> | 267 | 哺乳類 |
| <i>Myotis pruinosus</i> | 268 | 哺乳類 |
| <i>Myriocoleopsis minutissima</i> | 39 | 植物 |
| <i>Myriophyllum oguraense</i> | 159 | 植物 |
| <i>Myriophyllum ussuriense</i> | 160 | 植物 |

N

| | | |
|--|-----|------|
| <i>Nabalus tanakae</i> | 247 | 植物 |
| <i>Najas ancistrocarpa</i> | 78 | 植物 |
| <i>Najas chinensis</i> | 79 | 植物 |
| <i>Najas gracillima</i> | 79 | 植物 |
| <i>Najas graminea</i> | 79 | 植物 |
| <i>Najas marina</i> | 80 | 植物 |
| <i>Najas minor</i> | 80 | 植物 |
| <i>Najas oguraensis</i> | 80 | 植物 |
| <i>Najas yezoensis</i> | 81 | 植物 |
| <i>Namanereis littoralis</i> species group | 445 | 海岸動物 |
| <i>Nannophya pygmaea</i> | 353 | 昆虫類 |
| <i>Nassarius livescens</i> | 436 | 海岸動物 |
| <i>Nehalennia speciosa</i> | 348 | 昆虫類 |
| <i>Neodiciadiella flagellifera</i> | 47 | 植物 |
| <i>Neolindleya camtschatica</i> | 106 | 植物 |
| <i>Neomolinia fauriei</i> | 140 | 植物 |
| <i>Neophocaena asiaeorientalis</i> | 273 | 哺乳類 |
| <i>Neosamomorpha akiuensis</i> | 143 | 植物 |
| <i>Neosamomorpha pubiculmis</i> | 143 | 植物 |
| <i>Neottia cordata</i> | 106 | 植物 |
| <i>Neottia inagakii</i> | 106 | 植物 |
| <i>Neottia japonica</i> | 107 | 植物 |
| <i>Neottia makinoana</i> | 107 | 植物 |
| <i>Neottia papilligera</i> | 107 | 植物 |
| <i>Nepeta subsessilis</i> | 224 | 植物 |
| <i>Nerita japonica</i> | 428 | 海岸動物 |
| <i>Nervilia nipponica</i> | 108 | 植物 |
| <i>Nihon krameri</i> | 216 | 植物 |
| <i>Ninox japonica</i> | 296 | 鳥類 |
| <i>Niphanda fusca</i> | 408 | 昆虫類 |
| <i>Nipponoluciola cruciata</i> | 376 | 昆虫類 |
| <i>Nipponomysella subtruncata</i> | 441 | 海岸動物 |

| 学名 | 頁 | 分類 |
|---|-----|------|
| <i>Nisaetus nipalensis</i> | 293 | 鳥類 |
| <i>Nitidotellina hokkaidoensis</i> | 443 | 海岸動物 |
| <i>Nomia incerta</i> | 403 | 昆虫類 |
| <i>Notochodaeus maculatus maculatus</i> | 381 | 昆虫類 |
| <i>Notomastus</i> sp. | 446 | 海岸動物 |
| <i>Notonecta reuteri</i> | 357 | 昆虫類 |
| <i>Nozeba ziczac</i> | 434 | 海岸動物 |
| <i>Numenius madagascariensis</i> | 285 | 鳥類 |
| <i>Nyctalus aviator</i> | 268 | 哺乳類 |
| <i>Nycticorax nycticorax</i> | 292 | 鳥類 |
| <i>Nyctycia strigidisca owadai</i> | 416 | 昆虫類 |
| <i>Nygmia staudingeri</i> | 415 | 昆虫類 |
| <i>Nymphoides coreana</i> | 237 | 植物 |
| <i>Nymphoides indica</i> | 238 | 植物 |
| <i>Nymphoides peltata</i> | 238 | 植物 |

O

| | | |
|---------------------------------------|-----|------|
| <i>Oberonia japonica</i> | 108 | 植物 |
| <i>Obrium obscuripenne takakuwai</i> | 392 | 昆虫類 |
| <i>Ocypode stimpsoni</i> | 454 | 海岸動物 |
| <i>Odontosoria chinensis</i> | 55 | 植物 |
| <i>Oestergrenia dubia</i> | 456 | 海岸動物 |
| <i>Oncorhynchus masou masou</i> | 324 | 魚類 |
| <i>Onthophagus bivertex</i> | 380 | 昆虫類 |
| <i>Onthophagus ocellatopunctatus</i> | 380 | 昆虫類 |
| <i>Onthophagus ohbayashii</i> | 380 | 昆虫類 |
| <i>Onychium japonicum</i> | 57 | 植物 |
| <i>Onychodactylus intermedius</i> | 308 | 両生爬虫 |
| <i>Onychodactylus nipponoborealis</i> | 307 | 両生爬虫 |
| <i>Oodes echigonus</i> | 369 | 昆虫類 |
| <i>Ophioglossum namegatae</i> | 52 | 植物 |
| <i>Orchelimum kasumigauraense</i> | 354 | 昆虫類 |
| <i>Oreoscaptor mizura</i> | 266 | 哺乳類 |
| <i>Orisarma intermedium</i> | 453 | 海岸動物 |
| <i>Orobanchae coerulea</i> | 230 | 植物 |
| <i>Orostachys japonica</i> | 159 | 植物 |
| <i>Oryzias latipes</i> | 325 | 魚類 |
| <i>Osmia orientalis</i> | 403 | 昆虫類 |
| <i>Osmunda claytoniana</i> | 52 | 植物 |
| <i>Osmunda lancea</i> | 53 | 植物 |
| <i>Ottelia alismoides</i> | 81 | 植物 |
| <i>Otus semitorques</i> | 297 | 鳥類 |
| <i>Otus sunia</i> | 296 | 鳥類 |
| <i>Oxya ninpoensis</i> | 355 | 昆虫類 |

P

| | | |
|--|-----|------|
| <i>Pachypidonia bodemeyeri</i> | 391 | 昆虫類 |
| <i>Paeonia japonica</i> | 155 | 植物 |
| <i>Paeonia obovata</i> | 156 | 植物 |
| <i>Pagurus nigrofascia</i> | 450 | 海岸動物 |
| <i>Paludinellassimineae tanegashimae</i> | 433 | 海岸動物 |
| <i>Panesthia angustipennis spadica</i> | 354 | 昆虫類 |
| <i>Paracaudina chilensis</i> | 456 | 海岸動物 |
| <i>Parafossarulus manchouricus japonicus</i> | 463 | 淡水貝類 |
| <i>Paraholcostethus breviceps</i> | 358 | 昆虫類 |
| <i>Paraprenanthes sororia</i> | 247 | 植物 |
| <i>Parasesarma pictum</i> | 454 | 海岸動物 |

| 学名 | 頁 | 分類 |
|---|-----|------|
| <i>Parietaria micrantha</i> var. <i>coreana</i> | 167 | 植物 |
| <i>Paris verticillata</i> | 89 | 植物 |
| <i>Parum colligata</i> | 413 | 昆虫類 |
| <i>Patelloida conulus</i> | 427 | 海岸動物 |
| <i>Patinapta ooplax</i> | 456 | 海岸動物 |
| <i>Pecteilis radiata</i> | 108 | 植物 |
| <i>Pedicularis apodochila</i> | 230 | 植物 |
| <i>Pedicularis japonica</i> | 230 | 植物 |
| <i>Pedicularis resupinata</i> subsp. <i>teucriffolia</i> var. <i>caespitosa</i> | 231 | 植物 |
| <i>Pelodiscus japonicus</i> | 311 | 両生爬虫 |
| <i>Pelophylax nigromaculatus</i> | 310 | 両生爬虫 |
| <i>Pelophylax porosus porosus</i> | 309 | 両生爬虫 |
| <i>Penthorum chinense</i> | 160 | 植物 |
| <i>Peregrinamor ohshimai</i> | 442 | 海岸動物 |
| <i>Peristrophe japonica</i> var. <i>subrotunda</i> | 234 | 植物 |
| <i>Pernis ptilorhynchus</i> | 293 | 鳥類 |
| <i>Persicaria amphibia</i> var. <i>amurensis</i> | 193 | 植物 |
| <i>Persicaria erectominor</i> var. <i>erectominor</i> | 193 | 植物 |
| <i>Persicaria foliosa</i> var. <i>paludicola</i> | 193 | 植物 |
| <i>Persicaria hastatosagittata</i> | 194 | 植物 |
| <i>Persicaria maackiana</i> | 194 | 植物 |
| <i>Persicaria maculosa</i> subsp. <i>hirticaulis</i> var. <i>amblyophylla</i> | 194 | 植物 |
| <i>Persicaria taquetii</i> | 195 | 植物 |
| <i>Persicaria trigonocarpa</i> | 195 | 植物 |
| <i>Pertya robusta</i> | 248 | 植物 |
| <i>Pertya scandens</i> | 248 | 植物 |
| <i>Phacellanthus tubiflorus</i> | 231 | 植物 |
| <i>Phacelurus latifolius</i> | 140 | 植物 |
| <i>Phaeoceros gemmifer</i> | 35 | 植物 |
| <i>Phaleria atriceps</i> | 386 | 昆虫類 |
| <i>Phaleromela subhumeralis</i> | 386 | 昆虫類 |
| <i>Phenacolepas</i> sp. | 428 | 海岸動物 |
| <i>Phengaris arionides takamukui</i> | 408 | 昆虫類 |
| <i>Philyra kanekoi</i> | 451 | 海岸動物 |
| <i>Phlegmariurus cryptomerinus</i> | 50 | 植物 |
| <i>Phocoena phocoena</i> | 273 | 哺乳類 |
| <i>Phoebastria albatrus</i> | 289 | 鳥類 |
| <i>Phosphuga atrata atrata</i> | 382 | 昆虫類 |
| <i>Phryganophilus ruficollis rosti</i> | 385 | 昆虫類 |
| <i>Phyllodoce nipponica</i> | 206 | 植物 |
| <i>Phyllospadix iwatensis</i> | 83 | 植物 |
| <i>Pilea peploides</i> | 167 | 植物 |
| <i>Pinguicula macroceras</i> | 231 | 植物 |
| <i>Pipistrellus endoi</i> | 269 | 哺乳類 |
| <i>Pirenella pupiformis</i> | 430 | 海岸動物 |
| <i>Plagiochila parvifolia</i> | 37 | 植物 |
| <i>Plagiogyria euphlebia</i> | 55 | 植物 |
| <i>Plagiomnium tezukaе</i> | 45 | 植物 |
| <i>Platanthera chorisiana</i> | 109 | 植物 |
| <i>Platanthera hologlottis</i> | 109 | 植物 |
| <i>Platanthera iinumae</i> | 109 | 植物 |
| <i>Platanthera japonica</i> | 110 | 植物 |
| <i>Platanthera mandarinorum</i> subsp. <i>mandarinorum</i> var. <i>macrocentron</i> | 110 | 植物 |

| 学名 | 頁 | 分類 |
|---|-----|------|
| <i>Platanthera mandarinorum</i> subsp. <i>maximowicziana</i> var. <i>maximowicziana</i> | 111 | 植物 |
| <i>Platanthera mandarinorum</i> subsp. <i>maximowicziana</i> var. <i>maximowicziana</i> | 111 | 植物 |
| <i>Platanthera minor</i> | 111 | 植物 |
| <i>Platanthera takedae</i> subsp. <i>uzenensis</i> | 111 | 植物 |
| <i>Plateumaris shirahatai</i> | 395 | 昆虫類 |
| <i>Platycerus acuticollis</i> | 379 | 昆虫類 |
| <i>Platycnemis foliacea sasakii</i> | 347 | 昆虫類 |
| <i>Platycodon grandiflorus</i> | 237 | 植物 |
| <i>Platycrater involuocrata</i> | 201 | 植物 |
| <i>Plebejus argyrognomon praeterinsularis</i> | 409 | 昆虫類 |
| <i>Plecotus sacrimontis</i> | 269 | 哺乳類 |
| <i>Plestiodon finitimus</i> | 311 | 両生爬虫 |
| <i>Pleurospermum uralense</i> | 254 | 植物 |
| <i>Poa nemoralis</i> | 141 | 植物 |
| <i>Pogonia japonica</i> | 112 | 植物 |
| <i>Pogonia minor</i> | 112 | 植物 |
| <i>Pogonia subalpina</i> | 112 | 植物 |
| <i>Pogostemon yatabeanus</i> | 225 | 植物 |
| <i>Pollia japonica</i> | 118 | 植物 |
| <i>Polygonatum humile</i> | 118 | 植物 |
| <i>Polypodium sibiricum</i> | 70 | 植物 |
| <i>Polypogon monspeliensis</i> | 141 | 植物 |
| <i>Polystichum tagawanum</i> | 69 | 植物 |
| <i>Polytrichum strictum</i> | 41 | 植物 |
| <i>Pompilus cinereus</i> | 397 | 昆虫類 |
| <i>Porella perrottetiana</i> | 40 | 植物 |
| <i>Porterius dalli</i> | 441 | 海岸動物 |
| <i>Potamogeton alpinus</i> | 84 | 植物 |
| <i>Potamogeton berchtoldii</i> | 85 | 植物 |
| <i>Potamogeton compressus</i> | 85 | 植物 |
| <i>Potamogeton cristatus</i> | 85 | 植物 |
| <i>Potamogeton gramineus</i> | 86 | 植物 |
| <i>Potamogeton maackianus</i> | 86 | 植物 |
| <i>Potamogeton octandrus</i> var. <i>miduhikimo</i> | 87 | 植物 |
| <i>Potamogeton octandrus</i> var. <i>octandrus</i> | 86 | 植物 |
| <i>Potamogeton perfoliatus</i> | 87 | 植物 |
| <i>Potamogeton pusillus</i> | 87 | 植物 |
| <i>Potamogeton wrightii</i> | 88 | 植物 |
| <i>Potentilla chinensis</i> | 170 | 植物 |
| <i>Potentilla niponica</i> | 170 | 植物 |
| <i>Potentilla togasii</i> | 171 | 植物 |
| <i>Potentilla toyamensis</i> | 171 | 植物 |
| <i>Primula farinosa</i> subsp. <i>modesta</i> var. <i>fauriei</i> | 202 | 植物 |
| <i>Primula japonica</i> | 203 | 植物 |
| <i>Primula sieboldii</i> | 203 | 植物 |
| <i>Pristolytus sagulatus sagulatus</i> | 375 | 昆虫類 |
| <i>Pronodularia</i> cf. <i>japanensis</i> 3 | 462 | 淡水貝類 |
| <i>Prunella collaris</i> | 301 | 鳥類 |
| <i>Psammotettix maritimus</i> | 356 | 昆虫類 |
| <i>Psen miyagino</i> | 401 | 昆虫類 |
| <i>Psenulus carinifrons iwatai</i> | 401 | 昆虫類 |
| <i>Pseudamophilus japonicus</i> | 373 | 昆虫類 |

| 学名 | 頁 | 分類 |
|-------------------------------------|-----|------|
| <i>Pseudaspius sachalinensis</i> | 322 | 魚類 |
| <i>Pseudochelonarium japonicum</i> | 372 | 昆虫類 |
| <i>Pseudocopera rubripes</i> | 347 | 昆虫類 |
| <i>Pseudognaphalium hypoleucum</i> | 248 | 植物 |
| <i>Pseudogobio polystictus</i> | 322 | 魚類 |
| <i>Pseudogobius masago</i> | 329 | 魚類 |
| <i>Pseudoliotia pulchella</i> | 434 | 海岸動物 |
| <i>Pseudopanolis takao</i> | 417 | 昆虫類 |
| <i>Pseudorasbora pumila</i> | 322 | 魚類 |
| <i>Pseudostellaria heterophylla</i> | 197 | 植物 |
| <i>Pseudostellaria japonica</i> | 198 | 植物 |
| <i>Pseudostellaria palibiniana</i> | 198 | 植物 |
| <i>Psilotum nudum</i> | 52 | 植物 |
| <i>Pteridophyllum racemosum</i> | 146 | 植物 |
| <i>Pteris multifida</i> | 57 | 植物 |
| <i>Pteris nipponica</i> | 57 | 植物 |
| <i>Pteris terminalis</i> | 58 | 植物 |
| <i>Pternopetalum tanakae</i> | 254 | 植物 |
| <i>Pterobryon arbuscula</i> | 48 | 植物 |
| <i>Pterostichus nishiyamai</i> | 370 | 昆虫類 |
| <i>Pterygocalyx volubilis</i> | 210 | 植物 |
| <i>Ptilodon kuwayamae</i> | 414 | 昆虫類 |
| <i>Puccinellia nipponica</i> | 141 | 植物 |
| <i>Pulsatilla cernua</i> | 152 | 植物 |
| <i>Pygostrangalia dulcis</i> | 391 | 昆虫類 |
| <i>Pyrgulina shigeyasui</i> | 439 | 海岸動物 |
| <i>Pyrgus maculatus maculatus</i> | 405 | 昆虫類 |
| <i>Pyrhila pisum</i> | 451 | 海岸動物 |
| <i>Pyrocoelia discicollis</i> | 376 | 昆虫類 |
| <i>Pyrola alpina</i> | 207 | 植物 |
| <i>Pyrola faurieana</i> | 207 | 植物 |
| <i>Pyrosia hastata</i> | 71 | 植物 |
| <i>Pyrus ussuriensis</i> | 171 | 植物 |

Q

| | | |
|-----------------------|-----|----|
| <i>Quercus glauca</i> | 175 | 植物 |
|-----------------------|-----|----|

R

| | | |
|--|-----|------|
| <i>Rallus indicus</i> | 283 | 鳥類 |
| <i>Rana ornativentris</i> | 309 | 両生爬虫 |
| <i>Rana tagoi</i> | 308 | 両生爬虫 |
| <i>Ranunculus chinensis</i> | 152 | 植物 |
| <i>Ranunculus extorris</i> | 152 | 植物 |
| <i>Ranunculus hakkodensis</i> | 153 | 植物 |
| <i>Ranunculus kadzusensis</i> | 153 | 植物 |
| <i>Ranunculus nipponicus</i> var. <i>submersus</i> | 153 | 植物 |
| <i>Ranzania japonica</i> | 146 | 植物 |
| <i>Rapana venosa</i> | 436 | 海岸動物 |
| <i>Reticunassa hiradoensis</i> | 436 | 海岸動物 |
| <i>Rhantus yessoensis</i> | 360 | 昆虫類 |
| <i>Rhaphiolepis indica</i> var. <i>umbellata</i> | 172 | 植物 |
| <i>Rhinogobius mizunoii</i> | 329 | 魚類 |
| <i>Rhodobryum giganteum</i> | 44 | 植物 |
| <i>Rhodobryum ontariense</i> | 44 | 植物 |
| <i>Rhodobryum roseum</i> | 44 | 植物 |
| <i>Rhynchina cramboides</i> | 415 | 昆虫類 |
| <i>Rhynchosia acuminatifolia</i> | 164 | 植物 |

| 学名 | 頁 | 分類 |
|---|-----|----|
| <i>Ribes ambiguum</i> | 156 | 植物 |
| <i>Ribes maximowiczianum</i> | 156 | 植物 |
| <i>Ribes sachalinense</i> | 157 | 植物 |
| <i>Riccia fluitans</i> | 35 | 植物 |
| <i>Ricciolepis natans</i> | 36 | 植物 |
| <i>Rorippa cantoniensis</i> | 189 | 植物 |
| <i>Rosa acicularis</i> | 172 | 植物 |
| <i>Rosa nipponensis</i> | 172 | 植物 |
| <i>Rosa rugosa</i> | 173 | 植物 |
| <i>Rotala mexicana</i> | 183 | 植物 |
| <i>Rubia chinensis</i> f. <i>mitis</i> | 209 | 植物 |
| <i>Rubia jesoensis</i> | 209 | 植物 |
| <i>Rubus idaeus</i> | 173 | 植物 |
| <i>Rubus mesogaeus</i> var. <i>adenothrix</i> | 173 | 植物 |
| <i>Rubus pseudojaponicus</i> | 174 | 植物 |
| <i>Rubus pungens</i> var. <i>oldhamii</i> | 174 | 植物 |
| <i>Rubus yoshinoi</i> | 174 | 植物 |
| <i>Rumex longifolius</i> | 195 | 植物 |
| <i>Rumex madaio</i> | 196 | 植物 |
| <i>Ruppia maritima</i> | 89 | 植物 |

S

| | | |
|---|-----|------|
| <i>Sagittaria aginashi</i> | 77 | 植物 |
| <i>Sagittaria pygmaea</i> | 77 | 植物 |
| <i>Salangichthys microdon</i> | 324 | 魚類 |
| <i>Salicornia perennans</i> | 200 | 植物 |
| <i>Salix cardiophylla</i> | 178 | 植物 |
| <i>Salix hukaoana</i> | 178 | 植物 |
| <i>Salix shiraii</i> | 178 | 植物 |
| <i>Salvia japonica</i> | 225 | 植物 |
| <i>Salvia plebeia</i> | 225 | 植物 |
| <i>Salvinia natans</i> | 54 | 植物 |
| <i>Samolus parviflorus</i> | 203 | 植物 |
| <i>Sanguisorba tenuifolia</i> | 175 | 植物 |
| <i>Sanssurea maximowiczii</i> | 249 | 植物 |
| <i>Sasaella yamakitensis</i> | 144 | 植物 |
| <i>Sasaokaea aomoriensis</i> | 46 | 植物 |
| <i>Satonius kurosawai</i> | 370 | 昆虫類 |
| <i>Saururus chinensis</i> | 72 | 植物 |
| <i>Saussurea fuboensis</i> | 249 | 植物 |
| <i>Saussurea pulchella</i> | 249 | 植物 |
| <i>Saussurea ussuriensis</i> | 250 | 植物 |
| <i>Saussurea yuki-uenoana</i> | 250 | 植物 |
| <i>Saxifraga bronchialis</i> subsp. <i>funstonii</i> var. <i>rebunshirensis</i> | 157 | 植物 |
| "Sayella" sp. | 440 | 海岸動物 |
| <i>Scabiosa japonica</i> | 257 | 植物 |
| <i>Scarites aterrimus</i> | 366 | 昆虫類 |
| <i>Scatophagus argus</i> | 331 | 魚類 |
| <i>Scepticus griseus</i> | 389 | 昆虫類 |
| <i>Schiffneria hyalina</i> | 36 | 植物 |
| <i>Schisandra chinensis</i> | 72 | 植物 |
| <i>Schizachyrium brevifolium</i> | 142 | 植物 |
| <i>Schizocodon soldanelloides</i> var. <i>magnus</i> | 204 | 植物 |
| <i>Schoenoplectiella orthorhizomata</i> | 135 | 植物 |
| <i>Schoenus apogon</i> | 135 | 植物 |

| 学名 | 頁 | 分類 |
|--|-----|------|
| <i>Sciaphila nana</i> | 89 | 植物 |
| <i>Scirpus maximowiczii</i> | 136 | 植物 |
| <i>Scleria parvula</i> | 136 | 植物 |
| <i>Scolia histrionica japonica</i> | 398 | 昆虫類 |
| <i>Scrophularia buergeriana</i> | 221 | 植物 |
| <i>Scrophularia duplicatoserrata</i> | 221 | 植物 |
| <i>Scrophularia grayanoides</i> | 222 | 植物 |
| <i>Scutellaria brachyspica</i> | 226 | 植物 |
| <i>Scutellaria laeteviolacea</i> | 226 | 植物 |
| <i>Scutellaria strigillosa</i> | 226 | 植物 |
| <i>Sedum japonicum</i> var. <i>senanense</i> | 159 | 植物 |
| <i>Selaginella involvens</i> | 50 | 植物 |
| <i>Semiaquilegia adoxoides</i> | 154 | 植物 |
| <i>Semisulcospira reiniana</i> | 463 | 淡水貝類 |
| <i>Sestrostoma toriumii</i> | 452 | 海岸動物 |
| <i>Setaria chondrachne</i> | 142 | 植物 |
| <i>Shirozua jonasi</i> | 406 | 昆虫類 |
| <i>Sicyopterus japonicus</i> | 328 | 魚類 |
| <i>Sinogomphus flavolimbatus</i> | 350 | 昆虫類 |
| <i>Sinomenium acutum</i> | 154 | 植物 |
| <i>Siphonacmea oblongata</i> | 438 | 海岸動物 |
| <i>Siphonosoma cumanense</i> | 448 | 海岸動物 |
| <i>Sipunculus nudus</i> | 448 | 海岸動物 |
| <i>Sium serra</i> | 254 | 植物 |
| <i>Sium suave</i> var. <i>nipponicum</i> | 255 | 植物 |
| <i>Smilax stans</i> | 90 | 植物 |
| <i>Solanum japonense</i> | 214 | 植物 |
| <i>Solen strictus</i> | 442 | 海岸動物 |
| <i>Solidago yokusaiana</i> | 250 | 植物 |
| <i>Somatochlora clavata</i> | 351 | 昆虫類 |
| <i>Somatochlora viridiaenea</i> | 351 | 昆虫類 |
| <i>Sophiodela japonica</i> | 364 | 昆虫類 |
| <i>Sorex shinto</i> | 266 | 哺乳類 |
| <i>Spaelotis lucens</i> | 418 | 昆虫類 |
| <i>Sparganium coreanum</i> | 119 | 植物 |
| <i>Sparganium emersum</i> | 119 | 植物 |
| <i>Sparganium fallax</i> | 119 | 植物 |
| <i>Sparganium glomeratum</i> | 120 | 植物 |
| <i>Sparganium japonicum</i> | 120 | 植物 |
| <i>Sparganium stoloniferum</i> | 120 | 植物 |
| <i>Sparganium subglobosum</i> | 121 | 植物 |
| <i>Speyeria aglaja fortuna</i> | 409 | 昆虫類 |
| <i>Sphaeridium scarabaeoides</i> | 377 | 昆虫類 |
| <i>Sphagnum imbricatum</i> | 40 | 植物 |
| <i>Sphagnum microporum</i> | 40 | 植物 |
| <i>Sphagnum palustre</i> | 41 | 植物 |
| <i>Sphagnum subobesum</i> | 41 | 植物 |
| <i>Sphinx morio morio</i> | 413 | 昆虫類 |
| <i>Spiraea miyabei</i> | 175 | 植物 |
| <i>Sporobolus japonicus</i> | 142 | 植物 |
| <i>Spuriomitella integripetala</i> | 158 | 植物 |
| <i>Stellaria fenzlii</i> | 198 | 植物 |
| <i>Stellaria filicaulis</i> | 199 | 植物 |
| <i>Stenodryas clavigera clavigera</i> | 392 | 昆虫類 |
| <i>Stenothyra edogawensis</i> | 435 | 海岸動物 |
| <i>Stenothyra japonica</i> | 463 | 淡水貝類 |
| <i>Stenoxylita trialbofasciata</i> | 385 | 昆虫類 |

| 学名 | 頁 | 分類 |
|---|-----|------|
| <i>Stenygrinum quadrinotatum</i> | 392 | 昆虫類 |
| <i>Sternula albifrons</i> | 288 | 鳥類 |
| <i>Stewartia pseudocamellia</i> | 204 | 植物 |
| <i>Stilbum cyanurum</i> | 397 | 昆虫類 |
| <i>Stomis zaonus</i> | 370 | 昆虫類 |
| <i>Stuckenia pectinata</i> | 88 | 植物 |
| <i>Stylurus nagoyanus</i> | 350 | 昆虫類 |
| <i>Stylurus oculatus</i> | 351 | 昆虫類 |
| <i>Suaeda glauca</i> | 200 | 植物 |
| <i>Suaeda maritima</i> subsp. <i>asiatica</i> | 200 | 植物 |
| <i>Swertia pseudochinensis</i> | 237 | 植物 |
| <i>Swertia tosaensis</i> | 211 | 植物 |
| <i>Symmorphus decens</i> | 399 | 昆虫類 |
| <i>Sympetrum croceolum</i> | 352 | 昆虫類 |
| <i>Sympetrum parvulum</i> | 352 | 昆虫類 |
| <i>Sympetrum uniforme</i> | 353 | 昆虫類 |
| <i>Symplocarpus nabekuraensis</i> | 75 | 植物 |
| <i>Symplocarpus renifolius</i> | 75 | 植物 |
| <i>Synandwakia hozawai</i> | 427 | 海岸動物 |
| <i>Synthliboramphus wumizusume</i> | 288 | 鳥類 |

T

| | | |
|---|-----|-----|
| <i>Tachys gyotokuensis gyotokuensis</i> | 367 | 昆虫類 |
| <i>Tachysurus tokiensis</i> | 323 | 魚類 |
| <i>Takanea miyakei</i> | 412 | 昆虫類 |
| <i>Taxillus kaempferi</i> | 190 | 植物 |
| <i>Taxiphyllum alternans</i> | 48 | 植物 |
| <i>Tephroseris integrifolia</i> subsp. <i>kirilowii</i> | 251 | 植物 |
| <i>Teucrium teinense</i> | 227 | 植物 |
| <i>Teucrium veronicoides</i> var. <i>brachytrichum</i> | 227 | 植物 |
| <i>Teucrium veronicoides</i> var. <i>veronicoides</i> | 227 | 植物 |
| <i>Thalasselaphas major</i> | 390 | 昆虫類 |
| <i>Thalictrum aquilegiifolium</i> var. <i>sibiricum</i> | 154 | 植物 |
| <i>Thalictrum minus</i> var. <i>sekimotoanum</i> | 155 | 植物 |
| <i>Thalictrum simplex</i> var. <i>brevipes</i> | 155 | 植物 |
| <i>Thelypteris angustifrons</i> | 59 | 植物 |
| <i>Thelypteris glanduligera</i> | 59 | 植物 |
| <i>Thermopsis fabacea</i> | 164 | 植物 |
| <i>Thranis variegatus variegatus</i> | 393 | 昆虫類 |
| <i>Thrixspermum japonicum</i> | 113 | 植物 |
| <i>Thymelicus sylvaticus sylvaticus</i> | 405 | 昆虫類 |
| <i>Tipularia japonica</i> | 113 | 植物 |
| <i>Tofieldia coccinea</i> var. <i>coccinea</i> | 75 | 植物 |
| <i>Tofieldia coccinea</i> var. <i>gracilis</i> | 76 | 植物 |
| <i>Toreyochloa viridis</i> | 143 | 植物 |
| <i>Trapa incisa</i> | 183 | 植物 |
| <i>Trapella sinensis</i> | 218 | 植物 |
| <i>Trematodon asanoi</i> | 43 | 植物 |
| <i>Trifolium lupinaster</i> | 165 | 植物 |
| <i>Triglochin asiatica</i> | 82 | 植物 |
| <i>Triglochin maritimum</i> | 82 | 植物 |
| <i>Trigonotis iinumae</i> | 216 | 植物 |
| <i>Trillium tschonoskii</i> var. <i>atrorubens</i> | 90 | 植物 |
| <i>Tringa erythropus</i> | 287 | 鳥類 |

| 学名 | 頁 | 分類 |
|---|-----|------|
| <i>Tripora divaricata</i> | 228 | 植物 |
| <i>Tripterospermum japonicum</i> var. <i>involutibile</i> | 211 | 植物 |
| <i>Tritoma shimoyamai</i> | 388 | 昆虫類 |
| <i>Trox nohirai</i> | 377 | 昆虫類 |
| <i>Trox setifer setifer</i> | 378 | 昆虫類 |
| <i>Truncatella pfeifferi</i> | 431 | 海岸動物 |
| <i>Trypoxylon konosuense</i> | 400 | 昆虫類 |
| <i>Tubocapsicum anomalum</i> | 214 | 植物 |
| <i>Turritis glabra</i> | 189 | 植物 |
| <i>Tylorrhynchus osawai</i> | 446 | 海岸動物 |
| <i>Tylos granuriferus</i> | 450 | 海岸動物 |

U

| | | |
|---------------------------------|-----|------|
| <i>Ulorhinus gokani</i> | 388 | 昆虫類 |
| <i>Umbonium moniliferum</i> | 428 | 海岸動物 |
| <i>Upogebia issaefi</i> | 450 | 海岸動物 |
| <i>Urechis uncinatus</i> | 447 | 海岸動物 |
| <i>Uresiphita fusei</i> | 419 | 昆虫類 |
| <i>Utricularia australis</i> | 232 | 植物 |
| <i>Utricularia bifida</i> | 232 | 植物 |
| <i>Utricularia caerulea</i> | 232 | 植物 |
| <i>Utricularia dimorphantha</i> | 233 | 植物 |
| <i>Utricularia macrorhiza</i> | 233 | 植物 |
| <i>Utricularia minor</i> | 233 | 植物 |
| <i>Utricularia uliginosa</i> | 234 | 植物 |

V

| | | |
|--|-----|-----|
| <i>Vaccinium oxycoccos</i> | 207 | 植物 |
| <i>Vaccinium shikokianum</i> | 208 | 植物 |
| <i>Vaccinium uliginosum</i> var. <i>japonicum</i> | 208 | 植物 |
| <i>Vaccinium yatabei</i> | 208 | 植物 |
| <i>Vallisneria denseserrulata</i> | 81 | 植物 |
| <i>Vallisneria natans</i> | 82 | 植物 |
| <i>Vanellus cinereus</i> | 284 | 鳥類 |
| <i>Verbena officinalis</i> | 234 | 植物 |
| <i>Veronica laxa</i> | 218 | 植物 |
| <i>Veronica miqueliana</i> | 219 | 植物 |
| <i>Veronica ovata</i> subsp. <i>miyabei</i> | 219 | 植物 |
| <i>Veronica polita</i> var. <i>lilacina</i> | 219 | 植物 |
| <i>Veronica schmidtiana</i> subsp. <i>senanensis</i> f. <i>tomentosa</i> | 220 | 植物 |
| <i>Veronica undulata</i> | 220 | 植物 |
| <i>Vespertilio sinensis</i> | 270 | 哺乳類 |
| <i>Vincetoxicum atratum</i> | 212 | 植物 |
| <i>Vincetoxicum floribundum</i> | 213 | 植物 |
| <i>Vincetoxicum japonicum</i> | 213 | 植物 |
| <i>Vincetoxicum pycnostelma</i> | 213 | 植物 |
| <i>Viola acuminata</i> | 179 | 植物 |
| <i>Viola biflora</i> | 179 | 植物 |
| <i>Viola chaerophylloides</i> var. <i>sieboldiana</i> | 179 | 植物 |
| <i>Viola patrinii</i> | 180 | 植物 |
| <i>Viola raddeana</i> | 180 | 植物 |
| <i>Viola sieboldii</i> | 180 | 植物 |
| <i>Viola violacea</i> var. <i>violacea</i> | 181 | 植物 |
| <i>Vitex rotundifolia</i> | 228 | 植物 |

| 学名 | 頁 | 分類 |
|----|---|----|
|----|---|----|

W

| | | |
|------------------------------|----|----|
| <i>Woodwardia orientalis</i> | 60 | 植物 |
|------------------------------|----|----|

X

| | | |
|--|-----|-----|
| <i>Xanthium strumarium</i> subsp. <i>sibiricum</i> | 251 | 植物 |
| <i>Xestia baja</i> | 418 | 昆虫類 |

Y

| | | |
|------------------------|-----|----|
| <i>Yuania japonica</i> | 113 | 植物 |
|------------------------|-----|----|

Z

| | | |
|---|-----|------|
| <i>Zachsia zenkewitschi</i> | 444 | 海岸動物 |
| <i>Zannichellia palustris</i> | 88 | 植物 |
| <i>Zanthoxylum armatum</i> var. <i>subtrifoliatum</i> | 186 | 植物 |
| <i>Zapornia fusca</i> | 284 | 鳥類 |
| <i>Zapornia pusilla</i> | 284 | 鳥類 |
| <i>Zorochros suzukii</i> | 375 | 昆虫類 |
| <i>Zostera asiatica</i> | 83 | 植物 |
| <i>Zostera caespitosa</i> | 83 | 植物 |
| <i>Zostera caulescens</i> | 84 | 植物 |
| <i>Zostera japonica</i> | 84 | 植物 |

RED DATA BOOK MIYAGI 2026

Published in March 2026

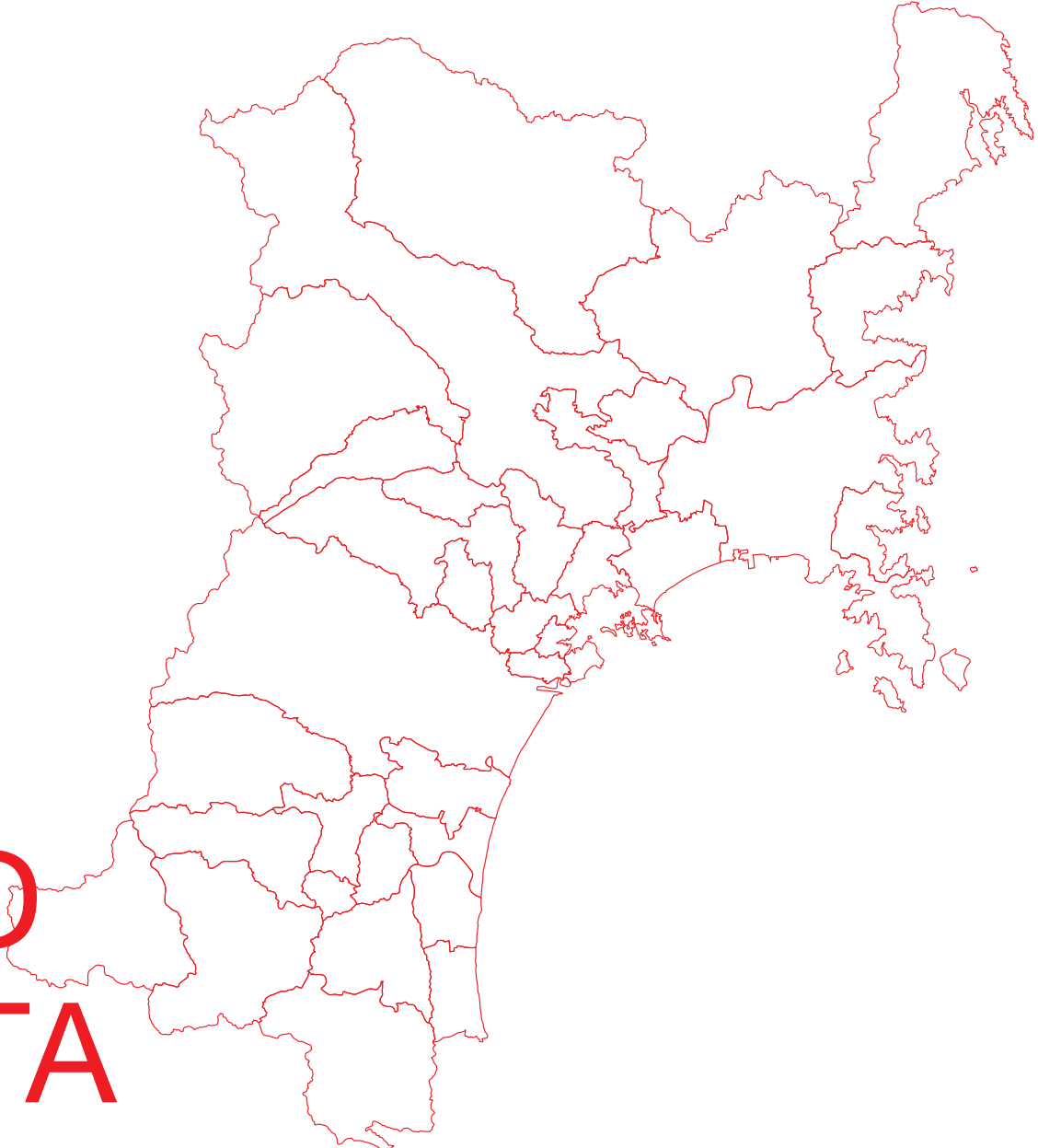
Edited and Published by
Nature Conservation Division,
Miyagi Prefectural Government

3-8-1 Honcho, Aoba-ku, Sendai,
Miyagi 980-8570, Japan

宮城県の絶滅のおそれのある野生動植物 2026 (宮城県レッドデータブック 2026)

2026年3月発行

編集・発行 宮城県環境生活部自然保護課
仙台市青葉区本町三丁目8番1号
022(211)2673



**RED
DATA
BOOK
MIYAGI 2026**